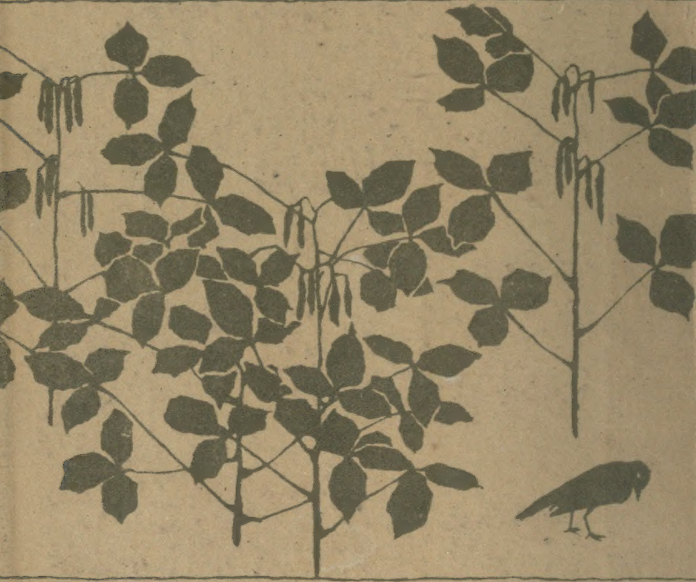




1927. 3.17—21.

大正三年一月十三日印刷
大正三年一月十六日發行

有朋堂文庫
源氏物語一
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

（一）私の遊にも風流を盡して
（二）源は無常を觀じて
（三）冷泉の猶長ずるを待ちて出家せんと
（四）源の心
（五）若年にして、
（六）我が現世の榮華は分に過ぎたり、是須磨の沈淪の報なり
（七）今後の榮を盛にせば命危かるべし
（八）擴張して
（九）寺の經營に添へて
（一〇）幼少なる源の子等
（一一）思の儘に育てゝ見ん
（一二）早く出家する事は
（一三）どう決着せられるのか

の言ひ傳ふべき例を添へむと思し、（一）私樣の斯かるはかなき御遊も珍しき筋にせさせ給ひて、いみじき盛の御世なり。（二）大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、今（三）少し大人びおはしますと見奉りてなほ世を背きなむと、深く思ほすべかゝめる。（四）昔のためしを見聞くにも、（五）齡足らで官位高くのぼり、世に拔けぬる人の、長くはえ保たぬわざなりけり、（六）この世には、身のほど覺え過ぎにたり、中頃無きになりて沈みたりしうれへに替りて、今までもながらふるなり、（七）今より後のさかえは、なほ命うしろめたし、しづかに籠り居て、後の世の事をつとめ、かつは齡をも延べむ、と思して、山里の長閑なるを占めて、（八）御堂作らせ給ふ。（九）佛、經のいとなみ添へてせさせ給ふめるに、（一〇）末の君だち、（一一）思ふ樣にかしづきいだして見むと思召すにぞ、（一二）疾く捨て給はむことは難げなる。（一三）如何に思し掟つるにかと、いと知り難し。

めし出でて、權中納言、和琴たまはり給ふ。(一)さは言へど、人には優りてかきたて給へり。親王、(二)箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少將の命婦仕うまつる。(三)上人のなかに勝れたるを召して、(四)拍子たまはす。いみじう面白し。明けはつるまゝに、花の色も人の御容貌どももほのかに見えて、鳥の囀るほど、(五)心地ゆきめでたき朝朗なり。祿どもは、中宮の御方より賜はす。親王は御衣、又重ねて賜はり給ふ。

その頃のことには、この繪の御定をし給ふ。源「(六)かの浦々の卷は、中宮に侍はせ給へ」と聞えさせ給ひければ、これが初、又殘の卷々ゆかしがらせ給へど、源「(七)今つぎつぎに」と聞えさせ給ふ。(八)上にも御心ゆかせ給ひて思し召したるを、嬉しく見奉り給ふ。はかなき事につけても、(九)斯うもてなし聞え給へば、權中納言は(一〇)猶覺え壓さるべきにやと、心やましう思さるべかめり。(一一)上の御志は、もとより思ししみにければ、なほ細やかに思したるさまを、人知れず見奉り知り給ひてぞ、頼もしく然りともと思されける。さるべき節會どもにも、(一二)この御時よりと、末の人

(一)何と言うても
(二)箏
(三)殿上人
(四)拍子とる役を命ず
(五)愉快に美しき

㊅ 源氏の後圖
(六)須磨の繪日記は桐壺に獻上すべし
(七)追々御覽に入るべし
(八)冷泉の滿足せるを見て源が喜ぶ
(九)源が秋好の肩を持つ故
(一〇)娘の弘徽殿が秋好に壓倒されるかと
(一一)冷泉の愛は幼馴染の事故弘徽殿に情が厚きを窃に見て取りて頭中が安心したり
(一二)源の心、冷泉の時より斯く〳〵の例始れりと後世に傳はる樣にせんと

らうつさむにあとありぬべし。筆とる道と碁うつこととぞ、怪しう魂の程見ゆる(一)を、深き(二)らうなく見ゆるおれ者も、然るべきにて書き打つ類も出で來れど、家(三)の子の中には、なほ(四)人に拔けぬる人の、何事をも好み得けるとぞ見えたる。院(五)の御前にて、親王達内親王、いづれかは、樣々とりどりの才ならはさせ給はざりけむ。その中にも、(六)とり立てたる御心に入れて、傳へうけとらせ給へるかひありて、文才(七)をばさるものにあらず、然らぬ事の中には、琴彈かせたまふことなむ一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、つぎつぎに習ひ給へると、上(八)も思し宣はせき。世の人然思ひ聞えさせたるを、繪(九)はなほ筆のついでにすさびさせ給ふあだごととこそ思ひ給へしか、いと斯うまさなきまで、(一〇)いにしへの墨書の上手ども(一一)跡をくらうなしつべかめるは、却りてけしからぬわざなり」と、うちみだれ聞え給ひて、ゑひ泣きにや、院(一二)の御事聞え出でて、打ちしほたれ給ひぬ。廿餘日の月さし出でて、此方はまださやかならねど、大方の空をかしき程なるに、書(一三)司の御琴

(一)其人の心のはたらきが分る
(二)深き思慮なき樣なる愚者も
(三)上流社會の子の中では
(四)矢張器量優れたる人が何事にも長ずると見える
(五)桐壺は男女の皇子にそれぞれ修行させ給へり
(六)桐壺が源には特に注意して仕込みたる效ありて
(七)源は文才は勿論
(八)桐壺
(九)源の畫は筆ついでの一時の慰に過ぎぬと思ひ居しに
(一〇)怪しからぬと思はるゝ程上手で
(一一)本職の墨畫の上手も逃げ出す位の伎倆あるは
(一二)螢が桐壺の噂して
(一三)書籍樂器等の事を司る役所

(一)桐壺が我を少しは物が出來ると思はれし物か
(二)才學長じたる人が
(三)上流に生れて才學なくても人の上に立つべき身分の者は
(四)政治向の學問を色々敎へられしかば
(五)特に長じたる事もなし
(六)自分が滿足する程に
(七)退去の時思もよらぬ賤しき生活をして
(八)幽遠なる趣
(九)其趣は十分に會得したれども
(一〇)思ふ樣に筆が動かざりしが
(一一)其畫を
(一二)今迄祕し置きて今度御覽に入れたる譯なるが、好事の誘は免れざるべきか
(一三)心が役に立たねば習ひ得らるゝ物では無いが、師ありかたのある物は巧拙は兎に角眞似が出來る

の御物語ども出で來て、「いはけなき程より、學問に心を入れて侍りしに、(一)少しも才など附きぬべくや御覽じけむ、院の宣はせし樣、才學といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、(二)命と幸と並びぬるは、いと難きものになむ、(三)品たかく生れ、さらでも人に劣るまじき程にて、あながちにこの道な深く習ひそ、と諫めさせ給ひて、(四)本才のかた〴〵の物數へさせ給ひしに、拙きこともなく、(五)またとり立てて此事と心得ることも侍らざりき。繪畫く事のみなむ、あやしくはかなきものから、如何にしてかは(六)心行くばかり畫きて見るべき、と思ふをり〳〵侍りしを、(七)覺えぬ山がつになりて、四方の海の(八)深き心を見しに、更に思ひよらぬ(九)限なくいたられにしかど、筆の行く限ありて、(一〇)心よりは事ゆかずなむ思う給へられしを、(一一)序なくて御覽ぜさすべきならねば、斯う(一二)好々しき樣なる、後の聞えやあらむ」と、親王に申し給へば、「何の才も、(一三)心よりはなちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、學び所あらむは、事の深さ淺さは知らねど、自

知しめしたらむと思ふに、大臣もいと優に覺え給ひて、所々の判ども、心もとなき折々に、時々さしいらへ(一)給ひける程あらまほし。定めかねて夜に入りぬ。左な(二)ほ數ひとつあるはてに、須磨の卷出來たるに、中納言(三)の御心さわぎにけり。(四)あなたにも心して、はての卷は心ことに勝れたるを選り置き給へるに、かゝるいみじき物の上手の、(五)心のかぎり思ひすまして靜に畫き給へるは、譬ふべきかたなし。親王(六)より始めたてまつりて、涙とゞめ給はず。(七)その世に、心苦し悲しと思しゝ程よりも、おはしけむ有樣、御心に思しけむ事ども、たゞ今の樣に見ゆ。所のさま、おぼつかなき浦々磯の隱れなく、畫きあらはし給へり。草(八)の手に、假名の所々に書きまぜて、(九)まほの委しき日記にはあらず、哀なる歌なども交れる類ゆかしう、誰も他事(一〇)おぼさず。さまぐ\の御繪の興、(一一)これに皆うつりはてて、あはれに面白し。よろづ皆おし讓りて、左勝つになりぬ。

夜明けがた近くなる程に、物いと哀に思されて、御土器などまゐるついでに、昔

(一)源が口を出す様子
(二)一番の勝越しなる勝負の終に
(三)頭中狼狽せり
(四)弘徽殿方
(五)源氏の
(六)判者たる螢兵部卿
(七)退去の當時の源の實感よりも
(八)詞書を草書の漢字まじりの假名書にして
(九)正式の、此頃の男子の日記は漢文にて書くが常なり
(一〇)只管見とれたり
(一一)須磨の繪日記に奪はれて

香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組(一)、花足のこゝろばへなど、いと今めかし。童青色に柳の汗衫、山吹がさねの衵著たり。(二)皆御前にかき立つ。(三)上の女房、前後(四)と裝束き分けたり。召ありて、內(五)の大臣權中納言參り給ふ。その日帥(六)の宮も參り給へり。(七)いと由ありておはする中に、繪をなむたてて好み給へば、大臣(八)の下にすゝめ給へる樣やあらむ、事々しき召にはあらで殿上に侍ひ給ふを、仰言ありて、御前に參り給ふ。(九)この判仕う奉りたまふ。げにいといみじう畫き盡したる繪どもあり。(一〇)更にえ定めやり給はず。例の四季の繪も、いにしへの上手どもの、面白き事どもを選びつゝ、筆とゞこほらず畫きながしたる樣、譬へむ方なしと見るに、紙繪は限ありて、山水のゆたか(一一)なる心ばへを、え見せ盡さぬものなれば、ただ筆のかざり、人(一二)の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔(一三)の跡に恥なく、賑はゝしくあなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くのあらそひども、今日はかたがたに興ある事ども多かり。朝餉(一四)の御障子を開けて、中宮もおはします。深く(一五)

(一)机の脚を漆ひ飾れる組紐
(二)繪の入りたる箱を
(三)冷泉附の女官
(四)左方と右方と別々に衣裳の色を揃へて著たり
(五)源と頭中と
(六)螢兵部卿
(七)螢は趣味多き中に特に畫を好む故
(八)源の內々の勸ならんか
(九)繪合の審判
(一〇)螢も判斷に苦めり
(一一)悠揚たる趣を
(一二)技巧に修飾せられて
(一三)古人の名畫に劣らず
(一四)淸涼殿の朝餉の間の襖を明放して藤壺も列席す
(一五)藤壺は畫に精通せるならんと

(一)齋宮の時に用ひたる
(二)宮中は朱雀在位の時の樣に思はれて、我もあの當時が戀し
(三)在位の昔に立戻りたく
(四)秋好を冷泉に振向けたる源氏をも
(五)源につらく當りし報なるべし
(六)朱雀の畫は御母故弘徽殿より傳はりて今の弘徽殿方にもある筈
(七)朧月夜も畫好にて

五　繪合當日の光景

(八)仰山らしからず裝ひて
(九)清涼殿の臺盤所に冷泉の席を設けて
(一〇)清涼殿の西隣
(一一)簀々の心持に
(一二)蘇枋木の机
(一三)下机の上に敷く布
(一四)沈香木
(一五)沈香の木の若きもの

御(一)かんざしの端をいさゝか折りて、

秋好　しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のこともいまぞこひしき

とて、縹(二)の唐の紙に包みて參らせ給ふ。御使の祿などいとなまめかし。院の帝御覽ずるに、限なくあはれと思すにぞ、(三)ありし世をとりかへさまほしく思しける。大(四)臣をもつらしと思ひ聞えさせ給ひけむかし。過(五)ぎにしかたの御報にやありけむ。院(六)の御繪は、后の宮より傳りて、あの女御の御方にも多く參るべし。尚(七)侍の君も、かやうの御好ましさは人に勝れて、をかしき樣にとりなしつゝ集め給ふ。

その日と定めて、俄なる樣なれど、(八)をかしき樣にはかなうしなして、左右の御繪ども參らせ給ふ。女房(九)の侍に御座よそはせて、北南かたぐ\に別れてさぶらふ。殿上人は後涼殿(一〇)の簀子に、(一一)おのく\心よせつゝ侍ふ。左は紫檀の箱に蘇芳(一二)の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷(一三)は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に櫻襲の汗衫、袙は紅に藤襲の織物なり。姿用意などなべてならず見ゆ。右は沈(一四)の箱に淺(一五)



白き紙繪を整ふることを、天の下營みたり。源「今改め畫かむことは本意なきことなり。唯(一)ありけむ限をこそ」と宣へど、中納言は人にも見せで、わりなき窓を(二)あけて畫かせ給ふめるを、院(三)にも斯かる事聞かせ給ひて、梅壺(四)に御繪ども奉らせ給へり。(五)年の内の節會どもの、おもしろく興あるを、昔の上手どものとり〴〵に畫けるに、延喜(六)の御手づから、事の心畫かせ給へるに、又我(七)が御世の事も畫かせ給へる巻に、かの齋宮(八)の下り給ひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、畫くべきやう委しく仰せられて、(九)公茂が仕う奉れるが、いといみじきを奉らせ給へり。艶に透きたる沈(一〇)の箱に、同じき心ば(一一)のさまなどいと今めかし。御消息はただ言葉にて、(一二)院の殿上にも侍ふ左近中將を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せ(一三)たる所の、神々しきに、

朱雀　身(一四)こそかくしめの外なれそのかみの心のうちをわすれしもせず

とのみあり。聞え(一五)給はざらむもいとかたじけなければ、苦しく思しながら、昔の

(一)從來有來りの畫ばかり持ち出すべし
(二)秘密室を設けて
(三)朱雀
(四)秋好方へ
(五)其畫の内容は、一年中の儀式の面白き所を
(六)醍醐帝御自筆の詞書
(七)朱雀自身の
(八)秋好
(九)巨勢公茂、金岡の孫
(一〇)沈香木にて作れるすかしのある箱
(一一)同木にて作れる飾
(一二)内裏と院御所と兩方に出勤する
(一三)齋宮の伊勢下りの繪、輿は齋宮の乘料
(一四)我今は内裏に住まぬ身なれどもあの時の心持は今も忘れぬ
(一五)御返事申上げぬのも

ひかねたり。右のすけ(一)、

(二)雲のうへに思ひのほれるこゝろには千ひろの底もはるかにぞ見る

藤壺「(三)兵衛の大君の心高さは、げに捨て難けれど、在五中將の名をば、得くたさじ」と宣はせて、宮、

藤壺(四)見るめこそうらぶれぬらめ年經にしいせをのあまの名をや沈めむ

かやうの女言にて、亂りがはしく爭ふに、(五)一巻に言の葉を盡して、えも言ひやらず。たゞ淺はかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、(六)上のも宮のも片端をだにえ見ず、いといたう祕めさせ給ふ。

四 御前繪合の準備

大臣參り給ひて、かくとりどりに爭ひ騷ぐ心ばへども、をかしく思して、源「同じくば、(七)御前にてこの勝負定めむ」と宣ひなりぬ。かゝる事もやと、かねて思しければ、中にも殊なるは擇りとゞめ給へるに、かの須磨明石の二巻は、(八)思す所ありて取交ぜさせ給へりけり。中納言もその心劣らず。この頃の世には、たゞ斯く面

(一)大貳典侍
(二)正三位が雲上まで上れる高き心から見れば、伊勢海の深き心も何でもなし
(三)正三位物語中の人物
(四)見た處は凋れて見處なかるべきが、古き伊勢物語の名譽を毀ふ可らず
(五)只一巻の勝負に詞を費して收まりが附かず
(六)宮中の女官も藤壺附の女官も
(七)冷泉の
(八)源が

深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に、疵をつけたるをあやまちとなす。繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之かけり。紙屋紙に唐の綺をはいして(一)、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。右方(二)「俊蔭は、はげしき波風におぼほれ(三)、知らぬ國に放たれしかど、なほさして行きける方の志もかなひて、遂に他(四)のみかどにも、我國にも、ありきがた才(五)の程をひろめ、名を殘しける古き心をいふに、繪のさまも、唐土と日の本とを取りならべて、おもしろき事どもなほ竝なし」といふ。白き色紙、靑き表紙、黄なる玉の軸なり。繪は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。左にはそのこと(六)わりなし。次に伊勢物語に、正(七)三位をあはせて、また定めやらず。これも、右はおもしろく賑はゝしく、内裏わたりよりはじめ、近き世の有樣を畫きたるは、をかしう見所まさる。平内侍、

「伊勢(八)の海のふかきこゝろをたどらずてふりにし跡と波や消つべき

(九)世の常のあだことのひき繕ひ飾れるに壓されて、業平が名をやくたすべき」と、爭

（一七）姫に蓬莱の玉の枝を求められて蓬莱の行き得ぬ處なるを知りながら玉の枝を僞作したるを

（一）背して、裏打して

（二）右方が俊蔭を誇る詞

（三）波斯國

（四）支那にも

（五）琴曲の妙を顯はし

（六）俊蔭に對する批判なく左負けたり

（七）正三位物語といふものありしなるべし

（八）伊勢物語の深意を解し得ずして古風なりと排斥すべからず、平内侍は左方故伊勢を辯護したる也

（九）平凡なる事を華やかに畫けるに壓倒されて業平の名を汚すべけんや

(一)藤壺 (二)藤壺も好む道故佛勤もやめて畫を見る (三)藤壺が (四)秋好左方 (五)弘徽殿方 (六)物識 (七)竹取物語の竹取翁の畫に、空穗物語の主人公たる俊蔭の畫を取組ませて、竹取は秋好方、空穗は弘徽殿方 (八)「なよ竹」は「世々」の枕詞、竹取物語の女主人公の名なよ竹のかぐや姫といへるにかけたり (九)高尙に構へたる (一〇)古代 (一一)以下右方の竹取を貶する趣意、かぐや姫は終に月の都に上る也 (一二)現世に現はれたるは竹の中よりなれば卑しき人と見ゆ (一三)姬は身に光ありて家內を照したり (一四)帝より召されたれど終に宮中に入らず (一五)今の竹取物語には「みむらじ」とあり (一六)「棄てて」は「棄てし」の誤なるべし、姫の求により火鼠の裘を高價に買ひて贈りしに試に火に入れたれば忽やけたり

㊂藤壺中宮の御前の繪合

中宮(一)も參らせ給へる頃にて、かた〴〵御覽じて捨て難く思ほすことなれば、御行も怠りつゝ御覽ず。この人々(二)のとり〴〵に論ずるを聞し召して、左右と方分(三)かせ給ふ。梅壺(四)の御方には、平典侍、侍從の內侍、少將の命婦、右(五)には大貳の典侍、中將の命婦、兵衞の命婦を、たゞ今は心にくき有職(六)どもにて、心々にあらそふ口つきどもを、をかしと聞し召して、まづ物語の出來はじめの親なる竹取(七)の翁に、空穗の俊蔭を合せて爭ふ。左方(八)「なよ竹の世々に古りにけること、をかしき節もなけれど、かぐや姫の、この世の濁にも穢れず、(九)遙に思ひのぼれる契たかく、神世(一〇)のことなゝめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」といふ。右は、(一一)かぐや姫の上りけむ雲井は、げに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。(一二)この世の契は竹の中に結びければ、下れる人のこととこそ見ゆめれ。(一三)ひとつ家の內は照しけめど、(一四)百敷のかしこき御光にはならはずなりにけり。安部の多(一五)が千々の金を棄てて(一六)、火鼠のおもひ、片時に消えたるもいとあへなし。くら持の親王の、まことの蓬萊の(一七)

中宮(一)ばかりには、見せ奉るべきものなり。かたはなるまじき(二)一帖づつ、さすがに浦々の有樣さやかに見えたるを、擇り給ふついでにも、かのあるじの家居(三)ぞ、まづ如何にと思しやらぬ時の間もなき。かう繪ども集めらると聞き給ひて、權中納言いとゞ心をつくして、軸、表紙、紐のかざり、いよ〳〵整へ給ふ。三月の十日の程なれば、空も麗らかにて、人の心も延び、物おもしろき折なるに、内裏邊も、然るべき節會どもの間なれば、唯(四)かやうの事どもにて、御かた〴〵暮したまふを、おなじくは、御覽じ(五)所もまさりぬべくて奉らむの御心つきて、いとわざと集め參らせ給へり。此方(六)彼方とさま〴〵多かり。物語繪はこまやかに、懷かしさ勝るめるを、梅壺(七)の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、弘徽殿は、その頃世に珍らしく、をかしき(八)限を選りで畫かせ給へれば、うち見る目の今めかしき花やかさは、いとこよなく(九)勝れり。上(一〇)の女房なども、由あるかぎり、これはかれはなど定めあへるを、この頃の事にすめり。

(一)藤壺
(二)見苦しからぬ分
(三)明石上の住居
(四)畫などを弄びて誰も日を送る故
(五)冷泉がひとしほ興を催す樣にして奉らんと源が思ひ附きて
(六)秋好方と弘徽殿方と
(七)秋好方は
(八)當時の趣ある事實を選びて
(九)弘徽殿の方
(一〇)冷泉附の女官等も物のわかる分は

(一)冷泉に
(二)氣をもませるのはけしからん
(三)源邸にある
(四)此類の不吉なる畫は
(五)須磨にて源がかきたる畫日記
(六)畫日記の性質を知らずして
(七)當時の苦勞忘れ難き源紫等の心には
(八)別居の當時に此畫を見しならば心も慰みしならんに、かたー方、畫
(九)此畫を見れば昔に立戻りし心地して、侘住居の當時よりも却て悲し

がたかゝめれ」など笑ひ給ふ。源「あながちに隱して、(一)心安くも御覽ぜさせず、惱ま(二)し聞ゆる、いとめざましや。古代の御繪どもの侍る、參らせむ」と奏し給ひて、殿に(三)舊き新しき繪ども入りたる御厨子ども開かせ給ひて、女君と諸共に、今めかしきは、それ〲と擇り整へさせ給ふ。長恨歌、王昭君などやうの繪は、面白くあはれなれど、(四)事の忌あるは此度は奉らじと、擇りとゞめ給ふ。(五)かの旅の御日記の筥をも取り出でさせ給ひて、この序にぞ、女君にも見せ奉り給ひける。(六)心しらで今見む人だに、少し物思ひ知らむ人は、涙惜むまじくあはれなり。まいて忘れがたく、(七)その夜の夢を思しさます折なき御心どもには、取りかへし悲しう思し出でらる。今まで見せ給はざりける恨をぞ聞え給ひける。

紫「(八)一人居て眺めしよりはあまのすむかたを畫きてぞ見るべかりける

おぼつかなさは、慰みなましものを」と宣ふ。いとあはれと思して、

源(九)うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か

(一)侍臣の畫を學ぶ者をも愛せらるゝ故、まして秋好の如き美人の畫くはひとしほ氣に入りたる也
(二)慰半分に畫きて
(三)几帳などに寄り添ひ臥して
(四)愛らしさが氣に入りて
(五)秋好の寵増れるを
(六)畫の名人
(七)注意を與へて
(八)無比の美しき紙
(九)昔物語の趣をかきたる畫
(一〇)十二ヶ月の季節の趣をかきたる畫
(一一)畫の詞書
(一二)冷泉の御覽に入る
(一三)念入の面白き畫故
(一四)弘徽殿が容易に出さず
(一五)秋好へ冷泉が携へ行かんとするを弘徽殿が手放さぬを源聞きつけて

つりて、渡らせ給ひつゝ畫き通はさせ給ふ。(一)殿上の若き人々も、この事まねぶをば、御心とゞめてをかしきものに思ほしたれば、ましてをかしげなる人の、心ばへある樣に、(二)まほならず畫きすさび、なまめかしう添臥(三)して、とかく筆うち休らひ給へる樣、(四)らうたげさに御心しみて、いと繁う渡らせ給ひて、ありしより勝に(五)御思ひまされるを、權中納言聞き給ひて、飽くまでかど〳〵しく今めき給へる御心にて、われ人に劣りなむやと思し勵みて、(六)勝れたる上手どもを召し取りて、いみじう(七)いましめて、また無き樣なる繪どもを、(八)になき紙どもに畫き集めさせ給ふ。頭中「(九)物語繪こそ、心ばへ見えて見所あるものなれ」とて、面白く心ばへある限を擇りつゝ畫かせ給ふ。例の月次(一〇)の繪も、見馴れぬさまに、(一一)言の葉を書き續けて、(一二)御覽ぜさせ給ふ。(一三)わざとをかしうしたれば、又此方にてもこれを御覽ずるに、(一四)心やすくもとり出で給はず。いといたく祕めて、(一五)この御方に持て渡らせ給ふを、惜しみ領じ給へば、大臣聞き給ひて、源「なほ權中納言の御心の若々しさこそ、改り

(一)隠蔽せし事故今も朱雀が言ひ出して
(二)懸想して居た事は言はず
(三)源も其を知つた顔はせず
(四)彼是と秋好の噂をしたるに
(五)朱雀が深く思ひ込みたるらしき故
(六)朱雀の思込みたる秋好の容貌は全體何樣なのか見たく思へど自分がまだ見ぬを源が殘念がる
(七)秋好の性質、甚だ重重しく
(八)稀にも兒童らしき行ある人ならば源が見る機會もあるべけれど
(九)源が秋好とつきあふに連れて見上げた女と感心せり
(一〇)弘徽殿と秋好
(一一)紫の異腹妹を入内せしめん事を決着せず
(一二)我娘を顧みぬ事はあるまじ
(一三)冷泉の寵遇
(一四)熱心に、
(一五)自身に巧に畫く
(一六)秋好が

こと、(一)さきぐ\も宣ひ出づれば、聞え出で給ひて、(二)然思ふ心なむありしなどはえ顯し給はず。(三)大臣も、かゝる御氣色聞き顏にはあらで、たゞ如何に思したるとゆかしさに、(四)とかう彼の御事をきこえ出で給へるに、(五)哀なる御氣色のあさはかならず見ゆれば、いといとほしく思す。(六)めでたしと思ほししみにける御容貌、如何樣なるをかしさにか、とゆかしう思ひ聞え給へど、更にえ見奉り給はぬを、ねたう思ほす。(七)いとおもりかにて、(八)夢にもいはけたる御擧動あらばこそ、おのづからほの見え給ふ序もあらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、(九)見奉り給ふままに、いとあらまほしと思ひ聞え給へり。かく透間なくて(一〇)二所侍ひ給へば、兵部卿の宮、(一一)すがぐ\ともえおもほしたゝず、帝おとなび給ひなば、さりともえ(一二)思ほし捨てじ、とぞ待ち過し給ふ。二所の(一三)御おぼえども、とりぐ\に挑み給へり。上はよろづの事に勝れて、繪を興あるものに思したり。(一四)立てて好ませ給へばにや、(一五)になく畫かせ給ふ。(一六)齋宮の女御、いとをかしう畫かせ給ひければ、これに御心う

（一）氣を張つて
（二）年にあはせては
（三）冷泉が
（四）秋好の樣子、遠慮勝に大樣にて
（五）冷泉が
（六）弘徽殿女御は冷泉が見馴れたれば
（七）秋好は人柄落附きて源の取扱も重々しき故
（八）秋好と弘徽殿と
（九）弘徽殿の方が多い
（一〇）弘徽殿の父頭中將也、以下官位追々進みても注には便宜のため頭中と呼ぶべし、頭中は娘を中宮にと思ひて入内させしに、秋好が競爭者の形にて入内したるを
◎後宮に繪を弄ぶ事盛に行はる、秋好方と弘徽殿方との競爭
（一一）朱雀は
（一二）源が朱雀へ

とうつくしう（一）御心づかひしておはします。（二）程よりはいみじうざれおとなび給へり。宮も、「かく恥かしき人參り給ふを、御心づかひして、見え奉らせ給へ」と聞え給ひけり。（三）人知れず、大人は恥かしうやあらむと思しけるを、いたく夜更けて參う上り給へり。（四）いとつゝましげにおほどかにて、小やかにあえかなるけはひのし給へれば、（五）いとをかしと思しけり。（六）弘徽殿には御覽じつきたれば、睦まじうあはれに、心安くおもほし、（七）これは人ざまもいたうしめり恥かしげに、大臣の御もてなしもやむごとなく裝ほしければ、侮りにくゝ思されて、（八）御宿直などはひとしくし給へど、うちとけたる御童遊に、晝など渡らせ給ふことは、（九）あなたがちにおはします。（一〇）權中納言は、思ふ心ありて聞え給ひけるに、かく參り給ひて、御女にきしろふさまにて侍ひ給ふを、かたぐ\に安からず思すべし。

（一一）院には、かの櫛の箱の御かへり御覽ぜしにつけても、御心離れ難かりけり。その（一二）頃大臣の參り給へるに、御物語こまやかなり。事のついでに、齋宮の下り給ひし

(一)命令し
(二)參議兼修理太夫某
(三)秋好の親分として萬事を引受ける樣には見られたくなしと朱雀を憚りて一通の見舞の格
(四)秋好の邸が
(五)里にのみ下つて居た侍女も
(六)源の心、御息所が生きて居たらさぞ乘氣になつて世話するであらう
(七)私の關係は姑く措き、一通りから云うても御息所は惜しき人
(八)手を切らずには居られなかつたけれども
(九)藤壺

ひも似げなからず、いとよき御あはひなゝめるを、内裏まだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へ聞ゆるを、人知れずものしとや思すらむなど、にくき事をさへ思しやりて、胸つぶれ給へど、今日になりて思しとゞむべき事にしあらねば、事ども有るべき樣に(一)宣ひおきて、睦まじうおぼす(二)修理の宰相を、くはしう仕うまつるべく宣ひて、内裏に參り給ひぬ。(三)うけばりたる親ざまには聞し召されじと、院をつゝみ聞え給ひて、御とぶらひばかりと見せ給へり。よき女房などはもとより(四)多かる宮なれば、(五)里がちなりしも參り集ひて、いとになく、けはひあらまほし。あはれおはせましかば、如何にかひありて思しいたづかまし、と昔の御心ざま(六)思し出づるに、(七)大方の世につけても、惜しうあたらしかりし人の御有樣ぞや。(八)さこそえあらぬものなりけれ、由ありし方はなほ勝れて、物の折ごとに思ひ出で聞え給ふ。

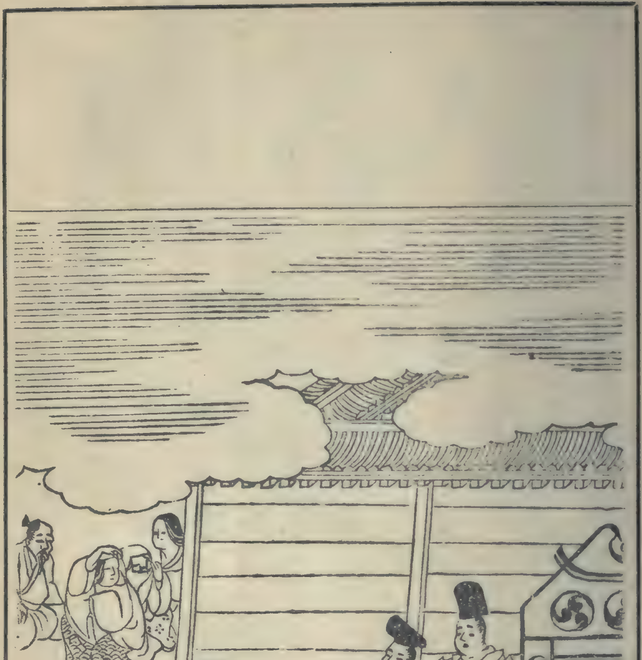
(九)中宮も内裏にぞおはしましける。上は、珍らしき人參り給ふと聞し召しければ、い

（一）朱雀への秋好の返事
（二）朱雀の御手紙は無いか
（三）女別當が源に見せず
（四）返事なさらぬも
（五）返事せぬとは
（六）伊勢下りの當時を
（七）朱雀の容姿が
（八）何といふ事なく
（九）訣別の時の儀式の御詞も當時は何とも思はざりしが、今になりて却て恐し、かへりて—歸りて、却りて
（一〇）下され物
（一一）源氏
（一二）口には出さず
（一三）源の心、朱雀は女にして見たい程の器量にて秋好とは似合の夫婦なり冷泉はまだ子供なるに今度の番狂はせを起したるは冷泉が不快に思ふかも知れぬ

かしく哀なる御心ばへを、など思ひ亂れ給ひて、とばかりうち眺め給へり。源「こ（一）の御かへりは、如何樣にか聞えさせ給ふらむ。又（二）御消息もいかゞ」など聞え給へど、いとかたはらいたければ、（三）御文はえ引き出でず。宮は惱ましげに思して、御返いと物憂くし給へど、「（四）聞え給はざらむも、いと情なくかたじけなかるべし」と、人々そゝのかし煩ひ聞ゆるけはひを聞き給ひて、源（五）「いとあるまじき御事なり。しるしばかり聞えさせ給へ」と聞え給ふも、いと恥かしけれど、（六）いにしへ思し出づるに、（七）いとなまめき淸らにて、いみじう泣き給ひし御樣を、（八）そこはかとなく哀と見奉り給ひし御稚心も、たゞ今の事と覺ゆるに、故御息所の御事なども、かきつらね哀におぼされて、たゞ斯く。

秋好（九）わかるとて遙にいひしひとこともかへりてものは今ぞかなしき

とばかりやありけむ。御使の祿（一〇）しなぐ\に賜はす。大臣（一一）は御返をいとゆかしう思せど、（一二）え聞えたまはず。院（一三）の御有樣は、女にて見奉らまほしきを、この御けは



(一)遠くまで匂ふ位に
(二)秋好へ贈りたる也
(三)源も見る事なればと朱雀が氣て用意せしと見えて
(四)贈られし時は恰も源の來居たる時にて
(五)箱の裝飾也、花紅葉などの形したる物
(六)齋宮の伊勢下りに別の櫛をさす時は再び歸京するなと勅ある也、其に因みて神が我と君との中を隔てたるか
(七)出來にくき戀に熱中する我が性質から朱雀に同情して
(八)源の心、秋好の伊勢下りの時に
(九)番くるはせ
(一〇)自分にしても氣がもめる場合ぢやわい
(一一)源の心
(一二)朱雀に氣をもませるならん
(一三)朱雀をば恨みし事もあれども

ならず。種々の御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩(一)のほかを多く過ぎ匂ふまで、心ことにとゝのへ(二)させ給へり。(三)大臣見給ひもせむにと、かねてよりや思し設けけむ、いとわざとがましかゝめり。殿(四)も渡り給へるほどにて、斯くなむと女別當御覽ぜさす。たゞ御櫛の箱の片つ方を見給ふに、盡せず細になまめきて、珍らしき樣なり。さしぐしの箱の心葉(五)に、

(六)わかれぢに添へしをぐしをかごとにてはるけき中と神やいさめし

大臣これを御覽じつけて、思しめぐらすに、いと辱くいとほしくて、(七)我が御心ならひのあやにくなる身をつみて、(八)かの下り給ひしほど、御心に思ほしけむ事、かう年經て歸り給ひて、その御志をも遂げ給ふべき程に、かゝる違目(九)のあるをいかに思すらむ、御位を去り、物しづかにて、世をうらめしとや思すらむ、(一〇)われになりて心動くべき節かな、と思しつゞけ給ふに、いとほしく、(一一)何にかく強なる事を思ひ始めて(一二)心苦しく思しなやますらむ、(一三)つらしとも思ひ聞えしかど、また懷

繪合

梗槩

㊀秋好、女御として入内。朱雀院の遺憾。秋好と弘徽殿女御と竝び寵せらる。㊁帝の好により、後宮に繪を弄ぶこと盛に行はる。秋好方と弘徽殿方との競爭。源氏の須磨の繪日記。㊂藤壺の御前の繪合。㊃帝の御前にて行はるべき繪合の準備。㊄繪合當日の光景。當日の壓卷たる須磨の繪日記。餘談。㊅源氏の後圖。

(一)前齋宮の御參のこと、中宮の御心に入れてもよほし聞え給ふ。こまかなる御とぶらひまで、(二)とり立てたる御後見もなしと思しやれど、(三)大殿は、院に聞し召さむことを憚り給ひて、二條院に渡し奉らむことをも、この度は思しとまりて、たゞ知らず顏にもてなし給へれど、大方の事どもはとりもちて、(四)親めき聞え給ふ。(五)院はいと口惜しく思しめせど、(六)人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、(七)うちみだりの箱、香壺の箱ども尋常

㊀秋好入内、弘徽殿女御と竝び寵せらる
(一)秋好が女御として入内すべき事を藤壺が肝煎る
(二)入内するに就ては是といふ尻押もなき故源が細なる點まで注意してやれども
(三)源氏が朱雀を憚りて
(四)秋好の親らしく世話やく
(五)朱雀は心をかけた女を取られて殘念なれど
(六)外聞を憚りて
(七)手巾などを入るゝ箱

(一)飛んでもない目に泣き逢ふ事かな
(二)斯う〳〵と話もせず
(三)河内守
(四)我を厭はるゝ故の出家なるべし
(五)つまらぬ出過口なりと言ひ傳へたり

き宿世ある身にて、かく生きとまりて、はて〳〵は(一)珍らしき事どもを、聞き添ふるかな、と人知れず思ひ知りて、(二)人に然なむとも知らせで尼になりにけり。在る人々、いふかひなしと思ひ歎く。(三)守もいとつらう、河内守(四)「おのれを厭ひ給ふほどに。残の御齢は多くものし給ふらむ、いかでか過し給ふべき」などぞ。(五)あいなのさかしらやなどぞ侍るめる。

㊀空蟬夫を喪ひて出家す
(一)空蟬の夫
(二)空蟬の事をのみ遺言して
(三)空蟬の
(四)空蟬の心、運がわるくて
(五)どうまごつくならん
(六)伊豫介の心
(七)空蟬
(八)子等の了簡も當にならぬ故
(九)命は思ふ儘にならぬものにて
(一〇)父の遺言なればとて子等が空蟬に優しくすれど
(一一)それもこれも世間の常なれば
(一二)空蟬に惚れて居て
(一三)父の厚き遺言故我を力にし給へ
(一四)けしからぬ了簡
(一五)空蟬の心

れば、折々はなほ宣ひ動かしけり。

かゝる程に、この常陸守、(一)老のつもりにや、惱ましうのみして、物心細かりければ、子どもに、唯(二)この君の御事をのみ言ひ置きて、よろづの事、たゞ(三)この御心にのみ任せて、我が在りつる世にかはらで仕う奉れとのみ、旦暮言ひけり。女君、(四)心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、(五)如何なる樣にはふれ惑ふべきにかあらむ、と思ひ歎き給ふを見るに、命の限あるものなれば、惜み留むべき方なし、(六)いかでか(七)この人の御爲に、殘し置く魂もがな、(八)我子どもの心も知らぬを、と後めたう悲しき事に言ひ思へど、(九)心にえとゞめぬものにて亡せぬ。暫しこそ、(一〇)さ宣ひしものをなど、情づくれど、上べこそあれ、つらきこと多かり。(一一)とあるもかゝるも世の理なれば、身一つの憂きことにて歎き明しくらす。たゞこの河内守のみぞ、昔より(一二)すき心ありて少し情がりける。河内守「(一三)あはれに宣ひおきしを、數ならずとも、思し疎まで宣はせよ」など、追從しよりて、(一四)いとあさましき心の見えければ、(一五)憂

(一)偶然關にて出逢ひしは縁の盡きぬ驗と我は思ひしに
(二)偶然の行逢を頼もしくは思ひしものゝ顔も見ずに別れて效なかりしはつらし、あふみぢ—逢ふ路、近江路
(三)伊豫介が其方を我物にしたる樣が
(四)餘りの無沙汰に遠慮が出たれど
(五)今別れたる如き心地
(六)返事し給へ
(七)源が我を疎く思ふ
(八)源と空蟬との手紙の往復などはいたづらにてよくなき事とは思へど、きつぱり斷りもならぬ
(九)まして女ならば返事をしてもよからん
(一〇)空蟬の心
(一一)源と我との中は如何なれば何時も〳〵むつかしくて嘆をのみ重ぬる事ぞ、下句は關に杉並樹あるに寄せていへり
(一二)空蟬は源が戀にも恨にも心に深く刻みたる女なれば

源「(一)一日は契知られしを、然は思し知りけむや。

(二)わくらはに行きあふみちを頼みしもなほかひなしやしほならぬ海

(三)關守の、さも羨ましく、目ざましかりしかな。

とあり。源「(四)年頃のとだえも初々しくなりにけれど、心にはいつとなく、(五)たゞ今の心地するならひになむ。すき〴〵しう、いとゞ憎まれむや」とて賜へれば、かたじけなくて持て行きて、右衞門「なほ(六)聞えたまへ。昔には少し(七)思しのくことあらむと思ひ給ふるに、同じやうなる御心の懷しさなむ、いとゞ有難き。(八)すさびごとぞ益なきことと思へど、えこそすくよかに聞えかへさね。(九)女にては負け聞え給へらむに、罪許されぬべし」などいふ。(一〇)今はましていと恥かしう、よろづの事初々しき心地すれど、珍らしきにや、え忍ばれざりけむ。

空蟬「(一一)あふさかの關やいかなるせきなれば繁きなげきの中をわくらむ

夢の樣になむ」と聞えたり。(一二)あはれもつらさも忘れぬふしと思し置かれたる人な

かひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへして(一)物あはれなり。

空蟬　行く(二)と來とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

え(三)知り給はじかしと思ふに、いとかひなし。

● 源氏文を空蟬に贈る

石山より出で給ふ御迎に、右衛門佐參れり。一日(四)まかり過ぎしかしこまりなど申す。むかし童にて、いと睦まじうらうたきものにし給ひしかば、かうぶり(五)など得しまで、この御德に隱れたりしを、覺え(六)ぬ世のさわぎありし頃、物の聞えに憚りて、常陸に下りしをぞ、少し(七)御心おきて年頃はおぼしけれど、色にも出し給はず。昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人の内には數へ給ひけり。紀伊守といひしも、今は河内守にぞなりにける。その弟の、右近(八)の尉解けて御供に下りしをぞ、とりわきて(九)なし出で給ひければ、それにぞ誰も思ひ知りて(一〇)、などて少しも世に從(一一)ふ心をつかひけむなど思ひ出でける。佐召し寄せて御消息(一二)あり。今は(一三)思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかな、と思ひ居たり。

(一)當時を追懷して
(二)往きにも歸りにも我が涙の止まらぬを、人は此處の名所なる關の清水と間違へるならん
(三)只口ずさむのみなれば源は知らじ
(四)源に行き逢ひながら御供せざりし御詫
(五)五位に叙せらるゝ迄皆源の御蔭なりしに
(六)源退去の騷
(七)源が少し不滿足に思ひしかど
(八)右近衛を免職されて源と共に須磨に行きしを
(九)登庸し
(一〇)氣がつきて
(一一)聊にても世を憚りて源につらくせしは恐かりしと
(一二)空蟬へ
(一三)右衛門佐の心、空蟬の事は最早忘れさうなものなるに



(一)道の程騒がしかりなむものぞとて、まだ曉より急ぎけるを、女車多く、所狹うゆるぎくるに、日たけぬ。打出の濱來る程に、殿(二)は粟田山越え給ひぬとて、御前の人々、道もさりあへず來込みぬれば、關山(三)に皆下り居て、此所彼所の杉の下に、車どもかきおろし、木隱に居かしこまりて過し奉る。(四)車などかたへは後らかし、先にたてなどしたれど、なほ類(五)ひろく聞ゆ。車十ばかりぞ、袖口物の色あひなども漏り出でて見えたる。(六)田舍びず由ありて、(七)齋宮の御下りなにぞ樣の折の物見車思し出でらる。殿(八)もかく世に榮え出で給ふ珍らしさに、數(九)もなき御前ども皆目とどめたり。九月晦日なれば、紅葉の色々こきまぜ、霜がれの草、むら〳〵をかしう見え渡るに、關屋(一〇)よりさとはづれ出でたる旅姿どもの、いろ〳〵の襖(一一)のつぎつぎしき縫物、括染(一二)の樣も、さる方にをかしう見ゆ。御車(一三)は簾おろし給ひて、かの昔の小君、今は(一四)右衞門佐なるを召し寄せて、(一五)源「今日の御關むかへは、え思ひすて給はじ」など宣ふ。御心の中、いとあはれに思し出づる事多かれど、おほぞうにて(一六)

(一)源の行列に出逢ひては
(二)源氏
(三)源に路を讓りて也
(四)伊豫介一行の中の車の一部分は後から來させ又は先發させなど
(五)人數多く見ゆ
(六)女車の樣子が田舍めかず
(七)源が伊豫介の女車を見ての感
(八)源氏
(九)爭ひて御供せる無數の前驅の從者等皆此女車に注目せり
(一〇)關所をさつと通り拔ける源の一行の旅姿
(一一)狩襖とて布に綿の裏つけたるもの
(一二)絞染
(一三)源の
(一四)伊豫介の子父に從ひて上京せる
(一五)空蟬への傳言、其方の迎に爰まで來れる我志は忘れざるならん
(一六)傳言は只一通りの口上のみにて

關屋

梗概――㊀ 空蟬、夫に隨ひて常陸より上京す。源氏石山に詣でんとして關山にて行き逢ふ。㊁ 源氏、文を空蟬に贈る。㊂ 空蟬夫を喪ひて出家す。

伊豫介(一)といひしは、故院(二)かくれさせたまひてまたの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木(三)も誘はれにけり。須磨の御旅居も遙に聞きて、人知れず(四)思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、傳へ(五)きこゆべきよすがだになくて、筑波根(六)の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、いさゝかの傳へだになくて年月重りにけり。限れる(七)事もなかりし御旅居なれど、京に歸り住み給ひて、またの年の秋ぞ常陸は上りける(八)。關入る(九)日しも、この殿(一〇)、石山に御願はたしに詣で給ひけり。京より、かの紀の守などいひし子ども、迎(一一)に來たる人々、この殿(一二)かく詣で給ふべしと告げければ、

㊀ 空蟬夫に隨ひて常陸より上京す
(一) 空蟬の夫
(二) 桐壺崩御の翌年常陸介に轉任して
(三) 空蟬も同行せり
(四) 空蟬が
(五) 人傳に音信する
(六) 稀に便宜はありても不確なる故見合せて、「甲斐がねを根越し山越し吹く風を人にもがもや言傳てやらん」
(七) 無期限の退去
(八) 伊豫介上京
(九) 逢坂の關を越ゆる日
(一〇) 源氏
(一一) 伊豫介の
(一二) 源の石山詣を伊豫介に

（一）末摘の出世は嬉しけれど、自分が辛抱の足らざりしを恥かしく思へる事
（二）記者が

も渡り給ふにさしのぞきなどし給ひつゝ、いと侮はしげにもてなし聞え給はず。かの大貳の北の方のぼりて驚き思へる様、侍従が、嬉しきものの、今しばし待ち聞えざりける心淺さを恥かしう思へる程などを、（一）今少し（二）問はずがたりもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく物憂ければ、今又もついであらむ折に、思ひ出でてなむ聞ゆべきとぞ。

(一)爭って暇を取りし
(二)末摘が遠慮すぎる程人がよきに慣れたる侍女等は、つまらぬ國守の家などに仕へて見て居にくく思ひて又歸參して身元思案の了簡を見られる
(三)源氏
(四)細に注意する故末摘邸も活氣を生じて
(五)植木にも手入して
(六)源の末摘を寵愛する事と推測して末摘の御機嫌をとりて
(七)二條東院へ後に末摘を迎へたり
(八)末摘が源に
(九)一構への內故
(一〇)わざ〳〵は尋ねざれども序に見舞ひなどして

ものめかし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契なめりかし。今はかぎりと侮りはてて、樣々に(一)きほひ散りあがれし上下の人々、我も我も參らむと爭ひ出づる人もあり。心ばへ(二)などはた、うもれいたきまで、よくおはする御有樣に、心やすくならひて、殊なる事なき、なま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに參り歸る。(三)君は、いにしへにも勝りたる御勢の程にて、物の思ひやりも勝して添ひ給ひにければ、(四)こまやかに思しおきてたるに、にほひ出でて、宮の內やう〳〵人目見え、木草の葉も、唯凄く哀に見えなされしを、遣水かき拂ひ、(五)前栽のもとだちも涼しうしなしなどして、殊なるおぼえなき下家司の、殊に仕へまほしきは、(六)かく御心とゞめて思さるゝことなゝめりと見とりて、御氣色賜はりつゝ、追從し仕う奉る。二年ばかりこの舊宮に眺め給ひて、(七)東の院といふ所になむ、後にはわたし奉り給ひける。(八)對面し給ふことなどは、いと難けれども、(九)近きしめのほどにて、(一〇)大方に

ぎ給はぬ所にて、御目うつしこよなからぬに、咎おほう隱れにけり。(一)祭御禊などのほど、(二)御いそぎどもに託けて人の奉りたる物の、いろ〳〵に多かるを、(三)さるべき限御心加へ給ふ。中にも(四)この宮には、こまやかに思しよりて、睦まじき人々に仰言賜ひ、下部どもなど遣して、蓬拂はせ、めぐりの見苦しきに、板垣といふものうち堅め繕はせ給ふ。(五)かう尋ね出で給へりと、聞き傳へむにつけても、わが御ため面目なければ、渡り給ふことはなし。御文いと細やかにかき給ひて、(六)「二條院いと近き所を造らせ給ふを、(七)そこになむ渡し奉るべき。よろしき童など求めて侍はせ給へ」など、(八)人々の上まで思しやりつゝ、訪ひ聞え給へば、かく(九)怪しき蓬のもとには置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜び聞えける。(一〇)なげの御すさびにても、おしなべたる尋常の人をば、目とゞめ耳たて給はず、世に少しこれはと思ほえ、心にとまる節あるあたりを尋ねより給ふものと、人の知りたるに、(一一)かくひき違へ、何事もなのめにだにあらぬ御有樣を、

㊄源氏の扶助によりて再び世に出でたる末摘花

(一)賀茂祭や其祭前の夜の式

(二)其に用ゐらるべき爲と名を附けて

(三)源の目をかけてやるべき人々に配る

(四)末摘に對しては細かに注意して

(五)末摘の如き女に關係すると人に聞かれても面目なき故、源自身に行く事はなし

(六)末摘への手紙の趣、二條院に近き即目下普請中

(七)其方を其處へ引取る

(八)侍女等の身の上迄心配して

(九)荒屋には溢れる程の喜を堪へて源邸の方を仰ぎて

(一〇)以下作者の評、源は一寸の戲にも平凡な女を相手にせず、多少勝れたる噂ある女を撰ぶ事は人も知りたる事なるに

(一一)打て異つて丸で取處なき末摘を手厚くするはどうした了簡か

ひつらむ、春秋の暮しがたさなども、(一)誰にかは愁へ給はむと、(二)うらもなく覺ゆる
もかつはあやしうなむ」など聞へ給へば、

末摘　(三)年を經てまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか

と忍びやかにうちみじろき給へるけはひも、袖の香も、昔よりは(四)ねびまさり給へるにやと思さる。月入りがたになりて、西の妻戸のあきたるより、(五)さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも(六)殘りなければ、いと花やかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に變らぬ御しつらひの樣など、しのぶ草にやつれたる上の見(七)るめよりは、みやびかに見ゆるを、(八)昔物語に、たふ毀ちたる人もありけるを思しあはするに、(九)同じさまにて年古りにけるも哀なり。(一〇)ひたぶるに物づつみしたるけはひの、流石にあてやかなるも、心にくゝ思されて、(一一)さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年頃さまぐ\の物思ひに(一二)ほれぐ\しくて隔てつる程、つらしと思はれつらむ、といとほしく思す。(一三)かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花や

(一)我に語らずば外に話す相手もなからん
(二)親しく思はるゝも不思議な樣
(三)いくら待つても來て下さらぬ我宿を稀に尋ねたかと思へば、其は藤の花故であつたか
(四)年のせいで人物もあがりしかと思はる
(五)月の障になるべき
(六)殘らず破れたれば
(七)屋外の體裁よりは
(八)不孝の子親の建てたる塔を壞したる事昔物語にありしならんと云ふ
(九)昔のかたを崩さず
(一〇)末摘が無暗に恥しがる樣子
(一一)源の心、此女は此女として永く世話せんと思ひしに
(一二)うつかりして末摘に無沙汰して居た間
(一三)是より花散里へ行つて見ても花散もぢみな女にて、末摘から目移りが甚しき懸隔なき故、之が爲に末摘の短所も餘り目立たざりき

(一)源の親切を思ひて猶發して幽に返事したり
(二)自分の心が變らぬので人(末摘)の氣はどう變りしや、知れぬに、尋ね來た我志を何と思はるゝ
(三)今迄の無沙汰は誰にも同じくした無沙汰故許してくれるならん
(四)今後其方の心に叶はぬ事あらば我が罪なり
(五)此邸に泊るのも
(六)恥かしき
(七)甘く逃口上をつくりて
(八)「引植えし人は宜こそ老いにけれ松の木高くなりにける哉」
(九)源の身の上の變化
(一〇)昔に藤の花を見て素通りし難く終に訪問する氣になれるは、畢竟其方のまつ心に惹かれしならん、まつ—待つ、松
(一一)無沙汰中の年月が
(一二)やがて寬々色々の話をすべし
(一三)「思ひきや鄙の別に衰へて海士の繩たぎいさりせんとは」

聞え給はず。斯くばかりわけ入り給へるが淺からぬに、(一)思ひおこしてぞ、ほのかに聞え出で給ひける。源「かゝる草がくれに過し給ひける、年月の哀もおろかならず。(二)又變らぬ心ならひに、人の御心の中もたどり知らずながら、分け入り侍りつる露けさなどを、いかゞおぼす。(三)年頃のおこたりはた、なべての世に思し許すらむ。(四)今より後の御心に叶はざらむなむ、言ひしに違ふ罪も負ふべき」など、さしも思されぬ事も、情々しう聞えなし給ふ事どもあゝめり。(五)立ちとゞまり給はむも、所のさまより始め、(六)まばゆき御有樣なれば、(七)つぎ〳〵しう宣ひすぐして出で給ひなむとす。(八)ひき植ゑしならねど、松の木高くなりにける年月の程あはれに、夢の樣なる(九)御身のありさまも思しつゞけらる。

源「(一〇)ふぢなみの打過ぎ難く見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ

數ふればこよなう(一一)積りぬらむかし。都に變りにける事の多かりけるも、樣々あはれになむ。(一二)今のとがにぞ、(一三)鄙の別に衰へし世の物語も聞え盡すべき。また年經給

る。あまそゝぎ(一)も、なほ秋の時雨めきてうちそゝげば、御傘(二)さぶらふ。惟光「げに木(三)の下露は、雨にまさりて」と聞ゆ。御指貫の裾は、いたうそほぢぬめり。昔だに有るか無きかなりし中門など、まして形もなくなりて、入り給ふにつけても、いとむとく(四)なるを、立ち交り見る人なきぞ心安かりける。

姫君は、さりとも(五)と待ち過し給へる心もしるく、嬉しけれど、いと恥かしき御有樣にて對面せむも、いとつゝましく思したり。大貳の北の方の奉り置きし御衣どもをも、(六)心ゆかず思されしゆかりに、見入れ給はざりけるを(七)、この人々の香の御唐櫃に入れたりけるが、いと懐しき香したるを奉りければ(八)、いかゞはせむに、著かへ給ひて、かの煤けたる御几帳ひき寄せおはす。入り給ひて、源「年頃の隔にも、心ばかりはかはらずなむ、思ひやり聞えつるを(九)、さしも驚かい給はぬ恨めしさに、今まで試み聞えつるを(一〇)、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむまけ聞えにける」(一一)とて帷子を少しかきやり給へれば、例のいとつゝましげに、頓にも答へ

(一)雨の雫
(二)傘をさしかける
(三)「御侍御傘と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」
(四)あるに甲斐なきを
(五)まさかに源の來ぬ事はあらじと今迄待ちたる驗ありて
(六)面白くも無き人の贈物故打棄て置きたるを
(七)侍女等が
(八)外に仕方がなくて
(九)其方よりは便をせぬが恨めしくて今までためして見たが
(一〇)三輪のしるしの杉では無いが此邸の木立が目について此方から降參して來たり、「我庵は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉たてる門」
(一一)几帳の布をかきのけて末摘を見る也

とて参りぬ。源「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな」と宣へば、惟光「云々なむたどり寄りて侍りつる。侍従が伯母の少將といひ侍りし老人なむ、變らぬ聲にて侍りつる」と有樣聞ゆ。(一)いみじうあはれに、かゝる繁き中に、何心地してすぐし給ふらむ、今まで訪はざりけるよ、と我が御心の情なさも思し知らる。源「如何すべき。かゝる忍歩行も難かるべきを。かゝる序ならでは得立寄らじ、變らぬ有樣ならば、(二)げにさこそあらめと推し量らるゝ人ざまになむ」とは宣ひながら、(三)ふと入り給はむこと、なほつゝましう思さる。(四)故ある御消息もいと聞えまほしけれど、(五)見給ひし程の口おそさもまだ變らずば、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとゞめつ。惟光も、「(六)更にえ分けさせ給ふまじき、蓬の露けさになむ侍る。露少し拂はせてなむ、入らせ給ふべき」と聞ゆれば、

源　尋ねても我こそとはめ道もなく(七)深きよもぎのもとのこゝろを

とひとりごちて、なほ下り給へば、御さきの露を、馬の鞭して拂ひつゝ入れ奉

(一)源の心
(二)成程さう有りそうに思はれる末摘の氣風ぢや
(三)直には入りにくゝ思ふ
(四)自ら入る前に然るべき口上も言はせたけれど
(五)末摘の口重さも昔の通りならば、使が返事を待ちくたびれるも可愛想と
(六)御入りなされそうもなき
(七)末摘の昔にかはらぬ心を



くれば、いと物古りたる聲にて、まづ咳をさきにたてて、家人「彼は誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、惟光「侍従の君と聞えし人に、對面賜はらむ」といふ。家人「それは(一)外になむ物し給ふ。されど(二)思しわくまじき女なむ侍る」といふ聲、いたう(三)ねび過ぎたれど、(四)聞きし老人と聞き知りたり。内には、思ひ寄らず、狩衣姿なる男の、忍びやかにもてなして、(五)なごやかなれば、見習はずなりにける目にて、もし狐などの變化にやと覺ゆれど、近う寄りて、惟光「たしかになむ承らまほしき。(六)變らぬ御有樣ならば、(七)尋ね聞えさせ給ふべき御志も、絶えずなむおはしますめるかし。今宵も(八)行き過ぎがてに留らせ給へるを、(九)いかゞ聞えさせむ、後やすくを」といへば、女どもうち笑ひて、「(一〇)變らせ給ふ御有樣ならば、かゝる淺茅が原をうつろひ給はで侍りなむや。唯推し量りて聞えさせ給へかし。(一一)年經たる人の心にも、(一二)類あらじとのみ、珍らかなる世をこそは見奉り過し侍れ」と、(一三)やゝくづし出でて、問はずがたりもしつべきが、(一四)むつかしければ、惟光「よし〳〵。まづ斯くなむと聞えさせむ」

(一)此所には居ぬ
(二)侍従と同じに思はるべき、侍従の伯母少將といふ女也
(三)老人じみたれど
(四)兼て聲を聞き知れる
(五)物ごしやさしければ
(六)矢張末摘花が居らるるならば
(七)源の末摘を世話する志は變らず
(八)素通りするに忍びず
(九)何と申上ぐべきか聞違はぬ樣に承りたし
(一〇)變る位ならば此野原の如き邸に居る筈はなし
(一一)我々老人
(一二)類がなく思はれる程の生活をし來れり
(一三)ぽつ〳〵と呟し出して
(一四)うるさくて

行に後れねば侍ひけり。召し寄せて、源「こゝは故常陸の宮ぞかしな」惟光「しか侍る」と聞ゆ。源「こゝにありし人は、まだや眺むらむ、訪ふべきを、(二)わざと物せむも所せし。かゝる(一)序に入りて消息せよ。(三)能く尋ねよりてを、うち出でよ。人違ひしては嗚呼ならむ」と宣ふ。此所には、いとゞ(五)ながめまさる頃にて、つくづくとおはしけるに、(六)晝寢の夢に、(四)故宮の見え給ひければ、覺めていと名殘悲しく思して、(七)漏りぬれたる廂の端つかたおし拭はせて、こゝかしこの御座引き繕はせなどしつゝ、(八)例ならず世づき給ひて、

末摘亡き人を戀ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ

も心苦しきほどになむありける。惟光入りて、廻る〳〵人の音する(九)方やと見るに、いさゝか人氣もせず。さればこそ、(一〇)往來の道に見入るれど人住みげも無きものを、と思ひて、かへり參る程に、月明くさし出でたるに見れば、格子二間ばかりあげて、簾動く氣色なり。僅に見つけたる心地、怖ろしくさへ覺ゆれど、(一一)寄りて聲づ

(一)末摘は不相變くよくよして居るかしら
(二)わざ〳〵尋ねる面倒
(三)よく確めて言ひ出せ
(四)末摘方では
(五)ひとしほ沈み入る時分で
(六)末摘の
(七)雨が漏りて濡れたる
(八)末摘がいつになく人並らしくして
(九)方があるかと
(一〇)今迄通り懸りに注意すれど
(一一)案内すれば

㊃ 源氏、常陸宮を過りて末摘花を訪ふ
(一) 源氏
(二) 久し振にて稀に逢ひて珍らしさに
(三) 餘程重く思ふ女の所でなければわざ〳〵尋ねぬ
(四) 末摘花
(五) 紫に暇乞して
(六) 女通ひ
(七) 橘は昔をしのぶ種となる物、又花散里に緣あり
(八) 車より頭を出して見るに
(九) 垣が崩れたれば也
(一〇) 常陸宮であつたわいと源が思ひ出したる也
(一一) 車を

る。

かの殿(一)には、めづらし人(二)に、いとゞ物騒しき御有様にて、いとやむごとなく(三)思されぬ所々には、わざともえ音づれ給はず。まして、その人(四)はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、尋ね給ふべき御志も急がであり經るに、年かはりぬ。四月ばかりに、花散里を思ひ出で聞え給ひて、忍びて對(五)の上に御暇聞えて出で給ふ。日頃降りつる名殘の雨少しそゝぎて、をかしき程に月さし出でたり。昔の御歩行(六)思し出でられて、艶なる程の夕月夜に、道のほど萬の事思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなるを過ぎ給ふ。大なる松に藤の咲きかゝりて、月影に靡きたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき薫なり。橘(七)にはかはりてをかしければ、さし出で給へるに(八)、柳もいたう垂りて、築地(九)もさはらねば亂れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、早(一〇)うこの宮なりけり。いと哀にて(一一)おしとゞめさせ給ふ。例の惟光は、かゝる御忍歩

(一)今迄諸共に
(二)思もよらぬ旅に
(三)道中を守る神も照覽あれ、今別れ行きても君を棄つる事は爲すまじ
(四)只命が無くなれば已むを得ぬ事
(五)侍從は何處に居る
(六)侍從が
(七)車を
(八)嫌々ながら暇は取らずに居た侍從が
(九)末摘が
(一〇)侍從が何で居るものか、我々さへ辛抱しかねる
(一一)外聞惡く
(一二)侍從
(一三)塵だらけなる

年頃の忍び難き世の憂さを、過し侍りつるに、(一)かく覺えぬ道に誘はれて、(二)遙に罷りあくがるゝことゝとて、

侍從「玉かづら絶えてもやまじ行く道(三)のたむけの神もかけてちかはむ

命(四)こそ知り侍らね」など言ふに、叔母「いづら、(五)暗うなりぬ」とつぶやかれて、心も(六)空にて引き(七)出づれば、顧のみせられけり。年頃侘び(八)つゝも行き離れざりつる人の斯く別れぬることを、いと(九)心細う思すに、世に用ゐらるまじき老人さへ、「いでや理ぞ。(一〇)いかでか立ち留り給はむ。我等もえこそ念じはつまじけれ」と、おのが身につけたる便ども思ひ出でて、留るまじう思へるを、(一一)人わろく聞きおはす。霜月ばかりになりぬれば、雪霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬葎の陰に、深うつもりて、越の白山思ひやらるゝ雪のうちに、出で入る下人だになくて、徒然とながめ給ふ。はかなき事を聞え慰め、泣きみ笑ひみ紛はしつる人(一二)さへなくて、夜も塵(一三)がましき御帳の中もかたはら淋しく、物悲しく思さ

（一）とにかく叔母の送りとして行くべし
（二）叔母の言も尤也
（三）末摘の當惑するも尤故、中に立つて途方に暮れる
（四）侍從迄我を棄て行くかと恨めしけれど
（五）泣くのが精一杯で
（六）紀念に侍從に遣るべき不斷着も汚れて居る故久しく勤めた驗として遣る物もなくて
（七）衣にたきしめる香
（八）何時迄も附添ひ居るべしと當にしたりし汝なるに、其が我を棄て行くとは案外なり、たゆ、すぢ、かけ、皆鬘の緣語
（九）故乳母、侍從の母
（一〇）腑甲斐なき我なれど其方をば何時までも目をかけんと思ひしに
（一一）我が世話は誰に託してゆくぞと
（一二）侍從
（一三）申上げる迄もなし

侍從「さらばまづ今日は、かう責め給ふおくりばかりに（一）參うで侍らむ。かの聞え給ふも理なり。（二）又思し煩ふもさることに侍れば、（三）中に見給ふるも、心苦しくなむ」と忍びて聞ゆ。（四）この人さへうち捨ててむとするを、うらめしうも哀にも思せど、言ひ留むべき方もなくて、いとゞ（五）音をのみたけきことにてものし給ふ。（六）形見に添へ給ふべき身なれ衣も、しほなれたれば、年經ぬるしろし見せ給ふべきものなくて、わが御髮の落ちたりけるを取り集めて鬘にし給へるが、九尺餘ばかりにて、いと淸らかなるを、をかしげなる箱に入れて、むかしの薰衣香（七）のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

末摘「たゆ（八）まじきすぢと賴みし玉かづらおもひの外にかけはなれぬる

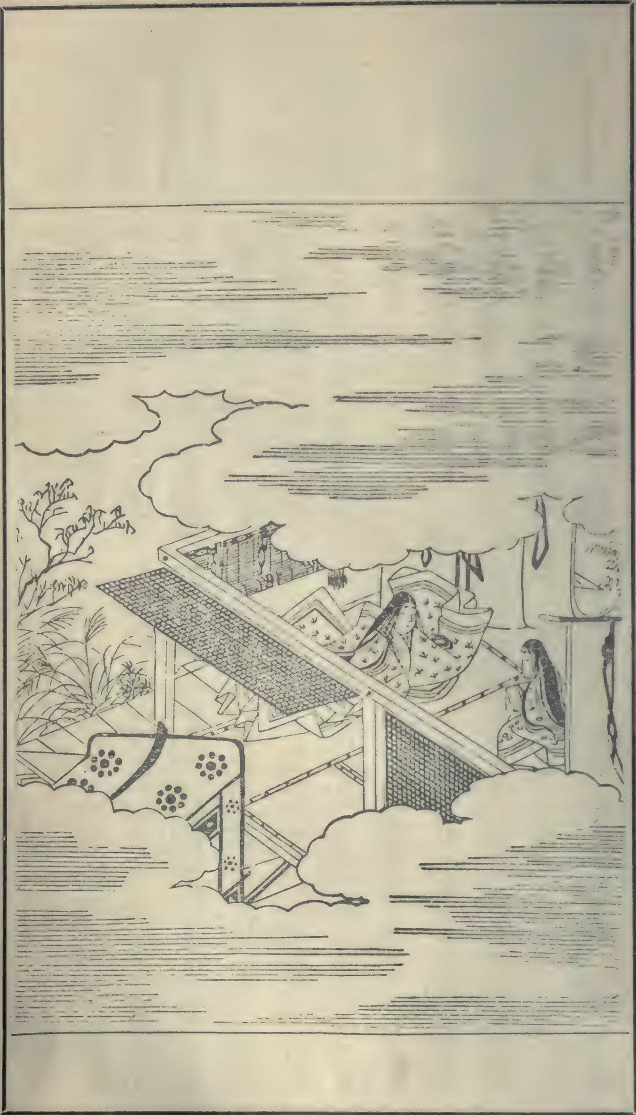
故まゝ（九）の、宣ひ置きし事もありしかば、（一〇）かひなき身なりとも、見はてゝむとこそ思ひつれ。うち捨てらるゝも、理なれど、（一一）誰に見讓りてかと恨めしうなむ」とて、いみじう泣き給ふ。（一二）この人も物も聞えやらず。侍從「まゝの遺言は更に（一三）も聞えさせず。

(一) 人頭ならぬ私が人中に出るはいや也
(二) 此儘で朽ち果てようと
(三) 此荒屋も今に引きかへて
(四) 源は今では紫より外に女は無い樣に思ひ居る樣なり
(五) 女
(六) 末摘の如き
(七) 眞實に我一人を力にして居るそうだからと言つて
(八) 末摘の決心は
(九) 叔母が
(一〇) 侍從だけでも連れて行かん
(一一) 侍從が

おのづから怠るをりも、長閑にたのもしくなむ侍りけるを、かく遙に罷りなむとすれば、後めたく哀に覺え給ふ」など語らへど、心解けても答へ給はず。末摘「いと嬉しきことなれど、(一)世に似ぬさまにて、何かは。(二)斯うながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひ侍る」とのみ宣へば、北方「げに然なむ思さるべけれど、生ける身を捨てて、かくむくつけき住居する類は侍らずやあらむ。大將殿の造り磨き給はむにこそは、(三)引きかへ玉の臺にもなりかへらめとは、頼もしうは侍れど、(四)たゞ今は兵部卿の宮の御女より外に、心わけ給ふかたもなかゝなり。昔より、好々しき御心にて、等閑に通ひ給ひける(五)所々、皆思し離れにたゝなり。まして、(六)斯う物はかなきさまにて藪原に過し給へる人をば、(七)心清く我を頼み給へる有樣と、尋ね聞え給ふ事、いと難くなむあるべき」など言ひ知らするを、實にと思すもいと悲しくて、つくづくと泣き給ふ。されど(八)動くべうもあらねば、(九)よろづに言ひ煩ひ暮して、「さらば(一〇)侍從をだに」と、日の暮るゝまゝに急げば、(一一)心あわたゞしくて、泣く〳〵、

（一）末摘がぶしつけな仕方とは思ひたれど
（二）憔悴したれど侍従の容姿をいふ
（三）勿体なけれど末摘に比すれば主従があべこべに見える
（四）末摘の貧窮を見棄て難いが
（五）私を嫌ひなされて一寸でも来ては下されぬが侍従丈でも許してよこして貰ひたいと思ひて
（六）なぜ斯る哀な暮しをして居る
（七）泣くべき筈である、然し伯母は前途の望のみを見て居る故愉快げなり
（八）故常陸宮、末摘の父
（九）私を外聞の悪い奴として
（一〇）今迄も疎略には思はざりし
（一一）高尚に構へて源に世話されるなど運の上きに出入つて私に情が寄附くのを遠慮し来りしが
（一二）我が如き
（一三）勢よかりし末摘の身の上が
（一四）近所に居れば無沙汰にしても安心なりしが

せたれば、いとゞはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。容貌（一）など衰へにけり。年頃いたうつひえたれど（二）、なほ物清げによしある様して、かたじけなくとも（三）、とりかへつべく見ゆ。北方「出立ちなむ事を思ひながら、（四）心苦しき御有様の見捨て奉り難きを、侍従の迎になむ参り来たる。心憂く思し隔て給ひて、御みづからこそあからさまにも渡らせ給はね、この人をだに（五）許させ給へとてなむ。など（六）斯う哀げなるさまには」とて、うちも（七）泣くべきぞかし。されど行く道に心をやりて、いと心地よげなり。北方「故宮（八）おはせし時、お（九）のれをば面伏なりと、思し捨てたりしかば、疎々しき様になり初めにしかど、年頃（一〇）も何かは。やむごと（一一）なき様に思しあがり、大将殿などおはしまし通ふ御宿世の程を、辱く思ひ給へられしかばなむ、睦び聞えさせむも、憚る事多くて過し侍りつるを、世の中のかく定もなかりければ、数（一二）ならぬ身は、なかなか心安く侍るものなりけり。及なく見奉りし御有様の、いと悲しく心苦しきを、近きほどは（一四）



給へりけり。歸りざまに立寄り給ひて、禪師しかぐ〳〵。權大納言殿の御八講に參りて侍りつるなり。いとかしこう、生ける淨土の飾に劣らず、嚴しうおもしろきことどもの限をなむし給ひつる。(一)佛菩薩の變化の身にこそものし給ふめれ。(二)五のにごり深き世に、などて生れ給ひけむ」といひて、やがて出で給ひぬ。言少に、世の人に似ぬ(三)御あはひにて、かひなき世の物語をだに、(四)え聞え合せ給はず。(五)さてもかばかり拙き身の有樣を、哀に覺束なくて過し給ふは、心憂の佛菩薩や、とつらう覺ゆるを、(六)げに限なゝめりとやう〳〵思ひなり給ふに、大貳の北の方俄に來れり。例は(七)さしも睦びぬを、さそひ立てむの心にて、(八)奉るべき御裝束など調じて、よき車に乘りて、面持氣色ほこりかに、物思無げなるさまして、ゆくりもなく走り來て、門開けさするより、(九)人わろく寂しき事かぎりなし。左右の戸もよろほひ倒れにければ、(一〇)男子ども助けて、とかく開けさわぐ。いづれか、(一一)この淋しき宿にも、必ずわけたる跡あゝなる三つの徑、とたどる。僅に南面の格子上げたる間に、(一二)寄

(一)源は
(二)五濁、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁
(三)兄弟仲
(四)話し合はず
(五)末摘の心、是程困つて居る我を尋ねもせずに居るのはいやな佛菩薩ぢや
(六)成程いよ〳〵捨てられたのぢや
(七)左程親しくなきに
(八)末摘に着せる着物
(九)見つともなく
(一〇)叔母の從者
(一一)此荒庭にも必ず三徑はあるべし其は何處ぞと跡をさがす、歸去來辭「三徑就荒、松菊猶存」
(一二)車を橋附にしたれば

(一) 源氏を當にする
(二) 程たても
(三) 自分が悲くて
(四) 前よりは一層
(五) つまらぬ道具も自分からなくす樣の事はせず
(六) こらへ通す
(七) 鼻端の赤きを形容す
(八) 大抵の人では我慢がならぬ
(九) 委しくは書くまじ、書いては氣の毒で餘り口が惡い樣なれば
㊂ 叔母筑紫に下らんとして末摘花を誘ふ
(一〇) 便りなく
(一一) 源氏
(一二) 勤行を積み
(一三) 末摘の兄

れて(一)久しうなり給ひぬる人に憑をかけ給ふ。御心の中に、さりとも、(二)有經ても思し出づる序あらじやは、哀に心深き契をし給ひしに、(三)我身の憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風の傳にても、我がかくいみじき有樣を聞きつけ給はば、必ず訪ひ出で給ひてなむ、と年頃思しければ、大方の御家居も、(四)ありしより勝にあさましけれど、我が心もて、(五)はかなき御調度どもなども取り失はせ給はず、心強く同じさまにて(六)念じ過し給ふなりけり。音泣き勝に、いとゞ思し沈みたるは、たゞ山人の(七)赤き木實ひとつを顔に放たぬと見え給ふ。御側目などは、(八)おぼろげの人の見奉り許すべきにもあらずかし。(九)委しくは聞えじ。いとほしう物いひさがなきやうなり。

冬になり行くまゝに、いとゞ(一〇)かきつかむ方なく、悲しげにながめ過し給ふ。かの(一一)殿には、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてし給ふ。ことに僧などは、竝てのは召さず、才勝れ(一二)行にしみ、尊きかぎりを選らせ給ひければ、この(一三)禪師の君も參り

べきなりけり、(一)悲しかりし折の憂はしさは、たゞ(二)我身一つの爲になれると覺えし
かひなき世かな、と心碎けて、つらく悲しければ、人知れず音をのみ泣き給ふ。大
貳の北の方、さればよ、(三)まさに斯くたづきなく、人わろき御ありさまを、數まへ
給ふ人はありなむや、佛聖も、罪輕きをこそ導きよくし給ふなれ、(四)かゝる御有樣
にて、たけく世を思し、(五)宮、上などのおはせし時のまゝにならひ給へる、御心お
ごりのいとほしき事、といとゞをこがましげに思ひて、叔母(六)「なほも思し立ちね。(七)世
の憂き時は見えぬ山路をこそ尋ぬなれ。田舍などは(八)むづかしきものと思しやるら
めど、(九)ひたぶるに人わろげには、よもてなし聞えじ」など、(一〇)いとことよく言へ
ば、(一一)むげに屈しにたる女ばら、「さも靡き給はなむ。(一二)たけき事もあるまじき御身を、
いかに思して、かく(一三)立てたる御心ならむ」と、(一四)もどきつぶやく。侍從も、かの大貳
の(一五)甥だつ人語らひつきて、とゞむべくもあらざりければ、心より外に出で立ちて、
侍從(一六)「見奉り置かむがいと心苦しきを」とて、(一七)唆し聞ゆれど、なほ斯くかけ離

(一)源退去の時の
(二)「世の中は昔よりやは憂かりけん我身一つの爲になれるか」
(三)貧く見苦しくなり下れる人を人らしく扱ふ人はない
(四)末摘はあのざまで負けぬ氣をおこし
(五)父母在世の時の癖のぬけぬ高慢さが氣の毒
(六)我と同行を
(七)世の憂き目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」
(八)いやな處と想像するならんが
(九)さ程見つともなき取扱はせぬ
(一〇)甘い事をいへば
(一一)非常に弱り込みたる侍女ども
(一二)碌な運も開きそうもなき身でありながら
(一三)我を立て通すならん
(一四)非難し
(一五)甥に當る人とよい中になりて其男が置いて行かうとせぬので不本意ながら出發する事になり
(一六)末摘を置いて行くは心配なれど
(一七)同行を

(一) 太宰大貳
(二) 然るべく形をつけて赴任せんとす
(三) 末摘を
(四) 無沙汰はして居ながらも近所なれば安心もして居られたれど、遠方へ行くとなれば殘し行くは氣遣なり
(五) 體裁よき事をいふ
(六) 末摘が同行を承知せぬ故
(七) 自分計高ぶりても
(八) 源も大事にもせじ
(九) 詛ひけり
(一〇) 源が
(一一) 我が好意を有せる事を源に知られんと
(一二) 源が合點のゆく
(一三) 源が末摘を思ひ出す樣子もなくて
(一四) 末摘の心、もうだめぢや
(一五) 源の不幸を悲みながらも
(一六) もんばう、穢多までも
(一七) 源の昇進を親しく祝ふ事も出來ぬ

の家あるじ大貳(一)になりぬ。女どもあるべき(二)さまに見置きて、下りなむとす。この君をなほも誘はむの心深くて、北方「遙にかく罷りなむとするに、心細き御有樣(三)の、常(四)にしも訪ひ聞えねど、近きを頼み侍りつる程こそあれ、いと哀に後めたくなむ」など言(五)よがるを、更にう(六)けひき給はねば、北方「あなにく。事々しや。心(七)一つに思しあがるとも、さる藪原に年經給ふ人を、大將(八)殿もやむごとなくしも思ひ聞え給はじ」など、怨じうけ(九)ひけり。さる程に、(一〇)げに世の中に許され給ひて、都にかへり給ふと、天の下の悦にて立ち騷ぐ。我もいかで、人より先に、深き(一一)志を御覽ぜられむ、とのみ思ひ競ふ男女につけて、貴きをも下れるをも、人の心ばへを見給ふに、哀と思し(一二)知る事さま〴〵なり。かやうにあわたゞしき程に、更(一三)に思ひ出で給ふ氣色見えで月日經ぬ。今(一四)は限なりけり、年頃あら(一五)ぬさまなる御樣を、悲しういみじき事を思ひながらも、萠出づる春に逢ひ給はなむと念じわたりつれど、た(一六)びしかはらなどまで悦び思ふなる、御(一七)位あらたまりなどするを、餘所にのみ聞く

（一）若き侍女等「どもゝ」の下に「つどひたれど」抔の語落ちたるなるべし
（二）侍従の心
（三）我母なる乳母も此家へは出入したれば
（四）侍従が
（五）末摘花
（六）叔母の家に
（七）我を國守の妻と輕蔑して斯る縁者あるを恥の樣に末摘が思ひたれば末摘が嫌ふとても構ふ事も出來ぬ從
（八）侍に
（九）素性から賤しき人は
（一〇）此叔母は素性は高けれど、なり下るべき運命の人なる故に
（一一）下品なる
（一二）以下叔母の心、我はなり下りて今迄輕蔑されたれば
（一三）末摘を
（一四）そうしたらば氣風こそ野暮なれど安心な附添人なるべし
（一五）琴
（一六）末摘へ
（一七）末摘は反抗する積ではなけれど、非常なるはにかみから鬪々しく叔母を勤ふ氣にもならぬを
（一八）叔母の夫

よろしき若人(一)どもも、むげに(二)知らぬ所よりは、親(三)どもも參うで通ひしを、と思ひて、時々(四)いき通ふ。この姫君(五)は、かく人疎き御癖なれば、睦(六)じくも言ひ通ひ給はず。叔母「(七)おのれをば貶め給ひて、面伏に思したりしかば、姫君の御有樣の心苦しげなるも、え訪ひ聞えず」など、なま憎げなる詞ども言ひ(八)聞かせつゝ、時々聞えけり。もとよりありつきたるさやうの並々の人は、なかなかよき人の眞似に心をつくし、(九)思ひあがるも多かるを、(一〇)やむごとなき筋ながらも、かうまでおつべき宿世ありければにや、心少し(一一)なほなほしき御叔母にぞありける。(一二)我が斯く劣の樣にて、侮らはしく思はれたりしを、いかでかかゝる世の末に、(一三)この君を、我が女どもの使人になしてしがな、心ばせ(一四)などの古びたる方こそあれ、いと後やすき後見ならむ、と思ひて、北方「時々こゝに渡らせ給ひて。御琴の音も(一五)承らまほしがる人なむ侍る」と聞えけり。(一六)この侍従にも、常に言ひ催せど、人に(一七)挑む心にはあらで、唯こちたき御物つゝみなれば、さも睦び給はぬを、妬しとなむ思ひける。かゝる程に、(一八)か

ど、(一)親のもてかしづき給ひし御心おきてのまゝに、世の中を(二)つゝましきものに思して、稀にも(三)言通ひ給ふべき御あたりをも、更に馴れ給はず、舊めきたる御厨子開けて、(四)唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の繪に畫きたるをぞ、時々の(五)まさぐりものにしたまふ。古歌とても、(六)をかしきやうに選り出で、題をも讀人をも、顯し心得たるこそ見所もありけれ、(七)うるはしき(八)紙屋紙、陸奥紙などの(九)ふくだめるに、ふることどもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、(一〇)せめてながめ給ふ折折は、ひきひろげ給ふ。今の世の人の爲める、經うち讀み(一一)行ひなどいふことはいと恥かしくし給ひて、見奉る人もなけれど、數珠など取り寄せ給はず。かやうに(一二)うるはしくぞ物し給ひける。

侍從などいひし御乳母子のみこそ、(一三)年頃あくがれ出でぬ者にて侍ひつれど、通ひ參りし(一四)齋院亡せ給ひなどして、いと堪へ難く心ぼそきに、(一五)この姫君の母北の方の同胞、世におちぶれて、(一六)受領の北の方になり給へるありけり。(一七)女どもかしづきて、

(一)末摘は育てられた親の趣意を守りて
(二)憚るべき
(三)交際すべき所にもよりつかず
(四)皆古き物語の名、かぐや姫の物語は竹取物語
(五)玩弄物
(六)撰集の歌こそ面白味もあれ
(七)きまり切つたる
(八)薄墨色の紙
(九)古くなりてふくれたる册子に書ける誰も知りたる歌は面白くもなきを
(一〇)ひどく屈託する時は
(一一)佛前の勤
(一二)行儀よく
㊁心卑しき叔母、末摘花を召使はんとす
(一三)居附きの家來で
(一四)侍從が齋院に出入せる事奏卷にあり
(一五)末摘花
(一六)國守の妻、末摘の叔母也
(一七)叔母が己が娘を大事にして

軒を爭ひて生ひのぼる。葎は西東の御門を(一)閉ぢ籠めたるぞ賴もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を、馬牛などの踏みならしたる(二)路にて、春夏になれば、(三)放ち飼ふ總角の心さへぞめざましき。八月野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりしなどは、骨のみ僅に殘りて、(四)立ちとまる下司だになし。(五)煙絶えて、哀にいみじき事多かり。盗人などいふ(六)ひたぶる心ある者も、(七)思ひやりの淋しければにや、この宮をば不益のものに踏み過ぎて寄り來ざりければ、斯くいみじき野ら藪なれども、さすがに寢殿の内ばかりは、(八)ありし御しつらひ變らず。つやゝかに搔い掃きなどする人もなし。塵は積れども、(九)紛るゝことなき麗しき御住居にて、明し暮し給ふ。(一〇)はかなき古歌物語などやうの(一一)すさびごとにてこそ、徒然をも紛らはし、かゝる住居をも思ひ慰むるわざなンめれ、(一二)さやうの事にも心遲く物し給ふ。わざと好ましからねど、おのづから又急ぐ事なきほどは、同じ心なる文通はしなどもうちしてこそ、(一三)若き人は木草につけても心を慰め給ふべけれ

(一)締りよくて頼もしけれど
(二)路にして
(三)此處に馬牛を牧する童子もけしからず
(四)辛抱して居る僕婢
(五)三度の食乏しく
(六)狼藉者も
(七)此邸は寂しく思はるる故か入りても益なしと除物にして
(八)昔の装飾
(九)亂るゝ事なき
(一〇)通常の人は
(一一)慰み
(一二)末摘花は其様な事にも趣味を持たず
(一三)通常の人ならば假令本來は手紙かくが嫌にもせよ筆にまかせて同情ある手紙を取遣してこそ



舊き住處と思ふに、慰みてこそあれ」と、打泣きつゝ、(一)思ほしもかけず。御調度どもも、いと(二)古代になれたるが、昔やうにて麗しきを、(三)なま物の故知らむと思へる人、さるもの要じて、(四)わざとその人かの人にせさせ給へると尋ね聞きて案内するも、おのづからかゝる貧しきあたりと思ひ侮りて言ひくるを、例の女ばら、「如何はせむ。其こそは世の常の事」とて、(五)取り紛らはしつゝ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを、いみじう諫め給ひて、末摘「(六)見よと思ひ給ひてこそ、爲置かせ給ひけめ。などてか輕々しき人の家の飾とはなさむ。亡き人の御本意違はむが、哀なること」と宣ひて、然るわざはせさせ給はず。はかなき事にても、見訪ひ聞ゆる人はなき御身なり。たゞ御兄の禪師の君ばかりぞ、稀にも京に出で給ふ時はさし覗き給へど、それも(七)世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、(八)たづきなく、この世を離れたる聖にものし給ひて、(九)茂き草、蓬をだに、かき拂はむものとも思ひ寄り給はず。(一〇)かゝる儘に、淺茅は庭の面も見えず繁り、蓬は

(一)引移る事は思も寄らず
(二)持古したるが
(三)故實をひねくりたがる人が其樣な物をほしがりて
(四)何といふ名人に注文して造らせた品なりなど聞きて買ひたしと申込むも貧家と侮りての事なるを
(五)取計らひて
(六)我に用ひよとて父の造り置かれしならん
(七)地位のなき
(八)便なく
(九)末摘花の邸内の
(一〇)邸内の荒れたる樣

(一)來仕へ居し女等も役に立つ者は段々散り行く
(二)死ぬ者
(三)前には多き人の氣に壓されて隠れ居しが
(四)人少き故跋扈して
(五)是ではたまらぬ
(六)國守
(七)庭木を目がけて
(八)賣らぬかと縁を求めて申込むから
(九)引移り給へ
(一〇)暇を取らずに辛抱して居る我々も
(一一)人の手前もある
(一二)自分が生きて居る間はそんな思ひ切つた事は出來ぬ

を、なか〳〵少し世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ歎くべし。(一)少しも然てありぬべき人々は、おのづから參りつきておりしを、皆つぎ〳〵に隨ひて往き散りぬ。女ばらの(二)命堪へぬもありて、月日に隨ひて、上下の人數少くなりゆく。もとより荒れたりし宮の中、いとゞ狐の住處になりて、疎ましうけ遠き木立に、梟の聲を朝夕に耳ならしつゝ、(三)人げにこそ、さやうの物もせかれて影隠しけれ、木精など、けしからぬ物ども(四)所を得て、やう〳〵形を顯し、物わびしき事のみ數知らぬに、まれ〳〵殘りて侍ふ人は、(五)「なほいとわりなし。この頃(六)受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の(七)木立を心につけて、(八)放ち賜はせてむやと、ほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせ給ひて、いと斯う物怖ろしからぬ御住居に、(九)思し移ろはなむ。(一〇)立ちとまり侍ふ人も、いと堪へ難し」など聞ゆれど。末摘「あないみじや。(一一)人の聞き思はむこともあり。(一二)生ける世に、しか名殘なきわざは如何せむ。かく怖ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する

君は、父親王の亡せ給ひにし名殘に、(一)また思ひあつかふ人もなき御身にて、いみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御事の出で來て、(二)訪ひ聞え給ふ事絶えざりしを、(三)嚴しき御勢にこそ、事にもあらず、はかなき程の御情ばかりと思したりしかど、(四)待受け給ふ御袂の狹きには、大空の星の光を盥の水にうつしたる心地して、過し給ひし程に、(五)かゝる世のさわぎ出來て、(六)なべての世憂く思し亂れしまぎれに、(七)わざと深からぬかたの志は、うち忘れたる樣にて、遠くおはしましにし後、(八)ふりはへてしもえ尋ね聞え給はず。(九)その名殘に、暫しは泣く〳〵も過し給ひしを、年月經るまゝに、哀に淋しき御有樣なり。古き女ばらなどは、「いでや、いと口惜しき(一〇)御宿世なりけり。覺えず神佛の顯れ給へらむやうなりし(一一)御心ばへに、(一二)斯かるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見奉りしを、(一三)大方の世の事とはいひながら、(一四)また頼むかたなき御有樣こそ悲しけれ」と、つぶやき歎く。(一五)さる方にありつきたりしあなたの年頃は、いふかひなき淋しさに目なれて過し給ひし

(一)外に世話する人なき
(二)源の音問
(三)源方にてこそ保護を與ふる事を何でもなく一寸した心附け位に思へど
(四)受ける方の貧しき身にとりては
(五)須磨に退去の事
(六)源が
(七)源の方で思ひ込んで居ぬ女の事は忘れし如く
(八)わざ〳〵は尋ねられず
(九)源の保護の名殘に
(一〇)恒の御運
(一一)源の御親切を見て
(一二)人には斯樣なよい便も出來るもの故
(一三)源の退居は萬人の想なれども
(一四)外に便なき末摘の身
(一五)貧困に馴れし昔は寂しきも平氣なりしが、此頃少し人がましき生活に馴れし故

蓬生

梗概

㊀源氏須磨謫居中の末摘花の侘住居。舊きを守る末摘花。㊁心卑しき叔母。末摘花を召使はんとす。末摘花の拒絶。㊂叔母筑紫に下らんとして末摘花を誘ふ。聽かれずして末摘花の侍女侍從を伴ひ去る。末摘花、侍從に別を惜む。㊃源氏花散里を訪はんとして常陸宮を過り、末摘花を訪ふ。㊄源氏の扶助によりて再び世に出でたる末摘花。

㊀源氏須磨謫居中の末摘花の侘住居

（一）源氏須磨に在りし頃

（二）それでも別に力になる人を持てる女は只戀愛につきての悲のみにて濟みたり

（三）紫上も不足なき自分故ゆつくりしたものて

（四）源の處へ音信し

（五）免官後の衣裳の世話をもし、憂をも慰めて心を晴らす事もありしならん、「竹の子の」は序詞

（六）人らしくも思はれず隨て源退去の事をも只傳聞のみしたる人々の中に

（七）末摘花

（一）藻鹽たれつゝ侘び給ひし頃ほひ、都にも、さま〴〵思し歎く人多かりしを、（二）さても我御身のより所あるは、一方の思こそ苦しげなりしか、（三）二條の上などものどやかにて、（四）旅の御住處をも、おほつかなからず聞え通ひ給ひつゝ、（五）位を去り給へるかりの御よそひをも、竹の子のよの憂きふしを、時々につけてあつかひ聞え給ふに、慰め給ふこともありけむ。なか〳〵（六）その數とも人にも知られず、立ち別れ給ひし程の御有樣をも餘所の事に思ひやり給ふ人々の、下の心碎き給ふ類多かり。（七）常陸宮の

みおはしませば、参り(一)などし給ひても、心やすく侍ひ給ふこともかたきを、少し(二)おとなびて、添ひ侍はむ御後見は、必ずあるべき事なりけり。

(一)参内しても冷泉の側に侍する事も成難ければ
(二)年長の附添人は必要なり

とざまかうざまに思ひ給へ殘す事なきに、斯くまでさばかりの心構もまねび侍るに、(一)世の人やいかにとこそ憚り侍れ」など聞え給ひて、後には、げに知らぬやう(二)にて此所に渡し奉りてむ、と思す。女君(三)にも、源「然なむ思ふ。(四)語らひ聞えて過い給はむに、(五)いとよき程なるあはひならむ」と、聞え知らせ給へば、嬉しき事に思して、御わたり(六)の事を急ぎ給ふ。入道の宮(七)は、兵部卿宮の姫君(八)を、いつしかと(九)かしづき騒ぎ給ふめるを、大臣(一〇)のひまある御中にて、いかゞもてなし給はむと、心苦しくおぼす。(一一)權中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞ゆ。(一二)おほい殿の御子にて、いと裝ほしうもてかしづき給ふ。上もよき御遊びがたきに思いたり。(一三)藤壺「宮の中の君も同じ程におはすれば、うたて雛遊の心地すべきを、(一四)おとなしき御後見は、いと嬉しかるべき事と思し宣ひて、さる御氣色聞え給ひつゝ、(一五)大臣のよろづに思し至らぬことなく、公方の御後見は更にもいはず、明暮につけて、細なる御心ばへの、いと哀に見えたまふを、頼もしきものに思ひ聞え給ひて、(一六)いとあつしくの

(一)此位の腹案を申上げるも色々考へての事なるに、世間で何と思ふか其が心配
(二)知らん顔をして秋好を我二條邸に取引らん
(三)紫上
(四)話相手にして
(五)其方と秋好とは丁度よき相手
(六)紫が秋好引取の用意を急ぐ
(七)藤壺
(八)紫の異腹の妹
(九)早く冷泉に奉らんと
(一〇)源は兵部卿と中惡しき故、之を如何に遇するならんと
(一一)頭中將
(一二)祖父太政大臣の養子にして
(一三)紫の異腹の妹、冷泉と同年輩なれば
(一四)年長の付添人、秋好をさす
(一五)源氏
(一六)藤壺自身は病身なれば

にまかせて、然るまじき名をも流し、憂きものに思ひおかれ侍りにしをなむ世にいとほしう思ひ給ふる。この世にて、その怨の心とけず過ぎ(一)侍りにしを、今はとなりての際に、この齋宮の御事をなむ物(二)せられしかば、(三)さも聞き置き、心にも殘すまじうこそは、さすがに見置き給ひけめと思ひ給ふるにも、忍びがたう、(四)大方の世につけてだに、心苦しきことは見聞き過されぬわざに侍るを、(五)いかでなきかげにても彼の恨忘るばかり、と思ひ給ふるを、(六)内裏にも、さこそ大人びさせ給ひたれど、幼き御齡におはしますを、(七)少し物の心知れる人は侍はれてもよくや、と思ひ給ふるを、(八)御定になむ」と聞え給へば、藤壺「いと善う思し寄りけるを、(九)院にも思さむことは、げに辱う、いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて、知らず顏に參らせ奉り給へかし。今はた、(一〇)さやうの事わざとも思しとゞめず、御行ひがちになり給ひて、かう聞え給ふを、深うしも思し咎めじと思ひ給ふる」源「さらば(一一)御氣色ありて、數まへさせ給はば、催しばかりの言を添ふるになし侍らむ。

(一)御息所が死に
(二)私に賴みし故
(三)其を聽き置きて一生懸命に世話するならんと御息所が源を當にして居しならんと思へば棄て置かれず
(四)無關係の者に對しても、氣の毒な事は棄て置くべきでは無いに
(五)御息所が死後に恨の晴れる位にしてやりたし
(六)冷泉も
(七)辨へある女を側に置かれて然るべし、秋好は十九歲位也
(八)御判斷に從ふべし
(九)朱雀の御志を無にするは氣毒なれど、御息所の遺言にかこつけて知らぬ顏して冷泉に奉り給へ
(一〇)朱雀は女の事は氣にせず佛いぢりのみして居る故遺言を口實にしたらば別段腹も立たれまじ
(一一)朱雀より秋好を召されたらば私も口を添へる位の事にして置くべし

（一）源の如き立派な人につまらぬ噂を聞かれたくないと
（二）一寸とした情らしき取りなしもせず
（三）朱雀院
（四）伊勢下りの暇乞の時に見たる秋好の美貌を
（五）秋好を入内させて
（六）朱雀の姉妹の齋院、朝顔とは別人
（七）朱雀の
（八）御息所の心、確な後見も無いに歴々の中へ交る事は然るべからず
（九）朱雀が病身にて秋好が直に寡婦になるべき恐もあり、其樣なれば又心配の種
（一〇）朱雀の妃になるには誰も後見をする者なし
（一一）我方へ上れと
（一二）源氏
（一三）朱雀の希望あるに横取するは失禮
（一四）秋好
（一五）手放すは殘念
（一六）私のつまらぬ好色心から惡き噂の種を蒔き御息所につらく思はれしを氣の毒に思ひ居る

に任せたること、引き出し仕う奉るな」など、親がり申し給へば、（一）いと恥かしき御ありさまに、便なき事聞し召しつけられじと言ひ思ひつゝ、（二）はかなきことの情も更につくらず。（三）院にも、（四）かの下り給ひし日、大極殿のいつくしかりし儀式に、ゆゝしきまで見え給ひし御容貌を、忘れ難う思し置きければ、朱「（五）参り給ひて、（六）齋院など、（七）御兄弟の宮々おはします類にて、さぶらひ給へ」と、御息所にも聞え給ひにき。されど、やむごとなき人々侍ひ給ふに、（八）かず〲なる御後見もなくてやと思しつゝみて、（九）上はいとあつしうおはしますも怖ろしう、また物思ひやくはへむと、憚りて過し給ひしを、（一〇）今はまして誰かは仕う奉らむと、人々思ひたるを、懇に院には（一一）思し宣はせけり。（一二）大臣聞き給ひて、（一三）院より御氣色あらむを、ひき違へ横取り給はむを、かたじけなき事と思すに、（一四）人の御有様のいとらうたげに、（一五）見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞え給ひける。源「斯う〱の事をなむ思ひ給へ煩ふに、母御息所いと重々しく心深きさまに物し侍りしを、（一六）あぢきなきすき心

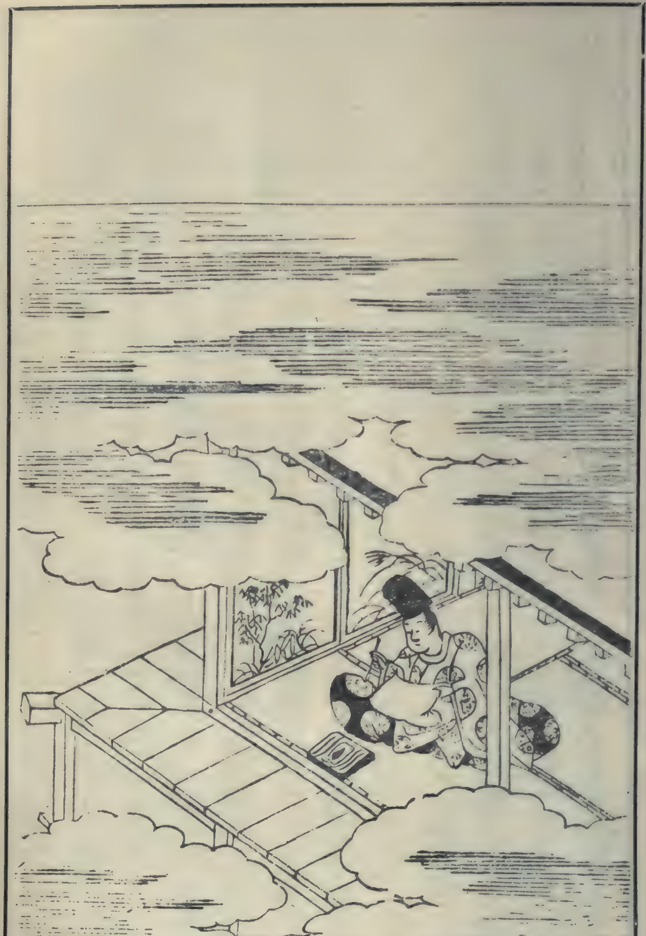
どにて、心ばせある人々多かるべし、(一)この人知れず思ふ方のまじらひをせさせ奉らむに、人に劣り給ふまじかゝめり、いかでさやかに御容貌を見てしがな、と思すも、(二)うちとくべき御親心にはあらずやありけむ、(三)我が御心も定め難ければ、斯く思ふといふことも、人にも漏し給はず。(四)御わざなどの御事も、とりわきてせさせ給へば、ありがたき御心を、宮人も喜びあへり。

はかなく過ぐる月日にそへて、(五)いとゞさびしく、心細き事のみまさるに、侍ふ人も、やう〱散れ行きなどして、(六)下つ方の京極わたりなれば、人げ遠く、山寺の入相の聲々にそへても、(七)音泣がちにてぞ過し給ふ。同じき御親と聞えし中にも、(八)片時のまも立ち離れ奉り給はでならはし奉り給ひて、齋宮にも親そひて下り給ふことは、例なきことなるを、あながちに誘ひ聞え給ひし御心に、(九)限ある道にては、たぐひ聞え給はずなりにしを、(一〇)ひる世なう思し歎きたり。(一一)侍ふ人々につけて、心かけ聞え給ふ人、貴きも賤しきもあまたあり。されど(一二)大臣の、御乳母たちに、(一三)「心

(一)秋好を入内させて女御達の中に置きても
(二)秋好が打解けてもよい程親としての源の心が固まつても居ぬのであらう
(三)我ながらどう氣が變るかも知れぬので
(四)御息所の法事をも特別に源が世話やく故
⓬ 源氏秋好を冷泉に奉らんとす
(五)秋好の六條邸が
(六)六條邸は下京の京極邊
(七)秋好が
(八)御息所は秋好に
(九)死別に臨みては一緒に行く事も出來ざりしを
(一〇)涙の乾く時なく
(一一)侍女を介して秋好に言ひ寄る人
(一二)源が
(一三)勝手に取持などしてはならぬ

つゝましげなる書き様にて、いとおほどかに、御手勝れてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。(一)下り給ひし程より、なほあらず思したりしを、今は心にかけて兎も角も聞え寄りぬべきぞかしと思すには、(二)例のひきかへし、(三)いとほしうこそ、故御息所の、いと後めたげに心おき給ひしを、(四)理なれど、世の中の人もさやうに思ひよりぬべき事なるを、(五)ひきたがへ心清くてあつかひ聞えむ、(六)上の今少し物思し知る齢にならせ給ひなば、內裏住せさせ奉りて、(七)さうぐしきに、かしづきぐさにこそ、と思しなる。いとまめやかに懇に聞え給ひて、さるべき折折は渡り(八)などし給ふ。源「かたじけなくとも、(九)昔の御名殘に思しなずらへて氣遠からずもてなさせ給はゞなむ、本意なる心地すべき」など聞え給へど、(一〇)わりなく物恥をし給ふ、奥まりたる人ざまにて、ほのかにも(一一)御聲など聞かせ奉らむは、いと世になく珍かなることと思したれば、(一二)人々も聞えわづらひて、かゝる御心ざまを憂へ聞えあへり。(一三)女別當內侍などいふ人々、(一四)あるは離れたてまつらぬ王家筋な

(一)源の心、齋宮が伊勢へ下る時分から、只置くは惜いものと思ひ居しに、今は言寄れば言寄れるのぢや
(二)又思ひ返して
(三)源の心、口說くは氣の毒也
(四)御息所の趣意も尤なれど、世人も今は秋好は源の持物と思ふべし
(五)其をはづして奇麗に只世話だけをしてやらん
(六)冷泉が物心づく頃にならば秋好を妃にして
(七)自分も子が少く寂しければ、此人を世話して獻まん
(八)秋好の方へ
(九)私を御息所の代りと思ひて親しくして貰へば本懷なり
(一〇)秋好が
(一一)聲を源に聞かせるのも以ての外と
(一二)側の人々も持餘して
(一三)源の心、秋好方に仕ふる官女
(一四)親族に當る王孫



御精進にて、御簾おろし込めて行はせ給ふ。(一)宮には、常にとぶらひ聞え給ふ。(二)ややうやう御心しづまり給ひては、みづからも御返など聞え給ふ。(三)つゝましう思したれど、御乳母など、(四)「かたじけなし」と、そゝのかし聞ゆるなりけり。雪みぞれかき亂れ荒るゝ日、いかに宮の御ありさま、かすかに眺め給ふらむ、と思ひやり聞え給ひて、御使奉れ給へり。

源　たゞ今の空を、いかに御覽ずらむ。

(五)降りみだれひまなき空に亡きひとの天翔るらむ宿ぞかなしき

空色の紙の曇らはしきに書い給へり。(六)わかき人の御目にとゞまるばかりと、心してつくろひ給へる、いと目もあやなり。宮はいと聞えにくゝし給へど、(七)これかれ、「人傳にては、便なきこと」と責め聞ゆれば、(八)鈍色の紙の、いとかうばしう艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

齋宮　(九)消えがてにふるぞ悲しきかきくらし我身それとも思ほえぬ世に

(一)齋宮に源が
(二)齋宮が
(三)齋宮は源に自ら返事する事を憚れども
(四)自ら返事せねば失禮なり
(五)斯る日は故人の靈が君のあたりに來て居るならんと思へば悲し
(六)齋宮の心を惹く樣にと注意せる
(七)御側の人々
(八)香をたきしめて
(九)悲に心くらみて身もよもあられぬに猶死にもせぬ我身がつらし。ふる―經る、降る

睦び思すもをさ〳〵なきを、(一)上の同じ御子達のうちに、數まへ聞え給ひしかば、さこそは頼み聞え侍らめ。(二)少しおとなしき程になりぬる齢ながら、あつかふ人もなければ、さう〴〵しきを」など聞えて、歸り給ひぬ。(三)御とぶらひ今少したちまさりて、しば〳〵聞え給ふ。

七八日ありて(四)亡せ給ひにけり。(五)あへなう思さるゝに、世もいとはかなくて、物心ぼそう思されて、內裏へも參り給はず、(六)とかくの御事などおきてさせ給ふ。(七)又頼もしき人もことにおはせざりけり。ふるき齋宮の宮司など、仕う奉り馴れたるぞ、僅に事ども定めける。(八)御みづからも渡り給へり。(九)宮に御消息聞え給ふ。齋「何事も覺え侍らでなむ」と、女別當して(一〇)聞え給へり。(一一)源「聞えさせ宣ひ置きし事ども侍りしを、今は隔なきさまに思されば、嬉しくなむ」と聞え給ひて、人々召し出でて、(一二)あるべき事ども仰せ給ふ。いと頼もしげに、(一三)年頃の御心ばへ、とりかへしつべう見ゆ。いといかめしう、(一四)殿の人々數もなう仕う奉らせ給へり。(一五)哀にうちながめつゝ、

(一)桐壺が齋宮を我子の樣に思ひし故、我も齋宮を兄弟と思はん
(二)自分も年輩になりたれども、手にかけて育つべき目下の者のなきが寂しければ
(三)源が前よりは繁く見舞ふ
㊉御息所逝去、源氏秋好の世話をやく
(四)御息所が
(五)源があつけなく思ふ
(六)源が葬式杯の世話をやく
(七)外に力になる人もなし
(八)源自身も
(九)齋宮に源が
(一〇)齋宮が返事したり
(一一)御息所の遺言もあれば、今後は我を力にして貰ひたし
(一二)萬事を指圖す
(一三)今までのつらさも帳消しになりそうに見ゆ
(一四)源方の人々多く來て世話す
(一五)源も

かにそぎて、寄り居給へる、絵に畫きたらむ樣して、いみじう哀なり。帳の東面に添ひ臥し給へるぞ、(一)宮ならむかし。御几帳のしどけなく(二)引き遣られたるより、御目とゞめて見通し給へれば、頰杖つきて、いと物悲しと思いたる樣なり。僅なれど、いと美しげならむと見ゆ。御髮のかゝりたる程、頭つきけはひ、あてに氣高きものから、(三)ひぢょかに愛敬づき給へるけはひ著く見え給へば、心もとなくゆかしきにも、(四)さばかり宣ふものをと思しかへす。御息所「いと苦しさ增り侍る。(五)かたじけなきを、はや渡らせ給ひね」とて、人にかき臥せられ給ふ。源「近く參りたるしるしに、よろしう思されば嬉しかるべきを、心苦しきわざかな。いかに思さるゝぞ」とて、(六)覗き給ふ氣色なれば、御息所「いと(七)恐しげに侍るや。みだり心地のいとかく限なる折しも渡らせ給へるは、まことに淺からずなむ。思ひ侍る事を少しも聞えさせつれば、(八)さりともと賴もしくなむ」など聞えさせ給ふ。源「(九)かゝる御遺言のつらに思しけるも、いとゞ哀になむ。(一〇)故院の御子達、數多ものし給へど、親しく

(一)前齋宮秋好
(二)引退けられたる隙間
(三)押れ親むべくの意歟
(四)母親が彼程氣遣に思ひ居るのに手も出せぬと
(五)無禮になる故歸って貰ひたし
(六)快い方ならば
(七)恐い程に衰へたり
(八)死んでも安心
(九)我を遺言聞くべき人の一人と思はれたるも
(一〇)桐壺

入りつゝ泣き給ふ。源「(一)かゝる御事なくてだに、思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひては、何事も後見聞えむとなむ思ひ給ふる。更に後めたくな思ひ聞え給ひそ」など聞え給へば、御息所「いと難きこと。(二)まことにうち頼むべき親などにて見譲る人だに、女親に離れぬるは、いと哀なることにこそ侍るめれ。(三)まして思ほし人めかさむにつけても、味氣なき方やうちまじり、人に心も置かれ給はむ。(四)うたてある思遣りごとなれど、(五)かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。(六)憂き身をつみ侍るにも、女は思の外にて物思ひを添ふるものになむ侍りければ、(七)いかで然る方をもて離れて見奉らむ、と思ひ給ふる」など聞え給へば、(八)あいなくも宣ふかなと思せど、源「(九)年頃よろづ思ひ給へ知りにたるものを、昔の好心の名殘あり顔に宣ひなすも本意なくなむ。よしおのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油の、ほのかに物より(一〇)通りて見ゆるを、(一一)もしやと覺えて、やをら御几帳のほころびより見給へば、(一二)心もとなき程の火影に、(一三)(一四)御髪いとをかしげに花や

(一)御頼みなくても構はぬ筈はないが
(二)當然力になるべき親に頼み置いてさへ女親亡き後はみじめな者
(三)況や他人なれば源が情人扱にするにしても面白からぬ事情生じ邪魔にされるであらう
(四)嫌な案じ事なれど
(五)必ず色戀の沙汰にならぬ樣に頼む
(六)我が嫌な經驗から見ても
(七)男には關係させずに置きたし
(八)不躾な事をいふと
(九)私も近頃は其邊もよく心得て居るに、相變らずの浮氣者の樣に思召すは不本意也、自然お解りになるべし
(一〇)透き通りて
(一一)若し秋好が見ゆるかと
(一二)薄暗き
(一三)御息所の樣
(一四)髪先を剪揃へたる姿派手やかにて脇息に懸れる體

づき給へること古りがたくて、よき女房など多く、好いたる人の集ひ所にて、物淋しきやうなれど、心やれる(一)さまにて經給ふ程に、俄に重く煩ひ(二)給ひて、物のいと心細く思されければ、罪深き(三)所に年頃經つるも、いみじう思して、尼になり給ひぬ。大臣聞き給ひて、かけ〴〵(五)しき筋にはあらねど、なほさるかたの物をも聞え合せ人(四)に思ひ聞えつるを、斯く思しなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚きながら渡り給へり。飽かず哀なる御とぶらひ聞え給ふ。近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかゝりて、御返など聞え給ふ。いたう弱り給へるけはひなれば、絶え(七)ぬ(六)志の程は見え奉らでやと、口惜しうていみじう泣い給ふ。かくまでも思しとゞめたりけるを、女も萬に哀に思して、齋宮の御事をぞ聞え給ふ。(八)御息所「心(九)細くてとまり給はむを、必ず事に觸れて數まへ聞えたまへ。また見譲る(一〇)人もなく、類なき御有樣になむ。かひなき(一一)身ながらも、今暫し世の中を思ひのどむる程は、とざまかうざまに物を思し知るまで、見奉らむとこそ思ひ給ひつれ」とても、消え

(一)得意らしき樣子にて
(二)御息所が
(三)佛を嫌ふ神宮
(四)源氏
(五)色戀でなく何ぞの相談相手に思ひ居たるに、出家したのが殘念
(六)御息所が
(七)源の心、今も御息所を疎末に思はぬ我志を當人に認めさせる事は出來ぬかも知れぬと
(八)源が自身見舞ふ位氣にかけて居るのを
(九)吾死後娘が心細がるべければ、何ぞの折には力になつて下され
(一〇)世話を頼むべき
(一一)生甲斐なき我ながら安心が出來る迄、娘に分別が出る迄生きて居る積であつた

(一)源より明石へ
(二)近き内に明石上を引取るべき
(三)明石上の心はるゝ樣なれど
(四)我を人間らしく取扱
(五)どんな物かしら
(六)故鄉を離れて取著き所なく心細き
(七)手放してやるは心配
(八)今迄未定まらずに過來し今迄よりも氣が揉め
(九)萬事につけて憚る處多く上京と決心し兼ぬる趣
❾明石上より返事
源氏六條御息所の病を訪ひて秋好を托せらる
(一〇)齋宮は天子一代毎に替る間なれば、秋好が齋宮を免ぜられし也
(一一)六條に上京
(一二)源が世話する事は
(一三)昔さへつれなかりしなれば、今舊情を溫めても碌な事はあるまじければ關係せじと御息所が思ひ切り居る故
(一四)源が訪ひ行く事
(一五)源から言寄るにしても源自身どう氣が變るか分らず、又今は身分重く出歩きも手重ければ旁源も强ひて口說き寄らず
(一六)成人してどの樣になつたらうと床しがる
(一七)御息所の優雅なるは依然たるもので

思ひ歎く。今や京におはし著くらむと思ふ日數も經ず(一)御使あり。(二)この頃の程に迎へむことをぞ宣へる。(三)(四)いと賴もしげに、かずまへ宣ふめれど、(五)いさやまた、(六)島漕ぎ離れ、中ぞらに心ぼそき事やあらむ、と思ひわづらふ。入道も、(七)さて出し放たむはいと後めたう、さりとて、斯く埋もれて過さむを思はむも、なかなか(八)來しかたの年頃よりも、心づくしなり。(九)萬につゝましう、思ひ立ち難きことを聞ゆ。

まことや、(一〇)かの齋宮もかはり給ひにしかば、(一一)御息所上り給ひて後、かはらぬ樣に、(一二)何事もとぶらひ聞え給ふことは、あり難きまで情を盡し給へど、(一三)昔だにつれなかりし御心ばへの、なかなかならむ名殘は見じ、と思ひ放ち給へれば、(一四)渡り給ひなどする事は殊になし。(一五)あながちに聞えうごかし給ひても、我心ながら知り難く、とかくかゝづらはむ御步行なども、所狹う思しなりにたれば、强ひたる樣にもおはせず。齋宮をぞ(一六)如何にねびなり給ひぬらむと、ゆかしう思ひ聞え給ふ。なほ彼の六條の舊宮を、いと能く修理し繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひけり。(一七)由

（一）人數ならぬ我は何事にも甲斐なきみなるに、なぜ源の如き高貴の人を戀ひ初めたのであらう、なにはー何は、難波
（二）明石上が
（三）祓に用ひたる木綿につけて此歌を源に奉る
（四）明石上に逢ひたく
（五）今日の悲しさは昔の落魄時代に似たり、田蓑といふ名はあれども此涙の雨を防ぐに由なし
（六）明石上の事が
（七）遊女
（八）源の心
（九）相手の人柄による事也
（一〇）何方でもよい事でも輕薄なものは好ましからぬに
（一一）遊女等が得意げに
（一二）明石上は源をやり過して、翌日よき日なれば
（一三）源の有樣を見たるによりて

明石　（一）數ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ

（二）田蓑島に御禊仕う奉る、祓のものにつけて奉る。（三）日暮がたになりゆく。夕潮滿ち來て、入江の鶴も聲をしまぬほどの哀なる折からなればにや、人目もつゝまずあ（四）ひ見まほしくさへ思さる。

源　（五）つゆけさのむかしに似たる旅衣たみのの島の名にはかくれず

道のまゝに、かひある逍遙遊びのゝしり給へど、（六）御心にはなほかゝりて思しやる。（七）あそびどもの集ひ參れるも、上達部と聞ゆれど、若やかに事好しげなるは、皆目とゞめ給ふべかゝめり。されど、（八）いでやをかしきことも物の哀も、（九）人がらこそあゝべけれ、（一〇）なのめなる事をだに、少しあはき方によりぬるは、心とゞむる便もなきものをと思すに、（一一）おのが心をやりて、由めきあへるも疎ましう思しけり。

（一二）かの人は過し聞えて、又の日ぞよろしかりければ、御幣奉り、程につけたる願どもなど、かつ〲果しける。（一三）またなか〱物思ひそはりて、明暮口惜しき身を



源「あらかりし浪のまよひに住吉の神をばかけてわすれやはする
驗あり(一)な」と宣ふもいとめでたし。かの明石の船、この響におされて、過ぎぬる
事も聞(二)ゆれば、(三)知らざりけるよと哀におぼす。(四)神の御しるべ思し出づるも疎なら
ねば、いさゝかなる御消息をだにして心慰めばや、(五)なか〳〵に思ふらむかし、と
思す。御社たち給ひて、所々に逍遙をつくし給ふ。難波の御祓など、殊に(六)七瀨に
よそほしう仕う奉る。堀江のわたりを御覽じて、(七)「今はた同じ難波なる」と、御心
にもあらでうち誦じ給へるを、御車のもと近き惟光、(八)承りやしつらむ、さる(九)召
しもやと、例にならひて懐に設けたる、柄短き筆など、御車とゞむる所にて奉れ
り。をかしとおぼして、疊紙に、

源(一〇)みをつくし戀ふるしるしにこゝまでも廻り逢ひけるえには深しな

とて賜へれば、(一一)かしこの心知れる下人してやりけり。(一二)駒並べてうち過ぎ給ふにも、
心のみ動くに、(一三)露ばかりなれど、いと哀にかたじけなく覺えて、打泣きぬ。

(一)須磨にての厄難を思へば住吉の神恩は永く忘れざるべし
(二)源の耳に入りたれば
(三)我は少も知らざりしよと
(四)源の心、明石に渡りしも皆住吉の神の導なりと思へば、明石上を疎略には思はれず
(五)なまじ落合ひて便もせず別れたらば却て恐しかるべし
(六)祓の式を行ふ處七箇所ある也
(七)「侘びぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はんとぞ思ふ」
(八)聞き附けしと見えて
(九)斯る御用もあらんかと
(一〇)甚ひあふ驗ありて此處で落合ふといふは縁の深い事ぢや、みをつくし—身を盡し、澪標、えに—縁、江
(一一)明石上方の樣子を心得たる
(一二)源が歸り行く姿を見て明石上が氣がもめる
(一三)一寸の事なれど源が手紙を遣したる志を有難く思ひて

(一)揃ふ樣に調べて
(二)一人々々樣をかへて著飾らせたり
(三)夕霧の樣子及びも無く立派なるにつけても、
(四)我子の人數ならぬを悲む
(五)攝津守
(六)源の接待
(七)外の大臣
(八)明石上は手持無沙汰なれば
(九)此騷ぎの中で
(一〇)神も我に注意もなさるまじ
(一一)中途はんぱなり
(一二)源は明石上の事は丸で知らず
(一三)神事
(一四)願叶はゞ斯く〳〵せんと誓ひし豫期以上の事をして
(一五)惟光如き須磨迄も御伴せし人は
(一六)源が一寸出た處で惟光歌を申上ぐ
(一七)須磨の事を思へば今昔の感に堪へず、まつー先づ、松

添童のほど、皆作り(一)あはせて、様(二)を代へて裝束きわけたり。雲井遙(三)にめでたく見ゆるにつけても、若君の數ならぬさまにて物し給ふをいみじと思ふ。いよ〳〵(四)御社の方を拜み聞ゆ。(五)國の守參りて、(六)御まうけ、(七)例の大臣などの參り給ふよりは、殊に世になく仕う奉れりけむかし。(八)いとはしたなければ、明石「(九)立ちまじり、數ならぬ身の聊の事せむに、神も見入れ數まへ給ふべきにもあらず、歸らむにも中空(一一)なり。今日は難波に船さしとめて、(一〇)祓をだにせむ」とて漕ぎ渡りぬ。(一二)君は夢にも知り給はず、夜一夜いろ〳〵(一三)の事をせさせ給ふ。まことに神の喜び給ふべき事を爲盡して、(一四)來しかたの御願にもうちそへ、あり難きまで遊びのゝしり明し給ふ。(一五)惟光やうの人は、心のうちに神の御德をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに(一六)立ち出で給へるところに侍ひて、聞え出でたり。

　惟光(一七)すみよしのまつこそものは悲しけれかみよの事をかけて思へば

げにと思し出でて、

(一)源の事を常に心にかけて居ながら、なぜ是程の騷を知らずに今日出で來れるならん
(二)黄青色の袍
(三)伊豫介の弟息子、源退去の時「思へばつらし賀茂の瑞籬」の歌よみし人
(四)衛門尉
(五)衛府の次官
(六)赤色は五位の袍
(七)源の見知れる人以前に變りて華麗に
(八)心配無げにて
(九)源の
(一〇)却て氣がもめて
(一一)源融の例に倣ひて
(一二)童の護衛武官
(一三)其童隨身が
(一四)髻
(一五)夕露

身にて、心にかけて覺束なう思ひ聞えつゝ、斯かりける御響をも知らで立出でつらむ、(一)など思ひ續くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なる中に、花紅葉をこき散したると見ゆる、袍衣の濃き薄き數知らず。六位の中にも藏人は青色(二)著く見えて、(三)かの賀茂の瑞籬うらみし右近の丞も、(四)靫負になりて、ことゞゝしげなる隨身具したる藏人なり。良淸も同じ(五)すけにて、人よりことに物思ひなき氣色にて、おどろゝゝしき赤衣(六)姿いと淸げなり。(七)すべて見し人々ひきかへ花やかに、(八)何事思ふらむと見えてうち散りたるに、若やかなる上達部殿上人の、我もゝゝと思ひ挑み、馬鞍などまで飾をとゝのへ磨き給へるは、いみじき見物に田舍人も思へり。(九)御車を遥に見やれば、なかゝゝ(一〇)心やましくして、戀しき御影をもえ見奉らず。(一一)河原の大臣の御例をまねびて、(一二)童隨身を賜はり給ひける、(一三)いとをかしげに裝束き、(一四)みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、長姿とゝのひ美しげにて十人、樣殊に今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限なくかしづき立てて、馬



(一)源は中君の幸運をも望まず取持もせず
(二)兵部卿が困るべし
㊇源氏住吉參詣、明石上同時に參詣す
(三)源が
(四)明石上例年住吉に參詣せしに
(五)お詫と常例の參詣と兼ねて住吉に參れり
(六)大騷ぎにて參詣する源の一行
(七)つまらぬ
(八)明石上の感
(九)日もあるに、丁度源と落合ひて
(一〇)我も萬更他人では無けれど
(一一)つまらぬ下人でも
(一二)今日のお供を光榮に思へるに
(一三)我は何の因果で

名高きを、大臣は(一)、人よりまさり給へとしも思さずなむありける。如何し給はむ(二)とすらむ。

その秋住吉に詣で給ふ(三)。願どもはたし給ふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我も〳〵と仕う奉り給ふ。折しもかの明石の人(四)、年ごとの例の事にて仕う奉るを、去年今年さはる事ありて怠りける(五)かしこまり、取重ねて思ひ立ちけり。船にて詣でたり。岸にさし著くる程見れば、のゝしりて(六)詣で給ふ人のけはひ、渚に滿ちて、いつくしき神寶をもて續けたり。樂人十列など、裝束を整へ容貌を擇びたり。「誰が詣で給へるぞ」と問ふめれば、「内大臣殿の御願はたしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、(七)はかなき程の下司だに心地よげに打笑ふ。げに(八)あさましう、月日もこそあれ(九)、なか〳〵この御有樣を遥に見奉るに、身の程口惜しうおぼゆ。流石に(一〇)かけ離れ奉らぬ宿世ながら、斯く口惜し(一一)き際のものだに、物思ひなげにて、仕う奉るを色ふしに(一二)思ひたるに、何の罪深き(一三)

きならねば、太上天皇になずらへて、御封(一)賜はらせ給ひ、院司(二)どもなりて、様殊にいつくしう、御行(三)功徳のことを、常の御營にておはします。年頃世にはゞ(四)かりて出入もかたく、見奉り給はぬを、いぶせく思しけるに、思す様にて參りまかで給ふも、いとめでたければ、大后(五)は、憂きものは世なりけりと思し歎く。大臣(六)は事に觸れて、いと(七)恥かしげに仕う奉り、心よせ聞え給ふも、なか／＼いとほしげなるを、世の人も安から(八)ず聞えけり。兵部卿親王(九)、年頃の御心ばへ(一〇)のつらく思はずにて、唯世の聞をのみ思し憚り給ひし事を、大臣(一一)は憂きものに思しおきて、昔の樣にも睦び聞え給はず。(一二)なべての世には、普くめでたき御心なれど、この御あたり(一三)は、なか／＼情なきふしも打交ぜ給ふを、入道の宮は、いとほしう本意なき事に見奉り給ふ。世の中の事たゞ、半を別けて、太政大臣(一四)この大臣の御まゝなり。權中納言(一五)の御女、その年の八月(一六)にまるらせ給ふ。祖父大臣(一七)居起ちて、儀式などいとあらまほし。兵部卿(一八)の宮の中の君も、さやうに(一九)心ざしてかしづき給ふ

(一)俸祿
(二)藤壺附の役人任命せられて
(三)佛いぢりを
(四)藤壺が世に憚りて宮中に出入らず冷泉をも見ざりしに、今は參内も自由なるを見て
(五)弘徽殿
(六)源氏
(七)弘徽殿が恥入るに位よく世話を焼き
(八)弘徽殿を謗れり
(九)紫の父
(一〇)源に對する情が冷にて
(一一)源が不快に思ひて
(一二)一般に對しては萬遍なく情をかくれど
(一三)兵部卿には
(一四)葵の父と源と
(一五)頭中將の娘、弘徽殿女御といふ、母左大臣四君
(一六)女御として入内
(一七)太政大臣骨折り
(一八)紫の異腹の妹
(一九)父が入内せしめん希望にて

やうの人集へて、もし思ふ樣にかしづき給ふべき人も出でものし給はば、さる人の後見にもとおぼす。(一)かの院のつくりざま、なか〳〵見所多く今めいたり。由ある受領などを擇りて、(二)あて〳〵に催し給ふ。(三)尚侍の君を、なほえ思ひはなち聞え給はず。(四)こりずまに立ちかへる御心ばへもあれど、女は憂きに懲り給ひて、昔の樣にもあひしらへ聞え給はず。(五)なか〳〵所狹う、さう〴〵しう世の中を思さる。

(六)院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊など、好しげにておはします。女御更衣みな(七)例のごと侍ひ給へど、春宮の御母(八)女御のみぞ、とり立てて時めき給ふこともなく、(九)かんの君の御覺におしけたれ給へりしを、斯くひき違へ(一〇)めでたき御さいはひにて、離れ出でて(一一)宮に添ひ奉り給へる。(一二)この大臣の御宿直所は、昔の淑景舍なり。(一三)梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心よせに、何事をも聞え通ひて、宮をもうしろみ奉り給ふ。(一四)入道后の宮、御位をまた改め給ふべ

(一)二條の東の院
(二)分擔させて工事を急がしむ
(三)朧月夜を源がまだ思ひ切れず
(四)又よりを戻す氣があれど
(五)却て窮屈に物足らず源が思ふ、朧が朱雀と宮に同居せるなるべし
(六)朱雀は氣樂になりて
(七)相變らずなれど
(八)承香殿女御
(九)從來朧月夜に壓倒せられたりしに
(一〇)我子が東宮たるによりて
(一一)東宮の方に居る
(一二)源氏
(一三)淑景舍と梨壺は直隣なれば、近所の好みにて源が春宮の世話を燒く
(一四)藤壺は尼なれば皇太后にする譯にもゆかず

(一)月を源に比したり
(二)末を言はずに呑込んで仕舞ふ
(三)どの女も其々捨て難き處あるかな
(四)人が叩けばとて、無暗に戸をあけて迎へたらば、飛んでもなき人が入込むであらう
(五)口では言へど
(六)花散里が浮氣をするかと疑ふ譯ではなし
(七)源の歸りを
(八)源が仇には思はぬ
(九)訣別の時の源の歌
(一〇)別れをなぜ甚しく悲みしならん
(一一)源が鄙に居ても我如き者は矢張逢はれぬ悲しさは同じなるに
(一二)何處から取出すのか甘い事を言つて源が花散里を慰める
(一三)太宰大貳の娘
(一四)忍びて五節に逢ふ事出來ず
(一五)源を思ひ切り得ぬを、親が異見すれど、緣附を思ひ切り居れり
(一六)憚なく人を置き得る邸が出來たらば五節如き女を置きて、紫等に子が出來たら彼等に世話して貰はんと

花散 水鷄だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月を(一)いれまし

いとなつかしう言ひ消ち(二)給へるぞ、とりどりに(三)捨てがたき世かな、斯かるこそなかなか身も苦しけれ、と思す。

源「(四)おしなべてたゝく水鷄に驚かばうはの空なる月もこそいれ

後めたう」とはなほ言に(五)聞え給へど、(六)あだあだしき筋など、疑しき御心ばへにはあらず。年頃(七)待ち過し聞え給へるも、(八)更におろかには覺えざりけり。(九)「空なながめそ」と、たのめ聞え給ひし折の事ども、宣ひ出でて、花散「などて、類あらじと、いみ(一〇)じう物を思ひ沈みけむ。(一一)憂き身からは同じ歎かしさにこそ」と宣へるも、おいらかにらうたげなり。(一二)例のいづこの御言の葉にかあらむ、盡せずぞ語らひ慰め聞え給ふ。かやうの序にも、(一三)かの五節をおぼし忘れず、また見てしがなと、心にかけ給へれど、(一四)いと難き事にてえ紛れ給はず。女は物思ひ絶えぬを、(一五)親はよろづに思ひ言ふ事もあれど、世に經むことを思ひ絶えたり。(一六)心やすき殿づくりしてば、か

こそ聞き過い給はね」など、恨み聞え給ひて、上包ばかりを見せ奉らせ給ふ。手などのいと故づきて、(一)やむごとなき人苦しげなるを、(二)斯かればなゝめりと思す。斯く(三)この御心とり給ふ程に、花散里を(四)かれはて給ひぬるこそいとほしけれ。公事どもしげく、所せき御身に、(五)思し憚るに添へても、(六)珍しく御目驚く事のなき程、思ひしづめ給ふなりけり。五月雨の徒然なるころ、公私物靜なるに、思し起して渡り(七)給へり。餘所ながらも、旦暮につけてよろづに(八)思しやり訪ひ給ふをたのみにて、過い給ふ所なれば、(九)今めかしう心憎きさまにそばみ恨み聞え給ふべきならねば、心やすげなり。(一〇)年頃にいよ〳〵荒れまさり、凄げにておはす。(一一)女御の君に御物語聞え給ひて、(一二)西の妻戸には夜ふかして立寄り給へり。月おぼろにさし入りて、いとゞ艶なる御ふるまひ、(一三)盡きもせず見え給ふ。(一四)いとゞつゝましけれど、端近う眺め給ひける樣ながら、のどやかにて物し給ふけはひいとめやすし。水鷄のいと近う鳴きたるを、(一五)

(一)貴人と雖も斯程には書きかねる程なるを見て
(二)是だから源の執心もせられるのぢやと
㊆花散里を訪ふ
(三)紫の機嫌を取る中に
(四)凡て無沙汰したるが
(五)出歩きを憚るのみならず
(六)花散里が無事なる女故、安心して無沙汰もして居る也
(七)花散里へ
(八)源が察して世話するを力にて生活する
(九)如何に無沙汰しても口說らしくすね恨む事はせぬ故
(一〇)花散里の住居は
(一一)姉の麗景殿
(一二)花散里の居間
(一三)言ひ盡されず
(一四)花散里が源に對して恥かしけれど
(一五)今迄居たなりにて



(一)此程源に心配さする兒を設けた我身もえらいものぢやと明石上も思ふ樣になれり
(二)明石上と乳母と
(三)乳母
(四)他人は
(五)運惡きは自分計
(六)源の手紙の中に
(七)片田舍に棲む我なれば今日の祝にも訪來る人もなし、いかに—如何に、五十日に
(八)御慰問を力に僅に續きゆく命
(九)吾兒の爲安心のなる樣な御計ありたし
(一〇)源が明石上の返事を
(一一)紫上
(一二)「熊野の浦よりをちに漕ぐ船の我をば餘所に隔てつる哉」
(一三)其樣に腹立つのか
(一四)是は只是だけの事
(一五)須磨や明石の
(一六)聞流しにする事が出來ぬのか

任せて限なく語りつくせば、げにかく思し出づばかりの名殘とゞめたる身もいとたけく、やう〱思ひなりけり。(一)御文諸共に(二)見て心(三)のうちに、あはれ人(四)は、斯うこそ思の外にめでたき宿世はありけれ、(五)うきものは我身にこそありけれ、と思ひつゞけけれど、「乳母の事はいかに」など、(六)細やかに訪はせ給へるもかたじけなく、何事も慰めけり。御返には、

明石(七)かずならぬみ島がくれに鳴く鶴をけふもいかにと訪ふ人ぞなき

萬に思ひ給へむすぼほるゝ有樣を、斯くたまさかの御なぐさめにかけ(八)侍る命のほどもはかなくなむ。(九)げに後やすく思ひ給へ置くわざもがな。

と、まめやかに聞えたり。(一〇)うちかへし見給ひつゝ、源「あはれ」と長やかにひとりごち給ふを、(一一)女君後目に見おこせて、紫「浦よりをちに漕ぐ船の」(一二)と、忍びやかにひとりごちながめ給ふを、源「まことに(一三)斯くまでとりなし給ふよ。(一四)こは唯斯ばかりのあはれぞや。(一五)所の樣などうち思ひやる時々、來しかたのこと忘れ難き獨言を、(一六)よう

(一)源の心づけやる事
(二)實用向の
(三)何時も變化なき田舍では今日の祝日にも何をして平時と區別するならん、あやめ—區別、菖蒲
(四)ぼんやりする程其方の事を心配して居る
(五)都に上れ
(六)來)ても氣遣な事は決してあるまじ
(七)生甲斐あるを喜ぶ嬉し泣する「かひつくる」はべそかく事、源の都上り に入道かひつくりし事前にあり
(八)五十日の祝の用意
(九)闇夜の錦にて榮なく終るべかりし也
(一〇)宣旨の娘
(一一)明石上の氣立に惚れて力にして
(一二)此乳母に劣らぬ侍女を縁を求めて抱へてはあれど老耄れたる奉公人の行處なきが來居る位で
(一三)其に比すれば、乳母は遙に上品で氣位も高し
(一四)賓のある世間咄
(一五)源氏

ず罷り著け」と宣へば、五日に行きつきぬ。(一)思しやることも、有難うめでたき様にて、(二)まめ〳〵しき御とぶらひもあり。

源(三)海松や時ぞともなきかげに居て何のあやめもいかにわくらむ

心のあくがるゝまでなむ。(四)なほ斯くてはえ過すまじきを、思ひ立ち給ひね。(五)さりとも後めたきことはよも。(六)

と書い給へり。入道例の喜び泣きして居たり。かゝるをりは、(七)生けるかひもつくり出でたる、理なりと見ゆ。こゝにも、よろづ所狹きまで思ひ設けたりければ、(八)この御使なくば、(九)闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、(一〇)この女君の哀に思ふやうなるをかたらひ人にて、世の慰にしけり。(一一)をさ〳〵劣らぬ人も、類に觸れて迎へ取りてあらすれど、こよなく衰へたる宮仕人などの、(一二)巖の中尋ぬるが、落ちとまれるなどこそあれ、(一三)これはこよなうこめき思ひあがれり。聞き所ある世の(一四)物語などして、大臣の君の(一五)御有様、世にかしづかれ給へる御覺の程も、女心地に

(一)誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ

いでや、(二)いかでか見え奉らむ。(三)命こそかなひ難かゝべいものなゝめれ。はかなき事にて人に心おかれじと思ふも、(四)たゞひとつ故ぞや」とて、箏の御琴引き寄せて、かき合せすさび給ひて、(五)そゝのかし聞え給へど、(六)かの勝れたりけむもねたきにや、手も觸れ給はず。(七)いとおほどかに、美しうたをやぎ給へるものから、さすがに執念き所つきて、物怨じし給へるが、なか／＼愛敬づきて腹だちなし給ふを、をかしう見所ありと思す。

(八)五月五日ぞ、五十日には當るらむ、と(九)人知れず數へ給ひて、ゆかしう哀におぼしやる。(一〇)何事も、如何にかひある樣にもてなし、嬉しからまし、口惜しのわざや、(一一)然る所にしも、(一二)心苦しきさまにて、(一三)出で來たるよ、と思す。(一四)男君ならましかば、斯うしも御心にかけ給ふまじきを、(一五)かたじけなういとほしう、(一六)わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりける、と思さるゝ。(一七)御使出し立て給ふ。(一八)「必ずその日違へ

(一)我が田舍迄經廻りて苦勞するも誰故ぞ、皆其方故では無いか
(二)どうかして我志を見せたい
(三)長い間には自ら分る事なれど、其迄命が續けばよいが
(四)畢竟其方を思ふ故
(五)箏に彈けと
(六)明石が琴の上手なりといふのが癪に障るのか
(七)紫の性質、大樣にて優しけれど
㊅明石姫君五十日の祝
(八)明石の生兒の
(九)源が
(一〇)源の心
(一一)都にての事ならば
(一二)あんな田舍に
(一三)生れた事よ
(一四)生兒が
(一五)女なる故源が非常に大事にして
(一六)源の心、我が須磨に落魄したるも此子の生るべき爲なりしならんと思ふ
(一七)明石への
(一八)五十日の祝の當日

(一)紫の心
(二)互の心中
(三)明石上の事も源が一時の慰に過ぎぬと考へて悋氣の角も折れる
(四)明石上
(五)尋ねるは
(六)餘り早く話したら
(七)勘違へすべければ
(八)明石上の
(九)明石上が詠みし歌
(一〇)確には見ざれど
(一一)紫の心、我は別離を悲む外他意なかりしに源は一時の慰にもせよ愛を別ちたりと
(一二)源に構はず側を向きて
(一三)源の明石にての「煙は同じ方に靡かん」の歌を語られたれば其詞をとりてよめり、思ふ方に靡くといふ其仲睦じき烟にはあらねど、我こそ烟となりて先に消えて仕舞ひたし

じなどし給ふよ。思へば悲し」とて、果々は涙ぐみ給ふ。(一)年頃飽かず戀しと思ひ聞え給ひし(二)御心の中ども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、(三)萬の事すさびにこそあれと、思ひ消たれ給ふ。源「(四)この人をかうまで思ひやり(五)言とふは、なほ思ふ様の侍るぞ。(六)まだきに聞えば、(七)またひが心得給ふべければ」と宣ひさして、源「(八)人がらのをかしかりしも、所がらにや、珍しう覺えきかし」など語り聞え給ふ。哀なりし夕の煙、(九)いひし事など、(一〇)まほならねど其の夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて心とまれる樣に宣ひ出づるにも、(一一)我はまたなくこそ悲しと思ひ歎きしか、すさびにても心を別け給ひけむよと、たゞならず思ひ續けられて、(一二)我は我とうちそむきながめて、紫「哀なりし世の有樣かな」と、獨言のやうにうち歎きて、

紫 (一三)思ふどち靡くかたにはあらずとも我ぞけぶりにさきだちなまし

源「何とかや。こゝろ憂や。

(一)使を鄭にもてなす
(二)使が早く歸らんと
(三)手紙に書き續けて
(四)私一人では兒の世話が行屆かぬ故、君の十分なる御養育を望み奉る
(五)源が此返事を見て明石の事が氣にかゝり
㊄源氏明石姫君の事を紫上に明す
(六)紫には今迄別段改めて話しもせぬ故、跡で知れてはならぬと思ひて
(七)明石で斯樣々々
(八)物は甘く行かぬものぢや
(九)出來ればよいと思ふ其方の腹には出來ず
(一〇)お負に女兒なれば餘計に氣障り也
(一一)構はずともよけれどそうもならぬ
(一二)常に悋氣を戒められねばならぬ樣な私の性質が我ながら嫌になる
(一三)誰がさせるのか知らぬが、我が思ひもよらぬ事をする
(一四)源が思ひもよらぬ事を當推量して悋氣する

少し物思ひ慰めらるゝにぞ、頭もたげて、御使にも二なき様の志をつくす。(一)疾(二)く參りなむと急ぎ苦しがれば、思ふ事ども少し聞えつゞけて、(三)

明石上ひとりしてなづるは袖の程なきに覆ふばかりの蔭をしぞまつ(四)

と聞えたり。あやしきまで御心にかゝり、ゆかしう思さる。(五)

女君には、言にあらはしてをさ〳〵聞え給はぬを、聞き合せ給ふ事もこそと思し(六)て、源「さこそあゝなれ。(七)怪しうねぢけたるわざなりや。(八)然もおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思の外に口惜しくなむ。(九)女にてさへあゝなれば、いとこそものしけれ。(一〇)尋ね知らでもありぬべき事なれど、然は得棄つまじきわざなりけり。(一一)呼びにやりて見せ奉らむ。憎み給ふなよ」と聞え給へば、面うちあかみて、紫「あやしう常に、(一二)かやうなるすぢ宣ひつくる心の程こそ、我ながら疎ましけれ。物憎みはいつ習ふべきにか」と怨じ給へば、いと能くうち笑みて、源「そよ。(一三)誰がならはしにかあらむ、思はずにぞ見え給ふや。(一四)人の心より外なる思ひやりごとして、物怨

し。乳母にも、ありがたう細やかなる(一)御いたはりの程淺からず。入道の思ひかしづき思ふらむ有樣、(二)思遣るもほゝゑまれ給ふこと多く、また哀に心苦しくも、唯(三)この事の御心にかゝるも淺からぬにこそは。(四)御文にも、おろかにもてなし給ふまじと返す〴〵いましめ給へり。

源 (五)いつしか袖うちかけむをとめ子が世をへてなでむ岩のおひさき

(六)津の國までは舟にて、それより彼方は馬にて急ぎつきぬ。入道待ちとり、喜びかしこまり聞ゆる事限なし。(七)そなたに向きて拜み聞えて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよ〳〵(八)いたはしう、怖ろしきまで思ふ。兒のいとゆゝしきまで美しうおはする事、たぐひなし。(九)げにかしこき御心にかしづき聞えむと思したるは宜なりけり、と見奉るに、(一〇)あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる歎もさめにけり(一一)いと美しうらうたく覺えて、あつかひ聞ゆ。(一二)子持の君も、月頃物をのみ思ひ沈みて、いとゞよわれる心地に、生きたらむとも覺えざりつるを、(一三)この御心おきての、

(一)源の心付け
(二)源が
(三)明石の生兒の事
(四)明石へ持たせやる手紙にも大事にせよと
(五)生兒を我手元に引取りて育つるは何時の事ならん待遠し、岩とは生兒を祝ひていへり、「君が代は天の羽衣稀に來て撫づとも盡きぬ巖なるらん」
(六)乳母が
(七)都の方に
(八)明石上母子を大事に思ふ
(九)乳母の心、源の心に大事に思はるゝも尤
(一〇)斯る田舍へ下りて
(一一)乳母が生兒を
(一二)明石上
(一三)源の仕向けの懇なるによりて

（一）宣旨の娘は内裏にも奉公せし事あれば源も時時見し事ありしが
（二）家
（三）どうして此樣な處に居られたらう
（四）棄て置かれず
（五）田舍へ遣りたくなくなつた
（六）宣旨の娘の心
（七）今迄親しくなくても別れはつらい
（八）跡について行きたい
（九）私への別れを惜むに託して、實は明石上の處へお出なさりたいのであらう
（一〇）出來過ぎて居る
（一一）乳母が出發の際、京を離るゝ迄は車にて行けり
（一二）源の親しき人
（一三）赤兒の守刀

しは念じ給へ」など、事の有樣委しう語らひ給ふ。（一）上の宮仕時々せしかば、見給ふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れ惑ひて、さすがに大なる所（二）の、木立など疎ましげに、（三）いかで過しつらむと見ゆ。人樣若やかにをかしければ、（四）御覽じ放たれず。とかく戯れ宣ひて、源「（五）取りかへしつべき心地こそすれ。いかに」と宣ふにつけても、（六）げに同じうは御身近くも仕う奉り馴れば憂き身も慰みなまし、と見奉る。

源「（七）かねてより隔てぬ中とならはねど別はをしきものにぞありける

（八）慕ひやせまし」と宣へば、うち笑ひて、

乳母「（九）うちつけのわかれを惜むかごとにて思はむかたに慕ひやはせぬ

馴れて聞ゆるを（一〇）、いたしと思す。

（一一）車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人（一二）さし添へて、ゆめ漏すまじく口がため給ひてつかはす。（一三）御はかし、然るべき物など、所狹きまで思しやらぬ隈な

(一)も少し過ぎて
(二)田舍ではよき乳母もあらじと察して
(三)桐壺に仕へし宣旨といふ女の娘
(四)宣旨
(五)夫のろくに構はぬなるべし
(六)事情を知りて或機會に源に話したる人
(七)乳母に召抱へたき趣
(八)宣旨の娘は
(九)前後の分別もせず
(一〇)源の所縁といふに惚れ込みて
(一一)宣旨の娘の身上を
(一二)明石へ遣はす
(一三)宣旨の娘の所へ源が其人柄を見に
(一四)娘は承諾はしながら
(一五)源の自ら來れるが有難くて
(一六)萬事仰の通
(一七)出發を
(一八)片田舍へ汝を遣るのは
(一九)是は思ふ仔細ありての事也
(二〇)源自身も、思ひもよらぬ侘住居をしたる例を思ひて暫く辛抱せよ

くもあるべきかな、(一)この程過して迎へてむ、と思して東の院急ぎ造らすべきよし催し仰せ給ふ。(二)さる所にはかゞ〳〵しき人もありがたからむを思して、故院に(三)侍ひし宣旨の女、宮内卿の宰相にて亡くなりにし人の子なりしを、(四)母なども亡せて、幽なる世に經けるが、(五)はかなき樣にて子産みたりと聞し召しつけたるを、(六)知るたよりありて事の序にまねび聞えける人召して、(七)さるべきさまに宣ひ契る。(八)まだ若くて、何心もなき人にて、旦暮人知れぬあばらやに眺むる心細さなれば、(九)深うも思ひたどらず、(一〇)この御あたりのことを偏にめでたう思ひ聞えて、參るべきよし申させたり。(一一)いとあはれに且は思して、いだしたて給ふ。(一二)物のついでに、いみじう忍び紛れておはしまいたり。(一三)さは聞えながら如何にせましと思ひ亂れけるを、いとかたじけなきに、よろづ思ひ慰めて、(一四)娘「たゞ宣はせむまゝに」(一六)と聞ゆ。よろし(一五)き日なりければ、(一七)急がし立て給ひて、源「怪しう(一八)思遣なきやうなれど、(一九)思ふ樣ことなる事にてなむ。(二〇)自らも、覺えぬ住居にむすぼほれたりし例を思ひよそへて、暫

（一）星に配當して人の吉凶禍福をトふ術、宿曜家が源の身の上を占ひし事若紫の卷にあり
（二）源の子
（三）中の子は劣りて
（四）三子の母其々異るな中の卑しき者の腹に
（五）適中せるが如しと源が思ひ
（六）源は帝位に上り國政を視るべき相ありと多數の相人等が言ひし事ありしを、年來けなして過ぎ來りしが
（七）冷泉の卽位を本望なりと嬉しがる
（八）自身帝位に上らんとは初から思はず
（九）源の心、桐壺が皇子の中にて勝れて我を愛せられながら平人にせられしを思へば、我は帝位には緣なき身なり
（一〇）帝位に上れる冷泉を源の子と人は知らねど
（一一）今迄の事につきての相人の豫言を思へば
（一二）明石上も免れぬ宿緣なればこそ頑固なる入道も及ばぬ高き望を懷きしならん
（一三）北ならば、將來皇后にもなるべき者只の田舍に生れたるは勿體なき事也

しう思さる。宿曜に（一）御子三人、帝、后必ず竝びて生れ給ふべし、中のおとりは、（二）太政大臣にて位を極むべしと、勘へ申したり、中のおとりばらに、（三）女は出でき給ふべしとありし事、さして叶ふなゝめりと、（四）おほかた上なき位にのぼり、世をまつりごち給ふべき事、さばかり賢かりし數多の相人どもの聞え集めたるを、（五）年頃は世の煩はしさに皆思し消ちつるを、（六）當帝の斯く位にかなひ給ひぬる事を、思ひのごと嬉しとおぼす。（七）みづからはもて離れ給へる筋は、更にあるまじきことと思す。（八）あまたの御子達の中に、勝れてらうたきものに思したりしかど、たゞ人に思しおきてける御心を思ふに、（九）宿世遠かりけり。內裏の斯くておはしますを顯に人の知ることならねど、（一〇）相人の言空しからずと、御心のうちに思しけり。いま行末のあらましごとを思すに、（一一）住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も、（一二）及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、怪しき世界に生れたらむは、（一三）いとほしうかたじけな



(一)便宜を與ふる樣に源が心掛くる故
(二)辛抱して源の歸るを待ち居たる人々
(三)年來の鬱を散ずる位に目をかけて遣らんと
(四)二條院の侍女、共に源の内々の妾
(五)目をかけてやる
(六)出あるき
(七)桐壺より讓與の邸
(八)氣の毒なる女等
㊃明石上明石姫君を生む、乳母を明石に下す
(九)明石上の懷胎の樣子如何と
(一〇)出產は今頃の筈
(一一)平產あり
(一二)男子は既にあれば女子が珍らしき也
(一三)寵淺からず
(一四)京で生ませればよかつたと

つ、若君の御乳母たち、さらぬ人々も、年頃の程まかンで散らざりけるは、皆然るべき事に觸れつゝ、(一)よすがつけむ事を思しおきつるに、幸福人多くなりぬべし。二條院にも、(二)同じごと待ち聞えける人を哀なるものに思して、(三)年頃の胸あくばかりと思せば、(四)中將中務やうの人々には、程々につけつゝ(五)情を見え給ふに、御暇なくて、(六)外ありきもし給はず。二條院の東なる宮、(七)院の御處分なりしを、二なく改め作らせ給ふ。花散里など樣の(八)心苦しき人々住ませむなど、思しあてて繕はせ給ふ。

まことや、かの明石に(九)心苦しげなりしことは如何に、と思し忘るゝ時なければ、公私いそがしき紛に、え思すまゝにも訪ひ給はざりけり。三月朔日のほど、(一〇)この頃やと思しやるに、人知れず哀にて、御使あり。疾く歸り參りて、使者「十六日になむ、(一一)女にて平かにものし給ふ」と告げ聞ゆ。(一二)珍らしき樣にてさへあンなるを思すに、(一三)おろかならず。などて、(一四)京に迎へてかゝる事をもせさせざりけむと、口惜

(一)再び就任するは差支なしと公私の議一決す
(二)強ひて辭し得ず
(三)弘徽殿跋扈時代は世の中面白からぬにより
(四)無勢力なりしを
(五)頭中將
(六)頭中將の子、左大臣の四君腹
(七)冷泉の妃にせんと
(八)頭中將の子、後に紅梅右大臣といふ
(九)五位を賜はりて
(一〇)頭中將は妻妾どもの腹に子供多く
(一一)夕霧
(一二)童殿上とて、子供にて出仕する也
(一三)葵上
(一四)葵上の父母
(一五)葵上の死後も只源のお陰で餘榮ありて
(一六)年來の不遇は影もなきまで
(一七)源の太政大臣一家に對する情は昔に變らず

けるをこそ、まことの聖にはしけれ。病に沈みて返し申し給ひける位を、世の中かはりてまた(一)改め給はむに、更に咎あるまじう、公私定めらる。さる例もありければ、すまひはて(二)給はで、太政大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ふ。(三)世の中すさまじきにより、かつは籠り居給ひしを、とりかへし花やぎ給へば、御子どもなど、(四)沈むやうに物し給へるを、皆浮び給ふ。とりわきて(五)宰相中將、權中納言になり給ふ。かの(六)四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、(七)内裏に參らせむとかしづき給ふ。かの高砂謠ひし君(八)も、(九)かうぶりせさせて、いと思ふ樣なり。(一〇)腹に御子どもいと數多つぎ〲に生ひ出でつゝ、賑はしげなるを、源氏の大臣は羨み給ふ。大殿腹の若君は、(一一)人より殊に美しうて、内裏春宮の(一二)殿上し給ふ。(一三)故姫君の亡せ給ひにしなげきを、(一四)宮大臣また更にあらためて思し歎く。されど(一五)おはせぬ名殘も、たゞこの大臣の御光に、萬もてなされ給ひて、(一六)年頃思し沈みつる名殘なきまで榮え給ふ。(一七)なほ昔に御心ばへかはらず、折ふしごとに渡り給ひなどしつ

給ふ。いとまばゆきまで光り(一)あひ給へるを、世人めでたきものに聞ゆれど、母宮(二)はいみじうかたはらいたき事に、あいなく御心を盡し給ふ。(三)内裏にもめでたしと見奉り給ひて、世の中譲り聞え給ふべきことなど、懷しう聞え知らせ給ふ。同じ月の廿餘日、御國譲のこと俄なれば、大后(四)思しあわてたり。朱雀(五)「かひなき様ながらも、心のどかに御覽ぜらるべき事を思ふなり」とぞ、聞え慰め給ひける。坊(六)には承香殿(七)の御子居給ひぬ。世の中あらたまりて、引(八)きかへ今めかしき事ども多かり。源氏の大納言、内大臣になり給ひぬ。(九)數定まりて、くつろぐ所もなかりければ、加はり給ふなりけり。やがて世の政をし給ふべきなれど、源「さやうの事繁き職には堪へずなむ」とて、致仕(一〇)の大臣、攝政し給ふべきよし、譲り聞え給ふを、前右大臣「病によりて、位をもかへし奉りてしを、(一一)いよ〳〵老のつもり添ひて、さかしき事侍らじ」と、うけひき申し給はず。(一二)他の國にも、事移り世の定まらぬ折は深き山に跡を絶えたる人だにも、をさまれる世には、白髮(一三)をも恥ぢず、出で仕へ

(一)源と冷泉と
(二)藤壺は穴へも入りたい心地でひや〳〵して居る
(三)朱雀も冷泉を
(四)弘徽殿
(五)位を去りては生甲斐なき様なれども、せめては樂になりて末長く生きて居たしと思ひての事也
(六)春宮
(七)承香殿女御の腹、朱雀の實子、後に今上
(八)朱雀時代に變りて
(九)左右大臣は一人宛と定りて今闕員なく、源を容るべき餘地なき故、員外の官たる内大臣になれるなり
(一〇)葵上の父前右大臣
(一一)今は一層老耄して役に立たぬ
(一二)以下前右大臣の就任を強ふる理由、外國にて時變に遭ひて隱遁したる人も治世に出て仕へたる例あり、之を眞の聖賢すと
(一三)漢文帝の時商山の四皓といふ四老人の出て仕へたる事

見給ふとも、疎ならぬ志はしも、なずらはざらむと思ふさへこそ心苦しけれ」とて、打泣き給ひぬ。女君顔はいとあざやかににほひて、こぼるゝばかりの愛敬にて、涙もこぼれぬるを、(一)よろづの罪忘れて、哀にらうたしと御覽ぜらる。朱雀「な(二)どか、御子をだに持給へるまじき。口惜しうもあるかな。(三)契深き人のためには、今見出で給ひてむと思ふも口惜しや。(四)限あれば、たゞ人にてぞ見給はむかし」など、行末の事をさへ宣はするに、(五)いと恥かしうも悲しうも覺え給ふ。(六)御容貌などなまめかしう淸らにて、(七)限なき御志の、年月に添ふやうにもてなさせ給ふに、(八)めでたき人なれど、さしも思へらざりし氣色心ばへなど、物思ひ知られ給ふまゝに、(九)などて我心の若くいはけなきに任せて、さる騷をさへ引き出でて、我名をば更にもいはず、(一〇)人の御爲さへなど思し出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の二月に、(一一)春宮の御元服のことあり。十一になり給へど、(一二)程よりおほきに大人しう淸らにて、たゞ源氏の大納言の御顏を、二つにうつしたらむ樣に見え

(一)朱雀の心
(二)なぜ其方には子が無いぞ
(三)源の子ならば直に生むならんと思ふと殘念
(四)源の子ならばまさか皇太子にも立てらるまじ
(五)朧が
(六)朱雀の
(七)朧に對する寵は次第に加はるにつけて
(八)源は好男子なれど、朧を餘り大事がらざりし樣子などが分り來て
(九)朧の心
(一〇)我無分別なる娘心からあの樣な騷を出來し源氏に迄累を及ぼしたるはつまらぬ譯なりしと
㊂冷泉元服、やがて卽位、源氏方一門の榮華
(一一)冷泉
(一二)年輩よりは大柄で

り。(一)大后なほ御惱重くおはします中にも、(二)遂にこの人をえ消たずなりぬることと心病みおぼしけれど、帝は院の御遺言を思ひ聞え給ふ。(四)物の報ありぬべくおぼしけるを、なほし立て給ひて、御心地(三)すゞしくなむ思しける。(五)時々おこり惱ませ給ひし御目もさわやぎ給ひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじう、心細きこととのみ、久しからぬ事を思しつゝ、(六)常に(七)召ありて、源氏の君は參り給ふ。(八)世の中の事なども、隔なく宣はせなどしつゝ、御本意の樣なれば、大方の世の人も、(九)あいなく嬉しきことに喜び聞えける。

(一〇)下り居なむの御心づかひ近くなりぬるにも、(一一)尙侍の心ぼそげに世をおもひ歎き給へる、いと哀に思されけり。朱雀「(一二)大臣亡せ給ひ、(一三)大宮も頼もしげなくのみなり給へるに、(一四)我が世のこり少き心地するになむ、いといとほしう(一五)名殘なき樣にてとまり給はむとすらむ。昔より(一六)人には思ひおとし給へれど、みづからの志のまれなき習に、たゞ御事のみなむ哀に覺えける。(一七)立ちまさる人、また御本意ありて

(一)弘徽殿
(二)終に源を壓倒し得ざるに殘念と不快に思へど
(三)源を大事にせよとの
(四)源を虐待せば其報あらんと病れたりしに、呼び還して快く思へり
(五)朱雀の眼病も直りたれど
(六)朱雀の心、我は攝早死期近きにあるべく
(七)朱雀に呼ばれて
(八)政事上の相談も打あけてありて、萬事朱雀の窮志の通りなれば
(九)眞實から
㊂朱雀帝讓位の志、朧月夜に對する愚痴
(一〇)朱雀讓位の志を實行する時期
(一一)朧月夜が讓位の後を心細がるを朱雀が
(一二)朧の父太政大臣
(一三)弘徽殿も病次第に重體になりたるに
(一四)我餘命幾許もなき
(一五)今宵と打て變りて其方見すぼらしき樣にて跡に生き殘るべきか
(一六)其方は我を頼よりなく見て居れど、我は其方を最も愛する故、其方の事のみ氣にかゝる
(一七)源の望通り再び源の世話になるにしても、源が大事にする事は自分程にはゆくまい

澪標

梗概

㊀源氏、桐壺帝の爲に法華八講を行ふ。弘徽殿大后、病重し。㊁朱雀帝讓位の志。朧月夜に對する愚痴。㊂冷泉元服、やがて即位。源氏内大臣に、前右大臣(葵上の父)攝政に任ぜらる。源氏方一門榮華。二條院改築。㊃明石上、明石姫君を生む。源氏相人の言を回想す。乳母を擇びて明石に下す。入道父子の喜。㊄源氏明石姫君の事を紫上にかす。㊅明石姫君五十日の祝に使を明石に遣る。㊆源氏、花散里を訪ふ。㊇源氏住吉參詣。明石上同時に參詣して、遙に源氏の行裝の盛なるを見て感慨に堪へず。㊈六條御息所母子上京。御息所重病。源氏見舞に行きて秋好(娘の前齋宮)を托せらる。㊉六條御息所逝去。源氏、秋好の世話をやく。⑪朱雀、秋好に意あり。源氏は秋好を冷泉に奉らんとして藤壺に謀る。藤壺の贊同。

㊀ 法華八講、弘徽殿大后重病
(一)須磨にて源が夢に桐壺を見し事
(二)桐壺が夢に源に告げて罪を贖ふに暇なしと言ひし事
(三)已に都に歸りたれば
(四)追善供養の用意
(五)法華八講

(一)さやかに見え給ひし夢の後、院の帝の御ことを心にかけ聞え給ひて、いかで彼の(二)沈み給ふらむ罪救ひ奉ることをせむと、思し歎きけるを、(三)かく歸り給ひては、(四)その御いそぎし給ふ。神無月に(五)御八講し給ふ。世の人靡き仕う奉ること、昔の樣な

(一)かの師の女の五節、(二)あいなく人知れぬ物思ひさめぬる心地して、(三)まくなぎつくらせてさし置かせけり。

五節 (四)須磨の浦にこゝろをよせし船人のやがて朽たせるそでを見せばや

(五)手などこよなくまさりにけりと、(六)見おほせ給ひてつかはす。

源 (七)かへりてはかごとやせまし寄せたりし名残に袖のひがたかりしを

(八)飽かずをかしと思しゝ名殘なれば、驚かされ給ひていとゞ思し出づれど、この頃はさやうの御擧動更に(九)つゝみ給ふめり。花散里などにも、たゞ御消息ばかりにて、覺束なく、(一〇)なか／＼恨めしげなりとなむ。

(一)大貳の娘、須磨にて源に歌を贈りし女
(二)源が許されし故、退去中に人知れず寄せたる同情が役に立たずなり拍子抜の形になりて
(三)使に次の歌を持たせやり、誰よりとも言はず只目くばせしたるのみにて置いて來させたり
(四)須磨にて御尋ね申せし以來、今迄君を思ひ續けし泣の涙をお目にかけたし
(五)手が非常に上つたわいと
(六)五節と見極めて
(七)須磨にて訪はれて以來戀しさに堪難かりし我は、なまじ訪ひくれたる君を却て恨めしく思ふ
(八)五節には一旦深く惚れ込みたる事なれば、歌を贈られて戀戀しけれど
(九)愼み
(一〇)なまじ君に歸りて居なから無沙汰なれば

源 わたつ海に沈みうらぶれひるのこの足たゝざりし年は經にけり(一)

と聞え給へば、いとあはれに心はづかしう思されて、

朱 (二)宮ばしらめぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな

いとなまめかしき(三)御有樣なり。

(四)院の御ために、御八講行はるべき事、まづ急がせ給ふ。(五)春宮を見奉り給ふに、(六)こよなくおよずけさせ給ひて、(七)珍らしう思し悅び給へるを、限なく哀と見奉り給ふ。(八)御才もこよなく勝らせ給ひて、(九)世を保たせ給はむに憚あるまじく、かしこう見えさせ給ふ。(一〇)入道の宮にも、(一一)御心少ししづめて、御對面のほどにも、哀なる事どももあらむかし。誠やかの明石には、(一二)返る波につけて御文遣はす。引き隱して細やかに書き給ふめり。

源 (一三)波のよる〳〵いかに、

(一四)歎きつゝあかしのうらに朝ぎりのたつやと人をおもひやるかな

(一)我は須磨浦に落魄して三年を經たり、伊弉諾伊弉冊二神蛭子を生む、三歳にして足立たず、岩楠船に載せて海に放つ事、神代紀に見えたり
(二)二神が子を生む前に宮柱を廻りて行過ひし故事の如く、分れても斯く逢ふ事あるもの故、前の恨は忘れてくれよ
(三)朱雀の様子
(四)源が桐壺の追福に法華八講を行ふべき用意す
(五)源が
(六)非常に成人して
(七)冷泉が源を
(八)冷泉の學問
(九)天子として恥しからず
(一〇)藤壺
(一一)少し落附いてから對面したる其時にも
(一二)送の人の歸るに托して
(一三)歌につゞけて見るべし、よる―寄る、夜
(一四)君が歎きつゝ夜を明す息が朝霧と立昇る程物思に沈み居るかしらと思ひ遣る

(一)今更自身を須磨へ退去させた世間が恨めし
(二)員外の
(三)源にまきぞへの人々
(四)世間廣くなる
(五)源が
(六)宮中の人々の感、源の容姿は益々よくなりて、侘住居をし來りし樣には見えぬ
(七)老いぼれたる女等
(八)服裝に格別注意して源に對面す
(九)ぽつ〳〵と
(一〇)朱雀が
(一一)源の奏樂

とりかへし(一)世の中もいと恨めしうなむ。程もなく、本の御位あらたまりて、數よ(二)りほかの權大納言になり給ふ。つぎ〳〵(三)の人も、然るべき限は、もとの官かへし賜はり、世(四)に許さるゝほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。召ありて、内裏(五)に參り給ふ。御前に侍ひ給ふに、ねびまさりて、いかでさる物むつかしき住居に年經給ひつらむ、と見奉る。女房(六)などの、院の御時より侍ひて、老い(七)しらへるどもは、悲しくて、今更に泣き騷ぎめで聞ゆ。上も恥かしうさへ思されて、(八)御よそひなど、殊に引きつくろひて出でおはします。御心地例ならず、日頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へるを、昨日今日ぞ少しよろしう思されける。御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう靜なるに、昔の事かきくづし(九)思し出でられて、しほたれ(一〇)させ給ふ。物心細く思さるゝなるべし。朱雀「あそびなどもせず、昔聞きし(一一)物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」と宣はするに、

(大)著京、參內
(一)罪の穢を拂ふ也、難波は古より祓の場所也
(二)やがて徐に出直して參詣し、願はどきもすべき由
(三)今度は俄の旅にて面倒なれば
(四)住吉に
(五)都に
(六)紫上
(七)別れの時に、命にかへて別れを暫時延したしと咏める歌あれば也
(八)年と共に足らぬ處がなくなりて
(九)多過ぎたりし
(一〇)少くなりしが却て
(一一)此儘傍に居るのぢやと源が安心すると共に
(一二)明石上
(一三)幾年たちても、女故の苦勞はやまぬ
(一四)源が紫に明石の噂をする
(一五)紫が
(一六)露骨ならぬ樣に
(一七)「忘らるゝ身をば思はず契ひてし人の命の惜しくもある哉」
(一八)悋氣を
(一九)源が
(二〇)源の感、紫を現在見て居てさへ物足らぬのに

君は、難波の方にわたりて、御祓し(一)給ひて、住吉にも、(二)たひらかにて、色々の願はたし申すべきよし、御使して申させ給ふ。(三)俄に所せうて、みづからはこの度は(四)え詣で給はず、異なる御逍遙などなくて、(五)急ぎ入り給ひぬ。二條院におはしましつきて、都の人も御供の人も、夢の心地して行きあひ、喜び泣きもゆゝしきまで立ち騒ぎたり。(六)女君もかひなきものに思し捨てつる命(七)、嬉しう思さるらむかし。いと美しげに(八)ねびとゝのほりて、御物思ひの程に、(九)所狭かりし御髪の少し(一〇)へがれたるしも、いみじうめでたきを、今は(一一)かくて見るべきぞかしと、御心落ちゐるにつけては、又かの飽かず別れし人(一二)の思へりしさま、心苦しう思しやらる。なほ(一三)世と共に、かゝる方にて御心のいとまぞなきや。(一四)その人の事どもなど聞え出で給へり。思し出でたる御氣色淺からず見ゆるを、(一五)たゞならずや見奉り給ふらむ、(一六)わざとならず(一七)「身をば思はず」など(一八)ほのめかし給ふぞ、をかしう(一九)らうたく思ひ聞え給ふ。(二〇)かつ見るにだに飽かぬ御樣を、いかで隔てつる年月ぞと、あさましきまで思ほすに、

(一)我身分の卑しきが根本の原にて
(二)是非もなき事なれど
(三)源が我を置去りにする恨
(四)源の俤が目先にちらつきて
(五)唯涙にくれて居るのが關の山
(六)一體何故斯く心配を求める樣な事を仕出したのであらう
(七)間違つた入道の言に從つたのが惡かつた
(八)やかましい
(九)源が明石を棄難い事情もあるから(懐胎の事)先樣にも了簡があらう
(一〇)明石に對していふ
(一一)入道の了簡違を批難しあひつゝ
(一二)何時明石上を思通りに縁附け得られるかと待通して、源を得て大願成就と喜びしに
(一三)縁附早々
(一四)入道が
(一五)いよ〳〵耄碌して
(一六)ちやんと
(一七)佛を拜み居たり
(一八)批難されて
(一九)歩みつゝ經を讀む時は
(二〇)突當てゝ怪我して

の憂き(一)をもとにて、わりなき(二)ことなれど、うち棄て(三)給へる恨のやる方なきに、面(四)影そひて忘れがたきに、たけき(五)ことゝは、たゞ涙に沈めり。母君も慰めわびて、母(六)「何に斯く心づくしなる事を思ひ初めけむ。すべて(七)ひが〳〵しき人に従ひける心のおこたりぞ」といふ。入道(八)「あなかまや。思し(九)すつまじき事も物し給ふめれば、さりとも思す所あらむ。思ひ慰めて、御湯(一〇)などをだにまゐれ。あなゆゝしや」とて片隅に寄り居たり。乳母母君など、ひがめる(一一)心を言せ合せつゝ、「いつしか(一二)いかで思ふさまにて見奉らむと、年月をたのみ過し、今や思ひかなふとこそ頼み聞えつれ、心苦しきことをも、物の初(一三)に見るかな」と歎くを見るにも、いとほしければ、いとゞほけられて、晝は日一日寝をのみ寝くらし、夜(一四)はすくよかに起き居て、『(一五)珠數の行方も知らずなりにけりとて、手をおし揩りて仰ぎ居たり(一六)。弟子どもにあ(一八)ばめられて、月夜に出でて行道(一九)するものは、遣水に倒れ(一七)入りにけり。よしある岩の片側に、腰(二〇)もつきそこなひて、病み臥したる程になむ、少し物まぎれける。



(一)御送申さぬが残念
(二)べそをかく
(三)世を厭ひて此浦に退世はしたれども、まだ煩惱を絶ちて解脱の彼岸に到着する事が出来ぬ、うみ—倦み、海
(四)子故の闇には
(五)國境迄も送り奉らん
(六)僕を思ひ出したらば消息を賜はれ
(七)申上ぐ
(八)源が
(九)明石上は懐胎までして居るなれば、直に迎へ取るべし
(一〇)住馴れし浦を立去る此秋の歎は
(一一)入道が
(一二)入道が
(一三)明石上の歎は
(一四)噂を人に見せまいと

が人の心にもしめざらむ。入道、「今は世を離れ侍りにし身なれども、今日の御(一)送に仕う奉らぬ事」など申して、(二)かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

入道「世を(三)うみにこゝらしほじむ身となりてなほ此岸をえこそ離れね

(四)心のやみはいとゞ惑ひぬべく侍れば、(五)境までだに」と聞えて、入道「すきゞゝしき様なれど、(六)思し出でさせ給ふをり侍らば」など、(七)御氣色たまはる、(八)いみじう物を哀と思して、所々うち赤み給へる御まみのわたりなど、言はむ方なく見え給ふ。源「(九)思ひ捨て難き筋もあめれば、今いと疾く見なほし給ひてむ。たゞこの住處こそ見捨てがたけれ。いかゞすべき」とて、

源　みやこ出でし春のなげきにおとらめや(一〇)年ふるうらをわかれぬる秋

とておし拭ひ給へるに、(一一)いとゞ物覺えずしほたれまさる。(一二)起居もあさましうよろぼふ。(一三)正身の心地は譬ふべき方なくて、(一四)斯うしも人に見えじと思ひしづむれど、身

（一）明石上をつけても
（二）故郷へ歸る嬉しさにつけても
（三）何も一々其を書く必要なしとて省けり
（四）餞別の御馳走
（五）下々の者にまで立派なる旅裝を調へて贈れり
（六）間に合ふ樣に何時拵へたるならん
（七）源の旅裝を贈りたるは勿論
（八）幾荷も荷はせて供せさす
（九）趣ある樣に拵へて行屆かぬ所なし
（一〇）源の今日の着料の
（一一）此海岸にて作りたる衣裳なれば、鹽氣づきて著心地惡しと御嫌なさるかも知れぬ
（一二）ごた〳〵の最中なれど返歌す
（一三）暫時別るべきなれば形見に衣を取換へよう
（一四）折角の志だから
（一五）著て居た衣を遣る
（一六）慕はるべき材料を又一つ添へたる譯也
（一七）明石もいかでか身に染みて思はざらん

すはさもある事ぞかし、など見奉る。良清などは、疎ならず思すなゝめりかしと憎くぞ思ふ。（二）嬉しきにも、げに今日を限にこの渚を別るゝこそ、（一）など哀がりて、口々しほたれ言ひあへる事どもあゝめり。されど何かはとてなむ。（三）入道今日の御（四）まうけ、いと厳しう仕うまつれり。人々下のしなまで、（五）旅の装束めづらしき様なり。いつの間にかしあへけむ、（六）と見えたり。御よそひは言ふべくもあらず、御衣櫃（八）あまた掛けさぶらはす。まことの都の土産にしつべき御贈物など、（七）故づきて思（九）ひよらぬ隈なし。今日（一〇）奉るべき狩の御装束に、

明　寄る浪にたちかさねたる旅ごろもしほどけしとや人のいとはむ（一一）

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、（一二）

源　かたみにぞ換ふべかりける逢ふ事の日數へだてむ中のころもを（一三）

とて、源「志（一四）あるを」とて奉り換ふ。御身になれたる（一五）どもを遣す。げに今ひとへ（一六）偲ばれ給ふべき事を添ふるかたみなゝめり。えならぬ御衣に匂の移りたるを、いか（一七）

明　なほざりに(一)頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけて忍ばむ

言ふともなき口ずさびを怨み給ひて、

源　逢ふまでの(二)かたみに契る中の緒のしらべはことに變らざらなむ

この音違はぬさきに必ず逢見む、(三)とたのめ給ふめり。されど唯、別れむ程のわり

なさを思ひむせびたるも(四)、いと理なり。

立ち給ふ曉は、夜深う出で給ひて、御迎の人々もさわがしければ、心もそらなれ

ど、人間をはからひて(五)、

源　(六)うちすてて立つも悲しき浦なみのなごりいかにと思ひやるかな

御かへり、

明　(七)年經つる苫屋も荒れて憂きなみの歸るかたにや身をたぐへまし

とうち思ひけるまゝなるを見給ふに、忍び給へど、(八)ほろ／＼とこぼれぬ。心知ら

ぬ人々は、なほ斯かる御住居なれど、(九)年頃といふばかり馴れ給へるを、(一〇)今はと思

(一)よい加減な氣安めを當にして何時迄心配する事やら、ことー言、琴

(二)紀念に留置く琴の調の變らぬ如く我と君との心も變らじ、中の緒とは琴の六より十までの緒をいふなるべしとぞ

(三)約束し

(四)明石が怨めるも

【五】上京の首途、明石上の離愁

(五)見計らひて

(六)「立つ」「なごり」何れも浪の縁語

(七)住荒したる此故郷を棄てゝ君と共に都に行きたし

(八)涙の溢

(九)足かけ三年也

(一〇)今立去ると思へば名殘惜さも尤

(一)明石が源に

(二)源が

(三)感動して只居られず

(四)簾中に差入れて明石に彈けと勸めたり

(五)明石

(六)明石が箏を

(七)明石の箏に對する源の心中の批評

(八)藤壺の琴のよいといふは

(九)明石の琴は

(一〇)源の耳にすら珍らしく面白く思はるゝ手を

(一一)人にじれつたく思はせる位に彈きかけてやめて

(一二)源が

(一三)源が

(一四)再び合奏する時の來る迄紀念に置いて行くべし

常にゆかしがり給ふ物の音など、更に(一)聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。明「さらば、形見にも忍ぶばかりのひとことをだに」と宣ひて、京よりもておはしたりし、琴の御琴取りにつかはして、心ことなるしらべをほのかに搔き(二)鳴し給へる、深き夜のすめるには譬へむ方なし。入道もえ堪へで、(三)自ら箏の琴取りてさし(四)入れたり。(五)自らも、いとゞ涙さへそゝのかされて留むべき方なきに、誘はるゝなるべし、(六)忍びやかに調べたる程、いと上衆めきたり。(七)入道の宮の御琴の音を、(八)只今の又なきものに思ひ聞えたるは、今めかしうあなめでたと、聞く人の心行きて、容貌さへ思ひやらるゝことは、げにいと限なき御琴の音なり。(九)これは飽くまで彈きすまし、心にくゝ妬き音ぞまされる。(一〇)この御心にだに始めて哀になつかしう、まだ耳なれ給はぬ手など、(一一)心やましき程にひきさしつゝ、(一二)飽かず思さるゝにも、月頃、など強ひても聞き馴さゞりつらむと、(一三)悔しうおぼさる。心のかぎり、行くさきの契をのみし給ふ。源「琴は、(一四)またかきあはすまでの形見に」と宣ふ。女、

(一)然るべく計らひて明石を京へ引取らんと
(二)北邊に話して
(三)佛の勤
(四)女の身にしては後の事などは思はず、目前の御情だけを有難く思つて滿足もすべきであると思はれるが
(五)源に惚れ込むにつけても自分の身分を考へるにつけても、明石の歎は盡きず
(六)物の哀を集めたる
(七)君を思ふ心はかはらじ
(八)私風情の思ひても效なき事なれば今更つまらぬ恨は申さじ、かきつめて—掻集めて、かひ—貝、效、うらみ—恨み、浦見
(九)心淺からぬ樣に

だ見給はぬ容貌など、いと由々しう氣高き樣して、目ざましうもありけるかなと、見捨て難く口惜しう思さる。(一)然るべき樣にて迎へむと思しなりぬ。(二)さやうにぞ語らひ慰め給ふ。男の御容貌有樣、はた更にもいはず、年頃の(三)御行にいたく面痩せ給へるしも、言ふかたなくめでたき御有樣にて、心苦しげなる氣色にうち涙ぐみつゝ、哀に深く契り給へるは、(四)たゞかばかりを幸福にても、などか止まざらむとまで見ゆめれど、(五)めでたきにしも、我身のほどを思ふにもつきせず。浪の聲、秋の風には猶ひゞき異なり。鹽燒く煙かすかにたなびきて、(六)とりあつめたる所のさまなり。

源　このたびは立ちわかるとも(七)藻鹽やくけぶりは同じかたになびかむ

と宣へば、

明　かきつめて(八)海士の燒く藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ

哀にうち泣きて、言寡なるものから、然るべき節の御答など淺からず(九)聞ゆ。この

(一)源が前々よりも深く明石に惚れ込みて
(二)女故に
(三)退去の當時は
(四)何時か再び歸るべしと、一方には自ら慰むる所ありき
(五)二度と來る筈はない
(六)折からの時節まで哀なる、秋の半なれば
(七)源の心
(八)なぜ斯う思はぬ事の爲に身を苦しむるならん
(九)明石との關係を知れる惟光は
(一〇)苦情をいふ
(一一)源が明石との關係を隱して目立たぬ樣に通ひてすまして居たのに
(一二)別れ際になりて却て熱情的で明石に餘計悲ませると
(一三)良清が初めて北山にて源に噂せし事を人々が語り合ふ
(一四)良清が
⑭源氏明石上に別を惜む
(一五)源の出發が
(一六)源が明石へ
(一七)今迄確には見ぬ明石の容貌を今夜よく見て

なるにやありけむ、(一)ありしよりも哀に思して、(二)怪しう物思ふべき身にもありけるかなと思し亂る。女は更にもいはず思ひ沈みたり。いと理なり。(三)思の外に悲しき道に出で立ち給ひしかど、遂には(四)行きめぐり來なむと、かつはおぼし慰めき。この度は嬉しき方の御出立の、(五)又やは顧みるべきと思すに哀なり。侍ふ人々も、程々につけては喜び思ひ、京よりも御迎に人々參り、心地よげなるを、あるじの入道涙にくれて、月も立ちぬ。(六)程さへ哀なる空の氣色に、(七)なぞや心づから、今も昔も、(八)すゞろなる事にて身をはふらかすらむ、と樣々に思し亂る。(九)心を知れる人人は、「あなにく、例の御癖ぞ」と見奉り(一〇)むつかるめり。月頃は、(一一)つゆ人に氣色見せず、時々かいまぎれなどし給へるつれなさを、(一二)この頃あやにくに、なか〱の人の心づくしにとつきじろふ。(一三)少納言のしるべして聞え出でし、初の事など囁きあへるを、(一四)たゞならず思へり。

(一五)明後日ばかりになりて、例のやうにいたうも深さで、(一六)渡り給へり。(一七)さやかにはま

（一）冷泉
（二）冷泉即位と假定して
（三）惜むべく然る可らざる事
（四）弘徽殿の反對
（五）源の咎を
（六）源召還の勅旨
（七）終には斯くあるべき事と
（八）我身の行末はどうなるのであらう
（九）結構な事とは思へど
（一〇）源が毎夜かゝさず明石へ通ふ
（一一）明石懷胎の樣子
（一二）近々別れねばならぬと思ふ故、情の深くなるのであらうか

といはけなし。（一）春宮にこそは讓り聞え給はめ。（二）おほやけの御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈み給ふ事、（三）いとあたらしうあるまじきことなれば、遂に（四）后の御いさめをも背きて、（五）許され給ふべき定出で來ぬ。去年より、后も御物怪に惱み給ひ、さま〴〵の物のさとし頻り、さわがしきを、いみじき御つゝしみどもをし給ふしるしにや、よろしうおはしましける御目のなやみさへ、この頃重くならせたまひて、物心細く思されければ、七月廿餘日の程に、又重ねて（六）京へ歸り給ふべき宣旨下る。（七）つひの事と思ひしかど、世の常なきにつけても、（八）如何になりはつべきにか、と歎き給ふを、斯う俄なれば、嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむ事を思し歎くに、（九）入道、然るべき事と思ひながら、うち聞くより胸塞がりて覺ゆれど、思ひのごと榮え給はゞこそは、我が思ひの叶ふにはあらめ、など思ひなほす。その頃は、（一〇）夜がれなく語らひ給ふ。六月ばかりより、（一一）心苦しき氣色ありて惱みけり。（一二）かく別れ給ふべき程なれば、あやにく

人竝々になるべき身とは思はざりしかど、(一)唯そこはかとなくて過しつる年月は、何事をか心をも惱ましけむ、(二)斯ういみじう物思はしき世にこそありけれと、かねて推し量り思ひしよりも、萬に悲しけれど、(三)なだらかにもてなして、憎からぬさまに見え奉る。(四)哀とは月日にそへて思し増せど、(五)やむごとなき方の、覺束なくて年月を過し給ふが、たゞならずうち思ひおこせ給ふらむが、いと心苦しければ、一人臥しがちにて過し給ふ。繪をさま〴〵畫き集めて、思ふことどもを書きつけ、(六)返事聞くべき樣にしなし給へり。見む人の(七)心にしみぬべき物の樣なり。(八)いかでか空に通ふ御心あらむ、(九)二條の君も、物哀に慰む方なく覺え給ふをり〳〵、同じやうに繪をかき集め給ひつゝ、やがてわが御有樣を、日記のやうに書き給へり。いかなるべき御有樣どもにかあらむ。

年かはりぬ。(一〇)內裏に御藥の事ありて、(一一)世の中さま〴〵にのゝしる。當帝の御子は、右大臣の御女、承香殿の女御の御腹に、男御子生れ給へる、二つになり給へばい

(一)無事に
(二)男を持てば斯うも苦勞のあるものか
(三)穩かな態度で
(四)源の明石に對する情は次第に增すのであるが
(五)離れ居る紫の心配して居るのが氣の毒さに
(六)紫に贈りて
(七)必ず感動すべき
(八)源の心と紫の心と自然に相通ずるのか
(九)紫上

⑬　源氏召還の宣旨

(一〇)朱雀病氣
(一一)繼嗣の事故につきて

（一）ふとした女狂の爲
（二）此處にて或女に逢へり
（三）聞かれぬに此方から打明けるので
（四）忘れじと誓ひし事をあやまたば三笠の山の神もことわれ
（五）出來心にて當所の女にも逢へども、先づ戀しく思出すは其方の事のみ
（六）紫の返事
（七）默しては居られぬ
（八）從來の源の擧動に照して
（九）其方では其樣なる樂があるのに、我は眞正直に君を信じて居た事哉、まつ—松、待つ、「君をおきて仇し心をわが持たば末の松山浪も越えなん」
（一〇）穩なる言分ながら眞綿で頸をしめる言方を
（一一）明石の所へ行かず
（一二）明石が若しや棄てれはせぬかと心配した折りなるに
（一三）明石の心

源　まことや、我ながら（一）心よりほかなるなほざりごとにて、疎まれ奉りしふしぶしを、思ひ出づるさへ胸痛きに、（二）又怪しう物はかなき夢をこそ見侍りしか。斯う（三）聞ゆる問はずがたりに、隔なき心のほどは思し合せよ。（四）誓ひしことも。

など書きて、

何事につけても。

（五）しほ〳〵と先ぞ泣かるゝかりそめのみるめは蜑のすさびなれども

とある、（六）御かへり何心なくらうたげに書きて、

紫　（七）忍びかねたる御夢がたりにつけても、（八）思ひ合せらるゝこと多かるに、

うらなくもおもひけるかな契りしをまつより浪は越えじものぞと

（九）おいらかなるものから唯ならずかすめ給へるを、いと哀にうちおき難く見給ひて、（一〇）名残久しう（一一）忍びの旅寢もし給はず。（一二）女、思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。（一三）行末みじかげなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に

⑭ 源氏紫上を憚りて明石上を訪ふこと繁からず
(一) 源から明石へ
(二) 女の方でも
(三) 隱して
(四) 大にもてなしたきを世間をかねてもてなさぬ故
(五) 源が明石上へ通ふ
(六) 距離
(七) 源が
(八) 果してもうあきられたりと明石上が歎く
(九) 佛の來迎よりも源の來るをのみ待つ
(一〇) 入道が折角捨てた煩惱を又起すも氣の毒
(一一) 源の心、紫に明石上の一件を隱して居て跡で聞かれては
(一二) 紫には特別深いと見える
(一三) 前に女の事に就いては紫に燒かれた時
(一四) あの樣になぜ怒らせたのであらう
(一五) 明石上の

も、心あわたゞしうて、こまかに語らひ置きて出で給ひぬ。(一)御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。(二)こゝにも、かゝる事いかで漏さじと(三)つゝみて、御使ことゞゝしくもてなさぬを、(四)胸いたく思へり。かくて後は、忍びつゝ時々おはす。(五)(六)程も少し離れたるに、おのづから、物いひさがなき海士の子もや立ち交らむと、(七)思し憚る程を、(八)さればよと思ひ歎きたるを、げに如何ならむと、入道も極樂の願をば忘れて、(九)たゞこの御氣色を待つことにはす。(一〇)今更に心を亂るも、いといとほしげなり。(一一)二條の君の、風のつてにも漏り聞き給はむ事は、戯れにても、心の隔ありけると思ひ疎まれ奉らむは、心苦しう恥かしう思さるゝも、(一二)あながちなる御志の程なりかし。(一三)かゝる方の事をば、さすがに心とゞめて怨み給へりし折々、などてあやなきすさび事につけても、(一四)さ思はれ奉りけむなど、とりかへさまほしう、(一五)人の有樣を見給ふにつけても、戀しさの慰むかたなければ、例よりも御文こまやかに書き給ひて、奥に、

違へり、心くらべに負けむこそ人わろけれ、など亂れ怨み給ふさま、(二)實に物おもひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。(三)近き几帳の紐に、(四)箏の琴のひき鳴されたるも、けはひしどけなく、(五)打解けながら搔きまさぐりける程見えてをかしければ、(六)源「この聞きならしたる琴をさへや」など、よろづに宣ふ。

源　むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと

明　(七)明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれをゆめとわきて語らむ

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとよう(八)覺えたり。(九)何心もなく打解けて居たりけるを、(一〇)斯う物覺えぬに、(一一)いとわりなくて、近かりける曹司の中に入りて、(一二)いかで堅めけるにかいと強きを、(一三)強ひてもおし立ち給はぬ樣なり。(一四)されど然のみもいかでかはあらむ。(一五)人樣いとあてにそびえて、(一六)心恥かしきけはひぞしたる。斯う(一七)あながちなりける契を思すにも、淺からずあはれなり。御志の近增りするなるべし。(一八)常に厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、(一九)人に知られじと思す

(一)外聞惡し
(二)前の「あたら夜の」の歌の詞を受けてげにといへる也
(三)源と明石との間に几帳を隔て居る
(四)几帳より垂れたる紐が、何ぞの拍子に琴に引きかゝりたる也
(五)明石が今迄打解けて琴彈き居たる
(六)今迄聽聞居る琴まで今夜は聞かせぬのか
(七)何時も夢見て居る我は、どれが夢と外別が附かぬ故語る事が出來ぬ
(八)似たり
(九)明石は今夜源の來るを知らず打解けて
(一〇)飛でもなき始末になつて來たので
(一一)明石が
(一二)どう締りをしたのか容易にあかぬ
(一三)源も強ひて入らんともせぬ樣子
(一四)そうして許も居られぬ筈、源が明石上に逢ひたるを推測させし省筆
(一五)明石の人柄
(一六)丈高く
(一七)無理に拵へた樣な
(一八)源の心
(一九)今夜の始末を源が

（一）此儘通り越して紫の所へ行きたく
（二）暫時の間でもわが戀人を見て來たい
（三）岡邊の家の様子
（四）凝りたる所多く
（五）入道の家は
（六）岡邊の家は
（七）様々物思をするならんと
（八）常念佛堂
（九）様々の虫の音す
（一〇）源が行き着きて取敢ず
（一一）娘に逢ふ前に源がゆつくり構へて
（一二）明石上の心、直接に源に逢ひたくはなしと
（一三）殘念で
（一四）源の心、馬鹿にお人柄に構へて居る
（一五）立派な身分の女でも是程迄に攻寄せれば一も二もなく靡き來るが今迄の例なるに
（一六）此娘が斯く手ごはきは我が身をやつしたる故輕蔑せるにやと
（一七）源の心、無理な事をするのも場合柄に似合はず

御事を思ひ出で聞え給ふに、（一）やがて馬引き過ぎて赴きぬべく思す。

源「秋の夜のつきげの駒よわがこふる雲井にかけれ（二）ときのまも見む

とうちひとりごたれ給ふ。（三）造れるさま木深く、（四）いたき所まさりて、見所ある住居なり。（五）海の面はいかめしう面白く、（六）これは心ぼそく住みたる様、（七）こゝに居て思ひ殘す事はあらじかしと、住む人の心思しやらるゝに物哀なり。（八）三昧堂近くて、鐘の聲松の風に響きあひて、物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへある様なり。前栽どもに（九）蟲の聲をつくしたり。（一〇）こゝかしこの有樣など御覽ず。女すませたる方は、心殊にみがきて、月入れたる槇の戸口、氣色ばかり押開けたり。（一一）うちやすらひ何かと宣ふにも、（一二）かうまでは見え奉らじと深う思ふに、（一三）物なげかしうて、打解けぬ心ざまを、（一四）こよなうも人めいたるかな、（一五）さしもあるまじき際の人だに、斯ばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、（一六）いと斯くやつれたるに侮らはしきにや、と妬う様々に思し惱めり。（一七）情なうおし立たむも、ことの様に

なれ、など思ふにいよ〳〵恥かしうて、(一)つゆも氣近き事は思ひよらず。親達は、許多の年頃の祈の叶ふべきを思ひながら、(二)ゆくりかに見せ奉りて、思しかずまへ(三)ざらむ時いかなる歎をかせむ、と思ひやるに、ゆゝしくて、(四)めでたき(五)人と聞ゆとも、つらういみじうもあるべきを、目に見えぬ佛神を賴み奉りて、(六)人の御心をも宿世をも知らで、(七)など打返し思ひ亂れたり。君は、「この頃の波の音に、(八)かの物の音を聞かばや。(九)然らずばかひなくこそ」など常は宣ふ。忍び(一〇)てよろしき日見せて、母君の(一一)とかく思ひ煩ふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つ(一二)に起ち居かゞやくばかりしつらひて、十三日の月の花やかにさし出でたるに、唯「あたら(一三)夜の」と聞えたり。君はすき(一四)の樣やと思せど、御直衣奉り引きつくろひて、夜ふかして出で給ふ。御車は二(一五)なくつくりたれど、所せしとて御馬にて出で給ふ。惟光などばかりを侍はせ給ふ。やゝ(一六)遠く入る所なりけり。道のほども、四方の浦々見渡し給ひて、(一七)思ふどち見まほしき入江の月かげにも、まづ戀(一八)しき人の

(一)源に近づく事は
(二)無暗に娘を御目にかけたあとで
(三)源にろくに構はれなかつた時には
(四)危くて
(五)いくら光源氏でも娘につらく當られては恨めしかるべきに
(六)源の料簡や娘の運命を考へもせず飛でもない望を起したものぢやなどと
(七)二の足を踏んで
(八)娘の琴だに聞きたい
(九)同じ聞くならば今でなくては聞くかひなし
(一〇)入道が吉日を撰び
(一一)若しまづく行つては大變と心配するのを
(一二)一人で氣をもみて源招待の準備を立派に調へ
(一三)「あたら夜の月と花とを同じくば心知れらん人に見せばや」
(一四)風流を氣取るわい
(一五)立派に用意したれど窮屈なりと
(一六)岡邊の家は
(一七)思ふ人と一緒に見たき
(一八)紫上



❶ 明石上の自重、源氏明石上を訪ふ
(一)風の音も秋は一入寂しき故
(二)眞底から
(三)明石を我方へよこせ
(四)源の方から行く事は出來ぬ事の樣に思へるに
(五)明石も亦進みて行かんとは思はず
(六)明石の心
(七)極卑しき身分の
(八)心易だての言葉に隨て輕卒に肌を許す事もすれど
(九)なまじ源に靡かば甚しき心配の種を設くべし
(一〇)過分の望を懷ける兩親も我生先のある間こそ常にもならぬ事を常に將來を樂にもして居れど源との緣が不結果ならば却て心配なるべし
(一一)源が
(一二)容易ならぬ幸なれ
(一三)源の噂を
(一四)不慮に源が此處に來られし故
(一五)比類なきもの
(一六)源の生活狀態を親しく見聞して
(一七)我を人がましく思ひて尋ね下さる事は我分に過ぎたる光榮

明石には、例の、(一)秋は濱風の異なるに、獨寢も(二)まめやかに物わびしうて、入道にも折々語らはせ給ふ。源「とかう紛らはして、(三)こち參らせよ」と宣ひて、(四)渡り給はむことをばあるまじう思したるを、(五)正身はた更に思ひ立つべくもあらず。(六)いと(七)口惜しききはの田舍人こそ、假に下りたる人の(八)打解言につきて、さやうに輕らかに語らふわざをもすなれ、人數にも思されざらむものゆゑ、(九)我はいみじき物思をや添へむ、かく(一〇)及びなき心を思へる親達も、世ごもりて過す年月こそ、あいなだのみに行末心にくゝ思ふらめ、なかなかなる心をや盡さむ、と思ひて、(一一)唯この浦におはせむ程、かゝる御文ばかりを聞えかはさむこそ(一二)おろかならね、年頃(一三)音にのみ聞きて、何時かは然る人の御有樣をほのかにも見奉らむなど、遙に思ひ聞えしを、かく(一四)思ひかけざりし御住居にて、まほならねどほのかにも見奉り、(一五)世になきものと聞き傳へし御琴の音をも風につけて聞き、旦暮の(一六)御有樣覺束なからで、斯くまで(一七)世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、かゝる海士の中に朽ちぬる身に餘る事



（一）朱雀が弘徽殿に
（二）思ひたる事は夢に見ゆるものなり
（三）夢に桐壺が睨みし時目を見合せたる故にや朱雀が眼病にかゝりて
（四）朱雀も弘徽殿も
（五）弘徽殿の父二條太政大臣
（六）太政大臣は死しても惜しからぬ高齢なれど
（七）何やかやと事件の引續く爲に
（八）弘徽殿
（九）今源の位を復しては輕率といふ批難を世間から受くべし
（一〇）朱雀が
（一一）朱雀弘徽殿の

えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いとゞ恐ろしう、いとほしと思して、后に（一）聞えさせ給ひければ、后「雨など降り、空亂れたる夜は、思ひ（二）なしたる事はさぞ侍る。輕々しきやうに、思し驚くまじき事」と聞え給ふ。（三）睨み給ひしに見合せたまふと見しけにや、御目煩ひ給ひて、堪へがたう惱み給ふ。御つつしみ、内裏（四）にも宮にも限なくせさせ給ふ。太政（五）大臣亡せ給ひぬ。理（六）の御齢なれど、（七）次々におのづから騒しき事あるに、大宮（八）もそこはかとなう煩ひ給ひて、程經れば弱り給ふやうなる、内裏に思し歎く事様々なり。帝「なほこの源氏の君、まことに犯す事なきにて斯く沈むならば、必ずこの報ありなむとなむ覺え給ふ。今はなほ本の位をも賜ひてむ」と、度々思し宣ふを、弘徽殿（九）「世のもどきあはあはしき様なるべし。罪に懼ぢて都を去りし人を、三年をだに過さず許されむことは、世の人もいかゞ言ひ傳へ侍らむ」など、后固う諫め給ふに、（一〇）思しはゞかる程に、月日重りて、（一一）御惱どもさまざまに重り增らせ給ふ。

(一)人も同じ心に見知りぬべき程推量りて、書き交し給ふに、(二)似げなからず。心深く(三)思ひあがりたる氣色も見ではやまじ、と思すものから、良清が(四)領じていひし氣色も目ざましう、(五)年頃心づけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしう、思し廻らされて、(六)人進み參らば然る方にても紛はしてむと思せど、女はた、中々やむごとなき際の人よりも痛うおもひあがりて、(七)妬げにもてなし聞えたれば、(八)心比べにてぞ過ぎける。京の事を、かく(九)關隔たりては、愈覺束なく思ひ聞え給ひて、(一〇)如何にせまし、(一一)戯れ憎くもある哉、忍びてや(一二)迎へ奉りてまし、と思し弱る折々あれど、(一三)然りとも斯くてやは年を重ねむ、(一四)今更に人わろき事をやは、と思ししづめたり。

その年、(一五)おほやけに、物のさとし頻りて、物さわがしき事多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風さわがしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下にたゝせ給ひて、御氣色いと惡しうて、睨み聞えさせ給ふを、(一六)畏まりておはします。(一七)聞

(一)明石も我と同じく哀を感じ居るならんと思ふ頃を見計らひて
(二)姫が相當に返事する
(三)直接に氣位の高い所を是非見てやりたし
(四)段持物の様に言ひたる口振
(五)年來執心なる良清の眼前で見せつけて鼻をあかせるも氣の毒に思はれ
(六)女から持懸けて來たら、其をしほに目立たぬ様に本望遂げんと
(七)氣を持たせる様に構へ居れば
(八)睨めくら
(九)須磨の關を越えて都に又遠くなりては
(一〇)源の心
(一一)「ありぬやと試みがてらあひ見ねば戯れにくき迄ぞ戀しき」
(一二)紫を
(一三)田舍に何時迄居るものか
(一四)今になりて外聞惡き事も出來ぬ
⑩朱雀帝の夢、帝源氏を召還さんとす
(一五)朝廷に天の警と思はるゝ變事多く
(一六)朱雀が
(一七)桐壺が言聞かせる

きたるかなと、目ざましう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉も(一)などかづけたり。

またの日、源「宣旨書(二)は、見知らずなむ」とて、

源「いぶせくも心にものをなやむかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言ひ難み(三)」と、この度はいといたうなよびたる薄樣に、いと美しげに書き給へり。

(四)若き人のめでざらむも、いとあまりうもれいたからむ、めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかなか、(六)世にあるものと尋(五)ね知り給ふにつけて、涙ぐまれて、更に例の動なきを、責めて言はれて、淺からずしめたる(七)紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

明石「思ふ(八)らむ心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたる樣など、やむごとなき人にいたう劣るまじう上手(九)めきたり。(一〇)京のこと覺えて、をかしと見給へど、うちしきりて(一一)遣さむも、人目つゝましければ、二三日隔てつゝ、徒然なる夕暮、もしは物哀なる曙などやうに紛はして、をりをり

(一)女の裳などをくれたり、海邊の事故装に譲をかく
(二)代筆ては承知せぬ
(三)尋ねてくれる人なき故心一つに物を思ふ
(四)明石上の心
(五)身分が不釣合で
(六)人がましく文をつけられたので、却て口惜しくて返事を書かうともせ
(七)香を焚きしめたる
(八)見ぬ戀にあこがれられる程の我ならねば、思ひ惱み給ふと言はるゝ君の心が疑はるゝ
(九)貴人めきたり
(一〇)女道樂に馴れし京にての生活が思ひ出されて
(一一)再々手紙を遣るの

源　(一)をちこちも知らぬ雲井にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ

思ふには。(二)

とばかりやありけむ。入道も、(三)人知れず待ち聞ゆとて、かの家に來居たりけるも著ければ、(四)御使いとまばゆきまで醉はす。(五)御かへりいとひさし。(六)内に入りてそゝのかせど、女は更に聞かず。(七)いと恥かしげなる御文の樣に、(八)さし出でむ手つきも恥かしうつゝましう、(九)人の御ほど我身のほど、思ふにこよなくて、心地あしとて寄り臥しぬ。言ひわびて入道ぞ書く。

入道　(一〇)いともかしこきは、田舍びて侍る袂に、つゝみあまりぬるにや、(一一)更に見給へも及び侍らぬかしこさになむ。さるは、

(一二)ながむらむ同じ雲井をながむるは思ひもおなじ思ひなるらむ

となむ見給ふる。いとすき〲しや。

と聞えたり。陸奥國紙に、いたう古めきたれど、書きざま由ばみたり。(一三)實にも好

(一)今迄噂にのみ聞きて戀ひ居たるが、入道の言を力にして今初めておとづるゝなり
(二)「思ふには忍ぶる事ぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」
(三)頃への源の手紙を
(四)使の餘りに歓待されて恥かしき程に馳走す
(五)源の返事に手間がかかる
(六)入道が
(七)源の心
(八)御返事を書くとて
(九)自他の身分を思へば餘りの段違なるに恥ぢて
(一〇)勿體なき仰は、田舍者には御受も申上げかねたるにや
(一一)源は拜見もしかねたる故、恐れながら代りて御返事申上ぐ
(一二)君の眺むる空を我も眺むるは、君と我と同じ思なればならん
(一三)手紙にすき〲しやとある通り、成程氣取り居るわい

ほそき獨寢のなぐさめにも」など宣ふを、限なく嬉しと思へり。

入道「(一)ひとりねは君も知りぬやつれ〴〵と思ひあかしの浦淋しさを

まして年月思ひ給へ(二)わたるいぶせさを、おしはからせ給へ」と聞ゆるけはひ、うち戰きたれど、さすがに故なからず。源「されど浦なれ(三)給ひつらむ人は」とて、

源(四)旅衣うらがなしさにあかしかね草のまくらはゆめもむすばず

とうち亂れ給へる御樣は、いとぞ愛敬づき、(五)いふよしなき御けはひなる。數知らぬ事ども聞え盡し(六)たれど、うるさしや(七)。僻事どもに書きなしたれば、いとゞ、嗚呼にかたくなしき入道の、心ばへも顯れぬべかゝめり。

(八)思ふ事かつ〴〵かなひぬる心地して、すゞしう(九)思ひ居たるに、又の日の晝つ方、(一〇)閑邊に御文つかはす。(一一)心恥かしきさまなゝめるも、なか〳〵斯かる(一二)物の隈にぞ思の外なる事もこもるべかゝめると、心づかひし給ひて、(一三)高麗の(一四)胡桃色の紙に、えならず引きつくろひて、

(一)明石の浦に物思ひ明す獨寢の淋しさは君にも御承知なりや
(二)娘の身の上を心配し來れる氣苦勞を察し給へ
(三)住馴れたる君は我よりは寂しさも少かるべし
(四)我は旅客の身なれば悲は一入なり
(五)形容に詞なき程の美しさ
(六)入道が源に
(七)作者の書き方も下手なれば、入道の痴頑なる心情は一層著しく見ゆるならん
㊈源氏と明石上(入道の娘)と文の贈答
(八)入道は此一夕の閑談に、年來の望が先づ〳〵叶へる心地して
(九)胸がすいた樣に思ひ居たるに
(一〇)明石上へ源が
(一一)田舍娘を相手にするは、ちと氣がひける樣なれども
(一二)人知れぬ所に案外立派な女もあるものぢやと
(一三)朝鮮産の
(一四)青色の下に白色の紙を重ねたるをいふ

（一）身分相當に
（二）國守などの申込を謝絶したる由、若菜卷の良淸の噂に見えたり
（三）私存生中は鬼も角もして世話もすべし
（四）娘の緣付かぬ中に入道が死にたらば
（五）言ひ付け置けり
（六）口眞似も出來ぬ事
（七）恰も物思多き折柄故
（八）寃罪
（九）如何なる因果ならんと
（一〇）聞いて思合すれば
（一一）合點し居たる事を
（一二）佛前の勤
（一三）いくぢなくなれり
（一四）明石上の事は噂に聞き居たれども
（一五）無用の人、源自身
（一六）厭ふべきものとして相手にせぬならんと尻込みして居しに
（一七）娘に引合はせてくれるといふのか

は生れし時より頼む所なむ侍る。如何にして都の貴き人に奉らむと思ふ心深きにより、程々につけて、（一）あまたの人のそねみを負ひ、身のため辛きめを見る折々も多くはべれど、更に苦（二）と思ひ給へず、（三）命の限は狭き袖にもはぐくみ侍りなむ、（四）かくながら見棄て侍りなば、波の中にもまじり失せね、となむおきて（五）侍る」など、すべてまねぶ（六）べくもあらぬ事どもを、うち泣き泣き聞ゆ。君も物を（七）さまざま思し續くる折からは、うち涙ぐみつゝ聞しめす。源「（八）横ざまの罪にあたりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかと（九）覺束なく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはす（一〇）れば、げに淺からぬ前の世の契にこそはと哀になむ。などかは、斯く定かに（一一）思ひ知り給ひけることを、今までは告げ給はざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行（一二）より外のことなくて月日を經るに、（一三）心も皆くづほれにけり。（一四）かゝる人ものし給ふとはほの聞きながら、（一五）いたづら人をば、（一六）ゆゝしきものにこそ思ひ捨て給ふらめ、と思ひ屈しつるを、さらば導き（一七）給ふべきにこそあゝなれ。心

て、月も入方になるまゝにすみまさりて、靜なるほどに、御物語のこりなく聞えて、この浦に住み始めし程の心づかひ、後の世をつとむる樣、(一)かきくづし(二)聞えて、この女のありさま、問はずがたりに聞ゆ。(三)をかしきものの、さすがに哀と聞き給ふ節々もあり。入道「いととり(四)申し難き事なれど、我君、(五)斯うおぼえなき世界に、假にても移ろひおはしましたるは、若し、年頃(六)老法師の祈り申し侍る神佛の憐みおはしまして、暫しの程(七)御心をも惱まし奉るにや、となむ思ひ給ふる。その故は、住吉の神を頼み始め奉りて、この十八年になり侍りぬ。女の童の幼う侍りしより、(八)思ふ心侍りて、年ごとの春秋毎に、かの御社に參ることなむ侍る。(九)晝夜の六時のつとめに、(一〇)みづからの蓮の上の願をばさるものにて、唯(一一)この人を、高き本意かなへ給へとなむ念じ侍る。(一二)前の世の契拙くてこそ、かく口惜しき山賤となり侍りけめ、親大臣の位を保ち給へりき。(一三)自らかく田舍の民となりて侍り。(一四)つぎつぎさのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむ、と悲しく思ひ侍るを、(一五)これ

(一)入道が
(二)ほつ／＼と話して
(三)源の心
(四)申上げにくき
(五)思もよらぬ田舍に
(六)入道自身
(七)源の
(八)私思ふ仔細ありて
(九)一晝夜六回の佛前の勤、晨朝日中日沒初夜中夜後夜
(一〇)自己の極樂往生の願はさて措き
(一一)娘を出世させ給へとのみ願へり
(一二)私は
(一三)私が
(一四)子孫が段々賤しくなり行かば終には何になるならんと
(一五)此事につきては出生當時より信ずる所あり

(一)入道の家にそつくり相傳してあるは
(二)どうかして聞きたいものぢや
(三)白樂天琵琶行の故事、白樂天潯陽江に客を送りて長安の名妓の落ぶれて茶商人の妻となれるに遇ひ、昔習ひたる琵琶を彈かせ聞きて大に感慨せりといふ趣
(四)手に入れる人
(五)私の頃は
(六)どう習つたのか
(七)田舎に置くのは
(八)風流がり
(九)熱心に
(一〇)左手の音
(一一)催馬樂「伊勢海」の句
(一二)源も
(一三)入道が
(一四)強ひつけ

心やりばかりにのみあるを、こゝに(一)かう弾き込め給へりける、いと興ありけることかな。いかでかは(二)聞くべき」と宣ふ。入道「聞し召さむには何の憚かは侍らむ、御前に召しても。商人(三)の中にてだにこそ、ふることと聞きはやす人は侍りけれ。琵琶なむまことの手を(四)弾きしづむる人、いにしへも難う侍りしを、(五)をさ〳〵滞ることなう、なつかしき手など筋殊になむ。いかでたどるにか(六)侍らむ。荒き(七)浪の聲にまじるは、悲しうも思ひ給へられながら、かきつむる物なげかしさ、紛るゝ折々も侍る」など、すきゐたれば(八)、をかしとおぼして、箏の琴とりかへて給はせたり。げにいとすぐして(九)搔い弾きたり。今の世に聞えぬ筋ひきつけて、手づかひいといたう唐めき、ゆの音(一〇)ふかう澄したり。伊勢の海ならねど、「淸きなぎさに(一一)貝やひろはむ」など、聲よき人に謠はせて、我も(一二)時々拍子とりて、聲打添へ給ふを、琴弾きさしつゝ(一三)めで聞ゆ。御菓子など珍らしき樣にて參らせ、人々に酒强ひ(一四)そしなどして、おのづから物忘れもしぬべき夜のさまなり。いたく更け行くまゝに、濱風涼しう

（一）非常によく出る
（二）源と入道と
（三）箏は
（四）何の考もなく
（五）むやみに笑顔に入りて、願ひ事を持出す好機會と思ひて也
（六）源の彈くに勝れるは決してあらじ
（七）私は醍醐帝の彈方を傳へたる三代目なるが
（八）不快でたまらぬ時は彈きて心を慰めたるに
（九）私に習へる娘の手が自ら私の師たりし某親王の手に似たり
（一〇）然思ふは私の耳が惡くて松風を琴の音と聞違へて居るのかも知れぬ
（一一）娘の琴を窃に御聞かせ申したし
（一二）我が彈く拙き調などは何とも思ふまじき其樣な上手の居る處で彈いたのは忌々しい。松風に耳馴れにける山伏は琴を琴とも思はざりけり
（一三）琴を
（一四）上手に彈く
（一五）嵯峨帝の傳を受けたる同帝第九の皇女
（一六）其血統の人々には彈方を受傳へたる者なし
（一七）口もと許り習ひたる自分免許ばかりなるに

さして」と哀におぼゆ。音もいとになう出づる琴どもを、（二）いと懐しう彈き鳴したるも、御心とまりて、源「これは、（三）女の、懐しきさまにて、しどけなく彈きたるこそをかしけれ」と、（四）大かたに宣ふを、入道はあいなくうち笑みて、（五）入道「遊ばすより懐（六）しき様なるは、いづこのか侍らむ。（七）なにがし延喜の御手より彈き傳へたること、三代になむなり侍りぬるを、斯う拙き身にて、この世のことは捨て忘れ侍りぬるを、（八）物の切にいぶせきをりをりは、かき鳴し侍りぬるを、（九）怪しうまねぶものの侍るこそ、自然にかの前大王の御手に通ひて侍れ。（一〇）山伏のひが耳に、松風を聞きわたし侍るにやあらむ。（一一）いかで、これ忍びて聞し召させてしがな」と聞ゆるまゝに、うち戰きて涙おとすべかめり。君、源「（一二）琴を琴とも聞き給ふまじかりけるあたりに、妬きわざかな」（一三）とておしやり給ふ。源「怪しう昔より、箏は女なむ（一四）彈きとるものなりける。（一五）嵯峨の御傳にて、女五の宮、さる世の中の上手に物し給ひけるを、（一六）その御筋にて、取り立てて傳ふる人なし。すべてたゞ今世に名を取れる人々、（一七）かきなでの

(一)琴の音に感動してぞつとして風を引く
(二)一旦棄てたる俗世界を又思ひ出す
(三)極樂淨土の有樣泫源の妙音によりて想像せらるゝ
(四)源の心
(五)肉聲
(六)源が
(七)帝以下總ての人に
(八)老人、入道
(九)源にすゝめたれば
(一〇)何につけても源の勝れたるよと入道感心せり
(一一)格別よくもなき音樂でも、場合によりてよく聞ゆるものなるに
(一二)叩く如き音して啼く
(一三)「まだ宵に打來て叩く水鷄かな誰が門さして入れぬなるらん」

ろひ人ども、(一)すゞろはしくて、濱風をひきありく。入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ參れり、入道「さらに、(二)背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍る。(三)後の世に願ひ侍る所の有樣も、思う給へやらるゝ夜の有樣かな」と、泣く〳〵めで聞ゆ。(四)我が御心にも、折々の御遊、その人かの人の琴笛、もしは(五)聲の出でし樣、時々につけて、(六)世にめでられ給ひし有樣、(七)帝より始め奉りて、もてかしづき崇められ奉り給ひしを、人の上も、我が御身の有樣も、思し出でられて、夢の心地し給ふまゝに、搔鳴し給へる聲も、心すごく聞ゆ。(八)古人は涙もとゞめあへず、岡邊に琵琶箏の琴取りにやりて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手一つ二つ彈き出でたり。箏の御琴(九)まゐりたれば、少し彈き給ふも、(一〇)樣々いみじうのみ思ひ聞えたり。(一一)いとさしも聞えぬ物の音だに、折からこそは增るものなるを、遙々と物の滯りなき海面なるに、なか〳〵、春秋の花紅葉の盛なるよりは、唯そこはかとなう繁れる蔭どもなまめかしきに、水鷄の(一二)うちたゝきたるは、「(一三)誰が門

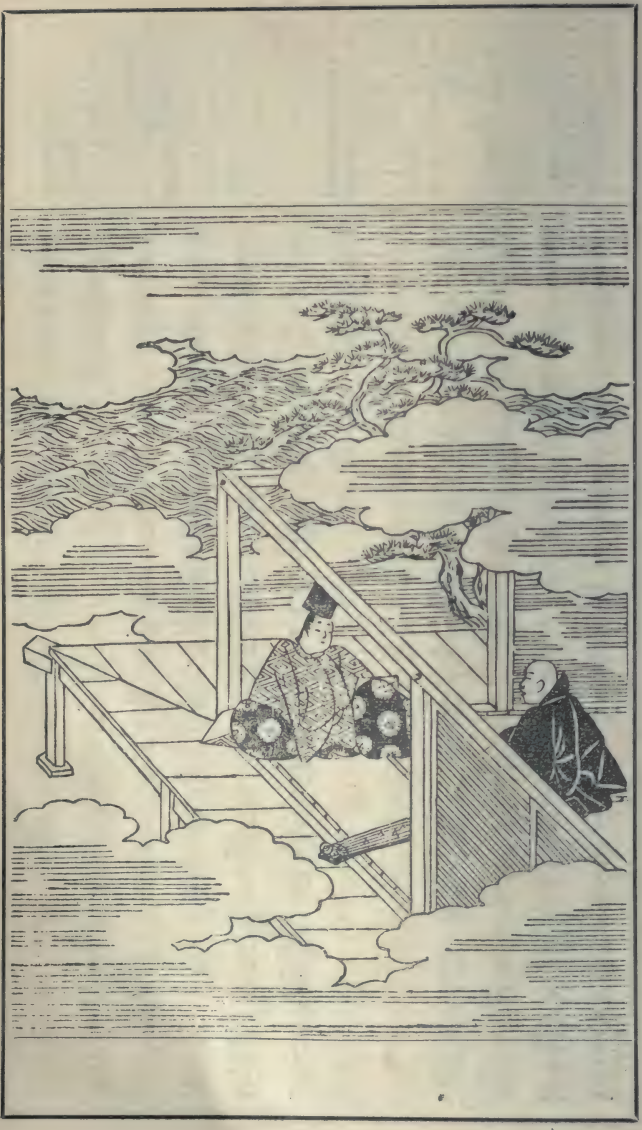
四月になりぬ。更衣の御裝束、御帳の帷子(一)など、由ある樣にし出づ。よろづに仕う奉り營むを、いとほしうすゞろなり(三)と思せど、人樣(二)のあくまで(四)思ひあがりたるさまのあてなるに、思しゆるして見給ふ。京よりも、うち頻りたる御訪ども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見え渡れるも、住み馴れ給ひし故里の池水に、思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しきこと何方ともなく(五)、行方なき心地し給ひて、たゞ目の前に見やらるゝは、淡路島なりけり。

源「あはと遙に」(六)など宣ひて、

源　あはと見る(七)淡路の島のあはれさへ殘るくまなく澄める夜の月

久しう手も觸れ給はぬ琴を、袋より取り出で給ひて、はかなく搔鳴し給へる御樣を、見奉る人も、やすからず(八)哀に悲しう思ひあへり。廣陵(九)といふ手を、あるかぎり彈きすまし給へるに、かの岡邊の家(一〇)も、松の響波の音にあひて、心ばせある若き人は、身にしみて思ふべかゝめり。何とも聞きわくまじき、このもかのものしはぶ(一一)

⑧　月夜入道源氏の前に琴を彈く、娘を奉る約束
(一)垂布、夏冬にてかはる也
(二)入道が
(三)出過ぎた仕方
(四)入道が非常に氣位高く上品なるに免じて
(五)誰をあてといふ事も無く戀ふる目的のなき心持して
(六)「淡路にてあはと遙に見し月の近き今宵は處からかも」
(七)色々の物思に加へて淡路島の面白さに對する感さへ、「あは」とは「彼は」との義
(八)感に堪へて
(九)廣陵散、祕曲なりといふ
(一〇)娘の住める家の方に琴の音の聞えたる也
(一一)「しはぶかひ人」の誤にて、咳嗽する人、即老人の義なるべしといふ



で思ふ心をかなへむと、佛神をいよ〳〵念じ奉る。年は六十ばかりになりたれど、いと清げにあらまほしう、行ひさらぼひて、人の程のあてはかなればにやあらむ、(一)うちひがみ(二)ほれ〴〵しき事はあれど、いにしへの事をも見知りて、物きたなからず、由づきたることも交れれば、昔の物語などせさせて聞き給ふに、少し徒然のまぎれなり。(三)年頃公私御いとまなくて、さしも聞き置き給はぬ世の故事どもも、(四)くづし出でて聞ゆ。(五)かゝる所をも人をも見ざらましかば、さう〴〵しくや、とまで、興ありと思す事もまじる。(六)斯うは馴れ聞ゆれど、(七)いと氣高う心恥かしき御有様に、(八)さこそ言ひしか、つゝましうなりて、(九)わが思ふことは心の儘にもえうち出で聞えぬを、心もとなう口惜しと、(一〇)母君といひ合せてなげく。(一一)正身も、(一二)おしなべての人だにめやすきは見えぬ世界に、(一三)世にはかゝる人もおはしけりと見奉りしにつけて、(一四)身のほど知られて、いと遙にぞ思ひ聞えける。親たちのかく(一五)思ひあつかふを聞くにも、似げなき事かなと思ふに、(一六)たゞなるよりは物あはれなり。

(一)人品よき故かして
(二)耄碌じみたる
(三)源が
(四)入道がぼつ〳〵話す
(五)明石に來ず入道に逢はざりしならば寂しかるべしと思ふ位
(六)入道が源に
(七)源の
(八)彼程熱心なりしかども恥かしくなりて
(九)娘の事を十分に申上げられぬを
(一〇)入道の妻
(一一)本人、娘
(一二)一通りのよい男さへ見られぬ此田舍で
(一三)源を見て斯る男もあるものかと思ふにつけ
(一四)我身分を顧みて、源には及びもない事と思ひ居れり
(一五)娘を源にと心配するを聞きても
(一六)そんな企の丸で無いよりは

(一)意氣揚々たり
(二)明石は賑すぎるとて源が厭ひはしたれども
㊆入道娘の事を言出し得ずして氣を揉む
(三)佛道に凝り固まりては居れど
(四)氣扱ひにして居る
(五)聞く源の心にも兼て美人と聞居たる娘なれば
(六)不慮に此所へ來たのも
(七)娘との宿縁にやと
(八)謹愼中は佛道に心を專にせん
(九)緊
(一〇)謹愼せず女に手出しでもすると自分を口程にもないと思ふならんと
(一一)入道が謎をかけても取合はず
(一二)娘の樣子を聞いて成程勝れた女ぢやわいと思ひて
(一三)源の所へは入道が敬意を表して容易に來ず
(一四)入道が源を

よなき御志の程と、人々見奉る。おのく\故郷に、心細げなる言傳すべかめり。小歇なかりし空の氣色、名殘なく澄みわたりて、漁する海士どもほこらし(一)げなり。須磨はいと心ぼそくて、海士の岩屋も稀なりしを、人しげき厭ひはし給(二)ひしかど、こゝは又、樣異に哀なること多くて、萬に思しなぐさまる。あるじの入道、(三)行ひ勤めたる樣、いみじう思ひすましたるを、唯この女一人をも(四)て煩ひたる氣色、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へ聞ゆ。(五)御心地にも、をかしと聞きおき給ひし人なれば、斯くおぼえなくて(六)廻りおはしたるも、然るべき契あるにや(七)と思しながら、なほ斯う身を沈めたる(八)程は、行より外のことは思はじ、都の人も(九)、たゞなるよりは(一〇)、いひしに違ふと思さむも、心恥かしうおぼさるれば、氣色だち給ふことなし(一一)。事に觸れて、心ばせ(一二)有樣なべてならずもありけるかなと、ゆかしう思されぬにしもあらず。こゝには畏まりて(一三)、自らもをさく\參らず。物隔たりたる下の屋に侍ふ。さるは旦暮(一四)見奉らまほしう、飽かず思ひ聞えて、いか

(一)少し御心しづまりては、京の御文ども聞え給ふ。(二)參れりし使は、今は、(三)いみじき道に出で立ちて悲しき目を見る」と泣き沈みて、あの須磨にとまりたるを召して、身に餘れる物ども多く賜ひてつかはす。むつまじき御祈の師ども、さるべき所々には、この程の御有樣、委しく言ひつかはすべし。(四)(五)入道の宮ばかりには、(六)珍らかにて蘇れるさまなど聞え給ふ。二條院の哀なりし程の御かへりは、書きもやり給はず。打置き〳〵押し拭ひつゝ聞え給ふ御氣色、なほ殊なり。

源　かへす〴〵いみじき目の限を見盡しはてつる有樣なれば、今はと世をおもひ(七)離るゝ心のみまさり侍れど、(八)鏡を見てもと宣ひし面影の離るゝ世なきを、(九)斯く覺束なながらやと、こゝら悲しき樣々のうれはしさはさし措かれて、

はるかにも(一〇)思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦傳ひして

夢の中なる心地のみして、(一一)覺めはてぬほど、いかに僻事多からむ。

と、そこはかとなく書き亂り給へるしもぞ、(一二)いと見まほしき側目なるを、いとこ

㊅　源氏より都の方々へ文
(一)源が少し落着きて都へ手紙を出す
(二)京よりの使
(三)飛でもない使に來て
(四)内々にて祈禱を頼みしなさるべし
(五)藤壺
(六)不思議に助かれる
(七)出家の希望
(八)須磨巻にある紫の歌
(九)此儘又逢はずに出家するのかと思ふと、色々のつらい事はそつちのけになりて君への名殘ばかり惜まれる
(一〇)君がすむ都を
(一一)心の確ならぬ中に書きたる手紙なれば
(一二)傍から見て居て讀んで見たい樣に思はれるを

(一)念佛三昧
(二)現世の生活の料に米を積込み、晩年を氣樂に送るべき
(三)源が
(四)源が乘り移る時分
(五)入道が源を
(六)入道が
(七)稽古の淺き
(八)今までの須磨の住居
(九)室内の飾付なども結構にて
(一〇)都の貴顯の邸宅にも勝る位に

屋、行をして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立てて、(一)三昧行ひ、(二)この世のまうけに、秋の田の實を刈り納め、殘の齢積むべき稻の倉町どもなど、折々所につけたる見所ありてしあつめたり。高潮に懼ぢて、この頃、女などは岡邊の宿に移して住ませければ、この濱の館に(三)心安くおはします。船より御車に(四)奉り移るほど、日やう〳〵さしあがりて、ほのかに(五)見奉るより、老も忘れ齡延ぶる心地して、笑みさかえて、まづ住吉の神を、かつ〳〵拜み奉る。(六)月日の光を手に得奉りたる心地して、いとなみ仕う奉ること理なり。所の樣をば更にもいはず、作りなしたる心ばへ、木立立石、前栽などの有樣、えもいはぬ入江の水など、繪に畫かば、(七)心のいたり少からむ繪師は、畫き及ぶまじと見ゆ。(八)月頃の御住居よりは、こよなく明かになつかし。(九)御しつらひなどえならずして、住ひけるさまなど、げに都のやむごとなき所々に異ならず。艶にまばゆきさまは、(一〇)まさりざまにぞ見ゆる。

(一)老子に「不レ退有レ咎」
(二)已に命限りの危險をも犯し、類なきひどい目にも遇ひたる上は
(三)今後の名譽をかばひ立した處が役にも立たと
(四)「波にのみ濡れつるものを吹く風の便り嬉しきあまの釣船」
(五)明石に
(六)入道が
(七)源を我船に載せよ
(八)源の昵近者四五人計御供にて乘船す
(九)不思議なる順風
(一〇)元來近き距離なれば

㊄ 明石入道の濱の館

べきものなり、(一)退きて咎なしとこそ、昔の賢しき人も言ひ置きけれ、げにかく(二)命をきはめ、世に又なき目の限を見盡しつ、更に(三)後のあとの名をはぶくとても、たけき事もあらじ、夢の中にも父帝の御教ありつれば、また何事をか疑はむ、と思して、御かへり宣ふ。源「知らぬ世界に、珍らしき憂のかぎり見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。たゞ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友とながめ侍るに、(四)うれしき釣船をなむ。(五)かの浦に靜やかに隱らふべき隈侍りなむや」と宣ふ。(六)限なく喜び、かしこまり申す。ともあれかくもあれ、夜の明けはてぬ(七)前に御船に奉れ、とて、例の(八)親しきかぎり、四五人ばかりして奉りぬ。(九)例の風出で來て、飛ぶやうに明石につき給ひぬ。(一〇)たゞ這ひわたる程は片時の間といへど、なほ怪しきまで見ゆる風の心なり。

濱の樣、げにいと心異なり。人繁う見ゆるのみなむ、御心に背きける。入道の領じ占めたる所々、海の面にも山がくれにも、時々につけて、興を探すべき渚の苫



(一)外國にても
(二)多かりし故
(三)源方にも夢の告など著しありはせざりしかと思ひて御尋ね申上ぐる
(四)夢にも現にも色々な天の警の如き事を過去未來に考へ合せて
(五)此警は實に神の助の樣なるに、人の誹を怖れて之に背かば、倒一層人の嘲を招くかも知れぬ
(六)人間の心にさへ背きにくきに、況や神慮には背き難し
(七)經驗ある年長者又は我より地位人望勝れたる人には隨ひて其仕向に任すべきもの也

驗見せむ、船を裝ひ設けて、必ず、雨風やまばこの浦に寄せよ、と、重ねて示すことの侍りしかば、試に船のよそひを設けて待ち侍りしに、嚴しき雨風、雷の驚かし侍りつれば、(一)他の朝にも、夢を信じて國を助くる類(二)多う侍りけるを、用ゐさせ給はぬまでも、このいましめの日を過さず、この由を告げ申し侍らむとて、船出し侍りつるに、怪しき風細う吹きて、この浦に著き侍ること、まことに神のしるべ違はずなむ。(三)こゝにも若し知ろしめす事や侍りつらむとてなむ。いとも憚り多く侍れど、この由申し給へ」といふ。良清忍びやかに傳へ申す。君は思しまはすに、(四)夢現さまゞゝ靜ならず、さとしの樣なる事どもを、來し方行く末思し合せて、(五)世の人の聞き傳へむ後の誹謗も安からざるべきを憚りて、まことの神の助にもあらむを、背くものならば、又これより勝りて、人笑はれなる目をや見む、(六)現の人の心だになほ苦し。はかなき事をもかつ見つゝ、(七)我より齡まさり、もしは位高く、時世のよせ今ひときはまさる人には、靡き隨ひて、その心むけをたどる

(一)現在の悲をも忘れて
(二)胸がふさがるので
(三)再び桐壺が見ゆるかと

㈣ 明石入道の迎船、源氏明石に移る

(四)前播磨守入道、即ち明石入道
(五)良淸
(六)事情を申上げん
(七)源に相談する詞
(八)播磨にての知人にて
(九)入道の恨の事
(一〇)格別便りもせずして
(一一)不審がる
(一二)源は夢の告に思ひ合する所あれば

ひに、現の悲しきことも打忘れて(一)、夢にも御答を今少し聞えずなりぬる事といぶせさに(二)、又や見え給ふと(三)、ことさらに寢入り給へど、更に御目もあはで、曉方になりにけり。

渚に小やかなる船寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿をさして來。何人ならむと問へば、明石の浦より、さきのかみ新發意の(四)、御船裝ひて參れるなり。入道「源少納言侍ひ給はば(五)、對面して事の心とり申さむ(六)」といふ。良淸驚きて、良淸「入道(七)はかの國の得意にて(八)、年頃あひ語らひ侍りつれど、私にいさゝか相怨むる事侍り(九)て、ことなる消息をだに通はさで(一〇)、久しうなり侍りぬるを、波のまぎれに、如何なる事かあらむ」とおぼめく(一一)。君の御夢なども思し合する事もありて(一二)、源「早逢へ」と宣へば、船に往きて逢ひたり。さばかり烈しかりつる波風に、いつの間にか船出しつらむと、心得がたく思へり。入道「去ぬる朔日の日の夢に、樣異なるものの告げ知らする事侍りしかば、信じ難き事と思ひ給へしかど、十三日にあらたなる

(一)今の厄難は
(二)死後其罪を償ふ爲に忙しくて娑婆の事はかまはざりしが
(三)汝が
(四)源が
(五)桐壺の俤殘れる心地して
(六)目先にちらつきて
(七)天を翔りて來れると
(八)此天變が却て仕合であつたと
(九)あつけなき

しこなた、様々悲しき事のみ多く侍れば、今はこの渚に身をや捨て侍りなまし」と聞え給へば、桐壺「いとあるまじき事。(一)これは唯いさゝかなるものの報なり。我は、位にありし時過つ事なかりしかど、おのづから犯ありければ、(二)その罪を終ふる程いとまなくて、この世を顧みざりつれど、(三)いみじき憂に沈むを見るに、堪へ難くて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれど、かゝる序に内裏に奏すべき事あるによりなむ、急ぎ上りぬる」とて、立去り給ひぬ。(四)飽かず悲しくて、御供に參りなむと泣き入り給ひて、見上げ給へれば、人もなくて、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、(五)御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。年頃夢の中にも見奉らで戀しう覺束なき御樣を、ほのかなれど、さだかに見奉りつるのみ、(六)面影に覺え給ひて、我がかくかなしみを極め、命盡きなむとしつるを、助けに翔り給へる(七)と哀に思すに、能くぞ(八)かゝる騒もありけると、名殘たのもしう、嬉しう覺え給ふ事限なし。胸つとふたがりて、(九)なか〳〵なる御心惑

(一)此近所には
(二)此天變の原因を辨へたる者なし
(三)陸へ上りて
(四)磯人等の
(五)住吉明神の助なくば沖遙に流されしならん
(六)揉みに揉みて吹ける
(七)何といふても
(八)源を置くは勿體なき粗末なる居處の事なれば、一寸寄り懸りて眠りたるに
(九)在世の時の通りなる
(一〇)居るぞ
(一一)桐壺に

に、名残なほ寄せかへる浪荒きを、柴の戸押し開けて詠めおはします。(一)近き世界に、物の心を知り、來し方行くさきの事うち覺え、とやかくやとはか〴〵しう(二)悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、貴き人おはする所にて、集り參りて、聞きも知り給はぬ事どもを囀りあへるも、いと珍かなれど、え追ひも拂はず。海士「この風今暫し歇まざらましかば、(三)潮のぼりて殘る所なからまし。神の助け疎ならざりけり」と(四)いふを聞き給ふも、いと心細しといへばおろかなり。

源 (五)海にます神のたすけにかゝらずば潮の八百會にさすらへなまし

終日に(六)いりもみつる風のさわぎに、(七)さこそいへいたう困じ給ひにければ、心にもあらずうちまどろみ給ふ。(八)かたじけなき御座所なれば、たゞ寄り居給へるに、故院のたゞ(九)おはしましゝ樣ながら立ち給ひて、桐壺「など斯くあやしき所には物する(一〇)ぞ」とて、御手を取りて引き立て給ふ。桐壺「住吉の神の導き給ふまゝに、はや船出して、この浦を去りね」と宣はす。いと嬉しくて、源「(一一)畏き御影に別れ奉りに

(一)現世にて犯せる罪の報か
(二)源の居間に續きたる
(三)居合せたる人皆肝を消して茫然たり
(四)炊事場
(五)源を
(六)上下の人々差別なく
(七)亂りがはしく
㊂　源氏夢に父帝の諭を蒙る
(八)源の居處
(九)兎に角夜明けてからの事にせんとてぐづ〳〵して居るに

去りて、旦暮安き空なく歎き給ふに、かく悲しきめをさへ見、命盡きなむとするは、前の世の報か、(一)この世の犯か、神佛明にましまさば、このうれへ息め給へ」と、御社の方に向きて、さま〲の願を立て、又海の中の龍王、萬の神たちに願たてさせ給ふに、いよ〳〵鳴り轟きて、(二)おはしますに續きたる廊に落ちかゝりぬ。炎燃えあがりて、廊は燒けぬ。(三)心魂なくて、ある限惑ふ。後の方なる大炊殿と(四)思しき屋に移し(五)奉りて、(六)上下となく立ち込みて、(七)いとらうがはしく泣きとよむ聲、雷にも劣らず。空は墨をすりたる樣にて、日も暮れにけり。

やう〳〵風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、(八)この御座所のいと珍らかなるも、いとかたじけなくて、寢殿にかへし移し奉らむとするに、燒け殘りたる方も、疎ましげに、そこらの人の踏み轟かし惑へるに、御簾なども皆吹き散らしてけり。(九)夜をあかしてこそはとたどりあへるに、君は御念誦し給ひて、思しめぐらすに、いと心あわたゞし。月さし出でて、潮の近く滿ち來けるあともあらは

り閃くさま、更にいはむ方なくて、落ちかゝりぬと覺ゆるに、(一)ある限さかしき人なし。(二)「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、悲しき妻子の顏をも見で、死ぬべきこと」と歎く。(三)君は御心をしづめて、(四)何ばかりの過失にてか此の渚に命をば極めむと、強う思しなせど、いと物騷がしければ、いろいろの幣帛捧げさせ給ひて、源「住吉の神近き境をしづめ守り給へ。(五)まことに跡を垂れ給ふ神ならば助け給へ」と、多くの大願を立て給ふ。(六)おの〳〵自らの命をばさるものにて、(七)かゝる御身の、(八)またなき例に沈み給ひぬべきことの、いみじう悲しきに、(九)心を起して、(一〇)少し物覺ゆるかぎりは、身に代へてこの御身一つを救ひ奉らむとよみて、(一一)諸聲に佛神を念じ奉る。(一二)「帝王の深き宮に養はれ給ひて、いろいろの樂に驕り給ひしかど、(一三)深き御うつくしみ、大八洲に普く、沈める輩をこそ多く浮べ給ひしか。今何の報にか、(一四)こゝら橫ざまなる波風には(一五)おぼほれ給はむ。(一六)天地ことわり給へ。罪なくて罪にあたり、官位を取られ、家を離れ、境を

(一)皆分別を失へり
(二)從者等の言
(三)源氏
(四)我は其程の罪を犯したる事なければ、此處に命を失ふ筈なしと
(五)住吉に鎭座して國土を守り給ふ神ならば
(六)從者等自分の命の惜きは勿論なれども、其は姑く措きて
(七)源が貴き身を以て
(八)例なき死樣をすべきを悲みて
(九)奮發して
(一〇)正氣のある人は
(一一)騷ぎて
(一二)源の身の上をいふ、以下從者等の祈りの詞
(一三)源の慈悲
(一四)大層なる
(一五)溺れ
(一六)判斷し給へ

(一)涙に海水の量も増る位に、涙の悲をいふ
(二)天の警
(三)仁王經を讀誦して七難即滅七福即生を祈る法會
(四)往來絶えて
(五)氣にかゝりて
(六)雹
(七)つらそうな容顏を見ても
㊂ 源氏の謫居に落雷

うら風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし波間なき頃

哀に悲しきことども書き集め給へり。ひき開くるより、いとゞ汀まさりぬべく、(一)かきくらす心地し給ふ。使者「京にもこの雨風、いと怪しき物のさとしなりとて、(二)仁王會など行はるべしとなむ聞え侍りし。(三)内裏に參り給ふ上達部なども、すべて道とぢて、(四)政も絶えてなむ侍る」など、はかゞしうもあらず、頑しう語りなせど、京の方のことと思せば、いぶかしうて、(五)御前に召し出でて問はせ給ふ。使者「ただ例の雨の小歇なく降りて、風も時々吹き出でつゝ、日頃になり侍るを、例ならぬことに驚き侍るなり。いとかく地の底通るばかりの氷降り、(六)雷のしづまらぬことは侍らざりき」など、いみじき樣に驚き懼ぢて居る顏のいと辛きにも、(七)心細さまさりける。

斯くしつゝ世は盡きぬべきにや、と思さるゝに、その又の日の曉より風いみじう吹き、潮高う滿ちて、浪の音荒きこと、巖も山も殘るまじき氣色なり。雷の鳴



（一）歸京を公許されてでなければ恥の上塗ならん
（二）隱れようかしら
（三）波風に怕れて隱れたり杯と
（四）初め見たる如き物
（五）つき纏ふ
（六）此儘身の破滅になるのかしらと、「はふらかしつる」は「はふらかしはつる」の誤なるべし
（七）法外に
（八）使が濡れくさりて來れり
（九）途中で通りすがひても
（一〇）使者の男をいふ
（一一）體なく
（一二）自分のいくぢなくなりし心
（一三）京の

とて都に歸らむことも、（一）まだ世に許されもなくては、人笑はれなる事こそまさらめ、猶これより深き山をもとめてや（二）跡絶えなまし、とおぼすにも、（三）波風に騷がれてなゝど、人の言ひ傳へむこと、後の世までも、いと輕々しき名をや流しはてむ、と思し亂る。御夢にも、たゞ（四）同じ樣なる物のみ來つゝ、（五）まつはし聞ゆと見給ふ。雲間もなく明け暮るゝ日數にそへて、京の方もいとゞ覺束なく、（六）斯くながら身をはふらかしつるにやと、心ぼそう思せど、頭さし出づべくもあらぬ空の亂に、出で立ちまゐる人もなし。二條院よりぞ、（七）あながちにあやしき姿にて、（八）そほち參れる。（九）道かひにてだに、人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらず、まづ追ひ拂ひつべき（一〇）賤夫の、哀に睦まじう思さるゝも、我ながら（一一）かたじけなく、（一二）屈しにける心の程思ひ知らる。（一三）御文には、

京「あさましく小歇なき頃の氣色に、いとゞ空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ。

㊀風雨歇まず
(一)心丈夫に思つても居られず
(二)源の心
(三)天變あればとて

明石

梗槩

㊀風雨歇まず。紫上の使須磨に來る。㊁立願。源氏の寓居に落雷。㊂源氏夢に桐壺帝の諭を蒙る。㊃明石入道の迎への船。迎へられて源氏明石に移る。㊄明石入道の濱の館。㊅源氏より都の方々へ文を遣る。㊆入道、娘の事を言出し得ずして氣を揉む。源氏漸く入道に親しむ。㊇月夜、入道源氏の前に琴を彈きて娘の噂をなし、終に娘を源氏に奉らん事を約す。㊈源氏と明石上(入道の娘)と文の贈答。源氏紫上を懐ふ。㊉朱雀帝の夢。眼病。二條太政大臣薨去。帝源氏を召還さんとす。⑪明石上の自重。源氏明石上の岡邊の館を訪ふ。⑫源氏、明石上の事を紫上に報ず。紫上を憚りて明石上を訪ふこと繁からず。明石入道父子の痛心。⑬源氏召還の宣旨。源氏入道等の悲喜。明石上懐胎。⑭源氏明石上に別を惜む。⑮上京の首途。入道の斡旋。明石上の離愁。著京。權大納言に任ぜらる。參內。冷泉及藤壺を訪ふ。明石への書簡。

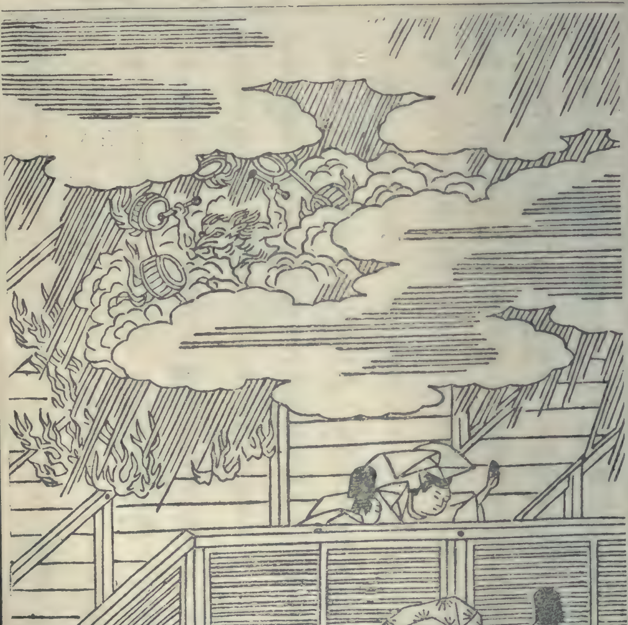
なほ雨風やまず、雷鳴しづまらで日頃になりぬ。いと物わびしき事數知らず、來しかた行くさき悲しき御有樣に、(一)心强うしもえ思しなさず、(二)如何にせまし、(三)斯かり

(一)然は
(二)物に感動する質で
(三)我に執心かけたるならん
(四)うるさく

どろきて、（一）さは海の中の龍王の、いといたう（二）物めでするものにて、（三）見入れたるなりけり、と思すに、いとものむつかしう（四）、この住居堪へがたく思しなりぬ。

(一)俄雨をいふ
(二)雨降らんとは思ひ懸けざりしに
(三)白浪の滿ちたる形容
(四)辿る〜歸り着きて
(五)人々の詞、こんな目には逢つた事がない
(六)前から徴して吹くものぢや
(七)雨の當る所は物を突き通しそうな勢で
(八)源氏
(九)海に溺れかねぬ
(一〇)つなみ
(一一)形の樣に見えぬ
(一二)此宮は内裏の意なるを源は龍宮の意に解釋せる也
(一三)源が夢に見て目さめて

(一)肱笠雨とか降りきて、いとあわたゞしければ、皆歸り給はむとするに、笠も取りあへず。(二)さる心もなきに、よろづ吹きちらし、またなき風なり。波いと嚴しう立ち來て、人々の足をそらなり。海の面は(三)衾を張りたらむ樣に光滿ちて、雷鳴りひらめく。落ちかゝる心地して、辛うじて(四)たどりきて、「(五)斯かる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、(六)氣色づきてこそあれ。あさましう珍らかなり」と惑ふに、なほ止まず鳴りみちて、(七)雨の脚あたる所通りぬべく、はらめき落つ。斯くて世は盡きぬるにやと、心ぼそく思ひ惑ふに、(八)君はのどやかに經うち誦じておはす。暮れぬれば雷少し鳴り止みて、風ぞ夜もふく。多く立てつる願の力なるべし。「今しばし斯くだにあらば、浪に引かれて(九)入りぬべかりけり。高潮(一〇)といふものになむ、とりあへず人損はるゝとは聞けど、いと斯かることは、まだ知らず」といひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいさゝか寢入り給へれば、(一一)その樣とも見えぬ人來て、「など、(一二)宮より召しあるには參り給はぬ」とて、たどり歩くと見る(一三)に、お



「たづかなき雲井にひとりねをぞなく翅ならべし友を戀ひつゝ(一)
かたじけなく馴れ聞え侍りて、いとしもと(二)悔しう思ひ給へらるゝ折多く」など、しめやかにもあらで歸り給ひぬる名殘、いとゞ悲しうながめ暮し給ふ。

三月の朔日に出で來たる巳の日(三)、「今日なむ、かく思すこと(四)ある人は、御禊し給ふべき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆかしくて出で給ふ。いと疎に、軟障(五)ばかりを引き廻らして、(六)この國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船にことぐ\しき人形載せて流すを見給ふにも、よそへられて(七)、

源　知らざりし(八)大海の原に流れ來てひとかたにやはものは悲しき

とて居給へるさま、然る晴(九)に出でて、言ふよしなく見え給ふ。海の面はうらく\と凪ぎわたりて、行方(一〇)も知らぬに、來しかた行くさき思しつゞけられて、

源　八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪(一一)のそれとなければ

と宣ふに、俄に風吹き出でて、空もかき昏れぬ。御祓もしはてず、立ち騷ぎたり。

(一)我は君なくて便なき都に君を戀ひつゝ獨泣き暮す
(二)「思ふとていとこそ人になれざらめ然ならひてぞ見れば戀しき」此「いとこそ」をあやまりて引きたる歟
○三月上巳源氏海に祓す
(三)三月上巳の節
(四)源の如き思ある身
(五)幔立の如き物
(六)折々他所より此處に通ひ來る
(七)我も流され人なれば我身を人形に比べられて
(八)見も知らざりし此海邊に流れ來たる我が悲は多端なり、ひとかた—一方、人形
(九)晴々しき場所に出て一入言はん方なく優美に
(一〇)果も無きに
(一一)我はこれといふ罪もなき身なれば

頭中將「(一)あかなくに雁の常世を立ちわかれ花のみやこに道やまどはむ

さるべき都のつとなど、由ある樣にてあり。主人の君、かく忝き御送にとて、(二)黒駒奉り給ふ。源「(三)ゆゝしう思されぬべけれど、(四)風にあたりては、嘶えぬべければ」など申し給ふ。世に有難げなる御馬のさまなり。「形見に忍び給へ」とて、(五)いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことは、互にえし給はず　日やうやうさしあがりて、心あわたゞしければ、顧のみしつゝ出で給ふを、見送り給ふけしき、いとなかゝゝなり。頭中將「いつまた對面給はらむとすらむ。(六)さりともかくてやは」と申し給ふに、あるじ、

「雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ(七)

(八)かつは頼まれながら、斯くなりぬる人は、(九)昔のかしこき人だに、はかゞゝしう世に又まじらふ事難く侍りければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひ侍らぬ」など宣ふ。宰相、

(一)厭々ながら此浦を離れ行く我は、悲に心亂れて都に歸る道も分らぬ
(二)頭中將が携へ來れる土産物
(三)罪人よりの贈物なれば忌々しく思はんが
(四)文選「胡馬嘶北風。越鳥依南枝」故郷を忘れぬ意
(五)名笛を贈りたる位の事にて他に人目につく樣の事はせず、此笛は源より贈れるか頭中將より贈れるか曖昧なれど頭中將よりなるべし
(六)此儘に何時までも逢はれぬといふ事はあるまじ
(七)君も知れや我が潔白を
(八)歸られぬ事はあらじと心強くは思へど
(九)古人の例を見ても斯くなりては再び世に立つ事難き例なれば

一 取りとめなく口をたたく彼等と我と同じく苦は免れぬ哉と
(二)貰ひたる綾どもが
(三)向ふに見ゆる倉の如きものゝ中の
(四)催馬樂「飛鳥井に宿りはすべしかげもよし御もひも寒しみまくさもよし」
(五)夕
(六)頭中將が
(七)源が
(八)此所に書き記さず
(九)詩
(一〇)頭中將が捨鉢なる覺悟はしても、矢張世間の聞えを憚りて
(一一)なまじ訪ひ來て却て愁の種
(一二)酒
(一三)白樂天元稹に別るゝ詩の句「醉悲灑涙春盃裏、吟苦支頤曉燭前」
(一四)只暫時逢ひたる別

なき身のうれへを申す。(一)そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じ事なるかなと、哀に見給ふ。御衣どもかづけさせ給ふを、(二)生けるかひありと思へり。御馬どもも近う立てて、(三)見やりなる倉か何ぞなる、稲ども取り出でて飼ふなど、めづらしう見給ふ。(四)「あすか井」少し謡ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ、(五)若君の、何とも世を思さでものし給ふ悲しさを、大臣の旦暮につけて思し歎く、など(六)語り給ふに、(七)堪へ難く思したり。盡きすべくもあらねば、なか〳〵片端もえまねばず。(八)終夜まどろまず。(九)文作り明し給ふ。(一〇)然言ひながらも、物の聞えをつゝみて、急ぎかへり給ふ。(一一)いとなか〳〵なり。(一二)御土器まゐりて、(一三)「醉の悲みの涙そゝぐ春の盃のうち」と、諸聲に誦じ給ふ。御供の人ども皆涙をながす。己がじし、(一四)僅なる別惜むべかゝめり。朝ぼらけの空に、雁連れてわたる。あるじの君、

源 ふる里をいづれの春か行きて見むうらやましきは歸るかりがね

宰相更に立ち出でむ心地せで、

いと徒然なるに、大殿の(一)三位中將は、今は(二)宰相になりて、人柄のいとよければ、(三)時世のおぼえ重くて物し給へど、世の中いと哀にあぢきなく、(四)物の折ごとに戀しく覺え給へば、(五)事のきこえありて罪にあたるとも如何はせむ、と思しなりて、(六)俄にまうで給ふ。うち見るより、珍らしく嬉しきにも、(七)ひとつ涙ぞこぼれける。(八)住ひ給へるさま、言はむ方なく唐めきたり。所のさま繪に畫きたらむ樣なるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、(九)疎かなるものから、珍らかにをかし。山賤めきて、(一〇)ゆるし色の黃がちなるに、青鈍の狩衣指貫うちやつれて、殊更に田舍びてもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて淸らなり。取り遣ひ給へる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁雙六の盤、調度、(一一)彈碁の具など、(一二)田舍わざにしなして、(一三)念珠の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。(一四)物參れるなど、殊更所につけ、興ありてしなしたり。海士ども漁して、(一五)かひつ物持て參れるを、召し出でて御覽ず。浦に年經る樣など問はせ給ふに、さま〲(一六)安げ

(一)頭中將
(二)參議
(三)世間に人望あれど
(四)源を
(五)源を訪ひたる事が問題になりて咎められても仕方がないと
(六)須磨へ
(七)源も中將も齊しく
(八)頭中將の感
(九)疎末ながら
(一〇)薄紅に黃を帶びたる
(一一)石はじきの遊
(一二)田舍細工
(一三)數珠などあるによりて佛の勤怠らぬ樣子の知らるゝ也
(一四)すゝめたる食物抔
(一五)貝類
(一六)苦しき身の泣言

つかしうあて(一)はかに、心ばせある様などぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身の(二)有様を、口惜しきものに思ひ知りて、高き(三)人は我を何の數にもおぼさじ、程(四)につけたる世をば更に見じ、命長くて、思(五)ふ人々に後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君、所(六)せく思ひかしづきて、年に二度住(七)吉に詣でさせけり。神の御しるし(八)をぞ、人知れずたのみ思ひける。

須磨には、年かへりて日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事思し出でられて、うち泣き給ふ折々おほかり。二月廿日あまり、いにし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御有様などいとこひしく、南殿(九)の櫻は盛になりぬらむ、一年(一〇)の花の宴に、院(一一)の御けしき、内(一二)裏の上のいと淸らになまめいて、我がつくれる句を誦じ給ひしも、思ひ出できこえ給ふ。

源　いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざしゝ今日も來にけり

(一)上品にて物のわかつて居る點は
(二)明石上が己の身分卑きを辨へ知りて
(三)明石上の心
(四)身分相應の夫を持つ事はいやなり
(五)父母に死なれたら
(六)極めて手厚く
(七)攝津の住吉神社
(八)御利益を入道が窃に當にして居たり
● 頭中將源氏の謫居を訪ふ
(九)源の心
(一〇)花宴巻にありし事
(一一)桐壺
(一二)朱雀

ふなる人は、まさにかく怪しき山賤(一)を、心とゞめ給ひてむや」といふ。腹立ちて、入道「得知り給はじ(二)。思ふ心ことなり。さる心をし給へ(三)。序して(四)此處にもおはしまさせむ」と、心をやりていふ(五)も、頑しく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり(六)。母君、「などて(七)、めでたくとも、物のはじめに、罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても(八)心をとゞめ給ふべくはこそあらめ。戯れにても(九)あるまじき事なり」といふを、いといたくつぶやく(一〇)。入道「罪にあたることは、唐土にも我が朝にも、斯く世に勝れ、何事にも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。い(一一)かに物し給ふ君ぞ。故母御息所(一二)は、己が叔父に物し給ひし、按察大納言の御女なり。いとかうざくなる名をとりて(一三)、宮仕に出し給へりしに、國王(一四)勝れて時めかし給ふ事ならび無かりける程に、人のそねみ多くて亡せ給ひにしかど、この君のと(一五)まり給へる、いとめでたし。斯く、女は心を高くつかふべき(一六)ものなり。己かゝる田舎人なりとて、思し捨てじ(一七)」など言ひ居たり。この女勝れたる容貌ならねど、な

(一)田舎娘
(二)貴様に分るものか、おれに了簡がある
(三)源氏にあげる支度をせよ
(四)序を以て源を招待せん
(五)善い氣になつて言ふ
(六)娘を入道が
(七)さきが貴人でも、初めて娘をやるに何も罪人を相手にする事はない
(八)それでも源の氣に入りでもすれば上けれど、氣に入る筈はなし
(九)怪我にも娘を源に抔とはけしからぬ話也
(一〇)入道がぶつ〳〵いふ
(一一)一體源を如何なる人と思ふぞ
(一二)源の亡き母は
(一三)勝れた娘といふ評判取りて
(一四)桐壺帝
(一五)源が生存せるは
(一六)氣位高く持つべき
(一七)源が娘を棄つる事はあるまじ

(一)従者等の心に
(二)思はれるので
(三)従者等が一寸でも私宅に歸らぬ
㊟ 明石の入道娘を源氏に奉らんとす
(四)極近き處なれば
(五)若紫の巻、源氏が北山に行きし處にて良清が噂したる明石入道の娘、明石上と名づく
(六)良清への手紙、申上げたき事あり
(七)とても承知せぬ女の爲になまじ懸り合ひてすごすご引込むのも氣が利かぬとへこたれて行かず
(八)入道は非常に氣位高く構へ、土地の人は國守をのみ尊び居るを然樣は思はず、播磨守の子の良清をも相手にせず經來りしに、源氏須磨に來り居れりと聞きて
(九)朝廷に罪を得て
(一〇)吾娘の源氏に嫁すべき宿縁ある故斯かる不慮の事も起れる也
(一一)源氏に娘を
(一二)見つともない
(一三)朧月夜を密犯して

まゐりて、御念誦などし給ふも、(一)珍らしき事のやうに、めでたくのみ(二)おぼえければ、え見奉り捨てず、(三)家にあからさまにも之出でざりけり。

明石の浦は(四)たゞ這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、(五)かの入道の女を思ひ出でて、文など遣りけれど返事もせず。父の入道ぞ、(六)聞ゆべきことなむ。白地に對面もがな」と言ひけれど、(七)うけひかざらむものゆゑ、行きかゝりて、空しくかへらむ後手もをこなるべし、と屈しいたうて往かず。(八)世に知らず心だかう思へるに、國の内は、守のゆかりのみこそは、畏きことにすめれど、僻める心は更にさも思はで、年月を經けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、入道「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光君こそ、(九)公の御かしこまりにて、須磨の浦にものし給ふなれ。(一〇)あこの宿世にて、覺えぬ事のあるなり。いかでかゝる序に、(一一)この君に奉らむ」といふ。母、「あな(一二)かたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持給ひて、その餘に、忍び〳〵、(一三)帝の御妻をさへ過ち給ひて、斯くも騷がれ給

(一)惟光
(二)良淸惟光歌や笛をやめて感淚に咽べり
(三)漢の時王昭君を胡國に嫁せしめたる故事
(四)王昭君の悲は我にも增したりしならん
(五)王昭君の如く遠國に遣りたらば如何ならん
(六)其樣な場合が有るべきものゝ樣に思はれて
(七)朗詠「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前膓」王昭君を詠める詩の句
(八)軒の短き家の樣なり
(九)「天廻玄鑒雲將霽、唯是西行不左遷」菅公の詩句
(一〇)故鄕を離れたる我は此末何處をまごつくならん、行き處の定りたる月の見る目も恥かし
(一一)千鳥の友呼び交すを聞きて力強く感ずる也

冬になりて雪ふり荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺め給ひて、琴を彈きすさび給ひて、良淸に歌うたはせ、大輔(一)横笛吹きて遊び給ふ。心とゞめて哀なる手など彈き給へるに、(二)ことものの聲どもはやめて、涙をのごひあへり。(三)昔胡の國に遣しけむ女を思しやりて、(四)ましていかばかりなりけむ、この世にわが思ひ聞ゆる人など(五)をさやうに放ちやりたらむこと、など思ふも、(六)あらむ事のやうにゆゝしくて、(七)「霜の後の夢」と誦じ給ふ。月いとあかうさし入りて、はかなき旅のおまし所は、奥まで隈なし。(八)床の上に夜深き空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに、(九)「たゞこれ西に行くなり」と、ひとりごち給ひて、

源 (一〇)いづかたの雲路にわれも迷ひなむ月の見るらむこともはづかし

とひとりごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

源 (一一)友千鳥もろごゑに鳴くあかつきはひとりねざめの床もたのもし

まだ起きたる人もなければ、かへすがへすひとりごちて臥し給へり。夜深く御手水

(一)紫上
(二)源に仕へし中將中務等
(三)紫方に移りし初は、紫上を其程の人でもあるまいと思ひしが
(四)暇を取る侍女なし
(五)身分よき侍女には紫が顔を見せる
(六)多くの女の中で紫を源が特に愛するのも
(七)須磨の寂しき生活
(七)紫を呼ばずには居らぬ樣に源が
(八)紫まで伴ひ來る事は出來ぬ、「打具しては」の下「と」を略したる躰
(九)不似合なるべき
(一〇)貴人の身として斯る下賤の者に立交るを自ら勿體なく思ふ
(一一)戀しき都の人々よ、時々我を訪ひ來れかし、初句二句は三句の序詞、しば〳〵―柴、屢

て、絶えて消息聞え給ふ人なし。(一)二條院の姫君は、程經るまゝに思し慰むをりなし。(二)東の對に侍ひし人々も、皆渡り(三)參りしはじめは、などかさしもあらむと思ひしかど、見奉り馴るゝまゝに懷かしうをかしき御有樣、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深う哀なれば、(四)まかで散るもなし。(五)なべてならぬ際の人々には、ほの見えなどし給ふ。(六)そこらの中に勝れたる御心ざしも、理なりけりと見奉る。かの須磨には、久しうなるまゝに、(七)え念じ過すまじう覺え給へど、我身だにあさましき宿世と覺ゆる住居に、(八)いかでかは打具しては、(九)つきなからむさまを思ひ返し給ふ。所につけては萬の事さまかはり、見給へ知らぬ下人のうへをも、見給ひならはぬ御心地に、(一〇)めざましうかたじけなう、自らおほさる。煙のいと近く時々立來るを、これや海士の鹽燒くならむと思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。珍らかにて、

源(一一)山がつのいほりに焚けるしば〳〵もことゝひこなむ戀ふる里人



（一）我も斯る處に漁師の生活をせんとは思はざりし、「思ひきや鄙の別に衰へて海士の縄たぎ漁りせんとは」
（二）菅公の左遷の途次明石の驛にて驛長に「驛長勿驚」の句を賜ひし故事
（三）此歌を賜りたる五節は、此儘此處に逗留もせん程に感動したり
㊟都の人々源氏を戀ふ
（四）源を
（五）藤壺
（六）實は源の子なる事を
（七）源の
（八）退去の當座は
（九）源が訪問客と詩を應酬し
（一〇）源が
（一一）弘徽殿
（一二）弘徽殿の罵る詞、帝の咎を受けたる人は
（一三）飲食物を恣に取ることさへ
（一四）秦の趙高が權威に誇りて、鹿をさしてわざと馬なりといひし故事
（一五）源に諂ふ、此處の文聞え難し、誤あるべし
（一六）面白からぬ批難

（一）いさりせむとは思はざりしはや。

とあり。（二）驛の長に句詩とらする人もありけるを、（三）まして落ちとまりぬべくなむ覺えける。

都には、月日過ぐるまゝに、帝をはじめ奉りて、（四）戀ひ聞ゆる折節多かり。春宮は、まして常に思し出でつゝ、忍びて泣き給ふを、見奉る御乳母、まして命婦の君は、いみじう哀に見奉る。（五）入道の宮は、（六）春宮の御事をゆゝしうのみ思しゝに、大將も斯くさすらひ給ひぬるを、いみじう思し歎かる。（七）御兄弟の御子たち、むつまじう聞え給ひし上達部など、（八）初つかたは訪ひ聞え給ふなどありき。（九）哀なる文を作りかはし、それにつけても世の中にのみ（一〇）めでられ給へば、（一一）后の宮聞召して、いみじく宣ひけり。（一二）弘徽「公の勘事なる人は、（一三）心にまかせて此世のあぢはひをだに知る事難うこそあゝなれ。面白き家居して、世の中を誹りもどきて、（一四）かの鹿を馬と言ひけむ人の、（一五）僻めるやうに追從する」など、（一六）あしき事ども聞えければ、煩はしと

（一）御伺ひ申さぬは殘念
（二）やがて又わざ〳〵參上すべし
（三）筑前守は源が目をかけてやりし人なれば
（四）筑前守の心
（五）他人の手前もあれば他聞を憚りて
（六）大貳への返事も
（七）源の御樣子
（八）便をもとめて源に
（九）君が琴の音に心ひかれて漕ぎ去るに忍びず躊躇する我心を君は知り給はじ
（一〇）立去るに忍びぬならば寄らずに行く筈はないのに

來向ひてあまた侍れば、所狹きを思ひ給へ憚り侍る事ども侍りて、え侍らは（一）ぬこと。殊更に（二）參り侍らむ。

など聞えたり。子の筑前守ぞ參れる。（三）この殿の、藏人になし顧み給ひし人なれば、いとも悲し、いみじと思へども、（五）又見る人々のあれば、聞をおもひて、暫しもえ（四）立ちとゞまらず。源「都離れて後、昔親しかりし人々、あひ見る事難うのみなりにたるに、かくわざと立ちより物したる事」と宣ふ。（六）御返もさやうになむ。守泣く泣くかへりて、（七）おはする御有樣語るに、帥よりはじめ、迎の人々、まが〳〵しう泣き滿ちたり。五節はとかくして（八）聞えたり。

五節 琴の音に（九）ひきとめらるゝ綱手なはたゆたふこゝろ君知るらめや

すき〴〵しさも、人な咎めそ。

と聞えたり。ほゝゑみて見給ふ、いと恥かしげなり。

源 （一〇）心ありてひくての綱のたゆたはゞうち過ぎましや須磨の浦なみ

しも、戀しく思出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今こゝにあり」と誦じつゝ入り給ひぬ。(一)御衣はまことに身放たず、傍に置き給へり。(二)

源　(三)憂しとのみひとへに物はおもほえでひだりみぎにもぬるゝ袖かな

その頃(四)大貳は上りける。(五)嚴しう類ひろく、(六)女がちにて所せかりければ、北の方は船にてのぼる。浦づたひに逍遙しつゝくるに、(七)外より面白きわたりなれば心とまるに、大將斯くておはすと聞けば、(八)あいなう好いたる若き女たちは、船の内さへ恥かしう、心懸想せらる。まして(九)五節の君は、綱手ひき過ぐるも口をしきに、(一〇)琴の聲風につきて遙に聞ゆるに、所のさま人の御ほど、物の音の心ぼそさ取り集め、心あるかぎり皆泣きにけり。(一一)帥御消息きこえたり。

大貳　いと遙なるほどより罷り上りては、(一二)まづいつしかと侍ひて都の御物語も、とこそ思ひ給へ侍りつれ、思の外に斯くておはしましける御宿を、(一三)罷り過ぎ侍る、辱く悲しうも侍るかな。あひ知りて侍る人々、然るべきこれかれまで

(一)菅公の詩の句
(二)朱雀より賜はりし事ありし也
(三)御衣を側にして昔を思へば、つらくも又懷しくもありて悲に堪へぬ
(四)太宰大貳船中より源氏に消息す
(四)太宰大貳某、花散里卷に見えたる五節の父
(五)筑前より上京
(六)一族多く
(七)須磨は
(八)無暗に浮氣なる
(九)曾て源に逢ひし女
(一〇)素通りしてしまふと
(一一)太宰帥缺員の時は大貳が帥の事を行ふ故、大貳を帥ともいふ也とぞ
(一二)取敢ず御目に懸りて御話も承りたしと思ひしに
(一三)素通りする

前の右近丞、

「(一)(二)常世出でて旅の空なるかりがねも列におくれぬほどぞなぐさむ

(三)友まどはしては如何に侍らまし」といふ。(四)親の常陸になりて下りしにも誘はれで、參れるなりけり。(五)したには思ひ碎くべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと(六)思し出でて、殿上の御遊戀しく、(七)ところぐ\眺め給ふらむかしと、思ひやり給ふにつけても、月の顏のみまもられ給ふ。(八)「二千里外古人心」と誦じ給へる、例の涙もとゞめられず。(九)入道の宮の、(一〇)「霧や隔つる」と宣はせしほど、いはむ方なく戀しく、折々の事思ひ出で給ふに、よゝと泣かれ給ふ。「夜更け侍りぬ」と(一一)聞ゆれど、なほ入り給はず。

源　(一二)見る程ぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども

(一三)その夜、(一四)上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御樣の、(一五)院に似奉り給へり

(一)伊豫介の弟息子
(二)我は旅雁の如き身なれど友ある故に愁を慰められて過す
(三)連にはぐれては居られたものに非ず
(四)父伊豫介が常陸介に轉任せしにも同伴せず
(五)腹では色々の愁あるべけれども、わざと得意げに平氣を裝ひ居る
(六)源が
(七)方々の女どもが
(八)白氏文集「三五夜中新月色、二千里外古人心」
(九)藤壺
(一〇)「九重に霧や隔つる雲の上の月を遙に思ひやる哉」榊の卷にあり
(一一)侍臣が
(一二)都にて戀人に逢ふ期は遠けれども、月を眺め居る間は心慰めらる
(一三)藤壺が「霧や隔つる」の歌よみし當夜
(一四)朱雀
(一五)桐壺

はず、白き綾の(一)なよゝかなる、(二)紫苑色など奉りて、(三)こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、(四)ゆるゝかによみ給へる、また(五)世に知らずきこゆ。沖より舟どもの謠ひのゝしりて漕ぎ行くなども聞ゆ。ほのかに、たゞ(六)小さき鳥の浮べると見やらるゝも、心細げなるに、雁の連ね(七)て鳴く聲、楫の音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠に榮え給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝち、みな慰みにけり。

源　はつかりは(八)こひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかなしき

と宣へば、良淸、

(九)かきつらねむかしのことぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども

(一〇)民部大輔、

(一一)心からとこ世を捨ててなく雁をくものよそにもおもひけるかな

(一)和らかなる下着
(二)薄紫に萠黃の裏つけたる衣を源が着て
(三)色濃き
(四)しづかに經を
(五)聲世に類なし
(六)舟の形容
(七)列をなして
(八)我が戀ふ人の仲間かして
(九)雁は昔の友に非ざれども、雁の音を聞けば懷舊の情に堪へぬ
(一〇)惟光
(一一)心がらで旅にさまよひて鳴く雁を餘所事に思ひしが、今身の上に思ひ知れり





(一)源の心、彼等の心中如何ならん
(二)「程につけつゝ」は「親兄弟」の上に置きて讀むべし
(三)自分の爲に彼等が斯く流浪するよと
(四)甚だ氣の毒で
(五)自分がふさいで居る樣子を見て彼等が
(六)都にばかり居る間は
(七)心も詞も及ばぬ
(八)無類に
(九)繪の名人と呼ばるゝ
(一〇)源の墨がきの畫を彩色させて見たい
(一一)源の
(一二)從者どもが
(一三)側去らず
(一四)斯る邊鄙の場所故

つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。(一)實にいかに思ふらむ。我身ひとつにより、親兄弟かたとき立ち離れがたく(二)程につけつゝ思ふらむ家を別れて、(三)かく惑ひあへる、と思すに、(四)いみじくて、(五)いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戲事うち宣ひまぎらはし、徒然なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき樣なる唐の綾などに、さま〴〵の繪どもを畫きすさび給へる、屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有樣を、(六)遙に思しやりしを、御目に近くては、(七)げに及ばぬ磯のたゝずまひ、(八)になく書き集め給へり。從者「(九)此頃の上手にすめる、千枝常則などを召して、(一〇)作繪仕う奉らせばや」と、心もとながりあへり。懷かしうめでたき(一一)御有樣に、(一二)世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しきことにて、四五人ばかりぞ(一三)つと侍ひける。前栽の花いろ〳〵咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御さまの、ゆゝしう淸らなるに、(一四)所がらはましてこの世のものとも見え給

(一)我が爲の涙か源の爲の涙か
(二)我に子なきは寂し
(三)冷泉を桐壺の遺言通りに立てたく思へど、そうすれば弘徽殿方で邪魔すべしと思へば
(四)朱雀の意向に背きて取計らふ人々

● 須磨の閑居

(五)旅人の袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」
(六)源が
(七)我側に
(八)我が泣く音に浦波の音の通ひて聞ゆるは、我が戀人の方より來る風に吹かるればならん
(九)目さめて
(一〇)故郷が思ひ出されて無聊に

(一)いづれに落つるにか」と宣はす。朱雀「今まで御子(二)たちのなきこそさう〴〵しけれ。(三)春宮を院の宣はせしさまに思へど、よからぬ事ども出でくめれば、心苦しう」など、世を御心(四)の外にまつりごちなし給ふ人々のあるに、若き御心の強き所なき程にて、いとほしと思したる事も多かり。

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹(五)き越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、また無くあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少にて、うち休みわたれるに、一人(六)目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝ(七)もとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少し掻き鳴し給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

源「戀ひ(八)わびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ

と謠ひ給へるに、人々(九)おどろきて、めでたう覺ゆるに、(一〇)忍ばれてあいなう起き居

か、赦され給ひて、參り給ふべきにつけても、なほ心にしみにしかたのみぞ哀におぼえ給ひける。七月になりて(一)參り給ふ。(二)いみじかりし御思ひの名殘なれば、人の謗も知し召されず、例のうへに(三)つとさぶらはせ給ひて、萬にうらみ、且はあはれに契らせ給ふ。(四)御さま容貌もいとなまめかしう淸らなれど、(五)思ひ出づる事のみ多かる心の中ぞかたじけなき。御遊のついでに、朱雀「その人のなきこそいとさうざうしけれ。如何にまして然思ふ人多からむ。何事にも(六)光なき心地するかな」と宣はせて、朱雀「(七)院の思し宣はせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふに、(八)え念じ給はず。朱雀「世の中こそ、あるにつけても味氣なきものなりけれ、と思ひ知るまゝに、久しく世にあらむものとなむ更に思はぬ。(九)さもありなむに、いかゞおぼさるべき。(一〇)近き程の別に、思ひおとされむこそねたけれ。(一一)生ける世にとは、げに善からぬ人の言ひ置きけむ」と、いと懐しき御樣にて、物をまことにあはれと思し入りて宣はするにつけて、(一二)ほろ〳〵とこぼれ出づれば、朱雀「さりや。

(一)朧が内裏へ
(二)朧を朱雀のあれ程御寵愛ありし揚句の事なれば
(三)朧を側に引附けて
(四)朱雀の
(五)窃に源を忘れかねたる朧が心中自ら勿體なきことと思ふ
(六)源の居らぬは寂し
(七)源を手厚くせよとありし父帝の遺言
(八)朧が怨自ら堪へず
(九)若し我死なば君は何と思ふ
(一〇)源に別れた程に怨しまぬならんと思へば妬し
(一一)「戀ひ死なん後は何せん生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」とはつまらぬ言草、二世三世を契るこそ本意なれ
(一二)聞き居る朧が涙をこぼせば

(一)斯様な漁村にくよくよして何時まで住む事やら、なげき―投木、歎、すま―須磨、住
(二)再會の期し難きこそ言うても盡きぬ悲なり
(三)手紙をやり取りす
(四)源への送別に様々の事を書きたる
(五)源が
(六)源退去の後は誰も保護する者無ければ
(七)花散方の土塀
(八)修繕すべき由
(十)朧月夜再び朱雀帝に寵せらる
(九)朧月夜は、源の退去も朧月夜との密會より事起りたる故外聞を恥ぢて
(一〇)朧は父右大臣の愛姫にて
(一一)弘徽殿
(一二)朧月夜は尚侍にて定まりたる帝の寵妾にも非ず、一通りの公務を勤むる丈の身分なればといふ事にて無罪になれり
(一三)密通一條故に大騒ぎにはなりたれども、朧が赦されて參内するとなれば、帝は朧の惡き所は忘れてよい所丈を思ひて寵愛せらる

あまがつむなげきの中にしほたれていつまですまの浦と眺めむ(一)

(二)聞えさせむ事の、いつとも侍らぬこそ、盡せぬ心地し侍れ。

などぞありける。かやうに、何處にも覺束なからず聞えかはし給ふ。(三)花散里も悲しと思しけるまゝに、かき集め給ひける(四)御心々見給ふに、(五)をかしきも、目なれぬ心地して、いづれもうち見給ひつゝ慰め給ひ、かつは物思ひの催しぐさなゝめり。

花散　荒れまさる軒のしのぶをながめつゝしげくも露のかゝる袖かな

とあるを、げに葎より(六)外の後見もなき様にておはすらむと思しやりて、長雨に築土ところ〳〵崩れてなど聞き給へば、京の家司の許に仰せつかはして、近き國々(七)の御庄の者など催させて、仕う奉るべき由(八)宣はす。

(九)かんの君は、人わらへにいみじう思しくづほるゝを、大臣(一〇)いとかなしうし給ふ君にて、切に宮(一一)にも申し、内裏にも奏し給ひければ、限(一二)ある女御御息所にもおはせず、公様の宮仕と思しなせり。又(一三)かの憎かりし故こそ、嚴しきことも出で來し

(一)どう考へてもつまらぬものは我身なり、かひ—貝、效

(二)源の心、御息所には惚れて居たのに、生靈一件で恨んだのが自分の失錯で、其から女も持て餘して別れたのである

(三)源が御息所を

(四)御息所の使まで懐かしくて

(五)逗留させて

(六)様子のよい

(七)源に接近する事多く

(八)御息所への

(九)どうせ都を立退く身と知れて居たら、あの時一所に伊勢へ行つたものを

(一〇)心細さに其様な事を考へる

(一一)斯かる憂目にあふよりは、伊勢の旅寝つらしと雖も御伴申せばよかりし

御息 伊勢島や潮干のかたにあさりてもいふかひなきは(一)我身なりけり

物を哀と思しけるまゝに、打置きく書き給へる、白き唐紙四五枚ばかりをまき續けて、墨つきなど見どころあり。哀に思ひ聞えし人を、一節憂しと思ひ聞えさせし心あやまりに、この御息所も思ひ(二)うんじて別れ給ひにし、と思せば、今にいとほしう辱(三)きものに思ひ聞え給ふ。折からの御文、いとあはれなれば、御使(四)さへむつまじうて、二三日居ゑ(五)させ給ひて、彼處の物語などせさせて聞しめす。若やかに、氣色(六)ある侍の人なりけり。斯く哀なる御住居なれば、かやうの人もおのづから物遠(七)からで、ほの見奉る御さまかたちを、いみじうめでたしと涙落しけり。御かへり書き給ふ言の葉思ひやるべし。

源 かく(九)世を離(八)るべき身と、思ひ給へらましかば、おなじうは慕ひ聞えましものを、などなむ、徒然に心ぼそき(一〇)儘に、

伊勢人(一一)のなみの上漕ぐ小船にもうきめはからで乗らましものを

君の御事などあるにも、いとゞ悲しけれど、自ら（一）逢ひ見てむ、たのもしき人々物し給へば、後めたうはあらず、と思しなさるゝは、なか〳〵（二）この道は惑はれ給はぬにやあらむ。

まことや、騒しかりし程のまぎれに漏して（三）けり。かの伊勢（四）の宮へも御使ありけり。（五）彼よりもふりはへ尋ね參れり。淺からぬ事ども書き給へり。（六）言の葉筆づかひなどは、人より殊になまめかしう、いたり深く見えたり。

御息　なほ現とは思ひ給へられぬ御住居を承るも、（七）明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも（八）年月は隔て給はじと、思ひやり聞えさするにも、（九）罪深き身のみこそ。又聞えさせむことも遥なるべければ、

（一〇）うきめかる伊勢をの海士を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

よろづに思う給へみだるゝ世の有樣も、猶如何になりはつべきにか。

と多かり。

（一）源の心、自然逢ふ折もあらう
（二）「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬる哉」とはいへども源は子には惑はぬのか
（三）つい書漏したりと作者の詞
（四）六條御息所へ
（五）伊勢よりも態〻使が手紙を持參せり
（六）御息所の手紙の
（七）自身が夢を見て居るのかと思はる
（八）御歸京も遠からじと
（九）罪障多き我こそ再會期し難かるべし、生離になりし事をいへる歟
（一〇）須磨にて濡れ居るといふ君よ、伊勢に在りて嘆に沈める我身を憐み給へ、うきめ―浮布、憂目

かんの君の御かへりには、

朧月　浦に(一)たくあまたにつゝむ戀なればくゆるけぶりよ行く方ぞなき

更(二)なる事どもはえなむ。

とばかり、いさゝか(三)にて、中納言の君の中にあり。思し(四)歎くさまなど、いみじく言ひたり。哀と思ひ聞え給ふふし〴〵もあれば、うち泣かれ給ひぬ。姫君(五)の御文は、心殊に細やかなりし御返りなれば、あはれなる事多くて、

浦人のしほくむ袖に(六)くらべ見よ波路へだつる夜のころもを

(七)物の色し給へる樣など、いと淸らなり。何事もらう〳〵じう物し給ふを、思ふさ(八)まにて、今は殊に心あわたゞしう、行きかゝづらふ方もなく、しめやかにて在るべきものを、と思すに、いみじう口惜しう、夜晝面影におぼえて、堪へ難く思ひ出でられ給へば、なほ忍びて(九)や迎へましと思す。又うち返し、なぞや、斯くうき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明暮行ひておはす。大殿の若(一〇)

(一)多くの人に忍ぶ極内内の戀なれば胸の思の晴らし樣なし、あまた―數多、蜑
(二)言ふにも及ばぬ退去の慰問などは省く
(三)小き手紙が中納言の手紙の中に封入しあり
(四)朧の愁嘆の狀を中納言の手紙に述べたり
(五)紫上
(六)どちらが多く濡れて居るかと
(七)夜具などの色合こしらへ樣
(八)源の心、希望通り他に心忙しき屈託もなく靜に紫と共に暮すべきものを
(九)紫を竊に呼ばんかと
(一〇)夕霧の噂が京よりの手紙の中にあるを見て

世になくなりなむは、言はむ方なくて、いふかひなきにても、やう〳〵忘草も生ひやすらむ、聞く程は近けれど、いつまでと限ある御別にもあらぬを思すに、(一)盡きせずなむ。(二)入道の宮にも、春宮の御事により、思し歎くさまいと更なり、御宿世の程を思すには、いかゞ淺くは思されむ。年頃はたゞ(三)物の聞えなどのつゝましさに、(四)少し情ある氣色見せば、それにつけて人の咎め出づる事もこそとのみ、ひとへに思し忍びつゝ、(五)哀をも多う御覽じすぐし、すく〳〵しうもてなし給ひしを、(六)かばかりに憂き世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくて止みぬるばかりの、人の御おもむけも、(七)あながちなりし心の引く方に任せず、且はめやすくもて隱しつるぞかしと、哀に戀しうも如何思し出でざらむ。御返も少しこまやかにて、

藤壺　此頃はいとゞ、

(九)しほたるゝことをやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞつむ

(一)悲が
(二)藤壺も冷泉の事によりて源の退去を嘆くは勿論、從來の關係を思へば嘆の深きは其筈也、
(三)外聞を憚る故
(四)源に對して
(五)源の情に心動いても知らぬ顏して過し、木野暮な應答もせしが
(六)彼程うるさい人の口でも、密通一條許りは毛程も言はずに濟みし程の源の仕方も
(七)情の狂ふに任せず人目につかぬ様甘く隱せし事よと
(八)藤壺の
(九)我は此頃只嘆きに沈みて打濕るゝことを役にして居る

心亂れ給ふ人々のみおほかり。(一)二條院の君は、そのまゝに起きもあがり給はず、盡せぬさまに思し焦るれば、侍ふ人々(二)もこしらへわびつゝ、心細う思ひあへり。(三)もてならし給ひし御調度ども、彈き鳴し給ひし御琴、ぬぎ捨て給へる御衣の匂などにつけても、(四)今はと世になくなりたらむ人の樣にのみ思したれば、且はゆゝしう(五)て、少納言は、(六)僧都に御祈禱の事など聞ゆ。(七)二かたに御修法などせさせ給ふ。且(八)はかく思し歎く御心を靜め給ひて、慰め、(九)又もとの如くに歸り給ふべき樣になど、(一〇)心苦しきまゝに祈り申し給ふ。旅の御宿(一一)直物など、(一二)調じて奉りたまふ。(一三)縑の御直衣指貫、樣變りたる心地するもいみじきに、「さらぬ鏡」(一四)と宣ひし御面影の、(一五)實に身に添ひ給へるもかひなし。出で入り給ひし方、寄り居給ひし眞木柱などを見給ふにも、胸のみふたがりて、(一六)物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人だにあり、まして馴れ睦び聞え、父母にもなりつゝ扱ひ聞え、おほし立てならはし給へれば、俄に引き別れて、戀しう思ひ聞え給へることわりなり。(一七)ひたすら

(一)紫上は文を見ると其盡
(二)もてあまして
(三)源が手馴したる
(四)紫が源を
(五)縁起惡く思ひて
(六)北山の僧都、紫の伯父
(七)二樣の趣意にて、即ち下にいへる趣意にて
(八)紫の
(九)源が
(一〇)僧都が氣の毒に思ひて
(一一)夜具
(一二)紫が
(一三)源今無位無官なる故紋樣なき衣裳を著る也
(一四)前の源の歌
(一五)歌の意味通りに
(一六)以下作者の批評、分別ある苦勞人でも此場合は悲きに、況や父母の如く育み立てられたる源に別れたる若き紫の嘆くは道理也
(一七)いつそ死したる人ならば又諦めて忘るゝ事も出來べけれど

⑨京の所々への文、其返事
（一）紫上
（二）夕霧
（三）紫と藤壺とへの手紙は
（四）涙にくれたり
（五）藤壺
（六）松島のあまは藤壺、須磨の浦人は源
（七）歎きは何時もの事なれど、雨期は尚更過去未來を思ひて心も昏み
（八）「君戀ふる涙落ち添ひ此川の汀まさりて思ふべらなり」
（九）朧月夜
（一〇）侍女の中納言への私信の體裁にして、中に封じこめて朧宛
（一一）我は斯くなりても猶君を戀ひ居るが、此浦の樣は何と思ふならん、（君は何と思ふぞ）こりずま―須磨、みる―海松、見る
（一二）左大臣にも夕霧の乳母にも
（一三）彼方でも此方でも

ましと思しやらる。

やう〳〵事しづまり行くに、長雨の頃になりて、京の事ども思しやらるゝに、戀しき人多く、女君（一）の思したりし樣、春宮の御事、若君（二）の何心もなく紛れ給ひしなどをはじめ、此處彼處思ひやり聞え給ふ。京へ人出したて給ふ。二條院（三）へ奉り給ふと、入道の宮のとは、書きもやり給はず、くらされ給へり。宮には、（五）

（六）源「松島のあまの苫屋もいかならむ須磨の浦人（四）しほたるゝころ

（七）いつと侍らぬ中にも、來しかた行くさきかきくらし、汀（八）まさりてなむ。

（九）尚侍の御許に、（一〇）例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

源「つれ〴〵と、過ぎにし方の思う給へ出でらるゝにつけても、

（一一）こりずまの浦のみるめもゆかしきを鹽燒く蜑や如何思はむ

さま〴〵書き盡し給ふ言の葉、思ひやるべし。大殿（一二）にも、宰相の乳母にも、仕うまつるべき事なども書きつかはす。京には、この御文（一三）、ところ〴〵に見給ひつゝ、御

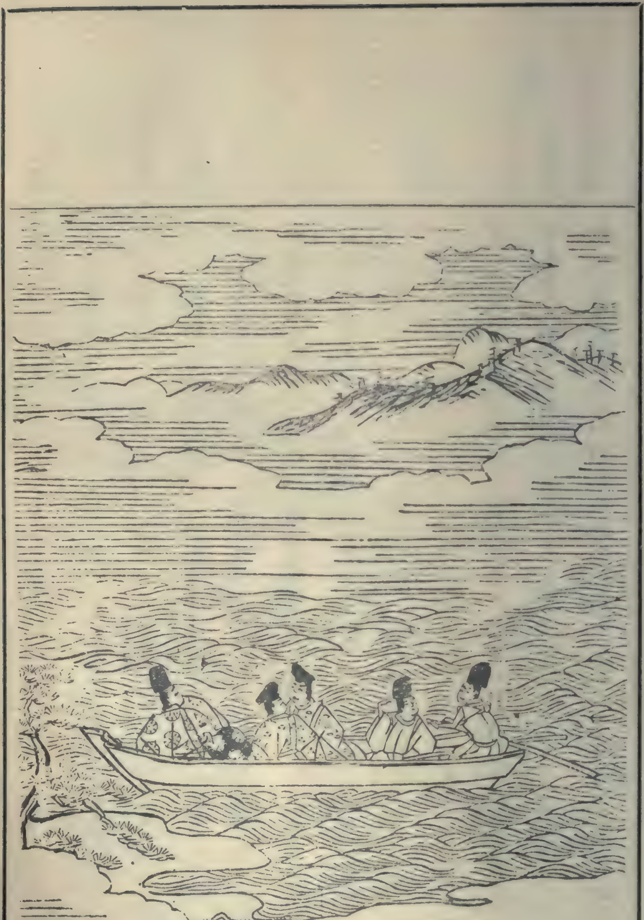


(一)涙を舟路なれば櫂の雫といひなせる也
(二)故郷と同じ空か
(三)以下須磨着後の事、源の住むべき所は
(四)行平須磨に流さるゝ時の歌「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽垂れつゝ侘ぶと答へよ」
(五)昔の物好
(六)源の領地
(七)普請の事など
(八)源良清、父は播磨守
(九)源に昵近の家令にて
(一〇)庭を流るゝ水を深くし
(一一)夢の様なり
(一二)播磨守も
(一三)かね〴〵源邸に伺候の人
(一四)旅住居に似合はず
(一五)くさ〴〵して

(一)雫も堪へがたし。

源　ふる里を峯のかすみはへだつれどながむる(二)空はおなじ雲井か

つらからぬもの無くなむ。(三)おはすべき所は、行平の中納言の、(四)藻鹽たれつゝ侘びける家居近き邊なりけり。海面はやゝ入りて、哀に心すごげなる山中なり。垣のさまより初めて珍らかに見給ふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住居、様變りて、かゝる折ならずば、をかしうもありなましと、(五)昔の御心のすさび思し出づ。近き處々の(六)御庄の司召して、(七)然るべき事どもなど、(八)良清の朝臣など、(九)親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり。時の間に、いと見所ありてしなさせ給ふ。(一〇)水深う遣りなし、植木どもなどして、今はとしづまり給ふ心地、(一一)現ならず。(一二)國の守も(一三)親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕う奉る。かゝる(一四)旅所ともなく、人騒がしけれども、はか〴〵しく物をも宣ひ合すべき人し無ければ、知らぬ國の心地して、いと(一五)うもれいたく、いかで年月を過さ



(一)わざと一通の歌を詠めば
(二)源の推測
(三)見つともなかるべければ
● 須磨に着す、邸宅の經營
(四)紫の顔が目先にちらつきて
(五)午後四時頃
(六)以下須磨着以前の途中の事
(七)難波淀邊にある驛、齋宮歸途の時宿る所といふ
(八)楚懷王に放逐されし屈原は瀟湘を彷徨して終に汨羅に身を投げたるが我は其にも勝れる放浪の身となるべし
(九)寄せてはかへる
(一〇)「いとゞしく過ぎ行く方の戀しきに羨しくも歸る浪哉」
(一一)語り切つたる故事
(一二)白氏文集「十一月中長至夜、三千里外遠行人」

はかなし」など、あさはかに聞えなし給へば、

紫 惜からぬ命に(一)かへて目の前のわかれをしばしとゞめてしがな

(二)げに然ぞ思さるらむと、いと見捨て難けれど、明けはてなばはしたなかるべきに(三)より、急ぎ出で給ひぬ。

道すがら面影(四)につとそひて、胸も塞がりながら、御船に乗り給ひぬ。日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の時(五)ばかりに、かの浦に著き給ひぬ。かりそめ(六)の道にても、かゝる旅をならひ給はぬ心地に、心細さもをかしさも珍らかなり。大(七)江殿と言ひける所は、いたく荒れて、松ばかりぞしるしなりける。

源 唐國(八)に名を殘しける人よりもゆくへ知られぬすまひをやせむ

渚に寄る浪のかつかへる(九)を見給ひて、「うらやましくも」(一〇)と打ち誦じ給へる、さる世(一一)の故事なれども、珍らしく聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。うち顧み給へるに、來し方の山は霞はるかにて、まことに三千里(一二)の外の心地するに、櫂の

(一)我が腑甲斐なきが恥しき程

❼出發
(二)須磨へ出發
(三)紫に對ひて云ふ
(四)別れたらば噺話すべき事が積つて居る樣な心持がするならん
(五)胸の晴れぬ
(六)我が行つて仕舞ひたらば紫はどうなるであらう
(七)自分が心弱き樣を見せては、沈み居る紫が彌〻悲を增す譯なれば、次の樣に詠む
(八)生別といふ事のあるを知らで今迄命限りと君と契りし事よ

をそしり恨み奉れど、身を捨てて訪らひ參らむにも何のかひかは、と思ふにや。かゝる折は人わろく、(一)恨めしき人多く、世の中は味氣なきものかなとのみ、萬につけて思す。

その日は女君に、御物語長閑に聞え暮し給ひて、(二)例の夜深く出で給ふ。狩の御衣など、旅の御よそひいたく窶し給ひて、源(三)「月出でにけりな。なほ少し出でて見だに送り給へかし。(四)いかに聞ゆべき事多くつもりにけりとのみ覺えむとすらむ。一日二日たまさかに隔つる折だに、怪しういぶせき(五)心地するものを」とて、御簾まき上げて、端の方に誘ひ聞え給へば、女君泣き沈み給へる、ためらひて膝行り出で給へる、月影に、いみじうをかしげにて居給へり。(六)わが身斯くてはかなき世を別れなば、如何なる樣にさすらへ給はむと、後めたく悲しけれど、(七)思しいりたるがいとゞしかるべければ、

源(八)「いける世のわかれを知らで契りつゝ命を人にかぎりけるかな

など、そこはかとなく。心の亂れけるなるべし。

命婦　(一)咲きて疾く散るは憂けれど行く春は花の都を立ちかへりみよ

時しあらば。

と聞えて、(二)名殘も哀なる物語をしつゝ、一宮のうち忍びて泣きあへり。一目も見奉れる人は、かく(三)思しくづほれぬる御有樣を、歎き惜み聞えぬ人なし。まして常に參り馴れたりしは、(四)知り及び給ふまじき長女、御厠人までも、(五)ありがたき御顧の下なりつるを、暫しにても、見奉らぬ程や經むと思ひ歎きたり。おほかたの世の人も、(六)誰かはよろしく思ひ聞えむ。(七)七つになり給ひしよりこのかた、帝の御前に夜晝侍ひ給ひて、奏し給ふ事の(八)ならぬはなかりしかば、(九)この御勞にからぬ人なく、御徳を喜ばぬやはありし。やむごとなき上達部、辨官などの中にも多かり。それより下は數知らぬを、(一〇)思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりては、(一一)いちはやき世を思ひ憚りて、參り寄る人もなし。(一二)世ゆすりて惜み聞え、下には公

(一)栄花の一時なるは今更詮方なけれど、今一度立歸られん事を切に祈る
(二)返事を出した跡でも
(三)割り込んだ源の有樣
(四)源は覺えて居そうもなき下女頭
(五)從來御恩に預りしに
(六)源の退去を並大抵の事には思はぬ
(七)源が
(八)通らぬ
(九)源の御恩蒙らぬ者はなく
(一〇)恩を辨へぬに非ざれども
(一一)容赦なく右大臣方より迫害さるるに恐れて
(一二)世間一帯に騷ぎて

(一)今一度參上せぬが何より殘念
(二)手紙を
(三)冷泉に
(四)眞面目になりて
(五)遠く離れたらば如何に戀しき事ならん
(六)あつけない御返事と
(七)命婦の心、つまらぬ戀をして源が心配せし
(八)藤壺も源も氣樂に世を送らるゝ身分なるに、心からで苦勞せしも命婦自身の所爲の樣に後悔せらる
(九)申上ぐるに詞なし
(一〇)冷泉には申上げたり

源 今日なむ都離れ侍る。(一)又參り侍らずなりぬるなむ、あまたの憂にまさりて思ひ給へられ侍る。よろづ推し量りて啓し給へ。

いつかまた春のみやこの花を見む時うしなへる山がつにして

櫻の散り過ぎたる枝につけ給へり。(二)(三)斯くなむと御覽ぜさすれば、幼き御心地にも、(四)まめだちておはします。命婦「御かへしいかゞ物し侍らむ」と啓すれば、春宮「暫し見ぬだに戀しきものを、(五)遠くはましていかに、といへかし」と宣はす。(六)物はかなの御かへりやと、あはれに見奉る。(七)味氣なき事に御心をくだき給ひし昔の事、折々の御有樣、思ひ續けらるゝにも、(八)物思ひなくて我も人も過し給ひつべかりける世を、心と思し歎きけるを、くやしう、我心ひとつにかゝらむ事のやうにぞ覺ゆる。御返は、

命婦 (九)さらに聞えさせやり侍らず。(一〇)御前には啓し侍りぬ。心細げに思し召したる御氣色もいみじう。

(一)跡に殘る名の清濁は、糺すといふ名をもてる賀茂の糺神社の神に任せて
(二)右近尉は物に感心する青年で
(三)桐壺在世の時の樣
(四)無上の帝王でも
(五)とかくの返事を聞き得ざる故
(六)桐壺が彼程氣にかけられし
(七)桐壺在世中の姿
(八)亡き父帝は何と思つて見て居らるゝならん、父帝の佛と思つて見た月も隱れたり
(九)藤壺の侍り
(一〇)王命婦に宛てて

源　うき世をば今ぞわかるゝ(一)とゞまらむ名をばたゞすの神にまかせて

と宣ふさま、物めでする(二)若き人にて、身にしみて哀にめでたしと見奉る。御山に參うで給ひて、おはしましゝ(三)御有樣、たゞ目の前のやうに思し出でらる。限なきにても(四)、世になくなりぬる人ぞ、言はむ方なく口惜しきわざなりける。よろづの事を泣く〳〵申し給ひても、そのことわりを現にえ承り給はねば(五)、さばかり思し宣はせしさま〴〵の御遺言は(六)、何方か消え失せにけむと、いふかひなし。御墓は道の草しげくなりて、分け入り給ふ程いとゞ露けきに、月も雲がくれて、森の木立木深く心すごし。歸り出でむ方もなき心地して、拜み給ふに、ありし御面(七)影さやかに見え給へる、そゞろ寒きほどなり。

源　なきかげや(八)いかで見るらむよそへつゝ眺むる月も雲がくれぬる

明けはつる程にかへり給ひて、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を御かはりとて(九)侍はせ給へば(一〇)、その局にとて、

いみじき御心惑ひどもに、思し集むる事ども、えぞつゞけさせ給はぬ。(一)

源　別れしに悲しきことはつきにしをまたぞこの世の憂さはまされる(二)

月まち出でて出で給ふ。御供に唯五六人ばかり、下人もむつまじき限して、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、(三)ありし世の御ありきに異なり。皆いと悲しう思ふ中に、かの御禊の日、假の御隨身にて仕う奉りし、右近の尉の藏人、(四)得べき(五)爵位も程すぎつるを、終に御簡けづられて、(六)官も取られてはしたなければ、御供に參るうちなり。賀茂の下の御社を、かれと見渡すほど、(七)ふと思ひ出でられて、(八)下りて御馬の口をとる。(九)

右近　ひき連れて葵かざしゝそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき(一〇)

といふを、實にいかゞ思ふらむ、(一一)人より勝に花やかなりしものを、と思すも心ぐるし。君も、御馬より下り給ひて、御社の方を拜み給ふとて、神にまかり申し給ふ。(一二)

(一)兩人共心頭に群がる感想を言ひ顯はし得ず
(二)父の死別に怨は盡きたりと思ひしに
(三)言ふ迄も無き事なれども、以前の行裝とは格別の相違
(四)伊豫介の弟息子
(五)當然從五位下に叙せらるべき期限も過ぎしに
(六)免官せられて、殿上出勤の官吏は日給簡といふ札に姓名を記され、免官になれば其札を除かる
(七)通り懸りにあれぞと見やる時
(八)賀茂祭當時の事が
(九)馬より下りて源の馬の口をとる
(一〇)賀茂の神も恨めしく思はる
(一一)源の心、彼の情察すべし、祭當時彼は人に勝れて華麗なる隨身なりしに
(一二)暇乞

(一)藤壺
(二)藤壺の座近き
(三)藤壺自身對話
(四)藤壺が心配する
(五)藤壺の
(六)源の心、昔の恨も昔ひたけれど
(七)今更様な事を言ふと藤壺が思ふべし
(八)胸にこたへる一條、藤壺と密通の事
(九)我身はどうなりても冷泉の帝位さへ動かねば滿足なり
(一〇)桐壺の陵
(一一)遺言ありや
(一二)桐壺は崩御源は退去といふ悲しき目に遇ひては、折角世を遁れし效もなく此世の憂に歎き皆す、無くに泣くをかけたり

出づる頃なれば、まづ入道の宮(一)に參うで給ふ。近き(二)御簾の前に御座まゐりて、御身(三)づから聞えさせ給ふ。春宮の御事を、いみじく(四)後めたきものに思ひ聞え給ふ。互に心深きどちの御物語は、萬の哀増りけむかし。(五)懐しうめでたき御けはひの昔に變らぬに、(六)つらかりし御心ばへもかすめ聞えさせまほしけれど、(七)今更にうたてと思さるべし、わが御心にも、なか〳〵今一際亂れまさりぬべければ、念じかへしてたゞ、源「かく思ひかけぬ罪に當り侍るも、(八)思ひ給へあはする事の一ふしになむ、空恐ろしう侍る。(九)惜しけなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさばや」とのみ聞え給ふぞ理なるや。宮も、皆思し知らるゝ事にしあれば、御心のみ動きて聞えやり給はず。大將、よろづの事かき集め思しつゞけて泣き給へる氣色、いと盡せずなまめきたり。源「御山に參り侍るを、(一〇)御言傳や」(一一)と聞え給ふに、頓に物も聞え給はず。わりなくためらひ給ふ御氣色なり。

藤壺(一二)見しはなくあるは悲しき世の果を背きしかひもなく〳〵ぞふる



(一)無理に音信す
(二)潔く立退かんと決心する際の
(三)君を戀ひて逢ふことを得ず空しく歎に沈みしことが今度流罪の身となるべき基をなせり、みを(水節)に身をきかせたり、實に通じたる事は無き樣に詠めるが、源の用心深き所なりと舊注にいへり
(四)使の持ち行く途中
(五)涙が
(六)此後の逢瀬を待たずして我身は歎き死にすべし、水泡に身をきかせたり
(七)源の心、今一度朧に逢はずに行く事
(八)女が弘徽殿の妹なる事を思へば快からぬ事多くて
(九)強ひて逢ひたしとも言はず
(一〇)出發の前晩
(一一)藤壺、桐壺帝の陵、冷泉一の親乙

の御許に、わりなくして(一)聞え給ふ。

源　訪はせ給はぬも理に思ひ給へながら、今は(二)と世を思う給へはつるほどの憂さもつらさも、類なきことにこそ侍りけれ。

(三)逢瀬なきなみだの河に沈みしや流るゝみをのはじめなりけむ

と思ひ給へ出づるのみなむ、罪遁れ難う侍りける。

(四)道の程も危ければ、こまかには聞え給はず。女いといみじう覺え給ひて、忍び給へど、御袖より餘る(五)も所せくなむ。

朧月　(六)なみだ河うかぶ水泡も消えぬべし流れて後の瀬をもまたずて

泣く泣く亂れ書き給へる御手いとをかしげなり。(七)今一たび對面なくてやとおぼすは、なほ口惜しけれど、おぼし返して、憂し(八)と思しなすゆかり多くて、おぼろげならず忍び給へば、いとあながちにも聞え給はずなりぬ。

(一〇)明日とての暮には、院(一一)の御墓拜み奉り給ふとて、北山へまうで給ふ。曉かけて月

(一)須磨にてつかふべき道具
(二)無くてならぬ物のみ
(三)飾も無く簡畧にて
(四)事々しき道具
(五)引次ぐ
(六)地所家屋などの證書
(七)紫へ
(八)建て並べたる倉
(九)役に立つ女と見込みたれば
(一〇)家令どもを少納言に加へて
(一一)心得方を紫、少納言等に言ひ置く
(一二)源付の侍女
(一三)二人共源の妾
(一四)可愛がられぬ迄も
(一五)源退去の後は何につけてか心を慰めん
(一六)都に
(一七)紫方に
(一八)紫方へ
(一九)娯樂的の品を頒つは勿論、實用の物迄にも及ぶ
(二〇)朧月夜

で給へり。(一)かの山里の御住處の具は、えさらずとり使ひ給ふべきものども、殊更に(三)装もなくことそぎて、又然るべき(二)書ども文集など入れたる箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。(四)所せき御調度、花やかなる御装など、更に具し給はず。あやしの山賤めきてもてなし給ふ。侍ふ人々よりはじめ、よろづの事、(五)皆西の對に聞えわたし給ふ。領じ給ふ御庄、御牧より初めて、さるべき(六)所々の券など、(七)皆奉りおき給ふ。それより外の御倉町、(八)納殿などいふことまで、少納言を、(九)はか〲しきものに見置き給へれば、(一〇)親しき家司ども具して、(一一)しろしめすべき様ども宣ひあづく。わが(一二)御方の中務、(一三)中將などやうの人々、(一四)つれなき御もてなしながら、見奉る程こそ慰めつれ、(一五)何事につけてかと思へども、源「命ありて(一六)この世に又歸るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、(一七)こなたに侍へ」と宣ひて、(一八)上下皆參う上らせ給ひて、然るべき物ども、品々くばらせ給ふ。若君の御乳母達、花散里などにも、(一九)をかしき様のはさるものにて、まめ〱しき筋に思し寄らぬことなし。(二〇)尚侍

(一)再びは出來まじと思へば、無事なりし時に繁く逢はざりしが殘念にて
(二)心の安まる折なし
(三)世間を憚りて
(四)我身が入る月に比較されて
(五)濃紫の衣に映じて
(六)「あひにあひて物思ふ頃の我袖に宿る月さへぬるゝ顏なる」
(七)我數ならぬ身にも、源の御光は留めおきて常に見たし
(八)花散里が甚だ悲しと
(九)我流謫は終に晴るべければ、左樣に歎くこと勿れ
(一〇)「行先を知らぬ涙の悲しきは只目の前に落つるなりけり」
(一一)心を卑怯にする
(一二)夜明前
㊄ 豫め後事を整理す、朧月夜への暇乞
(一三)出發の用意
(一四)留守を預るべき上下の役々

り。源「短の夜のほどや。斯ばかりの對面も(一)又はえしもやと思ふこそ、ことなしにて過しつる年頃もくやしう、來しかた行くさきの例になりぬべき身にて、何となく(二)心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方の事ども宣ひて、鷄もしばしば鳴けば、(三)世につゝみて急ぎ出で給ふ。(四)例の月の入りはつる程、よそへられてあはれなり。女君の(五)濃き御衣にうつりて、實に(六)「ぬるゝ顏」なれば、

花散(七)月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを

(八)いみじと思いたるが、心苦しければ、かつは慰め聞え給ふ。

源「(九)行きめぐりつひにすむべき月影のしばしくもらむ空なながめそ

思へばはかなしや。たゞ、(一〇)知らぬ涙のみこそ、(一一)心おくらすものなれ」など宣ひて、(一二)明ぐれのほどに出で給ひぬ。

(一三)よろづの事どもしたゝめさせ給ふ。親しう仕う奉り、世になびかぬ限の人々、(一四)殿の事とり行ふべき上下定め置かせ給ふ。御供に隨ひ聞ゆるかぎりは、また擇り出

(一)帥宮
㊃花散里への暇乞
(二)源の心
(三)源にたより來る
(四)花散里
(五)麗景殿
(六)我を人がましく思召して
(七)源を力にして
(八)源退去の後は
(九)退去の後の侘住居
(一〇)花散里は
(一一)源が暇乞に來ぬならんと
(一二)源の
(一三)花散里が

に類なかりけりと、思し知らるゝ人の御有様なり。(一)親王は、哀なる御物語聞え給ひて、暮るゝ程に還り給ひぬ。

(二)花散里の心ぼそげに思して、常に聞え給ふも(三)理にて、(四)かの人も今一度見ずばつらしとや思はむと思せば、その夜はまた出で給ふものから、いと物憂くて、いたう更しておはしたれば、(五)女御、「(六)かくかずまへ給ひて、立ち寄らせ給へる事」と、喜び聞え給ふ様、書きつゞけむもうるさし。いといみじう心ぼそき御有様、たゞこ(七)の御かげに隠れて過い給へる年月、(八)いとゞ荒れまさらむ程思しやられて、殿の中いと幽なり。月おぼろにさし出でて、池廣く山木深きわたり、心ぼそげに見ゆるにも、(九)住み離れたらむ巖の中思しやらる。(一〇)西面には、斯うしも(一一)わたり給はずやと、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影の、なまめかしうしめやかなるに、うち振舞ひ給へる(一二)にほひ、似るものなくて、いと忍びやかに入り給へば、(一三)少し膝行り出でて、やがて月を見ておはす。又こゝに御物語のほどに、明方近うなりにけ

る事もあゝめれと思ふに、まして思ふ人具するは、(一)例なきことなるを、(二)ひたおもむきに物ぐるほしき世にて、立ちまさる事もありなむ」など聞え知らせ給ふ。日たくるまで大殿籠れり。帥宮、(三)三位中将(四)などおはしたり。対面し給はむとて、御直衣など奉る。源「位なき人は」(五)とて、無紋の御直衣、なか〱いと懐かしきを著給ひて打ち窶れ給へる、いとめでたし。御鬢かき給ふとて、鏡台に寄り給へるに、面瘦せ給へるかげの、我ながらいとあてに清らなれば、源「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや瘦せて侍る。哀なるわざかな」と宣へば、女君、涙をひとめうけて(六)見おこせ給へる、いと忍びがたし。

源　身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかげははなれじ(七)

ときこえ給へば、

紫　わかれてもかげだにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし

言ふともなくて、柱がくれに居隠れて、涙を紛はし給へる様、なほこゝら見る中(八)

(一)配所へ女を連れ行くは
(二)無暗に物騒な今の世なれば、女を連れ行く杯の事あらば一層面倒なるべし
(三)源の弟太宰帥
(四)頭中将
(五)官爵を取られたれば源今は無位也、無位の人は紋様なき衣を著る也
(六)目一杯に浮べて
(七)身は離れても常に君の側にある鏡の中に留めおく我影は残りて君と添ひ居るべし
(八)源の感、今まで見た多くの女の中で

(一)人に薄情者と厭はれて終るも嫌なれば
(二)源の退去以外に飛でもない事とは何を言はん
(三)源が見ての感、
(四)以下源が理ぞかしと感じたる其注釋、紫上父とは元來疎遠にて源をのみ力にし來れるに
(五)近來は世間を憚りて兵部卿が尙寄付かず見舞にも來ぬが外聞惡く
(六)寧ろ父に知られなければよかつたと紫の愚痴
(七)兵部卿宮の今の妻
(八)紫の俄出世のざまを見よ
(九)思ふ人には極つて別れる人哉、紫が昔母祖母に分れ今夫に分るゝを云
(一〇)紫からも無沙汰
(一一)外には力になる人なく
(一二)山中の侘住居
(一三)今伴ひ行きては不似合にて人聞惡し
(一四)お上に對し愼む人
(一五)我身に
(一六)免れぬ因果で

やごもりにてやは。常なき世に、(一)人にも情なきものと、心おかれはてむも、いとほしうてなむ」と聞え給へば、紫「(二)かゝる世を見るより外に、思はずなることは、何事にか」とばかり宣ひて、いみじと思し入りたる様、人より殊なるを、(三)理ぞかし、(四)父親王はいと疎にて、もとより思しつきにけるに、まして(五)世の聞えを煩はしがりて、音づれ聞え給はず、御訪にだに渡り給はぬを、人の見るらむ事も恥かしく。(六)なかなか知られ奉らでやみなましを、(七)繼母の北の方などの、(八)「世に俄なりし幸福のあわたゞしさ。あなゆゝしや、(九)思ふ人々、かた〴〵につけて別れ給ふ人かな」と宣ひけるを、さる便ありて漏り聞き給ふにも、いみじう心憂ければ、(一〇)これよりも絶えて音づれ聞え給はず、(一一)又たのもしき人もなく、實にぞ哀なる御有様なる。源「なほ世に免され難うて年月を經ば、(一二)巖の中にも迎へ奉らむ。(一三)たゞ今は人聞のいとつきなかるべきなり。(一四)公に畏り聞ゆる人は、明なる月日の影をだに見ず、安らかに身を振舞ふことも、いと罪重かゝなり。(一五)過なけれど、(一六)さるべきにこそかゝ

㊂ 紫上と別を惜む
(一)二條院に源が
(二)伺候者の詰所
(三)私宅へ訣別に行きし間と見えて
(四)親しからざる人は
(五)食卓、外來の人の用ひし物なるべし
(六)昔の疊は薄くて用ゐる時に敷く物故、用なければ片附けおく也
(七)押居る間さへ如此
(八)留守にならば
(九)戸締もせず
(一〇)紫が
(一一)源の心、我退去の後久しくならば彼等も居たくまたず散り行くべし
(一二)夜更けたれば宿れり
(一三)いつものとんでもなき浮氣沙汰と思ひしか
(一四)出發前夜でも其方の側を離れじと思へども
(一五)引込んで許も居られず

(一)殿におはしたれば、わが御方の人々も、まどろまざりける氣色にて、處々に群れ居て、あさましとのみ世を思へる氣色なり。(二)侍には、親しう仕う奉るかぎりは、御供に參るべき心まうけして、(三)私のわかれ惜むほどにや、人目もなし。(四)さらぬ人は、訪ひ參るも重きとがめあり、煩はしき事まされば、所狹く集ひし馬車のかたもなく寂しきに、世は憂きものなりけりと思し知らる。(五)臺盤なども傍は塵ばみて、(六)疊ところ〴〵ひきかへしたり。(七)見るほどだに斯かり、(八)まして如何に荒れゆかむと思す。西の對に渡り給へれば、(九)御格子も參らで(一〇)眺め明し給ひければ、簀子などに、若き童べ、ところ〴〵に臥して、今ぞ起きさわぐ。宿直姿どもをかしうて出で入るを見給ふにも心細う、(一一)年月經ばかゝる人々も、えしも在りはてでや行き散らむなど、さしもあるまじき事さへ、御目のみとまりけり。源「昨夜は云々して(一二)夜更けにしかばなむ。(一三)例の思はずなる樣にや思しなしつる。(一四)かくて侍る程だに御目かれずと思ふを、かく世を離るゝ際には、心苦しきことの自ら多かりけるを、(一五)ひた

（一）大宮へ源の返事
（二）憂に閉ぢられて口に出ぬ樣を
（三）顏を見ると却て煩惱の種なるべければ
（四）源の幼時より
（五）大宮の
（六）葵が烟となりし都の空を離れては、葵との隔は彌々甚しからん

て侍るなる中にも、今朝は猶類あるまじう思ひ給へらるゝ程かな」と、鼻聲にて、實に淺からず思へり。

源　聞えさせまほしき事も、かへすぐ\思う給へながら、（二）たゞむすぼほれ侍る程、（一）推し量らせ給へ。いぎたなき人は、見給へむにつけても、なかく\、うき世遁れ難う思ひ給へられぬべければ、（三）心強く思う給へなして、急ぎまかゝで侍り。

と聞え給ふ。出で給ふほどを、人々のぞきて見奉る。入方の月いと明きに、いとゞなまめかしう淸らにて、物を思いたる樣、虎狼だにも泣きぬべし。まして、（四）いはけなくおはせし程より見奉りそめてし人々なれば、たとしへなき御有樣をいみじと思ふ。まことや（五）かの御かへし、

大宮　（六）なき人のわかれやいとゞ隔たらむ煙となりし雲井ならでは

取りそへて哀のみつきせず、出で給ひぬる名殘、ゆゝしきまで泣きあへり。

あひて、秋の夜の哀に多くたちまされり。隅の間の勾欄におしかゝりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らむとにや、妻戸押し開けて居たり。源「また對面あらむ事こそ、思へばいと難けれ。(一)かゝりける世を知らで、心安くもありぬべかりし月頃を、さしも急がで隔てけるよ」など宣へば、(二)物も聞えず泣く。若君の御乳母の宰相の君して、(三)宮の御前より御消息きこえ給へり。

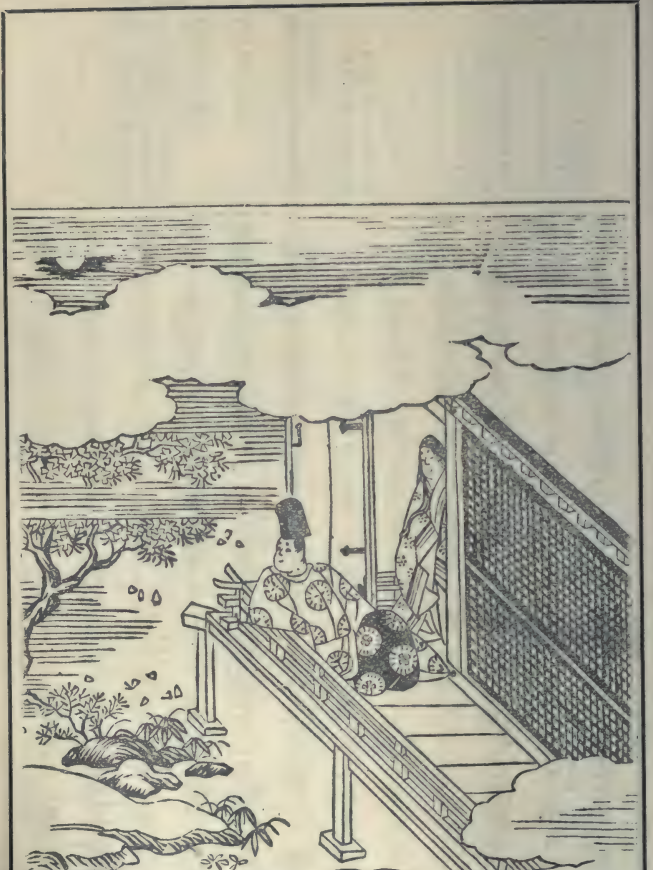
大宮「(四)自らも聞えまほしきを、かきくらすみだり心地ためらひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるも、(五)樣變りたる心地のみし侍るかな。(六)心苦しき人のいぎたなき程は、暫しもやすらはせ給はで。

と聞え給へれば、うち泣き給ひて、

源 (七)鳥部山もえしけぶりもまがふやとあまの鹽やく浦見にぞゆく

御かへしともなくうち誦じ給ひて、源「曉の別は、(八)斯うのみやは心づくしなる。思ひ知り給へる人もあらむかし」と宣へば、宰相「いつとなく、別といふ文字こそうた

(一)斯うなる事とは知らず、氣樂に逢はれる時分は左迄逢はんともせざりし
(二)口もきかず
(三)葵の母大宮
(四)御目にかゝりて申上げたけれど
(五)葵存生中と變りたる
(六)夕霧の目さむる迄暫時待たずに出給ふか
(七)退去を思ひ立ちたるも、葵燒く烟を見て葵の葬の當時を追懷せん爲なり
(八)何時も斯くつらき物でもあるまじ、此味を知り居る人もそこらに居そうなものぢや



(一)葵が短命にて
(二)夕霧が老祖父母の手許にて育ちて
(三)源に親まぬ月日の長く續くべきかと
(四)必しも眞に罪ありて罰せられたるに非ず
(五)前世の因果にて寃を被る事外國にも例あり
(六)其も罪名がありて始めて罰せられたる也
(七)源には罪名も無ければ、どう考へても解せぬ
(八)頭中將
(九)侍女ども
(一〇)他の侍女より殊に源の愛せる
(一一)口には出せず
(一二)中納言君と

思ひき歎侍らまし、よくぞ(一)短くて、かゝる夢を見ずなりにけると、思う給へ慰め侍る。(二)幼くものし給ふが、かく齢過ぎぬる中に留まり給ひて、(三)なづさひ聞えぬ月日や隔たり給はむと、思ひ給ふるをなむ、萬の事よりも悲しう侍る。いにしへの人も、(四)眞に犯あるにてしも、かゝる事に當らざりけり。(五)なほ然るべきにて、人のみかどにもかゝる類多く侍りけり。(六)されど、言出づる節ありてこそさる事も侍りけれ。(七)とざまかうざまに、思ひ給へよらむ方なくなむ」など、多くの御物語聞え給ふ。(八)三位中將も參り逢ひ給ひて、御酒などまゐり給ふに、夜更けぬれば、とまり給ひて、(九)人々御前に侍はせ給ひて、物語などせさせたまふ。(一〇)人よりは勝にこよなう忍び思す中納言の君、(一一)いへばえに悲しう思へる樣を、人知れずあはれと思す。人皆靜まりぬるに、(一二)取りわきて語らひ給ふ。これにより留り給へるなるべし。明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやうやう盛過ぎて、僅なる木陰の、いとおもしろき庭に薄く霧り渡りたる、そこはかとなく霞み

ても、(一)思ひ給へ寄らざりし御有樣を見給ふれば、萬いと味氣なくなむ」と聞え給ひて、いたうしほたれ給ふ。源「(二)とある事もかゝる事も、前の世の報にこそ侍るなれば、(三)言ひもて行けば、たゞ自らの怠になむ侍る。さして(四)斯く官爵を取られず、(五)あさはかなる事にかゝづらひてだに、(六)公のかしこまりなる人の、現ざまにて世の中にあり經るは、咎重きわざに、他の國にもし侍るなるを、(七)遠く放ち遣すべき定なども侍るなるは、さま異なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。(八)濁なき心に任せてつれなく過し侍らむも、いと憚多く、これより大なる恥に臨まぬさきに、世を遁れなむと思う給へ立ちぬる」など、細やかに聞え給ふ。(九)昔の御物語、院の御事思し宣はせし(一〇)御心ばへなど聞え出で給ひて、御直衣の袖もえ引放ち給はぬに、(一一)君もえ心強くもてなし給はず。若君の何心なく紛れありきて、これかれに馴れ聞え給ふを、(一二)いみじと思したり。左大臣「過ぎ侍りにし人を、(一三)世に思う給へ忘るゝ世なくのみ、今に悲び侍るを、(一四)この御事になむ、若し侍る世ならましかば、いか樣に

(一)斯る事あらんとは
(二)何事も
(三)つまり不幸は自分の懈怠の結果なり
(四)自分が取られたる如く
(五)僅の咎を受けたる者でも
(六)朝廷の咎を蒙りたる人が常の如く世に在るは外國にても重科とするに
(七)自分に付ては遠流の評議あるは特別の罰を蒙る譯なるべければ
(八)心の潔白を憑みて平氣で居るのも
(九)左大臣が
(一〇)桐壺の遺志
(一一)源もほろりとする
(一二)源が
(一三)葵上
(一四)源退去の事につきてのみは彼の早死を却て幸に思ふ

●源氏左大臣邸へ暇乞に行く、
（一）出發の二三日前
（二）葵上の居間
（三）夕霧
（四）思慮深からぬ
（五）ふざけ
（六）長く逢はぬのに
（七）悲しさ
（八）左大臣
（九）取留めもなき
（一〇）參上して申上げんと
（一一）勝手に付ては、屈めた腰を延して出歩くと惡く噂されそうなれば
（一二）容赦なき
（一三）源退去の事

（一）二三日かねて、大殿に、世に隱れて渡り給へり。網代車のうち窶れたるにて、女車のやうにて隱ろへ入り給ふもいと哀に、夢とのみおぼゆ。（二）御方いと淋しげに、荒れたる心地して、（三）若君の御乳母ども、昔侍ひし人の中に、まかで散らぬ限、かく渡り給へるを珍らしがり聞えて、參う上り集ひて、見奉るにつけても、殊に物（四）深からぬ若き人々さへ、世の常なさ思ひ知られて、涙にくれたり。若君はいと美しうて、（五）ざれ走りおはしたり。源「（六）久しき程に忘れぬこそ哀なれ」とて、膝に居ゑ給へる御氣色、（七）忍びがたけなり。（八）大臣此方に渡り給ひて、對面し給へり。左大臣「徒然に籠らせ給へらむ程、（九）何と侍らぬ昔物語も、（一〇）參り來て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病重きにより、公にも仕う奉らず、位をも返し奉りて侍るに、（一一）私樣には腰のべてなど、物の聞えひがく〱しかるべきを、今は世の中憚るべき身にも侍らねど、（一二）いちはやき世のいと怖ろしう侍るなり。（一三）かゝる御事を見給ふるにつけて、命長きは心憂く思ひ給へらるゝ、世の末にも侍るかな。天の下を逆樣になし

(一)花散の心細き生活も只源の保護によりて續き行く事なれば
(二)花散が源の退居を
(三)源が一寸でも手をかけし女どもは
(四)藤壺
(五)源を尋ねたちばどんな噂をされるか知れぬと
(六)源の心
(七)藤壺が源を
(八)藤壺との中は到底只氣ばかりもめる縁ぢやわいと
(九)出發期を知らせず
(一〇)仰山な暇乞の文では無く
(一一)作者自身が

もむけて、恨めしげにおぼいたり。かの花散里にも、おはし通ふ事こそ稀なれ、(一)心ぼそく哀なる御有様を、この御蔭に隠れて物し給へば、(二)いみじう歎き思したる様、いと理なり。(三)等閑にても、ほのかに見奉り通ひ給ひしところ〴〵、人知れぬ心を砕き給ふ人ぞ多かりける。(四)入道の宮よりも、(五)物の聞えや又如何とりなされむ、とわが御爲つゝましけれど、忍びつゝ御訪常にあり。(六)昔かやうに相思し、(七)哀をも見せ給はましかばと、うち思ひ出で給ふに、(八)さも様々に、心をのみ盡すべかりける人の御契かなと、つらう思ひ聞え給ふ。三月廿日餘の程になむ、都離れ給ひける。人に、(九)今としも知らせ給はず、唯いと近う仕う奉り馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いとかすかにて出で立ち給ふ。然るべき所々に、御文ばかり、(一〇)わざとならずうち忍び給ひしにも、哀と忍ばるばかり書き盡し給へるは、見所もありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれに、(一一)はか〴〵しくも聞き置かずなりにけり。

たゝけたらむ住居は、いと本意なかるべし、さりとて都を(一)遠ざからむも、故里覺束なかるべきを、(二)人わろくぞおぼし亂るゝ。萬の事、來しかた行くすゑ思ひ續け給ふに、悲しき事いと様々なり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと(三)住み離れなむ事を思すには、いと捨て難き事多かる中にも、(四)姫君の明暮にそへて思ひ歎き給へる様の心苦しさは、何事にも勝れて哀なるを、(五)行きめぐりても復逢ひ見む事を必ずと思さむにてだに、なほ一二日のほど、餘所々〱に明し暮す折々〱だに、覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ひ給へるを、(六)幾年その程と限ある道にもあらず、(七)逢ふをかぎりに隔たり行かむも(八)定なき世に、(九)やがて別るべき門出にもやと、(一〇)いみじう覺え給へば、忍びて(一一)諸共にもやと、思し寄るをりあれど、(一二)さる心細からむ海面の、波風より外に立ち交る人もなからむに、(一三)斯くらうたき御様にて、引き具し給へらむもいとつきなく、(一四)わが心にもなか〱物思ひのつまなるべきをなど、思し返すを、女君は、(一五)「いみじからむ道にも、後れ聞えずだにあらば」と(一六)お

(一)須磨に住まんと思へば
(二)見つともなく
(三)捨去らんと覺悟して見ると
(四)紫上
(五)必ず復廻り逢ふべしと思ひ居てさへ
(六)今、須磨に退くとすれば、何時歸るといふ期限はなし
(七)我身は行衛も知らず果もなし逢ふを限と思ふばかりぞ」
(八)わからぬ世に
(九)今度の別れが即ち永の別れになるかも知れぬと
(一〇)源が甚だ悲しく
(一一)紫も伴ひ行かんかと
(一二)源の心
(一三)斯る處へ斯る人を連れ行くも不似合に
(一四)又自分にも却て心配の種なるべしなどと
(一五)如何程つらき旅でも一緒にさへ行ければ
(一六)志を示して

須磨(すま)

梗槩

㊀源氏須磨に退去せんとす。人々の愁。㊁源氏左大臣邸へ暇乞に行く。左大臣の愁嘆。中納言(源氏の情人)の愁嘆。㊂紫上と別を惜む。㊃花散里の許へ暇乞に行く。㊄豫め後事を整理す。朧月夜へ文にて暇乞す。㊅藤壺へ暇乞に行く。桐壺帝の墓に詣づ。冷泉へ文にて暇乞。㊆出發。㊇須磨に著す。邸宅の經營。㊈京の所々への文。其返事。㊉朧月夜再朱雀帝に寵せらる。朱雀帝のいやみ。⑪須磨の閑居。月夜の愁緒。⑫太宰大貳上京の途中、船より源氏に消息す。娘の五節(源氏の情人)歌を贈る。⑬都の人々源氏を戀ふ。⑭須磨の寂しき生活。⑮明石の入道娘を源氏に奉らんとす。反對意見を持てる妻。氣位高き娘。⑯頭中將源氏の謫居を訪ふ。⑰三月上巳の日、源氏海に祓す。激しき浪風。怪夢。

㊀ 源氏須磨に退去せんとす
(一) 源の心
(二) 閑居する方が斯くいやな世間に立交るには増ならんと
(三) 源の心
(四) 明け放しなる

(一)世(よ)の中(なか)いと煩(わづら)はしく、(二)はしたなき事(こと)のみ増(まさ)れば、せめて知(し)らず顔(がほ)に有經(ありへ)ても、これより勝(まさ)る事もやと思(おぼ)しなりぬ。かの須磨(すま)は、昔(むかし)こそ人の住處(すみか)などもありけれ、今(いま)は、いと里(さと)ばなれ心(こころ)すごくて、海士(あま)の家(いへ)だに稀(まれ)になゝど聞(き)き給へど、(三)人しげくひ(四)

には、(一)わざとなく忍びやかに(二)うち振舞ひ給ひて(三)のぞき給へるも珍らしきに添へて、(四)よにめなれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の懐かしく語らひ給ふも、(五)思さぬ事にはあらざるべし。假にも(六)見給ふ限は、おしなべての際にはあらねばにや、樣々につけて、いふかひなしと思さるゝはなければにや、憎けなく、われも人も情をかはしつゝ、過し給ふなりけり。それを(七)あいなしと思ふ人は、とにかくにかはるも、理の世のさがと思ひなし給ふ。(八)ありつる垣根も、さやうにて有樣變りにたるあたりなりけり。

(一)わざとらしからず
(二)源が
(三)顔を出し
(四)餘り類のなき源のもてなし方なれば
(五)源に無い事を言ひ居るにもあらじ
(六)源の相手になる女は皆勝れて居る故か、十人十色夫々に取得があるを源が認むる故か、源はどの女にも温情を以て對する
(七)面白からず思ふ女は心變りするもあれば、源は是が浮世の常態よと觀じて居る
(八)中川の宿の女も

(一)桐壺が
(二)色々聯想されて
(三)路寄りしたる中川の宿の垣根に鳴きたる同じ郭公にや
(四)「いにしへの事語らへば時鳥如何に知りてか古聲のする」
(五)故桐壺の由緣懷かしさに我は今日此處へ訪ね參れり
(六)差向き此處へ來べきであつた
(七)忘れ難き事の數増す
(八)人は誰も
(九)ぼつ〳〵話して聞かすべき相手
(一〇)君は
(一一)女御の感、時勢の變は今更言はずともの事なれど
(一二)源が
(一三)相手が源なる故か
(一四)橘の花ゝればこそ君にも訪はるゝなれ、花散里を橘に比したる也
(一五)何と言ふても
(一六)源の心中に他の女と比較せらる
(一七)花散里の部屋

う懐しきかたには、(一)思したりしものをなど、思ひ出で聞え給ふにつけても、昔の(二)事かきつらね思されて、うち泣き給ふ。郭公、(三)ありつる垣根のにや、同じ聲にうち鳴く。慕ひ來にけるよと思さるゝほども、艶なりかし。(四)「如何に知りてか」など、忍びやかにうち誦し給ふ。

源(五)「橘の香をなつかしみほとゝぎす花ちる里をたづねてぞとふ

いにしへの忘れ難う思ひ給へらるゝなぐさめには、(六)まづ參り侍りぬべかりけり。こよなくこそ、紛るゝ事も、(七)數そふ事も侍りけれ。(八)大方の世に隨ふものなれば、昔(九)がたりもかきくづすべき人少うなり行くを、(一〇)ましていかに、徒然も紛るゝことなく思さるらむ」と聞え給ふに、(一一)いと更なる世なれど、物をいと哀と思しつゞけた(一二)る御氣色の淺からぬも、(一三)人の御樣からにや、多く哀ぞ添ひにける。

女御「人めなく荒れたる宿は(一四)たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ

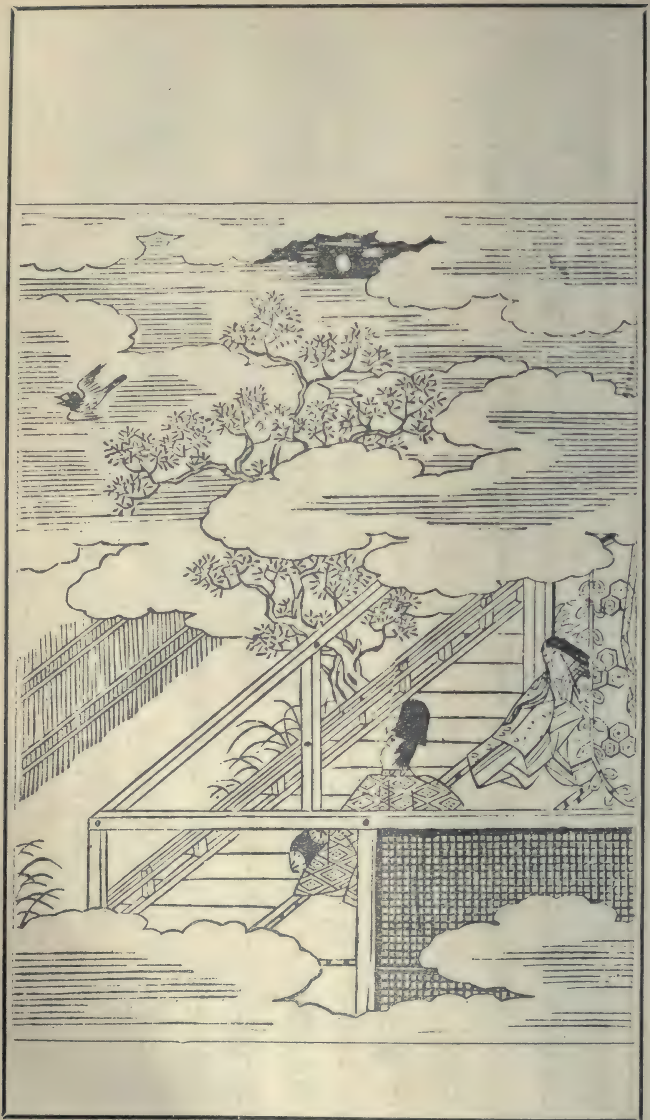
とばかり宣へるも、(一五)さはいへど人にはいと殊なりけりと、(一六)思しくらべらる。(一七)西面

るべし。

女郭公（一）かたらふ聲はそれながらあなおぼつかな五月雨のそら

殊更（二）にたどると見れば、惟光「よしく〜、植ゑし垣根も」（三）とて出づるを、人知れぬ心（四）には、妬うもあはれにも思ひけり。然もつゝむべきことぞかし、理にもあれば、（五）さすが（六）なり。かやうの際に、筑紫の五節（七）が、らうたげなりしはやと、まづ思し出づ。如何なるにつけても、御心（八）の暇なく苦しげなり。年月を經ても、なほ斯樣に、見し（九）あたりの情は、過し給はぬにしも、なかく〜數多の人の物思ひぐさなり。さてかの本意（一〇）の所は、思しやりつるも著く、人目なく靜かにておはする有樣を見給ふも、いと哀なり。まづ女御（一一）の御方にて、昔の御物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づる程に、いとゞ木高きかげども木闇う見えわたりて、近き橘のかをり懷しく匂ひて、女御の御けはひ、（一二）ねびにたれどあくまで用意あり、あてにらうたげなり。勝れて花やかなる御（一三）おぼえこそなかりしかど、睦まじ

（一）源の御出とは聞きたれども、今頃どうして御出ありしやら覺束なし
（二）わざと疑ふ振をする
（三）花散りし庭の橘も繁りあひて植ゑし垣根も得こそ見わかね」お門違なりしかも知れぬ
（四）女の心中窃に
（五）源の心、今は他に男もあるべければ、彼の如く用心して猥に我を迎へぬも尤なり
（六）流石惜くもなし
（七）太宰大貳の娘、五節の舞姫を勤めし女、五節は十一月宮中にて行はるる女樂
（八）女故に源の心は
（九）一旦馴染みし女
㊂　麗景殿女御の花散里姉妹の閑居
（一〇）目的の所、花散里の方
（一一）姉の麗景殿
（一二）年はとりたれど
（一三）桐壺帝の御寵愛



となく(一)思し亂るゝ、世の(二)哀のくさはひには、思ひ出で給ふに、忍びがたくて、五月雨の空、珍しう晴れたる雲間に(三)渡り給ふ。何ばかりの御裝なく、うちやつして、御前なども殊に無く、忍び給へり。中川の程おはし過ぐるに、さゝやかなる家の、木立など(四)由ばめるに、よく鳴る琴を、(五)あづまに調べてかき合せ、賑はゝしく彈きならすなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、(六)少しさし出でて見入れ給へば、大なる桂の木の追風に、(七)祭の頃思し出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを、たゞ一目見給ひし宿なりと、思ひ出で給ふに、(八)たゞならず。(九)程經にけるを、おほめかしくやとつゝましけれど、(一〇)過ぎがてにやすらひ給ふ。折しも郭公鳴きてわたる。(一一)催し聞えがほなれば、御車推し返させ給ひて、例の惟光を入れ給ふ。

源　(一二)をちかへりえぞ忍ばれぬほとゝぎすほの語らひし宿のかきねに

寢殿とおぼしき屋の、西のつまに人々居たり。(一三)さき〴〵も聞きし聲なりければ、聲づくり(一四)氣色とりて、御消息聞ゆ。若やかなる氣色どもあまたして、(一五)おほめくな

(一)源が
(二)哀を感ずる材料となりて花散が思ひ出さるゝに
(三)源が花散方へ
(四)氣取りたる家に
(五)東琴に調子を合せて
(六)車より乘出して
(七)加茂祭には葵と桂とを冠などに著くれば也
(八)心動く
(九)源の心、久しく打絶えたれば突然の訪問を變に思ふならん、氣がひけるけれども
(一〇)過ぎ得ずして躊躇す
(一一)此宿を訪へと勧むる如くなれば
(一二)昔親みし人の門を通りて舊情を思ひ起し、堪へかねて訪問するぞ
(一三)居る人々の聲は惟光が兼て聞知れる聲なりしかば
(一四)甘く持掛けて
(一五)變に思へる樣なり

㊀源氏花散里を訪はんとして昔馴染の女を尋ぬ
(一)戀故の心がらなる心配は源の胸に絶えぬ上
(二)桐壺崩後、世間の不如意なる事
(三)源が
(四)流石に思切得ぬ係累
(五)麗景殿女御、桐壺帝の妃
(六)子もなく
(七)源に保護されて
(八)麗景殿の妹、花散里と名づく
(九)假初に源に逢ひし
(一〇)源の性分
(一一)重くも待遇せぬ
(一二)花散里に氣を揉みぬかせるをも

花散里

梗槩　㊀源氏花散里を訪はんとして、途に昔馴染の女を尋ぬ。㊁麗景殿女御花散里姉妹の閑居。

(一)人知れぬ御心づからの物思はしさは、いつと無きことなゝめれど、かく(二)大方の世につけてさへ、煩はしう思し亂るゝ事のみまされば、(三)物心ぼそく、世の中なべて厭はしう思しならるゝに、(四)流石なる事多かり。(五)麗景殿と聞えしは、(六)宮たちもおはせず、院隱れさせ給ひて後、いよ〳〵哀なる御有樣を、たゞこの大將殿の御心に(七)もてかくされて、過し給ふなるべし。(八)御妹の三の君、内裏わたりにて、(九)はかなくほのめき給ひし名殘、(一〇)例の御心なれば、さすがに忘れもはて給はず、(一一)わざとももてなし給はぬに、(一二)人の御心をのみ盡しはて給ふべかゝめるをも、この頃殘るこ

ひて(一)我が心の入る方に、靡き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事はまして然もあらむ、何事につけても、(二)公の御方に後やすからず見ゆるは、(三)春宮の御世心よせの異なる人なれば、理になむあゝめる」と、(四)すぐ〳〵しう宣ひ續くるに、流石にいとほしう、(五)など聞えつる事ぞと思さるれば、右大臣「さばれ、しばし此事漏し侍らじ。内裏にも奏せさせ給ふな。(六)かくのごと罪侍りとも、思し棄つまじきをたのみにて、あまえて侍るなるべし。(七)内々に制し宣はむに、聞き侍らずば、その罪にはたゞみづからあたり侍らむ」など、聞えなほし給へど、殊に御氣色もなほらず。(八)かく一所におはして隙もなきに、(九)つゝむ所なう、さて入り物せらるらむは、ことさら(一〇)輕め弄ぜらるゝにこそは、(一一)と思しなすに、いとゞいみじう目ざましく、この序に(一二)然るべき事ども構へ出でむに、よき便なりと思しめぐらすべし。

(一)朧は己が好む源に靡けるならん
(二)源の仕方が朱雀方に不安の念を與ふるは
(三)源は冷泉眞父故
(四)眞竹に
(五)話さねばよかりし
(六)此位の事をしても大丈夫と朧が付上りての所業ならん
(七)私が朧を譴責して無効ならば我其咎を受けん
(八)弘徽殿と朧と
(九)憚らず
(一〇)源が我を侮る也と
(一一)弘徽殿が
(一二)源を除くべき方便をめぐらすに



(一)好色は男の常なれど
(二)例顔
(三)怪しきそぶりある
(四)人の噂を聞きても、源がよも左樣の事は爲まじと思ひて源の心事を疑ひし事なかりき
(五)齋院たる人を挑むは世の爲にも源自身の爲にも惡き事なれば
(六)源が
(七)源は其時の人物として天下に重きをなせる人なれば
(八)憎くてたまらぬ
(九)不快なる
(一〇)朱雀は帝なれども人が輕蔑して
(一一)左大臣
(一二)一人娘、葵上
(一三)兄なる春宮朱雀
(一四)取つて置きにして源に寄せ
(一五)朧月夜を我々は帝に奉らんとせしを
(一六)其途中に源が横取せしを
(一七)不埒とも思はず
(一八)源が罪にならざりし故に朧を宮仕に出したれど、朧が可愛そう故
(一九)朧月夜を
(二〇)憎き源への面當にもと

りぬる。(一)男の例とはいひながら、大將もいとけしからぬ御心なりけり。(二)齋院をもなほ聞え犯しつゝ、忍びに御文通はしなどして、(三)氣色あることなど、(四)人の語り侍りしをも、(五)世の爲のみにもあらず、我が爲にもよかるまじき事なれば、よもさる(六)思ひやりなきわざし出でられじとなむ、(七)時の有職と、天の下を靡し給へる樣殊なンめれば、大將の御心を、疑ひ侍らざりつる」など宣ふに、宮は(八)いとゞしき御心なれば、(九)いとものしき御氣色にて、弘徽殿「(一〇)帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひおとし聞えて、致仕の(一一)大臣も、又なくかしづく(一二)ひとつむすめを、(一三)兄の坊にておはするには奉らで、弟の源氏にて幼きが、(一四)元服の添臥にとりわき、(一五)又この君をも宮仕にと志して侍りしに、(一六)をこがましかりし有樣なりしを、誰も〳〵(一七)あやしとや思したりし。皆かの御方にこそ御心よせ侍るめりしを、(一八)その本意違ふ樣にてこそは、かくても侍ひ給ふめれど、いとほしさに、いかでさる方にても、(一九)人に劣らぬ樣にもてなし聞えむ、さばかり(二〇)ねたけなりし人の見る所もあり、などこそは思ひ侍りつれど、強

ましけれど、直面(一)にはいかでか顯し給はむ。目(二)もくるゝ心地すれば、その疊紙をとりて、寢殿へ渡り給ひぬ。かんの君は、(三)われかの心地して死ぬべく思さる。大將殿も、いとほしう、遂に用なき振舞の積りて、人のもどきを負はむとする事と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給ふ。(四)大臣(五)は、思ひのまゝに、籠めたる所おはせぬ本性に、いとゞ老の御ひがみさへ添ひにたれば、何事(六)にかは滯り給はむ、ゆく〳〵(七)と宮にも愁へ(八)聞え給ふ。右大臣「斯う〳〵の事なむ侍るを、この疊紙は右大將の御手なり。昔も心ゆるされてありそめにける事なれど、人柄(一〇)によろづの罪を免(九)して、然ても見むといひ侍りし折は、心もとゞめず、めざましげにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、然る(一一)べきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し棄つまじきをたのみにて、かく本意の如く奉(一三)りながら、猶(一二)その憚ありて、(一四)うけばりたる女御なども言(一五)はせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ひ給ふるに、又斯かることさへ侍りければ、更にいと心憂くなむ思ひなり侍

(一)源に面と向ひて見現す事は出來ぬ
(二)右大臣が
(三)前後を忘じて
(四)人に批難さるべき事よと
(五)右大臣は我儘にて物を我慢する事なき性質なる上
(六)何の猶豫あらん
(七)づか〳〵と
(八)訴へ
(九)前にも油斷して、源が朧月夜に通ふ事になりしかど
(一〇)源の顔に免じて其なら聟にせんと言ひし時は、源が朧を愛せず不埒なる待遇をせしかば
(一一)約束事と諦めて
(一二)朱雀は源に通じたる故を以て朧を棄てじと思ひて
(一三)朧を朱雀に
(一四)れつきとしたる
(一五)朧を

(一) 密夫を引入れある處へ父に來られて
(二) 是なら止めさせたる祈を延すのであつた
(三) 薄紫に似たる色
(四) 朧月夜の
(五) 文字を書き散したる鼻紙
(六) あれは
(七) 變な物ぢや
(八) 朧月夜も
(九) 茫然として
(一〇) 作者の評、斯る場合には、我子でも恥かしからんと察するが身分ある人の常なり
(一一) 性急にして
(一二) 熟慮もせず
(一三) 無遠慮に
(一四) 右大臣の態
(一五) 氣がもめるけれども

かしな。かんの君いとわびしう思されて、やをら膝行り出で給ふに、面のいたう赤みたるを、(一)なほ惱ましう思さるゝにやと見給ひて、右大臣「など御氣色の例ならぬ。物怪などのむつかしきを、(二)修法延べさすべかりけり」と宣ふに、(三)薄二藍なる帶の、(四)御衣に纏はれて引き出でられたるを見つけ給ひて、怪しと思すに、又(五)疊紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これは如何なる物どもぞと、御心驚かれて、右大臣「(六)かれは誰がぞ。(七)氣色異なるものの樣かな。賜へ。それ取りて誰がぞと見侍らむ」と宣ふにぞ、うち見かへりて、(八)我も見つけ給へる。紛はすべき方も無ければ、いかゞは答へ聞え給はむ、(九)我にもあらでおはするを、(一〇)子ながらも恥かしと思すらむかしと、然ばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、(一一)のどめたる所おはせぬ大臣の、(一二)思しもまはさずなりて、疊紙を取り給ふまゝに、几帳より見入れ給へるに、いと痛うなよびて、(一三)つゝましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顏引き隱して、とかく紛らはす。(一四)あさましう、目ざましう、(一五)心や

怖ろしけれど、(一)かゝる事しも増る御癖なれば、いと忍びて度かさなり行けば、(二)氣色見る人々もあるべかめれど、(三)煩はしうて、宮には然なむとは啓せず。(四)大臣はた思ひかけ給はぬに、雨俄におどろ〳〵しう降りて、神いたう鳴りさわぐ曉に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、此方彼方の人目しげく、女房どもも懼ぢ惑ひて近う集ひまゐるに、いとわりなく(五)出で給はむ方なくて、明けはてぬ。(六)御帳のめぐりにも、人々しげく並居たれば、いと胸潰らはしく(七)思さる。(八)心知りの人二人ばかり、心を惑はす。神鳴りやみ、雨少し小歇みぬるほどに、(九)大臣渡り給ひて、まづ(一〇)宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにて、(一一)え知り給はぬに、輕らかにふと(一二)はひ入り給ひて、御簾引き上げ給ふまゝに、右大臣「如何にぞ。いとうたてありつる夜の樣に、(一三)思ひやり聞えながら、參り來でなむ。(一四)中將、(一五)宮の亮など侍ひつや」など、宣ふけはひの(一六)舌疾にあはつけきを、大將は物のまぎれにも、(一七)左大臣の御有樣、ふと思しくらべられて、たとしへなくぞほゝゑまれ給ふ。(一八)實に入りはてても宣へ

(一)無理な戀路に尚熱くなる源の癖なれば
(二)樣子を悟る
(三)面倒故弘徽殿には知らせず
(四)右大臣も氣付かぬに
(五)源が逃端を失ひて
(六)朧月夜の
(七)源が
(八)事情を知れる侍女
(九)右大臣
(一〇)弘徽殿
(一一)源が
(一二)右大臣が朧月夜の方に
(一三)嘸驚くならんと察しては居ながら
(一四)弘徽殿の弟
(一五)皇后宮亮
(一六)口早に輕卒なるを
(一七)左大臣の重々しきに比較して
(一八)作者の評、成程此場合簾中に入りて後言うて貰ひたいものぢや

つ強ひ聞え給ふ。（一）多かゝめりし事どもも、かやうなる折のまほならぬ事（二）數々に書きつくる、心なきわざとか、貫之が諫めたうるゝ（三）方にて、むつかしければ（四）とゞめつ。（五）皆この御事を譽めたる筋にのみ、倭のも唐のも作り續けたり。我御心地（六）にもいたう思し驕りて、源「文王の子武王の弟」（七）と、うち誦じ給へる、御名のりさへぞけにめでたき。成王（八）の何とか宣はむとすらむ。それはかりや心もとなからむ。兵部卿宮（九）も常に渡り（一〇）給ひつゝ、御遊などもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御あはひどもなり。

その頃（一一）かんの君まかで給へり。瘧病に久しう惱み給ひて、禁厭なども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたり給ひぬれば、誰も〳〵嬉しう思すに、例の（一二）珍らしき隙なるをと、聞えかはし給ひて、わりなき様にて夜な〳〵對面し給ふ。いと盛に（一三）、賑はしきけはひし給へる人の、すこしうち惱みて、痩々になり給へる程、いとをかしげなり。后の（一四）宮も一所におはする頃なれば、けはひいと

（一）人々の詩歌も多かりし様なれど
（二）眞面目ならぬ
（三）「たうるゝ」の義未詳
（四）書くはうるさければ
（五）源の身の上を
（六）源の心
（七）史記、周公が伯禽を戒めたる詞、「我文王子、武王弟、成王伯父、我於天下不賤矣」源自ら周公に比したる也
（八）源は成王に比すべき冷泉には伯父ならずして實は父なれば也
（九）紫の父
（一〇）源方へ

❷ 朧月夜の宿下り、源氏に逢ふ、露顯
（一一）朧月夜里に下り
（一二）好機逸す可らずとて源と朧と示し合せて
（一三）朧月夜の容姿
（一四）弘徽殿女御も朧と一所に



(一)宮中に出勤する
(二)顔が可愛なり
(三)本妻腹の二男
(四)今羽振よき右大臣の娘なれば也
(五)才氣あり
(六)催馬樂の曲名
(七)顔の
(八)高砂の句、「さゆりば」は「さゆり花」の誤ならん、「ゆり花のさゆり花の今朝咲いたる初花にあはましものをさゆり花の」
(九)盃を頭に擧る
(一〇)君の美貌は催馬樂に歌へる百合の初花にも劣らずと感心せり、「それもがと」は高砂の句、共もがなの意
(一一)時に過はずして我も衰へたり
(一二)さゞめきて
(一三)酒をろくに飲まぬを頭中將が見つけて

給ふ。中將の御子の、今年始めて殿上する(一)、八つ九つばかりにて、聲いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしみ(二)玩び給ふ。(三)四の君腹の次郎なりけり。(四)世の人の思へるよせ重くて、おぼえ殊にかしづけり。心ばへもかどかどしう(五)、容貌もをかしくて、御遊の少し亂れゆく程に、「高砂」(六)を出してうたふ、いとうつくし。大將の君、御衣ぬぎてかづけ給ふ。例よりはうちみだれ給へる御顔の匂(七)、似るものなく見ゆ。羅の直衣單衣を著給へるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見奉りて涙おとしつゝ居たり。

(八)「おはましものをさゆりばの」と歌ふとぢめに、中將御土器(九)まゐり給ふ。

中將 それもがと(一〇)けさひらけたる初花に劣らぬ君がにほひをぞ見る

ほゝゑみて取り給ふ。

源「時ならで(一一)今朝さく花は夏のあめにしをれにけらし匂ふほどなく

衰へにたる物を」(一二)とうちさうどきて(一三)、らうがはしく聞し召しなすを、咎め出でつ

壵 韻塞の遊、頭中將の負振舞
(一)詩集
(二)源へ
(三)面白きもの
(四)特に催したる譯にはあらねど
(五)入違ひに
(六)韻塞の遊始りたる也
(七)源が
(八)席上の人々の詞、源はどうして斯迄萬事完備せるならん
(九)斯く完全なるべき運命にて
(一〇)負けたる人よりする饗應
(一一)重箱に似たる食器
(一二)詩

べし。

夏の雨のどかに降りて、徒然なる頃、中將、さるべき(一)集ども、數多もたせて(二)參り給へり。殿にも、文殿あけさせ給ひて、まだ開かぬ御厨子どもの、珍しき古集の(三)故なからぬ、少し選り出でさせ給ひて、その道の人々、(四)わざとはあらねど數多召したり。殿上人も大學のも、いと多う集ひて、左右に(五)こまどりに方分たせ給へり。賭物どもなど、いと二なくて挑みあへり。(六)塞ぎもて行くまゝに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふ所々を、(七)時々うち宣ふさま、いとこよなき御才の程なり。(八)「いかで斯うしも足ひ給ひけむ。(九)なほ然るべきにて、萬の事人に勝れ給へるなりけり」と愛で聞ゆ。遂に右負けにけり。二日ばかりありて、中將(一〇)まけわざし給へり。事々しうはあらで、なまめきたる(一一)檜破子ども、賭物などさまざまにて、今日も例の人々多く召して(一二)文など作らせ給ふ。階のもとの薔薇、氣色ばかり咲きて、春秋の花盛よりもしめやかにをかしき程なるに、うち解け遊び

（一）しよげて
（二）頭中將
（三）右大臣の第四女、頭中將の本妻
（四）はんの時々
（五）頭中將が四の君をひどくあしらひたれば
（六）右大臣が頭中將を
（七）頭中將が昇任せざりしかども別に心にもかけず
（八）源さへあの通り引籠り居る位のつまらぬ世の中なれば、我が不遇は當然とあきらめて
（九）源へ
（一〇）源と頭中將と
（一一）源が
（一二）佛事
（一三）古人の詩の韻字をかくし置きて之をあてる遊
（一四）重るはらしして
（一五）源に對する批難を

世の人も心ある限は歎きけり。御子どもは、いづれともなく、人柄めやすく世に用ゐられて、心地よげに物し給ひしを、こよなうしづまりて（一）、三位中將（二）なども、世を思ひ沈める樣こよなし。かの四の君（三）をも、なほかれ〴〵（四）に打ち通ひつゝ、めざ（五）ましうもてなされたれば、心解（六）けたる御聟の中にも入れ給はず。思ひ知れとにや、（七）この度の司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。大將殿（八）斯うしづかにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、まして理と思しなして、常に參り通ひ（九）給ひつゝ、學問をも遊をも諸共にし給ふ。いにしへも物狂ほしきまで、挑み聞え（一〇）給ひしを思し出でて、互に今もはかなき事につけつゝ、さすがに挑み給へり。春秋（一一）の御讀經をばさるものにて、臨時にも、さま〴〵（一二）尊き事どもをせさせ給ひなどして、又徒に暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り韻ふたぎ（一三）などやうの、すさびわざどもをしなど心をやりて（一四）、宮仕をもをさ〴〵し給はず、御心に任せてうち遊びておはするを、世の中には、煩はしき事（一五）どもやう〴〵言ひ出づる人々ある

事多かり。皆(一)かねて思し捨ててし世なれど、宮人どももよりどころなげに(二)悲しと思へる氣色どもにつけてぞ、御心動く折々あれど、わが身を無きになしても春宮の御代を平らかにおはしまさば、とのみ思しつゝ、御行たゆみなく勤めさせ給ふ。人知れず危く(三)ゆゝしう思ひ聞え給ふ事しあれば、(四)我にその罪をかろめて免し給へと、佛を念じ聞え給ふに、よろづを慰め給ふ。大將も、然見奉り給ひて、理とおぼす。この(五)殿の人どもも、又同じさまに辛きことのみあれば、(六)世の中はしたなく思されて籠りおはす。左大臣も、(七)公私引きかへたる世の有樣に、物憂くおぼして、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院の、やむごとなく重き御後見と(八)おぼして、(九)長き世のかためと聞え置き給ひし、御遺言を思し召すに、捨て難きものに思ひ聞え給へるに、(一〇)かひなき事、と度々用ゐさせ給はねど、(一一)せめてかへさひ申し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいとゞ(一二)一族のみ、かへすがへす榮え給ふ事限なし。(一三)世のおもしと物し給へる大臣の、かく世を遁れ給へば、公も心ぼそうおぼされ、

(一) 藤壺は覺悟の前の事なれど
(二) 便なさそうに
(三) 冷泉が實は桐壺の子に非ざるを以て、神佛の加護も薄からんと危ぶむなり
(四) 代りに我を罪して冷泉を免し給へと
(五) 源方の人々も藤壺付と同じく
(六) 源が
(七) 公私につけて昔に變りたる
(八) 朱雀の
(九) 長く國政を執らせよと命ぜられし
(一〇) 辭職しては御遺言が無效になると
(一一) 強ひて繰返し辭退して
(一二) 弘徽殿方の一家
(一三) 重鎭たる左大臣が

(一)昔に變り果てたる我住居を離れ給ふ御志吞し
(二)藤壺方の人々の涙を誘する詞
(三)年と共に美しくなる
(四)一人天下で
(五)人情の分る筈なしと
(六)漫に氣の毒の感あり
[illegible]藤壺源氏左大臣等の失意
(七)任官式
(八)藤壺付の者は役に有付かず
(九)銘々の履歴から見ても
(一〇)たまはりの稱、年爵とて、上皇皇后等に仕ふる人々に地方官の名義を付して其に相當せる俸祿を給する制ありし也
(一一)昇位
(一二)出家しても猶中宮にて、隨つて俸祿も元の如くなるべきに
(一三)出家を口實にして待遇を變へたる

近き心地して、

藤壺　(一)ありし世のなごりだになき浦島に立ちよる浪のめづらしきかな

と宣ふもほの聞ゆれば、忍ぶれど、涙ほろ〳〵とこぼれ給ひぬ。世を思ひすましたる尼君達の見るらむもはしたなければ、言ずくなにて出で給ひぬ。「(二)さも類なく(三)ねびまさり給ふかな。心もとなき所なく世に榮え、時に逢ひ給ひし時は、さるひ(四)とつものにて、何につけてか(五)世を思し知らむと、推し量られ給ひしを、今はいといたう思ししづめて、はかなき事につけても、物哀なる氣色さへ添はせ給へるは、あいなう心苦しうもあるかな」など、老いしらへる人々、うち泣きつゝめで聞ゆ。(六)宮も思し出づる事多かり。(七)司召の頃、この宮の人は賜はるべき官も得ず、(九)大方の道理にても、宮の御たうば(一〇)りにても、(八)必ずあるべき加階などをだにせずなどして、歎く類いと多かり。かく(一一)ても、いつしかと御位を去り、(一二)御封などのとまるべきにもあらぬを、託けて變る(一三)

(一)そう思ひて見る故かも知れぬが
(二)宮司どもが鬱いで居る
(三)正月七日に白馬節會あり、廿一匹の白馬を内裏に引く、式終りて後中職宮へも進覽す
(四)昔と變らぬもので
(五)藤壺には避けて寄りつかず
(六)朱雀の祖父右大臣の邸
(七)當然の事なれど
(八)藤壺が
(九)他人の千人にも當るべき
(一〇)源が
(一一)源氏
(一二)出家なれば也
(一三)青黑色
(一四)鼠色
(一五)「音に聞く松が浦島今日ぞ見る宜も心ある蜑は住みけり」
(一六)長き海草を刈る蜑人―物思に沈める尼
(一七)見る我が心の萎る
(一八)佛壇が場所を取りたる

目まれにて、宮司どもの親しきばかり、うち頸垂れて、(一)見なしにやあらむ、(二)屈し痛げに思へり。(三)白馬ばかりぞ、(四)猶ひきかへぬものにて、女房などの見ける。所狹う參り集ひ給ひし上達部なども、(五)道を除ぎつゝひき過ぎて、むかひの(六)大殿に集ひ給ふを、(七)斯かるべきことなれど、(八)哀におぼさるゝに、(九)千人にもかへつべき御樣にて、(一〇)深う尋ね參り給へるを見るに、あいなく涙ぐまる。(一一)客人も、いと物哀なる氣色に、うち見まはし給ひて、頓に物も宣はず。(一二)樣かはれる御住居に、御簾の端、御几帳も(一三)青鈍にて、ひま〳〵よりほの見えたる(一四)薄鈍、山梔子の袖口など、なかなかなまめかしう、奧ゆかしう思ひやられ給ふ。解け渡る池のうす氷、岸の柳の氣色ばかりは時を忘れぬなど、さま〴〵ながめられ給ひて、源「(一五)うべも心ある」と、忍びやかにうち誦じ給へる、また無うなまめかし。

源 (一六)ながめかるあまのすみかと見るからに(一七)まづしほたるゝ松が浦島

ときこえ給へば、奧深うもあらず、(一八)皆佛に讓り聞え給へる御座所なれば、少し氣

の御位にもえおはせじ。(一)われさへ見奉り捨ててばなど、思し明すこと限なし。今は(二)かゝる方様の御調度どもをこそは、と思せば、年の内にと急がせ給ふ。命婦の君も御(三)供になりにければ、それも心深う(四)とぶらひ給ふ。委しう言ひつゞけむに事事しき樣なれば、(五)漏してけるなゝめり。さるは、斯樣の折こそ、をかしき歌など出で來るやうもあれ。(六)さう〴〵しや。(七)まゐり給ふも今はつゝましさ薄らぎて、御自ら聞え給ふ折もありけり。(八)思ひしめてし事は、更に御心に離れねど、(九)ましてあるまじき事なりかし。

年もかはりぬれば、内裏わたり花やかに、内宴踏歌など聞き給ふにも、(一〇)物のみあはれにて、御行しめやかにし給ひつゝ、後の世の事をのみ思すに、頼もしく、(一一)むつかしかりし事は離れて思さる。常の御念誦堂を(一二)ばさるものにて、特に建てられたる御堂の西の對の南にあたりて、少し離れたるに渡らせ給ひて、(一三)取りわきたる御行せさせ給ふ。(一四)大將まゐり給へり。(一五)改まるしるしもなく、宮の内のどかに人

(一)自分迄出家せば冷泉が無便ならん
(二)藤壺が尼の用ふる道具類を要するならん
(三)藤壺のお相伴に尼になりたれば
(四)源が懇に見舞ふ
(五)此處に書き漏らせる
(六)其歌を書き載せざるは物足らず
(七)源が藤壺を訪問しても、藤壺今は尼なれば憚も少く藤壺自身應答する事もあり
(八)源の戀は昔に變らねども
(九)尼になりたる今は
● 新年に源氏藤壺を訪ふ
(一〇)藤壺が昔を思ひ出て
(一一)うるさき年來の苦勞
(一二)其儘に置きて
(一三)特別の佛勤を藤壺が
(一四)源氏
(一五)新年らしくもなく

せ給ふにぞ、御心強さ(一)も堪へ難うて、御返も聞えさせやらせ給はねば、大將ぞ言(二)くはへ聞えさせ給ひける。誰も〳〵、(三)あるかぎり心をさまらぬ程なれば、思す事どももうち出で給はず。

源(四)「月のすむ雲井をかけてしたふともこの夜のやみになほや惑はむ

と思ひ給へらるゝこそ、かひなく。(五)思し立たせ給へる羨ましさは、限なう」とばかり聞え給ひて、人々近う侍へば、さま〴〵亂るゝ心の中をだに、え聞えあらはし給はず、いぶせし。

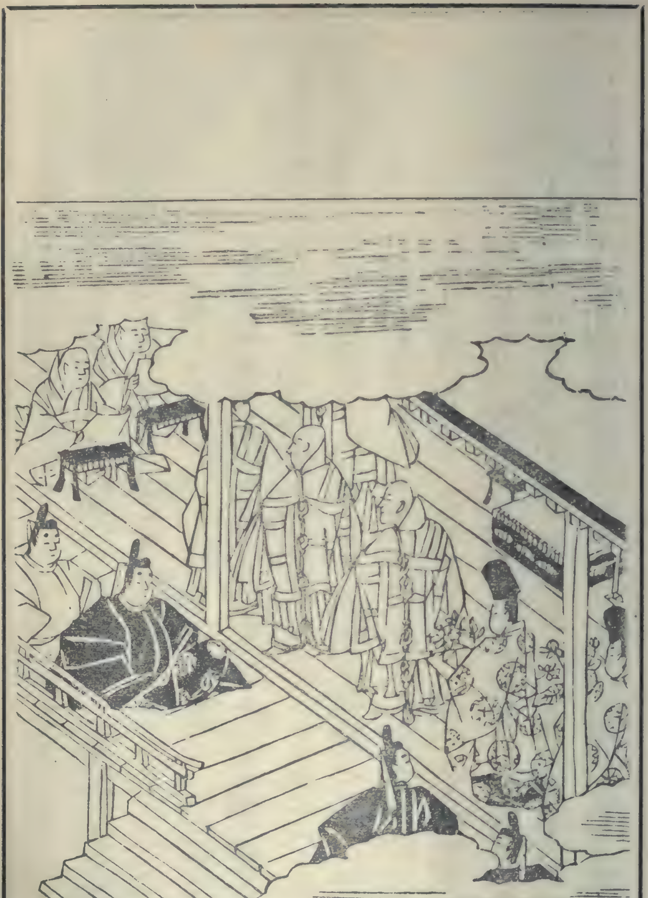
藤壺「大かたの憂きにつけては厭へども(六)いつかこの世を背きはつべき

かつ濁りつゝ」など、(八)かたへは御使の心しらひなるべし。哀のみ盡きせねば、胸(九)(七)苦しうてまかで給ひぬ。(一〇)殿にても、(一一)わが御方に一人うち臥し給ひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるゝにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。(一二)母宮をだに、おほやけ樣にと思しおきてしを、世のうきに堪へず、斯く(一三)なり給ひたれば、もと(一四)

(一)藤壺がきつく成つて居ても我慢出來ず
(二)返事の文言を助言し
(三)居る女の者殘らず
(四)君の御出家が誠に羨しく我も之に倣はんとすれども、子(冷泉)の事が迷の種になるを如何せん
(五)君が決心して出家せられたるは
(六)眞底から子の事も思ひ切つて世を離るゝことは覺束なし
(七)思ひますます側から又煩惱が起る
(八)此返事の一部分は、命婦などの氣をきかせて付加へたるならん
(九)源が
(一〇)二條院
(一一)源が紫の方へも行かず
(一二)源の心、藤壺を表向の冷泉の後楯となし置かんとの桐壺の計畫なりしに
(一三)藤壺出家したれば
(一四)中宮の位を辭するならん

（一）八講に列席したる儘
（二）源がなぜ其程悲しむかと
（三）藤壺の
（四）源が
（五）出家は年來の望なりしが
（六）急に出家したれば人々に騒がれて又覺悟がくづれそうな
（七）源が
（八）烈しく雪を吹きて
（九）奥床しき、黒方は調合したる香の名
（一〇）佛前に薫らする香の煙が式場より漏來る也
（一一）源が、式場がやうにや―と思ひし時の事

に悲しう思されて、皆とぶらひ聞え給ふを、大將は（一）立ちとまり給ひて、聞え出で給ふべき方もなく、昏れ惑ひて思さるれど、（二）などか然しもと人見奉るべければ、親王など出で給ひぬる後にぞ、（三）御前に參り給へる。やう〳〵人靜まりて、女房どもなど鼻うちかみつゝ、ところ〴〵に群れ居たり。月は隈なきに、雪の光りあひたる庭の有樣も、昔の事思ひやらるゝに、（四）いと堪へ難う思さるれど、いとよう思ししづめて、源「如何樣に思し立たせ給ひて、かう俄には」と聞え給ふ。藤壺「（五）今始めて思ひ給ふることにもあらぬを、（六）物騒しき樣なりつれば、心亂れぬべく」など、例の命婦して聞え給ふ。御簾の内のけはひ、そこら集ひ給ふ人の衣の音なひ、しめやかに振舞ひなして、うち身じろきつゝ、悲しげさの慰め難げに漏り聞ゆる氣色、理にいみじと（七）聞き給ふ。風（八）烈しう吹きふゞきて、御簾の中のにほひ、いと（九）物深き黒方にしみて、（一〇）名香の煙もほのかなり、大將の御にほひさへ薫りあひ、めでたう、極樂思ひやらるゝ夜の樣なり。春宮の御使も參れり。（一一）宣ひし樣思出で聞えさ



は、心殊にえらせ給へれば、薪こる(一)程よりうち初め、同じういふ言の葉も、いみじう尊し。御子たちも、樣々の捧物さゝげてめぐり(二)給ふに、(三)大將殿の御用意など、なほ似るものなし。常に(四)おなじ事のやうなれども、見奉るたびごとに、珍しからむをば、如何はせむ。(五)はての日は我が御事を結願にて、(六)世を背き給ふよし佛に申させ給ふに、皆人々驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心(七)も動きて、あさましと思す。親王(八)は、なかばの程に立ちて入り給ひぬ。(九)心強う思し立つさまを宣ひて、はつる(一〇)程に、山の座主召して、忌む(一一)事受け給ふべきよし宣はす。御伯父の横川の僧都近う參り給ひて、御髮(一二)おろし給ふ程に、宮の内ゆすりて、忌々しう泣き滿ちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、怪しうあはれなるわざを、まして、かねて御氣色にも出し給はざりつる事なれば、親王もいみじう泣き給ふ。參り給へる人々も、(一三)大方の事のさまも、哀に尊ければ、皆袖濡らしてぞ歸り給ひける。故院の御子達は、(一四)昔の御有樣を思し出づるに、いとゞ哀

(一)行道の歌「法華經を我得し事は薪樵り菜摘み水汲み仕へてぞ得し」
(二)行道の列に入りて廻り歩く
(三)源の態度勝れたり
(四)同じ事を言ひて源を褒める樣なれども
(五)最終日には
(六)終の願にして
(七)出家すべき趣を
(八)兵部卿親王の半頃座を立ちて簾中に入り藤壺を諫めたる也
(九)藤壺堅く決心せる趣を語りて
(一〇)式の
(一一)戒律
(一二)髮を短く剪る
(一三)藤壺出家の事のみならず、大體の事柄も
(一四)藤壺の全盛時代

(一)亡き桐壺帝
(二)行き―雪
(三)我が今迄生き殘るはつらけれど、今日再び桐壺在世の時に立歸る心地するは嬉し
(四)源の欲目
(五)一風異りたる當世風では無けれど
(六)藤壺に對する戀も捨てゝ
(七)佛前の勤を
◉藤壺法華八講を催し終の日に出家す
(八)八講は五日か七日の間を通例とす
(九)經を包む物、竹にて編みたるすだれ
(一〇)藤壺は何事にも嗜勝れたる人なれば
(一一)花を載する机
(一二)藤壺の父
(一三)桐壺帝
(一四)桐壺帝の爲にする日は恰も第五卷を講ずる日に當れる也、薪の行道とて特別の式あり
(一五)弘徽殿方への遠慮

源 わかれにしけふは來れども見し人(一)にゆき(二)あふ程をいつとたのまむ

いづこにも、今日は物悲しう思さるゝほどにて、御かへりあり。

藤壺(三) ながらふる程は憂けれどゆきめぐり今日はその世に逢ふ心地して

殊につくろひてもあらぬ御書き樣なれどあてに氣高きは、思ひなしなるべし(四)。筋かはり今めかしうはあらねど(五)、人には殊に書かせ給へり。今日はこの御事も思ひ消ちて(六)、哀なる雪の雫に濡れ〳〵行ひ(七)給ふ。

十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々(八)に供養せさせ給ふ御經よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙簀(九)のかざりも、世になき樣に整へさせ給へり。(一〇)然らぬことの淸らだに、尋常ならずおはしませば、まして理なり。佛の御かざり、花机(一一)のおほひなどまで、まことの極樂思ひやらる。初の日は先帝(一二)の御料、次の日は母后の御ため、又の日は院(一三)の御料、五卷(一四)の日なれば、上達部なども、世(一五)のつゝましさをえしも憚りたまはで、いとあまた參り給へり。今日の講師

ねば、御使(一)とゞめさせ給ひて、唐紙ども入れさせ給へる御厨子あけさせ給ひて、なべてならぬを選り出でつゝ、筆なども心ことに引きつくろひ給へる氣色艶なるを、御前なる人々、誰(二)ばかりならむとつきじろふ。

源　聞え(三)させてもかひなき物懲りにこそ、無下にくづほれにけれ。身(四)のみ物憂きほどにて、

(五)あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る

(六)心の通ふとならば、如何にながめの空も物忘れし侍らむ。

など、細(七)やかになりにけり。かやう(八)に驚かし聞ゆる類多かゝめれど、情(九)なからずうちかへりごち給ひて、御心には深う染まざるべし。

(一〇)中宮は院の御はて(一一)の事にうちつゞき、御八講(一二)のいそぎを、様々に心づかひせさせ給ひけり。十一月の朔日ごろ、御國忌(一三)なるに、雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。

(一)使に來たる者を暫時待たせて
(二)此手紙をよこしたるは誰ならん
(三)手紙をあげても御返事のなきに懲りて、此頃はがつかりして一向音信れざりしなり
(四)「數ならぬ身のみ物憂くおもほえて待たるゝ迄になりにける哉」
(五)此月の時雨を只秋故降る尋常の雨と思給ふか、是は君に逢はずして戀しさに我眼より降る涙雨也
(六)君と我と同じ心ならば悲しも忘らるべし、詠めに長雨をかけたり
(七)覺えず文言が細やかになれり
(八)朧月夜の如く源の來ぬを恨みて手紙をよこす女他にも多けれども
(九)源が愛想よき返事ばかりして
(一〇)藤壺
(一一)一週忌の法事
(一二)僧に法華經八卷を講ぜしむるを法華八講といふ、其用意
(一三)桐壺帝の祥月命日

も忘られて、まづ涙ぞおつる。

源「月かげは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな(一)

(二)霞も人のとか、昔も侍りける事にや」など聞え給ふ。(三)宮は、春宮を飽かず思ひ聞え給ひて、よろづの事を(四)聞えさせ給へど、(五)深うもおぼし入れたらぬを、いとうしろめたく思ひ聞え給ふ。(六)例はいと疾く大殿籠るを、(七)出で給ふまでは起きたらむ、と思すなるべし。(八)恨めしげに思したれど、さすがにえ慕ひ聞え給はぬを、(九)いとあはれと見奉り給ふ。

大将は、頭の辨の誦じつる事を思ふに、(一〇)御心の鬼に、世の中煩はしう覺え給ひて、かんの君にも音づれ聞え給はで、久しうなりけり。初時雨いつしかと氣色だつに、如何おぼしけむ、(一一)彼より、

朧　木枯の吹くにつけつゝ待ちし間におぼつかなさの頃も經にけり(一二)

と聞え給へり。折もあはれに、あながちに忍び書き給ひつらむ御心ばへも憎から

(一)月は昔の儘の月なるに、昔と變りて我を隔てて逢はぬ君の心がつらし
(二)「山櫻見に行く道を隔つれば霞も人の心なりけり」
(三)藤壺
(四)冷泉に言聞かすれど
(五)冷泉は氣にも止めぬを、藤壺が氣にする
(六)冷泉は早寢なるを
(七)今夜は藤壺退出の時まで起き居むと
(八)藤壺の歸るを冷泉が
(九)藤壺が
❶源氏、朧月夜及び藤壺と文の贈答
(一〇)空怖ろしくて
(一一)朧月夜より源へ
(一二)源の便なくて久しくなれり

(一)整ひて居らず
(二)弘徽殿
(三)朱雀の女御
(四)源の退出により先駆が人掃する也
(五)史記鄒陽傳に「白虹貫日太子畏之」燕太子丹荊軻をして秦王を刺さしめんと謀りし時白虹日を貫けるを見て太子事の成らざるを怖れたる故事、源が朱雀に對して異心ある様にあてこすりて言へる也
(六)氣障なりと
(七)頭辨の如き人々
(八)角目だちて源を讒謗する事もある故
(九)源は平氣を装ひ居る
(一〇)藤壺に
(一一)桐壺在世中は
(一二)禁中なれども
(一三)同じ禁中に在りながら、朱雀の御方は遙に隔れる雲上の如く思はるるは、側に如何なる邪魔の障をなすならん
(一四)源に

だいとかたなり(一)になむ」と、その御有様など奏し給ひて、まかで給ふに、大宮(二)の御兄の、藤大納言の子の頭の辨といふが、世にあひ花やかなる若人にて、思ふ事なきなるべし、妹の麗景殿(三)の御方に行くに、大將(四)の御先を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹(五)日を貫けり。太子懼ぢたり」と、いとゆるらかにうち誦じたるを、大將いとまばゆし(六)と聞き給へど、咎むべきことかは。后の御氣色は、いと怖ろしう煩はしげにのみ聞ゆるを、斯う親しき人々(七)も、氣色だち(八)言ふべかめる事どももあるに、煩はしう思されけれど、つれなう(九)のみもてなし給へり。「御前に侍ひて、今まで更かし侍りにける」と聞え(一〇)給ふ。月の花やかなるに、昔(一一)かやうなる折は、御遊せさせ給ひて、今めかしうもてなさせ給ひしなど思し出づるに、(一二)同じ御垣の内ながら、變れること多く悲し。

藤壺　こゝのへに(一三)霧やへだつる雲の上の月をはるかにおもひやるかな

と命婦して聞え(一四)傳へ給ふ。御けはひもほのかなれど、懐かしう聞ゆるに、つらさ

(一)朱雀が源に
(二)源氏
(三)冷泉の世話を賴む由桐壺の御遺言ありしかば
(四)我が外には冷泉の御後見仕る人もなき樣子故
(五)冷泉の緣につれて藤壺をも構はずには置けず
(六)冷泉を朱雀の養子にせよと桐壺遺言なりし故
(七)大事には思へど
(八)特別の待遇とては何も出來ぬ
(九)冷泉が
(一〇)冷泉の賢なるは朱雀自身の面目なり

間なりかしとぞ思しなして、咎めさせ給はざりける。よろづの御物語、文の道の覺束なく思し召さるゝ事どもなど、問はせ給ひて、(一)又すき〳〵しき歌がたりなども、互に聞えかはさせ給ふ御序に、かの齋宮の下り給ひし日の事、容貌のをかしうおはせしなど、語らせ給ふに、(二)我もうち解けて、野宮のあはれなりし曙も、皆聞え出で給ひてけり。二十日の月やう〳〵さし出でて、をかしき程なるに、朱「遊などもせまほしき程かな」と宣はす。源「中宮の今宵まかんで給ふなる、訪らひにものし侍らむ。(三)院の宣はせおくこと侍りしかば、(四)又後見仕う奉る人も侍らざんめるに、(五)春宮の御ゆかり、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。帝「春宮をば(六)今の皇子になしてなど、宣はせ置きしかば、取り分きて(七)心ざしものすれど、(八)殊にさし分きたる樣にも、何事をかはとてこそ。(九)年のほどよりも、御手などのわざとかしこうこそ物し給ひけれ。何事にもはか〴〵しからぬ(一〇)自らの面起しになむ」と宣はすれば、源「大方し給ふわざなど、いと敏く大人びたるさまに物し給へど、ま

り。人々見奉るに、(一)御顏の色もうつろひて、(二)なほ斯かる心の絶え給はぬこそいと疎ましけれ、あたら、思ひやり深うものし給ふ人の、ゆくりなく、かやうなる事をり〳〵交ぜ給ふを、人もあやしと見るらむかしと、心づきなう思されて、瓶にさゝせて、廂の柱のもとに押遣らせ給ひつ。(三)大方の事ども、宮の御事に觸れたる事などは、うち頼めるさまに、すくよかなる御返ばかり聞えたまへるを、(四)さも心かしこく、盡せずもと恨めしう見給へど、何事も後見聞え(五)ならひ給ひにたれば、(六)人あやしと見咎めもこそすれと思して、(七)まかンで給ふべき日參り給へり。まづ内裏(八)の御方に參り給へれば、のどやかにおはします程にて、昔今の御物語聞え給ふ。御容貌も、院にいとよう似奉り給ひて、今少しなまめかしき氣添ひて、なつかしう和やかにぞおはします。かたみにあはれと見奉り給ふ。(九)かんの君の御事も、なほ絶えぬさまに聞しめし、氣色御覽ずる折もあれど、何かは、(一〇)今始めたる事ならばこそあらめ、あり初めにける事なれば、さも心交さむに、似げなかるまじき人の

(一)藤壺の顏色かはりて
(二)藤壺の心
(三)源の心、通常の用向冷泉に關する事等に就ては源を力にして生眞面目なる返事をよこすのに
(四)戀文となると用心深く何時も逃迴る事よと
(五)源が藤壺を
(六)始り無沙汰しては
(七)藤壺が東宮より
(八)朱雀の御前へ
(九)朧月夜と源との交情の今も絶えざるを朱雀が聞居り、其樣子を見て取る事もあれど
(一〇)今始りたる事でもなし、前からの事なれば



❶ 源氏紅葉を藤壺に贈る、藤壺宿下り
(一)紫上
(二)源の感じ
(三)源の勢無くなりたる世の中是より如何なりゆくならんと
(四)藤壺を思ふ源の心
(五)前の紫の返歌
(六)源が心ありて特別に濃く染めたる勢を無にし難く
(七)藤壺への無沙汰も餘り人目につく程なれば、何氣なく藤壺へ贈る
(八)藤壺が東宮の見舞に
(九)藤壺と東宮との間柄の樣子
(一〇)佛前の勤行
(一一)豫定を果さずして歸るも不本意なるべしとて
(一二)「見る人も無くて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」
(一三)よき機會に
(一四)藤壺の
(一五)小く結付たる手紙

になく思ひ聞ゆべかゝめり。

女君(一)は、日頃の程に、ねびまさり(二)給へる心地して、いといたうしづまり(三)給ひて、世の中いかゞあらむと思へる氣色の、心苦しう哀に覺え給へば、あいなき(四)心の、樣々亂るゝや著からむ。「色かはる」(五)とありしもらうたう覺えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。山土産にもたせ給へりし紅葉、御前のに御覽じくらぶれば、殊に染めましける露(六)の心も見過しがたう、覺束なさも(七)人わろきまで覺え給へば、たゞ大方にて宮に參らせ給ふ。命婦の許に、

源(八)入らせ給ひにけるを、珍らしき事と承るに、宮(九)の間の事、覺束なくなり侍りにければ、しづ心なく思ひ給へながら、行(一〇)も勤めむと思ひ立ち侍りし日數を、心ならず(一一)やとてなむ、日頃になり侍りにける。紅葉は、一人見侍る(一二)に錦くらう思ひ給ふればなむ。折(一三)よくて御覽ぜさせ給へ。

などあり。實にいみじき枝どもなれば、御目(一四)とまるに、例の聊(一五)なるものありけ

(一)朝顏が手に入るべき時分は棄て置きて

(二)朝顏齋院

(三)爲ざるに忍びずして返事する樣なり

(四)隔なき

(五)天台六十卷、玄義、文句、止觀、尺籤、疏記、弘決、各十卷

(六)源が

(七)源の滯留を我々の勤行の功德なりとして

(八)紫上

(九)布施物

(一〇)「しはぶかひ人」の誤にて、咳嗽する人、即ち老人の意なるべしといふ

(一一)喪中なれば黑き裝飾を施したる也

(一二)よくも見えぬ

樣の物と、神うらめしう思さるゝ御癖の見苦しきぞかし。わりなう思さば然もあ(一)りぬべかりし年頃は、長閑に過し給ひて、今は悔しう思さるべかゝめるも、あやしき御心なりや。院(二)も、斯くなべてならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、たまさかなる御返などは、(三)えしもてはなれ聞え給ふまじかゝめり。少しあいなき(四)事なりかし。六十卷(五)といふ文(六)讀みたまひ、おぼつかなき所々、解かせなどしておはしますを、山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、佛の御面目ありと、あやしの法師ばらまで喜びあへり(七)。しめやかにて、世中を思し續くるに、歸らむ事も物憂かりぬべけれど、人(八)ひとりの御事思しやるが羈絆なれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦經嚴しうせさせ給ふ。あるべきかぎり上下の僧ども、その邊の山賤まで物賜び(九)、尊き事のかぎりを盡して出で給ふ。見奉り送るとて、此面彼面に、あやしきしばふるひ人(一〇)ども集り居て、涙をおとしつゝ見奉る。(一一)黑き御車の内にて、藤の御袂にやつれ給へれば、殊に見え給はねど、(一二)ほのかなる御有樣を、世

など恨み給ひて、御前には、

源　かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襷かな（一）

昔を今にと思ひ給ふるもかひなく、（二）とり返されむもののやうに。

と馴々しげに。（三）唐の淺緣の紙に、榊に木綿つけなど、（四）神々しうなして參らせ給ふ。御かへり中將、

中將　紛るゝこともなくて、（五）來しかたの事を思ひ給へ出づる徒然のまゝには、思ひやり聞えさする事多く侍れど、かひなくのみなむ。

と少し心とゞめて多かり。（六）御前のは、（七）木綿のかたはしに、

齋院「そのかみやいかゞはありしゆふだすき心にかけて忍ぶらむゆゑ（八）

近き世に」とぞある。（九）御手細やかにはあらねど、（一〇）らうらうしう、草などをかしう（一一）なりにけり。まして、朝顏もねびまさり給へらむかしと、（一二）思ひ遣るもたゞならず、おそろしや。（一三）あはれこの頃ぞかしと、野宮の哀なりしことと思し出でて、（一四）怪しう（一五）

（一）神に仕ふる君に對して憚るべきなれども、我は君と昔慣れ交したる昔を忘るゝ能はず
（二）「いにしへのしづのをだまき繰返し昔を今になすよしもがな」
（三）昔を今になせばなさるゝ物の樣に、くだらぬ物思に沈む
（四）楮にて造れる白布
（五）齋院は物靜なる處故
（六）通一遍の挨拶に非ずして長文なり
（七）朝顏の返事は
（八）昔の秋を思出すとは何を言はるゝぞ、我と君と昔何の關係ありしや
（九）此世にて關係ありしとは思ひ寄らず
（一〇）纖麗
（一一）草書
（一二）容貌も年と共に美しくなりしならん、前に朝顏の事あるによりて朝顏といへり
（一三）神に對して
（一四）六條御息所を野宮に訪ひし事
（一五）要に同樣の物で六條も朝顏も神の憚の爲に情を遂げぬ事よと

ならぬ日數も、覺束なくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。

源 (一)行き離れぬべしやと、試み侍る道なれど、徒然も慰めがたう、心ぼそさ增りてなむ。(二)聞きさしたる事ありて、(三)やすらひ侍るほどをいかに。

など、(四)陸奥紙に、うちとけ書き給へるさへぞめでたき。

源 あさぢふの露のやどりに君をおきて(五)四方のあらしぞしづ心なき

など細やかなるに、(六)女君もうち泣き給ひぬ、御かへし白き色紙に、

紫 (七)風吹けばまづぞみだるゝ色かはる淺茅がつゆにかゝるさゝがに

とのみあり。源「御手はいとをかしうのみなり增るものかな」と獨言ちて、美しとほほゑみ給ふ。常に書きかはし給へば、我が御手にいとよく似て、今少しなまめかしう、女しき所書き添へ給へり。何事につけても、怪しうはあらず生ふし立てたりかしと思す。(八)吹きかふ風も近き程にて、(九)齋院にも聞え給ひけり。(一〇)中將の君に、

源 (一一)かく旅の空になむ物思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらじかし。

(一)出家が出來るかと此所へ來ては見たれど
(二)宗教上の事につきて聽きかけたる
(三)歸りを見合せ居るが其間の御樣子は如何に
(四)あつき白紙
(五)四方の嵐は源に對する人々の反感をいふなるべし
(六)紫上
(七)色變る淺茅の如く羽振惡く成り行く君を力にする我は、そよとの風にも心を亂す
(八)直ぐ近處の事故
(九)朝顏にも音信したり
(一〇)朝顏の侍女
(一一)朝顏故に斯る所まで迷ひ出でたるを、御察しは下さるまじ

ひ知る樣にも見せ奉らむと、念じつゝ(一)過し給ふに、人わろくつれ〴〵に思さるれば、秋の野も見給ひがてら、(二)雲林院にまうで給へり。(三)故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊(四)にて、法文など讀み、行ひせむと思して、二三日おはするに、哀なる事多かり。紅葉のやう〳〵色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見給ひつゝ、(五)故鄕も忘れぬべくおぼさる。法師ばらの才あるかぎり召し出でて、論(六)議せさせて聞し召させ給ふ。所がらに、いとゞ世の中の常なさを思しあかしても、なほ(七)「うき人しもぞ」と思し出でらるゝおしあけ方の月影に、法師ばらの閼伽(八)奉るとて、(九)から〳〵と鳴しつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散したるもはかなけれど、(一〇)この方の營は、この世も徒然ならず、後の世はた賴もしげなり。(一一)さも味氣なき身を(一二)持て惱むかななど、思し續け給ふ。律師のいと尊き聲にて、(一三)「念佛衆生攝取不捨」とうち述べて行ひ給へるがいと羨ましければ、(一四)なぞやと思しなるに、まづ(一五)姫君の心にかゝりて、思ひ出でられ給ふぞ、いとわろき御心なるや。(一六)例

(一)行きたさを堪へて
(二)紫野
(三)桐壺更衣
(四)雲林院の寺中
(五)我が家
(六)宗教上の議論
(七)「天の戸をおしあけ方の月見れば憂き人しもぞ戀しかりける」
(八)佛に奉る水
(九)花皿を
(一〇)源の心、佛道の營
(一一)我は彼等と違ひて
(一二)もて餘す
(一三)觀無量壽經の句、佛を念ずる者をば漏さず救ひ取るの義
(一四)なぜ我は出家が出來ぬぞ
(一五)紫上
(一六)珍らしく紫と隔居る日數重りて氣懸なれば

覽ぜで久しからむほどに、容貌の異樣にてうたてげに變りて侍らば、いかゞ思さるべき」と聞え給へば、御顏をうちまもり給ひて、春宮「式部(一)が樣にや。いかでか然はなり給はむ」と、笑みて宣ふ。いふかひなく哀にて、藤壺「それは、老いて侍れば醜きぞ。然はあらで、髮はそれよりも(二)短くて、黒き衣などを著て、夜居の僧(三)のやうになり侍らむとすれば、見奉らむ事も、(四)いとゞ久しかるべきぞ」とて泣き給へば、まめだちて、(五)春宮「久しうおはせねば戀しきものを」とて、(六)涙のおつれば、耻かしと思してさすがに背き(七)給へる、御髮はゆら〳〵と淸らにて、まみの懷しげに匂ひ給へる樣、おとなび給ふまゝに、たゞかの御顏を脱ぎすべ給へり。御齒の少し朽ちて、口の内黒みて、笑み給へる(八)薫美くしきは、(九)女にて見奉らまほしう淸らなり。(一〇)いと斯うしも覺え給へるこそ心憂けれと、(一一)玉の瑕に思さるゝも、(一二)世の煩はしさの、空恐ろしう覺え給ふなりけり。

大將の君は、(一三)宮をいと戀しう思ひ聞え給へど、(一四)あさましき御心の程を、時々は思

(一)老侍女の名なるべし
(二)式部よりも
(三)帝后などの御寢室の次の間にて終夜加持する僧
(四)是より彌々間があるべし
(五)本氣になりて
(六)冷泉が
(七)側を向きたる
(八)丸で源の顏を取つて附けた樣なり
(九)冷泉を女にして
(一〇)斯く迄に源に似て居るのがつらいと
(一一)似て居るのが玉の瑕の樣に思はれるのも
(一二)人の口のうるさゝが
㊈ 源氏雲林院に詣づ
(一三)藤壺
(一四)藤壺の心の餘りの氣強さを、自分で分る樣に思ひ知らせてやらんと

(一)藤壺の心、桐壺の寵隆なりし時を思へば世相の轉變歴然たり
(二)漢高祖の妾、本妻の呂后に妬まれ、手足を斷たれ眼を拔かれ耳をふすべられ口きけぬ藥を呑まされ厠中に置かる
(三)却て[illegible]き難く
(四)出家と考付くと
(五)常はつまらぬ事にも氣を付け世話をやくに
(六)普通の御訪問は相變らずなれど
(七)此間の事以來源は非常によく〳〵して居ると
(八)冷泉
(九)藤壺を見て
(一〇)藤壺が
(一一)出家も出來にくそうなれど
(一二)内裏に出入するにも極り惡く
(一三)冷泉
(一四)久しく御目にかゝらぬ中に我の姿が嫌な風に變りたらば

と、やう〳〵おぼしなる。(一)院の思し宣はせし樣の、斜ならざりしを思し出づるにも、よろづの事ありしにもあらず變り行く世にこそあめれ、(二)戚夫人の見けむ目の樣にこそあらずとも、必ず人笑へなる事はありぬべき身にこそあめれなど、(三)疎ましう過し難う思さるれば、(四)背きなむことを思し取るに、春宮見奉らで面變せむこと哀に思さるれば、忍びやかにて參り給へり。大將の君は、(五)さらぬ事だに思し寄らぬ事なく、仕う奉り給ふを、御心地惱ましきに託けて、御送にも參り給はず。(六)おほかたの御訪は同じやうなれど、(七)むげに思し屈しにけると、心知ろどちはいとほしがり聞ゆ。宮は(八)いみじう美しうおとなび給ひて、(九)珍しう嬉しと思して、睦れきこえ給ふを、(一〇)悲しと見奉り給ふにも、(一一)思し立つすぢはいと難けなれど、内裏わたりを見給ふにつけても、世の有樣あはれにはかなく、移り變ることのみ多かり。大后の御心もいと煩はしくて、(一二)出で入り給ふにもはしたなく、事に觸れて苦しければ、(一三)宮の御爲にも危く、忌々しうよろづにつけて思しみだれて、(一四)「御

(一)取附處なき
(二)藤壺の思はくも
(八)源氏藤壺の煩悶、藤壺冷泉を訪ふ
(三)源の心、何を面目に再び藤壺に逢はれんや
(四)藤壺に氣の毒と感ぜしめんとて
(五)源が
(六)藤壺
(七)人の手前恥かしく
(八)「世に經れば憂さこそ增れ三吉野の岩のかけ道踏みならしてん」
(九)紫上
(一〇)我を力にし居るを
(一一)藤壺も上氣の後の容態よからず
(一二)源が態とらしく
(一三)藤壺に
(一四)藤壺
(一五)源と氣まづくなるは東宮の爲氣の毒なり
(一六)源が
(一七)短兵急に出家でもするかと
(一八)藤壺の心
(一九)只さへうるさき世
(二〇)弘徽殿が怪しからぬ事に言ひ居る我が中宮の位を辭せんと

はかなく言ひなさせ給へる樣の、(一)いふよしなき心地すれど、(二)人の思さむ所も我が御爲も苦しければ、我にもあらで出で給ひぬ。(三)いづこを面にかは又も見え奉らむ。(四)いとほしと思し知るばかりと思して、御文も聞え給はず。(五)うち絶えて內裏春宮にも參り給はず、籠りおはして、起き臥し、いみじかりける人の(六)御心かなと、(七)人わろく戀しう悲しきに、心魂も失せにけるにや、惱ましうさへおぼさる。物心細く、何ぞや、(八)世に經れば憂さこそまされと思し立つには、(九)この女君のいとらうたげにて、哀に(一〇)うち賴み聞え給へるを、振り捨てむ事いと難し。宮も、(一一)その名殘例にもおはしまさず。斯う(一二)ことさらめきて籠り居、(一三)音づれ給はぬを、命婦などはいとほしがり聞ゆ。(一四)宮も、春宮の御爲を思すには、(一五)御心置き給はむこといとほしく、(一六)世を味氣なきものに思ひなり給はば、(一七)直道に思し立つこともやと、さすがに苦しう思さるべし。(一八)かゝる事絶えずば、(一九)いとゞしき世に、うき名さへ漏出でなむ、(二〇)大后のあるまじきことに宣ふなる位をも去りなむ

ふしもまじるらむ。(一)あらざりし事にはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、(二)懐かしきものから、いとよう宣ひ遁れて、今宵も明けゆく。(三)せめて隨ひ聞えざらむもかたじけなく、(四)心恥かしき御けはひなれば、源「たゞ斯ばかりにても、時々いみじき(五)憂をだに晴け侍りぬべくば、何のおほけなき心も侍らじ」など、(六)たゆめ聞え給ふべし。(七)斜なる事だに、かやうなる中らひは哀なることも添ふなるを、まして(八)類なげなり。明けはつれば、(九)二人していみじき事どもを聞え、宮は、(一〇)半は亡きやうなる御氣色の心苦しければ、源「世中にありと聞し召されむもいと恥かしければ、(一一)やがて亡せ侍りなむも、又この世ならぬ罪となり侍りぬべきこと」など聞え給ふもむくつけきまでおほし(一二)入れり。

源「逢ふことのかたきを今日にかぎらずば今幾世をか歎きつゝ經む

(一三)御絆にもこそ」と聞え給へば、さすがにうち歎き給ひて、

藤壺(一四)ながき世のうらみを人にのこしてもかつは心をあだとしらなむ

(一)源に肌を許す事は
(二)源に心はありながら
(三)無理に手籠にするのも勿體なく
(四)源が心に恥かしき
(五)此の如く時々物語して憂さ晴しが出來るならば、其に滿足して其以上の欲望は持つまじ
(六)油斷をさせる
(七)一寸した事に付ても斷る心深き人同士の間では
(八)況や斯迄深き情緒の纏綿したる事故哀類なし
(九)王命婦と辨とて源に退去を迫り
(一〇)半死の狀態
(一一)死にたけれど、死なば又後世迄の罪になる恐あればそれもならず
(一二)藤壺が
(一三)何時迄も逢ひ難くば、我は生替り死替り常に嘆き暮すべし
(一四)我に盡きぬ恨を殘すも、畢竟君の心柄と知り給へ



を、あ(一)さましきまで覺え給へるかな、と見給ふまゝに、少し物思のはるけ(二)所ある心地し給ふ。氣高う恥かしげなる様なども、更に他人(三)と思ひわき難きを、なほ限なく、昔より思ひしめ(四)聞えてし心の思ひなしにや、様(五)ことにいみじうねびまさり給ひにけるかなと、類なく覺え給ふに、(六)御心惑ひして、やをら、御帳の中にかゝづらひ入りて、御衣の褄を引きならし給ふ。けはひしるく、さと匂ひたるに、(七)あさましうむくつけう思されて、やがてひれふし給へり。(八)見だに向き給へかしと、心やましうつらくて、(九)引寄せ給へるに、御衣をすべ(一〇)し置きて、(一一)膝行退き給ふに、(一二)心にもあらず、御髪の取り添へられたりければ、いと心憂く、(一三)宿世の程思し知られて、いみじとおぼしたり。男も、(一四)こゝら世をもてしづめ給ふ御心皆亂れて、うつし様にもあらず、よろづの事を泣く〳〵恨み聞え給へど、(一五)まことに心づきなしとおぼして、御答も聞え給はず。たゞ、藤壺「心地のいと惱しきを、斯からぬ折もあらば聞えてむ」と宣へど、盡せぬ御心の程を(一六)言ひ續け給ふ。流石に(一七)いみじと聞き給

(一)驚く程宮に似て居る事故
(二)晴らし所、藤壺の戀しき時は宮を見さへすればよしと思ひて
(三)宮と別なる人とは思はれぬに
(四)思ひ込んだ故でもあらうか
(五)藤壺の方が
(六)夢中になりて
(七)藤壺が厭はしく思ひて
(八)此方を向いてでも居ればよいにと
(九)源が
(一〇)脫ぎおきて
(一一)藤壺が
(一二)源の捕たる衣の裾と共に思寄らず藤壺の髮が捕へられてありしかば
(一三)逃れぬ惡緣と觀念して
(一四)平生嗜める心亂れて正氣でなく
(一五)藤壺が眞底けしからぬ所行と思ひて
(一六)源が
(一七)藤壺の心動く事もあるべし

給ひつらむとは思しもかけず、人々も又(一)御心惑はさじとて、斯くなむとも申さぬなるべし。(二)晝の御座に膝行出でておはします。(三)よろしう思さるゝなゝめりとて、宮もまかでゝ給ひなどして、御前人ずくなになりぬ。(四)例も氣近くならさせ給ふ人少ければ、此處彼處の物の後などにぞ侍ふ。命婦の君などは、「如何にたばかりて(五)いだし奉らむ。(六)今宵さへ御氣あがらせ給はむ、いとほしう」などうちさゝめきあつかふ。君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やをら押し開けて、御屏風の間に傳ひ入り給ひぬ。(七)珍らしく嬉しきにも、涙はおちて(八)見奉り給ふ。藤壺「なほいと苦しうこそあれ。(九)世や盡きぬらむ」とて、外の方を見出し給へる傍目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御菓物をだにとて參りすゑたり。箱の蓋などにも、懷しき樣にてあれど、(一〇)見入れ給はず。世の中をいたう思し惱める氣色にて、のどかに眺め入り給へる、いみじうらうたげなり。簪、頭つき、御髪のかゝりたるさま、限なきにほはしさなど、たゞかの(一一)對の姫君に違ふ所なし。年頃少し思ひ忘れ給へりつる

(一)藤壺に氣をもませじとてわざと知らせず
(二)藤壺が
(三)氣分が善きならんとて兵部卿宮も歸り
(四)藤壺はいつも人を側に多く侍らせねば
(五)源を歸さん
(六)源が居れば藤壺が今夜も上氣すべし
(七)源が
(八)藤壺を屏風の隙より覗く
(九)壽命が盡きしならん
(一〇)藤壺が手を着けず
(一一)紫上

(一)源に
(二)精々注意して
(三)源の注意深き忍入を侍女等も知らざりし故
(四)藤壺の感
(五)眞似もならぬ樣な甘いことを
(六)手強くはね付けて
(七)前後の分別もなく正氣も無くなりたれば
(八)藤壺の方に留りたる也
(九)出入りする
(一〇)氣が氣でなく
(一一)壁にて四方を圍みたる、室物置寢室などに充つ
(一二)人に悟られぬ樣源の衣類を隱し置く侍女等も甚だ氣遣なり
(一三)のぼせて
(一四)中宮大夫
(一五)源の邊に隱れ居る事を藤壺は知らず

で來なむと思すに、いと怖ろしければ、御祈をさへせさせ給ひて、このこと(一)思ひ止ませ奉らむと、(二)思し至らぬことなく遁れ給ふを、如何なる折にかありけむ、あさましうて近づき參り給へり。(三)心深くたばかり給ひけむことを、知る人なかりければ、(四)夢のやうにぞありける。(五)まねぶべきやうもなく聞え續け給へど、宮いと(六)こよなくもて離れ聞え給ひて、はて〳〵は御胸を痛う惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨などぞ、あさましう見奉り扱ふ。男は、憂しつらしと思ひ聞え給ふこと限なきに、(七)來しかた行くさき、かきくらす心地して、現心も失せにければ、明けはてにけれど、(八)出で給はずなりぬ。御惱に驚きて、人々近う參りて(九)繁うまがへば、(一〇)我にもあらで、(一一)塗籠に押し入れられておはす。(一二)御衣ども隱し持たる人の心地なども、いとむつかし。宮は、物をいとわびしと思しけるに、御氣あがりて、なほ惱ましうせさせ給ふ。兵部卿宮、(一四)宮の大夫など參りて、(一三)僧召せなどさわぐを、大將いとわびしう聞きおはす。辛うじて暮れゆく程にぞ、おこたり給へる。(一五)かく籠り居

源　歎きつゝ我世はかくて過せとやむねのおくべき時ぞともなく

しづ心(一)なくて出で給ひぬ。夜深き曉月夜のえもいはず霧り渡れるに、いと痛うやつれて(二)ふるまひなし給へるしも、似る物なき御有樣にて、承香殿(三)の御兄の頭(四)中將、藤壺より出でて、月の少しく隈ある立蔀のもとに立てりけるを、知らで過ぎ給ひけむこそいとほしけれ。もどき(五)聞ゆるやうもありなむかし。

かやうの事につけても、もてはなれ(六)つれなき人の御心を、且はめでたしと思ひ聞え給ふものから、わが心(七)のひく方にては、なほつらう心憂しと覺え給ふ折多かり。內裏(八)に參り給はむことは、初々しく(九)所狹く思しなりて、春宮を見奉り給はぬを、覺束なく覺え給ふ。又たのもしき(一〇)人も物し給はねば、たゞこの大將の君をぞ、よろづに賴み聞え給へるに、なほこの(一一)憎き御心の止まぬに、ともすれば御胸をつぶし給ひつゝ、聊も氣色(一二)を御覽じ知らずなりにしを思ふだにいと怖ろしきに、今更に又(一三)さる事の聞えありて、我身はさるものにて、春宮の御爲に必ず善からぬ事出

(一)胸の晴るゝ時なく君を戀ひて歎きつゝ一生を送るが我が運命か
(二)窶して人に知れぬ樣にするのが却て水際立つてよく分る其風體で
(三)朱雀の女御
(四)葵上の同胞とは別人
(五)頭中將が批難するに違なし
㊆ 源氏竊に藤壺に逢ふ
(六)取てもつけぬ程つれなき藤壺の愼深さを
(七)我が勝手につけては
(八)藤壺が
(九)落着かず窮屈に
(一〇)藤壺の力になる人も無ければ
(一一)源が今でも戀をやめぬのにと胸をついて
(一二)桐壺が源との中を知らずに仕舞ひしを思ひてさへ空怖しきに
(一三)密通の噂があらば

壇の御修法のはじめにて、愼み(一)おはします隙を伺ひて、例の夢のやうに聞え給ふ。(二)かの昔おぼえたる(三)細殿の局に、中納言の君(四)まぎらはして入れ(五)奉りたり。人目も繁きころなれば、常よりも端近なるを、(六)そら恐ろしう覺ゆ。朝夕に見奉る人だに、(七)飽かぬ御樣なれば、まして珍らしき程にのみある御對面の、(八)いかでかは疎ならむ。女の御樣も、實にぞめでたき御盛なる。(九)おもりかなる方はいかゞあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。程なく明けゆくにやと覺ゆるに、唯こゝにしも(一〇)、「宿直申し侍ふ」とこわづくるなり。又この邊に(一一)かくろへたる近衛司ぞあるべき。腹穢きかたへの敎へおこするぞかしと、大將は聞き給ふ。をかしきものから煩はし。此處彼處尋ねありきて、(一二)「寅ひとつ」と申すなり。女君、

(一三)心からかたぐ〜袖をぬらすかなあくとをしふる聲につけても

と宣ふ樣、(一四)はかなだちていとをかし。

(一)朱雀が
(二)源に逢ふ
(三)初めて逢ひし時のに似たる
(四)朧月夜の侍女
(五)源を
(六)見つかりはせぬかと
(七)源の美貌は
(八)女が疎に思ふ筈なし
(九)貫目には乏しいが
(一〇)直ぐ側で近衛の武官が宿直の名乗をする
(一一)源の外にも此邊に隠れ居る近衛武官のありと見ゆるを、意地惡き傍人が其隠所を其と交代すべき人に敎へて此處へよこしたるならんと
(一二)午前四時頃
(一三)寅一つとは夜明卽ち明くと報じたる也、明くは厭くと通ずれば、あくを何方の意にとりても悲しと也
(一四)心細げにて

(一)兵部卿の今の妻の娘共は、親が氣をもめども餘り仕合よくもなければ
(二)繼子の幸運なるをいふ
(三)加茂齋院桐壺第三女
(四)齋院は大抵内親王也
(五)内親王
(六)朝顔を思ひ切らざりしに
(七)朝顔が異つた方面に向いて仕舞つたから
(八)朝顔の侍女
(九)朝顔への
(一〇)勢力の無くなりし事
(一一)源が
(一二)つまらぬ事
(一三)彼女へも此女へもと心配せり
㊅源氏窃に朧月に夜逢ふ
(一四)源を大切に思へども
(一五)優柔なる
(一六)弘徽殿右大臣の爲すに任せて、政事も自分の儘にならず
(一七)彌面倒ではあれど
(一八)無理な首尾でも逢はれぬ事は無し
(一九)五大明王を祈る式

(一)嫡腹のかぎりなくと思すは、はかぐ〜しうもえあらぬに、ねたげなる事多くて、繼母の北の方は、安からずおぼすべし。昔物語に、(二)殊更に作り出でたるやうなる御有樣なり。齋院(三)は御服にて、下り居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居給ひにき。加茂のいつき(四)には、孫王の居給ふ例多くもあらざりけれど、さるべき女御子(五)やおはせざりけむ。大將の君、年月經れど、なほ御心離れ(六)給はざりつるを、斯う筋異(七)になり給ひぬれば、口惜しとおぼす。中將(八)に音づれ給ふ事も同じことにて、御文(九)などは絕えざるべし。昔(一〇)に變る御有樣などをば、殊(一一)に何とも思したらず、かやうのはかなし事(一二)どもを、紛るゝ事なきまゝに、此方後方(一三)と思し惱めり。

帝は、院の御遺言違へず、哀(一四)におぼしたれど、若うおはしますうちにも、御心な(一五)よびたる方に過ぎて、強き所おはしまさぬなるべし、母后祖父大臣(一六)とりぐ〜にし給ふことは、え背き給はず、世の政御心にかなはぬやうなり。煩(一七)はしさのみ增れど、かんの君は、人知れぬ御心し通へば、わり(一八)なくても覺束なくはあらず。五(一九)

給はぬ世のうさに、立ちまふべくも思されず。左大臣も、すさまじき心地し給ひて、ことに内裏にも參り給はず。故姫君を、(一)引き除きてこの大將の君に聞えつけ給ひし御心を、后は思しおきて、(二)よろしうも思ひ聞え給はず。大臣の御中も、(三)もとよりそば〳〵しうおはするに、(四)故院の御世には、わが儘におはせしを、(五)時移りて、したり顔におはするを、(六)味氣なしと思したるも(七)理なり。大將は、ありしに變らず渡り通ひ給ひて、(八)侍ひし人々をも、(九)なか〳〵に細に思しおきて、若君をかしづき思ひ聞え給へる事限りなければ、哀にありがたき御心と、いとゞ(一〇)いたづき聞え給ふ事ども同じ樣なり。(一一)限なき御覺の、あまり物騷しきまで、暇なげに見え給ひしを、(一二)通ひ給ひし所々も、かた〴〵に絶え給ふ事どもあり、輕々しき御忍歩行も、あいなう思しなりて、殊にし給はねば、いとのどやかに、今しもあらまほしき御有樣なり。(一三)西の對の姫君の(一四)御幸を、世の人もめで聞ゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈のしるしと見奉る。(一五)父親王も思ふさまに聞えかはし給ふ。

(一)葵上を朱雀が望みしを振切つて源に嫁せし
(二)根に持ちて
(三)左大臣右大臣の交情
(四)中よからず
(五)左大臣の心の儘なりしに
(六)右大臣が
(七)左大臣が
(八)左大臣邸へ
(九)侍女等にも却て細に目をかけ
(一〇)左大臣が源を大切にする事も
(一一)桐壺の寵甚しき爲源の暇無けなりしも今は暇になり
(一二)方々の女の許
(一三)興味なくなりて
(一四)紫上
(一五)紫上父兵部卿宮とも自由に音信す

(一)是からは斯樣に失意の生活をするのかと
(二)源が寂寞の感に堪へぬ
(三)朧月夜
(四)前尚侍が桐壺の喪に服して引續き出家したる
(五)重く待遇され
(六)女御更衣等たちの
(七)弘徽殿
(八)朧月夜、かんの君は内侍のかみの君の略
(九)朧月夜從來奥まりたる登花殿に引込み居たるに、弘徽殿に移りて花やかになり
(一〇)思はず源と逢ひし事
(一一)源と朧と手紙を
(一二)尚侍にならぬ中と
(一三)源の心、現はれたらば大變
(一四)斯うなると却て
(一五)桐壺在世中は其に憚りもせしが、今は弘徽殿が憚る所なく
(一六)容赦なくて
(一七)色々無念なりし事の復讐をせんと思へり
(一八)源方に取て
(一九)斯る目には逢ひつけぬので、人交をする氣ならず

さをさ見えず。親しき家司どもばかり、殊に急ぐ事無げにてあるを見給ふにも、今(一)よりは斯くこそはと思ひやられて、ものすさまじくなむ。(二)御匣殿は、二月に尚(三)侍になり給ひぬ。院の(四)御思ひに、やがて尼になり給へる代なりけり。(五)やむごとなくもてなして、人柄もいと善くおはすれば、(六)あまた參り集り給ふ中にも、すぐれて時めき給ふ。(七)后は、里がちにおはしまいて、參り給ふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿にはかんの(八)君住み給ふ。(九)登花殿の埋れたりつるに、晴れ〴〵しうなりて、女房なども數知らず集ひ參りて、今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは、(一〇)思の外なりし事どもを忘れ難う思ひ歎き給ふ。いと忍びて通はし給ふことは、(一一)なほ同じさまなるべし。(一二)物の聞えもあらば如何ならむと思しながら、例の御癖なれば、(一三)今しも(一四)御志まさるべかゝめり。院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ、(一五)后は御心いちはやくて、(一六)かた〴〵(一七)思しつめたる事どもの報せむと思すべかゝめり。事に觸れて(一八)はしたなき事のみ出で來れば、斯かるべき事とは思しゝかど、(一九)見知り

（一）桐壺を松に比し、妃たちを下葉に比したり
（二）つまらぬ歌なれども
（三）桐壺帝の面影
（四）思ふ通りを咏みたるが、餘り幼稚な歌なり
（五）訪ふ人の段々少くなり行く說
（六）藤壺三條宮に移る儀式、別に格式を落した譯ならねど、氣のせいか哀にて
（七）三條の舊邸
㊄朧月夜尙侍になる、朝顏齋院になる
（八）除目の任官式
（九）桐壺帝の時の頃は勿論朱雀時代になりても桐壺在世中は、前に變らず源の門前市をなしたりしに
（一〇）今は源の勢衰へたりと見て訪ひ來る人稀に
（一一）殿内の役所に宿直する人もなき故、宿直者の夜具包の持運ばるゝ事無し

兵部卿（一）陰ひろみたのみし松や枯れにけむ下葉散りゆく年のくれかな

何ばかりのことにもあらぬに、折から物あはれにて、大將の御袖いたう濡れぬ。池（二）の隙なう氷れるに、

源　さえわたる池の鏡のさやけきに（三）見なれしかげを見ぬぞかなしき

と（四）思すまゝに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

年暮れて岩井の水もこほりとぢ（五）見しひとかげのあせもゆくかな

其ついでにいと多かれど、さのみ書き續くべきことかは。（六）渡らせ給ふ儀式かはらねど、思ひなしにあはれにて、（七）ふるき宮は、かへりて旅の心地し給ふにも、御里住絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

年かへりぬれど、世の中今めかしきこともなく靜なり。まして大將殿は、物憂くて籠り居給へり。（八）除目の頃など、（九）院の御時をば更にもいはず、年頃劣る差別なくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬車（一〇）うすらぎて、（一一）さぶらひに宿直物の袋を

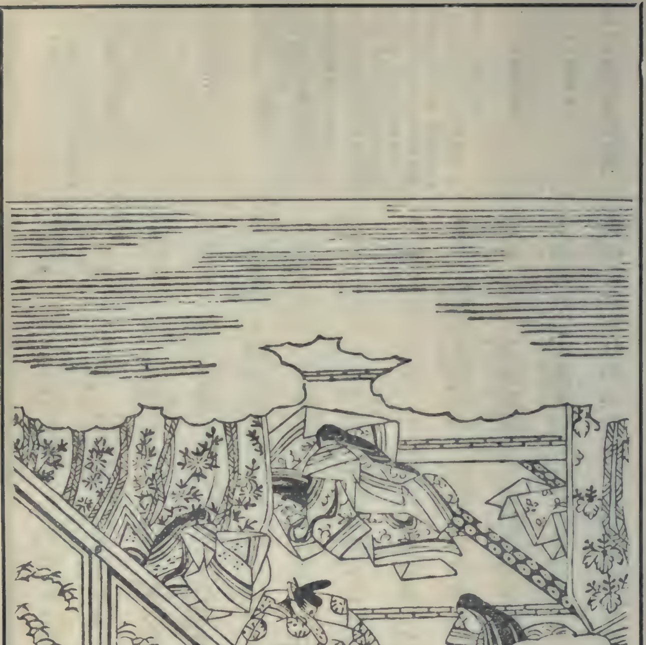
やつれ給へるにつけても、限なく清らに心苦しげなり。去年今年とうちつゞき、(一)かかることを見給ふに、(二)世もいとあぢきなう思さるれば、かゝる序にも、まづ(三)思し立たるゝことはあれど、また様々の御羈絆おほかり。御四十九日までは、女御御息所たち、みな院に集ひ給へりつるを、過ぎぬれば、散り〴〵にまかンで給ふ。十二月の廿日なれば、(四)大方の世の中とぢむる空の氣色につけても、まして晴るゝ世なき中宮の御心のうちなり。(五)大后の御心をも知り給へれば、(六)心に任せ給へらむ世のはしたなく住み憂からむを思すよりも、(七)馴れ聞え給へる年頃の御有様を思ひ出で聞え給はぬ時の間なきに、(八)斯くてもおはしますまじう、皆外々へと出で給ふ程悲しき事かぎりなし。宮は、三條の宮に渡り給ふ。御迎に、(一〇)兵部卿の宮參り給へり。雪うち散り風烈しうて、(九)院の内やう〳〵(一一)人目かれゆきてしめやかなるに、(一二)大將殿こなたに參り給ひて、ふるき御物語きこえ給ふ。御前の(一三)五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見給ひて、

(一) 凶事に逢ふ
(二) 源が
(三) 出家の望
(四) 世間總體の年の暮の心細さに加へて別離の悲あれば、藤壺の心は晴間なし
(五) 藤壺が
(六) 是から世は弘徽殿の心の儘なれば、つらき事のあるべきは覺悟の前なれど其よりも
(七) 桐壺在世の時の事のみ思ひ出さるゝに
(八) 此儘に居る事もならず
(九) 藤壺
(一〇) 藤壺の同胞
(一一) 人出入なくなりて
(一二) 源が藤壺を訪ひて
(一三) 五葉の松

(一)桐壺が
(二)源も座に在りしなるべし
(三)冷泉の後見
(四)桐壺が
㊃桐壺帝崩御
(五)弘徽殿
(六)躊躇する内に
(七)格別の惱もなく
(八)桐壺は隱居せられしといふ名のみて、政務は在位中と同樣なりしに
(九)崩御になりて見れば朱雀は若年也、嚴酷なる後見役の右大臣の儘にされては堪らぬと
(一〇)藤壺源氏
(一一)供養し
(一二)喪服に、源の樣

れば、うしろめたく悲しう(一)見奉らせ給ふ。(二)大將にも、おほやけに仕う奉り給ふべき御心づかひ、(三)この宮の御後見し給ふべきことを、返す〴〵宣はす。夜更けてぞ歸らせ給ふ。殘る人なくつかう奉りてのゝしる樣、行幸に劣る差別なし。飽かぬ程にて還らせ給ふを、(四)いみじう思召す。

(五)大后も參り給はむとするを、中宮のかく添ひおはするに御心置かれて、(六)思しやすらふ程に、(七)おどろ〳〵しき樣にもおはしまさで、崩れさせ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。(八)御位を去らせ給ふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせ給へることも、わが御世の同じ事にておはしまいつるを、(九)帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなうおはして、その御まゝになりなむ世を、如何ならむと、上達部殿上人皆思ひなげく。(一〇)中宮大將殿などは、まして勝れて物も思しわかれず、後々の御わざなど、(一一)孝じ仕う奉り給ふさまも、そこらの御子たちの御中にすぐれ給へるを、理ながらいとあはれに、世の人も見奉る。(一二)藤の御衣に



何事も御後見とおぼせ。(一)齢の程よりは、(二)世をまつりごたむにも、をさ／＼憚あるまじうなむ見給ふる。(三)必ず世中保つべき相ある人なり。(四)然るによりて、煩はしさに、皇子にもなさず、たゞ人にて、おほやけの御後見をせさせむと、思ひ給へしなり。(五)その心違へさせ給ふな」と、哀なる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だに(六)かたはらいたし。帝も、いと悲しと思して、(七)更に違へ聞えさすまじき由を、返す／＼聞えさせ給ふ。(八)御容貌もいと清らに、ねびまさらせ給へるを、(九)嬉しくたのもしく見奉らせ給ふ。限あれば急ぎ還らせ給ふにも、(一〇)なか／＼なる事多くなむ。春宮も、(一一)一度にと思召しけれど、物さわがしきにより、日をかへて渡らせ給へり。(一二)御年の程よりは、おとなび美しき御樣にて、(一三)戀しと思ひ聞えさせ給ひけるつもりに、(一四)何心もなく嬉しと思して、見奉り給ふ御氣色いとあはれなり。(一五)中宮は涙に沈み給へるを、見奉らせ給ふにも、(一六)さま／＼御心亂れて思しめさる。(一七)よろづの事を聞え知らせ給へど、いと物はかなき御程な

(一)源を
(二)源は若輩なれど國政を取らせても差支なしと思ふ
(三)源は
(四)桐壺卷の源を相人に見せし處參照
(五)此の趣意を通してくれ
(六)斯く一端を述ぶるも氣がひける
(七)決して違背すまじき由を
(八)朱雀の
(九)桐壺が
(一〇)逢うて却て悲を増したる事
(一一)帝と一緒に見舞はんと
(一二)冷泉今年五歳
(一三)桐壺戀しさが一杯で
(一四)冷泉が
(一五)藤壺
(一六)桐壺が
(一七)桐壺が冷泉に

(一)相坂の關

(二)伊勢に下りて後我が慕むや慕まざるやを遙に心配して呉れる者は誰もあるまじ

(三)ざつと書きたるが却て見事なるを見て

(四)源の心

(五)御息所の行方

(六)紫の方

(七)御息所の伊勢に去りたるも畢竟は我が仕向けの恐かりし故にて、人のせいでは無しと自ら咎めて

(八)旅中にある御息所は

㊂ 桐壺帝重病

(九)朱雀に頼みて

(一〇)我存命中に變らず

と聞え給へれど、いと闇う物さわがしき程なれば、またの日、關(一)のあなたよりぞ、御返ある。

御息所 鈴鹿川八十瀬の浪にぬれ〳〵ず伊勢まで誰か思ひおこせむ(二)

(三)ことそぎて書き給へるしも、御手いとよし〳〵しくなまめきたるに、哀なる(四)氣を少し添へ給へらましかば、と思す。霧いたう降りて、たゞならぬ朝ぼらけに、うち眺めてひとりごちおはす。

源 行くかた(五)をながめもやらむこの秋は逢坂山をきりなへだてそ

西(六)の對にも渡り給はで、人(七)やりならず、物淋しげに眺め暮し給ふ。まして旅(八)の空は、いかに御心づくしなる事多かりけむ。

院の御惱、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜み聞えぬ人なし。内裏にも思し歎きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、かへす〴〵聞え(九)させ給ひて、次には大將の御事、「院(一〇)侍りつる世にかはらず、大小の事を隔てず、

(一)御息所の感慨、我父の我を皇后にもせん積なりしに引かへて
(二)故皇太子
(三)昔を思ひ出さじと我慢すれども悲自ら堪へず
(四)立派につくり立てたる様、すごい程である
(五)訣別の儀式、帝櫛を齋宮の額に挿し、京を顧る事勿れと勅ある也
(六)飾りたる車
(七)飾の爲に車の外に垂れたる女の衣の
(八)心強く今は我を振捨て行きても後には後悔して悲むことと無からんや、御息所に擬れる也

息所、御輿に乗り給へるにつけても、(一)父大臣の限なきすぢに思し心ざして、いつき奉り給ひし有様かはりて、末の世に内裏を見給ふにも、物のみ盡きせずあはれに思さる。十六にて(二)故宮に参り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、今日また九重を見給ひける。

御息所　(三)そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞ悲しき

齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しうおはする様を、(四)麗しうしたてまつり給へるぞ、いとゆゝしきまで見え給ふを、帝御心動きて、(五)別の御櫛奉り給ふほど、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。出で給ふを待ち奉るとて、八省に立て續けたる、(六)出車どもの(七)袖口色あひも、目慣れぬさまに心憎きけしきなれば、殿上人どもも、私のわかれ惜む多かり。暗う出で給ひて、二條より洞院の大路を折れ給ふほど、二條院の前なれば、大將の君いとあはれに思されて、榊にさして、

源　(八)ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬のなみに袖はぬれじや



八洲もる國つ御神もこゝろあらば飽かぬわかれの中をことわれ(一)
思ひ給ふるに、飽かぬ心地し侍るかな。

とあり。いと騒がしきほどなれど、御かへりあり。宮の御をば(二)、女別當(三)して書かせ給へり。

齋宮(四)國つ神そらにことわる中ならばなほざりごとをまづやたゞさむ

大將は、御有樣(五)ゆかしうて、内裏にも參らまほしうおぼせど、打棄てられて見送らむも、人わろき(六)心地し給へば、思しとまりて、徒然にながめ居給へり。宮の御返りのおとなくしきを、ほゝゑみて見居給へり。御年の程(七)よりはをかしうもおはすべきかなと、たゞならず。かやうに例に違へる煩はしさに(八)、かならず心かゝる御癖にて、いとよう見(九)奉りつべかりし、いはけなき御程を、見ずなりぬるこそ妬けれ、世の中さだめなければ、(一〇)對面する樣もありなむかしなど思す。心憎く(一一)よしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏に參り給ふ。御

(一)飽かぬ別のなき様にさばき給へ
(二)御返事
(三)齋宮の別當
(四)國つ神がさばくならば、第一に君が從來のよい加減の詐を匡さゞる可らず
(五)齋宮御息所の暇乞參内の有様
(六)見つともなき
(七)齋宮は年よりませて居るならんと氣にかゝる
(八)通常ならぬ故障のある女を思ひ込むのが癖で
(九)源の心、見れば見られた齋宮の幼年時代を見ざりしは殘念なり
(一〇)齋宮に又逢ふ事もあらん
(一一)御息所が付添ひ行く故、伊勢下の行装の見事なる也

とほしうも思し悩むべし。(一)旅の御裝束よりはじめ人々のまで、何くれの御調度など、嚴しう珍らしき樣にて、(二)とぶらひ聞え給へど、何ともおぼされず。(三)あはくしう心憂き名をのみ流して、あさましき身の有樣を、今始めたらむやうに、(四)程近くなるまゝに、起き臥し歎き給ふ。齋宮は、若き御心に、不定なりつる御出立の、かく定まり行くを、嬉しとのみ思したり。世の人は、(五)例なきことと、もどきもあはれがりも樣々に聞ゆべし。(六)何事も、人にもどきあつかはれぬ際は安げなり。なかなか世にぬけ出でぬる人の御あたりは、(七)所狹き事多くなむ。

十六日、桂川にて(八)御祓し給ふ。常の儀式にまさりて、(九)長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとなく覺あるを擇らせ給へり。(一〇)院の御心よせもあればなるべし。(一一)出で給ふほど、大將殿より例の盡せぬ事ども聞え給へり。(一二)かけまくも畏き御前にとて、木綿につけて、

源 鳴る神たにこそ、(一三)

(一)御息所の
(二)贈り來れども御息所は
(三)輕卒に浮名を謡はるる樣な事をして
(四)出發期が
(五)親の付添ひ下るは例なき事と批難するもあり同情するもあり
(六)作者の評、人に彼是言はれぬ平凡な人は氣樂なり
(七)窮屈なる
㊁齋宮母子出發
(八)齋宮出發前の潔齋
(九)伊勢まで送り行く役人
(一〇)桐壺が特に齋宮を大切にせらるゝ故もあるべし
(一一)野宮を
(一二)齋宮にとて
(一三)「天の原ふみ轟かし鳴る神も思ふ中をばさくるものかは」

(一)是といふ心配なき人でも
(二)餘り愁に沈みてよき歌も出來ぬにやあらん
(三)秋の別を表には言ひて、源との別の悲を裏にきかせたり
(四)源の心
(五)月下の源の容貌
(六)跡に殘れる移香
(七)心得違もしかねぬ位に
(八)何程大切なる旅ぢやといふて
(九)源より來れる文
(一〇)御息所が思ひ留る位に書いてはあれど
(一一)又考へ直すべき餘地も無いから
(一二)源氏
(一三)一通には思はざりし
(一四)源が

に吹きて、松蟲の鳴きからしたる聲も、折知りがほなるを、(一)さして思ふことなきだに、聞し過し難げなるに、(二)ましてわりなき御心惑ひどもに、なかなかこともゆかぬにや

御息所(三)大かたの秋のわかれもかなしきに鳴くねな添へそ野邊の松蟲

(四)悔しきこと多かれどかひなければ、明け行く空もはしたなくて出で給ふ、道の程いと露けし。女もえ心強からず、名殘あはれにて眺め給ふ、ほの見奉り給へる(五)月影の御かたち、なほ留れる(六)にほひなど、若き人々は身にしめて、(七)過もしつべくめで聞ゆ。女房達(八)「いかばかりの道にてか、かゝる御有樣を見すてては、別れ聞えむ」と、あいなく涙ぐみあへり。(九)御文、常よりも細やかなるは、(一〇)思し靡くばかりなれど、(一一)又うちかへし定めかね給ふべきことならねば、いとかひなし。(一二)男は、さしも思さぬ事をだに、情の爲には能くいひ續け給ふべかめれば、ましておしなべての(一三)列には思ひ聞え給はざりし御中の、かくて背き給ひなむとするを、(一四)口惜しうもい



（一）昔に似て居るので
（二）源が
（三）心弱くは見えじと
（四）源が
（五）伊勢行を思ひ留るべき樣に
（六）源が
（七）御息所のつもる恨
（八）御息所の心、やつと伊勢行と決心したるに
（九）心の又ぐらつく事もあらんかと危みたるに、果して如此と今になりて却て氣がもめる
（一〇）禁中より訪ひ來れる少年の朝臣等
（一一）得意氣なる
（一二）無限の愁を懷ける
（一三）是は又曾て經驗せぬ秋の空のあはれさ也
（一四）出澁りて
（一五）御息所の

聞え給ひにし後、はた哀もさめつゝ、かく御中も隔たりぬるを、珍しき御對面のむかし（一）覺えたるに、哀と（二）思し亂るゝ事かぎりなし。來しかた行くさき思し續けられて、心弱く泣き給ひぬ。女は、（三）さしも見えじと思しつゝむめれど、え忍び給はぬ御氣色を、いよ〳〵心苦しう（四）、なほ思しとまるべき樣を（五）ぞ聞え給ふめる。月も入りぬるにや、哀なる空をながめつゝ、怨み（六）聞え給ふに、こゝら（七）思ひ集め給へるつらさも消えぬべし。やう（八）〳〵今はと思ひ離れ給へるに、されば（九）よと、なか〳〵心動きて思し亂る。（一〇）殿上の若君達などうち連れて、とかく立ち煩ふなる庭のたゝずまひも、實に艶なる方に、（一一）うけばりたる有樣なり。（一二）思はし殘すことなき御中らひに、聞えかはし給ふ事ども、まねびやらむかたなし。やう〳〵明け行く空の氣色、殊更につくり出でたらむやうなり。

源　あかつきの別はいつも露けきを（一三）こは世に知らぬ秋のそらかな

（一四）出でがてに、（一五）御手を執へてやすらひ給へる、いみじうなつかし。風いとひやゝか

とかう打ち歎きやすらひて、ゐざり出で給へる御けはひ、いと心にくし。源「(一)こなたは、簀子ばかりの許されは侍るや」とて、上り居給へり。花やかにさし出でたる夕月夜に、(二)うちふるまひ給へる樣、にほひ似る物なくめでたし。(三)月頃のつもりを、つきづきしう聞え給はむも、(四)まばゆき程になりにければ、榊をいさゝか折りて持給へりけるを、さし入れて、源「(五)變らぬ色をしるべにてこそ、(六)齋垣をも越え侍りにけれ。(七)さも心憂く」と聞え給へば、

御息所「(八)神垣はしるしの杉も無きものをいかにまがへて折れるさかきぞ

と聞え給へば、

(九)少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみ(一〇)とめてこそ折れ

(一一)大方のけはひ煩はしけれど、(一二)御簾ばかりは引著て、長押におし懸りて居給へり。(一三)心に任せて見奉りつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。又心の中に、(一四)いかにぞや、疵ありて思ひ

(一)神事の宮なれど緣に上る位は差支なしと見える
(二)源の
(三)つもる話
(四)氣恥しい位の無沙汰なれば
(五)榊葉の色
(六)神垣、「千早振る神の齋垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」
(七)斯る御待遇はつらし
(八)三輪山ならば杉をしるしに尋ね來らるゝ事もあるべきに、是所へは何と思ひて榊をしるべに折りて來られしぞ、「我庵は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉たてる門」
(九)少女子は朝顏、榊葉は御息所を喩へていふか
(一〇)尋ねて
(一一)そこらの樣子に氣が置かれるけれど
(一二)簾中に頭をさし入れて
(一三)自由に逢はれ女も慕つて居た時分はゆつくり平氣に構へて
(一四)怪しからず疵ありと御息所を思ふ樣になりて後は戀も醒めて

り。黒木(一)の鳥居どもは、さすがに神々しく見え渡されて(二)、煩(三)はしき氣色なるに、神司の者ども、此處彼處にうちしはぶきて、おのがどち物うち言ひたるけはひなども、外には樣變りて見ゆ。火燒屋かすかに光りて、人氣少くしめじめ(四)として、此處に、物思はしき人の、月日を隔て(五)給へらむ程を思しやるに、いといみじう哀に心ぐるし。北の對の、然るべき所に立ち隱れ給ひて、御消息聞え給ふに、遊は皆やめて、心憎きけはひあまた聞ゆ。何くれの人傳の御消息ばかりにて、自ら(六)は對面し給ふべき樣にもあらねば、いとものしとおぼして、源「かやうの歩行も、今は(七)つきなきほどになりにて侍るを思し知らば、斯う注連(八)の外にはもてなし給はで、(九)いぶせう侍る事をもあきらめ侍りにしがな」と、まめやかに聞え給へば、人々、女房達「げにいとかたはら痛う、立ち煩はせ給ふに、いとほしう」などあつかひ聞ゆれば、いさや(一〇)此處(一一)の人目も見苦しう、(一二)かの思さむ事も若々しう、出で(一三)居むが今更につつましきことと思すに、いと物憂けれど、情なう(一四)もてなさむにもたけからねば、

(一)野宮の鳥居は皮付の木にて造る
(二)「見渡されて」の誤なるべし
(三)憚らるゝ
(四)しんみりして
(五)月日を送り
(六)御息所自身は面會する樣子が無いので
(七)似合はぬ身分になりたるを特に來りたる心を察して下されたらば
(八)内へも入れぬ樣にはせずして
(九)胸にたまつて居る事を晴したし
(一〇)御息所の心
(一一)此處の人々にも外聞惡く
(一二)源にも若々しく思はるべければ
(一三)出て逢ふのが恥かしと
(一四)すげなく待遇するのも出來した事でもないから

で、例ならず時々惱ませ給へば、いとゞ御心の暇なけれど、(一)つらきものに思ひはて給ひなむもいとほしく、人聞情なく(二)やと思し起して、野宮にまうでたまふ。九月七日ばかりなれば、無下に(三)今日明日とおぼすに、女方も心あわたゞしけれど、(四)立ちながらと、たび〱(五)御消息ありければ、いでやとは思し煩ひながら、いとあ(七)まり埋れいたきを、物越ばかりの對面はと、(六)人知れず待ち聞え給ひけり。遙けき(八)野邊を分け入り給ふより、いと物あはれなり。秋の花みな衰へつゝ、淺茅が原もかれ〲なる蟲の音に、松風すごく吹き合せて、そのこととも聞き分れぬ程に、(九)物の音ども絶え〲聞えたる、いと艶なり。むつまじき御前十餘人ばかり、御隨身こと〲しき姿ならで、いたう忍び給へれど、ことに(一〇)引き繕ひ給へる御裝、いとめでたく見え給へば、御供なるすきものども、所からさへ身にしみて思へり。(一一)御心にも、などて今まで立ちならさ(一二)ざりつらむと、過ぎぬるかた悔しう思さる。物はかなげなる小柴垣を大垣(一三)にて、板屋ども、あたり(一四)〱いとかりそめなゝめ

(一)源の
(二)源の心、御息所を全く顧みぬも氣の毒
(三)極近き中に出發せんと御息所が思ふに
(四)只一寸面會したし
(五)源から
(六)御息所が
(七)非常に永く面會せざれば、直に面を合せぬ面會位ならばしたしと
(八)源が、野邊は嵯峨野
(九)野宮にて奏する音樂
(一〇)めかしたる
(一一)源の
(一二)屢〻訪はざりしならんと
(一三)外圍
(一四)此處彼處

(一)御息所が思ひし
(二)葵上
(三)今度は何でも御息所が本妻になるならんと噂し
(四)御息所方の人々も其積で居たのに
(五)葵死後却て疎くなりたれば
(六)源が
(七)御息所が
(八)一筋に伊勢行を思ひ立つ
(九)齋宮が親と共に下る例
(一〇)秋好は未だ十四なれば手放し兼ねるといふ口實で
(一一)源が
(一二)御息所の心、源は不快を感じて居るべければ、面會したらば我が煩悶は一層增すべしと其が煩さに決心したるならん
(一三)六條京極の邸
(一四)御息所が
(一五)御息所の今居る齋宮の野宮は神聖なる所にて容易に人を入れぬ處故

しきものに(一)覺え給へりし、(二)大殿の君も亡せ給ひて後、(三)さりともと世の人も聞えあつかひ、(四)宮の内にも心ときめきせしを、(五)その後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見給ふに、(六)まことに憂しと思すことこそありけめと、(七)知りはて給ひぬれば、よろづの哀を思しすてて、(八)ひたみちに出立ち給ふ。(九)親添ひて下り給ふ例も、殊になけれど、いと(一〇)見放ち難き御有樣なるにことつけて、うき世を行離れなむとおぼすに、大將の君、さすがに、今はとかけ離れ給ひなむも口惜しうおぼされて、(一一)御消息ばかりは、哀なるさまにてたび〱通ふ。對面し給はむことをば、今更にあるまじき事と、女君もおぼす。(一二)人は心づきなしと思ひ置き給ふ事もあらむに、我は今すこし思ひ亂るゝことの增るべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

もとの殿には、あからさまに渡り給ふをり〱あれど、いたう忍び給へば、大將(一三)殿はえ知り給はず(一四)。(一五)たはやすく御心にまかせて、參うで給ふべき御住處にはたあらねば、覺束なくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろ〱しき御惱にはあら

❶ 六條御息所伊勢に下らんと決す。源氏訪ひて之を留む

（一）六條御息所の娘、秋好の伊勢行

賢木

梗槩

❶ 六條御息所、娘の齋宮に隨ひて伊勢に下らんと決す。源氏御息所を野宮に訪ひて之を留むれ共聽かれず。❷ 齋宮母子の出發。御息所の感慨。❸ 桐壺帝重病、朱雀、冷泉、源氏の御見舞。❹ 桐壺帝崩御。源氏、藤壺の失意。源氏藤壺を訪ふ。❺ 朧月夜尚侍になる。左大臣の失意。朝顏齋院になる。❻ 源氏窃に朧月夜に逢ふ。❼ 源氏窃に藤壺に逢ふ。歸りそこねて塗籠の中に隱る。❽ 源氏の煩悶。藤壺の煩悶。藤壺出家を思立ちて、暇乞の心にて冷泉を訪ふ。❾ 源氏雲林院に詣づ。紫上、朝顏齋院等へ文を贈る。それ〴〵の返事。❿ 源氏、寺より持歸れる紅葉を藤壺に贈る。朱雀帝との打解話。頭の辨の源氏に對するあてこすり。藤壺の宿下り。⓫ 源氏朧月夜と文の贈答。桐壺帝の忌日に藤壺と文の贈答。⓬ 藤壺法華八講を催し、終の日俄に出家す。人々の悲。源氏の悲。冷泉よりの御便。⓭ 新年に源氏藤壺を訪ふ。　たる若き尼公の生活。⓮ 藤壺、源氏、左大臣等の失意。源氏頭中將等の優遊自適の生活。⓯ 韻塞の遊。頭中將の負振舞。⓰ 朧月夜病の爲に宿下りす。⓱ 源氏に逢ふ。朧月夜の父右大臣に見咎めらる。弘徽殿女御の憤。

（一）齋宮の御下り近うなりゆくまゝに、御息所物心細くおもほす。やむごとなく煩は

大宮　新しき年ともいはずふる（一）ものは古りぬる人のなみだなりけり

（二）おろかなるべき事にぞあらぬや。

（一）ふる—降る、古る
（二）悲はさぞ深かるべし

の御消息にて、「今日はいみじく思ひ給へ(一)忍ぶるを、かく渡らせ給へるになむ、な(二)かなか」など聞え給ひて、「昔に(三)ならひ侍りにける御粧も、月頃はいとゞ涙に霧り(四)ふたがりて、色あひなく御覽ぜられ侍るらむと思ひ給ふれど、今日ばかりは、な(五)ほやつれさせ給へ」とて、いみじくし盡し給へるものども、(六)又重ねて奉れ給へり。必ず今日奉るべきと思しける御下襲は、色も織樣もよのつねならず、心ことなるを、(七)かひなくやはとて著かへ給ふ。(八)來ざらましかば口惜しう思されましと、心ぐるし。御かへりには、

源 (九)春や來ぬるともまづ御覽ぜられになむ、參りはべりつれど、思ひ給へ出でらるゝ事ども多くて、(一〇)え聞えさせ侍らず。

(一一)あまたとし今日あらためし色ごろもきては涙ぞ降るこゝちする

(一二)えこそ思ひ給へしづめね。

と聞え給へり。御かへり、

(一)葵を
(二)却て悲を増す
(三)葵存在中と同じく御召料の衣を仕立てたれど
(四)悲の涙に見えぬ目で仕立てたる故、よくもあるまじけれど
(五)つまらぬ衣でも着て下され
(六)衣桁にかけてある上に
(七)折角呉れたる甲斐なき樣にはせじ
(八)源の心
(九)悲つきぬ我身にも春は來れりやと見て貰ひに御邸へは來たれども
(一〇)悲しさに何とも申上げられず
(一一)毎年定まりてめでたく此處にて著かへし衣も、今日著れば只涙の種なり
(一二)心亂れてせん方なし

ありしにもあらずなり給へる御有様を、をかしうもいとほしうも思されて、源「年(一)頃思ひ聞えし本意なく、馴れ(二)はまさらぬ御氣色の、心憂き事」と怨み聞え給ふ程に、年もかへりぬ。

朔日の日は、例の院に參り給ひてぞ、内裏、春宮などにも參り給ふ。それより大殿(三)にまかで給へり。大臣、(四)新しき年ともいはず、昔の御事ども聞え出で給ひて、さうざうしく悲しと思すに、いとゞ斯うさへ渡り給へるにつけて、(五)念じかへし給へど、堪へ難く思したり。(六)御年の加はるけにや、ものものしき(七)けさへ添ひ給ひて、あ(八)りしよりけに、清らに見え給ふ。立ち出でて(九)御方に入り給へれば、人々も珍しう見奉りて忍びあへず。若君見奉り給へば、(一〇)こよなくおよずけて、御笑ひがちにおはするもあはれなり。まみ、口つき、たゞ春宮の御同じさまなれば、(一一)人もこそ見奉り咎むれと見給ふ。(一二)御しつらひなどもかはらず、御衣掛の(一三)御裝束など、例のやうにし懸けられたるに、(一四)女のが並ばぬこそ、なべてさうざうしく榮なけれ。(一五)宮

(一)様子が變つたのを
(二)「御狩する片野の小野の楢柴のなれは増らで戀ぞ増れる」
五　新年源氏左大臣邸を訪ふ
(三)左大臣邸
(四)新年にもかまはず葵の喪をして寂しがり居る處へ源が來たので
(五)怺へても
(六)源の様
(七)尤らしい所が加はりて
(八)前より一層
(九)葵の住居
(一〇)非常に智慧づいて
(一一)人が變に思ふならんと
(一二)室内の飾付昔にかはらず
(一三)源の衣物
(一四)女の衣物が
(一五)葵の母より源へ

も、をさ〳〵しくだにしなし給へらば、などかあしからむと、(一)參らせ奉らむ事を思し勵む。(二)君も、おしなべての樣には思さゞりしを、口惜しと思せど、たゞ今は(三)異樣に分くる御心もなくて、(四)何かは、斯ばかり短かゝめる世に、かくて思ひ定まりなむ、(五)人の恨も負ふまじかりけりと、(六)いとゞ危く思ほし懲りにたり。かの御息所はいといとほしけれど、(七)まことのよるべと賴み聞えむには、必ず心おかれぬべし、年頃のやうにて見過し給はば、然るべきをりふしに、(八)物聞えあはする人にてはあらむなど、さすがに殊の外には思し放たず。(九)この姫君を、今まで世の人も、その人とも知り聞えぬ、物げなき樣なり、父宮に知らせ聞えてむ、と思しなりて、(一〇)御裳著のこと、人に普くは宣はせねど、なべてならぬ樣に思し設くる御用意など、いと有難けれど、女君は(一一)こよなう疎み聞え給ひて、(一二)年頃よろづに賴み聞えて、(一三)まつはし聞えけるこそ、あさましき心なりけれと、悔しうのみ思して、さやかにも(一四)見合せ奉り給はず、聞え戲れ給ふも苦しう、わりなきものに思しむすぼほれて、

(一) 朧月夜を御奉公に上げる事を
(二) 源も朧月夜には執心の方なりし故、御奉公に上げて仕舞ふは殘念に思へど
(三) 紫の外に愛を分ける所なくて
(四) 源の心、どうせ短い此世の事故、最早紫上一人を守らう
(五) あちこち關係して恨を買ふのは惡い
(六) 六條御息所の事に
(七) 源の心、本妻にすれば窮屈なるべし
(八) 相談相手にはすべし
(九) 源の心、紫が人に誰とも知られぬは貫目が無さすぎる
(一〇) 女の裳をはじめて着用する祝、紫の
(一一) ひどく源を嫌ひて
(一二) 紫の心
(一三) 付纏うて居たのが
(一四) 目も見合せず

もことさらび、いとをかしう調へたり。(一)少納言は、いと斯うしもやはとこそ思ひ聞えさせつれ、哀にかたじけなく、思し至らぬ事なき御心ばへを、(二)まづうち泣かれぬ。「(三)(四)さてもうち〳〵に宣はせよかしな。かの人(五)もいかに思ひつらむ」とさゝめきあへり。

かくて後は、(六)内裏にも院にもあからさまに參り給へる程だに、しづ心なくおもか(七)げに戀しければ、あやしの心やと我ながらおぼさる。(八)通ひ給ひし所々よりは、恨めしげに驚かし聞え給ひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新手枕の心苦しくて、(九)「夜をや隔てむ」と思し煩はるれば、いと懶くて、惱ましげにのみもてなし給ひて、(一〇)「世の中のいと憂く覺ゆるほど過してなむ、人にも見え奉るべき」とのみ答へ給ひつゝ過し給ふ。今后(一一)は、御匣殿(一二)の、なほこの大將(一三)にのみ心つけ給へるを、右大臣「實にはた、斯く(一四)やむごとなかりつる方も失せ給ひぬるを、さてもあらむに、などか口惜しからむ」など、大臣(一五)宣ふに、いと憎し(一六)と思ひ聞え給ひて、宮仕(一七)

(一)わざ〳〵調へたるらしく
(二)斯くまで紫に對して儀式を調へたる待遇あらんとは思はざりしに
(三)侍女等の詞
(四)餠の事杯は我々に内命があればよいに
(五)惟光
(六)源が
(七)紫の姿が目にちらつきて
(八)方々の女
(九)「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに」
(一〇)葵に對する歎きにかこつけ言ふ也
(一一)弘徽殿
(一二)朧月夜、天子の衣服を司る
(一三)源氏をばかり慕ひて居るのを
(一四)葵もなくなりたれば朧月夜が源に嫁ぐは似合なり
(一五)父右大臣
(一六)弘徽殿は不服で
(一七)よき待遇さへ受けば禁中に奉公しても惡い事は無い



(一)源の心、妻にして見れば愛情も一入にて
(二)人の心は現金なものぢや
(三)惟光の心、少納言は老成人故、余が恥かしがるならんと
(四)注意して
(五)粗末にしてはならぬ
(六)「あだ」に長く續かぬの意味ある故婚禮には忌む也
(七)解し難し、誤あるか
(八)譯が分らぬので
(九)源が余に説明して聞かせしならん
(一〇)下げたるにつきて
(一一)飾付きたり
(一二)餅を盛る器の
(一三)花形の脚つきたる臺

今はじめて盗みもて來たらむ人の心地するも、いとをかしくて、(一)年頃あはれと思ひ聞えつるは、片端にもあらざりけり。(二)人の心こそうたてあるものはあれ、今は一夜も隔てむことの、わりなかるべきことと思さる。宣ひし餅、忍びていたう夜ふかしてもて參れり。(三)少納言はおとなしくて、恥かしうや思さむと、思ひやり深く(四)心しらひて、女の辨といふを呼び出でて、惟光「これ忍びてまゐらせ給へ」とて、香匣の箱をひとつさし入れたり。惟光「たしかに御枕上に參らすべき、祝のものに侍る。あなかしこ。(五)あだにな」といへば、あやしと思へど、辨「あだなる事はまだならはぬものを」とて取れば、惟光「まことに今は(六)然る文字忌ませ給へ。(七)よもまじり侍らじ」といふ。若き人にて、(八)氣色もえ深く思ひよらねば、持て參りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、(九)君ぞ例の聞え知らせ給ふらむかし。人は得知らぬに、翌朝この箱を(一〇)まかゝでさせ給へるにぞ、(一一)親しきかぎりの人々、思ひ合する事どもありける。(一二)御皿どもなど、いつの間にかし出でけむ、(一三)花足いと清らにして、餅の樣

らじ。「いと恥かし」など怨じ給ひて、御硯あけて見給へど、物もなければ、(一)若の御有様やと、らうたく見奉り給ひて、日一日入り居て慰め聞え給へど、解けがたき御氣色いとゞらうたげなり。

その夜さり、亥の子(二)の餅まゐらせたり。かゝる(三)御思ひの程なれば、事々しき様にはあらで、此方(四)ばかりに、をかしげなる檜破籠(五)などばかりを、いろ〳〵にて参れるを見給ひて、君、南の方に出で給ひて、惟光を召して、源「この餅、かう(六)數々に所狹き様にはあらで、明日の暮に参らせよ。今日(七)は忌々しき日なりけり」と、うちほゝゑみて宣ふ御氣色を、心疾きものにて、ふと思ひよりぬ。惟光(八)たしかにも承らで、惟光「げに愛敬(九)のはじめは、日擇して聞しめすべきことにこそ。さてもねの(一〇)こはいくつか仕う奉らすべう侍らむ」と、まめ立ちて申せば、源「三つ(一一)が一つにてもあらむかし」と宣ふに、心得はてて立ちぬ。物馴の様やと君はおぼす。人にもいはで、手づから(一二)といふばかり、里にてぞ作り居たりける。君はこしらへ(一三)わび給ひて、

(一)返歌でも書いて入れてあるかと
(二)十月の初の亥日に餅を食へば無病息災也といふ、今もする事也
(三)葵の忌中なれば
(四)源の方にはせず、紫方にみの
(五)重箱の如きもの
(六)亥子餅の様に澤山てなく
(七)新婚の三日目の夜は枕元に餅を侑むるは常式なり、源の命ずるは其意なるを現にも言ひかねて今日は日が惡ければとごまかしたるを、惟光は悟りたる也
(八)問ひたゞしもせず呑込みて
(九)新婚の事歟
(一〇)明日は子の日にて其日に造る餅なれば、亥子に對して子の子と戲れ言へる也
(一一)今夜の亥子餅の三分一
(一二)殆ど自分で手を下さぬばかりにして
(一三)機嫌を取兼ねて

（一）案が
（二）常に起臥を共にしながら、今迄はよく辛抱したものぢや
（三）源に斯る心あらんとは
（四）本の心
（五）眞底から
（六）なぜそう氣まづい仕方はするぞ
（七）斯様に引被りて居るのは
（八）機嫌をとり
（九）もう御目にかゝるまい

硯の箱を、御帳の内にさし入れておはしにけり。人間に辛うじて頭もたげ給へる（一）に、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく引きあけて見給へば、

源（二）「あやなくも隔てけるかな夜をかさねさすがになれし中の衣を

と書きすさび給へる様なり。（三）かゝる御心おはすらむとは、かけても思し寄らざりしかば、（四）などて斯う心憂かりける御心を、（五）うらなく頼もしきものに思ひ聞えけむ、と、あさましう思さる。晝つかた渡り給ひて、源「悩ましげにし給ふらむは、いかなる御心地ぞ。今日は碁も打たで、さうざうしや」とて覗き給へば、いよいよ御衣引きかづきて臥し給へり。人々退きて侍へば、寄り給ひて、源（六）「など斯くいぶせき御もてなしぞ。思の外に心憂くこそおはしけれな。人もいかに怪しと思ふらむ」とて、御衾を引きやり給へれば、汗におし浸して、額髪もいたう濡れ給へり。源「あなうたて。（七）これはいとゆゝしきわざぞよ」とて、よろづにこしら（八）へ聞え給へど、眞にいとつらしと思ひ給ひて、露の御答もし給はず。源「よしよし。（九）更に見え奉

御方に渡り給ひて、中將の君といふに、御足など(一)參りすさびて、大殿ごもりぬ。朝には、若君(二)の御許に、御文奉りたまふ。(三)哀なる御返りを見給ふにも、(四)盡せぬ事どものみなむ。いと徒然にながめがちなれど、何となき御歩行も、(五)物うく思しなりて、おぼしも立たれず。姫君のなに事もあらまほしう(六)整ひはてて、いとめでたうのみ見え給ふを、(七)似げなからぬ程に、はた見なし給(八)へれば、氣(九)色ばみたることなど折々聞え試み給へど、見も知り給はぬ氣色なり。徒然なるまゝに、たゞ此方にて碁うち、(一〇)偏つきなどし給ひつゝ、日を暮したまふに、(一一)心ばへのらう〳〵しく愛敬づき、はかなき戲事の中にも、美しき筋をしいで給へば、(一二)思し放ちたる年月こそたゞさる方のらうたさのみはありつれ、(一三)忍びがたくなりて、心ぐるしけれど、如何ありけむ。(一四)人の差別見奉り分くべき御中にもあらぬに、男君は疾く起き給ひて、女君は更に起き給はぬ朝あり。人々、「如何なれば斯くおはしますならむ。御心地の例ならず思さるゝにや」と見奉り歎くに、君は(一五)渡り給ふとて、御

(一)さすらせなどして
(二)夕霧
(三)祖母などのしたるなるべし
(四)哀盡きぬ
(五)源が
(六)すつかり發育して
(七)夫婦になりても
(八)見て取つたので
(九)時々當つて見るけれども
(一〇)漢字の偏を隱しつくりのみを見て何といふ字とあてる遊
(一一)緊の
(一二)まだ子供だからと思切つて居た内は、只子供としての可愛さのみであつたが
(一三)斯く女づくつて來たのを見ては
(一四)不斷起臥を共にする事故
(一五)自分の居間へ

氣色どもぞ、哀に思ひ出でられたまふ。(一)御裝束奉りかへて、西の對にわたり給へり。(二)更衣の御しつらひ、くもりなく鮮やかに見えて、よき若人童べの形姿めやすく調へて、少納言がもてなし(三)心もとなき所なく、心にくしと見給ふ。(四)姫君、いと美しうひきつくろひておはす。源「久しかりつる程に、いとこよなうこそ大人び給ひにけれ」とて、小さき御几帳ひきあげて見奉り給へば、(五)うちそばみて恥らひ給へる御樣、飽かぬ所なし。(六)火影の御傍目、頭つきなど、たゞかの心つくし聞ゆる人の御さまに違ふ所なくも成り行くかなと見給ふに、いと嬉し。近く寄り給ひて、(七)覺束なかりつるほどの事どもなど聞え給ひて、源「日頃の物語、のどかに聞えまほしけれど、(八)忌々しう覺え侍れば、暫しは(九)他方に休らひて參りこむ。(一〇)今はとだえなく見奉るべければ、厭はしうさへや思されむ」と、語らひ聞え給ふを、少納言は嬉しと聞くものから、なほ危く思ひ聞ゆ。やむごとなき御忍所多う(一一)かゝづらひ給へれば、(一二)又わづらはしきや立ちかはり給はむ、と思ふぞにくき心なるや。(一三)わが

(一)源が着かへて
(二)十月、夏冬の移りかへ也
(三)行届いて
(四)紫上
(五)側を向きて
(六)燈下の横顔
(七)朦朧
(八)死人の話は
(九)別室
(一〇)間斷なく
(一一)關係があるので
(一二)又面倒な女が其の代りに現れ來るかも知れぬ
(一三)源が自分の居間に

（一）源が
（二）故にや
（三）食物
（四）桐壺が世話をやき給へる
（五）藤壺
（六）藤壺より
（七）葵を亡ひたる悲
（八）如何に悲み給ふらん
（九）世の無常は一通りには知り居たれど
（一〇）貴方の御弔問に力を得て今迄存命せり
（一一）葵の事が無くてさへある藤壺に對する悲
（一二）源の衣裳
（一三）冠の纓を卷くは喪中の裝
㊃ 源氏二條院に移る、紫上と婚す、三つ目の餠
（一四）上位の女中たち
（一五）葵方の女中達の樣

（一）院へ參り給へれば、院「いといたく面瘦せにけり。精進にて日を經る（二）けにや」と、心苦しげに思しめして、御前にて（三）物などまゐらせ給ひて、とやかくやと（四）思しあつかひ聞えさせ給へる樣、哀にかたじけなし。（五）中宮の御方に參り給へれば、人々めづらしがり見奉る。（六）命婦の君して、（七）思ひ盡せぬ事どもを、程經るにつけても（八）如何に、と御消息聞え給へり。源「（九）つねなき世は、大かたにも思う給へ知りにしを、目に近く見侍りつるに、厭はしき事多く、思う給へ亂れしも、たびたびの（一〇）御消息に慰め侍りてなむ、今日までも」とて、（一一）さらぬ折だにある御氣色、取り添へていと心苦しげなり。（一二）無紋のうへの御衣に、鈍色の御下襲、（一三）纓卷き給へるやつれすがた、花やかなる御よそひよりも、なまめかしさ增り給へり。春宮にも、久しう參らぬ覺束なさなど聞え給ひて、夜更けてぞ罷出給ふ。

二條院には、かたがた拂ひ磨きて、男女待ち聞えたり。（一四）上臈ども皆參うのぼりて、我もわれもと裝束き、化粧したるを見るにつけても、（一五）かの居竝み屈じたりつる

（一）子を失ふは世にある習と諦めて
（二）短命で親を泣せる樣に生れ付いたのであらうと
（三）慰をさまし
（四）是からは他人になるのが諦められぬ
（五）源氏
（六）年輩なる侍女等
（七）聲を立てたる形容
（八）左大臣
（九）甚だあつけない御形見なり
（一〇）一寸下つて又參らん

事をばさるものにて、かゝる（一）悲しきたぐひ世に無くやはと思ひなしつゝ、（二）契ながからで、斯く心を惑はすべくこそはありけめと、かへりてはつらく、前の世を思ひやりつゝなむ（三）さまし侍るを、たゞ日頃に添へて、戀しさの堪へがたきと、この大將の君の、（四）今はと餘所になり給はむなむ、飽かずいみじく思ひ給へらるゝ。一日二日も見え給はず、かれぐ\におはせしをだに、飽かず胸痛く思ひ侍りしを、朝夕の（五）ひかり失ひては、いかでかながらふべからむ」と、御聲もえ忍びあへ給はず泣き給ふに、御前なる（六）おとなぐ\しき人など、いと悲しくて、（七）さとうち泣きたる、そゞろ寒き夕の氣色なり。若き人々は、所々に群れ居つゝ、おのがどち哀なる事ども打語らひて、「（八）殿のおぼし宣はする樣に、若君を見奉りてこそは慰むべかめれと思ふも、（九）いとはかなき程の御かたみにこそ」とて、おのぐ\、「（一〇）あからさまにまかでて參らむ」といふもあれば、かたみに別をしむ程、おのがじし哀なる事ども多かり。

(一)室內の裝飾
(二)源が
(三)強ひて見聞きて
(四)老人の樣を可笑しがりて
(五)源の書散しの反古には
(六)よいゝ手ぢや
(七)葵が死して源と他人になるのか
(八)源の書散しの文句、長恨歌「鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共」翡翠衾寒唐本には「舊枕故衾」とある由舊注にいへり
(九)共に寢し床を離れ行くが悲しきにつけて、亡き人死際の心殘を思ふ心切なり
(一〇)「しろし」は「しげし」の誤寫にて、上の「霜華重」なるべし
(一一)とこなつ―常夏、床
(一二)前栽の撫子につけて源が歌を母宮に贈りし事前にあり
(一三)葵の死の悲は勿論にて

みてか怠り侍らむ。今御覽じてむ」とて出で給ふを、大臣見送り聞え給ひて入り給へるに、御しつらひ(一)よりはじめ、ありしに變る事もなけれど、うつせみの空しき心地ぞし給ふ。御帳の前に御硯などうちちらして、手習ひ(二)すて給へるを取りて、目をおししぼりつゝ(三)見給ふを、若き人々は、悲しき中にもほゝゑむ(四)もあるべし、(五)哀なる故事ども、唐のも倭のも書きけがしつゝ、草にも眞字にも、さまぐ\珍らしきさまに書きまぜ給へり。左大臣「かしこの御手や」(六)と、空を仰ぎてながめ給ふ。(七)よそ人に見奉りなさむが惜しきなるべし。「ふるき枕ふるきふすま、誰と共にか」(八)とある所に、

源 なきたまぞいとゞ悲しき寢し床のあくがれがたき心ならひに(九)

また、「霜の花しろし」(一〇)とある所に、

源 君なくて塵つもりぬるとこなつ(一一)の露うち拂ひいく夜寢ぬらむ

(一二)一日の花なるべし、枯れてまじれり。宮に御覽ぜさせ給ひて、左大臣「いふかひなき(一三)

なむ。院にも有樣奏し侍らむに、推し量らせ給ひてむ」と聞え給ふ。左大臣「さらば時雨も隙なく侍るめるを、(一)暮れぬほどに」とそゝのかし聞え給ふ。うち見まはし給ふに、御几帳の後、障子のあなたなどの明き通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き薄き鈍色どもを著つゝ、皆いみじう心細げにて、うちしほたれつゝ(二)居集りたるを、いとあはれと見給ふ。左大臣「思し捨つまじき人もとまり給へ(三)れば、さりとも物の序には立寄らせ給はじやなど慰め侍るを、偏に思ひやりなき(四)女房などは、今日をかぎりに思し捨つる故郷と思ひ屈して、長く別れぬるかなし(五)みよりも、たゞ時々馴れ仕うまつる年月の名殘なかるべきを、歎き侍るめるなむ理なる。(六)打解けおはします事は侍らざりつれど、さりとも遂にはと、あいなだのみし侍りつるを、げにこそ心ぼそき夕に侍れ」とても、また泣き給ひぬ。源「いとあさはかなる人々の歎にも侍るなるかな。まことに、(七)如何なりともと長閑に思ひ給へつる程は、おのづから御目がるゝ折も侍りつらむを、なかなか(八)今は何を頼

(一)事情を奏したらば御推察あるべし
(二)かたまりて
(三)々縁も居る事なれば
(四)源が立寄らぬ事はなき筈と
(五)葵の死別よりも、源に當來仕へ來たる事公が是切りになるのを嘆く
(六)葵の許に來ては源が打解くることは無かりしかど、いつか打解くる事あらんと當にならぬ事をあてにせしに
(七)葵が今はどう有ても末には打解くべしと源が呑氣に構へたりし時は自然無沙汰もせしならんが
(八)今はそういふ當もなければ、何を賴みに無沙汰すべき

（一）御暇に行くは却て涙の種なれば
（二）葵の父左大臣
（三）年をとればつまらぬ事にさへ涙もろきに
（四）況や子を失へる悲に涙の乾く間なく
（五）休める事が出來ねば
（六）人が見ても
（七）其趣に奏して下され
（八）強ひて心を落着けて
（九）世の眞相
（一〇）差當りての悲は

む。聞（一）えさせむもなか〱に侍るべければ、そなたにも參り侍らぬ。

とあれば、いとゞしく、宮は目も見え給はず沈み入りて、御返もえきこえ給はず。大臣（二）ぞやがて渡り給へる。いと堪へ難げに思して、御袖もひきはなち給はず。見奉る人々もいと悲し。大將の君は、世を思し續くる事いとさま〲にて、泣き給ふさまいとあはれに心深きものから、いと樣よくなまめき給へり。大臣久しうためらひ給ひて、左大臣「齡（三）のつもりには、さしもあるまじき事につけてだに、涙もろなるわざに侍るを、（四）まして干る世なう思ひ給へ惑はれ侍る心を、（五）えのどめ侍らねば、（六）人目も、いとみだりがはしく心弱きさまに侍るべければ、院などにもえ參り侍らぬなり。事のついでには、（七）さやうに趣け奏せさせ給へ。幾許も侍るまじき老の末に、打捨てられたるがつらくも侍るかな」と、（八）せめて思ひ沈めて宣ふ氣色、いとわりなし。君もたび〱鼻うちかみて、源「後れ先立つほどの定なさは、（九）世のさがと見給へ知りながら、（一〇）さしあたりて覺え侍る心惑ひは、類あるまじきわざに

(一)等差をつけて
(二)葵の紀念
(三)目だたぬ樣にして
● 源氏參内、左大臣の悲痛
(四)源氏
(五)涙の乾く隙
(六)今日限の別といふ譯でも無いが
(七)母宮へ源より
(八)一寸出かける
(九)よくも悲み死に死なずして

そし。大殿は、人々に、きは(一)〴〵ほど〳〵を置きつゝ、はかなき翫び物ども、又まことにかの(二)御かたみなるべき物など、わざとならぬ(三)樣に取りなしつゝ、皆くばらせ給ひけり。

君は、斯くてのみも、いかでかはつく〴〵と過し給はむとて、院へ參り給ふ。御(四)車さし出でて、御前など參り集るほど、折知り顏なる時雨うちそゝぎて、木の葉さそふ風、あわたゞしう吹きはらひたるに、御前に侍ふ人々、物いと心ぼそくて、少し隙(五)ありつる袖ども濕ひわたりぬ。夜さりは、やがて二條院に泊り給ふべしとて、侍の人々も、かしこにて待ち聞えむとなるべし、おの〳〵立出づるに、今日に(六)しもとぢむまじき事なれど、またなく物悲し。大臣も宮も、今日の氣色に、また悲しさあらためて思さる。宮(七)の御前に御消息聞え給へり。

源　院に覺束ながり宣はするにより、今日なむ參り侍る。あからさまに(八)立出で侍るにつけても、今日まで(九)ながらへ侍りにけるよと、みだり心地のみ動きてな

をばさるものにて、唯(一)うち思ひめぐらすこそ、堪へ難き事多かりけれ」と宣へば、いとゞ皆泣きて　女房達(二)「いふかひなき御事は、たゞかきくらす心地し侍るをばさるものにて、名残(三)なきさまにあくがれはてさせ給はむ程、思ひ給ふるこそ」と聞えもやらず。あはれと見渡し給ひて、源「名残(四)なくはいかにか。(五)いと心淺くもとりなし給ふかな。(六)心長き人だにあらば、見はて給ひなむものを。命こそはかなけれ」とて、火をうちながめ給へるまみの、うち濡れ給へる程ぞめでたき。(七)とりわきてらうたくし給ひし小き童の、親ども無く、いと心ぼそげに思へる、(八)理に見給ひて、源「(九)あてきは、今は我こそ(一〇)は思ふべき人なゝめれ」と宣へば、いみじく泣く。ほどなき袙、人よりは黒く染めて、黒き汗衫、萱草色の袴など著たるもをかしき姿な(一一)り。源「昔を忘れ(一二)ざらむ人は、徒然を忍びても、(一三)幼き人を見捨てず物し給へ。見し(一四)世の名残なく、人々(一五)さへかれなば、たつぎなさも増りぬべくなむ」など、皆心長か(一六)るべき事どもを宣へど、(一七)いでやいとゞ待遠にぞなり給はむと思ふに、いとゞ心ぼ

(一)汝等に別れて後の事を考へると
(二)葵の死
(三)源が全く此家に來ぬ樣になつた曉を思へば悲し
(四)丸で來ぬ事はない筈
(五)其樣な薄情者と思ふのか
(六)長い目で見てくれゝば分るのに
(七)葵が特に愛せし
(八)尤ぢやと源が見て
(九)小童の名
(一〇)汝の思ふべき人は我なり
(一一)小さき袙、袙は童女の服
(一二)重き喪に服する心也
(一三)夕霧を可愛がつてくれ
(一四)葵在世中の名殘なく
(一五)汝等迄疎遠にならば、我が便なさは一層ならん
(一六)此處に辛抱せよといふ樣な事
(一七)女等の心、源の方で來なくなるに違ない

とのみ、(一)ほのかなる墨づきにて、(二)思ひなし心憎し。(三)何事につけても、見勝りは難き世なゝめるを、つらき人しもぞ哀に覺え給ふ、(四)人の御心ざまなり。(五)つれながら然るべき折々のあはれを過し給はぬ、これこそ互に情も見えつべきわざなれ、なほ(六)故よしすぎて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出できけり、(七)對の姫君を、さはおふし立てじ、とおぼす。(八)徒然にて戀しと思ふらむかしと、忘るゝをり無けれど、たゞ女親なき子を置きたらむ心地して、見ぬ程うしろめたく、(九)いかゞ思ふらむと覺えぬぞ、心やすきわざなりける。

暮れはてぬれば、大殿油近くまゐらせ給ひて、然るべきかぎりの(一〇)人々、御前にて物語などせさせ給ふ。中納言の君といふは、年頃忍び思しゝかど、(一一)この御思ひのほどは、なか／＼(一二)さやうなる筋にもかけ給はず。哀なる御心かなと(一三)見奉るに、(一四)大方には懐しくうち語らひ給ひて、源「(一五)斯うこの日頃、ありしよりけに、誰も／＼まぎるゝかたなく見馴れ／＼て、えしも常にかゝらずば戀しからじや。(一六)いみじき事

(一)輕々と書きたる也
(二)十分に書きたらば嘸と奥床し
(三)想像よりも實際は劣るものなるに、然は思はれずして、手に入らぬ女を源はひどく買被る
(四)源の
(五)源の心、騒ぎはせずして同情すべき場合にはしてこそ情を示し合ふ事も出來る
(六)情趣を解し過ぎて人目につく樣な擧動をする女は批難を受ける
(七)紫を其樣な女にはしたく無い
(八)紫が
(九)恨みはせぬかといふ心配はなき
(一〇)女等
(一一)夜中は
(一二)浮きたる冗談も言はず
(一三)中納言が
(一四)色氣なしに
(一五)斯く葵存生中にも勝りて、汝らと永く一緒に暮した揚句に斯う出來ぬ樣にならば、戀しくはあるまいか
(一六)葵の死の悲は別として

あへ給はず。

大宮 今も見てなか〳〵袖をくたすかな垣ほ荒れにしやまとなでしこ(一)

なほいみじう徒然なれば、朝顔の宮に、(二)今日の哀はさりとも見知り給ふらむと推し量らるゝ御心ばへなれば、(三)暗きほどなれど聞えたまふ。(四)絶間遠けれど、然のものとなりにたる御文なれば、咎なくて御覧ぜさす。(五)空の色したる唐の紙に、

源 わきてこのくれこそ袖は露けけれ物おもふ秋はあまたへぬれど

(六)いつも時雨は。

とあり。御手などの心とゞめて書き給へる、常よりも見所ありて、過し難きほど(七)なりと人々も聞え、自らもおぼされければ、

(八)大内山を思ひやり聞えながら、えやは。(九)

とて、

朝顔 (一〇)秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるゝ空もいかゞとぞ思ふ

(一)かきは荒れにしは葵の死したるをいふ、乳母が夕霧を抱きて來し也

(十一) 源氏朝顔と文贈答

(二)源が

(三)悲を催す今日の天候

(四)手紙をやる

(五)たまさかの文なれど從來繁々も文通せぬ間柄故氣にもせずして見る、「さのもの」は「さるもの」の誤寫なるべし

(六)「神無月いつも時雨は降りしかど斯く袖ひづる折は無かりき」

(七)返事せねばならぬ所ぢやと

(八)源の閉居を思ひ遣れどもの意なるべけれど、大内山といへる意は未詳

(九)御弔は申上げ得ざりし

(一〇)葵を失へりと聞きし後は、時雨につけても御嘆を思ひ遣る

(一) 歎の
(二) 頭中將の心、源は元來葵が氣に入らざるを、父帝左大臣葵の母等への義理に捨てもならず、嫌々過ぎ來りしならんと思ひしに
(三) 氣をもみて
(四) 葵の母は源の伯母
(五) のつぴきならぬ
(六) 葵を
(七) 葵の死が中將一入殘念なり
(八) 頭中將が
(九) 非常にふさぐ
(一〇) 源が
(一一) 撫子は夕霧、秋は葵上
(一二) 夕霧を葵はどには思ひ給はぬか
(一三) 大宮へ
(一四) 夕霧の
(一五) 勝りて
(一六) 源の使をきくと直にこぼれる

源 見しひとの雨となりにし雲井さへいとゞ時雨にかきくらす頃

と宣ふ御氣色も、(一)浅からぬ程しるく見ゆれば、あやしう、(二)年頃はいとしもあらぬ御志を、院など居(三)立ちて宣はせ、大臣の御もてなしも心苦しう、(四)大宮の御方ざまに、(五)もてはなるまじきなど、方々にさしあひたれば、えしも振捨て給はで、物うげなる御氣色ながら、ありへ給ふなゝめりかしと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、眞にやむごとなく重きかたは、(六)殊に思ひ聞え給ひけるなゝめりと見知るに、(七)いよいよ口惜しうおほさる。(八)萬につけて、光失せぬる心地して、(九)屈しいたかりけり。枯れたる下草の中に、龍膽瞿麥などの、咲き出でたるを折らせ給ひて、中將の立ち給ひぬる後に、(一〇)若君の御乳母の宰相の君して、

源「草がれのまがきに殘るなでしこ(一一)をわかれし秋のかたみとぞ見る

(一二)にほひ劣りてや御覽ぜらるらむ」と聞え(一三)給へり。げに(一四)何心なき御笑顔ぞ、いみじう美しき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけ(一五)にもろき御涙は、(一六)ましてとり

言ひ顯し給ふはて〳〵は、哀なる世を言ひ〳〵て、うち泣きなどもし給ひけり。時雨うちして、物哀なる暮つかた、中將の君、(一)鈍色の直衣指貫、うすらかに衣がへして、男々しくあざやかに、心恥かしき樣して參り給へり。(二)君は、西の妻戸の勾欄に押しかゝりて、霜枯の前栽見給ふ程なりけり。風荒らかに吹き、時雨さと(三)したる程、涙も爭ふ(四)こゝちして、源(五)「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」とうちひとりごちて、頰杖つき給へる御樣、(六)女にては、見捨てゝなくならむ魂必ずとまりなむかしと、(七)色めかしき心地に、うちまもられつゝ、近うつい居給へれば、(八)しどけなう打ち亂れ給へる樣ながら、(九)紐ばかりをさしなほし給ふ。(一〇)これは、今少しこまやかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなる引き襲ねて、やつれ給へるしも、見てもあかぬ心地ぞする。中將も、(一一)いとあはれなるまみにながめ給へり。

中將(一二)「雨となりしぐるゝ空のうき雲をいづれの方とわきてながめむ

行方なしや」と、ひとり言の樣なるを、

(一)頭中將
(二)今迄のよりは薄き色の喪服に着かへたる也
(三)さつと降りたる
(四)雨と爭ひ落つる
(五)劉禹錫女を哭する詩「庚令樓中初見時。武昌春柳似二腰支一。相逢相失兩如レ夢。爲レ雨爲レ雲今不レ知」
(六)女ならば死行くに心殘るべしと
(七)頭中將が
(八)源は
(九)直衣の紐をはづし居たるを直す
(一〇)源の服裝
(一一)しをれたる顏付して
(一二)昔楚王の夢に見えたる巫山の神女は陽臺の下に雨となりて現れんと契りしが、葵は何方に雨となりて時雨るゝにや分らねば獨〻はかなし

(一)依然病氣なり
(二)此御息所は
(三)齋宮が内裏より野宮に移る時にも
(四)野宮通ひを
(五)源の心
(六)御息所は深く情趣を解する人なれば
● 頭中將源氏の籠居を訪ふ
(七)不詳、四十九日過ぎの初の忌日なるべしといふ
(八)頭中將
(九)源内侍
(一〇)材料
(一一)源内侍を戯れて呼ぶ也
(一二)末摘通ひを見付けられし時の
(一三)女咄

うき名をさへ流しはつべき事と、思し亂るゝに、なほ例の樣にもおはせず。(一)さるは大方の世につけて、心にくゝよしある聞えありて、昔より名高くものし給へば、(二)(三)野宮の御うつろひの程にも、をかしう今めきたる事多くしなして、殿上人どもの好しきなどは、(四)朝夕の露分けありくをその頃の役になむする、など聞き給ひても、大將の君は、理(五)ぞかし、故は飽く(六)までつき給へるものを、もし世の中におきはてて下り給ひなばさうぐ〳〵しくもあるべきかな、と流石に思されけり。

御法事など過ぎぬれど、正日(七)まではなほ籠りおはす。ならはぬ御徒然を心苦しがり給ひて、三位の中將は常に參り給ひつゝ、世の中の御物語など、まめやかなるをも、又例の(八)みだりがはしき事をも聞え給ひつゝ、慰め聞え給ふに、かの(九)内侍ぞうち笑ひ給ふくさはひ(一〇)にはなるめる。大將の君は、「あないとほしや。(一一)祖母殿の上な痛う輕め給ひそ」と諫め給ふものから、常にをかしと思したり。かく十六夜の(一二)さやかならざりし秋の事など、然らぬも樣々(一三)のすきごとどもを、かたみに隈なく



紫のにばめる(一)紙に、

源　こよなう程經侍りにけるを、思ひ給へ怠らずながら、つゝましき程は、さら(二)ば思し知るらむとてなむ。

(三)とまる身も消えしもおなじ露の世に心おくらむほどぞはかなき

かつは思し消ちて(四)よかし。御覽(五)ぜずもやとて。たれにも。

と聞え給へり。里(六)におはする程なりければ、忍びて見給ひて、ほのめかし給へる(七)氣色を、心の鬼に著く(八)見給ひて、さればよと思すもいといみじ。(九)猶いと限なき身の憂さなりけり、かやうなる聞えありて、院にも如何に思さむ、故前坊の同じき御兄弟といふ中にも、いみじう(一〇)思ひかはし聞えさせ給ひて、この齋宮の御事をも、(一一)懇に聞えつけさせ給ひしかば、その(一二)御かはりにも、やがて見奉りあつかはむなど、(一三)常に宣はせて、やがて内裏住し給へと、(一四)度々聞えさせ給ひしをだに、いとあるまじき事と思ひ離れにしを、かく心よりほかに(一五)若々しき物思ひをして、遂に

(一)黒みがかりたる
(二)久しく御無沙汰したるを心にはかけながら、忌中の故御察し下さるならんとて今迄打過ぎたり
(三)死者も生者も皆無常は免れず、執着は無用なり、暗に御息所の執念深きを誚る
(四)執心をなくし給へ
(五)忌中の者よりの文なれば自ら御覽はあるまじとて其積で書きたり、誰にでも讀ませ給へ
(六)御息所が自邸
(七)生靈になりたる事を匂はせたる
(八)氣付きて
(九)御息所の心
(一〇)前坊と桐壺とは
(一一)前坊が死に臨みて桐壺に頼みしかば
(一二)君の代りに世話せん
(一三)桐壺が
(一四)桐壺が御息所に
(一五)源との戀

身にしみけるかなと、ならはぬ御獨寢に、明しかね給へる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊の(一)氣色ばめる枝に、濃き(二)青鈍の紙なる文つけて、さし置きて去にけり。

源(三)「今めかしうも」とて見給へば、御息所の御手なり。

御息所 (四)聞えぬ程はおぼし知るらむや。

(五)人の世をあはれときくも露けきにおくるゝ袖を思ひこそやれ

たゞ今の(六)空に思ひ給へあまりてなむ。

とあり。(七)常よりも優にも書い給へるかなと、さすがに置き難う見給ふものから、(八)つれなの御とぶらひやと心憂し。さりとて、(九)かき絶えおとなひ聞えざらむもいとほしく、(一〇)人の御名の朽ちぬべき事を思し亂る。(一一)過ぎにし人は、とてもかくてもさるべきにこそは物し給ひけめ、(一二)何にさることをさだ〲とけざやかに見聞きけむと悔しきは、(一三)わが御心ながら猶え思し直すまじきなゝめりかし。(一四)齋宮の御淸まはりも煩はしくやなど、久しう思ひ煩ひ給へど、(一五)わざとある御返なくば情なくやとて、

(一)將に開かんとする
(二)青黑色
(三)氣取つた仕方哉とて
(四)御無沙汰中に我が如何許歎きしかは御存じか
(五)葵の逝去を悼むと共に生殘れる君の歎を思ひ遣る、きく—菊、聽く
(六)空の氣色の餘り悲しげなるに堪へずして文を上る
(七)源の心
(八)自分で取殺して置きながら知らぬ顏して悔をいふとは何事
(九)是切り六條を訪はぬも氣の毒
(一〇)御息所の名譽の汚れん事を
(一一)源の心、死したる葵は、つまり其迄の運といふもの
(一二)御息所の生靈をなぜまざ〱と眼前に見聞したのであらう
(一三)我ながら御息所を疎む心を取直し得ぬと見えたり
(一四)源の心、齋宮の潔齋の處へ死者を出したる所より文をやるも憚あり
(一五)わざとの手紙に返事せねば

(一)ろくでもなき子でも愛せぬ親はなきものなるに、況や斯程の子を悲むは道理
(二)葵が一人娘なるさへ不足に思ひしに
❿ 源氏の悲嘆、六條御息所の弔
(三)一寸でも行かず
(四)佛前の勤め
(五)娘が左衛門府に移りたれば
(六)嚴重なる潔齋を口實にして文通もせず
(七)源が
(八)夕霧が生れざりしならば偕にもなつて仕舞ひたし
(九)紫上の寂しき樣子
(一〇)「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを」
(一一)聲よき僧のみを撰びて

うなむ。(一)なのめにかたほなるをだに、人の親はいかゞ思ふめる、まして理なり。又(二)たぐひおはせぬをだに、さう〴〵しく思しつるに、袖の上の玉の碎けたりけむよりも、あさましげなり。

大將の君は、二條の院にだにも、(三)あからさまにも渡り給はず、あはれに心深く思ひ歎きて、(四)行ひをまめにし給ひつゝ、明し暮し給ふ。所々には、御文ばかりぞ奉り給ふ。かの(五)御息所は、齋宮の左衛門の司に入り給ひにければ、(六)いとゞいつくしき御淸まはりに託けて、聞えも通ひ給はず。(七)憂しと思ひしみにし世も、なべて厭はしくなり給ひて、(八)かゝる羈絆だに添はざらましかば願はしき樣にもなりなまし、と思すには、まづ(九)對の姫君の、さう〴〵しくて物し給ふらむ有樣ぞ、ふと思しやらるゝ。夜は、御帳の内に一人臥し給ふに、宿直の人々は、近う廻りて侍へど、傍さびしくて、(一〇)時しもあれと寢覺がちなるに、(一一)聲勝れたるかぎり擇び侍はせ給ふ念佛の曉がたなど、忍びがたし。深き秋のあはれまさりゆく風の音、



殿におはし著きても、露まどろまれ給はず、年頃の御有樣を思し出でつゝ、などて、終には(一)おのづから見直し給ひてむと、のどかに思ひて、等閑のすさびにつけても、つらしと覺えられ奉りけむ、(二)世を經て、疎く恥かしきものに思ひて過ぎはて給ひぬる、など悔しき事多く思し續けらるれどかひなし。(三)にばめる御衣奉れるも、夢の心地して、(四)我さきだたましかば、深くぞそめ給はましとおほすさへ、

源　(五)限あればうすずみ衣あさけれど涙ぞそでをふちとなしける

とて、念誦し給へる樣、いとゞなまめかしさ勝りて、經忍びやかに讀み給ひつゝ、(六)「法界三昧普賢大士」とうち宣へる、おこなひ馴れたる法師よりは(七)けなり。若君を見奉り給ふにも、(八)「何にしのぶの」と、いとゞ(九)露けけれど、かゝる形見さへ無からましかば、と思し慰む。(一〇)宮はしづみ入りて、そのまゝに起き上り給はず、あやふげに見え給ふを、また思し騷ぎて、御祈などせさせ給ふ。はかなく過ぎ行けば、(一一)御わざの急ぎなどせさせ給ふも、思しかけざりしことなれば、(一二)盡せずいみじ

(一)なぜ自然隔心のなくなる時あらんと油斷して、一寸した事につけても葵につらい思をさせしならん
(二)葵は生涯我に隔を置きて死に行きたり
(三)鼠色の喪服
(四)若し我先に死なば、葵は是より黑の濃き喪服を著るならん
(五)喪服には定制あれば我が妻の爲に著る衣は薄墨色なれど涙は袖に淵なす程也。ふち—淵、藤、喪服を藤衣といふ
(六)天台五佛頂悔の句といふ
(七)勝れり
(八)「結びおく形見の子だに無かりせば何に忍ぶの草をつまゝし」
(九)悲しけれど
(一〇)葵の母
(一一)法事の用意
(一二)悲しさ盡きず

どものあるを見る〳〵も、盡せず思し惑へど、かひなくて日頃になれば、如何はせむとて、鳥邊野に率て(一)奉るほど、いみじげなる事多かり。此方彼方の御送の人ども、寺々の念佛の僧など、そこら廣き野に所もなし。院をば更にも申さず、后の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも參りちがひて、(二)飽かずいみじき御とぶらひを聞え給ふ。大臣はえ立ちもあがり給はず。左大臣「かゝる齢の末に、若く盛の子におくれ奉りて、(三)もこよふ事」と恥ぢ泣き給ふを、許多の人悲しう見奉る。終夜いみじうのゝしりつる儀式なれど、いとはかなき御屍ばかりを御名殘にて、曉深くかへり給ふ。常の事なれど、(四)人一人か、數多しも見給はぬ事なればにや、類なく思しこがれたり。八月廿餘日の有明なれば、空の氣色もあはれ少からぬに、大臣のやみに暮れ惑ひ給へるさまを見給ふも、理にいみじければ、空のみながめられ給ひて、

源(五)のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲井のあはれなるかな

(一)送る

(二)殘念なる由の悔み

(三)這ひまはる

(四)源が人の死目にあひしは夕顔一人かそこら位にて

(五)葵を火葬したる烟は行方知れねども

給ひぬれば、(一)除目の夜なりけれど、(二)かくわりなき御さはりなりければ、皆事破れたるやうなり。のゝしり騒ぐ程に、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧たちも、(三)え請じあへ給はず。(四)今はさりともと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、(五)ものにぞあたり惑ふ。(六)所々の御とぶらひの使など、立ち込みたれど、(七)え聞えつかずゆすりみちて、いみじき御心惑ひども、いと怖ろしきまで見え給ふ。御物怪の度々(八)とりいれ奉りしをおぼして、御枕なども(九)さながら、二三日見奉り給へど、(一〇)やうやうかはり給ふ事どものあれば、限りと(一一)思しはつる程、誰もいといみじ。大將殿は、(一二)悲しきことに事を添へて、世の中をいと憂きものに(一三)思ししみぬれば、たゞならぬ御あたりの御とぶらひどもも、心憂しとのみぞなべて思さるゝ。院に(一四)思しなげき、弔ひ聞えさせ給ふ様、(一五)かへりておもだたしげなるを、(一六)嬉しきせも交りて、大臣は御涙のいとまなし。人の申すに隨ひて、(一七)厳しきことどもを、生きやかへり給ふと、さまざま殘ることなく、(一八)かつ損はれ給ふ事

(一)官吏の任免を行ふ
(二)のつゞきならぬ差支
(三)呼ぶのが間に合はぬ
(四)もうよもや直らぬ事はあるまじと油断せしに
(五)あわてゝそこらに突當る
(六)方々の見舞の使
(七)取次ぐ事も出來ず、どさくさして
(八)氣絶させたるを
(九)直さず其儘にして
(一〇)段々死相を現はす也
(一一)思ひ切る
(一二)悲に悲を重ねて
(一三)思ひ込みたれば
(一四)騒擾など
(一五)不幸によりて面目を施す位なるを
(一六)嬉しき點も交りて
(一七)大層なる祈禱
(一八)一方には死體の腐りゆくを見ながらも

しげなる人の、いたう弱り損はれて、あるかなきかの氣色にて臥し給へる樣、いとらうたげに苦しげなり。御髪の亂れたる筋もなく、はら〳〵とかゝれる枕の程、(一)あり難きまで見ゆれば、年頃何事を飽かぬ事ありて思ひつらむと、(二)あやしきまでうちまもられ給ふ。(三)源「院などに參りて、いと疾くまかでなむ。(四)かやうにて、覺束なからず見奉らば(五)嬉しかるべきを、宮のつとおはするに心なくやと、(六)つゝみて過しつるも苦しきを、なほやう〳〵心強く思しなして、(七)例の御座所にこそ。あまり若くもてなし給へば、(八)かたへはかくも物し給ふぞ」など聞えおき給ひて、いと淸げにうち裝束きて出で給ふを、常よりは目とゞめて、(九)見出して臥し給へり。秋の司召(一〇)あるべき定にて、大殿(一一)も參り給へば、君達(一二)もいたはり望み(一三)給ふ事どもありて、殿の御あたり離れ給はねば、皆ひきつゞき出で給ひぬ。

殿の内人少にしめやかなる程に、俄に(一四)例の御胸をせきあげて、いといたう惑ひ給ふ。内裏に御消息聞え給ふ程もなく、絶え入り給ひぬ。足を空にて誰も〳〵罷出

(一)珍しき程美しく
(二)源の心、年來は何を不足に思ひ居たのであらう
(三)じつと見とれて居る
(四)直に歸るぞ
(五)繁々逢はゞ
(六)母の居るに我が來るは無遠慮と遠慮して
(七)氣を張つて常の居間に移り給へ
(八)若々しく病氣に負けて居るから直らぬといふ氣味もあるのぢや
(九)葵が
(一〇)任官式
(一一)左大臣
(一二)葵の兄弟
(一三)功勞を言立にして昇官を望む
(一四)葵が

む。若君の御まみの美しさなどの、春宮にいみじう似奉り給へるを、(一)見奉り給ひても、まづ戀しう(二)思ひ出でられさせ給ふに、忍び難くて、參り給はむとて、(三)源「內裏などにもあまり久しく參り侍らねば、いぶせさに、今日なむうひだち(四)し侍るを、少し(五)氣近き程にて聞えさせばや。あまり覺束なき御心の隔かな」と、怨み聞え給へれば、「(六)實にたゞ偏に艶にのみあるべき中にもあらぬを、いたう衰へ給へりといひながら、物越(七)になどあるべきかは」とて、臥し給へる所に、御座近う參りたれば、(八)入りて物など聞え給ふ。御答時々聞え給ふも、なほいと弱げなり。されどむげに亡き人と思ひ聞えし御有樣を思し出づれば、(九)夢の心地して、(一〇)ゆゝしかりし程の事どもなど聞え給ふ序にも、(一一)かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引きかへし、つぶ〳〵と宣ひし事ども、思し出づるに心憂ければ、源「いさや、聞えまほしき事いと多かれど、まだいとたゆげに(一二)思したゝめればこそ」とて、(一三)「御湯參れ」などさへあつかひ聞え給ふを、いつ習ひ給ひけむと、人々哀がり聞ゆ。いとをか

(一) 源が
(二) 冷泉の事が
(三) 葵にいふ詞
(四) 初めての參內
(五) 近く寄りて話したい
(六) 侍女等の詞、夫婦なれば艶叙ばかりつくるべきに非ず
(七) 物を隔て〻對面し給ふべきに非ず
(八) 源が
(九) 今漸く生きて話するは
(一〇) 危篤なりし時分の事など
(一一) 弱り果てたる病人が彼に細かなる物語をしたるを思ひ出すと
(一二) 疲れ居る樣なれば見合せん
(一三) 湯を飲まぬかなど世話をやく

(一)本心の次第に離れゆく也
(二)生靈が葵に取付きたりし時の物語
(三)御息所へ無沙汰して
(四)御息所に逢ふのも、御息所の方で何となく面白からず思ふならんと
❾葵上逝去
(五)葵
(六)氣味惡く油斷がならぬと誰も思ひたれば源も出あるかず
(七)葵が
(八)葵が源に
(九)源が
(一〇)物が思ひ通りにゆきたる心持
(一一)葵が直りきらぬのを
(一二)あの位の大病故、急には直り切らぬならんと思ひて

り、御衣著かへなどし給ひて、試み給へど、なほ同じ樣にのみあれば、我身ながらだに疎ましう思さるゝに、まして人の言ひ思はむ事など、人に宣ふべき事ならねば、心ひとつに思し歎くに、いとゞ(一)御心がはりもまさり行く。大將殿は、心地少しのどめ給ひて、(二)あさましかりし程の問はず語も、心憂く思し出でられつゝ、いと(三)程經にけるも心苦しく、また(四)氣近くて見奉らむには、いかにぞやうたて覺ゆべきを、人の御爲いとほしう萬に思して、御文ばかりぞありける。いたう煩ひ給ひし人の、(五)御名殘ゆゝしう、(六)心ゆるびなげに、誰も思したれば、理にて御歩行もなし。(七)なほいと惱ましげにのみし給へば、例の樣にてもまだ(八)對面し給はず。若君のいとゆゝしきまで見え給ふ御有樣を、今からいと樣殊に(九)もてかしづき聞え給ふさま疎ならず、(一〇)ことあひたる心地して、大臣も嬉しういみじと思ひ聞え給へるに、(一一)たゞこの御心地怠りはて給はぬを、心もとなくおぼせど、(一二)さばかりいみじかりし名殘にこそはと思して、いかでかは、さのみは心をも惑はし給は

(一)源以下の人々
(二)よりましに移したる生靈死靈
(三)後産
(四)後産も無事にありたれば
(五)比叡山の天台座主
(六)此外ならば病人も大丈夫と源が思ふ
(七)興ありて珍らしき、赤子をいふ
(八)産後三日目五日目などの饗應
(九)赤子が、此子を夕霧といふ
(一〇)平産なりしよと妬ましく
(一一)生靈になりし時の心持
(一二)邪氣を拂ふ爲の護摩には芥子を焚く也とぞ
(一三)髮を洗ひ

く生れ給ひぬ。(一)嬉しと思す事限なきに、人にかりうつし(二)給へる御物怪どもの、妬がり惑ふけはひ、いと物さわがしうて、(三)後の事またいと心もとなし。言ふかぎりなき願ども立てさせ給ふけにや、(四)たひらかに事成りはてぬれば、(五)山の座主何くれとやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつゝ急ぎ罷出ぬ。多くの人の心を盡しつる日頃の名殘、少しうちやすみて、(六)今はさりともおぼす。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは興(七)あり、珍らしき御かしづきに皆人心ゆるべり。院をはじめ奉りて、親王達上達部殘るなき産養(八)ども、珍らかにいかめしきを、夜ごとに見のゝしる。(九)男にてさへおはすれば、その程の作法、賑はゝしくめでたし。

かの御息所は、かゝる御有樣を聞き給ひても、たゞならず。かねてはいと危く聞えしを、平か(一〇)にもはた、とうち思しけり。(一一)あやしう我にもあらぬ御心地を思し續くるに、御衣なども、たゞ(一二)芥子の香にしみかへりたり。怪しさに、(一三)御ゆするまゐ



(一)左樣の事にあらず
(二)我身の苦を休めて貰ひたきなり
(三)自分でも斯う來る積では無いが
(四)魂の飛ぶを見たる時衣の下前の褄を結べば魂本にかへるといふ俗說あり
(五)葵の樣子とかはれり
(六)今迄は言ひけなして居たるに
(七)氣味惡く
(八)御息所にまがひ無き樣子なるに
(九)源が
(一〇)葵の

も絶えざゝなれば、あひ見る程ありなむと思せ」と慰め給ふに、(葵)「いであらずや。(一)身の上のいと苦しきを、暫し休め給へと聞えむとてなむ。斯く參り來むとも更に(三)(二)思はぬを、物思ふ人の魂は、實にあくがるゝものになむありける」と、なつかしげに言ひて、

(葵)歎きわび空にみだるゝ我が魂を結びとゞめよしたがひのつま(四)

と宣ふ聲けはひ、その人にもあらず、(五)かはり給へり。いと怪しと思しめぐらすに、たゞ彼の御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づる事と、聞きにくゝ思して宣ひ消つを、(六)目に見す〳〵、世にはかゝる事こそはありけれと、疎ましう(七)なりぬ。あな心憂とおぼされて、(源)「斯く宣へど、誰とこそ知らね。たしかに宣へ」と宣へば、たゞそれなる御有樣に、(八)あさましとは尋常なり。人々近う參るも、かたはらいたう(九)思さる。少し御聲(一〇)もしづまり給へれば、ひまおはするにやとて、宮の御湯もて寄せ給へるに、かきおこされ給ひて、程な

臣も宮も少し退き給へり。加持の僧ども聲しづめて、法華經を讀みたる、いみじう尊し。御几帳の帷子引き上げて(一)見たてまつり給へば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥し給へる樣、餘所人だに見奉らむに心亂れぬべし。まして(二)惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいと花やかにて、御髪いと長うこちたき(三)を、引き結ひてうち添へたる(四)も、斯うてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手を執へて、源「あないみじ。心憂きめを見せ給ふかな」とて、(五)物もえ聞え給はず泣き給へば、(六)例はいと煩はしく恥かしげなる御まみを、いとたゆげに見上げて、(七)うちまもり聞え給ふに、涙のこぼるゝさまを見給ふは、いかゞ哀れの淺からむ。あまりいたく泣き給へば、(九)心苦しき親たちの(八)御事をおぼし、またかく(一〇)見給ふにつけて、口惜しう覺え給ふにやと思して、源「何事もいと(一一)斯うなおぼし入れそ。(一二)然りともけしうはおはせじ。(一三)如何なりとも必ず逢ふせあゝなれば、對面はありなむ。(一四)大臣宮なども、深き契ある中は、ゆきめぐりて

(一)源が葵を
(二)源の歎は道理
(三)うるさき程なるを
(四)衣に添へたる
(五)源が
(六)常ならば恥かしげに伏目にして居るのに
(七)源を見つめたるに
(八)源が
(九)源の心
(一〇)源を見るにつけて死別を殘念がるにや
(一一)其樣に心配するな
(一二)病の直らぬ事はあらじ
(一三)假令死するも、夫婦は二世の契なれば死後に再び逢ふべし
(一四)父母も緣深き中は生れ替り死替りても緣は盡きぬもの故

（一）御息所が
（二）恍惚として
（三）大病では無く
（四）葵上
㊇御息所の生靈現はる、夕霧誕生
（五）出産の時期ならずと油斷したるに
（六）もてあます
（七）祈り伏せられて
（八）仔細あらん
（九）病者に近き所へ源を
（一〇）危篤容態なれば遺言でもあるかと
（一一）父も母も

べかりしを、様々さはる事ありて、この秋入り給ふ。九月には、やがて野宮にうつろひ給ふべければ、再度の御禊のいそぎ、取り重ねてあるべきに、（一）唯あやしくほけ／＼しうて、（二）つく／＼と臥し惱み給ふを、宮人いみじき大事にて、御祈などさま／＼仕う奉る。（三）おどろ／＼しき樣にはあらず、そこはかとなく煩ひて、月日を過し給ふ。大將殿も、常にとぶらひ聞え給へど、（四）まさる方のいたう煩ひ給へば、御心の暇なげなり。

（五）まださるべき程にもあらずと、皆人もたゆみ給へるに、俄に御氣色ありて、惱み給へば、いとゞしき御祈の數を盡してせさせたまへれど、例の執念き御物怪ひとつ更に動かず。やむごとなき驗者ども、珍らかなりと（六）もてなやむ。流石にいみじう（七）調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるべ給へや。大將に聞ゆべき事あり」と宣ふ。「さればよ。（八）あるやうあらむ」とて、（九）近き御几帳のもとに入れ奉りたり。（一〇）むげに限の樣に物し給ふを、聞え置かまほしき事もおはするにやとて、（一一）大

は、(一)さもやあらむと思し知らるゝ事もあり。年頃、萬に(二)思ひ殘す事なく過しつれど、(三)斯うしも碎けぬを、(四)はかなき事の折に、人の思ひ消ち、無きものにもてなす樣なりし御禊の後、(五)ひとふしに憂しと思しうかれにし心、しづまり難う思さるゝ(六)けにや、少しもうちまどろみ給ふ夢には、(七)かの姫君とおぼしき人の、いと淸らにてある所に往きて、とかく(八)引きまさぐり、(九)現にも似ず、たけく嚴きひたぶる心いでて、打ちかなぐるなど見え給ふ事、度重りにけり。(一〇)あな心うや、(一一)實に身を捨ててや往にけむと、現心ならず覺え給ふ折々もあれば、(一二)然ならぬことだに、人の御爲には、よきさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、まして是は、(一三)いと能く言ひなしつべき便なりと思すに、(一四)いと名たゝしう、(一五)ひたすら世に亡くなりて後に恨殘すは尋常の事なり、(一六)それだに人の上にては、罪深うゆゝしきを、現の我身ながら、(一七)さる疎ましき事をいひつけらるゝ、宿世の憂き事、すべて(一八)つれなき人にいかで心もかけ聞えじ、と思しかへせど、(一九)思ふも物をなり。齋宮は、(二〇)去年內裏に入り給ふ

(一)生靈となりて葵を苦めて居るかも知れぬ
(二)爲さぬ心配もなく
(三)斯迄[illegible]悶せざりしに
(四)御禊の行列見物の時人に輕蔑されし以來
(五)一筋に
(六)故にや
(七)葵上
(八)なぶり
(九)正氣の時と違ひて猛烈なる心起りて
(一〇)御息所の心
(一一)魂が拔出したのか
(一二)御息所の心、無くてさへ他人のことといへば惡くいふ世なれば
(一三)葵の病は御息所の生靈の所爲なりと
(一四)噂されそうにて
(一五)死靈は常の事
(一六)他人に左樣の事あれば厭はしく思ふに
(一七)左樣に嫌な事が自分にありと言はるゝ
(一八)源氏
(一九)「思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」
(二〇)左衛門府

とあるを、例のことつけ(一)と見給ふものから、

御息所 袖ぬるゝこひぢ(二)とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞ憂き

山(三)の井の水も理に。

とぞある。御手はなほ許多の人の中に勝れたりかし、とうち見給ひつゝ、如何に(四)ぞやもある世かな、心も容貌もとり〴〵に、捨つべきもなく又思ひ定むべきもなきを、苦しうおぼさる。御返、いと暗うなりにたれど、

源(五) 袖のみ濡るゝやいかに。深からぬ御かごとになむ。

あさみにや(六)人はおりたつ我が方は身もそほづまで深きこひぢを

おぼろけにてや(七)、この御かへりを、みづから聞えさせぬ。

などあり。大殿には、御靈氣いたく起りて、いみじう煩ひ給ふ。この御生靈、故(八)父大臣の御靈などいふものありと聞き給ふにつけて、思しつゞくれば(九)、身一つの憂き歎よりほかに、人を惡かれなど思ふ心もなけれど、物思ふにあくがるなる魂

(一) 口實
(二) 此戀は結果がつまらぬとは知りながら、戀をして苦を求むる自業自得の自分がつらし、こひぢ－戀路、小泥
(三) 「悔しくぞ汲みそめてける淺ければ袖のみ濡るゝ山の井の水」
(四) 源の心、十分なものは無い世故
(五) 袖だけ濡るゝと仰あるか、其は薄情な御不足なり
(六) 袖のみ濡るゝと仰あるは下りたつ處の淺い故ならん、我はずぶ濡になるまで深くはまつて居る
(七) 此御返事を自身で申上げず、手紙を上げるはよく／＼の大病故と思召せ
(八) 御息所の亡父
(九) 御息所が

しう思し起してわたり給へり。(一)例ならぬ旅所なれば、(二)いたう忍び給ふ、心より外なるおこたりなど、(三)罪免されぬべく聞え續け給ひて、惱み給ふ人の御有樣も、(四)うれへ聞え給ふ。源「自らはさしも思ひ入れ侍らねど、(五)親達のいと事々しう思ひ惑はるゝが心苦しさに、かゝる程を見過さむとてなむ。(六)萬を思しのどめたる御心ならば、(七)いと嬉しうなむ」など語らひ聞え給ふ。常よりも心苦しげなる御氣色を、(八)理にあはれと見奉りたまふ。(九)うちとけぬ朝ぼらけに出で給ふ御樣のをかしき(一〇)にも、なほふり離れなむ事は思しかへさる。(一一)やむごとなき方に、いとゞ志添ひ給ふべき事も出で來にたれば、一つ方に思し靜まり給ひなむを、かやうに待ち聞えつゝあらむも、(一二)心のみ盡きぬべきこと、なかなか物思ひの驚かさるゝ心地し給ふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。

源日頃、少しおこたる(一三)樣なりつる心地の、俄にいといたう苦しげに侍るを、(一四)えひきよがでなむ。

(一)見舞に
(二)御息所の挨拶
(三)思の外の失禮
(四)葵上の病氣を心配して尋ねる
(五)自分は左迄心配せぬが
(六)大病の間だけ付いて居てやらんとて何處へも無沙汰する
(七)不行屆を勘辨して下さらば
(八)源の
(九)御息所が
(一〇)源の姿の美しきを見て
(一一)伊勢下りはやめる氣になる
(一二)御息所の心、葵に子まで出來たれば源も葵一人を守る事になるべきに、其源を當にして居るは氣の盡きる咄と思ふと、一種の警戒を與へらるゝ心持する處へ
(一三)快き方なりし病人が
(一四)出ぬけにくゝ

ざゝめれば、(一)恨の心も深からめ」と(二)さゞめきて、(三)物など問はせ給へど、さして聞えあつることもなし。物怪とても、(四)わざと深き御かたきと聞ゆるもなし。(五)過ぎにける御乳母だつ人、もしは(六)親の御方につけつゝ傳はりたるものの、弱目に出で來たるなど、(七)むね〳〵しからず亂れ顯るゝ。(八)唯つく〴〵と音をのみ泣きたまひて、折々は胸をせきあげつゝ、いみじう堪へ難げに惑ふわざをしたまへば、如何におはすべきにかと、ゆゝしう悲しう思しあわてたり。院よりも御訪ひまなく、御祈禱のことまで思しよらせ給ふさまの辱きにつけても、いとゞ惜しげなる(九)人の御身なり。世の中あまねく惜み聞ゆるを聞き給ふにも、(一〇)御息所はたゞならずおほさる。年頃は、(一一)いと斯くしもあらざりし御挑心を、はかなかりし所の車あらそひに、人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思しよらざりけり。

かゝる御物思のみだれに、(一二)御心地なほ例ならずのみ思さるれば、外にわたり給ひて、御修法などせさせ給ふ。大將殿聞き給ひて、如何なる御心地にかと、いとほ

(一)彼等が葵に對する
(二)葵方の人々が
(三)占卜にかけてもよく中らず
(四)是ぞといふ
(五)死したる
(六)祖先以來の物怪が
(七)重なるものでは無く
(八)葵の容態
(九)葵の
(一〇)六條は妬ましく思ふ
(一一)是程でも無かりし御息所の嫉妬心が車爭以後募りしを、葵方では氣づかず
㊆御息所病氣、己の生靈が葵上を惱ますを悟る
(一二)御息所が不加減なれば

なきにても、御覽じはてむや、淺からぬにはあらむ」と、聞えかゝづらひ給へば、定めかね給へる御心もや慰むと、(一)立ち出でたまへりし、御禊河の荒かりし瀬に、いとゞ萬いと憂く思し入られたり。

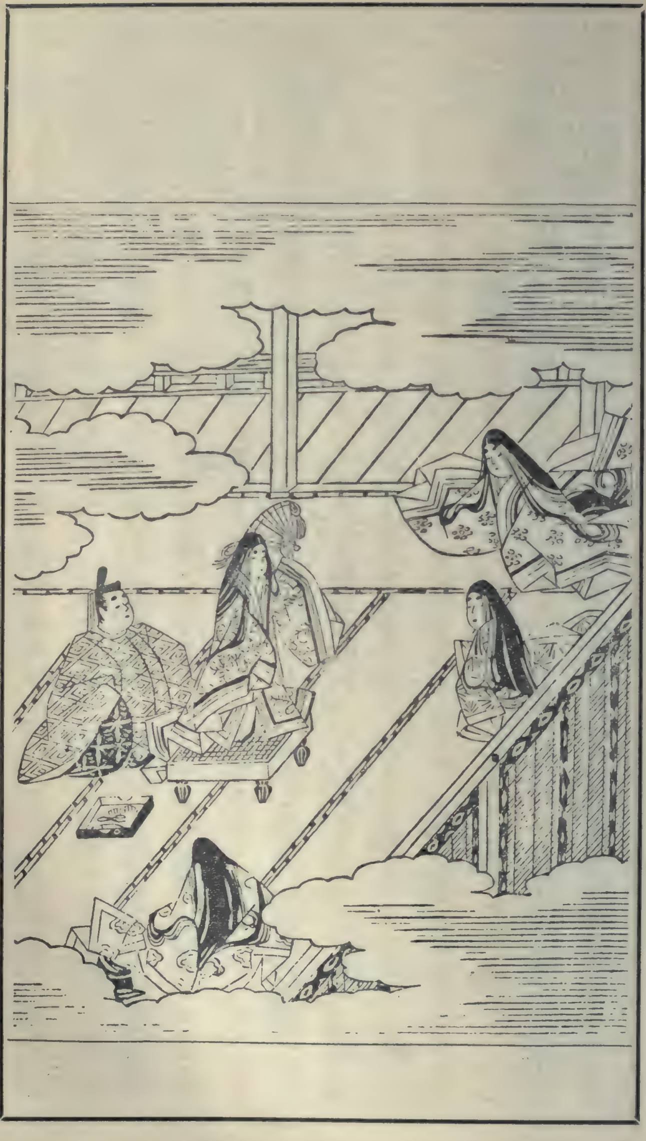
大殿には、御物怪めきていたく煩ひ給へば、誰も〳〵思し歎くに、(二)御歩行など便なき頃なれば、二條院にも時々ぞわたり給ふ。(三)さはいへど、やむごとなき方は、殊に思ひ聞え給へる人の、(四)珍しき事さへ添ひ給へる御惱なれば、心苦しう思し歎きて、御修法や何やなど、わが御方にて、多く行はせ給ふ。物怪、生靈などいふもの多く出で來て、(五)樣々の名のりする中に、(六)人にも更にうつらず、(七)唯みづからの御身につと添ひたる樣にて、(八)殊におどろ〳〵しう煩はし聞ゆる事もなけれど、また片時離るゝ折もなきもの一つあり。いみじき(九)驗者どもにも隨はず、執念き氣色、(一〇)おぼろげの物にあらずと見えたり。大將の君の(一一)御かよひ所、こゝかしこと思しあつるに、「(一二)この御息所、二條の君などばかりこそは、(一三)おしなべての樣には思したら

(一)見物に出た所があの騒ぎで
㊅ 葵上の病氣、つき物
(二)源は出あるきがし悪いので
(三)何といふても葵は源の重く思ふ人なる上
(四)懐胎
(五)我は誰々の靈なりと
(六)よりましといふ身代の人を病人の側に置きて祈れば、靈は大概病人を離れてよりましに移る也
(七)病人にじつと付きたる儘にて
(八)ひどく病人を苦めるでも無けれど
(九)祈禱僧
(一〇)大抵の物怪
(一一)通ひ先の女
(一二)六條と紫上
(一三)源が重く思ひ居る樣なれば

(一)源が女と同乘して
(二)人々の心
(三)齋院の行列に加はりし時の風采
(四)同乘の女は誰ならん、源と同乘する位なれば立派な女に違なしと
(五)面白くもなき歌の贈答故と物足らず源は思へど
(六)源内侍の樣に厚かましい人でも無ければ
(七)同乘の女あるに憚りて、一寸した返歌も氣安くは出來ぬ
㊄六條御息所の煩悶
(八)六條
(九)源を薄情な男と思ひて諦めては居れど
(一〇)伊勢に
(一一)人に聞かれても外聞惡き事と
(一二)京に留らんとすれば、人に輕蔑されるを平氣でも居られず
(一三)伊勢の海に釣するうきなれや心一つを定めかねつる」
(一四)故にや
(一五)ふらふらしたる
(一六)源は伊勢へ行くを以の外の事と反對もせず
(一七)不肖の我を嫌ふも尤なれど、つまらぬ奴として永く面倒見てくれるのが親切といふものぢやと抔とからんで來るので

と聞ゆ。(一)人と相乘りて、簾をだに上げ給はぬを、心やましう思ふ人多かり。(二)一日の(三)御ありさまの麗しかりしに、今日はうち亂れてありき給ふかし、誰ならむ、(四)乘り竝ぶ人けしうはあらじはやと、推量り聞ゆ。(五)挑しからぬかざし爭かなと、さうざうしく思せど、(六)かやうにいと面なからぬ程の人はた、(七)人あひ乘り給へるにつつまれて、はかなき御答も、心安く聞えむもまばゆしかし。

(八)御息所は、物を思し亂るゝ事、年頃よりも多く添ひにけり。(九)つらき方に思ひはて給へど、今はとてふり離れ(一〇)下り給ひなむは、いと心細かりぬべく、(一一)世の人ぎきも人わらへにならむ事とおぼす。(一二)さりとて立ちとまるべく思ほしなるには、斯くこよなき樣に、皆思ひくたすべかゝめるもやすからず。(一三)「釣する海士のうけなれや」と、起臥思しわづらふけにや、(一四)御心地も浮きたる(一五)やうに思されて、惱ましうし給ふ。(一六)大將殿には、下り給はむ事を、もて離れて、あるまじき事なども、妨げ聞え給はず、源「(一七)數ならぬ身を、見まうく思し捨てむも理なれど、今はなほいふかひ



（一）以下見物に出てからの事
（二）見物の車が
（三）一條に近衛府の馬場あり、其處の建物
（四）源の車を
（五）源の供人を
（六）爰に車を立て給はずや、退いて上げん
（七）我が車を彼の女車に
（八）此場所はどうして得られたかとそれが心憎い
（九）檜扇の端を折りて書付けたるならんと云ふ
（一〇）他人の花と詠めらるゝ源氏を戀して今日の祭を當に待ち居たるはつまらぬ事、源に同車の女あるを嫉める也
（一一）他人の注連をはりて占有したる源なれば、其內には入り難し
（一二）無遠慮に返歌す
（一三）誰にでも逢ふ君の様な女を相手にした自分は、何たる浮氣者であらう、あふひ—葵、逢ふ
（一四）葵は逢ふといふ名ばかりで當にはならぬのに、其を當にして居たのが悔しい、人だのめ—人に希望を懐かせる

しと思す。今日も（一）、所（二）もなく立ちこみにけり。馬場のおとゞ（三）のほどに、立て煩ひ（四）て、源「上達部の車ども多くて、物騒しげなるわたりかな」とやすらひ給ふに、よろしき女車の、いたう乘りこぼれたるより、扇をさし出でて、人（五）を招き寄せて、女（六）「こゝにやは立たせ給はぬ。所さり聞えむ」と聞えたり。如何なるすきものならむと思されて、所も實によきわたりなれば、引き寄せ（七）させ給ひて、源（八）「いかで得給へる所ぞと、ねたさになむ」と宣へば、よしある（九）扇のつまを折りて、

女（一〇）「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしのけふを待ちける注連の內には」（一一）とある手を思し出づれば、かの源內侍のすけなりけり。あさましう、古り難くも今めくかなと憎さに、はしたなう（一二）、

源（一三）かざしけるこゝろぞあだにおもほゆる八十氏人になべてあふひを

女はづかしと思ひ聞えたり。

源內（一四）くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

とて、御髪の常よりも清らに見ゆるを、かき撫で給ひて、源「久しうそぎ給はざン(一)めるを、今日はよき日ならむかし」とて、暦の博士召して、時問はせなどし給ふ程に、源「まづ女房出でね」とて、童の姿どものをかしげなるを御覧ず。いとらうたげなる髪どもの、末はなやかにそぎわたして、浮紋の表の袴にかゝれる程、け(二)ざやかに見ゆ。源「君の御髪は我そがむ」とて、源「うたて所狭う(三)もあるかな。如何(四)に生ひやらむとすらむ」とそぎ煩ひ給ふ。源「いと長き(五)人も、額髪は少し短くぞあンめるを、むけに(六)後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とてそぎはてて、千尋(七)と祝ひ聞え給ふを、少納言あはれに辱しと見奉る。

源 (八)はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆくすゑはわれのみぞ見む

と聞え給へば、

紫 千尋(九)ともいかでか知らむさだめなくみちひる鹽ののどけからぬに

と物に書きつけておはする様、らう〱じきものから、若うをかしきを、めでた

(一)髪の先をそぎ切る也
(二)くつきりと
(三)多過ぎる
(四)どれ程多くなる事やら
(五)髪の
(六)斯う少も後れ毛の無いのも趣がなからう
(七)髪を長かれと
(八)紫の行末は人の手にはかけじ、古は髪の美しきを海松に比したる也
(九)源の心が今の如く定まらぬ内は、行末の事は當にならぬ

(一)葵は見物せず
(二)噂する
(三)源の心
(四)貫目のある葵が
(五)無愛想なる點があるので
(六)自分は御息所につらく當る氣もなかりしならんが
(七)葵の氣風を受けて
(八)つらく思ひしならん
(九)源が御息所の許へ
(一〇)齋宮に定まれば先づ左衛門府に入るべきを、未だ六條に居る也
(一一)齋宮の居る所故家の内外に榊を立てゝ清め守る也
(一二)なぜ斯うだらう
(一三)葵も御息所も中よくして居ればよいに

四　源氏紫上と祭を見る

(一四)源が
(一五)紫を誘ふ爲
(一六)召使の童女を戯れて呼ぶ
(一七)我と共に來れ

祭の日、大殿(一)には物見給はず。大將の君、かの御車の所あらそひを、(二)まねび聞ゆる人ありければ、いといとほしう憂しと思して、(三)なほあたら重りかに(四)おはする人の、ものに情おくれて、(五)すぐ〳〵しき所つき給へるあまりに、(六)自らはさしも思さざりけめども、かゝるなからひは情かはすべきものとも思いたらぬ(七)御心おきてに從ひて、次々よからぬ人の爲させたるならむかし、御息所は、心ばせのいと恥かしく、よしありておはするものを、いかに思し(八)倦じにけむと、いとほしうて、參うで(九)給へりけれど、齋宮の、まだ(一〇)もとの宮におはしませば、(一一)榊のはばかりに託けて、心安くも對面し給はず。理とは思しながら、源「なぞやかく、(一二)互にそば〳〵しから(一三)でおはせよかし」と、うちつぶやかれ給ふ。

今日は、二條院に離れおはして、(一四)祭見に出で給ふ。西(一五)の對にわたり給ひて、惟光に車の事仰せたり。源「女房(一六)出で立つや」と宣ひて、姫君の、いと美しげにつくろひ立てておはするを、うち笑みて見奉り給ふ。源「君は(一七)いざ給へ。諸共に見むよ」

ぬや、又尼などの世を背きけるなども、仆れまどひつゝ、物見に出でたるも、例(一)は、あながちなりや、あな憎と見ゆるに、今日は理に、口うちすげみて、(二)髪きこめたる(三)あやしの者どもの、手(四)をつくりて、額にあてつゝ見奉りあげたるも、をこがましげなる賤夫まで、おのが顔のならむ様をば知らで笑み(五)さかえたり。何(六)とも見入れ給ふまじき、えせ(七)受領の女などさへ、心のかぎり盡したる車どもに乗り、様(八)ことさらび、心げさうしたるなむ、をかしき様々の見物なりける。ましてこゝかしこに立ち(九)忍びて通ひ給ふ所々は、人知れず、數ならぬ歎きまさるも多かりけり。式部卿宮(一〇)、棧敷にてぞ見給ひける。いとまばゆきまで(一一)、ねび行く(一二)人のかたちかな、神などは目もこそとめ給へと、ゆゝしく(一三)思したり。姫君(一四)は、年頃聞(一五)え渡り給ふ御心ばへの世の人に似ぬを、斜(一六)ならむにてだにあり、まして斯うしもいかで、と御心とまりけり。いと(一七)近くて見えむまでは思しよらず。若き(一八)人々は、聞きにくきまでめで聞えあへり。

(一)いつもならば來ずともよいにと思はれるのが
(二)齒のぬけたる貌
(三)垂髪を衣の中へ着込みたる、立働く時の形
(四)手を合せて
(五)源を見て
(六)源の方では何とも思はぬ
(七)ろくでもなき國守の娘
(八)わざと體裁つくり氣をもみたる樣子が
(九)源が忍び通ふ女等は源の勢盛なるを見て窃に身の數ならぬを嘆くも
(一〇)桃園、朝顔の父
(一一)式部卿の心
(一二)年と共に美しさ増り行く
(一三)怖しく
(一四)朝顔
(一五)我を氣長に口說く源の思召が、世の浮氣男には似ぬ
(一六)源の男振がよくなくても心意氣に動かさるべき筈なるに、況や斯迄美しき人が如何して其程にと心を動かしたり
(一七)并し肌身を許さんと迄は思はず
(一八)御供の女中達は

(一)女どもが
(二)源が見ぬ顏はすれども注目する也
(三)葵の車は源にも分りたれば、其前はわざと眞面目くさりて通る
(四)葵の車の前を敬意を表しつゝ通るを見て、御息所が嚴しく自分の輕度せられたるを感じたり
(五)僅に源を餘所に見しのみにて源に待遇されぬを見て我が附甲斐なきを悟れり
(六)源の
(七)出榮ある源の樣子を見ざりしならば却てよかりしにと
(八)源の光彩
(九)臨時の警固の武官たる者
(一〇)藏人にて近衞將監たる者
(一一)藏人の右近將監が
(一二)其他の源の隨身たり
(一三)源が
(一四)旅姿、市女笠に薄衣をはしよる

御心づくしなり。實に常よりも好み整へたる車どもの、(一)我も〳〵と乘りこぼれたる下簾の透間どもも、(二)さらぬ顏なれど、微笑みつゝ後目にとゞめ給ふもあり。(三)大殿のは著ければ、まめだちて渡り給ふ。御供の人々(四)うちかしこまり、心ばへありつゝ渡るを、押しけたれたる有樣こよなう思さる。

御息所(五)かげをのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとゞ知らるゝ

と、涙のこぼるゝを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる(六)御樣かたちの、いとゞしう、(七)出でばえを見ざらましかばと思さる。程々につけて、裝束人のありさま、いみじう整へたりと見ゆる中にも、上達部はいと殊なるを、(八)一所の御光には押消たれたゝめり。大將の(九)かりの隨身に、(一〇)殿上の尉などのすることは、常の事にもあらず、珍しき行幸などの折のわざなるを、今日は(一一)右近の藏人の尉仕う奉れり。(一二)さらぬ御隨身どもも、容貌姿まばゆく整へて、(一三)世にもてかしづかれ給へるさま、木草も靡かぬはあるまじげなり。(一四)壺裝束などいふ姿にて、女ばらの賤しから



はくて手觸れさせず。(一)何方にも若きものども、醉ひ過ぎ立ち騷ぎたる程のことは、えしたゝめあへず。おとな〳〵(二)しき御前の人々は、「かくな」(三)などいへど、え止めあへず。齋宮の(四)御母御息所(五)、物思し亂るゝ慰めにもやと、忍びて出で給へるなりけり。つれなしづくれど(六)、おのづから見知りぬ。葵上供人(七)「さばかりにては然な言はせそ。大將殿(八)をぞ豪家には思ひ聞ゆらむ」などいふを、その御方の人々も交れゝば(九)、(一〇)いとほしと見ながら、用意せむも煩はしければ、知らず顏をつくる。遂に御車どもも立て續けつれば、(一一)ひとだまひの奧におしやられて、物も見えず。(一二)心やましきをばさるものにて、斯るやつれを其と知られぬるが、いみじうねたき事限りなし。榻(一三)なども皆押し折られて、(一四)すゞろなる車の筒にうちかけたれば、又なう人わろく(一五)悔しう、何に來つらむと思ふにかひなし。物も見で歸らむとし給へど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ」(一六)といへば、さすがに(一七)つらき人の御前わたりの待たるゝも心弱しや。(一八)笹の隈にだにあらねばにや、(一九)つれなく過ぎ給ふにつけても、(二〇)なか〳〵

(一)雙方とも若き者の醉ひたる上の爭なれば御しきれず
(二)葵方の年長の從者等
(三)其樣にするな
(四)此忍び車は
(五)六條御息所
(六)知らぬ顏はして居れど
(七)六條御息所位ならば
(八)源を笠に着て威張るなもん
(九)御息所の方に源方の人も交り居たる也
(一〇)其人々御息所を氣の毒には思へど、手出しするも面倒なれば
(一一)御息所の車は葵の從者の車の奧に押遣られ
(一二)六條の心、差當りての不快は勿論、微行を知られたるが殘念
(一三)車の轅を載せる臺
(一四)有合せたる車の筒に轅をもたせて車を立てたれば、筒は車輪の心木
(一五)見つともなく
(一六)行列が來た
(一七)我につらき源の我前を通るが待たるゝも
(一八)「笹の隈檜の隈川に駒とめて暫し水飼へ影をだに見ん」
(一九)源が
(二〇)御息所が

いみじき見物なり。(一)大殿には、かやうの御歩行もをさ〳〵し給はぬに、御心地さへ惱ましければ、(二)思しかけざりけるを、若き人々、女房「いでや、(三)己がどち引き忍びて見侍らむこそ榮なかるべけれ。(四)おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山賤さへ見奉らむとすなれば、遠き國々より、妻子を引き具しつゝも參うで來なるを、(五)御覽ぜぬは、いとあまりにも侍るかな」といふを、(六)大宮聞しめして、大宮「(七)御心地もよろしきひまなり。侍ふ人々も(八)さう〴〵しげなめり」とて、俄に(九)めぐらし仰せ給うて見給ふ。日たけ行きて、儀式もわざとならぬ樣にて出で給へり。隙もなう(一〇)立ちわたりたるに、(一一)裝ほしう引き續きて立ちわづらふ。よき女房車多くて、(一二)雜々の人なき隙を思ひ定めて、(一三)皆さしのけさする中に、(一四)網代の少しなれたるが、(一五)下簾のさまなどよしばめるに、(一六)いたう引き入りてほのかなる袖口、裳の裾汗衫など、物の色いと淸らにて、殊更に窶れたるけはひ著く見ゆる車二つあり。「(一七)これは更に、さやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と、(一八)口ご

(一)葵上は見物が嫌なる上
(二)祭見に行かんとは
(三)我々ばかりで小さくなつて見て居てはつまらぬ
(四)無關係の人でも
(五)連れ添ふあなたが
(六)葵の母
(七)葵の
(八)行かねば不足らしい
(九)觸れまはして
(一〇)見物の車が立續きたる中で
(一一)葵の車が立派に續いた儘でまごつく
(一二)雜人の居ぬ處を擇びて
(一三)前から居たる者を追ひ拂ふ中に
(一四)少し古くなりたる網代車
(一五)簾の下に垂るゝ布
(一六)出衣とて簾の外に出したる袖口裳裾なども忍びたる爲僅ばかり出したる也
(一七)其車の從者の詞
(一八)鼻息が荒くて

ればにやあらむ、深うしも怨じ聞え給はず。（一）心苦しきさまの御心地に悩み給ひて、物心ぼそげに思ひたり。（二）珍らしう哀と思ひ聞え給ひて、嬉しき物から、誰も〳〵（三）ゆゝしうおぼして、樣々の御つゝしみせさせ奉り給ふ。かやうなる程は、いとど（四）御心の暇なくて、思し怠るとはなけれど、（五）とだえ多かるべし。

その頃、（六）齋院も下り居給ひて、（七）后腹の女三の宮居給ひぬ。（八）帝、后、いとことに思ひ聞え給へる宮なれば、（九）筋ことになり給ふを、いと苦しう思したれど、（一〇）他宮たちのさるべきおはせず、儀式など、常の神事なれど、厳しうのゝしる。（一一）祭のほど、限ある公事（一二）に添ふこと多く、見所こよなし。（一三）人がらと見えたり。（一四）御禊の日、上達部など數定まりて仕う奉り給ふわざなれど、（一五）おぼえことに、容貌あるかぎり、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍まで皆整へたり。とりわきたる宣旨にて、大將の君も仕う奉り給ふ。かねてより、（一六）物見車心づかひしけり。（一七）一條の大路、（一八）所なくむくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にし盡したるしつらひ、（一九）人の袖口さへ

（一）懐胎
（二）源が
（三）産の時には生靈死靈杯の祟あるものなれば其を怖がりて
（四）源の
（五）方々の女への無沙汰
㊂賀茂祭、旗上の従者六條御息所の車を毀つ
（六）賀茂神社に仕ふる内親王
（七）弘徽殿腹第三の内王新任
（八）朱雀も弘徽殿も殊寵の皇女故
（九）齋院といふ特別の身分になりたるを
（一〇）他に適當の人なく
（一一）賀茂祭、四月中の酉の日
（一二）付加への儀式
（一三）是も齋院の人物による事と
（一四）祭の前齋院身を潔めて紫野の野宮に入る、御禊は身を潔むる式
（一五）特に人を撰べる也
（一六）見物の爲路の兩側に車を立つる也
（一七）例年よりは氣を張りたる也
（一八）うるさき迄
（一九）簾外に出す女の袖口

(一)人に恥かしい思をさせず
(二)どの女をも穏かに扱ひて
(三)大それた藤壺との關係が桐壺に知れたらば何と仰せられるならんと
(四)御息所の名譽の爲にも自分の爲にも
(五)父帝の仰によりて一層御息所を重んじはすれど、表立ちては別に構ひもせず
(六)御息所は源より八つの姉なり
(七)源が其氣を迎へる振して桐壺も知り世人普く知れるにも拘らず、情の深からぬを御息所が嘆く
(八)桐壺帝の弟なる桃園式部卿宮の娘、此姫にも源曾て文をつけたる也
(九)人の様に浮氣はせじ
(一〇)源の一寸した文の
(一一)氣まづく恥かゝす様にはあへしらはぬを
(一二)人に勝れたりと
(一三)葵上
(一四)源の落着かぬ心
(一五)浮氣を大びらにするので言ふ張合もないのか

も實にと思ひ知らるれば、畏りて侍ひ給ふ。院「(一)人のため恥ぢがましき事なく、(二)いづれをもなだらかにもてなして、女の恨な負ひそ」と宣はするにも、(三)けしからぬ心のおほけなさを聞しめしつけたらむ時と、怖しければ、畏まりて罷出給ひぬ。又斯く院にも聞しめし宣はするに、(四)人の御名も我が爲も、好がましういとほしきに、(五)いとゞやむごとなく、心苦しき筋には思ひ聞え給へど、まだ顯はれては、わざともてなし聞え給はず。(六)女も、似げなき御年の程を恥かしう思して、心とけ給はぬ氣色なれば、(七)それに隨ひたる様にもてなして、院に聞しめし入れ、世の中の人も知らぬはなくなりにたるを、深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し歎きけり。かゝる事を聞き給ふにも、(八)朝顔の姫君は、(九)いかで人に似じと深う思せば、(一〇)はかなき様なりし御返りなどもをさ／＼なし。さりとて(一一)人にくゝ、はしたなくはもてなし給はぬ御氣色を、君もなほ(一二)殊なりと思しわたる。(一三)大殿には、かくのみ定なき御心を、心づきなしと思せど、(一五)あまりつゝまぬ御氣色のいふかひなけ

(一)弘徽殿は不快に思ふにや、弘徽殿皇太后になれる也
(二)勝者は競爭者なくて
(三)桐壺が「る程に
(四)世間の評判の種になる
(五)譲位後の生活が却て
(六)冷泉
(七)冷泉の
(八)桐壺が
(九)源大將に昇任せし也
(一〇)源が
㊀秋好齋宮　六條御息所共に伊勢に下らんとす
(一一)秋好と名づく
(一二)伊勢神宮に仕ふる内親王、帝の一代毎にかはる定例
(一三)御息所の心、源も賴みにならぬ故、幼き娘の世話に托して伊勢へ行かんかと
(一四)桐壺の源に對する小言、御息所は前東宮の寵姫なりしに、源が之を疎略に扱ふはけしからず
(一五)我は我子と等しく思ふ故
(一六)氣まぐれの女狂ひは批難を受ける種

て間なく、たゞ人のやうにて添ひおはしますを、今后(一)は心やましうおぼすにや、内裏にのみ侍ひ給へば、立ち(二)ならぶ人なう心やすげなり。(三)折節に隨ひては、御遊などを、好ましう、(四)世の響くばかりせさせ給ひつゝ(五)今の御有樣しもめでたし。たゞ春宮(六)をぞ、いと戀しう思ひ聞え給ふ。(七)御後見のなきを、(八)後めたう思ひ聞えて、大將(九)の君によろづ聞えつけ給ふも、(一〇)かたはらいたきものから、嬉しとおぼす。まことや、かの六條の御息所の御腹の、前坊の姫君、(一一)齋宮(一二)に居給ひにしかば、(一三)大將の御心ばへもいと賴もしげなきを、かく幼き御有樣の後めたさにことづけて下りやしなましと、かねてより思しけり。院にも斯ることなど聞し召して、故宮(一四)のいとやむごとなくおぼし、時めかし給ひしものを、輕々しうおしなべたる樣にもてなすなるが、いとほしき事。齋宮をも、(一五)この御子達の列になむ思へば、何方につけても、疎ならざらむこそよからめ。(一六)心のすさびに任せて、斯くすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべき事なり」など、御氣色のあしければ、我が御心地に

葵(あふひ)

梗槪

【一】桐壺帝讓位、朱雀帝即位。【二】六條御息所の娘秋好齋宮になる。女御息所共に伊勢に下らんとす。葵上懷胎。【三】賀茂祭。見物の群集の中にて、葵上の從者等六條御息所の車を毀つ。(車爭ひ)源氏御息所を見舞ふ。【四】源氏紫上と祭を見る。源內侍に戲る。【五】六條御息所の源氏に對する煩悶。【六】葵上の病氣。誰の靈とも知れぬつき物。【七】六條御息所の病氣。源氏の見舞。御息所自ら、葵上を惱ます者は己の生靈なるを悟る。秋好齋宮內裏に移る。【八】御息所の生靈現はれて源氏と語る。夕霧誕生。御息所と源氏との疎隔。【九】源氏と葵上との最後の對面。葵上の俄なる逝去。葬式。【十】源氏の悲嘆。六條御息所の弔。互の感情。【十一】頭中將源氏の籠居を訪ふ。【十二】源氏朝顏と文贈答。【十三】源氏參內。老いたる左大臣の悲痛。【十四】源氏二條院に移る。紫上と婚す。三つ目の餠。右大臣、朧月夜を源氏に嫁せんとす。弘徽殿皇后の反對。【十五】新年に源氏左大臣邸を訪ふ。新なる悲。

【一】桐壺帝讓位

(一)世(よ)の中(なか)かはりて後(のち)、(二)よろづ物(もの)うくおぼされ、御身(おんみ)のやむごとなさも添(そ)ふにやかろがろしき御忍歩行(おんしのびありき)も(三)つゝましうて、(四)こゝもかしこも、覺束(おぼつか)なさのなげきを重(かさ)ね給ふ報(むくい)にや、なほ我(われ)につれなき(五)人の御心(みこゝろ)を、盡(つ)きせずのみ思(おぼ)しなげく。(六)今(いま)はまし

(一)桐壺位を朱雀に讓りて後
(二)源が
(三)しにくゝ
(四)方々の女に無沙汰して恨まるゝ報にや
(五)藤壺
(六)桐壺禪位の後は常に藤壺と同居せらるゝを

(一)帶を扇に言ひかへたるを咎めたる也
(二)譯を知らぬ
(三)弘徽殿にて逢ひし人の見ゆるかと尋ねあぐみたり「梓弓いるさの山」は今日此處にて弓の會ありし故にいへる也
(四)斯く惑ふは何故ぞ
(五)尋ね惑ふは君の情の深からねばなり、深くば惑はずして直に尋ね當つべき筈
(六)朧月夜に相違なし
(七)返歌は解しけれども奥床しさを缺けりと源の心に評せる也

なして、寄り居給へり。女房「(一)怪しうも樣かへたる高麗人かな」と答ふるは、(二)心知らぬにやあらむ。答はせで唯時々うち歎くけはひする方に倚りかゝりて、几帳ごしに手をとらへて、

源「(三)あづさ弓いるさの山にまどふかなほのみし月のかげや見ゆると

(四)何故か」と、推しあてに宣ふを、え忍ばぬなるべし。

女「(五)心いるかたならませばゆみはりの月なきそらにまよはましやは

といふ聲(六)たゞそれなり。(七)いと嬉しきものから。



(一)寢殿の角
(二)女どもが廂の間まで出居たる也
(三)簾中より女の袖褄などを出して女房の出居るを示すは此頃の風也
(四)源の心に、藤壺ならば如此はせじと
(五)困りました
(六)簾の中へもぐり込む也
(七)縁者にたよるは卑者のする事
(八)室内を薫ずる爲の炷物
(九)衣ずれの音
(一〇)奧床しき所は少く
(一一)弘徽殿の細殿にて逢ひし女は
(一二)催馬樂の「石川の高麗人に帯を取られて辛き悔する」を謡ひかへたる也
(一三)ゆつたりしたる

三の宮のおはします、東の戸口におはして、寄り居給へり。藤はこなたのつま(一)に當りてあれば、御格子ども上げわたして、(二)人々出で居たり。(三)袖口など、蹈歌のをり覺えて、殊更めきもて出でたるを、相應はしからずと、まづ(四)藤壺わたり思し出でらる。源「惱ましきに、いといたう強ひられて、(五)わびにて侍り。畏けれど、この御前にこそは、蔭にも隱させ給はめ」とて、妻戸の(六)御簾を引き著給へば、女房「あな煩はし。(七)よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこち侍るなれ」と、いふ氣色を見給ふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにもあらず。あてにをかしきけはひ著し。(八)そらだきもの、いとけぶたく薫りて、(九)衣のおとなひいと花やかにうち振舞ひなして、(一〇)心にくゝ奧まりたるけはひは立ち後れ、今めかしき事を好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見給ふとて、この戸口は占め給へるなるべし。さしもあるまじき事なれど、さすがにをかしう思されて、(一一)いづれならむと胸うち潰れて、源「(一二)扇を取られて、辛きめを見る」と、(一三)うちおほどけたる聲に言ひ

なばなともてなし給ふ殿の様にて、何事も今めかしうもてなし給へり。源氏の君にも、一日内裏にて御對面のついでに聞え(一)給ひしかど、おはせねば、口惜しう物の榮なしとおぼして、御子の四位の少將を奉り(二)たまふ。

右大臣(三)わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

(四)内裏におはする程にて、上に奏し給ふ。帝「したり顔なりや」と笑はせ給ひて、帝「わ(五)ざとあめるを、早うものせよかし。女御子達なども、生ひ出づる所なれば、なべ(六)ての様には思ふまじきを」など宣はす。御裝など引きつくろひ給ひて、いたう暮るゝ程に、(七)待たれてぞ渡り給ふ。櫻の唐の綺(八)の御直衣、蒲萄染の下襲、裾いと長く引きて、皆人は袍衣なるに、あざれたるおほぎみ姿(九)のなまめきたるにて、いつ(一〇)かれ入り給へる御樣、げにいと殊なり。花の匂もけおされて、なかなかことざま(一一)しになむ。遊などいとおもしろうし給ひて、夜少し更け行くほどに、源氏の君、いたう醉ひ惱める樣にもてなし給ひて、まぎれ立ち給ひぬ。寢殿に女一の宮、女

(一)右大臣が源を招待せしかど不参なりしかば
(二)御迎に
(三)藤の殊更見事なればこそ御招待も申上げたる也、是非御出あれかし
(四)源が
(五)わざ〳〵の招なれば早く行け
(六)娘を源に見せほのめかす下心もありての招待ならん
(七)右大臣邸へ
(八)綾
(九)皇子らしき風姿
(一〇)大事にされて
(一一)興を殺ぐ種

(一)調へ行ふ事も侍らず。たゞ公事に、(二)そしうなる物の師どもを、こゝかしこに尋ねて侍りしなり。萬の事よりは、(三)柳花苑なむ、誠に後代の例ともなりぬべく見給へしに、(四)ましてさかゆく春に立ち出でさせ給へらましかば、世の面目にや侍らまし」と聞え給ふ。(五)辨、中將など參りあひて、勾欄に背中おしつゝ、とり〴〵に物の音ども調べ合せて遊び給ふ、いとおもしろし。

(六)かの有明の君は、(七)はかなかりし夢を思し出でて、いと物歎かしうながめ給ふ。(八)春宮には、四月ばかりと思し定めたれば、(九)いとわりなう思し亂れたるを、(一〇)男君も、(一一)尋ね給はむに跡はかなくはあらねど、(一二)いづれとも知らで、殊に免し給はぬあたりに、かゝづらはむも、人わろく思ひ煩ひ給ふに、三月の廿日あまり、(一三)右大殿の弓の結に、上達部、親王達多くつどへ給ひて、やがて藤の花の宴し給ふ。花盛りは過ぎにたるを、(一四)「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、(一五)後れて咲く櫻二木ぞいとおもしろき。新しう造り給へる殿を、(一六)宮達の御裳著の日、磨きしつらはれたり。(一七)は

(一)別に修理もせぬ
(二)未詳
(三)頭中將の舞ひたる
(四)まして左大臣が舞ひたらば
(五)葵の兄弟

四　右大臣邸の藤の宴、源氏再び朧月夜に會ふ

(六)朧月夜
(七)源との邂逅
(八)朧月夜の東宮へ宮仕に上るは四月頃と父右大臣が定めたれば
(九)朧が
(一〇)源氏
(一一)尋ねれば尋ねる便はあれど
(一二)相手も分らずに父母の承諾もなき所へ彼是便りするのも外聞惡く
(一三)弓術の勝負會の終に
(一四)「見る人も無き山里の櫻花外の散りなん後ぞ咲かまし」
(一五)花が
(一六)弘徽殿の皇子等、源の異腹の姉妹、裳著の祝は前にありし也
(一七)派手な家風で

大殿にも久しうなりにけるとおぼせど、若君（二）も心苦しければ、こしらへむ（三）と思して、二條院（一）へおはしぬ。見るまゝに、いと美しげに生ひなりて、愛敬づき、らうらうしき心ばへいと殊なり。飽かぬ所なう我が御心のまゝに教へなさむ、と思すに叶ひぬべし。（四）男の御教なれば、（五）少し人馴れたる事やまじらむ、と思ふこそうしろめたけれ。日ごろの御物語、御琴など教へ暮して（六）出で給ふを、（七）例のと口惜しう思せど、今はいとよう習はされて、わりなくは慕ひまつはさず。大殿には、例の（八）ふとも對面し給はず。（九）徒然とよろづ思しめぐらされて、箏の御琴まさぐりて、（一〇）「やはらかにぬる夜はなくて」と謠ひ給ふ。大臣渡り給ひて、一日の興ありし事聞え給ふ。左大臣「（一一）こゝらの齡にて、明王の御代、四代をなむ見侍りぬれど、この度のやうに、ふみ（一二）どもきやうさくに、舞樂ものの音ども調ほりて、齡延ぶることなむ侍らざりつる。道々の物の上手ども多かる頃ほひ、（一三）委しう知しめし調へさせ給へるけ（一四）なり。（一五）翁もほと〳〵舞ひ出でぬべき心地なむし侍りし」と聞え給へば、源「ことに

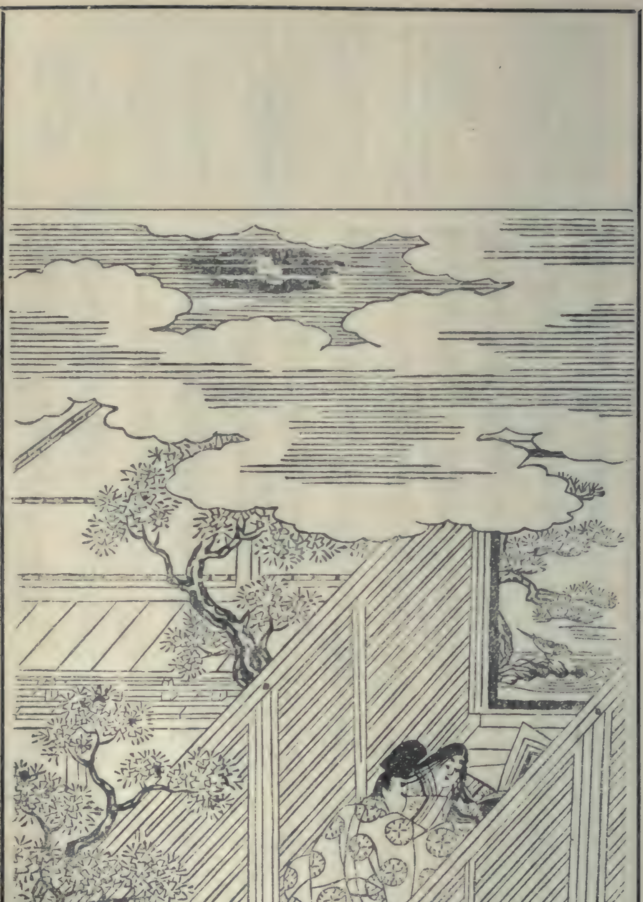
目　源氏左大臣邸に行く
（一）行かずして
（二）紫上
（三）慰めん
（四）源の心
（五）人に馴々しすぎる
（六）葵上方へ
（七）又御出かけなさるよと紫が
（八）葵が源に中々出逢はぬ也
（九）源が
（一〇）催馬樂「貫河のやはら手枕柔かに寢る夜はなくて親さくる妻」
（一一）自分老齡に及びて
（一二）詩が秀逸に、きやうさくは警策
（一三）源が
（一四）故なり
（一五）私も

ちて侍りつる車ども罷り出づる。(一)御かたがたの里人侍りつる中に、(二)四位少將、右中辨など急ぎ出でて、送りし侍りつるや、弘徽殿の御退出ならむと見給ひつる。けしうはあらぬけはひども著くて、車三つばかり侍りつ」と聞ゆるにも、胸うちつぶれ給ふ。(三)如何にしていづれと知らむ、(四)父大臣など聞きて事々しうもてなされむも、いかにぞや、まだ人のありさま能く見定めぬ程は、煩はしかるべし、さりとて知らであらむはた、いと口惜しかるべければ、如何にせまし、と思し煩ひて、つくづくと眺め臥し給へり。(五)姫君いかに徒然ならむ、(六)日頃になれば、屈してやあらむと、らうたく思しやる。かのしるしの扇は、(七)櫻の三重がさねにて、濃きかたに霞める月を畫きて、水にうつしたる心ばへ、(八)目馴れたれど、ゆゑなつかしうもて(九)馴らしたり。「草の原をば」といひし樣のみ心にかゝり給へば、

源　(一〇)世に知らぬ心地こそすれありあけの月のゆくへを空にまがへて

と書きつけ給ひて、置き給へり。

(一)貴顯方の家族
(二)朧月夜の兄弟
(三)源の心
(四)右大臣に朧月夜との關係を聞付けられて聟の待遇をされるのも、女の樣子の分らぬ内は面倒ならん
(五)源の心
(六)幾日も歸らぬ故
(七)櫻襲の兩面を薄樣を三重にして包みたるもの
(八)珍らしからねど
(九)持ち馴し
(一〇)有明の月を空に見失ひたる如く女の行方の覺束なさに、曾て經驗せぬ心配をする事よ



る人の様かな、女御の御おとうと(一)たちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは、五六の君ならむかし、帥の宮の北の方(二)、頭中將のすさめぬ(三)四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなか(四)それならましかば、今少しをかしからまし、六は春宮に奉らむと志し給へるを、いとほしう(五)もあるべいかな、煩はしう(六)尋ねむ程もまぎらはし、さて絶えなむ(七)とは思はぬ氣色なりつるを、如何なれば、言通はすべき樣(八)を教へずなりぬらむなど、よろづに思ふも心のとまるなるべし。斯樣なるにつけても、まづかのわたり(九)の有様の、こよなう奥まりたるはやと、有難う思ひくらべられ給ふ。

その日は後宴(一〇)の事ありて、紛れ暮し給ひつ。箏の琴仕う奉り給ふ。昨日の事よりも、なまめかしうおもしろし。藤壺は、曉に參う上り給ひにけり。かの有明出(一一)でやしぬらむと、心(一二)もそらにて、思ひ至らぬ隈なき良清惟光をつけて、窺はせ給ひければ、御前(一三)より罷出給ひけるほどに、良清「たゞ今北(一四)の陣より、かねて隠れ立

(一)妹等
(二)四の君の姉、弘徽殿女御の妹
(三)愛せぬ
(四)右二人の中ならば却て面白からん
(五)六君ならば、親の志が無になりて氣の毒ならん
(六)どの人かといふ事を
(七)女も是切りにせんとも思はぬ様子なりしに
(八)便りする方法
(九)隱密なるべし
(一〇)花宴の翌日の宴會
(一一)觀櫻會終りて見物の參り居たる者共退散する時ならば、朧月夜も退出するならんと
(一二)源が氣が氣でなく
(一三)源が
(一四)內裏の北の正門

(一)手強く抵抗する事も出來ぬならん
(二)源が
(三)何の樣にして便りはすべきぞ
(四)是切りでやめんとはよもや君も思ふまじ
(五)若し名乘らずば、我此儘死にても尋ねずして止むべき御了簡か
(六)御尤なり、今のは言損ひなり
(七)若し君を誰と穿鑿などして居ば其内に故障が起りて逢はれぬ樣になるを恐るゝのみ君の名を問ひたるは他意あるに非ず
(八)君さへ厭はぬならば此後晴れて逢はん
(九)名乘らぬは我を欺くのか
(一〇)女御の處へ
(一一)目さめたる女等
(一二)源が曉に來たるを見て
(一三)隱れ遊びに御精の出る事ぢや
(一四)源が桐壺に入りて
(一五)源の心

とは口惜しきに、女も若うたをやぎて、(一)強き心もえ知らぬなるべし。らうたしと見給ふに、程なく明け行けば、(二)心あわたゞし。女はまして、さまぐ\に思ひ亂れたる氣色なり。源「なほ名のりし給へ。(三)いかでか聞ゆべき、(四)かうて止みなむとは、さりともおぼされじ」など宣へば、

女 (五)うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

といふ樣、艶になまめきたり。源「(六)理や。聞えたがへたる文字かな」とて、

源「(七)いづれぞと露のやどりをわかむまにこざさが原に風もこそふけ

(八)煩はしう思すことならずば、何かつゝまむ。若し(九)すかい給ふか」とも、え言ひあへず、人々起きさわぎ、(一〇)上の御局に參りちがふ氣色ども繁くまよへば、いとわりなくて、扇ばかりを、しるしに取り替へて出で給ひぬ。桐壺には、人々多く侍ひて、(一一)驚きたるもあれば、(一二)かゝるを、(一三)「さもたゆみなき御忍歩行かな」とつきじろひつゝ、空寢をぞしあへる。(一四)入り給ひて臥し給へれど、寢入られず。(一五)をかしかりつ

きたり。女御(一)は、上の御局(二)に、やがて(三)参う上り給ひにければ、人少なるけはひなり。奥の樞戸もあきて、人音もせず。(四)かやうにて世の中の過失はするぞかしと思ひて、やをら上りてのぞき給ふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる聲の、なべての人とは聞えぬ、女「朧月夜(五)に似るものぞなき」と、うち誦して、此方ざまに來るものか。いと嬉しくて、ふと袖をとらへ給ふ。女怖ろし(六)と思へる氣色にて、女「あなむくつけ(七)。こは誰ぞ」と宣へど、源「何かうとましき(八)」とて、

源「深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬちぎりとぞ思ふ(九)」

とて、やをら抱きおろして(一〇)、戸は押したてつ。あさましきに呆れたるさま、いと懐しうをかしげなり。わなゝく〱、女「こゝに人の(一一)」と宣へど、源「まろは、皆人に許されたれば、召寄せたりとも(一二)、なでふことかあらむ。唯忍びてこそ」と宣ふ聲に、この君なりけりと聞き定めて、いさゝか慰めけり(一三)。わびしと思へるものから、情なく(一四)こは〲しうは見えじと思へり。醉ひ(一五)心地や例ならざりけむ、ゆるさむこ(一六)

(一)弘徽殿女御
(二)清涼殿内に在り
(三)寝すみて此儘
(四)源の心、物の間違は此様な事から起るのだや
(五)「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞ無き」
(六)弘徽殿の妹、朧月夜と名づく
(七)氣味の悪い
(八)何も嫌な事はない
(九)君も我と斉しく朧月夜の趣を解せるは、前世の因縁ならん
(一〇)抱きすゑて
(一一)人を呼ぶ也
(一二)人を呼んでも何にもならぬ
(一三)源と知りては
(一四)無愛想には思はれたくない
(一五)源が一寸機嫌でありしか
(一六)此儘に過すのも

めも見えず。ふみ(一)など講ずるにも、源氏の君の御(二)をば講師もえよみやらず(三)、句ごとに誦しのゝしる。博士どもの心にもいみじう思へり。かうやうの折にも、まづ(四)この君を光にし給へれば、帝もいかでか疎に思されむ。中宮(五)、御目のとまるにつけて、春宮の女御の、あながちに、憎み(六)給ふらむもあやしう、わがかう(七)思ふも心うし、とぞ自ら思しかへされける。

藤壺 (八)大かたに花のすがたを見ましかばつゆもこゝろのおかれましやは

御心の中なりけむ事、いかで漏りにけむ。夜いたう更けてなむ事果てける。(九)上達部おの〳〵あがれ(一〇)、后、春宮還らせ給ひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさしいでてをかしきを、源氏の君ゑひ心地に、見過し難く覚え給ひければ、上の人々(一一)もうち休みて、かやうに思ひかけぬ程に、もし然りぬべき隙(一二)もやあると、藤壺(一二)わたりを、わりなう忍びて窺ひありけど、語らふ(一三)べき戸口も鎖してければ、うち歎きて、なほ(一四)あらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄り給へれば、三の口(一五)あ

(一)詩を誦上ぐるにも
(二)御作
(三)感に堪へたる故也
(四)源を帝が
(五)源の姿に
(六)源を
(七)我が源の戀慕をはれ付けるも餘に心強しと
(八)特別の關係なくして源の美しき姿を見るならば、何のやましき處なく十分に感賞すべきものを
(九)此歌は只心中に思ひたるのみなるに
㊁源氏朧月夜と邂逅す、未だ其人を識らず
(一〇)退散し
(一一)宿直の人々
(一二)藤壺に逢ふべき隙
(一三)王命婦の局の入口
(一四)此儘にも濟されず
(一五)北より第三に當る戸口

には(一)なじろめる多かり。地下の文人は、まして、帝春宮の(二)御才かしこく勝れておはします、(三)かゝる方にやむごとなき人多くものし給ふ頃なるに、恥かしくて、はるばると曇りなき庭に(四)立ち出づる程、はしたなくて、(五)やすきほどの事なれど苦しげなり。年老いたる博士どもの、容體あやしくやつれて、例馴れたるもあはれに、さま〴〵御覽ずるなむをかしかりける。樂どもなどは、更にもいはず調へさせ給へり。やう〳〵入日になるほどに、(六)春の鶯さへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の(七)御紅葉の賀の折、おほし出でられて、春宮、(八)かざし賜はせて、切に責め宣はするに、遁れがたくて、(九)立ちて、のどかに袖かへす所を、(一〇)ひとをれ氣色ばかり舞ひ給へるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、(一一)恨めしさも忘れて涙おとし給ふ。「頭中將いづら。遲し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少し(一二)うち過して、かゝる事もやと(一三)心づかひしけむ、いと面白ければ、御衣賜はりて、いと珍らしき事に人思へり。上達部皆亂れて舞ひ給へど、夜に入りては、殊にけぢ

(一)てれて居る
(二)學才
(三)其他にも文才勝れたる貴人多きに恥ぢて
(四)韻を探りに出るのが極り惡く
(五)詩一首作る位は
(六)春鶯囀
(七)紅葉の賀の時の舞振
(八)冠にさすべき花
(九)源が
(一〇)一段、
(一一)葵上に疎遠なる恨
(一二)念を入れて舞ひて
(一三)兼て用意したるにや

㊀ 觀櫻の御宴
(一) 紫宸殿の觀櫻會
(二) 藤壺の御局は右西、朱雀院のは左東なるべしといふ
(三) 文學の心得ある人々は
(四) 韻を探りて詩を作る
(五) 源氏
(六) 水際立ちて見えるのであるが、目立たぬ樣に落著いて
(七) 此他の人々

花宴

梗槩

㊀ 紫宸殿觀櫻の御宴。㊁ 弘徽殿の細殿にて源氏朧月夜と邂逅す。扇の交換。未だ其人を誰と識らず。㊂ 源氏左大臣邸に行く。㊃ 右大臣邸の藤の宴。源氏招かれ行きて再び朧月夜に會ふ。

二月の廿日あまり、南殿(一)の櫻の宴せさせ給ふ。后春宮の御局(二)、左右にして、參う上り給ふ。弘徽殿の女御は、中宮のかくておはするを、折節ごとに安からずおぼせど、物見にはえ過し給はで參り給ふ。日いとよく晴れて、空の氣色、鳥の聲も心地よげなるに、親王達、上達部よりはじめて、その道のは(三)、皆探韻(四)賜はりて、ふみつくり給ふ。宰相の中將(五)、「春といふ文字賜はれり」と宣ふ聲さへ、例の人に異なり。次に頭中將、人のめうつしもたゞならず(六)覺ゆべかゝめれど、いとめやすくもてしづめて、聲づかひなど、ものものしく勝れたり。さての人々(七)は、皆臆しがち

れば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」(一)とぞ聞えさせ給ひける。實に、春宮の御母にて二十餘年になり給へる女御を置き奉りては、引き越し(二)奉り給ひ難き事なりかしと、例のやすからず、世の人も聞えけり。參り(三)給ふ夜の御供に、宰相(四)の君も仕うまつりたまふ。同じ(五)后と聞ゆるなかにも、后腹(六)の御子、玉のひかり耀きて、類なき(七)御おぼえにさへ物し給へば、人も、いと殊に思ひかしづき聞えたり。まして、わりなき御心(八)には、御輿のうちも思ひやられて、いとゞ(九)及びなき心地し給ふに、そゞろ(一〇)はしきまでなむ。

源 盡きもせぬ心のやみにくるゝかな雲井に人を(一一)見るにつけても

とのみ、ひとりごたれつゝ、物いと哀なり。御子(一二)は、およずけ給ふ月日に從ひて、いと見(一三)奉りわきがたげなるを、宮(一四)いと苦しとおぼせど、思ひ(一五)よる人なきなゝめりかし。實に如何樣(一六)に作りかへてかは、劣らぬ御有樣は、世に出でものし給はまし。月日の光の空にかよひ(一七)たるやうにぞ、世の人も思へる。

(一)汝が皇太后たらんは勿論也、暫く其方辛抱せよ
(二)藤壺を中宮に抜擢するは無理なり
(三)藤壺入内
(四)源氏
(五)同じ后といふ中にも冷泉あるが故に、藤壺を特に人々尊重せり
(六)冷泉
(七)帝の寵遇無比
(八)源の心
(九)中宮になりたる上は
(一〇)落着いて居られぬ
(一一)藤壺が及びなき高位の人となれるを見るにつけても
(一二)冷泉
(一三)源と見分け難き程似て居るを
(一四)藤壺
(一五)眼のつく人
(一六)源の容貌は美の極點されば之に劣らぬものを作らんとせば、此源を眞似る外はあらじ
(一七)似通ひたる

となき御腹々の親王たちだに、上の御待遇のこよなきに、煩はしがりて、いとことにさり聞え給へるを、この中將は、(一)更に(三)おし消たれ聞えじと、はかなき事につけても、(二)思ひ挑み聞え給ふ。この(四)君一人ぞ、姫君の御一腹なりける。帝の(五)御子といふばかりにこそあれ、我も同じ大臣と聞ゆれど、(六)御おぼえ殊なるが、御子腹にて又なくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際と覺え給はぬなるべし。人がらもあるべき限整ひて、何事もあらまほしう、足らひてぞ物し給ひける。この御中どものいどみこそ怪しかりしか。されど(七)うるさくてなむ。

七月にぞ(八)后居給ふめりし。源氏の君、宰相(九)になり給ひぬ、帝(一〇)おり居させ給はむの御心づかひ近うなりて、この(一一)若宮を坊にと思ひ聞えさせ給ふに、御後見し給ふべき人おはせず。御母方、(一二)皆皇子たちにて、源氏の公事しり給ふすぢならねば、母宮をだに動きなきさまにし置き奉りて、つよりにと思すになむありける。弘(一三)徽殿、いとゞ御心動き給ふ、ことわりなり。帝「されど春宮の御世、いと近くなりぬ

(一)源に對する
(二)源を尊敬するに
(三)源に負けじと
(四)左大臣の子供の中、頭中將のみ葵上と同母
(五)頭中將の心、源は皇子と言ふ丈の事
(六)父は臣下なれど帝の尊敬重く母は内親王也、其秘藏子なれば何程も源に劣れりとは思はれぬならん
(七)煩を避けて一々は書かず
⊕藤壺中宮になる
(八)藤壺中宮に立ちし也
(九)參議
(一〇)讓位
(一一)冷泉を皇太子にと
(一二)藤壺の一族は皆皇子なり、然らざれば源氏にて、何れも攝政關白たるに適せざれば
(一三)せめて藤壺を重々しくして冷泉の力にせん

(一)之を取られし故に内侍と君との中絶えたりなどと言はるゝを恐れて此帶には手もつけずに返上仕る、催馬樂「石河の高麗人に帶をとられて辛き悔する、いかなるいかなる帶ぞ縹の帶の中はたえたる」
(二)早速返事
(三)是故に内侍との中絶えたりと君の罪にせん
(四)餘所々々しき樣子して
(五)きちんと澄し込みたる
(六)源内侍に逢はずに歸りし君こそお氣の毒
(七)引歌未詳
(八)「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名漏すな」
(九)口留す
(一〇)機會を作りては中將が言出す
(一一)是も面倒な事故
(一二)誰にも漏さず
(一三)源に對しては母の素性貴き親王さへ

源「中たえばかごとやおふとあやふさにはなだの帶はとりてだに見ず

とて遣り給ふ。(一)立ちかへり、(二)

中將「君にかく引きとられぬる帶なればかくて(三)絶えぬる中とかこたむ

え免れさせ給はじ」とあり。日たけて、各殿上に參り給へり。いと靜に、物遠き(四)さましておはするに、頭の君もいとをかしけれど、公事おほく奏し下す日にて、いとうるはしくすくよかなるを見るも、互にほゝゑまる。人間にさしよりて、中將「物(五)隱しは懲り給ひぬらむかし」とて、いと妬げなる尻目なり。源「などてか然しもあらむ。立ちながら還りけむ人こそいとほしけれ。(六)まことはうしや世の中よ」(七)といひ合せて、「とこの山なる」(八)と、かたみに口がたむ。(九)さてその後は、ともすれば事の序ごとに、言ひ迎ふる(一〇)くさはひなるを、いとゞ物むつかしき人ゆゑと、思し知るべし。(一一)女はなほいと艶に恨みかくるを、わびしと思ひありき給ふ。中將は、妹の君にも聞え出でず、(一二)たゞ然るべき折のおどしぐさにせむとぞ思ひける。やむご(一三)

といひかはして、羨無き（一）、しどけなき姿に引きなされて、皆出で給ひぬ。君はいと口惜しく、見つけられぬる事と思ひ臥し給へり。内侍は、あさましう覺えければ、落ちとまれる御指貫帶など、（二）つとめて奉れり。

内侍（三）「恨みてもいふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波の名殘に（四）底もあらはに」とあり。（五）面無のさまやと、見給ふも憎けれど、（六）わりなしと思へりしも流石にて、

源（七）あらだちし波にこゝろは騷がねどよせけむ磯をいかゞうらみぬ

とのみなむありける。帶は、中將のなりけり。わが御直衣（八）よりは色深しと見給ふに、はた袖（九）もなかりけり。怪し（一〇）の事どもや、（一一）下り立ちて亂るゝ人はうべをこがましき事も多からむと、いとゞ御心（一二）をさめられ給ふ。中將宿直所より、「これまづ綴ぢつけさせ給へ」とて、押し（一三）包みておこせたるを、いかで取りつらむと心やまし。（一四）この帶をえざらましかばと思す。（一五）その色の紙に包みて、

（一）恨みつこのなき
（二）翌朝
（三）「たちかさね」以下は源と中將と打連れて出去りしをいふ、恨み—浦見、甲斐—貝、
（四）「別れての後ぞ戀しき涙川底もあらはになりぬと思へば」
（五）頰の皮の厚さよ
（六）途方にくれたりし樣子も流石氣の毒で
（七）頭中將が押入りしは何とも思はねど、彼が押入る樣な種を蒔きたる君を恨まざるを得ず
（八）帶は直衣のきれを用ふる也
（九）直衣の二巾なる袖の外の方の一巾、引合ひし時にちぎれし也
（一〇）源の心
（一一）此樣子で見れば女狂にかゝつて居る人々はさぞ痴態を演ずること多からん
（一二）謹愼する氣になる
（一三）源のはた袖を
（一四）此帶を取らざりしならば嘸殘念ならん
（一五）帶と同色の

はべこそさてもありけれ、五十七八の人の、うちとけて(一)物思ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御中にて物懼したる、いとつきなし。(二)斯うあらぬ様にもてひがめて、怖ろしげなる氣色を見すれど、なかなか著く見つけ給ひて、(三)我と知りて、殊更にするなりけりと、(四)をこになりぬ。(五)その人なゝめりと見給ふに、いとをかしければ、太刀抜きたる肘をとらへて、いといたう(六)つみ給へれば、(七)妬きものから、え堪へで笑ひぬ。源「まことには現心かとよ。(八)戯れにくしや。(九)いでこの直衣著む」(一〇)と宣へど、(一一)つととらへて、更にゆるし聞えず。源「さらば諸共にこそ」(一二)とて、中將の帯を引き解きてぬがせ給へば、ぬがじとすまふを、(一三)とかく引きしろふ程に、ほころびはほろほろと絶えぬ。中將、

(一四)「つゝむめる名やもり出でむひきかはしかくほころぶる中の衣に

(一五)上に取り著ばしるからむ」といふ。君、

(一六)かくれなきものと知るしる夏ごろもきたるをうすき心とぞ見る

(一)見得を捨てゝ
(二)中將は別人らしき様態を作りて威したれど、源は中將也と見知りて
(三)源の心
(四)馬鹿らしくなりぬ
(五)頭中將ぢやわいと
(六)つめり給へば
(七)中將が
(八)白狀すれば、それは本氣の沙汰かと言ひたい
(九)冗談もできぬ
(一〇)直衣を携へ出でたりと見ゆ
(一一)頭中將が
(一二)貴様も上衣を脱げ
(一三)爭ふ
(一四)引張りあひて出來したる此ほころびから、君の浮名が漏れ出る事であらう
(一五)此はころびたる衣を上に着用したらば人目につかん
(一六)浮名は隠なきものと知りながら、斯く來て我を驚かすは淺き心ならずや



（一）前々より源内侍に關係ありて人の噂にも上りし人と見ゆ
（二）老成人に
（三）我は去らん
（四）修理大夫が來ることは分つて居たるならんに「我がせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」
（五）疊まるゝ屏風の音
（六）年は寄りてもしなをつくる人で
（七）馴れたもので
（八）源を如何するのかと
（九）震ひながら頭中將を引摑えたり
（一〇）源は
（一一）自分の後姿を考へると
（一二）躊躇する
（一三）御免々々
（一四）媚態を作つて居た所はまだよかりしが

忘れ難くすなる、（一）修理大夫にこそあらめと思すに、（二）おとな〱しき人に、かく似げなき振舞をして、見つけられむことは恥かしければ、源「あな煩はし。（三）出でなむよ。（四）蜘蛛のふるまひはしるかりつらむものを、心憂く賺し給ひけるよ」とて、直衣ばかりを取りて、屏風の後に入り給ひぬ。中將をかしきを念じて、引きたて給へる屏風のもとに寄りて、（五）こほ〱と疊み寄せて、おどろ〱しう騷がすに、内侍は、（六）ねびたれど、痛くよしばみなよびたる人の、さき〱も斯樣にて心動かす折々ありければ、（七）ならひて、いみじく心あわたゞしきにも、（八）この君を如何にしなし聞えぬるにかと、わびしさに、（九）ふるう〱つとひかへたり。（一〇）誰と知られで出でなばやと思せど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむ後手思ふに、（一一）いとをこなるべしと、（一二）思しやすらふ。中將、いかで我と知られ聞えじと思ひて、物もいはず、たゞいみじう怒れる氣色にもてなして、太刀を引き拔けば、女、「我が君〱」（一三）と向ひて手をするに、ほと〱笑ひぬべし。好ましう若やぎてもてなしたる、（一四）う

内侍　立ちぬるよひとしもあらじあづまやにうたてもかゝる雨そゝぎかな

とうち歎く(一)を、我一人しも聞きおふ(二)まじけれど、疎ましや、何事を斯くまでは、

とおぼゆ。

源　人づま(三)はあなわづらはしあづまやのまやのあまりも馴れじとぞ思ふ

とて(四)うち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、人に隨へば(五)、

少しはやりか(六)なる戲言など言ひかはして、これも珍らしき心地ぞし給ふ。頭中

將は、この(七)君の、いたくまめだち過して、常にもどき給ふ(八)が妬きを(九)、つれなくて、

うちうちに忍び給ふかたがた多かめるを、いかで見顯さむとのみ思ひわたるに、

(一〇)これを見つけたる心地、いとうれし。かゝる折に少しおどし聞えて、御心惑はし

て、懲りぬやと言はむ、と思ひて、たゆめ(一一)聞ゆ。風冷やかに打吹きて、やゝ更け

行く程に、(一二)少しまどろむにやと見ゆる氣色なれば、やをら入りけるに、君は解け

てしも寢られ給はぬ心なれば、ふと聞きつけて、この中將とは思ひよらず、なほ

(一)雨に濡れて我を訪ふ人などは無き筈なるに、よい加減の事を仰せらるるもの哉
(二)身に引受けて聞くでもないが
(三)外に男ある君に關係すると面倒故、餘り親しくはせぬ覺悟
(四)行つて仕舞ひたけれど
(五)相手のするに任せて居れば
(六)お輕躁なる
(七)源氏
(八)頭中將の浮氣を攻擊するのが忌々しいから
(九)源が何くはぬ顏をして内々通ふ所が多いのを
(一〇)此場に行きかゝりて見つけたる也
(一一)油斷させる、見付けながら暫時控へ居る也
(一二)源等が

（一）内侍とよい中になつた
（二）頭中将
（三）源内侍の心、つれなき人は源
（四）頭に逢ひたきは矢張源の外になしと云事ぢや
（五）頭中将との中の事は
（六）内侍は源の顔さへ見れば恨む故
（七）いかとなれば憚て内侍の許へ行く気にならず
（八）内侍が
（九）催馬楽「山城の狛の渡の瓜作り、なよやらいしなやさいしなや、瓜作り瓜作り、はれ、瓜作り、我をほしといふ、いかにせんなよやらいしなやさいしなや、如何にせん如何にせん〳〵、はれ如何にせんなりやしなまし瓜立つ迄に、やらいしなやさいしなや、瓜立つま瓜立つ迄に」
（一〇）白楽天が鄂州の鸚鵡州に碇泊して鸚鵡州に女の歌ふを聞き感服して「夜聞歌者」の詩を作る
（一一）催馬楽「東屋のまやの檐りの雨そゝぎ我立ち濡れぬ其との戸開かせ、かすがひも錠もあらばこそ其との戸ざゝめ、押開いて来ませ我や人妻」
（一二）源内侍が
（一三）女らしからぬ也

りにければ、語らひつきにけり。（一）この君も、（二）人よりはいと殊なるを、かのつれなき人の御慰にと思へれど、見まほしきは（四）限ありけるをとや。（三）うたての好や。いたう忍ぶれば、源氏の君はえ知り給はず。（六）見つけ聞えては、まづ恨み聞ゆるを、（五）齢の程いとほしければ、慰めむと思せど、（七）かなはぬ物憂さに、いと久しうなりにけるを、夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたゝずみ歩き給へば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾き居たり。御前などにても、男方の御遊に交りなどして、殊にまさる人なき上手なれば、（八）物のうらめしう覚えける折から、いとあはれに聞ゆ。内侍「瓜作になりやしなまし」（九）と、聲はいとをかしうて謡ふぞ、少し心づきなき。（一〇）鄂州にありけむ昔の人も斯くやをかしかりけむと、耳とまりて聞き給ふ。弾きやみて、いといたく思ひ亂れたるけはひなり。君、（一一）あづまやを忍びやかに謡ひて、寄り居給へるに、内侍「押開いて來ませ」（一二）と、うち添へたるも、（一三）例に違ひたる心地ぞする。

(一)我は老人なれども君来給はゞ歓待せん
(二)通ふ人多き君の許へ笹分けて訪寄らば他の男に咎めらるべし怖い事哉
(三)それが面倒故御無沙汰仕る
(四)引留めて
(五)棄てられては、此年になりてよい恥をかく譯になる
(六)思つては居るが無沙汰になるのぢや
(七)追付きて
(八)「津國の長柄の橋の橋柱古りぬる身こそ悲しかりけれ」
(九)源が浮氣をせぬとて女官どもが氣に病んで居たが流石、汝(源内侍)は源を唯は置かぬのぢやな
(一〇)氣恥しけれど
(一一)思ふ男故なら仇名でも立てられたい
(一二)噂の種にするゝ
(一三)女にかけては
(一四)源内侍迄は氣付かざりしよ
(一五)源内侍の果しなき助平心

内侍 君しこば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも(一)

といふさま、こよなう色めきたり。

源「笹分けば人やとがめむいつとなく駒なつくめる森のこがくれ(二)

煩はしさに(三)」とて立ち給ふを、ひかへて、(四)内侍「また斯かる物をこそ思ひ侍らね。(五)今更なる身の恥になむ」とて、泣く様いといみじ。源「今聞えむ。(六)思ひながらぞや」とて、引き放ちて出で給ふを、せめておよびて、(七)「橋柱」(八)と怨みかくるも、上は御袿はてて、御障子の内よりのぞかせ給ひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしう思しめされて、帝「すき心なしと、(九)常にも悩むめるを、さはいへど、過さゞりけるは」とて、笑はせ給へば、内侍は、(一〇)なままばゆけれど、(一一)憎からぬ人ゆゑは、濡衣をだに著まほしがる類もあなればにや、いたうも諍ひ聞えさせず。人人も、思の外なることかなとあつかふめるを、(一二)頭中将聞きつけて、至らぬ(一三)隈なき心にて、(一四)まだ思ひよらざりけるよと思ふに、(一五)盡せぬこのみ心も、見まほしうな

らしと思へり。上(一)の御梳櫛に侍ひけるを、果てにければ、上は御袿(二)の人召して、出でさせ給ひぬる程に、また人もなくて、この内侍常よりも清げに、様體頭つきなまめきて、裝束ありさま、いと花やかに好ましげ(三)に見ゆるを、さも(四)古り難うもと、心づきなく(五)見給ふものから、いかゞ思ふらむと、さすがに過し難くて裳の裾を引き驚し給へれば、かはほり(六)のえならず畫きたるを、さし隱して見かへりたるまみ、いたう見延べ(七)たれど、目皮(八)はいたく黑み落ち入りて、いみじう(九)はづれそゝけたり。似つかはしからぬ扇の樣かなと見給ひて、わが持給へるに(一〇)、さし代へて見給へば、赤き紙の、映るばかり色深きに、木高き森の畫(一一)を塗りかくしたり。片つ方に、手(一二)はいとさだすぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」(一三)など書きすさびたるを、事しもこそあれ(一四)、うたての心ばへや、と咲まれながら、「森こそ夏のと見ゆる」(一五)とて、何くれと宣ふも似げなく、人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず。

(一)帝の理髪を源内侍がつとめたる也
(二)御召替の御世話をする女官を呼びて、召替すべき室へ行かれたれば
(三)好いたらしく
(四)何といふ若作りぞと嫌らしくは思へども
(五)源が
(六)見事に畫きたる扇に顏を掩ひて
(七)遠く見やる時にまぶたの延ぶる事也といふ
(八)まぶた
(九)短き髮の亂れ下りたる貌
(一〇)取りかへて
(一一)金泥などにて
(一二)書體は老人じみたれど
(一三)「大あらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」
(一四)源の感じ書くべき事もあらうに、斯かる事を書く了簡の嫌らしさ
(一五)「ひまも無く繁りにけりな大あらきの森こそ夏の蔭はしるけれ」



人にも恨みらるらむ」と宣はす。

帝の御年ねびさせ給ひぬれど、かやう(一)の方はえ過させ給はず、(二)采女女藏人などをも、容貌心あるをば、殊にもてはやし思召したれば、よしある宮仕人多かるころなり。(三)はかなき事をも言ひ觸れ給ふには、もてはなるゝ事もありがたきに、目馴るゝにやあらむ、實にぞ怪しう好い給はざめると、試に(四)戲言を聞えかゝりなどする折あれど、情なからぬ程にうち答へて、まことには亂れ給はぬを、(五)まめやかにさう／＼しと思ひ聞ゆる人もあり。年いたう老いたる(六)典侍、(七)人もやむごとなく、心ばせありて、あてに(八)おぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心樣にて、(九)そなたには重からぬあるを、(一〇)かうさだ過ぐるまで、などさしも亂るらむと、いぶかしく覺え給ひければ、戲言いひ觸れて試み給ふに、(一一)似げなくも思はざりけり。あさましと思しながら、さすがに(一二)斯かるもをかしうて、物など宣ひてけれど、人の漏り聞かむも(一三)ふるめかしき程なれば、つれなくもてなし給へるを、女はいとつ

●源氏頭中將と源内侍を弄ぶ

(一)女の方は棄置かれず
(二)何れも御側付の女官
(三)源が一寸袖をひけば靡かぬ女は無きが身につきたる故か、不思議に源は女にかまはぬと思ひて
(四)女の方から
(五)眞面目で物足らずと
(六)源内侍といふ　年は五十七八
(七)人柄も貴く
(八)人に重んぜられては居ながら
(九)色の道には輕卒なるまで
(一〇)源の心、斯く年寄るまで
(一一)源の相手になるを
(一二)斯樣な老婆も亦面白くて
(一三)年寄過ぎて外聞惡き年頃の女故

へれば、斯かるを見捨てては、いみじき道なりとも、おもぶき難く覺え給ふ。斯樣に、留められ給ふ折々なども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿(一)に聞えければ、女房「誰ならむ。いとめざましき事にもあるかな。今まで(二)その人とも聞えず、さやうにまつはし、戯れなどすらむは、(三)あてやかに心にくき人にはあらじ。内裏わたりなどにて、はかなく見給ひけむ人を、(四)ものめかし給ひて、人や咎めむと隱し給ふなンなり、(五)心なげにいはけて聞ゆるは」など、侍ふ人々も聞えあへり。内裏にも、(六)かゝる人ありと聞しめして、帝「いとほしく大臣の思ひ歎かるなることも、實に(七)物げなかりしほどを、おふなくかく物したる心を、さばかりの事たどらぬ程にはあらじを、などか情なくはもてなすらむ」と宣はすれど、(八)畏まりたるさまにて、御答も聞え給はねば、(九)心ゆかぬなンめりと、いとほしく思しめす。帝「さるはすきずきしう打ち亂れて、この見ゆる女房にまれ、又此方彼方の人々など、(一〇)なべてならずなども、見え聞えざンめるを、いかなる物の隈に隱れありきて、かく

(一)葵上方
(二)誰それといふ噂もなく
(三)貴女ならば誰と知れぬ筈なければ也
(四)重々しく取扱ひて
(五)無心に幼稚なる樣に聞ゆるは、此句「内裏わたり」の上に置きて見るべし
(六)紫上
(七)源が幼少の折より左大臣が出來る丈世話し來りしに、其情を察せぬ筈はなきに
(八)源は
(九)氣が進まぬならん
(一〇)源を堅氣男と買ひかぶりたる帝の詞、源は浮氣をし散して、内裏の女官又は他の女達にも關係し居る樣にも見えぬに如何なる忍女を拵へて人の恨を買ふならん

人々こわづくり聞えて、「雨降り侍りぬべし」などいふに、姫君例の心ぼそくて、屈し給へり。絵も見さして、（二）俯しておはすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかゝりたるを、かき撫でて、「（三）外なる程は戀しくやある」と宣へば、うなづき給ふ。「我も、一日も見奉らぬはいと苦しうこそ。されど、幼くおはする程は、（四）心やすく思ひ聞えて、（五）まづくねくねしう怨むる人の心破らじと思ひて、（六）むつかしければ、暫し斯くもありくぞ。（七）おとなしく見なしてば、外へも更に往くまじ。人のうらみ負はじなど思ふを、世に長うありて、（八）思ふ様に見え奉らむと思ふぞ」など細々と語らひ聞え給へば、さすがに恥かしくて、ともかくも答へ聞え給はず。やがて御膝によりかゝりて、寝入り給ひぬれば、いと心苦しうて、「今宵は出でずなりぬ」と宣へば、皆立ちて、御膳などこなたに参らせたり。姫君起し奉り給ひて、「出でずなりぬ」と聞え宣へば、（九）慰みて起き給へり。諸共に物な（一〇）どまゐる。（一一）いとはかなげにすさびて、「さらば寝給ひねかし」と危ふげに（一二）思ひ給

（一）御供の人々
（二）早く出かゝれば
（三）我が留守には
（四）其方の方は安心に思ひて
（五）他の行かねば怨む人の方の機嫌取に
（六）怨まるれば面倒なる故
（七）其方が大人になれるを認めたらば
（八）望の如く長く連添はんと思ふ故ぞ
（九）機嫌が直りて
（一〇）食事す
（一一）ほんの少し食して
（一二）若し源の出行くかと

ら疾くもわたり給はぬ、なま恨めしかりければ、(一)例ならず背き給へるなるべし、(二)端の方につい居て、源「こちや」と宣へど驚かず。(三)紫「入りぬるいその」(四)と口すさびて、口おほひし給へるさま、いみじうざれて(五)うつくし。源「あなにく。かゝる事口馴れたまひにけりな。(六)みるめに飽くはまさなき事ぞよ」とて、人召して、御琴取りよせて彈かせ奉り給ふ。源「箏の琴は、(七)中の細緒の堪へ難きこそ所狹けれ」とて、平(八)調に押し下して調べ給ふ。(九)搔き合せばかり彈きて、さしやり給へれば、え怨じもはてず、いと美しう彈きたまふ。ちひさき御程に、(一〇)さしやりてゆし給ふ御手つき、いと美しければ、らうたしと思して、笛吹き鳴しつゝ敎へ給ふ。いとさとく(一一)て、難き調子どもを、(一二)たゞひとわたりに習ひとり給ふ。大方(一三)らう／＼しくをかしき御心ばへを、(一四)思ひし事かなふとおぼす。保曾呂倶世利といふものは、(一五)名はにくけれど、面白う吹きすまし給へるに、(一六)かきあはせまだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。大殿油參りて、繪どもなど御覽ずるに、(一七)出で給ふべしとありつれば、

(一)紫が何時になくすねたるならん
(二)源が
(三)紫が起きず
(四)「潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」
(五)洒落れて
(六)常に側に引付いて居るは却てよくもない事
(七)中にも一番細き緒の斷れ易きがうるさい
(八)もと一越調に調べてありしならんと云ふ
(九)調子だけを合せて
(一〇)手を延して緒をゆさへる手付
(一一)敏捷で
(一二)一遍で覺える
(一三)功者に
(一四)理想通りの女よと
(一五)長保樂の破なりといふ
(一六)紫の合奏
(一七)源が他出すべしと兼て言付けありたれば

（一）冷泉を藤壺によそへて見れども
（二）「我宿にまきし撫子いつしかも花に咲かなんよそへつゝ見ん」
（三）命婦が此文を藤壺に
（四）一寸一筆御返事を
（五）藤壺も丁度切に哀を感じ居る際で
（六）我物思の種と思へば此子も嫌な氣がする
（七）書きかけたる
（八）返事の無いが常例なれば、今度も文をやりたる効あるまじと
（九）失望して
（一〇）意外に返事を得たる嬉
㊇　源氏紫上を鍾愛す
（一一）紫上の方
（一二）源の様子
（一三）くだけたる
（一四）前に歌に咏みたる撫子の花が
（一五）源が家に居ながら容易に紫の方に來ぬのが

源「よそへつゝ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花
花に咲かなむと思ひ給へしも、かひなき世に侍りければ。（一）（二）
とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽ぜさせて、（三）命婦「たゞ塵ばかり、この花（四）びらに」と聞ゆるを、我御心にも、物いと哀に思し知らるゝほどにて、（五）
藤壺 袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ（六）
とばかり、ほのかに書きさしたる（七）やうなるを、よろこびながら奉れる、（八）例の事なれば驗あらじかしと、くづほれて（九）眺め臥し給へるに、胸うちさわぎて、（一〇）いみじく嬉しきにも涙おちぬ。
つくぐ\と臥したるにも、やる方なき心地すれば、例のなぐさめには西の對にぞ（一一）渡り給ふ。しどけなく（一二）うちふくだみ給へる鬢莖、（一三）あざれたる袿姿にて、笛を懷しう吹きすさびつゝ、のぞき給へれば、女君、（一四）ありつる花の露にぬれたる心地して、添ひ臥し給へるさま、美しうらうたげなり。愛敬こぼるゝやうにて、（一五）おはしなが



例の中將の君(一)、此方にて御遊などし給ふに、抱き出で(二)奉らせ給ひて、帝「皇子たちあまたあれど、そこを(三)のみなむ、かゝる程より旦暮見し。されば思ひ渡さるゝに(四)やあらむ、いとよくこそおぼえたれ。小き程は皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじく美しと思ひ聞えさせ給へり。中將の君、面の色かはる心地して、怖ろしうも、かたじけなくも、嬉しくも、あはれにも、かた〴〵(五)うつろふ心地して、涙おちぬべし。物語(六)などして、うち笑み給へるが、いとゆゝしう美しきに、我身ながら、これに(七)似たらむはいみじういたはしう覺え給ふぞあながちなるや。宮は、わりなくかたはら痛きに、汗も流れてぞおはしける。中將は、なか〳〵(八)なる心地の、かき亂る樣なれば、まかで給ひぬ。

わが御方に臥し給ひて、胸のやるかたなきを、ほど過して大殿へと思す。御前の(九)前栽の、何となく青み渡れる中に、瞿麥の花やかに咲き出でたるを、折らせ給ひて、命婦の君の許に、書き給ふ事多かるべし。

(一)源が隨從にて
(二)帝が冷泉を
(三)此位の時から常に見たは汝ばかり
(四)聯想されるのか知らぬが、よく似て居る
(五)樣々の思錯綜して
(六)赤子が何か言ひて
(七)之に似たらば大に自重するに足れりと思ふのは己惚過ぎて居る
(八)子の我に似たるは嬉しかるべき筈なるに、却て心苦しくて
(九)源の自分の居間

（一）急に態度をかへては又人の目に立つ故、け取られぬ樣穩かにはあしらへども、命婦の仕方を不快に思ふ時あるを
（二）命婦が
（三）藤壺腹の赤子が（是冷泉院也）
（四）大人びて
（五）源の子たるに相違なき
（六）桐壺帝は氣がつかぬ故
（七）美しい同士は
（八）帝が冷泉を
（九）皇太子にも立てずに仕舞ひしを
（一〇）臣下の列に置くは勿體なき
（一一）素性高き藤壺の腹に
（一二）源と同樣の美しさで生れたれば
（一三）藤壺

還り給ふものから、人の物言ひも煩はしきを、わりなき事に宣はせ思して、命婦をも、昔思いたりし樣にも、打解けむつび給はず。（一）人目立つまじく、なだらかにもてなし給ふものから、心づきなしと思す時もあるべきを、（二）いとわびしく思の外なる心地すべし。（三）四月に內裏へ參り給ふ。程よりは大きに（四）およすけ給ひて、やうやう起きかへりなどし給ふ。あさましきまで、（五）まぎれ所なき御顏つきを、（六）思しよらぬ事にしあれば、（七）また竝なきどちは實に通ひ給へるにこそはと思ほしけり。（八）いみじう思ほしかしづく事かぎりなし。源氏の君を限なきものに思し召しながら、世の人のゆるし聞ゆまじかりしによりて、（九）坊にもえすゑ奉らずなりにしを、飽かず口惜しう、（一〇）たゞ人にてかたじけなき御有樣容貌にねびもておはするを御覽ずるまゝに、心苦しう思しめすを、（一一）かうやむごとなき御腹に、（一二）同じ光にてさし出で給へれば、疵なき玉と思ほしかしづくに、（一三）宮は如何なるにつけても胸のひまなく、やすからず物をおもほす。

かなき事をだに瑕を求むる世に、如何なる名の終に漏出づべきにか、と思し續くるに、身のみぞいと心憂き。命婦の君に、たまさかに(一)遇ひ給ひて、(二)いみじき言どもを盡し給へど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御事を、わりなく覺束ながり聞え給へば、命婦「など斯うしも、強ちに宣はすらむ。今おのづから見奉らせ給ひてむ」と聞えながら、(三)思へる氣色かたみにたゞならず。かたはら痛き事なれば、(四)まほにも宣はで、源「如何ならむ世に、人傳ならで聞えさせむ」とて、泣い給ふさまぞ心苦しき。

源「(五)いかさまに昔むすべるちぎりにてこの世にかゝるなかのへだてぞ

かゝる事こそ心得難けれ」と宣ふ。命婦も、宮のおもほし亂れたる樣などを見奉るに　(六)えはしたなうもさし放ち聞えず。

命婦「(七)見ても思ふ見ぬはたいかになげくらむこや世の人の惑ふてふ闇

(八)哀に心ゆるびなき御事どもかな」と、忍びて聞えけり。(九)斯くのみいひやる方なくて、

(一)源が
(二)藤壺に逢はせよと詞を飾せども
(三)命婦も源の内心をよく察したれば也
(四)露骨にも言はれず
(五)何の因果で斯迄逢はれぬのぞや
(六)そつけなくはね付けもならず
(七)赤子を見て居る藤壺も歎き、見ぬ源も歎く、子故の闇とはこの事か、是やー子や
(八)噂の絶間なき
(九)源は手持無沙汰でのみ顧れども、人の噂はうるさければ藤壺はつらく思ひて

事と思し歎くに、御心もいと苦しくて悩み給ふ。中將の君は、(一)いとゞ思ひ合せて、御修法など、(二)わざとはなくて所々にせさせ給ふ。世の中の定なきにつけても、斯くはかなくてや止みなむと、取集めて歎き給ふに、二月の十日あまりの程に、男御子生れ給ひぬれば、名殘なく、内裏にも宮人も喜び聞え給ふ。(三)命長くもとおもほすは心憂けれど、弘徽殿などの、(四)うけはしげに宣ふと聞きしを、(五)空しく聞きなし給はましかば人笑はれにや、と思し強りてなむ、やう／＼少しづつ爽い給ひける。上の、いつしかと(六)ゆかしげに思し召したる事かぎりなし。(七)かの人知れぬ御心にも、いみじう心もとなくて、人間に參り給ひて、源「上の覺束ながり聞えさせ給ふを、まづ見奉りて奏し侍らむ」と聞え給へど、藤壺「(八)むつかしげなる程なれば」とて、見せ奉り給はぬも、理なり。さるはいとあさましう、(九)珍らかなるまで寫し取り給へるさま、違ふべくもあらず。宮の、(一〇)御心の鬼にいと苦しう、(一一)人の見奉るも怪しかりつる程のあやまちを、まさに人の思ひ咎めじやは、さらぬは

(一)產の延びたるにつきて頸く我胤と悟りて
(二)表向でなく
(三)藤壺の心、死なざりしはつらけれど
(四)詛ふ樣な口振ありと聞きしに
(五)我死せりと弘徽殿に聞かれては外聞惡しかるべし
(六)赤子を見たく
(七)源の内心
(八)むさくるしき
(九)源に生寫しなる容貌
(一〇)良心に責められて
(一一)此子を人が見ては密通の一件に氣のつかぬ筈がない

(一)春の頃行はるゝ清涼殿の詩會
(二)其折に此帯は頂戴すべし。
(三)其時のには尚良いのもある
(四)珍しいから差上げる
(五)着用させ
(六)新年の拜賀
(七)源が
(八)源が一段美しく見え
(九)年長ずると共に

七　冷泉帝誕生、桐壺帝の鍾愛

(一〇)藤壺御産の事
(一一)何事もなく正月も過ぎたり
(一二)我は産の爲に死ぬならん

づから持たせて、わたり給ひて、御衣の御後ひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにし給ふ。いとあはれなり。源「これは(一)内宴などいふ事も侍るなるを、(二)さやうの折にこそ」など聞え給へど、大臣「(三)それは勝れるも侍り。これはたゞ(四)日馴れぬ樣なればなむ」とて、強ひて(五)さゝせ奉り給ふ。實によろづにかしづき立てて見奉り給ふに、生けるかひあり。たまさかにても、かゝらむ人を出し入れて見むに勝す事あらじ、と見え給ふ。(六)參座しにとても、(七)あまた所もありき給はず、内裏、春宮、一院ばかり、さては藤壺の三條の宮にぞ參り給へる。「今日はまた(八)殊にも見え給ふかな。(九)ねび給ふまゝに、ゆゝしきまでなりまさり給ふ御有樣かな」と人々めで聞ゆるを、宮は、御几帳の隙より、ほの見給ふにつけても、思ほす事繁かりけり。

(一〇)この御事の、十二月も過ぎにしが、心もとなきに、この月はさりともと、宮人も待ち聞え、内裏にもさる御心設けどもあるに、(一一)つれなくて立ちぬ。御物怪にやと、世の人も聞えさわぐを、宮いとわびしう、(一二)この事により、身の徒になりぬべき

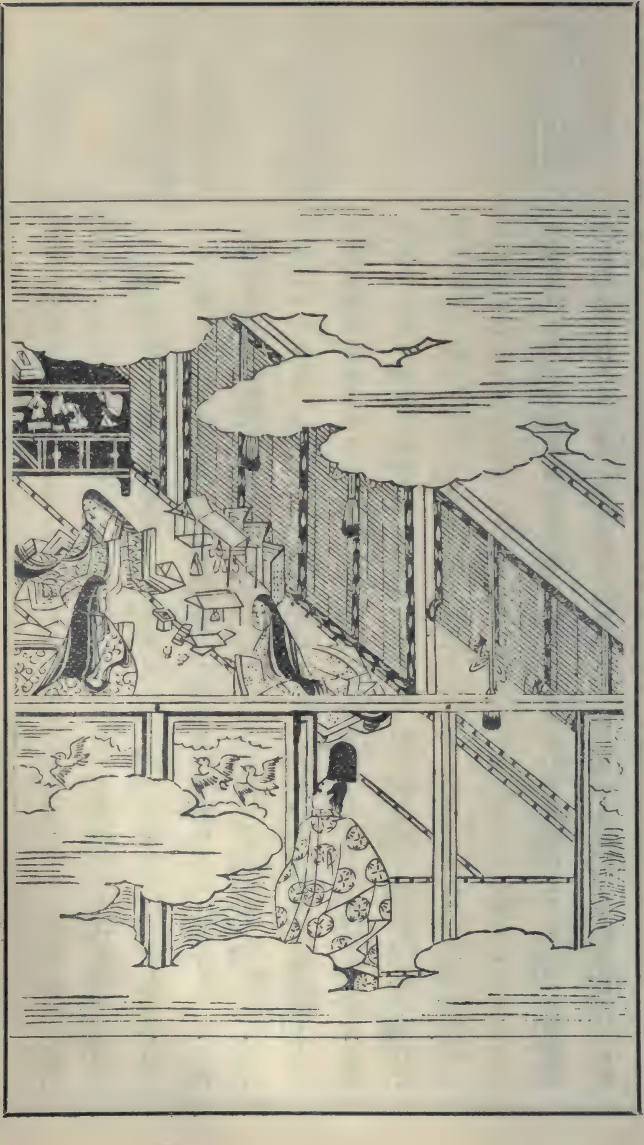
(一)二條院に女を迎へたりと聞きて後は本妻にする積ならんと遠慮が出て
(二)葵が源を
(三)葵の悋氣を源が知らぬ振してふざけると、葵も氣強くはねつけもならず
(四)すぐれて居る
(五)葵は四つの姉女房
(六)源の心、此女に何處に缺點がある
(七)自分の不心得な徒らから怨みも受けるのぢや
(八)葵は大臣の中にも羽振よき人を父に、内親王を母に持ちたる一人娘なれば、非常に氣位が高く
(九)少し粗末にされゝばけしからぬ事に思ふに
(一〇)源は何も其樣に機嫌を取らずとも、ちと懲らして遣らん位に思ふ故、爾が出來るならん
(一一)源の
(一二)源が
(一三)左大臣が
(一四)此頃衣裳の中にて帶には殊に名物ありし也

に嬉しからむ」など聞え給へど、わざと人するゑてかしづき給ふと聞き給ひしよりは、やむごとなく思し定めたることにこそはと、(一)心のみ置かれて、(二)いとゞ疎く恥かしく思さるべし。(三)強ひて見知らぬ樣にもてなして、亂れたる御けはひには、えしも心強からず、御答などうち聞え給へるは、なほ人よりは(四)いと異なり。(五)四年ばかりがこのかみにおはすれば、うち過しはづかしげに、盛に整ほりて見え給ふ。(六)何事かはこの人の飽かぬ所は物し給ふ、(七)わが心のあまりけしからぬすさびに、かく怨みられ奉るぞかし、と思し知らる。(八)同じ大臣と聞ゆる中にも、覺やむごとなくおはするが、宮腹に一人いつきかしづき給ふ御心おごり、いとこよなくて、(九)少しく疎なるをばめざましと思ひ聞え給へるを、(一〇)男君は、などかいとさしもと、ならはい給ふ御心の隔どもなるべし。大臣も、かく頼もしげなき御心を、(一一)つらしと思ひ聞え給ひながら、見奉り給ふときは、怨も忘れて、かしづきいとなみ聞え給ふ。(一二)翌朝出で給ふ所に、(一三)さしのぞき給ひて、御裝束し給ふに、(一四)名高き御帶、手

れば、姫君も立ち出でて見奉り給ひて、雛の中の源氏の君つくろひたてて、(一)内裏に參らせなどし給ふ。少納言「今年だに少しおとなびさせ給へ。十にあまりぬる人は、雛遊は忌み侍るものを、かく御夫など儲け奉り給ひては、(二)あるべかしうしめやかにてこそ、見え奉らせ給はめ。(三)御髮まゐる程をだに、物うくせさせ給ふ」など少納言聞ゆ。御遊にのみ心入れ給へれば、恥かしと思はせ奉らむとて言へば、心のうちに、(四)我はさは夫儲けてけり、この人々の夫とてあるは、醜くこそあれ、我は斯くをかしげに(五)若き人をも持たりけるかなと、今ぞ思ほし知りける。(六)さはいへど、御年の數添ふしるしなゝめりかし。かく幼き御けはひの、事に觸れて著ければ、殿のうちの人々も、怪しと思ひけれど、(七)いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。

内裏より、大殿に罷出給へり。(八)例の麗しう(九)よそほしき御樣にて、(一〇)心美しき御氣色もなく、苦しければ、源「今年よりだに、少し世づきて改め給ふ御心見えば、いか

(一)參内の眞似をさする也
(二)妻らしく大人しくしくして源に應對し給ふべき筈
(三)然るに髮梳ふ間もいやがりて遊びたがりなさる
(四)其なら我は亭主を持つたのぢやわい
(五)夫として
(六)何といつても
(七)斯うまで色氣のなき
●左大臣源氏を歡遇す
(八)娘が
(九)取繕つた
(一〇)愛々しき



となくておはし、(一)此所彼所あまたかゝづらひ給ふをぞ、(二)誠に大人び給はむほどには、むつかしき事もやと覺えける。されど、(三)斯くとりわき給へる御おぼえの程は、いと賴もしげなりかし。(四)御服、母方は三月こそはとて、晦日には脫がせ奉り給ふを、(五)また親もなくて生ひ出で給ひしかば、(六)まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地のかぎり織れる、御小袿などを著給へるさま、いみじう今めかしうをかしげなり。男君は、(七)朝拜に參り給ふとて、さしのぞき給へり。源「(八)今日よりは、大人しくなり給へりや」とて、うち笑み給へる、いとめでたう愛敬づき給へり。(九)いつしか雛おしすゑて、(一〇)そゝき居給へり。三尺の御厨子一具に、品々しつらひすゑて、又小き屋ども(一一)作り集めて奉り給へるを、所狹きまで遊びひろげ給へり。紫「(一二)儺やらふとて、犬君がこれを毀ち侍りにければ、繕ひ侍るぞ」とて、いと大事と思いたり。源「實にいと心なき人のしわざにも侍るかな。今つくろはせ侍らむ。(一三)今日は言忌して、な泣い給ひそ」とて、出で給ふ氣色、(一四)いとところ狹きを、人々端に出でて見奉

(一)其他あちこちに關係の女多きを見て
(二)紫成人の後は面倒なるべし
(三)源が紫を特に深く思ふ點は
(四)紫の喪服
(五)祖母の外には
(六)喪服を脫ぎて後も派手なる衣は避けて
(七)元日の小朝拜
(八)年の加はりたる故
(九)紫が
(一〇)忙しく立ったり居たりして居る
(一一)源が紫に
(一二)今の節分の鬼やらひを、古は大晦日の夜にしたる也、今も宮中にては然りといふ
(一三)元日なれば縁喜を祝ひて
(一四)立派なるを

（一）源氏の樣子が
（二）兵部卿は藤壺の兄なれば簾中にも入る也
（三）昔は常に桐壺帝の側を去らざりし故、源が直接に藤壺と物語することもありしを
（四）度々御見舞申すべきなれども、格別の用事なき時は
（五）律義なる挨拶にて
（六）藤壺
（七）取持せんとする命婦が恥かしく氣の毒に感ずる也
（八）源の隙を窺ふ效なく
㊄幼き紫上、乳母の心遣
（九）紫の乳母
（一〇）紫の身の上を心配して
（一一）源の本妻としては葵が儼然と控へ居り

がた睦まじう覺え給ひて、細やかに御物語など聞え給ふ。宮も、（一）この御樣の、常より殊に懷かしううちとけ給へるを、いとめでたしと見奉り給ひて、婿になどは思しよらで、女にて見ばやと、色めきたる御心には思ほす。暮れぬれば（二）御簾の内に入り給ふを、うらやましく、（三）昔は上の御もてなしに、いと氣近く、人傳ならで、物をも聞え給ひしを、こよなう疎み給へるも、つらく覺ゆるぞわりなきや。

源「（四）しば〱も侍ふべければ、事ぞとも侍らぬ程は、おのづから怠り侍るを、然るべき事などは、仰事も侍らむこそ嬉しく」など、（五）すぐ〱しうて出で給ひぬ。命婦もたばかり聞えむ方なく、（六）宮の御氣色も、ありしよりは、いとゞ憂き節に思しおきて、心解けぬ御氣色も、（七）恥かしういとほしければ、（八）何のしるしもなくて過ぎ行く。はかなの契りやと思し亂るゝ事、かたみに盡きせず。

（九）少納言は、覺えずをかしき世をも見るかな、これも故尼上の、（一〇）この御事をおほして、御行にも祈り聞え給ひし、佛の御驗にや、とおぼゆるに、（一一）大殿いとやむご

ほ時々思ひ出で聞え給ふ時は、尼君を戀ひ聞え給ふをり多かり。君のおはする程は紛らはし給ふを、夜などは、(一)時々こそとまり給へ、此所彼所の御いとまなくて、暮るれば出で給ふを、慕ひ聞え給ふ折などあるを、いとらうたく思ひ聞え給へり。二三日内裏に侍ひ、大殿にもおはする折は、いと甚く(二)屈しなどし給へば、(三)心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩行もしづ心なく覺え給ふ。僧都は斯くなむと聞き給ひて、怪しきものから、嬉しとなむおもほしける。(四)かの御法事などし給ふにも、嚴しうとぶらひ聞え給へり。

藤壺の罷出給へる三條の宮に、御有樣もゆかしうて、參り給へれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人々對面したり。(五)けざやかにももてなし給ふかなと、安からず思ひ給へど、(六)しづめて、大方の御物語聞え給ふ程に、兵部卿の宮參り給へり。(七)この君おはすと聞き給ひて、對面し給へり。(八)いと由ある樣して、(九)色めかしうなよび給へるを、(一〇)女にて見むはをかしかりぬべく、人知れず見奉り給ふにも、(一一)かた

(一)源が時々は二條院に泊れども、忍び通ふ所多き爲に夜外出勝なるを紫が慕ひたる折あるを
(二)紫が滅入り込む
(三)源が
(四)尼の法事を此僧都が行ふ
㊃　源氏藤壺を訪ふ
(五)他人がましく
(六)我慢して
(七)源來合せたりと聞きて
(八)兵部卿の容貌
(九)色つぽくひんなりとしたるを
(一〇)源の心、自分が女であつたらばと心中に思ふにつけても
(一一)紫の關係もあり旁

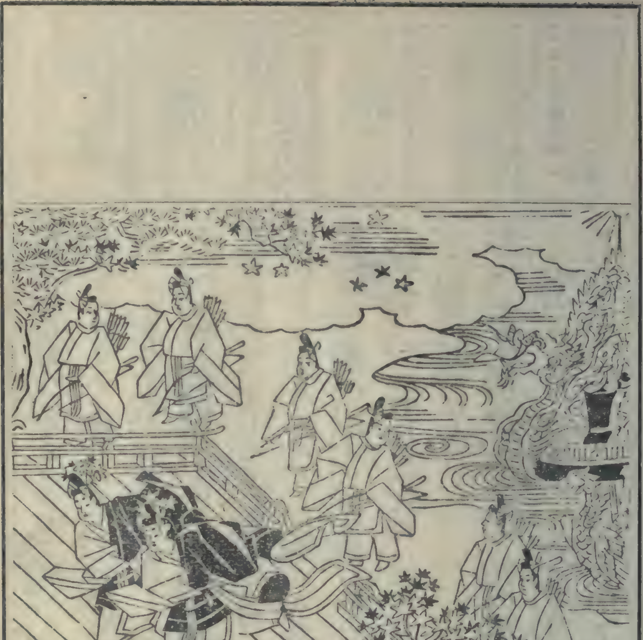
さも思さむは理なれど、心うつくしう、(一)例の人のやうに怨み宣はば、我も(二)うらなく打語りて慰め聞えてむものを、(三)思はずにのみとりない給ふ御心づきなさに、さもあるまじきすさび事も出で來るぞかし、(四)人の御有樣のかたほに、その事の飽かぬと覺ゆる疵もなし、(五)人よりさきに見奉りそめてしかば、(六)哀にやむごとなきかたに思ひ聞ゆる心をも知り給はぬ程こそあらめ、(七)終には思しなほされなむと、(八)おだしく輕々しからぬ御心の程も、自らとたのまるゝ方は殊なりけり。(九)幼き人は、(一〇)見つい給ふまゝに、いとよき心ざま容貌にて、何心もなく(一一)睦れまとはし聞え給ふ。暫し、殿の内の人にも誰と知せじと思して、なほ離れたる對に、御しつらひ二なくして、我も旦暮入りおはして、萬の御事どもを教へ聞え給ふ。手本書きて習はせなどしつゝ、たゞ外なりける御女を迎へ給へらむ樣にぞ思したる。政所家司などを初め、(一二)ことにわかちて、心もとなからず仕う奉らせ給ふ。惟光より外の人は、覺束なくのみ思ひ聞えたり。かの父宮も、え知り聞え給はざりけり。姬君は、な

(一)通常人の樣に率直に怨を言はゞ
(二)ぶちまけて
(三)思はぬ方へひねくれるのが不快さに、せずともよきいたづらも爲る樣になるのぢやわい
(四)葵には別に缺點はなし
(五)葵は第一の故妻なれば
(六)我が大事にする心の分らぬ中は怨みもすべきが
(七)追付け了簡が直るであらうと
(八)穩やかに重々しき心を頼にする點に就ては、何と言ても葵が一番
(九)紫上
(一〇)馴染むにつれて
(一一)源に付纏ふ
(一二)引分けて特に紫上付として

(一)折を辨へたる様なるに
(二)源が
(三)變色して面白き
(四)引込際の舞
(五)埋れて見物して居たる者迄
(六)承香殿女御の生める桐壺帝の第四子
(七)源氏に次ぎての
(八)興をさます種
(九)從四位上より正四位下になる
(一〇)相當の昇進あるも源氏に連れられての事なれば
(一一)源は如何なる善根を前世に爲たかと思はる
㊂　源氏と葵上との仲、葵上は心に源氏を厭ふ
(一二)藤壺
(一三)源が
(一四)無沙汰して苦情を言はる
(一五)紫上
(一六)面白からぬ事と葵が思へり
(一七)源の紫に對する態、葵は紫のまだ子供たる事は知らずして妬むは無理ならねど

(一)見知り顔なるに、(二)さるいみじき姿に、菊の色々(三)うつろひえならぬをかざして、今日はまたなき手を盡したる、(四)入綾のほど、そゞろ寒く、この世の事とも覺えず。物見知るまじき下人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉に(五)埋れたるさへ、少し物の心知るは涙おとしけり。(六)承香殿の御腹の四の御子、まだ童にて、秋風樂舞ひ給へるなむ、(七)さしつぎの見物なりける。これらに面白さの盡きにければ、他事に目もうつらず。かへりては(八)事ざましにやありけむ。その夜、源氏の中將正三位し給ふ。頭中將(九)正下の加階し給ふ。上達部たちは、(一〇)皆さるべき限のよろこびし給ふも、この君にひかれ給へるなれば、人の目をも驚かし、心をも悅ばせ給ふ(一一)昔の世ゆかしげなり。

(一二)宮は、その頃罷出給ひぬれば、例の隙もやと、(一三)窺ひありき給ふを事にて、大殿に(一四)はさわがれ給ふ。いとゞ、(一五)かの若草尋ね取り給ひてしを、二條院には人迎へ給へりと人の聞えければ、いと(一六)心づきなしと思いたり。(一七)うち〳〵の有樣は知り給はず、



㊁ 朱雀院行幸、舞樂

(一)池の中を
(二)餘りの見事さに神隱しなどにも逢はんかと氣味惡がりて所願させらるるを
(三)樂人
(四)昇殿を許されざる官人
(五)心得ある人
(六)皆が一緒になりたる
(七)源が舞ひ出でたる樣
(八)立派過ぎて
(九)源の冠に插みたる
(一〇)少しばかり

行幸には、皇子たちなど、世に殘る人なく仕う奉り給へり。春宮もおはします。例の樂の船ども漕ぎめぐりて(一)、唐土高麗と盡したる舞ども、種おほかり。樂の聲、鼓の音、世をひゞかす。一日の源氏の御夕影、ゆゝしう(二)思されて、御誦經など所々にせさせ給ふを、聞く人も理と哀がり聞ゆるに、春宮の女御は、あながちなりと憎み聞え給ふ。垣代(三)など、殿上人地下(四)も、心殊なりと世の人に思はれたる、有職(五)のかぎり整へさせ給へり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の樂の事を行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつゝ、おの〳〵籠り居てなむ習ひける。木高き紅葉のかげに、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもに、あ(六)ひたる山の松風、まことの深山おろしと聞えて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き(七)出でたる樣、いと怖ろしきまで(八)見ゆ。かざし(九)の紅葉いたう散り過ぎて、顏のにほひに氣壓されたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大將さしかへ給ふ。日暮れかゝる程に、氣(一〇)色ばかりうちしぐれて、空の氣色さへ

(一)上手なれど
(二)大樣に優美なる所を能くせず
(三)朱雀院の當日が興味なからんと思へど
(四)君に
(五)源の藤壺への手紙
(六)我は曾て經驗せざりし煩悶を懷きつゝ舞ひたり
(七)如何なる心を以て舞ひしかを君は知るや
(八)流石の藤壺も返事せざるに忍びぬならん
(九)青海波などいふ唐の古樂はよく知らねど、君の舞には感心せり、振る―古
(一〇)君の心の裏は知らねど、一通り感心したり
(一一)源の心
(一二)舞樂の事迄暗からず
(一三)青海波を唐樂と知りて咏める所などは、未だ后にならぬ前から其詞は既に后であると謂ふべきである

の師の男どもも、實にいとかしこけれど、(一)こゝしう(二)なまめいたるすぢを、えなむ見せぬ。試の日斯く盡しつれば、紅葉の蔭や(三)さう〴〵しくと思へど、見せ(四)奉らむの心にて、用意せさせつる」など聞え給ふ。翌朝中將の君、

源 (五)いかに御覽じけむ。(六)世に知らぬみだり心地ながらこそ。

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖(七)うちふりしこゝろ知りきや

あなかしこ。

とあり。御かへり、目もあやなりし御樣かたちに、(八)見給ひ忍ばれずやありけむ。

藤壺 (九)からひとの袖ふることは遠けれど立居につけてあはれとは見き

(一〇)大方には。

とあるを、(一一)限なうめづらしう、(一二)かやうの方さへたど〴〵しからず、(一三)他の朝廷までおもほしやれる、御后言葉のかねても、とほゝゑまれて、持經のやうにひき廣げて見居給へり。

(一)同じ青海波なれども世に類なし
(二)舞に合せて文句を誦ふ事
(三)妙聲鳥、雪山中の最も美聲なるものといふ
(四)舞の終るを待ちてはじめたる
(五)皇太子の母弘徽殿女御
(六)妬ましく
(七)神隠しなどに逢ふべき
(八)厭はし
(九)自分に大それた心さへ無くば
(一〇)藤壺は桐壺帝の許に引留められたり
(一一)頭中將もよかつた
(一二)良家の子

びては、花のかたはらの深山木なり。入りがたの日影さやかにさしたるに、樂の聲まさり、物のおもしろき程に、同じ(一)舞の足踏おもゝち、世に見えぬ様なり。詠(二)などし給へるは、これや佛の御(三)迦陵頻伽の聲ならむと聞ゆ。面白くあはれなるに、帝涙おとし給ふ。上達部皇子たちも、皆泣き給ひぬ。詠はてて、袖うちなほし給へるに、待ち(四)とりたる樂の賑はしきに、顏の色合まさりて、常よりも光ると見え給ふ。春宮(五)の女御、斯くめでたきにつけても、たゞ(六)ならず思して、「神(七)など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゝし(八)」と宣ふを、若き女房などは、心うしと耳留めけり。藤壺は、おふけ(九)なき心なからましかば、ましてめでたく見えまし、と思すに、夢の心地なむし給ひける。宮(一〇)は、やがて御宿直なりけり。帝「今日の試樂は、青海波に事皆盡きぬ。いかゞ見給ひつる」と聞え給へば、あいなう、御答聞えにくゝて、藤壺「殊に侍りつ」とばかり聞え給ふ。帝「片手(一一)もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま手づかひなむ、家(一二)の子はことなる。この世に名を得たる舞

紅葉賀

梗概

㊀行幸前の試樂。源氏の青海波。㊁朱雀院行幸。舞樂。源氏、正三位に叙せらる。㊂藤壺の宿下り。源氏と葵上との仲。紫上幼心に源氏を慕ふ。㊃源氏藤壺を訪ふ。兵部卿宮との會合。㊄幼き紫上。乳母少納言の心遣。㊅源氏葵上にあきたらず。左大臣源氏を厚遇す。㊆藤壺冷泉帝を生む。桐壺帝の鍾愛。源氏と藤壺との苦悶。㊇源氏紫上を鍾愛す。葵上方、及内裏に於ける風評。㊈色好の老婆源内侍。源氏、源内侍に戯る。頭中將亦戯に内侍に通ひ、内侍の閨を驚かす。源氏と頭中將と互に帶を取らる。㊉藤壺中宮に冊立せらる。源氏參議に任ぜらる。

㊀ 行幸前の試樂

(一)女御妃たち、宮外の事故女は見られぬ也
(二)曲名
(三)相手
(四)源に

朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり。尋常ならず面白かるべき度の事なりければ、御かた〴〵(一)、物見給はぬ事をくちをしがり給ふ。上も、藤壺の見給はざらむを、飽かずおぼさるれば、試樂を御前にてせさせ給ふ。源氏の中將は、青海(二)波をぞ舞ひ給ひける。片手(三)には大殿の頭中將、容貌用意人には異なるを、立竝(四)

(一)思はず

いでや」と、(一)あいなくうちうめかれ給ふ。あないとほし。かゝる人々の末々いかなりけむ。

紅をつけて見給ふに、圖に畫きても見ま憂き様したり。(一)わが御影の鏡臺にうつれるが、いと淸らなるを見給ひて、手づからこの紅花(二)をかきつけ、にほはして見給ふに、かくよき顏だに、さて交れらむ(三)は見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひ給ふ。源「まろが、斯くかたはになりなむ時、如何ならむ」と宣へば、紫「うたてこそあらめ」とて、(四)さもや染みつかむと危く思ひ給へり。空拭をして、源「更に(五)こそ白まね。(六)用なきすさびわざなりや、(七)內裏にいかに宣はむとすらむ」と、いと眞實に宣ふを、いといとほしと思して、寄りて御硯の瓶の水に、陸奥紙をぬらして拭ひ給へば、源「平仲(八)がやうに色どり添へ給ふな。(九)赤からむはあへなむ」と戲れ給ふ様、いとをかしき妹背と見え給へり。日のいと麗らかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、(一〇)心もとなき中にも、梅は氣色ばみほゝゑみわたれる、(一一)とりわきて見ゆ。(一二)階隱のもとの紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。

源「くれなゐの(一三)花ぞあやなくうとまるゝ梅のたち枝はなつかしけれど

(一)源の
(二)紅き繪具
(三)紅の交りたるは
(四)其儘に染みつきて落ちぬかも知れぬと
(五)一向白くならぬ
(六)つまらぬいたづらをした
(七)さぞ帝に叱られるならん
(八)平貞文、有名なる色男、女の許にて泣く眞似するとて、墨の交りたる水を知らずして目に塗りて女に嘲られし事あり
(九)墨と違ひて赤は差支なかるべし
(一〇)花もやがて咲きそうなる
(一一)目だちて
(一二)車よせ
(一三)花に鼻をかけて、末摘を疎ましといへる也

(一)鶯の初音を待つべきなれど其上り去年に變りて君の聲を聞かんが待遠し「新玉の年立歸る朝より待たるゝ物は鶯の聲」
(二)「百千鳥囀る春は物毎にあらたまれども我ぞ古り行く」
(三)斯く返事するは
(四)「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは」
(五)物に寄掛ひて臥し
(六)赤き鼻つや〳〵しく。
● 源氏畫をかきて紫上と戯る
(七)まだ成人
(八)紫の將衣なるべし、末摘の鼻に比べて言ふ
(九)幼女の服
(一〇)古風なる
(一一)此頃の女兒は早く齒を染めし也
(一二)源が引取りて後染めさせし也
(一三)齒を染むると同時にぼう〳〵眉を常の眉にしたる也
(一四)以下源の心
(一五)何故色々な女に關係して餘計な心配をするならん
(一六)斯く可愛き者を守らずに
(一七)紫が
(一八)源が

だに、聲少し聞せ給へかし。(一)待たるゝものはさし置かれて、御氣色の改まらむなむゆかしき」と宣へば、末摘「(二)さへづる春は」と、辛うじてわなゝかし出でたり。源「然りや。(三)年經ぬるしるしよ」とうち笑ひ給ひて、「(四)夢かとぞ思ふ」と、打誦じて出で給ふを見送りて添ひ臥し給へり。(五)口おほひの側目より、なほかの末摘む花、(六)いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

二條の院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生(七)にて、紅(八)はかう懐しきもありけりと見ゆるに、無紋の櫻の細長(九)、なよゝかに著なして、何心もなくて物し給ふ樣、いみじうらうたし。古代(一〇)の祖母君の御名殘にて、齒黑(一一)もまだしかりけるを、(一二)引きつくろはせ給へれば、眉のけざやかになりたる(一三)も、美しう淸らなり。心から、(一四)などかかう憂き世を見あつかふらむ、(一五)かく心苦しきものをも見てゐたらで、と思しつゝ、(一六)例の諸共に雛遊し給ふ。繪など畫きて色どり給ふ。(一七)萬にをかしうすさび散し給ひけり。我(一八)も畫き添へ給ふ。髮いと長き女を畫き給ひて、鼻に

(一)末摘方へ源が
(二)浮き〳〵して色つぽい
(三)末摘
(四)きやしやな樣子をつくり居れり
(五)末摘の新年新裝の姿は如何あらんと
(六)待つて居て
(七)屋根もなく
(八)源が着るを眺めながら末摘が
(九)横臥したる
(一〇)髮が
(一一)雪の朝見現はして氣の毒なりしに懲りて
(一二)あげかけたる格子を脇息にもたせて明りを取る也
(一三)ちらほら交りたるを
(一四)洒落れて
(一五)人並なりと
(一六)源より贈りたるを其儘用ひたる也
(一七)源は其とは氣づかず
(一八)其のみ覺ありて氣づきたり

(一)夜ふかしておはしたり。例の有樣よりは、けはひうち(二)そよめきて世づいたり。(三)君も、少したをやぎ給へる氣色もてつけ給へり。いかにぞ、(五)改めてひきかへたらむ時、とぞ(四)思しつゞけらるゝ。日さし出づる程に(六)やすらひなして、出で給ふ。東の妻戸押し開けたれば、向ひたる廊の、(七)上もなく荒れたれば、日の脚程なくさし入りて、雪少し降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。(八)御直衣など奉るを見出して、少しさし出でて、(九)かたはら臥し給へる頭つき、(一〇)こぼれ出でたるほどいとめでたし。生ひ直りを見出でたらむ時と思されて、格子引きあげ給へり。(一一)いとほしかりし物懲に、上げもはて給はで、脇息をおしよせて、(一二)うちかけて、御鬢莖のしどけなきをつくろひ給ふ。わりなう古めいたる鏡臺、唐櫛匣、搔上の函など取り出でたり。流石に、男の御具さへほの〴〵(一三)あるを、(一四)ざれてをかしと見給ふ。女の御裝束、今日はよづきたり(一五)と見ゆるは、(一六)ありし筥の心ばへさながらなりけり。(一七)さも思しよらず、興ある紋つきて著き上著(一八)ばかりぞ怪しとは思しける。源「今年

（一）源の女を末摘方に
（二）逢はぬ夜の重なるさへつらき隔なるに又衣までも重ねて隔、二人の中の隔を増さんとし給ふか
（三）末摘よりの宮
（四）源の衣料
（五）山吹色の衣やら何やら
（六）命婦が取次ぎて源より末摘へ
（七）末摘方の人々の心、此方より奉りし衣の色合を
（八）此方の贈品も紅にて品格はよし
（九）嘲される事はあらじ
（一〇）老人
（一一）宮方の歌は
（一二）しつかりして居る
（一三）かの歌は大骨折で詠みたるなれば
㊈　正月七日の夜、源氏常陸宮邸に宿す
（一四）年始の祝に男の打囃ひ歌舞して所々をめぐる事
（一五）末摘方
（一六）賀式
（一七）天皇の御前

ひしろふ。御かへり（一）奉りたれば、宮には女房集ひて見愛でけり。

源　逢はぬ（二）夜をへだつる中の衣手にかさねていとゞ見もし見よとや

白き紙に、捨て書い給へるしもぞ、なかなかをかしげなる。晦日の日夕つ方、か（三）の御衣筥に、御料（四）とて人の奉れる御衣一具、葡萄染の織物の御衣、又山吹（五）か何ぞいろいろ見えて、命婦（六）ぞ奉りたる。ありし（七）色あひをわろしとや見給ひけむ、と思ひ知らるれど、「かれ（八）はた、紅のおもおもしかりしをや。さりとも消えじ」（九）と、（一〇）ねび人どもは定むる。「御歌も、こ（一一）れよりのは、理聞えてしたゝ（一二）かにこそあれ。御かへりは、唯をかしき方にこそ」など、口々にいふ。姫君も、（一三）おほろけならでし出で給へるわざなれば、物に書きつけて置き給へりけり。

朔日のほど過ぎて、今年男踏歌（一四）あるべければ、例の所々遊びのゝしり給ふに、物さわがしけれど、さ（一五）びしき所のあはれに思しやらるれば、七日の日の節會（一六）はてて、夜に入りて御前（一七）より罷出給ひけるを、御宿直所にやがて泊り給ひぬるやうにて、



心苦しの世や」と、いといたう馴れてひとりごつを、(一)善きにはあらねど、(二)斯様のかいなでにだにあらましかばと、かへすぐくちをし。(三)人の程の心苦しきに、名の朽ちなむは流石なり。人々參れば、源「取り隱さむや、(四)かゝるわざは人のするものにやあらむ」と、うちうめき給ふ。(五)何に御覽ぜさせつらむ、我さへ心なきやうに、といと恥かしくてやをら下りぬ。

又の日(六)うへに侍へば、臺盤所にさしのぞき給ひて、源「くはや、昨日の返事、(七)あやしく心ばみ過さるゝ」とて投げ給へり。女房たち、何事ならむとゆかしがる。源「(八)たたらめの花の色のごと、三笠の山のをとめをば棄てて」と、謠ひすさびて出で給ひぬるを、なほ命婦はいとをかしと思ふ。心知らぬ人々は、「なぞ、御獨笑は」と咎めあへり。命婦「あらず。寒き霜の朝に、(九)掻練好めるはなの色あひや見えつらむ。(一〇)御つゞしり歌のいとをかしき」といへば、女房「(一一)あながちなる御事かな。この中には、(一二)匂へる鼻もなかゝめり。(一三)左近の命婦、肥後の采女や交らひつらむ」など、(一四)心もえず言

(一)源の心、此歌がよきには非ざれども
(二)末摘がせめて此位な平凡な歌でも詠めれば
(三)身分が身分故、名譽を墮すは氣の毒也
(四)斯様な覗き事が人間に出來るものであらうか
(五)命婦の心
(六)清涼殿に命婦が
(七)氣扱ひし過す
(八)風俗歌「たゝらめの花のごと掻練好むやけし采色好むや」
(九)此中に、寒さに鼻を赤くして居る人のありしならん
(一〇)一口づつうたふ歌
(一一)ひどい事を仰せらるる
(一二)色づいた鼻
(一三)二人とも鼻赤き女と見ゆ
(一四)譯も分らず言合ふ

（一）源の心、ひどい歌のよみ樣哉
（二）自分の器量一杯
（三）常は侍從が直すならん
（四）外には直す先生も無きならん
（五）「かた」は「うた」の誤なるべし、勿體ない歌
（六）賜物の衣をいふ、今樣色は濃き紅梅色
（七）我慢の出來ぬ程
（八）色濃き
（九）下品に
（一〇）よき女でもなきに何しに彼樣な赤鼻の女に手を出した事ぞ、末摘花は紅花にて紅染の染料．
（一一）花、鼻
（一二）花の事を特に源の歌に言ひたるは仔細あらんと
（一三）自分が曾て月あかりなどにて見たる鼻の色を思ひ合せて
（一四）緣は薄くとも源が末摘の爲に恥をかくしてやる志あらば嬉しからん、紅の花衣は赤き鼻を利かせたる也

そは」と宣ひて、ことに物言はれ給はず。さてもあさましの口つきや、（一）これこそは、手づからの（二）御事のかぎりなゝめれ。侍從（三）こそは取直すべかゝめれ、また（四）筆のしりとる博士ぞなかるべきと、言ふかひなく思す。心を盡して詠み出で給へらむほどを思すに、源「いともかしこきかた（五）とは、これをも言ふべかりけり」と、ほゝゑみて見給ふを、命婦面赤みて見奉る。今樣色（六）の、え免すまじく（七）艶なう古めきたる直衣の、裏表ひとしうこまやかなる（八）、いとなほ〲しう（九）、つま〲ぞ見えたる。あさましと思すに、この文をひろげながら、端に手習ひすさび給ふを、側目に見れば、

源「なつかしき色ともなしに（一〇）なにゝこのすゑつむ花をそでに觸れけむ

色濃き花（一一）と見しかども」など、書きけがし給ふ。花のとがめ（一二）を、なほ有る樣あらむと、思ひあはする（一三）折々の月影などを、いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ。

命婦「くれなゐの（一四）ひとはな衣うすくともひたすらくたす名をしたてずば

(一)汝が我に隠す事は無い筈
(二)どう致しまして
(三)第一に申上げる積
(四)言ひかねたれば
(五)お株でしなをつくる
(六)末摘
(七)命婦が
(八)厚ぼつたき
(九)染みさせ
(一〇)末摘にしては
(一一)君がつらき故にわが袖は此の如く濡れたりと也、から衣は只衣を贈る歌なる故に譯もなく上におきたる也
(一二)首を傾けて考へ
(一三)命婦が末摘の贈物を推出したる也
(一四)源の元日の装料にとてわざ〳〵贈られたるを
(一五)一存で預り置くも當人の志に違ふ故
(一六)御覧の上にて取計らはん
(一七)「沫雪は今日はな降りそ白妙の袖まき干さん人もあらなくに」

やらぬを、源「何様のことぞ。(一)我にはつゝむ事あらじとなむ思ふ」と宣へば、命婦「い(二)かゞは。みづからの憂は、かしこくともまづこそは。(三)これはいと聞えさせにくゝなむ」と、いたう言籠めたれば、(四)例の艶なりと(五)悪み給ふ。命婦「かの宮より侍る御(六)文」とて、取り出でたり。源「ましてこれは、取り隠すべきことかは」とて、取り給ふも胸(七)つぶる。陸奥紙のあつごえたる(八)に、匂ばかりは深うしめ給へり(九)。いとよう書きおほせたり(一〇)。歌も、

末摘　からごろも君がこゝろのつらければ袂はかくぞそほぢつゝのみ(一一)

心得ずうち傾き給へる(一二)に、裹に、衣筥の重りかに古代なる、打置きて、推し出でたり(一三)。命婦「これを、いかでかは、かたはら痛く思ひ給へざらむ。されど、朔日の御(一四)よそひとて、わざと侍るめるを、はしたなうはえ返し侍らず。ひとり引き籠め侍(一五)らむも、人の御心違ひ侍るべければ、御覧ぜさせてこそは(一六)」と聞ゆれば、源「引き籠められなむは辛かりなまし。袖まきほさむ人もなき身に(一七)、いと嬉しき志にこ



さだかに見給ひては、なか〳〵哀にいみじくて、眞實なるさまに、常に音づれ給ふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの著るべき物の類、かの翁(一)のためまで、上下思しやりて奉り給ふ。(二)かやうのまめやか事も恥かしげならぬを心やすく、(三)さるかたの後見にてはぐくまむと思ほし取りて、(四)様ことにさならぬうち解けわざもし給ひけり。(五)かの空蟬の、うち解けたりし宵の側目(六)は、いとわろかりし容貌ざまなれど、もてなしにかくされて、口惜しうはあらざりきかし、(七)劣るべき程の人なりやは、實に品によらぬわざなりけり、(八)心ばせのなだらかに妬げなりしを、負けて止みにしかな、と物の折ごとには思し出づ。

歳も暮れぬ。内裏の御宿直所におはしますに、大輔の命婦參れり。(九)御梳櫛などには、懸想だつ筋なう、心やすきものの、さすがに宣ひ戯れなどして、使ひならし給へれば、召なき時も、聞ゆべき事ある折は參りのぼりけり。命婦「怪しきことの侍るを、(一〇)聞えさせざらむもひが〳〵しう、思ひ給へ煩ひて」と、ほゝゑみて聞え

(一)門番
(二)斯る世話に預りても末摘が恥しとも思はぬを氣安く思ひて
(三)生活上の保護者として
(四)立入りたる生活上の世話
(五)源の心
(六)側から見たる容
(七)末摘は空蟬に劣るべき人に非ず
(八)空蟬の氣立は穩にて床しかりしに

◉歳暮に末摘花より源氏に衣服を贈る、源氏の答歌

(九)源の髪の世話などして、色艶では無く心易くして
(一〇)申上げぬも筋違ひて

顏に、松の木の(一)おのれ起きかへりて、さとこぼるゝ雪も、名(二)にたつ末のと見ゆるなどを、いと(三)深からずとも、なだらかなる程にあへしらはむ人もがな、と見たまふ。御車出づべき門は、まだ開けざりければ、鍵の預尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で來たる。女にや、孫にや、(四)はしたなる大きさの女の、衣は雪に逢ひて煤け(五)惑ひ、寒しと思へる氣色深うて、(六)怪しきものに、火をたゞほのかに入れて、(七)袖ぐくみに持たり。翁門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかた(八)くななり。御供の人寄りてぞ開けつる。

源「(九)ふりにける頭のゆきを見る人も劣らずぬらす朝のそでかな(一〇)わかき者はかたちかくれず」とうち誦じ給ひて、鼻の色に出でていと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほゝゑまれ給ふ。頭中將にこれを見せたらむ時、(一一)如何なる事をよそへ言はむ、常に窺ひ來れば、今見つけられなむ、と術なうおぼす。(一二)尋常なるほどの、殊なることなさならば、思ひ捨てても止みぬべきを、

(一)ひとりでに
(二)「我袖は名にたつ末の松山か空より波の越えぬ日はなし」
(三)源の心、深き心は無くとも、かゝる場合を調子よく取廻す人がほしい
(四)どち付かずの
(五)煤けかへりて たゞが殊に目立ちたる也
(六)變な器に
(七)袖に引入れて
(八)無骨
(九)白頭の門番を憐む我が袖の露けさは翁の袖にも劣らず
(一〇)白居易秦中吟「夜深烟火盡、霰雪白紛々。幼者形不蔽、老者體無溫。悲端與寒氣、併入鼻中辛」
(一一)何に比較して評するならん
(一二)よい所が無しとても尋常一樣の女ならば此儘捨つべきを、餘りの不器量さに我ならでは世話する者もあらじと憐みて

(一)手嚴しい
(二)已に我に靡きて逢ひはしながら、むつかしく打解けぬは何ぞ
(三)降り積れる樣
(四)源の心、雨夜の品定に、世に知らぬ葎の門に不圖美人を見出さば心とまるべしといひし事
(五)繼母に對するけしからぬ戀
(六)住居は理想的なれど其に似合はぬ女の有樣
(七)自分さへ厭はしく思ふ此女を、他人はまして我慢して世話してはやるまじ
(八)死後を心配して殘し留めたる靈魂
(九)雪に埋れたるを

つひ給はむこそ、本意ある心地すべけれ。(一)ゆるしなき御氣色なれば、つらう」などことつけて、

源 朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつらゝの結ぼほるらむ(二)

と宣へど、唯「むゝ」とうち笑ひていと口重げなるもいとほしければ、出で給ひぬ。御車寄せたる中門の、いと痛うゆがみよろぼひて、夜目にこそ、著きながらも萬隱ろへたること多かりけれ、いと哀に淋しう荒れ惑へるに、松の雪のみ暖げに降(三)り積める、山里の心地して物あはれなるを、かの人々のいひし葎の門は、かやうなる所なりけむかし、(四)實に、心苦しくらうたげならむ人を此處にすゑて、後めたう戀しと思はゞや、あるまじき物思ひは、(五)それに紛れなむかしと、思ふ樣なる住處に合はぬ御有樣は取るべき方なし、(六)と思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや、(七)わが斯う見馴れけるは、父親王の後めたしとたぐへ置き給ひけむ魂のしるべなめり、(八)とぞ思さるゝ。橘の木の埋れたる、(九)御隨身召して拂はせ給ふ。羨み

しも、美しげにめでたしと思ひ聞ゆる人々にも、をさ〳〵劣るまじう、袿の裾にたまりて、曳かれたるほど、一尺ばかり餘りたらむと見ゆ。著給へる物どもをさへ言ひたつるも、(一)物言さがなきやうなれど、昔物語にも、人の御裝束をこそは先言ひたゝめれ。(二)ゆるし色の(三)わりなう上白みたる一襲、(四)なごりなう黒き袿重ねて、上著には黒貂の裘衣、いと清らにかうばしきを著給へり。古代の(五)ゆゑづきたる御裝束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなう(六)おどろ〳〵しきこと、(七)いともてはやされたり。されど實に、この皮なうては寒からまし、と見ゆる御顏ざまなるを、心苦しと見たまふ。(八)何事もいはれ給はず、(九)我さへ口閉ぢたる心地し給へど、例のしゞまも試みむと、とかう聞え給ふに、いたう恥らひて、口覆し給へるさへ、鄙びふるめかしう事々しう、儀式官のねり出でたる(一〇)臂もちおほえて、流石に(一一)うち笑み給へる氣色、はしたな(一二)うすゞろびたり。いとほしく哀にて、いとゞ急ぎ出で給ふ。源「頼もしき人なき(一三)御有樣を、(一四)見そめたる人には、疎からず思ひむ

(一)口の惡い
(二)紅又は紫
(三)非常に色薄き
(四)眞黒なる
(五)趣ある
(六)仰山なる
(七)非常に目立ちて見ゆ
(八)あきれて
(九)末摘の無言なるに對していふ
(一〇)臂つきが聯想されて
(一一)末摘が
(一二)落付かぬ
(一三)御有樣なるに
(一四)一旦契りたる男には打解けたるがよし

若う見え給ふを、老人ども笑み榮えて見奉る。老女「はや出でさせ給へ。あぢきな(一)し。心うつくしきこそ」(二)など教へ聞ゆれば、さすがに、人の聞ゆることをえ否び給はぬ御心にて、とかう引き繕ひて、ゐざり出で(三)給へり。(四)見ぬやうにて、外の方を眺め給へれど、後目はたゞならず。(五)如何にぞ、(六)うちとけまさりの聊もあらば嬉しからむ、と思すも、あながちなる御心なりや。まづ居丈の高う、(七)を背長に見え給ふに、(八)さればよと胸つぶれぬ。うち次ぎて、(九)あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。(一〇)普賢菩薩の乗物とおぼゆ。(一一)あさましう高うのびらかに、さきの方少し垂りて色づきたるほど、殊の外にうたてあり。色は、(一二)雪はづかしく白うて(一三)眞青に、(一四)額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、大方(一五)おどろ〳〵しく長きなるべし。痩せ給へること、いとほしげに(一六)さらぼひて、肩のほどなどは、痛げなるまで衣の上だに見ゆ。何に殘なう見顯しつらむ、と思ふものから、珍らしき様のしたれば、流石にうち見やられ給ふ。頭つき(一七)髮のかゝりは

(一)引込んで居るのは面白くなし
(二)女は素直なるが一番
(三)末摘が
(四)源が
(五)源の心
(六)打解けたる節に見勝りする所
(七)胴長
(八)果然醜女
(九)驚き哉と
(一〇)普賢菩薩の乗り給へる白象は鼻紅蓮華の如く赤き也
(一一)鼻が
(一二)長き也
(一三)覗き鼻の先の赤き也
(一四)おでこなる也
(一五)非常に
(一六)骨立して
(一七)髮の下りたる様のみは

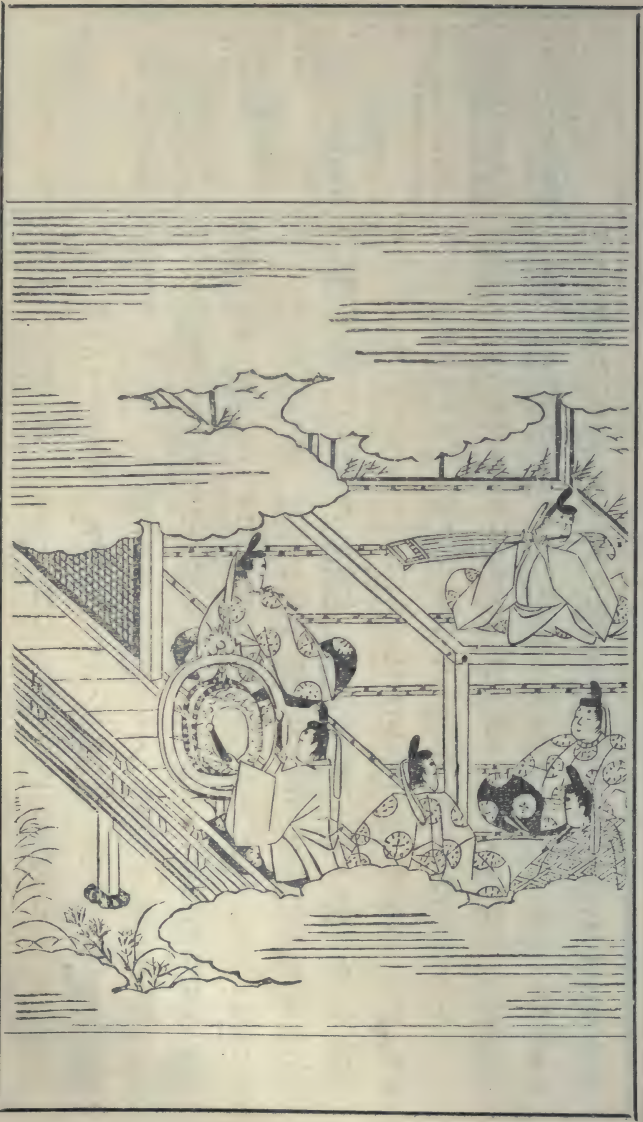
るやうにて、うち敲き給ふ。「そゝや(一)」などいひて、火とりなほし、格子放ちて入れ奉る。侍従は齋院(二)に參り通ふ若人にて、この頃はなかりけり(三)。いよ〳〵(四)、あやしう鄙びたる限にて、見ならはぬ(五)心地ぞする。いとゞ、うれふ(六)なりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空の氣色烈しう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、燈しつくる人もなし。かの物に(七)おそはれし折思し出でられて、荒れたる樣は劣らざめるを、ほどの狹う(八)、人氣の少しあるなどに慰めたれど、凄う、うたて(九)いざとき心地する夜の樣なり。をかしうもあはれにも、樣かへて(一〇)心とまりぬべきありさまを、いと埋れ(一一)すくよかにて、何の榮なきをぞ、口惜しうおぼす。

辛うじて明けぬる氣色なれば、格子手づからあげ給ひて、前の前栽の雪を見給ふ。踏みあけたる跡もなく、遙々と荒れわたりて、いみじう寂しげなるに、ふり出で(一二)て行かむこともあはれにて、源「をかしきほどの空も見給へ。つきせぬ(一三)御心の隔こそわりなけれ」と、恨み聞え給ふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとゞ(一四)清らに

(一)そち
(二)加茂の齋院なる内親王
(三)齋院へ參りたる留守
(四)侍從のなき跡の女どもは
(五)源が
(六)老婆程が寒しと心配した響
(七)夕顔と河原院に泊りし夜の事
(八)此邸は場所が狹く
(九)いやに目のさめ易き
(一〇)一風變つて却つて氣に入るべき筈であるのに
(一一)末摘が引込勝でそつけ無い爲に
(一二)わざ〳〵
(一三)何時までも止まぬ他人行儀
(一四)源が

(一)末摘が宵の間打解けて居る時分
(二)末摘
(三)亂りがはしく取退けてもなければ
(四)食卓の上にあるは青磁などの舶来品なれど
(五)醜さ
(六)物少なにて
(七)末摘の前を退きて
(八)上裝
(九)無骨らし
(一〇)給仕の女櫛を挿すは古式なりといふ
(一一)宮女の舞樂を習ふ處
(一二)斯る者が自分等に接すべきものとは夢にも源は思はず
(一三)斯樣ないやな時節
(一四)末摘の父親王
(一五)見つともなき愚痴をこぼしあふ

打解けたる宵居の程(一)、やをら入り給ひて、格子の間より見給ひけり。されど、自(二)は見え給ふべくもあらず。几帳など、いたく損はれたるものから、年經にける立處變らず、おしやりなど亂れねば(三)、心もとなくて、御達四五人居たり。御臺、祕色(四)やうの唐土のものなれど、人わろき(五)に、何のくさはひもなく(六)あはれげなる。罷出(七)て人々食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女房、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶(八)、引結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり(九)。さすがに櫛(一〇)押し垂れて挿したる額つき、内敎坊(一一)、内侍所のほどに、かゝる者どものあるはやとをかし。かけても(一二)、人のあたりに近うふるまふ者とも知り給はざりけり。女房「あはれ。さも寒き年かな。命長ければ、かゝる世(一三)にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。女房「故宮(一四)おはしましゝ世を、などて辛しと思ひけむ。かく憑なくても過ぐるものなりけり」とて、飛び立ちぬべく震ふもあり。樣々に人わろき事(一五)どもを愛へあへるを、聞き給ふもかたはら痛ければ、立ち退きて、たゞ今おはす



り。心にくゝ(一)もてなして止みなむと思へりしことを、くたいてける、心もなくこの人の思ふらむをさへおほす。正身の、物もいはで(二)思し埋もれ給ふらむ様、思ひやり給ふもいとほしければ、(三)「暇なきほどぞや。わりなし」とうち歎い給ひて、源「(四)もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、懲さむと思ふぞかし」と、ほゝゑみ給へる、若う美しげなれば、(五)我も打ち笑まるゝ心地して、(六)わりなの人に恨みられ給ふ御齢や、思ひやり少う、御心のまゝならむも理と(七)思ふ。この御いそぎ(八)の程過してぞ、(九)時々おはしける。

かの紫(一〇)のゆかり尋ねとり給ひては、そのうつくしみに心入り給ひて、六條わたりにだに、かれ(一一)まさり給ふめれば、まして(一二)荒れたる宿は、哀に思し怠らずながら、物憂きぞわりなかりける。(一三)所狭き物恥を見顕さむの御心も、殊になくて過ぎ行くを、(一四)打ちかへし見勝りする様もありかし、(一五)手さぐりのたどたどしきに、怪しう心得ぬ事もあるにや、見てしがな、と思ほせど、(一六)けざやかにとりなさむもまばゆし。

(一)姫を臥床しからせて逢はせずに仕舞はんとせし目論を、源が破つたのを心ない仕方と思ふであらうと思ふ
(二)塞ぎ込んで居る様子
(三)暇がないので行かぬのを恨むのは無理ぢやや
(四)末摘が余りつれなかりしを懲してやらんと
(五)命婦も
(六)源の年頃では思ひやりなきも当然なれば、恨む方が無理なり
(七)此若さ美しさでは
(八)朱雀院行幸の用意
(九)末摘方へ
㊆雪の夜、源氏常陸宮邸に宿りて末摘花の容姿に驚く、異様なる身
(一〇)藤壺のゆかりなる紫上
(一一)無沙汰勝
(一二)末摘方
(一三)無暗に恥かしがりて隠るゝ末摘の容貌を
(一四)源の心、よく見たらば却て見勝ることもあるべし
(一五)手探り故異に思はれたのかも知れぬ
(一六)露骨に顔を見せよといふも間が悪し

打ち置き給ふ。(一)如何に思ふらむと、思ひやるも安からず。(二)かゝる事を、悔しなど
はいふにやあらむ、さりとて如何はせむ。我さりとも(三)心長う見はててむ、と思し
なす御心を知らねば、(四)彼處にはいみじうぞ歎い給ひける。大臣、夜に入りて罷出
給ふに、ひかれ奉りて、(五)大殿におはしましぬ。行幸の事を興ありとおもほして、
君達集りて宣ひ、おの〳〵舞ども習ひ給ふを、その頃のことにて、物の音ども、常
よりも耳かしがましくて、方々いどみつゝ、例の御あそびならず、大篳篥、尺八
の笛などの、大聲を吹き上げつゝ、太鼓をさへ、勾欄のもとにまろばし寄せて、
手づから打ち鳴し、遊びおはさうず。(六)御暇なきやうにて、切に思す所ばかりにこ
そ、(七)ぬすまれ給へ、(八)かのわたりには、いと覺束なくて、秋暮れはてぬ。なほ(九)頼み
來しかひなくて過ぎゆく。行幸近くなりて、(一〇)試樂などのゝしる頃ぞ、命婦は參れ
る。源「如何にぞ」など問ひ給ひて、いとほしとは思したり。有樣聞えて、命婦「いと斯
う(一一)もて離れたる御心ばへは、見給ふる人さへ心苦しく」など、泣きぬばかりに思へ

(一)源の心、末摘が何と思ふならんと
(二)源の心
(三)氣長にいつまでも世話せん
(四)末摘方
(五)源が葵方へ
(六)源が
(七)拔けて行く事もあるが
(八)末摘方へは一向無沙汰で
(九)末摘方のあてがはづれて
(一〇)奏樂の試演
(一一)振向きもなされぬ君の御了簡、側でさへ姫君がも氣の毒

思し出でて、夕つ方ぞあり（一）ける。雨降り出でて所（二）狹くもあるに、笠宿（三）せむと、はた思されずやありけむ。（四）彼處には、待（五）つほど過ぎて、命婦も、いといとほしき御樣かなと、心憂く思ひけり。正身は、御心のうちに恥かしう思ひ續け給ひて、今朝の御文の暮れぬるも、（六）とかうしもなかなか思ひわき給はざりけり。

源「夕霧のはるゝけしきもまだ見ぬにいぶせさそふるよひの雨かな（七）

雲間待ち出でむ程、いかに心もとなう」とあり。（九）おはしますまじき御氣色を、人々胸（八）つぶれて思へど、なほ聞えさせ給へと、（一〇）そゝのかしあへれど、いとゞ思ひ亂れ（一一）給へるほどにて、え形の樣にもつゞけ給はねば、（一二）夜更けぬとて、侍從ぞ例の教へ聞ゆる。

末「晴れぬ夜の月待つ里をおもひやれ同じこゝろにながめせずとも（一三）

口々に責められて、紫の紙の、年經にければ灰（一四）おくれ古めいたるに、御手はさすがに文字づよう、（一五）中さだのすぢにて、上下ひと（一六）しく書い給へり。見る（一七）かひなう

（一）文を遣れり
（二）面倒にもある故
（三）泊りに行く氣にはならなかつたのであらう、「笠宿」とは、前に「いでや左樣にをかしき方の笠宿れはえしもや」といへる命婦の詞を受けたる也
（四）末摘方
（五）待ちぼうけして、男が女に逢へば、翌朝文をやるが此頃の常習也
（六）後れたる理由を判斷するに暇なし
（七）君の心の打解くる氣色なきが憎ましきに、雨迄が鬱陶しさを添へ來る
（八）雨が降らねば行く積りに言ひなしたる也
（九）源が今夜は來そうもなき樣子を見て
（一〇）御返事をなされ
（一一）末摘は
（一二）歌がよめねば
（一三）待つ身になりて見給へ、戀しさは同じ心ならずとも
（一四）色さめて
（一五）凄ならぬ中古風で
（一六）散し書にもせぬ氣のきかぬ書き様
（一七）受取りたる源が

(一)御見送りを指圖せぬ也
● 源氏末摘花に熱心ならず、朱雀院行幸の準備
(二)姫の身分
(三)氣には入らねど粗末の待遇も出來ねば也
(四)油斷したり
(五)內裏へ
(六)食せしめ
(七)車を二輛
(八)中將が源を
(九)さばくべき事務多き日にて、朱雀院の行幸につきてなるべし
(一〇)末摘の方

命婦は、如何ならむと、目覺めて聞き臥せりけれど、知り顔ならじとて、「御送に」(一)とも聲づくらず。君もやをら忍びて出で給ひにけり。

二條院におはして、うち臥し給ひても、なほ思ふに叶ひがたき世にこそと思し續けて、(二)輕らかならぬ人の御ほどを、(三)心苦しとぞおぼしける。思ひ亂れておはするに、頭中將おはして、中將「こよなき御朝寢かな。故あらむかしとこそ思ひ給へらるれ」といへば、起きあがり給ひて、源「心やすき獨寢の床にてゆるびにけり。(四)內裏よりか」と宣へば、中將「しか。罷出侍るまゝなり。朱雀院の行幸、今日なむ樂人舞人定めらるべきよし承りしを、大臣にも傳へ申さむとてなむまかんで侍る。やがて歸り參り(五)ぬべう侍り」と、いそがしげなれば、源「さらば、諸共に」とて、御粥強飯めして、客人にも參り(六)給ひて、引き(七)續けたれど、ひとつに奉りて、(八)猶いとねぶたげなりと咎め出でつゝ、隱い給ふこと多かりとぞ、恨み聞え給ふ。(九)事ども多く定めらるゝ日にて、內裏に侍ひ暮し給ひつ。(一〇)彼處には文をだにと、いとほしく

(一)身分に合せてはふざけて居る
(二)御返事が出來ぬ
(三)君が無言は、言ふにも勝りて我を思ひ給ふ也とは知れども、餘り物言はぬはつらし
(四)つまらぬ事ながら
(五)風がはりて
(六)別に想人のあるのでは無きか
(七)閤の鋼を
(八)前に無理な事はせじと源のいへるは、我に油斷させたる也と
(九)評判
(一〇)咎める氣にもならず
(一一)仰山に
(一二)姫が不意を襲はれたるを氣の毒に
(一三)夢中で
(一四)源の心、初の内は此樣なのが可愛い
(一五)變に物足らぬ樣な
(一六)面白くなければ也

な。(一)ほどよりはあまえてと聞き給へど、めづらしきに、源「なかなか(二)口ふたがるわざかな。(三)言はぬをもいふに勝ると知りながらおしこめたるは苦しかりけり」何やかやと、(四)はかなき事なれど、をかしき樣にもまめやかにも宣へど、何のかひなし。いとかゝるも、(五)樣かへて(六)思ふかた異に物し給ふ人にやと、ねたくて、やをら(七)押しあけて入り給ひにけり。命婦、あなうたて、(八)たゆめ給へると、いとほしければ、知らず顏にて我方に去にけり。この若人どもはた、世に類なき御有樣の(九)音聞に、(一〇)罪ゆるし聞えて、(一一)おどろおどろしうも歎かれず、たゞ思ひもよらず俄にて、(一二)さる御心もなきをぞ思ひける。正身は、唯我にもあらず、(一三)恥かしくつゝましきより、外の事又なければ、(一四)今はかゝるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人の、うちかしづかれたると、見ゆるし給ふものから、(一五)心得ずなまいとほしと覺ゆる御樣なり。何事につけてかは御心のとまらむ、(一六)うちうめかれて、夜ふかう出で給ひぬ。

(一)命婦の心、我が常に責めらるゝを免れんとて姫に氣の毒な心配をさせる事にならんかと
(二)姫の身分の高きを思へば
(三)じやら〳〵した當世風の氣取女よりは
(四)姫が人に
(五)えび香、衣に薫き籠むる香
(六)手紙でさへ返事せねば也
(七)仕樣のない事
(八)しゞまは無言、君が返事はせぬも似我に再び言ふこと勿れと言はぬを、せめても頼みにして辛抱し來れるも幾度ぞや
(九)斷るならば斷りて呉れどちら付かずでは苦し
(一〇)「思はずば思はずとやは言ひはてぬなぞ世の中の玉襷なる」
(一一)お轉婆なる
(一二)論議とて僧が宗教上の議論する時結了の相圖の鐘をしゞまの鐘といふ、しゞまの鐘をつく如く斷然斷る事は流石出來ぬ故、返事しかねて自ら當惑する
(一三)重々しからぬ
(一四)取次ではなく、姫自らいふ如くに

ろやすう、さし過ぎたる事は見え奉り給はじと思ひける。(一)わが常に責められ奉る罪さりごとに、心苦しき人の御物思ひや出で來むなど、安からず思ひ居たり。君は、(二)人の御程を思せば、(三)ざれくつがへる、今やうの由ばみよりは、こよなう奥ゆかしう思しわたるに、(四)とかう嗾されて、ゐざり寄り給へるけはひ、忍びやかに、(五)えびの香いと懷しう薫り出でて、おほどかなるを、さればよとおぼさる。年頃思ひわたる樣など、いと能く宣ひ續くれど、まして近き(六)御答は絶えてなし。源「(七)わりなのわざや」とうち歎き給ふ。

源「(八)いくそたび君がしゞまにまけぬらむ物ないひそといはぬたのみに

(九)宣ひも捨ててよかし。(一〇)玉だすきくるし」と宣ふ。女君の御乳母子、侍從とて、いと(一一)はやりかなる若人、いと心もとなう、かたはら痛しと思ひて、さし寄りて聞ゆ。

侍(一二)鐘つきてとぢめむことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

いと若びたる聲の、殊に(一三)おもりかならぬを、(一四)人傳にはあらぬやうに聞えなせば、

せず思し憚るは、つきなうこそ」と敎へ聞ゆ。さすがに、人のいふ事は強うもいなびぬ(一)御心にて、末摘(二)「答へ聞えで唯聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」と宣ふ。命婦(三)「簀子などは便なう侍りなむ。推し立ちて、あは〳〵しき御振舞などは、よも」などいとよく言ひなして、二間のきはなる障子、(四)手づからいと強く鎖して、御褥うち置きひきつくろふ。いとつゝましげに思したれど、かやうの人に物言ふら(五)む心ばへなども、夢にも知り給はざりければ、命婦のかう言ふを、(六)あるやうこそはと思ひて物し給ふ。乳母だつ老人などは、曹子に入り臥して、(七)夕まどひしたるほどなり。若き人二三人あるは、(八)世に愛でられ給ふ御有樣を、ゆかしきものに思ひ聞えて、(九)心げさうしあへり。(一〇)よろしき御衣奉りかへつくろひ聞ゆれば、(一一)正身は、何の心げさうもなくておはす。男は、(一二)いとつきせぬ御さまを、うち忍び用意し給へる御けはひ、いみじうなまめきて、(一三)見知らむ人にこそ見せめ、何の榮あるまじきわたりを、あないとほしと命婦は思へど、たゞ、(一四)おほどかに物し給ふをぞうし

(一)反對せぬ
(二)返事せず聞くだけならば戸を隔てゝ逢はん
(三)源を縁側に置くは不都合なり、内に入れても無理な輕率な行動は決してなさるまじ
(四)命婦が
(五)應對する心得
(六)仔細のある事ならん
(七)皆ねぼけ
(八)源の
(九)内々胸をどきつかせて居る
(一〇)末摘に
(一一)當人
(一二)無類の美しき
(一三)命婦の心、分る人にこそ見せても效あれ、此樣を見せ栄せぬ處では紙の贈なり
(一四)姫の大樣なるを安心に思ひて、あれならば出過ぎて失敗することはあるまいと思ふ

(一)命婦が
(二)源が
(三)末摘が
(四)悪くもなし
(五)當世風の所を添へたしと命婦が不足に思ひ居たり
(六)源が
(七)源の來るを今知つた顏をして
(八)源の御出なり
(九)姫の返事なしとて
(一〇)私の一存では出來ぬと申譯のみし居る故、姫に直談判せんと常に仰せある也
(一一)斷つて返す事も出來ぬ
(一二)常人の一寸出て來た樣な譯にあらねば
(一三)源の詞を聽き給へ
(一四)挨拶の仕樣
(一五)奧の方へ
(一六)高貴の人
(一七)何時までも御遠慮あるは不似合なり

よき折かなと(一)思ひて、御消息や聞えつらむ、例のいと(二)忍びておはしたり。月やうやう出でて、荒れたる籬のほど疎ましく、(三)打ち眺め給ふに、琴そゝのかされて、ほのかに掻き鳴し給ふほど、(四)けしうはあらず。少し(五)今めきたるけをつけばやとぞ、亂れたる心には、心もとなく思ひ居たる。人目しなき所なれば、(六)心やすく入り給ふ。命婦を呼ばせ給ふ。(七)今しも驚きがほに、命婦「いとかたはら痛きわざかな。(八)しかじかこそおはしましたなれ。(九)常にかう恨み聞え給ふを、(一〇)心にかなはぬ由をのみ、聞えすまひ侍れば、自らことわりも聞え知らせむと、宣ひわたるなり。(一一)いかゞ聞え返さむ。なみ〳〵の容易き御振舞ならねば心苦しきを、物ごしにて、(一二)聞え給はむこと(一三)聞し召せ」といへば、いと恥かしと思ひて、末摘「人に(一四)物聞えむやうも知らぬを」とて、(一五)奧ざまへゐざり入り給ふ樣、いとうひ〳〵しげなり。うち笑ひて、命婦「いと若々しうおはしますこそ心苦しけれ。(一六)かぎりなき人も、親のあつかひ後見聞え給ふほどこそ、若び給ふも理なれ。かばかり心ぼそき御有樣に、(一七)なほ世をつき

(一)奥床しさうでも無いのに
(二)手引をして逢はせて却て氣の毒な事になるかも知れぬなど
(三)時代後れの家と人が思ひて
(四)尋ね來る人
(五)源の文をよこすを
(六)ほく〳〵もので
(七)返事をなされ
(八)姫が取合はぬ
(九)源などを隔てゝ間逢なされて、氣に入らずばお止めなされる分の事
(一〇)縁あつて
(一一)命婦の浮氣な輕率心に考へて
(一二)命婦の父兵部大輔
(一三)斯かる事ありとも
(一四)末摘が

君の御有樣も、似つかはしく、(一)よしめきなどもあらぬを、なか〳〵なるみちびき(二)に、いとほしきことや見えなむなど思ひけれど、君のかうまめやかに宣ふに、聞き入れざらむもひがひがしかるべし。父親王のおはしける折にだに、(三)舊りにたるあたりとて、音なひ聞ゆる人もなかりけるを、まして今は(四)淺茅わくる人も跡絶えたるに、かく(五)世に珍らしき御けはひの漏り匂ひ來るをば、生女房なども笑み(六)設けて、なほ聞え(七)給へとそゝのかし奉れど、あさましう物づつみし給ふ心にて、一向に(八)見も入れ給はぬなりけり。命婦は、さらば然りぬべからむ折に、物越に(九)聞え給はむほど、御心につかずば、さても止みねかし。(一〇)又さるべきにて、假にもおはし通はむを、咎め給ふべき人もなしなど、(一一)あだめきたるはやり心はうち思ひて、(一二)父君にも、(一三)かゝる事なども言はざりけり。

八月廿餘日、宵過ぐるまで待たるゝ月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、(一四)いにしへの事語り出で、打ち泣きなどし給ふ。いと

かなる樣ぞ。いとかゝる事こそまだ知らね」と、いとものしと思ひて宣へば、いとほしと思ひて、命婦「(一)もてはなれて、似げなき御事とも、おもむけ侍らず。たゞ大方の御物づつみのわりなきに、手をえさし出で給はぬとなむ見たまふる」と聞ゆれば、源「それこそ(二)世づかぬことなれ。物思ひ知るまじきほど、獨身をえ心に任せぬほどこそ、さやうに(三)かゞやかしきも理なれ。(四)何事も思ひしづまり給へらむと思ふにこそ。そこはかとなく、徒然に心ぼそうのみ覺ゆるを、(五)同じ心に答へ給はむは、願ひかなふ心地なむすべき。何やかやと(六)世づけるすぢならで、その荒れたる簀子にたゝずまゝほしきなり。いと(七)覺束なう心得ぬ心地するを、(八)かの御ゆるしなくともたばかれかし、(九)心いられし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」など語らひ給ふ。(一〇)なほ世に在る人の有樣を、大方なるやうにて聞き集め、耳とゞめ給ふ癖のつき給へるを、さうぐ\しき宵居などに、はかなき序に、さる人こそとばかり聞え出でたりしに、かくわざとがましう宣ひわたれば、なま煩はしく、姫

(一)頭から飛でもない不似合の事の様に申上げてある譯ではなし、只無暗に恥かしいので手が出ないと見えます
(二)色氣なき
(三)恥かしきも
(四)姫はよく物が解つて居る筈と思ふ故、返事をも待遠に思ふ也
(五)我が交に對して同情ある返事をくれたらば
(六)色戀の沙汰でなく、只折々尋ねて見たきなり
(七)合點のゆかぬ
(八)姫は承知せずとも、汝計らひて案内せよ
(九)汝が氣のもめるいやらしい事は決してせぬ積
(一〇)以下「見えなむ」迄命婦の心、元々寂しき晩抔に退屈紛に一寸語出したるに過ぎぬに、源は女の噂を聞流して居る振をして氣に留めぬ癖ありて斯く命婦を責めるを面倒に思ひ

(一)浮氣らしと我を疑ふならんが
(二)我は直に氣の變ることは無けれど、女の方で大人しくないので餘儀なく緣を切る事がある故、自ら我が過になる
(三)面白い時々の御泊所としては、不適當に思はれる
(四)無暗に遠慮して引込める點は珍らしい
(五)功者に才はぢけた所
(六)子供らしておほ樣なのが可愛らしい
(七)若紫卷の初に見ゆ
(八)夕顏に對する戀
㊄源氏末摘花に逢ふ
(九)夕顏の家に宿りし時の事
(一〇)返事の來ぬ也
(一一)普通と勝手が違つて氣怯で
(一二)姫はどんな樣子ぞ對面を目には遇うた事がない

いと心憂き。(一)すき〴〵しき方に、疑ひよせ給ふにこそあらめ。さりとも(二)短き心はえつかはぬものを、人の心ののどやかなる事なくて、思はずにのみあるになむ、自ら我が過にもなりぬべき。心のどかにて、親兄弟のもてあつかひ怨むるもなう、心安からむ人は、なか〳〵なむらうたかるべきを」と宣へば、命婦「いでや、さやうに(三)をかしき方の御笠宿には、えしもやと、つきなげにこそ見え侍れ。偏に物づつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたう物し給ふ人になむ」と、(四)見る有樣かたり聞ゆ。源「(五)らう〳〵しうかどめきたる心はなきなゝめり。いと(六)兒めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と、思し忘れず宣ふ。(七)瘧病に煩ひ給ひ、人知れぬ物思ひのまぎれも、御心の暇なきやうにて、春夏過ぎぬ。(八)秋の頃ほひ、靜に思し續けて、(九)かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、戀しう思し出でらるゝまゝに、常陸宮には屢聞え給へど、なほ覺束なう(一〇)のみあれば、(一一)世づかず心やましう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責め給ふ。源「い(一二)

㊃ 二人競ひて末摘花を挑む
(一)源と中將より末摘へ
(二)中將の心、餘りじれつたい事哉
(三)人情を解する樣子を
(四)樣子つくりて
(五)引込み過ぎたるは
(六)氣にくはず下品らしい
(七)じれる
(八)源と中將
(九)斯樣々々の文の返事がありましたか
(一〇)私は遠廻しに口説いて見ましたが、間が惡くてやめました
(一一)返事があつたでもなく無かつたでも無し
(一二)末摘が毛嫌したと
(一三)源は一體熱心でもなきに返事も碌になければ興味は無くなりたれど
(一四)中將が末摘をつけ廻すので女は口前のよい方に靡くならん、其曉には女も得意で先口の我を見向きせずば不快ならんと思ひて
(一五)末摘が取合はぬので困る

その後此方彼方より、(一)文など遣り給ふべし。いづれも〳〵返事見えず、覺束なく心やましきに、(二)あまりうたてもあるかな、さやうなる住居する人は、(三)物思ひ知りたる氣色、はかなき木草、空の氣色につけても、(四)とりなしなどして、心ばせ推し量らるゝ折々あらむこそ哀なるべけれ、重しとても、いとかう(五)餘り埋れたらむは、(六)心づきなくわろびたりと、中將はまいて(七)心いられしけり。例の(八)へだて聞え給はぬ心にて、中將「しか〴〵の(九)返事は見給ふや。(一〇)試にかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」と憂ふれば、さればよ、言ひ寄りにけるをやと、ほゝゑまれて、源「いさ見むとしも思はねばにや、(一一)見るとしもなし」と答へ給ふを、(一二)人わきしけるとねたう思ふ。君は(一三)深うしも思はぬことの、かう情なきをすさまじく思ひなり給ひにしかど、(一四)かうこの中將の言ひありきけるを、言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし、したり顔にて、もとの事を思ひ放ちたらむ氣色こそ、うれはしかるべけれと思して、命婦を、まめやかに語らひ給ふ。源「覺束なうもて(一五)離れたる御氣色なむ、

ども(一)召して著替へ給ひ、(二)つれなう今來るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、左大臣例の(三)聞き過し給はで、狛笛取り出で給へり。いと上手におはすれば、いと面白う吹き給ふ。御琴召して、(四)うちにも、この方に心得たる人々に彈かせ給ふ。(五)中務の君、わざと琵琶はひけど、(六)頭の君心かけたるをもて離れて、唯(七)このたまさかなる御氣色の懷しきをば、え背き聞えぬに、おのづから隱れなくて、(八)大宮なども、よろしからず思しなりたれば、物おもはしく(九)はしたなき心地して、(一〇)すさましげに寄りふしたり。(一一)絶えて(一二)見奉らぬ所にかけ離れなむも流石に心ぼそく、思ひ亂れたり。(一三)君たちは、ありつる(一四)琴の音を思し出でて、哀げなりつる住居の樣など、樣かへてをかしう思ひ續け、(一五)あらましごとに、(一六)いとをかしうらうたき人の、(一七)さて年月を重ね居たらむ時、見そめて(一八)いみじう心苦しくば、(一九)人にも持て騷がるばかりや我が心も樣あしからむ、などさへ中將は思ひけり。(二〇)この君のかう氣色ばみ歩き給ふを、まさにさては過し給ひてむやと、なまねたう危がりけり。

(一)取寄せて
(二)何喰はぬ顔で
(三)聞流しにはして居ず
(四)簾中の婦人達も
(五)葵上の侍女
(六)頭中將の口說くをはねつけて
(七)稀に來る源の樣子のよいに惚れて言ふ事を聞く所が
(八)葵の母
(九)間の惡き心地
(一〇)つまらなそうに隅へ寄つて寢たり
(一一)中務の心
(一二)源を見ぬ所に離れて居るのも
(一三)源と中將
(一四)末摘の
(一五)假定して
(一六)頭中將の心
(一七)あの如き侘住居にて
(一八)いぢらしくてならぬ樣ならば
(一九)他人に批難される樣にのぼせるかも知れぬ
(二〇)中將の心、源が今夜の樣に行くからは只は置くまじと危險に思へり



ふと寄りて、中將「振り捨てさせ給へるつらさに、御送り仕う奉りつるは。

(一)もろともに大内山は出でつれど入るかた見せぬいさよひの月」

と恨むるもねたけれど、此の君と見給ふに、少しをかしうなりぬ。源「人の思ひよ(二)らぬことよ」と憎む〳〵、(三)

源(四)里わかぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる

中將「かう慕ひありかば、如何にせさせ給はむ」と聞えたまふ。中將「まことは、(五)かやうの御ありきにも、(六)隨身がらこそはかゞしき事もあるべけれ。(七)後らさせ給はでこそあらめ。やつれたる御歩行は、輕々しき事も出で來なむ」と、押し返し諫め奉る。斯うのみ見つけらるゝを、ねたしと思せど、かの撫子(八)はえ尋ね知らぬを、(九)重き功に、御心のうちに思し出づ。(一〇)おの〳〵契れる方にも、あまえて、行別れ給はず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに、雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿におはしぬ。先驅なども追はせ給はず、忍びて入りて、人見ぬ廊に御直衣

(一)一緒に出ながら行き所を知らせぬ性悪男よ
(二)人のあとをつける抔とは思ひもよらぬ怪しからぬ事よ
(三)憎みながら
(四)月は何處へでもさし込めども、其月の入處を斯の様に穿鑿する者は無い
(五)實情を申上げれば
(六)御作次第で甘く行く事もあるべし
(七)私を御召連あれ
(八)夕顔の娘の事は中將實父ながら知らぬ也
(九)何よりの手柄
(一〇)ふざけて銘々約束の女の處へも行かず

(一)外の人のいふ様に我を咎めだてするな
(二)汝などの身持はどうしたものぢや
(三)今迄も命婦の身持浮氣過ると思ひて

㊂ 歸路を頭中將に見顯はさる

(四)姫の物腰が聞えるかと思ひて
(五)姫をねらつて居る助平男
(六)源と中將と
(七)中將が怪しく思ひて
(八)中將も行くべき所あれど
(九)中將が
(一〇)甚しくやつしたる姿にて
(一一)源が中將の付き來るを
(一二)別の家に
(一三)中將も琴の音に聞き入つて
(一四)心待ちする

と聞ゆれば、立ち返りうち笑ひて、源「(一)他人のいはむ様に、咎なあらはされそ。之をあだ〳〵しき振舞といはば、(二)女の有樣苦しからむ」と宣へば、(三)あまり色めいたりとおぼして、折々かう宣ふを、恥かしと思ひて物も言はず。

寢殿のかたに、(四)人のけはひ聞く樣もやと思して、やをら立ち出で給ふ。透垣のただ少し折れ殘りたるかくれの方に、立ち寄り給ふに、もとより立てる男ありけり。誰ならむ、(五)心かけたるすきものありけりと思して、陰につきて立ち隱れ給へば、頭中將なりけり。この夕つ方、内裏より(六)もろともに罷出給ひけるを、やがて大殿にもよらず、二條院にもあらで、引き別れ給ひけるを、何方ならむと(七)たゞならで、(八)我も行く方あれど、跡につきて窺ひけり。(九)あやしき馬に、狩衣姿の(一〇)ないがしろにて來ければ、(一一)え知り給はぬに、さすがに、かう(一二)異方に入り給ひぬれば、心も得ず思ひけるほど、(一三)物の音に聞きついて立てるに、かへりや出で給ふと、(一四)したまつなりけり。君は、誰ともえ見わき給はで、我と知られじと、拔足に歩み退き給ふに、

(一)姫を口説かんかと
(二)姫が突然に思はんか
(三)氣のきゝたる女にて
(四)源に餘りよく聞かせまいと
(五)此所に居ては客を避けたる樣で惡い
(六)又ゆるりと承はらん
(七)琴を勸めもせず
(八)上手か下手かの分る程に彈かせもせず
(九)源が氣に入りたる也
(一〇)奥床しく思はせんと思ふ故
(一一)沈み込んで
(一二)立聞は氣がとがめる
(一三)源の心
(一四)手取早く打解くるは身分輕き者の事よ
(一五)源が懸して居る由を姫に告げよ
(一六)約束の所
(一七)源が堅過ぎて困ると帝が仰せらるゝが可笑し
(一八)忍び歩きの姿
(一九)帝の御目にかけたい

けて、(一)物やいひ寄らましと思せど、(二)うちつけにや思さむと、心恥かしくてやすらひ給ふ。命婦かど(三)ある者にて、いたう(四)耳ならさせ奉らじと思ひければ、命婦「曇りがちに侍るめり。客人の來むと侍りつる、厭ひ顔(五)にもこそ。いま心(六)のどかにを。御格子まゐりなむ」とて、いたうもそゝ(七)のかさで歸りたれば、源「なか〳〵なる程にても止みぬるかな。物聞(八)き分く程にもあらで、ねたう」と宣ふ氣色、をかし(九)とおぼしたり。源「おなじくば、氣近き程のけはひ立聞せさせよ」と宣へど、心にく(一〇)くてと思へば、命婦「いでや、いとかすかなる有樣に思ひ(一一)消えて、心苦しげに物し(一二)給ふめるを、後めたき樣にや」といへば、實(一三)に然もあること、俄(一四)に我も人も打解けて語らふべき人の際は、際とこそあれ、など哀に思さるゝ人の御ほどなれば、源「猶さやうの氣色をほのめかせ」と語らひ給ふ。又契(一六)り給へる方やあらむ、いと忍びて(一五)歸り給ふ。命婦「上(一七)の、まめにおはしますと持てなやみ聞えさせ給ふこそ、をかしう思う給へらるゝ折々侍れ。かやうの御(一八)やつれ姿を、いかでかは御覧(一九)じつけむ」



（一）姫の所へ行きて
（二）源を
（三）氣遣ひに勿體なしとは思ひながら
（四）明けたる儘にて
（五）斯かる時に彈いたらば
（六）誘はれて參れり
（七）聞ける人が居るので恥かし、御前に出入する人に聞かせる程には彈けぬ
（八）琴を
（九）源が
（一〇）緊張したる
（一一）傳授の系統が格別であるに
（一二）源の心
（一三）常陸宮とも言はれし人が
（一四）大事にして
（一五）世の經驗無かるべし

とかたはらいたきわざかな、物の音澄むべき夜の樣にも侍らざめるに」と聞ゆれど、源「猶(一)あなたに渡りて、たゞ一聲催し聞えよ。空しくてかへらむが妬かるべきを」と宣へば、打ちとけたる住處にすゑ奉りて、(二)後めたう(三)辱なしと思へど、寢殿に參りたれば、まだ格子もさながら、(四)梅の香をかしきを見出して物し給ふ。よき折かなと思ひて、命婦(五)「御琴の音いかにまさり侍らむと、思ひ給へらるゝ夜のけはひに、(六)誘はれ侍りてなむ。心あわたゞしき出入に、え承らぬこそくちをしけれ」といへは、末摘(七)「聞き知る人こそあンなれ。百敷に行きかふ人の聞くばかりやは」とて、(八)召し寄するもあいなう、いかゞ(九)聞き給はむと胸つぶる。ほのかに掻きならし給ふ。をかしう聞ゆ。何ばかり(一〇)深き手ならねど、物の音がらのすぢ(一一)殊なる物なれば、聞きにくゝも思されず。(一二)いと痛う荒れわたりて淋しき所に、さばかり(一三)の人の、古めかしう、(一四)所狹くかしづき居ゑたりけむ名殘なく、(一五)如何に思ほし殘す事なからむ、かやうの所にこそは、昔物語にも哀なる事ともありけれ、など思ひ續

(一) 常陸大守に任ぜられし親王
(二) 晩年に
(三) 末摘花と名づく
(四) 父の死後に
(五) 大輔命婦が源に
(六) 引籠りて
(七) 然るべき宵に居あはせたる時など
(八) 友と
(九) 唐の白居易は琴詩酒を三の友とせしが、女にては二種は兎に角、酒は眞平御免なるべし
(一〇) 其姫の琴を
(一一) 音樂の方には黑人なりしかば
(一二) 姫も
(一三) 望んで聞く程の伎倆てはあるまじ
(一四) ひどく勿體をつけるではないか
(一五) 汝も下りて姫の處に在れ
(一六) 父の大輔が姫の家に
(一七) 大輔の後妻
(一八) 源が

にければ、父君の許を里にて行通ふ。(一)故常陸の親王の、末(二)にまうけていみじうかしづき給ひし御女(三)、心細く(四)て殘り居給へるを、事の序に語り(五)きこえければ、哀の事やとて問ひ聞き給ふ。命婦「心ばへ容貌など、深き方はえ知り侍らず。かいひそめ(六)人疎うもてなし給へば、さ(七)べき宵居など、物越にてぞかたらひ侍る。琴をぞ懐しきかた(八)らひ人と思ひ給へる」と聞ゆれば、源「三の友(九)にて、今一種やうたてあらむ」とて、源「我に(一〇)聞せよ。父親王の、さや(一一)うの方にいとよしづきて物し給ひければ、おしなべて(一二)の手使にはあらじと思ふ」と語らひ給ふ。命婦「さやうに(一三)聞し召すばかりには侍らずやあらむ」といへば、源「いたう(一四)氣色ばましや。この頃の朧月夜に忍びて物せむ。罷出よ(一五)」と宣へば、煩はしと思へど、內裏邊ものどやかなる、春のつれづれに罷出ぬ。父の大輔の君は外にぞ住みける。こゝには(一六)時々ぞ通ひける。命婦は、繼母(一七)のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりを睦びて、此處には來るなりけり。宣ひしもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり(一八)。命婦「い

こりずまに(一)思し渡れば、少し(二)ゆゑづきて聞ゆるわたりは、御耳とまり給はぬ限なきに、さても(三)やと思し寄るばかりのけはひある邊にこそは、一行をもほのめかし給ふめるに、靡き(四)聞えずもてはなれたるは、をさ〳〵あるまじきぞ、いと目馴れた(五)るや。つれなう(六)心強きは、たとしへなう情後るゝまめやかさなど、あまり物のほど知らぬやうに、さて(七)しも過しはてず、名殘なくくづほれて、なほ〳〵しき方に定りなどするもあれば、宣ひさして(八)つるも多かりけり。かの空蟬を、物の折々には妬ましう思し出づ。荻(九)の葉も、さりぬべき風の便ある時は、驚かし(一〇)給ふ折もあるべし。火影の亂れたりし(一一)樣は、又さやう(一二)にても見まほしくおぼす。おほかた、名(一三)殘なき物わすれをぞ、えし給はざりける。

左衛門の乳母とて、大貳(一四)の尼君のさしつぎに思いたるが女、大輔の命婦とて、内裏にさぶらふ。わかんどほり(一五)の、兵部大輔なるが女なりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひなどし給ふ。母は、筑前守の妻にて、下り(一六)

(一)夕顔にも懲りず
(二)取所のあるといふ噂の女には
(三)彼ならばと思はれる様子の女を擇つて手紙をやる趣が
(四)振りつける女は
(五)珍らしくない
(六)靡かぬ女があれば、飽まで鋼骨生眞面目で物が分らず
(七)と云うて男嫌で通す事もならず、へこたれてつまらぬ夫を持ちなどするもある故
(八)戀を中止したるも
(九)軒端荻
(一〇)音信する
(一一)燈下の打解姿
(一二)あの時の様にして
(一三)丸で前の女を忘れて仕舞ふ事は出來ぬ性質
㊁ 忍びて末摘花の事を聞く
(一四)源が惟光の母の次に大事に思ふ乳母
(一五)皇子の系統
(一六)夫の任國へ

末摘花

梗概

㊀ 夕顏の歿後に於ける源氏の無聊。㊁ 大輔の命婦に常陸宮の遺孤末摘花の噂を聞く。命婦の手引にて、忍びて末摘花の琴を聞く。㊂ 歸路を頭中將に見顯はさる。頭中將と葵上の侍女中務。㊃ 源氏と頭中將と各末摘花を挑む。㊄ 源氏大輔命婦に取持を強ひて、終に末摘花に逢ふ。㊅ 源氏末摘花に熱心ならず。末摘花方の人々の嘆。朱雀院行幸の準備。㊆ 雪の夜源氏常陸宮邸に宿りて末摘花の容姿に驚く。異樣なる鼻。荒涼たる常陸宮邸。源氏末摘花を憐む。㊇ 歳暮に末摘花より源氏に衣服を贈る。源氏の答禮。末摘花の餘りに愚なるを嘆く。㊈ 正月七日の夜源氏常陸宮邸に宿す。㊉ 二條院にて源氏畫をかきて紫上と戲る。鼻赤き女の畫。

思へどもなほ飽かざりし(一)夕顏の露におくれし程の心地を、年月經れどおぼし忘れず、(二)此處も彼處も、うちとけぬ限の、氣色ばみ心深きかたの御いどましさに、氣近く(三)懷じかりしあはれに似るものなう、戀しく覺え給ふ。いかで、(四)事々しきおぼえはなく、いとらうたけならむ人の、つゝましき事なからむ、見つけてしがなと、

㊀ 夕顏の歿後源氏の無聊

(一) 夕顏上に死なれた時の悲を

(二) 葵でも六條御息所でも氣が置かれて奧底のある面倒さに

(三) 夕顏の人なつこかりしが類なく思はれて

(四) 身分輕く可愛くて遠慮のない女を見付けたいものぢやと

今はたゞこの後の親を、(一)いみじう睦びまつはし聞え給ふ。(二)物よりおはすれば、(三)まづ出で向ひて、哀にうち語らひ、御懷に入り居て、いさゝか疎く(四)恥かしとも思ひたらず、さる方には、(五)いみじうらうたきわざなりけり。さかしら心あり、(六)何くれとむつかしき筋になりぬれば、我が心地も少し違ふふしも出でくやと、心おかれ、人もうらみがちに、思の外の事も、自ら出で來るを、(七)いとをかしきもてあそびなり。女などはた、(八)かばかりになりぬれば、心やすく打振舞ひ、隔なきさまに起き臥しなどは、(九)えしも爲まじきを、これはいと樣かはりたるかしづき種なりと、(一〇)思いたゞめり。

(一)源氏
(二)付纏ひ
(三)源が外より歸れば
(四)他人がましく
(五)戀ならぬ愛情の關係としては
(六)女に分別あり關係も複雜なる中は、男も女の心を兼ねて遠慮し、女も男を恨みなどして
(七)家には其面倒はなくして
(八)我娘でも家程の年頃になれば
(九)出來る譯でないのに
(一〇)源が

に口(一)がためやりつゝ、たゞ、行方も知らず少納言が率て隱し聞えたる、とのみ聞(二)えさするに、宮もいふかひなう思して、(三)故尼君も(四)彼處に渡り給はむ事を、いと物しと思したりしことなれば、(五)乳母のいとさし過したる心ばせのあまり、おいらかに、(六)わたさむを便なしなどはいはで、心にまかせて、率てはふらかしつるなゝめり、と泣く〳〵歸り給ひぬ。「もし聞き出で奉らば告げよ」と宣ふもわづらはしく。(七)僧都の御許にも尋ね(八)聞え給へど、跡はかなくて、(九)あたらしかりし御容貌など戀しく、悲しとおぼす。北の方も、(一〇)母君を憎しと思ひ聞え給ひける心も失せて、(一一)わが心に任せつべう思ほしけるに違ひぬるは、口惜しう思しけり。

やう〳〵(一二)人參り集りぬ。御遊がたきの童べ兒ども、(一三)いとめづらかに今めかしき御有樣どもなれば、思ふ事なくて遊びあへり。君は、(一四)(一五)男君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を戀ひ聞え給ひて、うち泣きなどし給へど、(一六)(一七)宮をば殊に思ひ出で聞え給はず。もとより見ならひ(一八)聞え給はでならひ給へれば、

(一)侍女どもに口留をして
(二)兵部卿宮に
(三)兵部卿の推量
(四)兵部卿邸へ移るを不快に思ひたれば
(五)少納言の出過ぎた了簡から
(六)引移らする事を都合悪しと穩かに斷る事はせず
(七)侍女等の心
(八)兵部卿が
(九)紫のあつたら器量を
(一〇)紫の亡母
(一一)紫を
◎ 紫上漸く源氏に懷く
(一二)紫の侍女の揃ひたる也
(一三)源と紫とが
(一四)紫上
(一五)源氏
(一六)寂しき
(一七)父宮
(一八)父の側に居らずに育ちたれば

(一)逢ひ難き藤壺に縁ある紫故、まだ共寝はせねど可愛く思ふ、ね—根、寝
(二)拙いけれど拙いとて一向に書かぬは惡し
(三)側を向いて
(四)可愛くのみ
(五)自分ながら
(六)何人に縁ありとて我を此程思はるゝならん譯が分らぬ故甚だ覺束なし
(七)筆太に
(八)わざ〳〵雛の家を作り並べて
(九)藤壺に對する戀慕、兵部卿宮の失望、煩惱
(一〇)紫邸に殘りし侍女どもは
(一一)言譯の仕樣がなくて皆困って居た
(一二)源氏に

源　ねは見ねどあはれとぞおもふ武藏野の露わけわぶる草のゆかりを(一)

とあり。源「いで君も書い給へ」とあれば、紫「まだようは書かず」とて、見上げ給へるが、何心なく美しげなれば、うちほゝゑみて、源「よからねど、(二)無下に書かぬこそわろけれ。教へ聞えむかし」と宣へば、(三)うちそばみて書い給ふ手つき、筆とり給へる樣の幼げなるも、(四)らうたうのみ覺ゆれば、(五)心ながらあやしとおぼす。紫「書き損ひつ」と恥ぢて隱し給ふを、強ひて見給へば、

紫　(六)かこつべき故をしらねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらむ

と、いと若けれど、おひさき見えて、(七)ふくよかに書い給へり。故尼君のにぞ似たりける。今めかしき手本習はばいと善う書い給ひてむ、と見給ふ。雛など、(八)わざと屋ども作り續けて、諸共に遊びつゝ、こよなき物思ひ(九)のまぎらはしなり。

かのとまりにし人々(一〇)は、宮渡り給ひて尋ね聞え給ひけるに、(一一)聞えやらむ方なくてぞわびあへりける。暫し人に知らせじと、(一二)君も宣ひ、少納言も思ふ事なれば、切



しよりも、いみじう淸らにて、なつかしううち語らひつゝ、をかしき繪遊物ども取りに遣して見せ奉り、(一)御心につくべき事どもをし給ふ。(二)やうやう起き出でて見給ふに、(三)鈍色のこまやかなるが、うち萎えたるどもを著給ひて、何心なくうち笑みなどして居給へるが、いと美しきに、(四)我もうち笑まれて見給ふ。(五)東の對に渡り給へるに、立ち出でて、庭の木立、池の方などのぞき給へば、霜枯の前栽繪に畫けるやうに面白くて、見も知らぬ四位五位こきまぜに、隙なう出で入りつゝ、實にをかしき所かなとおぼす。御屏風どもなど、いとをかしき繪を見つゝ、慰めておはするもはかなしや。

君は二三日内裏へも參り給はで、(六)この人をなつけ語らひ聞え給ふ。やがて本にも(七)と思すにや、手習繪などさまざまに書きつゝ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげに書き集め給へり。(八)「むさし野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書い給へる、墨つきのいと殊なるを取りて見居たまへり。(九)少しちひさくて、

(一)氣に入るべき
(二)紫が
(三)紫の服裝、喪服を着たる也
(四)源が
(五)源がわが居間に行きたる間に紫が立出でて
(六)紫上
(七)手本にせんと
(八)「知らねども武藏野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」藤壺の姫と思へばなつかしと也
(九)紫が

(一)もう乳母とは寢ぬものぢや
(二)少納言が
(三)間が惡く
(四)西對は客來の時につかふ所なれば
(五)源が女を迎へたそうなが、其女は誰ならん
(六)並大抵の女ではあるまい
(七)西對で
(八)召使
(九)夕方になりて呼ぶがよし
(一〇)子供ばかり
(一一)其樣にくよ〳〵するな
(一二)大抵の人は我が如く親切にはせぬ

ず。紫「少納言が許に寢む」と宣ふ聲いと若し。源「今は、(一)さは大殿籠るまじきぞよ」と、敎へ聞え給へば、いと佗しくて泣き臥し給へり。乳母はうちも臥されず、物も覺えず泣き居たり。明け行くまゝに見渡せば、(二)大殿のつくり樣しつらひ樣、更にもいはず、庭の砂も玉を重ねたらむやうに見えて、輝く心地するに、(三)はしたなく思ひ居たれど、此方には女房などもさぶらはざりけり。(四)疎き客人などの參る折節の方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。「(五)かく人迎へ給へりと、ほの聞く人は誰ならむ。(六)おぼろけにはあらじ」とさゝめく。御手水御粥など、(七)こなたにまゐる。日高う寢起き給ひて、源「(八)人なくてあしかゝめるを、さるべき人々、(九)夕づけてこそは迎へさせ給はめ」と宣ひて、對に童べ召しにつかはす。「(一〇)小きかぎり殊更に參れ」とありければ、いとをかしげにて、四人まゐりたり。君は御衣に纒はれて臥し給へるを、せめて起して、源「(一一)かう心憂くなおはせそ。(一二)すゞろなる人は、斯うはありなむや。女は心柔かなるなむよき」など、今より敎へ聞え給ふ。御容貌は、さし離れて見

（一）躊躇すれば
（二）汝の勝手なり
（三）某は引取りたれば、汝は還るなら送らせん
（四）父宮が何と思はれん、又某は何となる事ぞ、つまりは孤になりたるが某の不運
（五）何といふても嫁入の際されば縁起を思ひてこらへ居たり
（六）西對は。
（七）處々に屏を立てしむ
（八）其他は總て整ひ居りて、只几帳の垂を下しなどするのみなれば
（九）さびが悪くて

自らもよろしき衣著替へて乘りぬ。
二條院は近ければ、まだ明うならぬ程におはして、西の對に御車寄せて下り給ふ。若君をば、いと輕らかにかき抱きておろし給ふ。少納言、「なほいと夢の心地し侍るを、如何にし侍るべきことにか」とてやすらへば、(一)源「そは心なゝなり。(二)御身づからは渡し奉りつれば、(三)還りなむとあらば送りせむかし」と宣ふに、わりなくて下りぬ。俄にあさましう、胸も靜ならず。(四)宮の思し宣はむ事、いかになりはて給ふべき御有樣にか、とてもかくても、頼もしき人々に後れきこえ給へるがいみじさ、と思ふに涙のとゞまらぬを、(五)さすがにゆゝしければ念じ居たり。(六)こなたは住み給はぬ對なれば、御帳などもなかりけり。惟光めして、御帳御屏風など、(七)あたりあたりしたてさせ給ふ。(八)御几帳の帷子引き下し、御座などたゞ引きつくろふばかりにてあれば、東の對に、御宿直物召しに遣して、大殿籠りぬ。若君は、いとむく(九)つけう、如何にする事ならむと、慄はれ給へど、さすがに聲立ててもえ泣き給は

聞えず。君(一)は何心もなく寝給へるを、抱き驚かし給ふに驚きて、宮の御迎におはしたると、寝おびれて(二)思したり。御髪(三)掻きつくろひなどし給ひて、源「いざ給へ。宮の御使にて參り來つるぞ」と宣ふに、あらざりけり(四)とあきれて、怖ろしと思ひたれば、源「あな心憂。まろも同じ人ぞ(五)」とて、かき抱きて出で給へば、大夫少納言など、「こは如何に」と聞ゆ。源「こゝには常にもえ參らぬが覺束なければ、心やすき所に(六)と聞えしを、心憂く(七)渡り給ふべかなれば、まして聞え難かるべければ。人一人(八)參られよかし」と宣へば、心あわたゞしくて、少納言「今日はいと便なく(九)なむ侍るべき。宮の渡らせ給はむには、いかさまにか(一〇)聞えやらむ。おのづから程經て(一一)、さるべきにおはしまさば、ともかうも侍りなむを、いと思ひやりなき程の事に侍れば(一二)、侍ふ人々苦しう侍るべし」と聞ゆれば、源「よし(一三)、後にも人は參りなむかし」とて、御車寄せさせ給へば、あさましう、如何樣にかと思ひあへり。若君も、あやしと思して泣い給ふ。少納言留め聞えむ方なければ、前夜縫ひし御衣どもひきさげて、

(一)紫上
(二)寝ぼけて
(三)源が紫の
(四)違つて居た
(五)兵部卿宮と
(六)氣安き所へ迎へんと約束せしに
(七)父邸へ移られる由なれば、そうなると一入音信も難かるべき故連れ行くなり
(八)誰か一人付いて來い
(九)不都合ならん
(一〇)何と申譯せん
(一一)程たちて後縁あらば、御迎取も仔細なからんが
(一二)今は童女の事なれば付添の者迷惑すべし
(一三)今誰も付來らずともよし

（一）葵上
（二）二條院に行かねばならぬ用事のありしを
（三）直に歸る
（四）自分の居間
（五）無分別なる者
（六）源が
（七）序に立寄れるならんと思ひて
（八）父邸へ移られるそうなが
（九）さぞ立派な御返事が出來ませう
（一〇）老人共が取散らして居るのに
（一一）紫は目醒むまじ

むはいと口惜しかるべければ、まだ夜深う出で給ふ。（一）女君例のしぶ〳〵に、心も解けずものし給ふ。源「（二）彼處にいと切に見るべきことの侍るを、思ひ給へ出でてなむ。（三）立ちかへり參り來なむ」とて、出で給へば、侍ふ人々も知らざりけり。（四）我が御方にて、御直衣などは奉る。惟光ばかりを馬に載せておはしぬ。門打敲かせ給へば、（五）心も知らぬものの開けたるに、御車をやをら引き入れさせて、大夫妻戸を鳴してしはぶけば、少納言聞き知りて、出で來たり。惟光「（六）こゝにおはします」といへば、少納言「幼き人は大殿籠りてなむ。などかいと夜深う立出でさせ給へる」と、（七）物の便と思ひていふ。源「（八）宮へ渡らせ給ふべかゝなるを、その先に物一言聞えさせ置かむとてなむ」と宣へば、少納言「何事にかは侍らむ。（九）如何にはかぐ〳〵しき御答聞えさせ給はむ」とてうち笑ひて居たり。君入り給へば、いとかたはら痛く、少納言「（一〇）うちとけて、怪しき舊人どもの侍るに」と聞えさす。源「（一一）まだおどろい給はじな。いで御目さまし聞えむ。かゝる朝霧をば知らで寝ぬるものか」とて入り給へば、「や」ともえ

(一)惟光歸り來れり
(二)葵上
(三)不快に源が思ひて
(四)東琴(六絃琴)を靜にひきて
(五)風俗歌「常陸にはをこそ造れ誰をかね山田こえ野をこえ君が來ませる」
(六)惟光が
(七)源の心、紫が兵部卿邸へ移りては
(八)わざ〳〵迎取るのも
(九)竊ろ盜みたりとの批難を受けん
(一〇)父邸へ移らぬ前に
(一一)口どめして
(一二)紫邸へ行かん
(一三)今日乘り來し儘にしておきて
(一四)源氏窃に紫上を迎ふ紫上の當惑
(一四)人に聞かれたらば助平らしかるべし
(一五)女が譯が分つて合意でした事と推測さるべきならば當前で構はぬが
(一六)是は子供なれば父に尋ね當てられたる時にひよんな物ならん
(一七)紫を逃して仕舞ふのは

がに心細う、侍ふ人々も思ひ亂れて」と、言寡に言ひて、をさ〳〵あへしらはず。物縫ひ營むけはひなど、著ければ參りぬ。(一)君は、大殿におはしけるに、例の女君、(二)とみにも對面し給はず。(三)物むつかしう覺え給ひて、(四)あづまをすがゝきて、「常陸に(五)は田をこそ作れ」といふ歌を、聲はいとなまめきて、すさび居給へり。(六)參りたれば、召し寄せて有樣問ひ給ふ。しか〴〵なむと聞ゆれば、口惜しう思して、(七)かの宮に渡りなば、(八)わざと迎へ出でむもすき〴〵しかるべし。(九)幼き人を盜み出でたりと、もどきおひなむ。(一〇)そのさきに、暫し人にも口がためて、(一一)渡してむと思して、

源「曉(一二)かしこにものせむ。(一三)車の裝束さながら、隨身一人二人仰せおきてたれ」と宣ふ。承りて立ちぬ。

君は、如何にせまし、聞えありてすきがましきやうなるべき事、(一四)人のほどだに物(一五)を思ひ知り、女の心かはしける事と、推し量られぬべくば尋常なり、(一六)父宮の尋ね出で給へらむも、はしたなうすゞろなるべきを、と思し亂るれど、さてはづして(一七)

惟光に哀なる物語どもして、少納言「あり經て後や、(一)さるべき御宿世、遁れ聞え給はぬやうもあらむ。唯今は、かけてもいと似げなき御事と見奉るを、(二)怪しう思し宣はするも、いかなる御心にか、思ひよるかたなう亂れ侍る。今日も宮渡らせ給ひて、後やすく(三)仕う奉れ、(四)心幼くもてなし聞ゆな、なゝど宣はせつるもいと煩はしう、(五)たゞなるよりは、かゝる御すきごとも思ひ出でられ侍りつる」などいひて、(六)この人も事ありがほにや思はむなど、あいなければ、いたう歎かしげにもいひなさず。大夫も、如何なる事にかあらむと心得がたく思ふ。參りて(七)有樣など聞えければ、哀に思しやらるれど、さて(八)通ひ給はむも、さすがにすゞろなる心地して、輕々しうもてひがめたる(九)事と人もや漏り聞かむ、などつゝましければ、唯迎へてむと(一〇)思ほす。御文は度々奉れ給ふ。暮るれば、例の大夫をぞ奉れ給ふ。源手紙「さはる事(一一)どものありてえ參り來ぬを、おろかにや」などあり。少納言「宮より、明日俄に御迎にと宣はせたりつれば、心あわたゞしくてなむ。年頃の(一二)蓬生をかれなむも、さす

(一)行末緣あらば某が源の物になる事もあらんが
(二)妙に思ひ込みて仰せられたる御心持が分らぬので心配なり
(三)我が安心出來る樣に某を世話せよ
(四)某を餘り子供あしらひにするな
(五)斯る戒を聞かぬ前よりは、餘計に源の仕打を迷惑に思ひたり
(六)惟光も某が實際源の持物になりたる樣に思ひはせぬかと
(七)惟光が源に
(八)其儘つゞけて某へ通はんも工合惡く思ひて
(九)漏れ聞く人は怪しからん事と思はんかと
(一〇)某を引取らん
(一一)差支ありて行かぬを、疎略にすると思召すかも知れぬ
(一二)住馴れたる茅屋を離れるのも

(一)紫が
(二)心配するな、やがて引取るぞ
(三)なだめ置きて
(四)我身の將來などは考へ及ばず
(五)年來離れざりし祖母の死にたるが悲しく
(六)ふさぐ故に
〔旨〕紫上父の許に迎へられんとす
(七)源氏
(八)參上すべきなれど帝の御召によりて參らず
(九)不安心なれば
(一〇)丸で源の妾か杯の樣な扱で面白からず
(一一)紫が是から世に出る初に當りて
(一二)源から人を付けたる事を兵部卿が聞いたらば、我々の越度として責めらるべし
(一三)源との關係を頑是なく口に出し給ふな
(一四)紫が何とも思ひ居らぬ

て泣い給へば、宮もうち泣き給ひて、宮「いと斯う思ひな入り給ひそ。(二)今日明日渡し奉らむ(一)」など、かへすぐゝこしらへ(三)おきて出で給ひぬ。名殘も慰め難う泣き居給へり。行先(四)の身のあらむ事などまでも思し知らず、唯年頃(五)立ち離るゝ折なう纏はしならひて、今はなき人となり給ひにけると思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つと塞がりて、例の樣にも遊び給はず。晝はさても紛はし給ふを、夕暮となれば、いみじう屈し(六)給へば、斯くてはいかでか過し給はむと慰めわびで、乳母も泣きあへり。

君の御許よりは、惟光を奉れたまへり。「參り來べきを、(八)內裏より召あればなむ。(七)心苦しう見奉りしも、しづ心なく(九)」とて、宿直人奉れ給へり。少納言等「あぢきなう(一〇)もあるかな。戲にても、物のはじめにこの御事よ。(一一)宮聞召しつけば、侍ふ人々の疎なるにぞさいなまれむ。(一二)あなかしこ。物のついでに、いはけなくうち出で聞(一三)えさせ給ふな」などいふも、それをば何とも(一四)思したらぬぞあさましきや。少納言は、

(一)宮の邸
(二)窮屈な事はない
(三)紫上
(四)異腹の姉妹
(五)源氏の
(六)衣類の鮮やかならぬを謂む也
(七)其病の尼君にのみ付き居りたれば
(八)兵部卿の邸へ行きて馴れよといひしに、變に隔を置きし故繼母の方にても遠慮せし中なれば、此際同居は心遣なり
(九)物が分つてから同居せらるゝ事然るべし
(一〇)紫が祖母を
(一一)召上らず
(一二)我在る以上は萬事力になるべし

かでか、暫しも幼き人の過し給はむ。猶彼所(一)に渡し奉りてむ。何の所せき(二)程にもあらず。乳母は、曹司などして侍ひなむ。君(三)は、若き人々(四)などあれば、諸共に遊びて、いとよう物し給ひなむ」など宣ふ。近う呼び寄せ奉り給へるに、かの(五)御移香の、いみじう艶に染みかへり給へれば宮「をかしの御にほひや。御衣はいと萎えて」と、心苦しげ(六)に思いたり。宮「年頃も(七)、あつしくさだすぎ給へる人に添ひ給へるより、時々(八)かしこに渡りて見ならし給へなどものせしを、怪しう疎みたまひて、人も心おくめりしを、かゝる折にしも物し給はむも、心苦しう」など宣へば、少納言「何かは、心細くとも、暫しは斯くておはしましなむ。少し物の心思ほし知りなむに渡らせ給はむこそ、よくは侍るべけれ」と聞ゆ。少納言「夜晝(九)戀ひ(一〇)聞え給ふに、はかなき物も聞しめさず(一一)」とて、實にいといたう面痩せ給へれど、いとあてに美しく、なかなか見え給ふ。宮「何か然しも思ほす。今は世になき人の御事はかひなし。(一二)おのれあれば」など語らひ聞え給ひて、暮るれば歸らせ給ふを、いと心細しと思ひ

うざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひ給ふ所の、道(一)なりけるをおぼし出でて、門打ち敲かせ給へど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に聲ある人してうたはせ給ふ。

源　あさぼらけ霧立つそらのまよひにも(二)行き過ぎがたきいもが門かな

と二返ばかりうたひたるに、(三)よしばみたる下仕を出して、

立ちとまり霧のまがきのすぎうくば草のとざしにさはりしもせじ(四)

と言ひかけて入りぬ。また人も出で來ねば、歸るも情なけれど、明け行く空もは(五)したなくて、殿(六)へおはしぬ。(七)をかしかりつる人の名殘戀しく、獨咲しつゝ臥し給へり。日高う大殿ごもり起きて、文やりたまふに、書くべき言の葉も例ならねば、(八)筆うち置きつゝ、(九)すさび居給へり。をかしき繪などを遣り給ふ。

(一〇)かしこには、今日しも宮(一一)わたり給へり。年頃よりもこよなう荒れまさり、廣う物古りたる所の、いとゞ人ずくなに寂しければ、見渡し給ひて、宮「かゝる所には、い

(一)丁度歸り路に當れるを
(二)催馬樂「妹が門やせなが門行き過ぎかねてや我行かば肘笠の雨もやふらなんしでたをさ」
(三)品よげなる
(四)夫程過ぎ難くば立寄り給へ、草が門を鎖したる位は障にもなるまじ
(五)間がわるくて
(六)一條院
(七)紫上
(八)通常の女に逢ひたる翌日やる文とは違ふ故
(九)ひねくり居給へり
(一二)紫上の父兵部卿宮紫上を訪ふ
(一〇)紫上の邸
(一一)兵部卿

（一）氣に入るべき
（二）とは言ふものゝ氣づまりて
（三）源が來らざりしならば
（四）源が相應な年頃ならばさぞ善からんに
（五）本物の忍女の處からでも歸る樣なり、女の處からは早朝に歸るが此頃の風なり
（六）片時離れて居ても氣遣なり
（七）宮を引取るべし
（八）よく今迄淋しがらざりし事哉
（九）兵部卿も迎に來んと申さるれど
（一〇）力になるべき筈の人でも疎遠にし來れるは無情あるべし
（一一）我は昨今なれど
（一二）兵部卿に
（一三）若宮頭を
（一四）眞の戀にての朝歸りなれば趣あるべきに
（一五）物足らず

多く、雛遊などする所に」と、心につくべき(一)事を宣ふけはひの、いとなつかしきを、幼き心地にも、いと痛うも憚ぢず、(二)さすがにむつかしう、寝も入らず、身じろき臥し給へり。夜一夜風吹き荒るゝに、女房「實に斯うおはせざらましかば(三)、いかに心細からまし。同じくはよろしき程(四)におはしまさましかば」と囁きあへり。乳母は、後めたさに、いと近う侍ふ。風少し吹き止みたるに、夜深う出で給ふも、(五)事あり顔なりや。源「いと哀に見奉る御有様を、今はまして片時(六)の間も覺束なかるべし。旦暮ながめ侍る所にわたし奉らむ(七)。斯くてのみはいかゞ。(八)物憚し給はざりけり」と宣へば、少納言等「(九)宮も御迎になど聞え給ふめれど、この御四十九日過してや、など思ひ給ふる」と聞ゆれば、源「頼もしき(一〇)筋ながらも、よそ〳〵にてならひ給へるは、同じうこそ疎う覺え給はめ。今より(一一)見奉れど、淺からぬ志は勝り(一二)ぬべくなむ」とて、(一三)かい撫でつゝ、顧み勝にていで給ひぬ。いみじう霧り渡れる空もたゞならぬに、霜はいと白うおきて、(一四)まことの懸想もをかしかりぬべきに、(一五)さ

べり入りて、源「(一)今はまろぞ思ふべき人。な疎み給ひそ」と宣ふ。乳母、「いであなうたてや。(二)ゆゝしうも侍るかな。(三)聞え知らせ給ふとも、更に何のしるしも侍らじものを」とて、苦しげに思ひたれば、源「さりとも、(四)かゝる御程をいかゞはあらむ。なほ唯(五)世に知らぬ志の程を見はて給へ」と宣ふ。霰降り荒れて、凄き夜のさまなり。源「いかで斯う人少に、心細うて過し給はむ」とうち泣い給ひて、いと見捨(六)て難き程なれば、源「(七)御格子まゐりね。物怖ろしき夜の樣なゝめるを、(八)宿直人にて侍らむ。人々近う侍らはれよかし」とて、いと馴れ顏に、御帳の内にかき抱きて入り給へば、怪しう(九)思の外にもとあきれて、誰も〳〵居たり。乳母は(一〇)後めたうわりなしと思へど、(一一)あらましう聞え騷ぐべきならねば、うち歎きつゝ居たり。(一二)若君は、いと怖ろしう、如何ならむと戰かれて、いと美しき御肌つきも、そゞろ寒げに思したるを、(一三)らうたく覺えて、(一四)ひとへばかりを押しくゝみて、(一五)わが御心地も、かつはうたて覺え給へど、哀にうち語らひ給ひて、源「(一六)いざ給へよ、をかしき繪など

(一)我こそ君の思ふべき人なれ
(二)とんでもない事
(三)口說きなされても
(四)此樣な子供をどうする物か
(五)世間無類の我志を終まで見よ
(六)去るに忍びぬ場合なれば
(七)戸締りせよ
(八)我宿直せん
(九)案外のなされ方にもある哉と
(一〇)氣がかりでたまらず
(一一)荒立てゝ騷ぎ立つべきに非ざる故
(一二)紫上
(一三)源が可愛く思ひて
(一四)單衣ばかりを著せて抱きて
(一五)我ながら怪しからんとは思へど
(一六)さあ來給へ

うち誦じ給へるを、身に染みて若き人々思へり。君は、(一)上を戀ひ聞え給ひて泣き臥し給へるに、御遊び(二)がたきどもの、「直衣著たる人のおはする、宮(三)のおはしますなゝめり」と聞ゆれば、起き出で給ひて、紫「少納言よ。直衣著たりつらむ(四)はいづら。宮のおはするか」とて、寄りおはしたる御聲、いとらうたし。源「宮にはあらねど又(五)おもほし放つべうもあらず。此方」と宣ふを、(六)恥かしかりし人と流石に聞きなして、(七)あしう言ひてけりと思して、乳母にさし寄りて、紫「いざかし、ねぶたきに(八)」と宣へば、源「今更、(九)など忍び給ふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。今少し寄り給へ」と宣へば、乳母の、「さればこそ、(一〇)かう世づかぬ御程にてなむ」とて、押し寄せ奉りたれば、何心もなく居給へるに、(一一)手をさし入れて探り給へれば、なよよかなる御衣に、髪はつやつやとかゝりて、末のふさやかに探りつけられたる程、いと美しう思ひやらる。手をとらへ給へれば、うたて例(一二)ならぬ人の、かく近づき給へるは恐ろしうて、紫「寝なむといふものを」とて強ひて(一三)引き入り給ふにつきて、す(一四)

(一) 紫は尼を戀ひて
(二) 遊相手
(三) 父兵部卿宮
(四) 直衣着た人といふは何處に
(五) 疎ふべき人でもなし
(六) 源氏であつたと氣がついて
(七) 言ひそこなつた
(八) さあ行かう
(九) なぜはにかむぞ
(一〇) 此通りのおぼこで
(一一) 髮を垂れたる上に衣をはをりたる其衣の下に手を入れて
(一二) 常に見つけぬ人
(一三) 奥へ
(一四) 源も共に



はかぐ〜しう人のおもむけをも見知り給はず、中空なる御程にて、(一)あまた物し給ふなる中の、あなづらはしき人にてや交り給はむなど、(二)過ぎ給ひぬるも、世と共におもほし歎きつるも著き事多く侍るに、かく辱きなげの御言の葉は、後の御心もたどり聞えさせず、いとうれしう思ひ給へられぬべき折節に侍りながら、(三)少しもなずらひなるさまにも物し給はず、御年よりも若びて習ひ給へれば、いと傍いたく侍り」と聞ゆ。源「何か、かう繰り返し聞え知らする(四)心の程を、(五)つゝみ給ふらむ。其の(六)いふかひなき御有樣の、哀にゆかしう覺え給ふるも、契殊になむ、心ながら思ひ知られける。猶人傳ならで、(七)聞え知らせばや。

(八)あしわかの浦にみるめは難くともこは立ちながらかへる波かは

(九)めざましからむ」と宣へば、少納言「實にこそいと畏けれ」とて、

少「(一〇)寄る波のこゝろも知らでわかの浦に玉藻なびかむ程ぞうきたる

(一一)わりなき事」と聞ゆる樣の馴れたるに、(一二)少し罪免され給ふ。源「(一三)なぞ越えざらむ」と、

(一)先方に多くある子供の中に入りて輕蔑せられんかと
(二)尼の常に心配せしが其通なるべき傾向著しき處へ斯る仰を承りては何處迄も當にはならぬにせよ後々の事は思はず嬉しく思ふべき場合なれども
(三)家が少しも源の[illegible]として似合はしき所なく
(四)馴れ來りたれば
(五)何故に憚るぞ
(六)あどけない處が可愛いのも前世の因縁ならん
(七)家に歸りたし
(八)年若き者に逢ふ事は難くとも此儘直には歸られず、和歌—若、見る目—海松
(九)此儘に歸すはけしからん
(一〇)戲心の程も知らずして猥に仰に隨はんは餘り輕卒なるべし
(一一)當惑いたします
(一二)對面の出來る心地
(一三)「人知れず身は急げども年を經てなど越えがたき逢坂の關」を誤り引けるか



人どもなども、(一)その方につき〴〵しきは、皆選らせたまへれば、親王達大臣より初めて、(二)とり〴〵のざえども習ひ給ふ、暇なし。(三)山里にも、久しう音づれ給はざりけるを、思ほし出でて、(四)ふりはへ遣したりければ、僧都の返事のみあり。(五)「立ちぬる月の廿日のほどになむ、(六)遂に空しく見給へなして、世間の道理なれど、かなしび思ひ給ふる」などあるを見給ふに、世の中のはかなきも哀に、(七)後めたげに思へりし人もいかならむ、幼き程に戀ひやすらむと、(八)故御息所に後れ奉りしなど、はか〴〵しからねど思ひ出でて、淺からず訪ひ給へり。少納言、(九)ゆゑなからず御返など聞えたり。忌など過ぎて、(一〇)京の殿になむと聞き給へば、程經て、自ら長閑なる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の、人少なるに、いかに幼き人怖ろしからむと見ゆ。例の所に入れ奉りて、少納言、(一一)御有樣など、うち泣きつゝ聞え續くるに、あいなう御袖もたゞならず。少納言(一三)「宮に渡し奉らむと侍るを、(一四)故姫君のいと情なく、憂きものに思ひ聞え給へりしに、(一五)いとむげに兒ならぬ齡の、又

(一)音樂の方に堪能なるは
(二)それ〴〵の藝
(三)北山
(四)わざ〳〵使を
(五)先月(九月)
(六)尼君邊に殘して
(七)尼が心殘りに思ひし紫
(八)自分が母に別れし時の事をよくは覺えねど思出して
(九)相當に
(一〇)紫が京の邸に移ると
(一一)尼の臨終前後の
(一二)馴れたる也
(一三)惟光などが紫を父兵部卿宮へ引渡さんと言へども
(一四)尼の亡母は兵部卿の本妻を猜惧なりとて嫌ひ居たる上
(一五)紫は已に小兒に非ず、又人の扱ひ振を辨へ知る程にも非ず、何方つかずの齡にて

かに訪ひ聞え給ふ。(一)例のちひさくて、(二)

源「いはけなき鶴の一聲聞きしより葦間になづむ船ぞえならぬ

同じ人にや」(三)と、殊更幼く書きなし給へるも、いみじうをかしげなれば、やがて(四)

御手本にと人々きこゆ。(五)少納言ぞ聞えたる。(六)

少 訪はせ給へるは、(七)今日をも過し難げなるさまにて、山寺に罷りわたる程にて、

かう訪はせ給へる(八)かしこまりは、この世ならでも聞えさせせむ。

とあり。いとあはれと思す。秋の夕は、まして、心の暇なくのみ思し亂るゝ人の(九)

御あたりに心をかけて、(一〇)あながちなるゆかりも尋ねまほしき心も増り給ふなる

べし。「消えむ空なき」(一一)とありし夕、思し出でられて、戀しくもまた、見ば劣りや(一二)

せむと、流石にあやふし。

源 手につみて(一三)いつしかも見む紫のねに通ひける野邊のわか草

十月に朱雀院(一四)の行幸あるべし。舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部殿上

(一)見舞の使をやりたる也
(二)小き文を紫にあてたる也
(三)紫の聲を聞きてより我は戀しくてたまらぬ、なづむは進まんとして進み得ざる貌
(四)「堀江漕ぐ棚なし小舟こぎかへり同じ人にや戀ひ渡りなん」
(五)手本にして然るべし
(六)御返事を
(七)御使の來たるは丁度危篤に迫りて寺へ引移る爲出かける時で失禮なり
(八)御見舞の御禮は彼世から申上げん
(九)藤壺
(一〇)紫上を手に入れたき心
(一一)北山にて隙見せし時の事
(一二)手に入れたらば興さめんかと
(一三)藤壺の由緣なる紫を何時わが物と見る事を得べき、「紫の一本故に武藏野の草は皆がら哀とぞ見る」
(十)尼君逝去、源氏紫上を訪ひて一宿す
(一四)帝の御隱居所

（一）家でも御前申上げらるゝ年切ならばよきに
（二）浅き心ならば何ぞ斯く事好みなる事をせんや
（三）前世の宿縁と思ふ
（四）家に逢はずしては
（五）何も知らずに御寝なつて入らつしやる
（六）尼上よ
（七）あの北山の寺に御出になりし源氏
（八）静にせよ
（九）曽て尼上が源を見て病を忘れたりと宣ひし事あれば、見よと言ひたるなり
（一〇）源の心
（一一）真面目なる見舞の辞を述べて
（一二）源の家に対する考
（一三）甘く仕込んでやらう

聞えて、尼「いと辱きわざにも侍るかな。（一）この君だに、かしこまりも聞え給ひつべき程ならましかば」と宣ふ。あはれに聞き給ひて、源「何か、（二）浅う思ひ給へむ事ゆゑ、かうすき〴〵しき様を見え奉らむ。いかなる契にか、見奉りそめしより、哀に思ひ聞ゆるも、あやしきまで、（三）この世の事には覚え侍らぬ」など宣ひて、源「かひなき心地のみし侍るを、かのいはけなう物し給ふ御一聲、いかでか」と宣へば、（四）女房「いでや、よろづ思ほし知らぬさまに、（五）大殿籠り入りて」など聞ゆる折しも、彼方より来る音して、家「上こそ。（六）（七）この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ」と宣ふを、人々いとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」（八）と聞ゆ。家「いさ、見しかば心地のあしさ慰みきと、（九）宣ひしかばぞかし」と、かしこき事聞き得たりと思して宣ふ。（一〇）いとをかしと聞き給へど、人々の苦しと思ひたれば、聞かぬ様にて、まめやかなる御とぶらひを、（一一）聞え置き給ひて帰り給ひぬ。實にいふかひ（一二）なのけはひや、さりとも、いとよう教へてむ、（一三）と思す。またの日も、いとまめや

（一）尼の家内の人の詞
（二）危篤になりたれば
（三）家内の人の詞
（四）取散らしたる所なれど、せめては御尋の御禮も申上げたく御入れ申したれど、存寄らぬ奥座敷にて失禮なり
（五）來んとは思ひ居れど來ても來甲斐なき御取扱に憚りて來ぬなり
（六）不快は常の事
（七）御目にかゝらぬは殘念なり
（八）紫の事、思召が變らずば、常人の年頃になりて後御妾の中に加へ給へ
（九）便りなきを置いて行くのが冥路の障なるべし
（一〇）取次にていへる也

言はせたれば、入りて、家人「かく御訪になむおはしましたる」といふに、驚きて、「(一)いとかたはらいたき事かな。この日頃、むげにいと頼もしげなくならせ給ひ(二)にたれば、御對面などもあるまじといへども、返し奉らむは畏し」とて、南の廂引きつくろひて入れ奉る。「(三)いとむつかしげに侍るめれど、かしこまりをだにと(四)てなむ。ゆくりなう物深きおまし所になむ」と聞ゆ。實にかゝる所は、例に違ひておぼさる。源「常に思ひ給へ(五)立ちながら、かひなき様にのみもてなさせ給ふに、つつまれ侍りてなむ。惱ませ給ふことをも、斯くとも承らざりけるおぼつかなさ」など聞え給ふ。尼「(六)みだり心地は、いつともなくのみ侍り。限りのさまになり侍りて、いとかたじけなく立ち寄らせ給へるに、自ら聞えさせぬ事(七)。宣はする事のす(八)ぢ、たまさかにも思し召しかはらぬ樣侍らば、かくわりなき齢過ぎ侍りて、必ず數まへさせ給へ。いみじく心細げに見給へ置く(九)なむ、願ひ侍る道のほだしに、思ひ給へられぬべき」など聞え給へり(一〇)。いと近ければ、心ぼそげなる御聲絶え〴〵

(一)源が藤壺に對する戀情を

● 源氏尼君の病を訪ふ
(二)紫上の祖母の尼
(三)六條京極の家を尋ねて源が時々手紙にて紫上の事を催促する也
(四)相變らずの返事のみあるも
(五)以前にも増したる心配、藤壺の事
(六)或る忍びて通ふ處へ行かんと
(七)雨降る
(八)行先は
(九)出かけたる途中なり

(一〇)紫の祖父

(一一)なぜ斯樣々々と告げざりし
(一二)態々源が訪問したる樣に

まざまに仕う奉らせ給ふ。いみじうつゝみ給へど、忍びがたき氣色の漏り出づるをり〳〵、宮もさすがなる事どもを、(一)多く思しつゞけけり

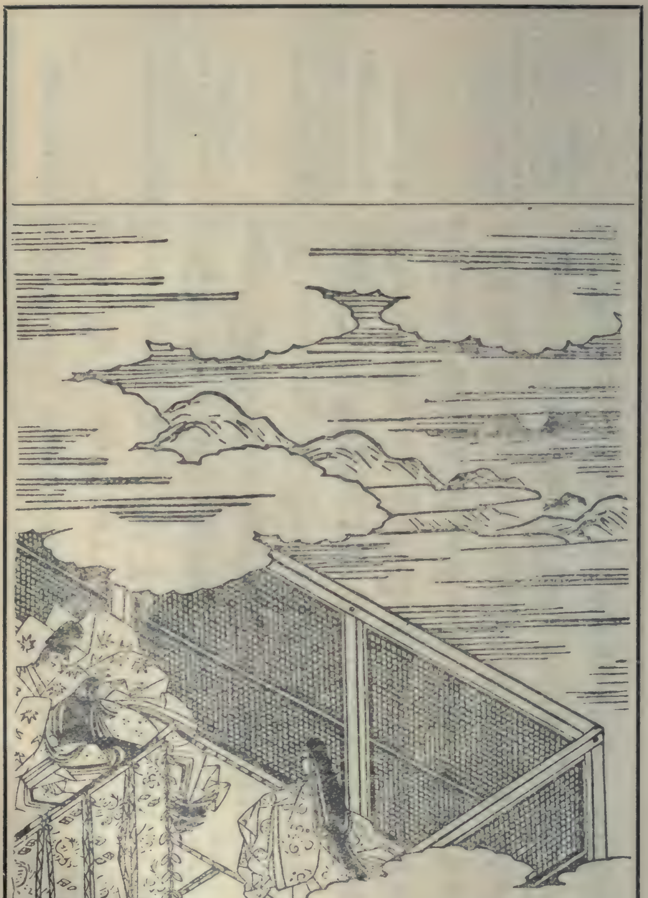
かの山寺の人は、よろしうなりて出で給ひにけり。(二)京の御住處尋ねて、時々の御(三)消息などあり。(四)同じ樣にのみあるも理なるうちに、この月頃は、(五)ありしにまさる物思ひに、他事なくて過ぎ行く。秋の末つ方、いと物心細くて歎き給ふ。月のをかしき夜、(六)忍びたる所に、辛うじて思ひ立ち給へるを、時雨めいて(七)うちそゝぐ。(八)おはする所は六條京極わたりにて、内裏よりなれば、少し程遠き心地するに、(九)荒れたる家の木立いとものふりて、木暗う見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、惟光「故按察の大納言(一〇)の家に侍り。一日物のたよりに訪ひて侍りしかば、かの尼上、いたう弱り給ひにたれば、何事も覺えず、となむ申して侍りし」と聞ゆれば、源「あはれの事や。訪ふべかりけるを、(一一)などか然なむとも物せざりし。入りて消息せよ」と宣へば、人入れて案内せさす。(一二)わざと斯く立ち寄り給へる事、と

（一）藤壺が
（二）源氏
（三）非常な
（四）夢判斷する者
（五）天子の父たるべしといふ趣
（六）めでたき中に凶事も交りて
（七）しるしの現はるゝ迄人に語るな
（八）藤壺懷妊の事
（九）我が胤ではなきかと
（一〇）今一度藤壺に逢ひたしと
（一一）計らひ樣なし
（一二）藤壺の源に對する返事
（一三）藤壺參內
（一四）帝の感じ
（一五）藤壺の腹のふくれたる也
（一六）藤壺の方にのみ帝が居て
（一七）秋冷の時分なれば也

などの隙なきもそら恐ろしう、（一）物を思ほす事隙なし。（二）中將の君も、（三）おどろ〳〵しう樣異なる夢を見給ひて、（四）合する者を召して問はせ給へば、（五）及なう思しもかけぬすぢの事を合せけり。占者「（六）その中に違目ありて、愼ませ給ふべき事なむ侍る」といふに、煩はしく覺えて、源「みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この（七）夢合ふまで、また人にまねぶな」と宣ひて、心の中には、いかなる事ならむと思し渡るに、（八）この宮の御事聞き給ひて、もし（九）然るやうもやと思し合せ給ふに、いとどしく（一〇）いみじき言の葉を盡し聞え給へど、命婦も思ふに、いとむくつけう煩はしさ増りて、更に（一一）たばかるべき方なし。はかなき一行の（一二）御かへりのたまさかなりしも、絶えはてにたり。七月になりてぞ參り（一三）給ひける。（一四）珍らしうあはれにて、いとゞしき御思の程かぎりなし。少しふくらかに（一五）なり給ひて、うち惱み面痩せ給へるはた、實に似るものなくめでたし。例の旦暮（一六）こなたにのみおはしまして、御遊もやう〳〵（一七）をかしき頃なれば、源氏の君も暇なく召し纏しつゝ、御琴笛など、さ

裏へも參らで、二三日籠りおはすれば、又いかなるにかと、御心(一)動かせ給ふべかンめるも、怖ろしうのみ覺え給ふ。宮も、猶いと心うき身なりけりと思し歎くに、惱ましさもまさり給ひて、疾く參り給ふべき御使(二)しきれど、(三)思ほしも立たず。誠に御心地、(四)例のやうにもおはしまさぬは如何なるにかと、(五)人知れず思す事もありければ、心憂く、如何ならむとのみ思し亂る。暑き程はいとゞ起きも上り給はず。(六)三月になり給へば、いと著きほどにて、人々見奉り(七)咎むるに、あさましき(八)御宿世の程心うし。人は思ひ寄らぬ事なれば、この月まで(九)奏せさせ給はざりける事を驚き聞ゆ。我が御心一つには、(一〇)著う思し分くこともありけり。御湯殿などにも親しう仕う奉りて、何事の御氣色をも著く見奉り知れる、御乳母子の辨、命婦などぞ、怪しと思へど、互に(一一)言ひ合すべきにあらねば、猶遁れ難かりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。內裏には(一二)御物怪のまぎれにて、頓に氣色なうおはしましける樣にぞ奏しけむかし。皆人も然のみ思ひけり。(一三)いとゞ哀に限なう思されて、御使

(一)桐壺帝の心配せらるるも
(二)追つかけ〳〵來れど
(三)參內を
(四)藤壺の心持なるは
(五)源氏と密會の事
(六)懷姙後三ヶ月
(七)氣がつく
(八)因果
(九)何故帝に奏せざりしと
(一〇)源の胤と分つて居る
(一一)相談も出來ぬので
(一二)つき物などのありたる爲懷姙の樣子の知れざりし趣に、懷姙の時には之を妬める女の怨靈生靈などのつくは此頃の貴女の常也
(一三)帝が



るだに、世と共の御物思なる（一）を、然てだにやみなむと深う思したるに（二）、いと心憂（三）くて、いみじき（四）御氣色なるものから、懐しう（五）らうたげに、さりとて打解けず、心深う恥かしげなる御もてなしなどの、猶人に似させ給はぬ（六）を、などか斜なること（七）だに打交り給はざりけむと、つらうさへぞ思さるゝ（八）。何事をかは聞えつくし給は（九）む。くらぶの山（一〇）にやどりも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなか〳〵なり（一一）。

源　見てもまた逢ふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるゝわが身ともがな（一二）

とむせかへらせ給ふさまも、流石にいみじければ、

藤　世がたりに人やつたへむたぐひなくうき身を醒めぬゆめになしても（一三）

おもほし亂れたる樣も、いと理にかたじけなし。命婦の君（一四）ぞ、御直衣など（一五）は、かき集めもて來たる。殿におはして、泣寢に臥しくらし給ひつ。御文なども（一六）、例の御覽じ入れぬ由のみあれば、常の事ながらも、つらういみじう思しほれて、内

(一)不斷の思の種
(二)せめてあれ切りて止めん
(三)又逢ひたるが
(四)非常に悲しき
(五)源の藤壺に對する感じ
(六)他人に勝れたる
(七)なぜ斯ろ缺點が無いのだらうと
(八)缺點があれば斯く泣戀しきこともあるまじければ也
(九)暇のなき也
(一〇)大和、暗といふ緣語にていふ也
(一一)却て逢はぬがましな位
(一二)今比怨しき夢は見て居れど、再び逢はんことは難ければ、此夢の中に此儘消えて仕舞ひたし
(一三)憂き我身は消えてなくなるとも、後世に浮名を流すべし、それが歎かしきなり
(一四)王命婦
(一五)源の遺留品
(一六)源へ文をやりても藤壺は見ざる由の返事のみ來る也

(一)とんでもない事に
(二)紫の幼稚な一つぶ書きの文が見たし
(三)尼への文の中なる紫宛の文
(四)我は深く君を思へるに君は何故我を疎むぞ、「淺香山かげさへ」の歌は「難波津」と同じく手習の初に習ひし歌なり、前に難波津をだにとありしによりて淺香山を引きたり
(五)御詞に乘りて深入りあれば後悔することあるべければ、只「もとの所でよい加減に應答しておくがよかるべし
(六)惟光の復命も尼の返事に同じ
(七)少納言の言を惟光が傳ふる也、尼の痒直りたらば
(八)京の尼の家に歸りてから返事せん
九 藤壺宿下、源氏との情交、藤壺懷胎、源氏の夢
(九)藤壺女御
(一〇)源が
(一一)此機會にでも藤壺に逢はんと
(一二)內裏に居ても自邸に居ても
(一三)藤壺の侍女
(一四)無理な首尾にて逢ひたれば、逢ひても夢の如くなるがつらし
(一五)是より前の密會

を如何に思ほすにかと、(一)ゆゝしうなむ誰も〳〵思しける。御文にも、いと懇に書い給ひて、「(二)かの御放書なむ、なほ見給へまほしき」とて(三)例の中なるには、

源(四)　あさか山あさくも人をおもはぬになど山の井のかけはなるらむ

御かへし、

尼(五)　汲みそめてくやしと聞きし山の井の淺きながらや影を見すべき

(六)惟光も同じ事をきこゆ「(七)この煩ひ給ふ事よろしくば、この頃すぐして、(八)京の殿に渡り給ひてなむ、聞えさすべき」とあるを、心もとなうおぼす。

(九)藤壺の宮、惱み給ふ事ありて、まかで給へり。上の、おぼつかながり歎き聞え給ふ御氣色も、(一〇)いといとほしう見奉りながら、(一一)かゝる折だにと、心もあくがれ惑ひて、何處にも〳〵參うで給はず。(一二)內裏にても里にても、晝はつく〴〵とながめ暮して、暮るれば、(一三)王命婦を責めありき給ふ。いかゞたばかりけむ、(一四)いとわりなくて見奉る程さへ、現とは覺えぬぞわびしきや。(一五)宮もあさましかりしを思し出づ

と思しわづらふ。

尼「ゆくての御事は、なほざりにも思ひ給へなされしを、ふりはへさせ給へるに、（一）聞えさせむかたなくなむ。（二）まだ難波津をだにはかゞしう續け侍らざめれば、かひなくなむ。さても、

（三）あらしふく尾上の櫻散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

いとゞうしろめたう。

とあり。僧都の御かへりも（四）同じさまなれば、口惜しくて、二三日ありて、惟光をぞ奉れ給ふ。「少納言の乳母といふ人あべし。尋ねて、委しく語らへ」など宣ひ知らす。（五）さもかゝらぬ隈なき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひを、（六）（七）まほならねども、見し程を思ひやるもをかし。わざと斯う御文あるを、僧都もかしこまり聞え給ふ。少納言に消息して（八）逢ひたり。委しく、思ほし宣ふさま、（九）大方の御有樣などかたる。（一〇）言多かる人にて、（一一）つきぐ〵しう言ひ續くれど、（一二）いと理なき御程

（一）尼君の返事、紫上の將來に關する御話は等閑の事に思ひ居しに、わざわざの仰で御返事の申樣なし
（二）紫をいふ、「難波津に咲くや此花」の歌を、昔は手習の初に書きならひし也
（三）櫻の散らぬ間をのみ賞翫せんとは賴もしからぬ御心よ
（四）尼のと同樣
（五）惟光の心、女に掛けては如何にもぬけ目なき心かな、相手はあの通の子供なるに
（六）「御けはひをと」とあるべし
（七）紫を自分はよくは見ねど
（八）逢ひたしと申込みて惟光が對面したり
（九）平生の樣子
（一〇）惟光は
（一一）調子よく
（一二）紫はまだ一向の子供なるに

ぐさめにも見む、兵部卿の宮は、いとあてになまめい給へれど、(一)匂ひやかになど(二)もあらぬを、いかでかの一族に覺え給へらむ、(三)ひとつ后腹なればにや、(四)など思ほすゆかりいと睦まじきに。(五)いかでかと深うおもほす。またの日御文奉れ給へり。(六)僧都にもほのめかし給ふべし。(七)尼上には、

(八)源 もてはなれたりし御氣色のつゝましさに、思ひ給ふる樣をも、え顯しはて侍らずなりにしをなむ。(九)かばかり聞ゆるにても、おしなべたらぬ志の程を御覽じ知らば、いかに嬉しう。

などあり。中にちひさく(一〇)引き結びて、

源 面かげは(一一)身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめて來しかど

夜の間の風も後めたうなむ。(一二)

とあり。御手などはさるものにて、(一三)唯はかなう押し包み給へる樣も、さだすぎた(一四)る御めどもには、目もあやに好ましう見ゆ。あなかたはらいたや、(一五)いかゞ聞えむ、

(一)上品にしてなまめかしく
(二)豊艶なる所はなきに
(三)其子の紫は如何して伯母の藤壺に似たるならん
(四)藤壺と兵部卿とは同胞なればにや
(五)他人ならず思はれるので是非紫を手に入れんと
(六)北山へ
(七)紫上の件を
(八)紫上の話を丸で以の外の事と思ひ居られしに憚りて、十分に存寄を述べざりしは殘念なり
(九)斯くわざ〳〵手紙を上るを見ても
(一〇)紫にあてたる也
(一一)我心はそつくり其方に置いて來た筈なるに矢張君の俤が目にちらつく
(一二)わが大切な櫻を夜の風が來て散しはせぬかと心配なり
(一三)よきは勿論の事で
(一四)老人たちの目には
(一五)尼の心

おもほして、年の重るに添へて、御心の隔もまさるを、いと苦しく思ほすに、源「(一)時時は世の常なる御氣色を見ばや。堪へ難うわづらひ侍りしをも、如何とだに訪はせ給はぬこそ、(二)珍しからぬことなれど、猶うらめしう」と聞え給ふ。辛うじて、葵「(三)訪はぬはつらきものにやあらむ」と、後目に見おこせ給へる(四)まみ、いと恥かしげに、氣高う美しげなる御容貌なり。源「(五)まれ〳〵は、あさましの御事や。(六)訪はぬなど言ふきはは、異にこそ侍るなれ。心憂くも宣ひなすかな。(七)世と共にはしたなき御もてなしを、もしおもほし直る折もやと、とざまかうざまに試み聞ゆるを、いとゞ思ほし疎むなゝめりかし。(八)よしや命だに」とて、(九)夜のおましに入り給ひぬ。女君、(一〇)ふとも入り給はず、(一一)聞え煩ひ給ひて、うち歎きて臥し給へるも、(一二)なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思しみだるゝ事多かり。

かの(一三)若草の生ひ出でむほどの猶ゆかしきを、(一四)似氣なき程と思へりしも理ぞかし、言ひ寄り難き事にもあるかな、如何に構へて、唯心やすく迎へ取りて、明暮のな

(一)通常の夫婦らしき様子もたまには見せてくれ
(二)いつもの振りではあれど
(三)訪はぬがつらき物と御存じか、さらば平生我が訪ひ給はぬは如何
(四)目つき
(五)たまに口をきくかと思へば浅間しい事をいふ
(六)訪はぬとて恨むは忍びて通ふ中の事
(七)君の仕向が段々愛想なくなり行くのを思直すかと色々やつて見るのに
(八)命だに心に叶ふものならば何かは人を恨みしもせん」
(九)御寢所
(一〇)早速寢所にも入らず
(一一)何と返事せんかと困りて
(一二)源が氣にくはぬのであらう
㊇ 北山への音信
(一三)紫の将来、以下源の心
(一四)今貰ふのは不似合なりと尼が思ひしも道理

(一)毎年穀五十石給せられ、春秋に祈禱を行ふ
(二)修行の功は積りたるに朝廷に知られざりしことよ
(三)遠慮したり
(四)私方で
(五)行きたくも無けれど
(六)左大臣自用の
(七)源を前に乘せ自分は奥に乘れる也、即左大臣が陪乘せる也
(八)左大臣の源を大事がる志
(九)源の來るを待受けて
(一〇)源が
(一一)葵上
(一二)強ひてすゝめて
(一三)やつと源の前に出でたり
(一四)坐らせられて身動きもしかねて
(一五)きちんとして居るので
(一六)思ふ事をも語り、以下源の心
(一七)話しがひありて甘く受答へをもせば可愛かるべきに
(一八)源が葵を

給へば、帝「阿闍梨(一)などにもなるべきものにこそあゝめれ。(二)行の勞は積りて、公に知ろしめされざりける事」と、尊がり宣はせけり。大殿參りあひ給ひて、左大臣「御迎にもと思ひ給ひつれど、忍びたる御步行にはいかゞと、(三)思ひ憚りてなむ。(四)のどやかに一二日うち休み給へ」とて、左大臣「やがて御送り仕う奉らむ」と申し給へば、さしも思さねど、ひかされてまかで給ふ。(六)我が御車にのせ奉り給ひて、(七)自はひき(五)入りて奉れり。(八)もてかしづき聞え給へる御心ばへの哀なるをぞ、さすがに心苦しく思ほしける。殿にも、(九)おはしますらむと心づかひし給ひて、(一〇)久しく見給はぬほどに、いとゞ玉の臺に磨きしつらひ、よろづを整へ給へり。(一一)女君、例の這ひ隱れて、頓にも出で給はぬを、大臣(一二)切に聞え給ひて、(一三)辛うじてわたり給へり。たゞ繪に畫きたる物の姫君のやうに、(一四)しすゑられて、うちみじろき給ふ事も難く、(一五)麗しうてものし給へば、(一六)思ふ事もうちかすめ、山路の物語をも聞えむに、(一七)いふかひありて、をかしううち答へ給はばこそ哀れならめ、世にも心も解けず、(一八)疎く恥かしきものに

(一)病悩
(二)無愛相ならぬ位に
(三)此世の人とも
(四)源の如き勝れたる人が、何の因果で日本の如き小國の然も末世に生れたのであらう
(五)紫上
(六)源を
(七)父兵部卿宮
(八)よき事ならんと
(九)大事がり
●紫上との仲睦し
(一〇)帝が源を見て

切に聞え給へば、源「みだり心地(一)いと堪へ難きものを」と聞え給へど、けにくから(二)ずかきならして、皆立ち給ひぬ。飽かず口惜しと、いふかひなき法師童べも、涙をおとしあへり。まして内には、年老いたる尼君達など、まだ更にかゝる人の御有様を見ざりつれば、この世の(三)物とも覺え給はずと聞えあへり。僧都も、「あはれ(四)何の契にて、かゝる御様ながら、いとむつかしき日本の末の世に、うまれ給ひつらむと、見るにいとなむ悲しき」とて、目押し拭ひ給ふ。この若君(五)、幼心地にめで(六)たき人かなと見給ひて、紫「宮(七)の御有様よりも、勝り給へるかな」など宣ふ。女房「さらば彼の人の御子になりておはしませよ」と聞ゆれば、うちうなづきて、いとよ(八)うありなむとおもほしたり。雛遊にも、繪畫い給ふにも、源氏の君とつくり出でて、淸らなる衣著せ(九)かしづき給ふ。

君はまづ内裏に參り給ひて、日頃の御物語など聞え給ふ。いと(一〇)いたう衰へにけりとて、ゆゝしと思しめしたり。聖の尊かりけることなど問はせ給ふ。委しく奏し



（一）かまはずに
（二）出先を言はずに出られしとて
（三）左大臣の子息ども
（四）置いて來られしはけしからぬ
（五）趣ある
（六）一寸
（七）催馬樂葛城「葛城の寺の前なるや、豐浦の寺の西なるや、榎の葉に白玉しづくや眞白玉しづくや」
（八）通常人よりは勝れたる
（九）いつも篳篥吹く
（一〇）十三絃の琴

と、由ある手のいとあてなるを、うち捨て（一）書き給へり。御車に奉るほど、大殿より、何方（二）ともなくておはしにける事とて、御迎の人々、君達（三）などあまた參りたまへり。頭中將、左中辨、さらぬ君達もしたひ聞えて、君達「かうやうの御供は仕う奉り侍らむと思ひ給ふるを、あさましうおくらさせ（四）給へる事」と恨み聞えて、君達「いといみじき花の陰に、暫しもやすらはず、立ちかへり侍らむは、飽かぬわざかな」と宣ふ。岩がくれの苔の上に並み居て、土器まゐる。落ち來る水のさまなど故ある（五）瀧のもとなり。頭中將、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。辨の君、扇はかなう（六）うちならして、（七）「豐浦の寺の西なるや」とうたふ。（八）人よりは異なる君達なるを、源氏の君いといたくうち惱みて岩に寄り居給へるは、類なくゆゝしき御有樣にて、何事にも目うつるまじかりける。（九）例の篳篥吹く隨身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。僧都、琴（一〇）を自らもて參りて、僧都「これたゞ御手ひとつ遊ばして、同じくば、山の鳥も驚かし侍らむ」と、

太子の百濟より得給へりける、金剛子(一)の數珠の玉の裝束したる、やがて(二)その國より入れたる筥の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに、御藥ども入れて、藤櫻などにつけて、所につけたる御贈物どもさゝげ奉り給ふ。君は、聖よりはじめ、讀經しつる法師の布施、(三)まうけの物ども、さまざまに取り(四)に遣したりければ、そのわたりの山がつまで、然るべき物ども賜ひ、御誦經などして出で給ふうちに、僧都入り給ひて、(五)かの聞え給ひし事まねび聞え給へど、尼「ともかうも唯今は(六)聞えむ方なし。若し御志あらば、いま四五年を過してこそは、ともかうも」と宣へば、(七)さなむと同じさまにのみあるを、本意なしとおぼす。御消息、僧都の許なるちひさき童して、

源 (八)夕まぐれほのかに花の色を見てけさはかすみの立ちぞわづらふ

御かへし、

尼 (九)まことにや花のあたりは立憂きとかすむる空のけしきをも見む

(一)硬度の高き石なるべし、今の金剛石の類なりや否やは未詳
(二)百濟より其數珠を入れて渡したる
(三)用意の品々
(四)京へ
(五)源に頼まれたる紫貰受の一條を傳へたれど
(六)御返事の申上げ様なし
(七)斯樣々々と僧都が取次ぎたるのみなるを
(八)紫を隙見してより心にかゝりて今朝出發しかねたり
(九)出發しかぬるといふ君が、果して其程に思はるゝや否やを今後に於て試みん、かすむるは匂はして言ふこと

見えぬ(一)さまの御くだもの、何くれと、谷の底まで掘り出でて、いとなみ聞え給ふ。

僧都「今年(二)ばかりの誓ひ深う侍りて、御送にもえ參り侍るまじき事、なかなか(三)にも思ひ給へらるべきかな」など聞えて、御酒まゐり給ふ。源「山水に(四)心とまり侍りぬれど、内裏より覺束ながらせ給へるも畏ければなむ(五)。今この花のをり過さず參りこむ。

宮人に行きてかたらむ山ざくらかぜよりさきに來ても見るべく」

と宣ふ御もてなし聲づかひさへ、目もあやなる(六)に、

僧都「優曇華(七)の花まち得たるこゝちして深山櫻に目こそうつらね

と聞え給へば、ほゝゑみて、源「時ありて一度開くなるは、難か(八)ゝなるものを」と宣ふ。聖、御土器(九)たまはりて、

聖「奥山の松のとぼそを稀にあけてまだ見ぬ花(一〇)のかほを見るかな

とうち泣きて見奉る。聖、御まもりに、獨鈷(一一)たてまつる。見給ひて、僧都、聖徳

(一)珍らしき
(二)本年中禁足の誓願
(三)禁戒を守りて却て煩惱の種になるべし
(四)爰に居たけれど
(五)一先歸るべし
(六)まぶしき程に美しきに
(七)源を見れば優曇華の咲きたるを見る心地して、優曇華は三千年に一度花さく、咲く時は轉輪聖王此世に出づといふ
(八)優曇華は中々遇ひ難きものなれば、我を其れに比するは當らず
(九)明盃を頂戴して
(一〇)源氏を花に比したる也
(一一)銅にて造り、兩端尖りたる佛具

(一)紫の幼少なるを知らずして不相應な話を持掛けると思ひて
(二)既に口を切りたれば
(三)間の襖を
(四)一心に法華經を念誦して心を亂さぬこと
(五)己の惡行を懺悔して以後を愼むべき旨を佛に誓ふこと
(六)うちつけに
(七)加持
(八)齒の間より漏れて變に響くも却て値打ある樣に聞えて
(九)梵語の經文
(十)病氣快癒、歸京

(一)いと似げなき事をさも知らで宣ふと思して、心解けたる御答もなし。僧都おはしぬれば、源「よし、かう(二)聞えそめ侍りぬれば、いと頼もしうなむ」とて、押し立て(三)給ひつ。暁方になりにければ、(四)法華三昧行ふ堂の懺法(五)の聲、山おろしにつきて聞えくる、いと尊く、瀧の音に響きあひたり。

源 吹きまよふみ山おろしに夢さめてなみだもよほす瀧のおとかな

僧都「さしぐみに袖ぬらしける山水にすめるこゝろは騷ぎやはする

耳馴れ侍り(六)にけりや」と聞え給ふ。明け行く空は、いといたう霞みて、山の鳥どもも、そこはかとなく囀りあひたり。名も知らぬ木草の花ども、いろ〳〵に散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたゝずみ歩くもめづらしく見給ふに、惱ましさも紛れはてぬ。聖、動きもえせねど、とかくして護身(七)參らせ給ふ。かれたる聲のいといたう(八)すきひがめるも哀に功づきて、(九)陀羅尼讀みたり。

御迎の人々參りて、怠り給へるよろこび聞え、内裏よりも御使あり。僧都、世に

でなれど、心には(一)さも覺え侍らねば、(二)佛はおのづから」とて、(三)おとな〳〵しう恥かしげなるにつゝまれて、頓にも(四)えうち出で給はず。尼「實に(五)思ひ給へより難き序に、かくまで宣はせ聞えさするも、(六)淺くはいかゞ」と宣ふ。源「(七)哀に承る御有樣を、かの過ぎ給ひにけむ、御代りに思しないてむや。(八)いふかひなき程の齡にて、睦まじかるべき人にも立ち後れ侍りにければ、怪しう浮きたるやうにて、年月をこそ重ね侍れ。同じさまに物し給ふなるを、類になさせ給へと、いと聞えまほしきを、(九)かゝる折もありがたくてなむ、思されむ所をも憚らず、(一〇)打出で侍りぬる」と聞え給へば、尼「いと嬉しう思ひ給へぬべき御事ながらも、(一一)聞し召しひがめたる事などや侍らむと、つゝましうなむ。(一二)あやしき身一つを、たのもし人にする人なむ侍れど、(一三)いとまだいふかひなき程にて、(一四)御覽じ許さるゝ方も侍り難ければ、えなむ承りとゞめられざりける」と宣ふ。源「(一五)みな覺束なからず承るものを、(一六)所狹うおぼし憚らで、(一七)思ひ給へよるさま異なる心の程を御覽ぜよ」と聞え給へど、

(一)出來心などでいふのでは無いから
(二)佛は我心を見通し給ふべし
(三)相手が年輩で氣がおかれるのに遠慮して
(四)言出されず
(五)思もよらぬ序に
(六)御志淺くは思ひませぬ
(七)承れば案は誠に氣の毒な身の上なる由なるが
(八)我も幼時母に死なれて便りなき身なるが、案も同様なれば我を其と思ひ給へと申上げたし
(九)斯る機會は得難ければ
(一〇)申出したり
(一一)勘違ひをなされたる所もあるべき歟と憚り思ふ
(一二)私一人を力にする
(一三)幼少
(一四)勘辨して置いて戴く事すらむつかしければ御受も申難し
(一五)何もかもよく承知の上なれば
(一六)窮屈に遠慮せず
(一七)一風變った心持を見て呉れ



し給はぬさまは、知しめしたりげなるを、誰にかは」と聞ゆ。源「おのづから然る(一)樣ありて聞ゆるならむと、思ひなし給へかし」と宣へば、入りて聞ゆ。あな今め(二)かし、この君や、世づいたる程におはするとぞ思すらむ、(三)さるにてはかの若草を、(四)いかで聞い給へることぞ、と樣々あやしきに心も亂れて、久しうなればなさけな(五)しとて、

尼「まくらゆふ今宵ばかりの露けさを深山のこけにくらべざらなむ(六)

乾がたう侍るものを」と聞え給ふ。源「かやうの人傳なる御消息は、まだ更に聞え(七)知らず、ならはぬ事になむ。かたじけなくとも、かゝる序にまめ〳〵しう聞えさ(八)すべき事なむ」と聞え給へれば、尼君、「いかでひがごと聞き給へるならむと、(九)いと恥かしき御けはひに、何事をかは答へ聞えむ」と宣へば、(一〇)「はしたなうもこそ思せ」(一一)と人々聞ゆ。尼「實に、若やかなる人こそうたてもあらめ。まめやかに宣ふ辱し」(一二)とて、ゐざり寄り給へり。源「うちつけに、(一三)あさはかなりと御覽ぜられぬべきつい(一四)

(一)然るべき譯ありて申上るならんと
(二)尼の心
(三)未だ情を解する年輩なりと思召すならん
(四)それにしては前に我がよみたる若草の歌を知て居らるゝ樣なるが合點がゆかぬ
(五)返歌が遲くなりては殺風景なりとて
(六)君の御旅寢は心細くても今夜限の事也、我が袖の露けさは中々そんな物に非ず、わざと外へそらしたる返歌也
(七)今までやりつけぬ
(八)眞面目に申上げたき
(九)どうしてあの我がつまらぬ歌を聞知り給へるぞと思へば恥かしくて
(一〇)侍女等に
(一一)御目にかゝられば無作法な奴と思召すべし
(一二)若い者ならば嫌てもあらうが、年寄だから構はぬ
(一三)突然て
(一四)場合

など、(一)すゞろなる人も、所がら物あはれなり。まして思ほしめぐらす事多くて、まどろまれ給はず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひ著くて、いと忍びたれど、數珠の脇息に引き鳴らさるゝ音ほの聞え、なつかしう(二)うちそよめく音なひ、(三)あてはかなりと聞き給ひて、(四)程もなく近ければ、外に立て渡したる屏風の中を少し引きあけて、(五)扇をならし給へば、(六)おぼえなき心地すべかめれど、(七)聞き知らぬやうにやはとて、ゐざり出づる人あゝなり。少し(八)退きて、あやし、僻耳にや、(九)とたどるを聞き給ひて、(一〇)源「佛の御しるべは、暗きに入りても更に違ふまじかゝなるものを」と宣ふ御聲の、いと若うあてなるに、うち出でむ聲づかひも恥かしければ、女房「如何なる方の御しるべにかは。おぼつかなく」と聞ゆ。源「實に、(一一)うちつけなりとおぼめき給はむも理なれど、

(一二)はつ草の若葉のうへを見つるより旅寝のそでもつゆぞかわかぬ

(一三)と聞え給ひてむや」と宣ふ。女房「更にかやうの御消息、(一四)承り分くべき人ももの

(一)うかうかして居る人も
(二)衣ずれの音などの聞ゆる也
(三)人柄なりと思ひて
(四)内の人々の居所と我が居間と
(五)人を呼ぶ爲に
(六)内の人々は思ひも寄らぬ事に思へども
(七)知らぬ顔も出來ぬ
(八)又引込みかけて
(九)迷つて居るを
(一〇)佛は冥途に迷ふ衆生をも導き給ふものなれば、此菴の人々も我が頼む案内はよくして給はるべし
(一一)突然なりとて胡亂に思はれんも
(一二)紫上を見てより戀しくて泣きあかすと也
(一三)申上げてくれぬか
(一四)分る樣な人の居ぬ事は御承知の筈なるに

末に思ひ給へ歎き侍るめる」と聞え給ふ。さればよと思さる。源「怪しき事なれど、(一)幼き御後見におもほすべく聞え給ひてむや。(二)思ふ心ありて、行きかゝづらふ方も侍りながら、世に心の染まぬにやあらむ、獨住にてのみなむ。(三)まだ似げなき程と、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」など宣へば、僧都「いと嬉しかるべき仰事なるを、まだ(四)無下にいはけなき程に侍るめれば、(五)戯れにても御覽じ難くや。そもそも女は、(六)人にもてなされて大人にもなり給ふものなれば、(七)委しくはえとり申さず。(八)かの祖母北の方に語らひ侍りて聞えさせむ」と、(九)すくよかに言ひて、(一〇)物ごはきさまし給へれば、(一一)若き御心に恥かしくて、えよくも聞え給はず。僧都「阿彌陀佛ものし給ふ堂に、(一二)する事侍る頃になむ。初夜いまだ勤め侍らず。(一三)過して侍はむ」とてのほり給ひぬ。

君は心地もいと惱ましきに、雨少しうちそゝぎ、山風ひやゝかに吹きたるに、瀧のよどみもまさりて音高く聞ゆ。少しねぶたげなる讀經の絶え〴〵すごく聞ゆる

(一)我を其子の保護者に頼む樣に話しては呉れぬか
(二)本妻はあれど氣に入らず、思ふ仔細ありて常に獨寝しばかりして居る
(三)普通の夫婦の樣に考へて、其にはまだ年が似合はぬ樣に思はれんが、夫婦になるは先へよつての事
(四)一向頑是なき年輩
(五)お慰物としても御世話はなり難からん
(六)人の保護を受けて
(七)私からは何とも申上げ難し
(八)尼に相談して申上ぐべし
(九)率直に
(一〇)武骨なる容體
(一一)源が
(一二)佛前の勤
(一三)初夜の勤を濟して參るべし
㊄ 紫上を貰ひたしと祖母に申込む

(一) 娘が死して
(二) 一生懸命に大事にしたりしが
(三) 按察死せしかば
(四) 先帝の子、藤壺の兄
(五) 兵部卿の本妻がけしからぬ事に思ひて
(六) つらい目にあひて
(七) 見たる兒は其娘の子にてありしよ
(八) 兵部卿宮の子なる故藤壺にも似たるならん
(九) 紫は人柄もよく、無いがましなる利口だてもなければ
(一〇) 其の死にたる娘は跡に子もなきか、空とぼけて聞く也
(一一) かの兒の身の上をつきとめたくて
(一二) 死際に一人生みたり
(一三) 此兒が心配の種ぢやと老後に尼が歎き居る様なり

聞ゆるなり」と、おしあてに宣へば、僧都「女たゞ一人侍りし、亡せて(一)この十餘年にやなり侍りぬらむ。故大納言は、内裏に奉らむなど、かしこういつき(二)侍りしを、その本意の如くも物し侍らで、過ぎ(三)侍りにしかば、唯この尼君一人にてあつかひ侍りし程に、如何なる人のしわざにか、兵部卿の宮(四)なむ、忍びて語らひつき給へりけるを、もとの(五)北の方、やむごとなくなどして、安から(六)ぬこと多くて、旦暮物を思ひてなむ、亡くなり侍りにし。物思ひに病づくものと、目に近く見給へし」など申し給ふ。さらばその子なりけり(七)、と思し合せつ。御子の(八)御筋にて、かの人にも通ひ聞えたるにや、といとゞ哀に見まほしく、人の程もあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のまゝに教へ(九)生ふし立てて見ばやと思ほす。源「いと哀に物し給ふことかな。それは(一〇)留め給ふかたみもなきか」と、幼かり(一一)つるゆくへの、猶たしかに知らまほしくて、問ひ給へば、僧都「亡くなり(一二)侍りし程にこそ侍りしか。それも女にてぞ。それにつけても、物思ひ(一三)の催しになむ、齢の

香の香など匂ひ滿ちたるに、(一)君の御追風いと異なれば、内の人々も心づかひすべかめり。僧都、(二)世のつねなき御物語、後の世の事など聞え知らせ給ふ。(三)我が御罪のほど怖ろしう、(四)あぢきなきことに心をしめて、(五)生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして(六)後の世のいみじかるべきをおほし續けて、かやうなる住居もせまほしう覺え給ふものから、(七)晝の面かげ心にかゝりて戀しければ、源「こよにものし給ふは誰にか。尋ね聞えまほしき夢を見給へしかな。(八)今日なむ思ひ合せつる」と聞え給へば、うち笑ひて、僧都(九)「うちつけなる御夢語にぞ侍るなる。尋ねさせ給ひても、(一〇)御心劣りせさせ給ひぬべし。(一一)故按察の大納言は、世になくて久しくなり侍りぬれば、え知しめさじかし。(一二)その北の方なむ、なにがしが妹にはべる。かの按察かくれて後、(一三)世を背きて侍るが、(一四)この頃煩ふこと侍るにより、(一五)かく京にもまかでねば、たのもし所に籠りて、ものし侍るなり」と聞え給ふ。源「かの大納言のみ女、(一六)物し給ふと聞き給へしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに

(一)源の着物から來る風は特別のよき香なれば
(二)無常話
(三)源の心
(四)大それた事を思込んで、藤壺に對する戀をいふ
(五)生涯是で苦しむのであらう
(六)後生はさぞ惡かるべき事を
(七)紫上の面影
(八)夢見の總合點ゆかざりしに今日斯に來て夢に見たるは此處に居る人の事でありしよと分りたり
(九)突然なる
(一〇)想像には劣るならん
(一一)尼の夫、紫上の祖父
(一二)尼が私の妹なり
(一三)出家し
(一四)尼が
(一五)私が常に引籠り居る故、尼が此處を賴もしき處に思ひて
(一六)紫を尼の娘と思ひて、君て道に關を居たる顏付にて、彼の女はどうしたるぞと問へる也

れはしく思ひ給へてなむ。(一)草の御席もこの坊にこそ設け侍るべけれ。いと本意なき事」と申し給へり。(二)源「いぬる十餘日のほどより、瘧病に煩ひ侍るを、度重りて堪へがたう侍れば、人の教のまゝに、(三)俄に尋ね入り侍りつれど、(四)かうやうなる人の驗顯さぬ時、はしたなかるべきも、たゞなるよりは、いとほしう思ひ給へつつみてなむ、いたう忍び侍りつる。(五)今そなたにも」と宣へり。即ち僧都參り給へり。法師なれど、いと心恥かしく、人がらもやむごとなく世に思はれ給へる人なれば、(六)輕々しき御有樣を、はしたなうおぼす。かく籠れる程の御物語など聞え給ひて、僧都「同じ柴の庵なれど、(七)少し涼しき水のながれも御覽ぜさせむ」と、切に聞え給へば、(八)かのまだ見ぬ人々に、事々しう言ひ聞かせつるを、(九)つゝましう思せど、哀なりつる有樣も(一〇)いぶかしくておはしぬ。實にいと心殊に由ありて、同じ木草をも植ゑなし給へり。月もなき頃なれば、遣水に篝火ともし、燈籠などにも(一一)まゐりたり。南面いと淸げにしつらひ給へり。(一二)そらだきもの心にくゝ薫り出で、(一三)名

(一)御旅館にも我方を充つるが當然
(二)惟光に取次がせていふ源の返事
(三)此北山に參りたれど
(四)表向に來らば、若し祈禱の論なき場合に僧の間の惡さ加減が、有名な人だけに無名の僧よりも一層强かるべしと氣の毒に思ひて
(五)御宅へも參るべし
(六)源が餘り寠したるを聞が惡く思ふ
(七)私方の庭の景色御覽に入れたし
(八)我をまだ見ぬ尼などに
(九)氣恥かしく
(一〇)氣掛りで
(一一)火を燈したり
(一二)室内を薫らしむる爲にたく薫物
(一三)佛前にたく香

所に侍りながら、御とぶらひにも參うでざりける(一)」と宣へば、尼「あないみじや。いと怪しき樣を人や見つらむ」とて簾おろしつ。僧都「この世にのゝしり給ふ光源氏、かゝる序に見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、(二)いみじう世の愁忘れ、齢のぶる人の御有樣なり。いで御消息聞えむ」とて立つ音すれば、(三)歸り給ひぬ。(四)あはれなる人を見つるかな、かゝれば此のすきものどもは、かゝる歩行をのみして、よく(五)然るまじき人をも見附くるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思の外なることを見るよ、とをかしうおぼす。(六)さてもいと美しかりつる兒かな、何人ならむ、(七)かの人の御かはりに、明暮のなぐさめにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

うち臥し給へるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。程なき所なれば、君もやがて聞き給ふ。僧都「過り(八)おはしましける由、たゞ今なむ人申すに、驚きながら(九)さぶらふべきを、某(一〇)この寺に籠り侍るとは知しめしながら忍びさせ給へるを、(一一)う

(一)御尋ねも申上げざりき
(二)源の有樣を見れば
(三)源が
(四)源の心、あはれなる人は紫上
(五)見付けられそうもなき女をも
(六)源の心
(七)藤壺の代りに
㊃招かれて源氏僧都の坊に宿す、紫上の素性を聞く
(八)惟光に對していふ詞
(九)參上すべき筈なれども
(一〇)私
(一一)お怨み申して先づ參上は見合せたり

をかき撫でつゝ、尼「梳ることをもうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかな(一)うものし給ふこそ、哀にうしろめたけれ。(二)かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを、故姫君(三)は、十二にて殿(四)に後れ給ひしほど、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。たゞ今(五)おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじう泣くを見給ふも(六)、すゞろに悲し。幼心地にも、流石にうちまもりて(七)、伏目になりて俯したるに、こぼれかゝりたる髪、つや〳〵とめでたう見ゆ。

尼「おひ立たむ(八)ありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

また居たる大人、げにと打泣きて、

大人「はつ草(九)の生ひゆく末も知らぬまにいかでか露の消えむとすらむ

と聞ゆる程に、僧都あなたより來て、僧都「こなたは顯(一〇)にや侍らむ。今日しも端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中將の、瘧病まじなひに物し給ひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ、え知り侍らで、此

(一)たわいがなく
(二)お前程の年輩になれば斯く子供らしからぬ人もあるに
(三)紫の母、即此尼の娘
(四)夫、即紫の父
(五)我死なば
(六)源が
(七)尼の顔を見つめて
(八)行末の落着も分らぬ此子を置きては死ぬにも死なれぬ
(九)姫君の行末を見届くる迄は是非とも存生あれと也
(一〇)外からよく見えるかも知れぬ

（一）似たる所
（二）召使の童女
（三）衣に薫物の香をたきしむる爲衣をかくる籠、中に香爐を入る
（四）犬君をいふ
（五）責めらるゝ
（六）好かぬ
（七）雀は何方へ行きしか
（八）ふさふさと
（九）見醜からぬ
（一〇）人が呼ぶ樣なるは
（一一）子どもらしい
（一二）我が餘命幾許もなきをも思はず
（一三）生物を苦むるは罪なりと常に言聞かするに
（一四）此方へ來れ
（一五）跪き居たり
（一六）艶なり
（一七）頑是なく髪を掻き上げたる
（一八）髪の樣子
（一九）成人したらば美しき事と
（二〇）藤壺に似たる故自然目がとまるのであると

とて、尼君の見上げたるに、少し覺え（一）たる所あれば、子なゝめりと見給ふ。兒「雀の子を犬君（二）が逃しつる。薫籠（三）の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。この居たる大人、「例の心なし（四）の、かゝるわざをしてさいなまるゝ（五）こそ、いと心づきなけれ（六）。何方へかまかりぬる（七）。いとをかしうやうやうなりつるものを。烏などもこそ見つくれ」とて、立ちて行く。髪ゆるらか（八）にいと長く、めやすき人（九）なゝめり。少納言の乳母とぞ人いふめる（一〇）は、この子の後見なるべし。尼君、「いであな幼や（一一）。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく（一二）、今日明日になりぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得る（一三）ことぞと常に聞ゆるを、心憂く」とて、尼「此方や（一四）」といへば　ついゐたり（一五）。頰つきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり（一六）、いはけなくかいやりたる（一七）額つき、髪ざし（一八）、いみじううつくし。（一九）ねびゆかむ樣ゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、限なう心を盡し聞ゆる（二〇）人にいとよう似奉れるが、まもらるゝなりけり、と思ふにも涙ぞおつる。尼君髪



㊂源氏紫上を隙見す
(一)僧都の家の
(二)丁度覗いて居る前の西向の座敷
(三)貴人らしく
(四)ふつくりして
(五)目つき
(六)そぎ尼とて髪の末を揃へて切りたる也
(七)侍女なり
(八)山吹色の衣などの着古したるを着て
(九)紫上と名づく
(一〇)成人の後の美しさ思ひ遣られて
(一一)ふさ〳〵として
(一二)泣きたる様
(一三)喧嘩したるか

ば、流石にをかしくて、源「さらば暁に」と宣ふ。

日もいと長きに徒然なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの(一)小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々はかへし給ひて、惟光ばかり御供にて、のぞき給へば、たゞこの西面(二)にしも、持佛すゑ奉りて、行ふ尼なりけり。簾すこし上げて花奉るめり。中の柱に寄り居て、脇息の上に經を置きて、いと惱ましげに讀み居たる尼君、たゞ人と見えず。四十餘ばかりにて、いと白くあて(三)に痩せたれど、頬つきふくら(四)かに、まみの程(五)、髪の美しげにそがれ(六)たる末も、なか〳〵長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。清げなるおとな(七)二人ばかり、さては童女ぞ出でいり遊ぶ。中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣(八)、山吹などのなれたる著て、走り來たる女子(九)、あまた見えつる兒どもに似るべくもあらず、いみじうおひさき(一〇)見えて、美しげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆ(一一)らとして、顔はいと赤く(一二)すりなして立てり。尼「何事ぞや。童べと腹だち(一三)給へるか」

いふは播磨の守の子の、藏人より今年爵得たるなりけり。(一)供人「いと好きたる者なれば、かの入道の遺言(二)破りつべき心はあらむかし。(三)さて佇み寄るならむ」といひあへり。供人「いでや、然いふとも田舎びたらむ、幼くよりさる所に生出でて、古めいたる親にのみ從ひたらむは」(四)「母こそ故(五)あるべけれ。良き若人童女など、都のやむごとなき所々より、類(六)にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ。情なき人になりゆかば、さて心安くてしも、え置きたらじをや」など言ふもあり。(七)君は、「何心(八)ありて海の底まで深う思ひ入るらむ、底のみるめも物むつかしう」(九)など宣ひて、(一〇)たゞならず思ほしたり。斯樣にても、なべてならずもて僻みたる事好み給ふ御心なれば、御耳とゞまらむをやと見奉る。供人「暮れかゝりぬれど、おこ(一一)らせ給はずなりぬるにこそはあゝめれ。はや歸らせ給ひなむ」とあるを、大德、「御(一二)物怪など加はれるさまにおはしましけるを、今宵はなほ靜に加持など奉りて、出(一三)でさせ給へ」と申す。さもある事と皆人申す。君も、かゝる旅寢もならひ給はね

(一)従五位下になりたる
(二)かの娘を手に入れんとする
(三)其心あればこそ
(四)其娘が
(五)由ある人ならん
(六)縁を求めて
(七)娘が田舎めきたる情知らずに成行く樣ならば安心して其儘にも置くまじ
(八)願叶はずば海に入れと迄は如何なる心にて凝り固まりたるならん
(九)他人が見ても餘りうるさい、見るを海松にかけたり
(一〇)心を動かしたり
(一一)非常にひねつた事の好きな源なれば、此話は御耳に留つたらう
(一二)御全快ならん
(一三)つきものもある御樣子なれば

なれど、實にかの國の中に、さも人の籠り居ぬべき所々はありながら、深き里は人ばなれ心すごく、若き妻子の思ひ侘びぬべきにより、(一)かつは心を遣れる住居になむ侍る。先つ頃罷り下りて侍りし序に、有樣見給へに寄りて侍りしかば、(二)京にてこそ所得ぬやうなりけれ、そこら遙にいかめしうしめて造れる樣、(三)さはいへど、國の司にてし置きける事なれば、殘の齡ゆたかに經べき心がまへも、(四)二なくしたりけり。(五)後の世の勤もいとよくして、なかなか(六)法師まさりしたる人になむ侍りける」と申せば、源「さてその女は」と問ひ給ふ。良淸「(七)けしうはあらず、容貌心ばせなど侍るなり。代々の國の司など、(八)用意殊にして、さる心ばへ見すなれど、更にうけひかず。(九)我が身のかく徒に沈めるだにあるを、(一〇)この人一人にこそあれ、思ふさま異なり、若し我に後れてその志遂げず、この思ひおきつる宿世たがはば、(一一)海に入りね、と、(一二)常に遺言し置きて侍るなる」と聞ゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々、「海龍王の后になるべき(一三)いつきむすめなゝなり。(一四)心高さ苦しや」とて笑ふ。(一五)かく

(一)且は又己が氣ばらしの爲にせる
(二)彼は京にてこそ不得意なりしも、明石の住居は宏大なる場所を取りて
(三)何と言つても國守の勢にてしたる事なれば
(四)此上もなく
(五)佛道の勤も怠らず
(六)僧になつて却つて器量をあげたる
(七)容貌も心も惡くはなし
(八)非常に氣取つて此娘に氣のある風を見せるけれども
(九)父入道が
(一〇)我が希望をかくるは此娘のみ
(一一)娘の將來に關して特に期する所あり
(一二)娘が我が死後に於て出世の志を遂げず、豫期の運命の如くなることを得ずば
(一三)祕藏娘
(一四)氣位の高いのが窮屈な
(一五)此話をしたるは

の方を見給ふ。源「遙に霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう烟りわたれる程、繪にいとよくも似たるかな。かゝる所に住む人、心に思ひ殘す事はあらじかし」と宣へば、供人「これは(一)いと淺く侍り。(二)ひとの國などに侍る海山の有樣などを御覽ぜさせて侍らば、(三)いかに御繪いみじうまさらせ給はむ。富士の山、なにがしの嶽」など語り聞ゆるもあり。また西の國のおもしろき浦々、磯の上をいひ續くるもありて、萬にまぎらはし聞ゆ。良清「近き所には、播磨の明石の浦こそなほ殊に侍れ。何の(四)いたり深き隈はなけれど、唯海の面を見渡したる程なむ、(五)怪しくこと所に似ずゆほびかなる所に侍る。(六)かの國の前の守、新發意の女かしづきたる家、(七)いといたしかし。(八)大臣の後にて、(九)出でたちもすべかりける人の、世のひがもの(一〇)にて、交らひもせず、(一一)近衛の中將を捨てて、申し給はれりける司なれど、(一二)かの國の人にも少し慢られて、「何の面目にてか又都にも還らむ」と言ひて、(一三)頭もおろし侍りにけるを、少し奧まりたる山住もせで、(一四)さる海づらに出で居たる、ひが〳〵しきやう

(一)ほんの口もとの事なり
(二)遠國
(三)どの位繪が上達せらるゝならん
(四)非常に勝れたる所は無けれど
(五)何となく他所と違ひて快活なる所なり
(六)前播磨守にて新に僧になれる男の娘を大事にして住ませある家
(七)大層なものぢや
(八)此前播磨守入道は
(九)出世もすべき筈の人ながら
(一〇)癖物、變人
(一一)近衛中將の榮官を棄てゝ自ら願ひてなりたる播磨守なれど
(一二)播磨の國人
(一三)僧にもなり
(一四)明石の樣なる海邊に出娑婆りて住むは間違つて居る樣なれど

騒ぎて、うち笑みつゝ見奉る。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの(一)作りてすか(二)せ奉る。加持などまゐる程、日高くさしあがりぬ。少し立ち出でつゝ見渡し給へば、高き所にて、こゝかしこ僧坊ども顯に見おろさる。源「たゞこのつゞらをり(三)の下に、同じ小柴なれど、麗しうし渡して、清げなる屋、廊など續けて、木立いとよ(四)しあるは、何人の住むにか」と問ひ給へば、御供なる人、「これなむ、某僧都の、この二年籠り侍る坊に侍るなる」源(五)「心恥かしき人住むなる所にこそあゝなれ。怪しうもあまり(六)窶しけるかな。(七)聞きもこそすれ」など宣ふ。清げなる(八)童などあまた出で來て、(九)閼伽奉り、花折りなどするも顯に見ゆ。供人「彼所に女こそありけれ。僧都はよも(一〇)さやうにはするゐ給はじを、如何なる人ならむ」と口々いふ。下りて覗くもあり。をかしげなる女子ども、若き人童女なむ見ゆるといふ。

君は行し(一一)給ひつゝ、日たくる儘に、如何ならむと思したるを、供人「とかう紛らはさせ給ひて、(一二)おもほし入れぬなむ能く侍る」と聞ゆれば、後の山に立ち出でて、京

(一)呪符などなるべし
(二)飲ませ奉る
(三)曲りくねりたる坂路
(四)趣ある
(五)源の知人なれば也
(六)窶し過ぎたるは不都合であった
(七)僧都が
(八)僧都の家の中の様
(九)佛に奉る水
(一〇)よもや妻妾などは置くまいに
(一一)佛前の勤
(一二)氣にせぬがよい



(一) 瘧病が
(二) 此僧が
(三) 瘧はこじらしては大變なれば
(四) 岩窟
(五) 仕方がない、此方から微行せむ
(六) 源は窮屈なる身分なれば、斯かる景に遇ひたる事なく珍らしく思へり
㊁ 名僧の加持、明石入道の娘の噂
(七) 岩窟
(八) 非常に身を窶しては居れど風采隠れもなく源と分りたれば
(九) 先日御呼なされし御方
(一〇) 現世
(一一) 病氣などの祈禱

侍る。去年の夏も世におこりて(一)、人々まじなひ煩ひしを、やがてとゞむる(二)類あまた侍りき。しゝこらかしつる(三)時はうたて侍るを、疾くこそ試みさせ給はめ」など聞ゆれば、召しに遣したるに、僧「老い屈まりて、室(四)の外にもまかでず」と申したれば、源「(五)いかゞはせむ。忍びて物せむ」と宣ひて、御供に睦まじき四五人ばかりして、まだ曉におはす。やゝ深う入る所なりけり。三月の晦日なれば、京の花盛は皆過ぎにけり。山の櫻はまだ盛にて、入りもておはする儘に、霞のたゝずまひもをかしう見ゆれば、かゝる有樣(六)もならひ給はず、所せき御身にて、珍らしう思されけり。

寺の樣もいとあはれなり。峰高く(七)深き巖の中にぞ、聖入り居たりける。上り給ひて、誰とも知らせ給はず(八)、いといたうやつれ給へれど、しるき御さまなれば、僧「あなかしこや。一日(九)召し侍りしにやおはしますらむ。今はこの世(一〇)の事を思ひ給へねば、驗方(一一)の行も棄て忘れて侍るを、いかでか斯うおはしましつらむ」と、驚き

若紫(わかむらさき)

梗槩

㊀ 源氏瘧を病む。北山に有驗の僧ありと聞きて加持を受けに行く。㊁ 名僧の加持。源氏、從者に諸國の勝景を語らせて聞く序に、良清に明石入道の娘の噂を聞く。㊂ 源氏、北山の僧都の家を覗ひ、紫上を見る。紫上と其祖母の尼君。㊃ 僧都の源氏訪問、源氏、僧都に招かれて其坊に一宿す。紫上の素性を聞く。㊄ 尼君に紫上を貰ひたしと申込む。尼君其幼稚なるを以て辭す。㊅ 源氏の病氣快癒。歸京。㊆ 葵上との仲疎し。㊇ 紫上を思ふ心深し。北山への音信。㊈ 藤壺の宿下り。源氏との情交。懷胎。源氏の夢。㊉ 尼君出京。源氏尼君を訪ふ。尼君紫上を源氏に托す。⑪ 尼君逝去。源氏紫上を訪ひて一宿す。⑫ 紫上の父兵部卿宮、紫上を訪ふ。⑬ 源氏、惟光を紫上邸に遣りて宿直せしむ。紫上父の許に迎へられんとする噂。⑭ 源氏不意に紫上を迎へて竊に二條院に置く。乳母の少納言從ひて移る。⑮ 幼き紫上の當惑。源氏專ら紫上の機嫌を取る。⑯ 兵部卿宮の失望疑惑。⑰ 紫上漸く源氏に懷く。

瘧病(わらはやみ)に煩(わづら)ひ給ひて、萬(よろづ)にまじなひ、(一)加持(かぢ)などせさせ給へど、驗(しるし)なくて、あまた度(たび)起(おこ)り給ひければ、ある人(ひと)、「北山(きたやま)(二)になむ、なにがし寺(でら)といふ所(ところ)に、(三)かしこき行人(おこなひびと)

㊀ 源氏病の爲に北山に赴く
(一) 眞言のまじなひ
(二) 京都の北方の山
(三) えらい修行をつみたる僧

(一)死別せし夕顔も生別の空蟬も共に其行方を知らぬ暮秋の悲しさよ
(二)源が無暗に隠したるが氣の毒なれば書かざりしに
(三)帝の子なりとて惡きことは省きて善き事のみ譽め立てたりと、此記事を作者の私を加へたる作り事の如くいふ人ありし故、遂に諱まず漏さず書く樣になれり
(四)饒舌の罪は免れ難し

くらし給ひて、

源　(一)過ぎにしもけふ別るゝもふたみちに行くかた知らぬ秋のくれかな

なほかく人知れぬ事は苦しかりけりと、思し知りぬらむかし。かやうのくだくだしき事は、(二)あながちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて、皆漏しとゞめたるを、(三)など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、もの譽めがちなると、つくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなむ。(四)餘り物言さがなき罪さりどころなく。

(一)河原院の様子も其儘で
(二)生霊の様子
(三)事に
(四)表向に伊豫介に贈りたる也
(五)路の神に手向くる幣帛
(六)寝床より取帰りし
(七)我が思の空しくなりしをいふ
(八)手紙には
(九)小袿につけたる歌の返事
(一〇)小袿は夏衣なるに今は已に冬也、持帰られし小袿は蟬羽の如き夏衣なり、然るに今は已に冬衣の頃なれば、たちかへてけるとはいへる也
(一一)源の心、いくら考へて見ても
(一二)異常な強情で我を振りつけ通したる哉

に、この法事し給ひて又の夜、(一)ほのかにかのありし院ながら、添ひたりし女の様(二)も同じ様にて見え(三)ければ、荒れたりし所に住みけむ物の我に見入れけむ便に、斯くなりぬる事、と思し出づるにもゆゝしくなむ。伊豫介、神無月の朔日ごろに下る。女房の下らむにとて、たむけ(四)心殊にせさせ給ふ。また内々にも、わざとし給ひて、細やかにをかしき様なる櫛扇多くして、幣など(五)いとわざとがましくて、(六)かの小袿もつかはす。

源　逢ふまでのかたみばかりと見し程に(七)ひたすら袖の朽ちにけるかな

細やかなる事どもあれど、うるさければ書かず。御使かへりにけれど、小君して、(八)小袿の御かへりばかりは聞えさせたり。

(九)空蟬　蟬の羽もたちかへてける夏ごろも(一〇)かへすを見ても音は泣かれけり

(一一)思へど、怪しう(一二)人に似ぬ心づよさにてもふり離れぬるかな、と思ひつゞけ給ふ。けふぞ冬立つ日なりけるも著く、うちしぐれて、空の景色いとあはれなり。ながめ

(一)死後四十九日間は中有に迷ひて其後何處かに生れかはる也
(二)念佛誦經
(三)わけもなく
(四)夕顔の子
(五)中將の不平
夕顔の留守宅の疑惑、㊤空蟬夫と伊豫に下る
(六)留守宅では
(七)夕顔が何處へ行きしかと
(八)男は源氏にて、取持は惟光なるべしと語り合ひし也
(九)不足をいふ
(一〇)丸で無關係なる如く辯解して、相變らず女にからかひ散す故
(一一)彼の男は國守の子どもなどにて、頭中將を憚りて夕顔をあの儘田舍へ連れ行きしに非ずや
(一二)乳母の子
(一三)他人
(一四)水臭き他人根性から右近が通知せざる也と
(一五)今更知らせたらば
(一六)源氏
(一七)留守宅では玉葛の身上さへ分らず
(一八)源氏
(一九)夕顔を

この程まではたゞよふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむと、思ほしやり(一)つつ、念誦(二)をいと哀にし給ふ。頭中將を見給ふにも、あいなく(三)胸騷ぎて、かの瞿麥(四)の生ひたつ有樣、聞かせまほしけれど、かごと(五)に憚ぢてうち出で給はず。かの夕顔の宿(六)には、何方(七)にと思ひ惑へど、その儘にえ尋ね聞えず、右近だにおとづれねば、あやしと思ひ歎きあへり。確ならねど、けはひ(八)を然ばかりにやとさゝめきしかば、惟光をかこち(九)けれど、いとかけはなれ(一〇)、氣色なく言ひなして、なほ同じごと好きありきければ、いとゞ夢の心地して、若し受領の子(一一)どものすきぐしきが、頭の君に憚ぢ聞えて、やがて率て下りけるにやとぞ思ひ寄りける。この家あるじぞ、西の京の乳母の女なりける。三人(一二)その子はありて、右近は別人(一三)なりければ、思ひ(一四)へだてて御有樣を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。右近はた、か(一五)しがましく言ひ騷がれむを思ひて、君(一六)も今更に漏さじと忍び給へば、若君(一七)の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎ行く。君(一八)は夢にだに見(一九)ばやと思し渡る

何の心ばせありげもなく、(一)さうどき(二)誇りたりしよと、思し出づるに憎からず。(三)なほこりずまに、またもあだ名は立ちぬべき御心のすさびなゝめり。

かの人の(四)四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、(五)裝束(六)より初めて、さるべきものども細に、誦經などせさせ給ふ。經佛のかざりまで疎ならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二なう(七)しけり。御文の師(八)にてむつまじくおぼす文章博士召して、願文作らせ(九)給ふ。その人となくて、(一〇)あはれと思ひし人のはかなき樣になりにたるを、(一一)阿彌陀佛にゆづり聞ゆるよし、哀げに書き出で給へれば、博士「唯斯くながら、(一二)加ふべきこと侍らざめり」と申す。忍び給へれど、御涙もこぼれて、いみじく思したれば、博士「何人ならむ。その人とは聞えもなくて、かう(一三)思し歎かすばかりなりけむ、宿世のたかさよ」と言ひけり。忍びて調ぜさせ給へりける裝束の袴を取り寄せ給ひて、

源(一四)泣く〳〵も今日は我が結ふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき

(一)軒の方は之に反して
(二)はしやいで
(三)「こりずまに又もうき名は立ちぬべし人悩からぬ世にしすまへば」
● 夕顔の七々日の法事
(四)夕顔
(五)手軽にせず
(六)僧の布施にやゝ衣
(七)此上なく心を入れて
(八)源の學問の師にて親しき
(九)源が作る也
(一〇)誰とは文に現はさず
(一一)彌陀の攝取にまかせて成佛を祈ふ
(一二)此儘にてよろし
(一三)斯程に源をして歎かしむるは果報者よ
(一四)今日は泣く〳〵夕顔の成佛を祈るが、思へば何日か夕顔と打解けて相逢ふ時は何時ならん、上句は布施の袴の紐を自ら結ぶを言へる也

はせど、(一)氣近くとは思ひもよらず、(二)流石にいふかひなからずは見え奉りてやみなむ、と思ふなりけり。かの(三)片つ方は、藏人の少將をなむ通はすと聞き給ふ。あやしや、(四)如何に思ふらむ、と少將の心の中もいとほしく、またかの人の氣色もゆかしければ、小君して、源「(五)死にかへり思ふ心は、知り給へりや」と言ひつかはす。

源 (六)ほのかにも軒端の荻をむすばずば露のかごとをなにゝかけまし

(七)高やかなる荻につけて、(八)忍びてと宣へれど、取りあやまちて、少將も見つけて。我なりけりと思ひ合せば、(九)さりとも罪発してむ、と思ふ御心おごりぞあいなかりける。少將のなき折に(一〇)見すれば、(一一)心憂しとおもへど、かくおぼし出でたるも(一二)流石にて、(一三)御かへり、口ときばかりをかごとにて取らす。

軒端荻 (一四)ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜にむすぼほれつゝ

手は悪しげなるを、(一五)紛らはしざればみて書いたる樣、品なし。(一六)火影に見し顔おぼし出でらる。うちとけて對ひ居たる人は、(一七)え疎みはつまじき樣もしたりしかな、(一八)

(一)空蟬が再び逢はんとは思ひも寄らず
(二)情を知つて居ると思はれるだけで濟まさう
(三)軒端荻は藏人少將といふ人を聟にしたりと
(四)我との關係を少將が知つて居るならば
(五)殆ど死にがへりをして、此度の病を軒端荻の爲の樣にいひなせる也
(六)一夜の契もなかりしならば何をかこつけに此深き思を君に告ぐべき
(七)女のせい高きより思付きたるいたづら也
(八)そつと女に渡せと言付けたれど
(九)源の所爲と知りたらば勘辨すべし
(一〇)留守に
(一一)軒端荻の心
(一二)流石憎からず
(一三)早い所だけを取得て、御返歌を
(一四)なまじ御便りを下さるゝにつけて物思に心は解けずと也
(一五)ごまかしてしやれて
(一六)手紙の文字から顔を聯想したる也
(一七)空蟬
(一八)思切る事の出來ぬ

(一)氣の弱と空蟬が
(二)夫に從ひて伊豫に下らんとする也
(三)空蟬の手紙、御病氣と聞きて御案事は申せど口に出しては申されず
(四)我が御無沙汰するをなぜ見舞はぬとも仰せられずして久しくなりたれば、私はどの位氣をもんで居ると思召すぞ
(五)「ねぬなはの苦しかるらん君よりも我ぞ益田のいけるかひ無き」
(六)源の返事、生けるかひなしとは誰のいひ事ぞ其は此方で言ふ事
(七)君に嫌はれて以來世は憂き物と思切つたのに其樣に言はれると又其にひかされて此詞を命と頼むぞ
(八)病後なれば
(九)空蟬の心、空蟬のとある詞によりて、源がかの人達の事を忘れぬを悟れる也

しと思しはてにけるを、(一)いとほしと思ふに、かく煩ひ給ふを聞きて、流石にうち歎きけり。(二)遠く下りなむとするを、さすがに心ぼそければ、思し忘れぬるかと試に、

空　(三)承り惱むを、ことにいでてはえこそ、

(四)問はぬをもなどかと問はで程ふるにいかばかりかは思ひみだるゝ

(五)益田は誠になむ。

と聞えたり。珍らしきに、これもあはれ忘れ給はず。

源　(六)生けるかひなきや、誰が言はましごとにか。

(七)うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかゝる命よ

はかなしや。

と、御手もうち(八)戰かるゝに、亂れかき給へるいとゞ美しげなり。(九)なほかのもぬけを忘れ給はぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。かやうに憎からずは聞えか

（一）夕顔
（二）弱々しき
（三）分別だてして我意を立るのは好かぬものぢや
（四）自分が意志が強くないので女に對する好みも柔和なるを取ると也
（五）動もすれば
（六）遠慮し
（七）夫たる人
（八）自分の好み通りに仕込みて
（九）夕顔は斯ういふ源の御好には外れて居ない
（一〇）夕顔の火葬の烟があの雲となりしかと思へば、此夕の空も他人とは思はれぬ
（一一）右近が悲しさに返歌も出來ず
（一二）夕顔が此御殿に居たらば
（一三）白氏文集「八月九月正長夜。千聲萬聲無止時」
㊃　空蟬及軒端荻との音信
（一四）伊豫介
（一五）以前の如き
（一六）源が空蟬をつれなき女と思切りたるを

し人（一）の御心を、たのもしき人にて、年頃馴ひ侍りける事」と聞ゆ。源「はかなびた（二）るこそ女はらうたけれ。（三）かしこく人に靡かぬ、いと心づきなきわざなり。（四）自らはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女は唯柔和にて、（五）とりはづしては、人に欺かれぬべきが、さすがに（六）物づつみし、（七）見む人の心には從はむなむ哀れにて、（八）我が心のまゝにとり直して見むに、なつかしく覺ゆべき」など宣へば、右近（九）「この方の御好にはもてはなれ給はざりけりと、思ひ給ふるにも、口惜しく侍るわざかな」とて泣く。空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくうちながめ給ひて、

源（一〇）「見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな

とひとりごち給へど、（一一）えさしいらへも聞えず。かやうにて（一二）おはせましかばと思ふにも、胸のみふたがりておほゆ。耳かしがましかりし砧の音を、思し出づるさへ戀しくて、源「まさに（一三）長き夜」とうち誦じて臥し給へり。

かの、（一四）伊豫の家の小君參る折あれど、殊に（一五）ありしやうなる言傳もし給はねば、（一六）憂

せよかし」など語らひ給ふ。右近「然らばいと嬉しうなむ侍るべき。(一)かの西の京にて生ひ出で給はむは、心苦しうなむ。(二)はかぐ\しくあつかふ人なしとて、彼所になむ」と聞ゆ。夕暮のしづかなるに、空の氣色いとあはれに、御前の前栽かれがれに、蟲の音も鳴きかれて、紅葉のやうく色づくほど、繪に書きたるやうに面白きを見渡して、(三)心より外にをかしき交らひかなと、かの夕顔のやどりを思ひ出づるも恥かし。竹の中に家鴿といふ鳥の、(四)ふつゝかに鳴くを聞き給ひて、(五)彼のあり(六)し院に、この鳥の鳴きしを、いと恐しと思ひたりし(七)樣の、面影にらうたくおもほし出でらるれば、源「年はいくつにかものし給ひし。怪しう、世の人に似ずあえか(八)に見え給ひしも、かく長かるまじくてなりけり」と宣ふ。右近「十九にやなり給ひけむ。右近は、(九)なくなりにける御乳母の棄て置きて侍りければ、(一〇)三位の君のらうたがり給ひて、(一一)かの御あたり去らず、生ふしたて給ひしを思ひ給へ出づれば、(一二)いかでか世に侍らむとすらむ。(一三)いとしも人にと悔しうなむ。物はかなげに物し給ひ

(一)玉鬘が
(二)しつかりした養育者がなしとて西の京に置きてあり
(三)思ひもよらぬ上流の優雅なる交をする事かな、右近の感じ
(四)無骨に
(五)源が
(六)河原院
(七)夕顔が
(八)か弱く
(九)私は夕顔の乳母の子にて、母は早く私を殘して死にたりと也
(一〇)夕顔の父
(一一)夕顔の側離さず
(一二)夕顔に後れて何故世に居られる筈が無いのに
(一三)「思ふとていとしも人に馴れざらん然ならひてぞ見れば戀しき」



（一）其山里が惡き方角に當りたる也
（二）方違の爲にとてあの樣なつまらぬ所に假越して居たるを
（三）内氣
（四）何げない顏をして
（五）果して前は頭中將の持物なりしよと
（六）子どもを行方知れずにしたりと
（七）左樣のものありや
（八）生れたり、此子を玉葛といふ
（九）夕顏の形見として
（一〇）洩したらばつまらぬ不足を言はれるならん
（一一）どちらにしても（中將に話しても話さぬても）其子を養育することは仔細なかるべければ
（一二）付添ひ居る乳母にも實際を語らずに引取り來れ

くし給ひし御心に、せむ方なう思しおぢて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむ、這ひ隱れ給へりし。それもいと見苦しきに住み侘び給ひて、山里にうつろひなむと思したりしを、今年よりは（一）塞がりたる方に侍りければ、（二）違ふとて、怪しき所に物し給ひしを、見顯はされ奉りぬる事と思し歎くめりし。世の人に似ず（三）物づつみをし給ひて、人に物思ふ氣色を見えむを、恥かしきものにし給ひて、（四）つれなくのみもてなして、御覽ぜられ奉り給ふめりしか」と、語り出づるに、（五）さればよと思しあはせて、いよいよ哀もまさりぬ。源「（六）幼き人惑はしたりと、中將の憂へしは、（七）さる人や」と問ひ給ふ。右近「しか。一昨年の春ぞ（八）物し給へりし。女にていとらうたげになむ」と聞ゆ。源「さて何處にぞ。人に然とは知らせで我に得させよ。跡はかなくいみじと思ふ（九）御かたみに、いと嬉しかるべくなむ」と宣ふ。源「かの中將にも傳ふべけれど、（一〇）いふかひなきかごと負ひなむ。（一一）とざまかうざまにつけて、はぐくまむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにも、（一二）こと様にいひなして物

をはじめ、つゝむ(一)事多かる身にて、はかなく人に戲言をいふも、所狹う(二)、取り(三)なしうるさき身の有樣になむあるを、はかなかりし夕(四)より、怪しう心にかゝりて、あながちに見奉りしも、かゝるべき契(五)にこそは物し給ひけめと、思ふもあはれになむ、又うちかへしつらう覺ゆる。かう長かるまじきにては、などさしも心に染(六)みて哀と覺え給ひけむ。猶委しう語れ。今は何事を隱すべきぞ。七日々々の佛書かせても、誰が(七)爲とか、心のうちにも思はむ」と宣へば、右近「何かは隔て聞えさせ侍らむ。自ら(八)忍び過し給ひしことを、亡き御後に、口さがなく(九)やはと思ひ給ふるばかりになむ。親たちは早う亡せ給ひにき。三位中將となむ聞えし。いとらう(一〇)たきものに思ひ聞え給へりしかど、我身(一二)のほどの心もとなさを思すめりしに、命(一一)さへ堪へ給はずなりにし後、はかなき物の便にて、頭中將まだ少將にものし給ひし時、見そめ奉らせ給ひて、三年ばかりは志ある樣に通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右の大臣殿より、いと(一三)恐ろしき事の聞えまうで來しに、物懼(一四)を理な

(一)憚る處
(二)窮屈で
(三)他人の思はくがうるさき
(四)夕顏を見初めし夕
(五)やがて死別るべき緣
(六)なぜあの樣にしみじみ可愛かつたのであらう
(七)素性が分らなくては
(八)當人が隱し來りし事と
(九)ぺらぺらと喋言るでもあるまいと
(一〇)父が夕顏を
(一一)娘を出世させんには我が身分の低きが困り物と思ひ居しに
(一二)父親死去の後
(一三)頭中將の本妻に威されたる也、雨夜の品定の時中將の話したる事也
(一四)夕顏が

給ふ。

九月二十日の程にぞ、おこたりはて給ひて、いといたう面痩せ給へれど、なかなかいみじうなまめかしうて、眺めがちに(一)音をのみ泣き給ふ。見奉り咎むる(二)人もありて、御物怪(三)なゝめりなど言ふもあり。右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に、物語などし給ひて、源「猶いとなむ怪しき。などて其の人と知られじとは、(四)隠い給へりしぞ。誠にあまの子なりとも、(五)さばかりに思ふを知らで(六)隔て給ひしかばなむ、つらかりし」と宣へば、右近「などてか深く隠し聞え給ふ事は侍らむ。いつの程に(七)てかは、何ならぬ御名のりを聞え給はむ。初よりあやしう(八)おぼえぬ様なりし御事なれば、現ともおぼえずなむある、と宣ひて、御名がくしも、然ばかりに(九)こそはと聞え給ひながら、等閑にこそ紛らはし給ふらめとなむ、憂き事に思したりし」と聞ゆれば、源「あいなかりける心くらべ(一〇)どもかな。我は然隔つる心もなかりき。ただ、かやうに人に免されぬ振舞をなむ、まだ習はぬ(一一)事なる。内裏に諫め宣はする

夕顔の素性わかる

(一)物思ひ勝に
(二)氣のつく
(三)生靈死靈などの祟
(四)夕顔が自分を誰と知られまいと
(五)素性賤しくとも
(六)あの位に思ふ我が心をも知らずして
(七)未だはんの馴染初めの事なれば何の暇ありてか名乗栄えもせぬ名乗をすべき
(八)源の素性を包みて通ひたるをいふ、以下夕顔の源に對する感じを說く
(九)源氏君ならんと推察はしながら一日ぬくりに名乗りを延し給ふならんと思ひて
(一〇)根くらべ、名を包みあひたるをいふ
(一一)しつけぬ

苦しからぬ若人なり。源「(一)あやしう短かりける御契(二)にひかされて、我も世に(三)えあるまじきなゝめり。(四)年頃のたのみ失ひて心ぼそく思ふらむ慰めにも、若しながらへ(五)ば、萬にはぐくまむとこそ思ひしか。程もなく(六)又立ち添ひぬべきが、口惜しくもあるべきかな」と、忍びやかに宣ひて、よわけに泣き給へば、いふかひなき事をばおきて、いみじう惜しと思ひ聞ゆ。殿の内の人、足を空に(七)思ひ惑ふ。内裏より御使、雨の脚よりもけに(八)繁し。(九)思し歎きおはしますを聞き給ふに、(一〇)いとかたじけなくて、せめて強く思しなる。大殿(一一)もいみじく經營(一二)し給ひて、日々にわたり給ひつゝ、様々(一三)の事をせさせ給ふしるしにや、二十日あまりいと重くわづらひ給へれど、異なる(一四)名殘のこらず、おこたり(一五)ざまに見え給ふ。穢忌み給ひしも、(一六)ひとつに滿ちぬる夜なれば、覺束(一七)ながらせ給ふ御心わりなくて、内裏の御宿直所に參り給ひなどす。大殿、わが御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌なにやかやと、むつかしう愼ませ奉り給ふ。我にもあらず、(一八)あらぬ世に返りたる様に、しばしは覺え

(一)右近にいふ詞
(二)夕顔との契
(三)是で死ぬのであらう
(四)汝が
(五)我生きて居たらば萬事世話してやらんと思ひしに
(六)やがて夕顔の跡を追つて我も死ぬとは心殘なり、立添ふとは火葬の煙をいふ
(七)源に又別るゝ事の便りなき事は思はれずして
(八)勝りて
(九)桐壺帝が
(一〇)源が辱く思ひてつとめて氣を強く持つ
(一一)舅の左大臣
(一二)盡力し
(一三)祈禱など
(一四)格別に健康を害せず
(一五)回復の容態に見ゆ
(一六)全快と穢の忌のあくると同日にかち合ひし也
(一七)帝の非常の御待兼故
(一八)別の世界に

(一)そは〳〵したる
(二)昨日御病氣の宜しからざりしに拘らず

源氏の病氣

(三)天下無雙の美男なる源なれば早死せらるるのではなきかと
(四)源の居間近く
(五)源の病も半ばわが罪ぞと思へば餘計に當惑したる也
(六)氣をおちつけて
(七)右近の頼なく思へるを
(八)病の隙
(九)右近を
(一〇)侍家に馴染みたり
(一一)夕顏の爲に喪服を着たる也
(一二)醜に

佛を念じ給ひて、またとかく助けられ給ひてなむ、二條院へ歸り給ひける。怪しう夜深き御歩行を、人々、「見苦しきわざかな。この頃、例よりも(一)しづ心なき御忍歩のうち頻る中にも、昨日(二)の御氣色のいと惱ましう思したりしには、いかで斯く辿りありき給ふらむ」と歎きあへり。

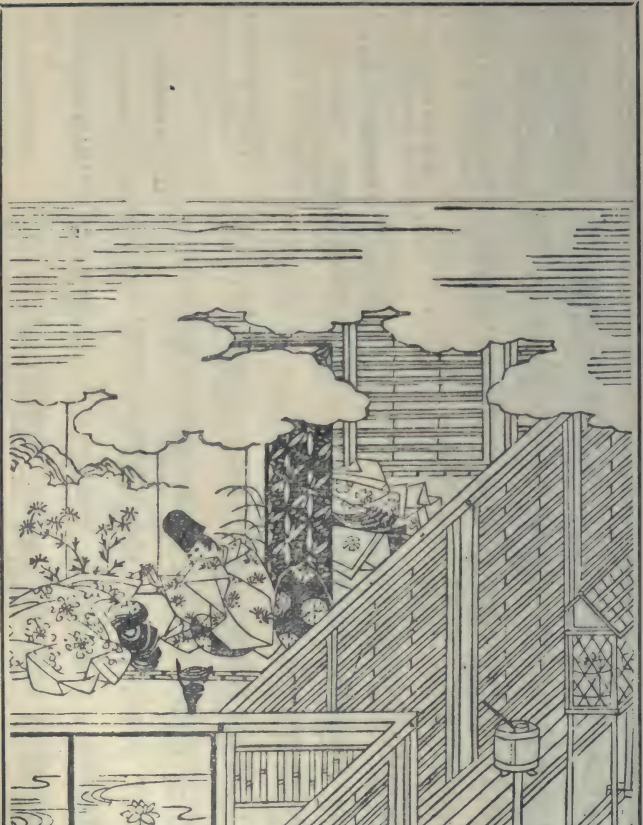
誠に、臥し給ひぬるまゝにいといたう苦しがり給ひて、二三日になりぬるに、むげに弱る樣にし給ふ。内裏にも、聞しめし歎く事かぎりなし。御祈かた〴〵に隙なくのゝしる。祭、祓、修法など、言ひ盡すべくもあらず。(三)世に類なくゆゝしき御有樣なれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人のさわぎなり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など(四)近く賜はりて侍はせ給ふ。惟光、(五)心地も騷ぎ惑へど、(六)思ひのどめて、(七)この人のたつきなしと思ひたるを、もてなし助けつゝ侍はす。君は、いさゝか(八)隙ありて思さるゝ時は、(九)召出でて使ひなどし給へば、程なく(一〇)交らひ著きたり。(一一)服いと黑うして、容貌などよからねど、(一二)かたはに見

(一)これから我を力にせよ
(二)なだめても
(三)形もかはらず横はりし屍體の様子
(四)河原院に宿りし時着せてやりたる我が衣の其儘に屍體にかゝりてありしなど
(五)如何なる因緣ならんと
(六)加茂川堤
(七)夢中になりたれば
(八)行倒れになるのか知ら
(九)惟光の心、自分が思慮あらば何と仰せられても斯かる出歩きはさせざりしに
(一〇)はげまして

のになむある。思ひ慰めて、(一)「我を頼め」と、宣ひこしらへても、(二)源「かくいふ我身こそは、生き留るまじき心地すれ」と、宣ふも頼もしげなしや。惟光、「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ」と聞ゆれば、顧のみせられて、胸もつと塞がりて出で給ふ。路いと露けきに、いとゞしき朝霧に、何處ともなく惑ふ心地し給ふ。(三)ありしながらうち臥したりつるさま、(四)うちかはし給へりし、わが紅の御衣の著られたりつるなど、(五)如何なりけむ契にかと、道すがらおぼさる。御馬にも、はかぐ\しく乘り給ふまじき御樣なれば、また惟光添ひ扶けておはしまさするに、堤(六)のほどにて馬よりすべりおりて、いみじく御心地惑ひければ、(七)源「かゝる路の空にて、(八)はふれぬべきにやあらむ。更にえ行き著くまじき心地なむする」と宣ふに、惟光も心地惑ひて、(九)我がはかぐ\しくば、さ宣ふとも、かゝる道に率て出で奉るべきかは、と思ふに、いと心あわたゞしければ、川の水にて手を洗ひて、淸水の觀音を念じ奉りても、術なく思ひ惑ふ。君も强ひて御心を起して、(一〇)心の中に

(一)惟光の父の乳母
(二)僧
(三)源が室内に入りて見れば
(四)燈火をあちらに向けて
(五)屍體を見ての源の感じ
(六)前世の因縁
(七)我を捨て行きて
(八)夕顔の終を何と人に語るべき
(九)其の悲はさておき人に彼是言はれるのが甚だつらし
(一〇)夕顔の火葬の煙の跡を慕ひて我も死にゆかん
(一一)世の中は斯様なものぢや
(一二)死ぬ者も殘る者も命の限あることは同じ

繁かりける。(一)この尼君の子なる(二)大徳の、聲たふとくて經うち讀みたるに、涙殘りなくおぼさる。(三)入り給へれば、(四)火取りそむけて、右近は屏風へだてて臥したり。いかに侘しからむと見給ふ。(五)恐ろしき氣もおぼえず、いとらうたげなる樣して、まだいさゝか變りたる所なし。手をとらへて、源「我に今一度聲をだに聞かせ給へ。いかなる(六)昔の契にかありけむ、暫しの程に心を盡して哀におぼえしを、(七)うちすてて惑し給ふがいみじき事」と、聲を惜まず泣き給ふ事限なし。大徳たちも、誰とは知らぬに、怪しと思ひて皆涙おとしけり。右近を、源「いざ二條院へ」と宣へど、右近「年頃、幼く侍りしより、片時立ち離れ奉らず馴れ聞えつる人に、俄に別れ奉りて、何處にか歸り侍らむ。(八)如何になり給ひにきとか人にもいひ侍らむ。(九)悲しき事をばさるものにて、人に言ひ騷がれ侍らむがいみじき事」といひて、泣き惑ひて、右近「(一〇)煙にたぐひて慕ひ參りなむ」といふ。源「理なれど、(一一)さなむ世の中はある。別といふものの悲しからぬは無し。(一二)とあるもかゝるも、同じ命の限あるも



と(一)たいぐしき事とは思へど、惟光「さ思されむは(二)如何せむ。早おはしまして、夜更けぬさきに歸らせおはしませ」と申せば、この頃の(三)御やつれに設け給へる、狩の御裝束著かへなどして出で給ふ。御心(四)かきくらし、いみじく堪へ難ければ、かく怪しき路に出で立ちても、(五)危ふかりし物懲に、いかにせむと思し煩へど、なほ悲しさのやる方なく、たゞ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見む、とおぼし(六)念じて、例の大夫隨身を具して出で給ふ。路遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原のほど、(七)御前の火もほのかなるに、(八)鳥部野のかたなど見やりたるほどなど、(九)物むつかしきも、何とも覺え給はず、かき亂る心地し給ひて、おはしつきぬ。あたりさへ凄きに、板屋の傍に堂建てて行へる尼の住居、いとあはれなり。御燈明の影ほのかに透きて見ゆ。その屋には、(一〇)女一人泣く聲のみして、外の方に、法師ばらの二三人物語しつゝ、わざとの(一一)聲立てぬ念佛ぞする。寺々の(一二)初夜も皆行ひはてて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見えて人のけはひも

(一)以ての外なる事
(二)致方なし
(三)微行の爲に
(四)眞暗になつて
(五)河原院で懲りて居るので行かんか歸らんかと決し兼ねたれど
(六)こらへて
(七)前驅の人々の松明
(八)墓地
(九)氣味惡きも
(一〇)右近也
(一一)低聲の念佛
(一二)初夜の御祈の勤、初夜は十時過より十二時過まで

(一)どうなる事かしら
(二)なぜ左樣に歎き給ふぞ
(三)萬事は因緣なるべし
(四)引受けて萬事を致します
(五)然うは諦めるものゝ浮氣の氣まぐれに人一人殺したるかと批難されるのがつらい
(六)惟光の妹
(七)やかましく言ふから
(八)つまらぬ坊主どもにも有體には話さぬ
(九)力にして安心して居る
(一〇)惟光とのひそ〳〵話を漏れ聞く
(一一)薄々變に思ふ
(一二)手輕に葬式をすませよと
(一三)勿論
(一四)流石に物足らず思ひて也
(一五)汝は都合惡しと思ふべけれど
(一六)心殘りなるべければ
(一七)我も行かん

へ置き侍りつる」と、語り聞ゆるまゝに、いといみじと思して、源「我もいと心地なやましく、(一)如何なるべきにかとなむ覺ゆる」と宣ふ。惟光「(二)何か更に思ほし物せさせ給ふ。然るべきにこそ(三)萬の事侍らめ。人にも漏さじと思ひ給ふれば、惟光(四)おり立ちて、萬はものし侍る」など申す。源「然かし。(五)然みな思ひなせど、浮びたる心のすさびに人をいたづらになしつる、かごと負ひぬべきがいと辛きなり。(六)少將の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうの事などいさめらるゝを、(七)恥かしくなむ覺ゆべき」と、口かため給ふ。惟光(八)「さらぬ法師ばらなどにも、皆いひなす様異に侍り」と聞ゆるにぞ(九)かゝり給へる。(一〇)ほの聞く女房など、怪しく何事ならむ、穢のよし宣ひて、内裏にも參り給はず、又かく呻き歎き給ふと、(一一)ほの〴〵あやしがる。更に事なくしなせと、(一二)そのほどの作法宣へど、惟光「(一三)何か、事々しくすべきにも侍らず」とて立つが、いと(一四)悲しく思さるれば、源「(一五)便なしと思ふべけれど、今一度かの屍骸を見ざらむがいと(一六)いぶせかるべきを、馬にて(一七)ものせむ」と宣ふを、い

(一)相構まぬ事
(二)何げなく
(三)頭中將の弟、藏人にて辨官を兼ぬ
(四)觸穢に觸れて參内出來ぬ由を委細に奏上せしむ
(五)葵上の邸
● 源氏夕顏の屍を見に行く
(六)もう迚もいけぬと見極めたか
(七)惟光がついて居るのも不都合なれば
(八)葬送の事
(九)命じ
(一〇)右近
(一一)夕顏の家の人に
(一二)右近が
(一三)前後を考へてからの事にせん
(一四)なだめて

そたいぐしく(一)侍れ」と、つれなく(二)宣へど、心の中には、いふかひなく悲しき事をおぼすに、御心地もなやましければ、人に目も見合せ給はず。藏人(三)の辨を召し寄せて、まめやかに(四)かゝる由を奏せさせ給ふ。大殿(五)などにも、かゝる事ありてえ參らぬ御消息など聞え給ふ。

日暮れて惟光參れり。かゝる穢ありと宣ひて、參る人々も皆立ちながら退出れば、人しげからず。召し寄せて。源「いかにぞ。今は(六)と見はてつや」と宣ふまゝに、袖を御顏に押しあてて泣き給ふ。惟光も泣く〳〵、「今は限りにこそは物し給ふめれ。長々と籠り(七)侍らむも便なきを、明日なむ日よろしく侍れば、とかくの事(八)、いと尊き老僧のあひ知りて侍るに、言ひ(九)語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。源「添ひたりつる女はいかに」と宣へば、惟光「其なむまた、え生くまじう侍るめる。我も後れじと(一〇)惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくなむ見給へつる。かの古郷(一一)の人に告げ遣らむ(一二)と申せど、暫し思ひしづめよ、ことのさま(一三)思ひめぐらしてとなむ(一四)こしら

内(一)ながら宣ふ。源「乳母にて侍るものの、この五月の頃ほひより、重く煩ひ侍りしが、頭剃り忌む事受けなどして、(二)その驗にや、蘇りたりし(三)を、このごろ又起りて弱くなむなりにたる。今一度とぶらひ見よ(四)と申したりしかば、幼きよりなづさひ(五)し者の、今はのきざみにつらしとや思はむ、と思ひ給へて罷れりしに、その家なりける下人(六)の病しけるが、俄にえ生きあへで亡くなりにけるを、恐ぢ憚りて(七)、日を暮してなむ取出で(八)侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、神事なる頃は(九)、いと不便(一〇)なる事と思う給へかしこまりて、え參らぬなり。この曉より、しはぶきやみにや(一一)侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無禮にて聞ゆる事」など宣ふ。中將、「さらば然る由をこそ奏し侍らめ。昨夜も御遊に(一二)、かしこく求め(一三)奉らせ給ひて、御氣色あしく侍りき」と聞え給ひて、立ちかへり、頭中將「いかなる行觸(一四)にかゝらせ給ふぞや。陳べ(一五)やらせ給ふ事こそ、誠とも思ひ給へられね」といふに、胸うち潰れ給ひて、源「かく細にはあらで、たゞ覺え(一六)ぬ穢に觸れたる由を奏し給へ。いとこ

(一)簾を隔てゝ
(二)受戒して尼になりて
(三)回復し
(四)見舞つて貰ひたしと
(五)側に居た者
(六)行かずば臨終に恨むべしと思ひて
(七)源の居るに憚りて
(八)外へ持出し
(九)九月は一日より神事引續きてある也
(一〇)不都合なる
(一一)咳嗽
(一二)此通り失禮な體裁で
(一三)帝がきつく尋ね給ひて
(一四)行き合せて穢に觸るゝこと
(一五)御言譯の趣は
(一六)不慮の

(一)指貫の股立を取りて
(二)飛でもなき邪の供
(三)惟光が身を顧みずして寺へ行くに
(四)夢中にて
(五)二條院に
(六)寢間に設けたる帳臺
(七)源の心
(八)夕顔の車に
(九)夕顔が
(一〇)斯樣で我も死ぬのぢやな
(一一)葵上の兄弟

より、くゝり引き上げなどして出で立つ。かつはいと怪しくおぼえぬおくりなれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てて行くに、君は物もおぼえ給はず、われかの樣にておはし著きたり。

人々、「何處よりおはしますにか。惱ましげに見えさせ給ふ」などいへど、御帳の内に入り給ひて胸をおさへて思ふに、いといみじければ、などて乘り添ひて行かざりつらむ、生き返りたらむ時、いかなる心地せむ、見捨てて行き別れにけりとつらくや思はむ、と心惑ひの中にもおぼすに、御胸せきあぐる心地し給ふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく惑はれ給へば、斯くはかなくて、我も徒になりぬるなゝめりとおぼす。日高くなれど、起き上り給はねば、人々あやしがりて、御粥などそゝのかし聞ゆれど、苦しくて、いと心細く思さるゝに、内裏より御使あり。昨日もえ尋ね出で奉らざりしより、覺束ながらせ給ふ。大殿の公だち參り給へど、頭中將ばかりを、「立ちながら此方に入り給へ」と宣ひて、御簾の

たらむ。まづこの院を出でおはしましね」といふ。源「さて、これより人少なる所はいかでかあらむ」と宣ふ。惟光「實にさぞ侍らむ。かの故郷(一)は、女房などの、かなしびに堪へず泣き惑ひ侍らむに、隣しげく(二)咎むる里人多く侍らむに、おのづから聞(三)えはべらむを、山寺こそ、なほかやうの事(四)おのづから行きまじり、物紛るゝこと侍らめ」と、思ひまはして、惟光「むかし(五)見給へし女房の尼にて侍る、東山の邊に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みづはぐみて(六)住み侍るなり。あたりは人繁き様に侍れど、いとかごかに(七)侍り」と聞えて、明け離るゝ程のまぎれに、御車寄す。この人(八)をえ抱き給ふまじければ、上席に押しくゝみて(九)、惟光乘せ奉る。いとさゝやかにて(一〇)、疎ましげもなくらうたげなり。したゝかにしもえせ(一一)ねば、髪はこぼれ出でたるも、目昏れ惑ひて(一二)、あさましう悲しと思せば、なりは(一三)てむ様を見むと思せど、惟光「はや、御馬にて二條の院へ(一四)おはしまさなむ、人騷しくなり侍らぬ程に」とて、右近を添へて(一五)乘すれば、君に馬をば奉りて、(一六)我は徒歩

(一)夕顔の昨日まで居たる家
(二)目をつける町内の人
(三)人の噂に上るべければ
(四)死人を擔ぎ込むなどの事はあり勝て
(五)私の昔馴染の女中が今尼になりて住ひ居る東山邊に
(六)老屈して
(七)閑靜
(八)夕顔の屍體
(九)押包みて
(一〇)小柄で氣味惡くもなく
(一一)無遠慮に始末することも出來ねば
(一二)源が
(一三)終を見屆けんと
(一四)歸り給へ
(一五)夕顔の屍體に付添はせて車に
(一六)惟光

(一)今迄我のみは分別を失はじとこらへ居たりしが惟光の顏を見てはつと息をつき初めて悲を覺えたり
(二)俄の事
(三)祈禱
(四)阿闍梨に來れと言遣りしが如何せし
(五)比叡山
(六)それは扱ゐき難にとんだ事で
(七)不快の事
(八)何と言つても年取りて世事に老練な人が事の出來たる時は頼もしいが
(九)不都合ならん
(一〇)院守一人は親しきも人數言觸らしもすまじけれど

うち思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へ給はで、(一)我一人さかしがり抱き持ち給へりけるに、この人に息をのべ給ひてぞ、悲しき事もおほされける。とばかり、いと痛く、えもとゞめず泣き給ふ。やゝためらひて、惟「こゝにいと怪しき事のあるを、あさましといふにも餘りてなむある。かゝる(二)とみの事には(三)誦經などをこそはすなれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむとて、(四)阿闍梨ものせよと言ひ遣りつるは」と宣ふに、惟光「昨日(五)山へ罷り上りにけり。(六)まづいと珍らかなる事にも侍るかな。かねて、(七)例ならず御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらむ」惟「さる事も無かりつ」とて泣き給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人もいと悲しくて、おのれもよゝと泣きぬ。(八)さいへど年うちねび、世の中のとある事も、しほじみぬる人こそ、物の折節は頼もしかりけれ、いづれも〱若きどちにて、言はむ方もなけれど、惟光「この院守などに聞かせむことは、いと(九)便なかるべし。(一〇)この人一人こそむつまじうもあらめ、おのづから物言ひ漏しつべき眷屬も立ち交り

きや。火はほのかにまたゝきて、母屋の際に立てたる屏風の上、こゝかしこの隈(一)
隈しく見ゆるに、物の足音ひし〳〵と踏み鳴しつゝ、後より寄り來る心地す。惟
光疾く參らなむとおぼす。(二)ありか定めぬものにて、此所彼所尋ねけるほどに、夜
の明くる程の久しさ、千夜を過さむ心地し給ふ。辛うじて雞の聲遙に聞ゆるに、
(三)命をかけて、(四)何の契にかゝるめを見るらむ、我が心ながら、(五)かゝる筋におふけな
くあるまじき心の報に、かく來し方行くさきの例となりぬべき事はあるなゝめり、
忍ぶとも、(六)世にあること隱れなくて、内裏に聞し召されむことを初めて、人の思
ひいはむ事、よからぬ童べの口ずさびになりぬべきなゝめり、(七)あり〳〵て、をこが
ましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。
辛うじて惟光の朝臣參れり。夜中曉といはず御心に隨へるものの、(八)今宵しも侍
はで、召にさへ怠りつるを、憎しと思ほすものから、召し入れて、宣ひ出でむ事
(九)のあへなきに、ふと物も言はれ給はず。右近、大夫のけはひ聞くに、(一〇)初よりの事、

(一)暗っぽく
(二)惟光は居場所の定って居ぬ男で
(三)以下源の心
(四)何の因縁で斯る命にもかゝはる目に逢ふならん
(五)戀路につけて平常不埒なる了簡を懐ける報に、斯く咄の種にされる如き事にも逢ふならん、(藤壺に對する戀を自ら咎むる也)
(六)世上の事は何事もよく知れ渡るものなれば
(七)今迄體面を繕ひ來った揚句の果に馬鹿な評判を受ける事よ
㊉屍骸を東山の寺に移す、源氏の悲嘆
(八)今夜といふ今夜居らず、呼びにやりてさへ遲參したるを
(九)張合なき事柄であるので
(一〇)惟光がたばかり歩きし以來の事

はおどろおどろし。「あなかま」(一)といさめ給ひて、いとあわたゞしきに、あきれたる心地し給ふ。この男(二)を召して、源「こゝにいと怪しう、物に襲れたる人の惱しげなるを、たゞ今惟光の朝臣の宿れる所に罷りて、急ぎ參るべきよし言へと仰せよ。(三)某の阿闍梨(四)、そこにものする程ならば、此所に來べきよし忍びて言へ。(五)かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かゝる(六)ありき許さぬ人なり」など、物宣ふやうなれど、胸はふたがりて、この人を空しく(七)しなしてむ事のいみじく思さるゝに添へて、大方のむくむく(八)しさ譬へむ方なし。夜中も過ぎにけむかし、風のやゝ荒々しう吹きたるは。まして松のひゞき木ぶかく聞えて、氣色ある鳥の枯聲に鳴きたるも、梟はこれにやと覺ゆ。うち思ひめぐらすに、此方彼方けどほく(九)疎ましきに、人聲せず。などて斯くはかなき(一〇)宿は取りつるぞと、悔しさもやらむ方なし。右近は物もおぼえず、君につと添ひ奉りて、戰き死ぬべし。又これも如何ならむと、心そらにて執へ給へり。われ(一一)一人さかしき人にて、思しやる方ぞな

(一)喧ましい泣くな
(二)預の子
(三)使の者に言付けよ
(四)惟光の兄の僧が居合せたらば
(五)惟光の母も聞いて居るべければ竊に言へ
(六)彼の尼は斯かる振舞を容赦せぬ人ぢや
(七)死なして仕舞ふことの悲しきのみならず
(八)氣味わるさ
(九)人離れて
(一〇)つまらぬ宿
(一一)分別のある者は自分ばかりで、他に心配の分ち所なし

ならぬことにて、御前近くもえ參らぬつゝましさ(一)に、長押(二)にものぼらず。源「なほ持て來や。所(三)に從ひてこそ」とて、召し寄せて見給へば、たゞこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそ斯ることは聞けと、いと珍らかにむくつけ(四)ければ、まづこの人(五)は如何になりぬるぞと思ほす心騷に、(六)身の上も知られ給はず、添ひ臥して、「やゝ」と驚かし給へど、たゞ冷え入りて、息は疾く絶えはてにけり。言はむ方なし。頼もしく如何にと言(七)ひ觸れ給ふべき人もなし、法師などをこそは、かゝる方の頼しきものには思すべけれど、さこそ心强がり給へど、若き御心地にていふかひなくなりぬるを見給ふに、遣る方なくて、つと抱きて、源「あが君生き出で給へ。(八)いみじき目な見せ給ひそ」と宣へど、冷え入りにたれば、けはひ物うとく(九)なり行く。右近は、唯あなむ(一〇)つかしと思ひける心地皆さめて、泣き惑ふ樣いといみじ。南殿(一一)の鬼の、某の大臣を脅したる例を思し出でて、心づよく、源「さりとも徒(一二)になりはて給はじ。夜の聲

(一)勿體なさに、預の子の畏まれる樣
(二)母屋と廂の間との間の敷居
(三)遠慮も場合による
(四)氣味惡けれど其よりも
(五)夕顔
(六)我身の事は構ひても居られず
(七)相談すべき
(八)恐しい目に合せ給ふな
(九)恐しく
(一〇)厭はし
(一一)紫宸殿の鬼が闇中に藤原忠平の刀のこじりを執へたるを忠平其手を捕へて斬らんとしければ逃げ去りし咄、(大鏡)
(一二)死に果てはすまじ

(一)瀧口の武士、禁中の警固を司る
(二)尤らしく
(三)火の用心
(四)源の心
(五)夜十時切に宿直の侍臣互に名乗りあふことと
(六)宿直の瀧口の武士の名乗ること
(七)夜が更けぬなるべし
(八)元の儘に
(九)是はどうした事ぞ、右近にいふ詞
(一〇)恐ろしい様に
(一一)右近を
(一二)何となく心持惡ければ
(一三)夕顔こそ非常に怖ろしく思はるゝならん
(一四)そうぢや
(一五)正體なき
(一六)源の心
(一七)正氣を奪はれたる
(一八)夕顔を見られぬ爲に
(一九)もつと近く紙燭を持來れ

かゝで侍りぬる」ときこゆ。この斯う申すものは、瀧口(一)なりければ、弓弦いとつき(二)づきしく打ち鳴して、「火危し(三)」といふ〳〵、預が曹司のかたへ去ぬるなり。内裏(四)を思しやりて、(五)名對面は過ぎぬらむ、瀧口の宿直奏(六)今こそと推し量り給ふは、まだいたう更け(七)ぬにこそは。歸り入りて探り給へば、女君はさながら(八)臥して、右近は傍にうつぶし臥したり。源「こはなぞ(九)。あなもの狂ほしの物懼や。荒れたる所は、狐などやうの物の、人おびやかさむとて、氣恐ろしう(一〇)思はするならむ。まろあれば、さやうの物には威されじ」とて、引き起し(一一)給ふ。右近「いとうたて、みだり(一二)心地の惡しう侍れば、うつぶし臥して侍るなり(一三)。御前にこそわりなく思さるらめ」といへば、源「そよ(一四)。など斯うは」とてかい探り給ふに、息もせず。引き動し給へど、なよ〳〵として、我にもあらぬ(一五)樣なれば、いと痛く若びたる(一六)人にて、物にけどられ(一七)ぬるなゝめりと、せむかたなき心地し給ふ。紙燭もて參れり。右近も動くべき樣にもあらねば、近き御几帳を引き寄せて(一八)、源「なほもて參れ(一九)」と宣ふ。例



(一)反響
(二)夢中
(三)むやみに
(四)源の心
(五)夕顔の側に居れ
(六)預の子で源に手近く使はれる男
(七)殿上に出仕する童
(八)預の子を
(九)魔よけに弓弦を鳴すこと
(一〇)聲を出せ
(一一)油斷して
(一二)御用もなし

し」とうち笑ひ給ひて、手を叩き給へば、山彦(一)の答ふる聲、いとうとまし。人はえ聞きつけで參らぬに、この女君いみじく戰き惑ひて、如何樣にせむと思へり。汗もしとゞになりて、われか(二)の氣色なり。右近「物怯をなむわりなく(三)せさせ給ふ御本性にて、いかに思さるゝにか」と右近も聞ゆ。(四)いとかよわくて、晝も空をのみ見つるものを、いとほし、とおぼして、源「われ人を起さむ。手叩けば、山彦の答ふるいとうるさし。こゝにしばし近く(五)」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押しあけ給へれば、渡殿の火も消えにけり。風少しうち吹きたるに、人は少くて、侍ふかぎり皆寢たり。この院の預(六)の子の、睦まじくつかひ給ふ若き男、また上童(七)一人、例の隨身ばかりぞありける。召せ(八)ば、御答して起きたれば、源「紙燭さしてまゐれ。隨身も弦打(九)して、絕えずこわづくれ(一〇)と仰せよ。人離れたる所に、心とけて(一一)寢ぬるものか。惟光の朝臣の來りつらむは」と、問はせ給へば、預の子「侍ひつれど、仰事もなし(一二)。曉に御迎に參るべきよし申してなむ、ま

(一)尋ね
(二)源の心、自分の心を自ら怪む也
(三)御息所
(四)氣の毒といふ方につけては先づ御息所を思ひ出す
(五)夕顔が何心もなく差向ひ居る樣子を
(六)御息所の

夕顔頓死

(七)夢也
(八)格別よい所もなき女
(九)夕顔
(一〇)目醒め
(一一)氣味わるく
(一二)參られませぬ

かに求め(一)させ給ふらむを、何處に尋ぬらむ、と思し遣りて、かつは(二)あやしの心や、(三)六條わたりにも、いかに思ひ亂れ給ふらむ、怨みられむも苦しう理なりと、いと(四)ほしきすぢはまづ思ひ出で聞え給ふ。何心(五)もなきさしむかひをあはれと思すまゝに、あまり(六)心深く、見る人も苦しき御有樣を、少し取捨てばや、とぞ思ひくらべられ給ひける。

宵過ぐるほど少し寝入り給へるに、御枕(七)上にいとをかしげなる女居て、夢「己がいとめでたしと見奉るをば、尋ねも思ほさで、かくこと(八)なる事なき人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、御傍(九)の人をかき起さむとすと見給ふ。物におそはるゝ心地して、驚(一〇)き給へれば、火も消えにけり。(一一)うたておぼさるれば、太刀を引き拔きて、うち置き給ひて、右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたる樣にて參り寄れり。源「渡殿なる宿直人起して、紙燭さして參れと言へ」と宣へば、右近「いかで(一二)かまからむ。闇うて」といへば、源「あな若々

ものを。今だに名のりし給へ。いとむくつけし」と宣へど、夕顔「(一)海士の子なれば」とて、流石に打解けぬさま、いとあいだれたり。(二)源「よし、これも(三)我からなゝめり」と、怨みかつは語らひ暮し給ふ。惟光尋ね聞えて、御菓物など參らす。右近が言(四)はむこと、流石にいとほしければ、近くもえ侍ひ寄らず。(五)かくまでたどり歩き給ふもをかしう、さもありぬべき有樣にこそはと、(六)推し量らるゝにも、我がいとよ(七)く思ひ寄りぬべかりしことを、譲り聞えて、心ひろさよなど、めざましうぞ思ひ居る。たとしへなく靜なる、夕の空を眺め給ひて、奥の方はくらう物むつかしと女の思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。(八)夕ばえを見かはして、女も、かかる有樣を思の外に怪しき心地はしながら、萬のなげき忘れて、少しうちとけ行く氣色、いとらうたし。つと御傍に添ひ暮して、物をいと恐ろしと思ひたる樣、若う心ぐるし。(九)格子疾くおろし給ひて、大殿油參らせて、(一〇)源「(一一)名殘なくなりにたる御有樣にて、なほ心の中のへだて殘し給へるなむつらき」と怨み給ふ。(一二)內裏にい

(一)「白波の寄する渚に世を過す海士の子なれば宿も定めず」
(二)あまえたり
(三)「海士の刈る藻にすむ虫の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」
(四)知らぬ振して源を取持ちたる恨を
(五)惟光の心、源が此女故に斯る事までする
(六)其丈の値打がある故ならんと
(七)自分が手に入るべかりしを源に譲りたるは我ながら心が廣い事ぢやと
(八)夕ばえする顔を互に
(九)痛はし
(一〇)燈火
(一一)斯く迄打解けたる中になりながら
(一二)源の心

日たくる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いと痛く荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立いと疎ましく(一)物古りたり。氣近き(二)草木などは殊に見所なく、皆秋の野らにて(三)、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげに(四)なりにける所かな。別納(五)のかたにぞ、曹司(六)などして、人住むべかめれど、此方は離れたり。源「氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども、我をば見許してむ(七)」と宣ふ。顔はなほ隠し給へれど、女のいとつらしと思ふべければ、實にかばかりにて(八)隔あらむも、事の様に違ひたりとおぼして、

源「夕露に(九)紐とく花は玉鉾のたよりに見えしえにこそありけれ

(一〇)露の光やいかに」と宣へば、後目に見おこせて、

夕顔 光ありと(一一)見し夕顔のうは露はたそがれどきの空目なりけり

とほのかにいふ。をかしと思しなす。實にうちとけ給へる様世になく、所がらまいてゆゝしき(一二)まで見え給ふ。源「つきせず(一三)隔て給へるつらさに、顯さじ(一四)と思ひつる

(一)厭ふべく
(二)手近の
(三)「里はあれて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」
(四)厭ふべき様子に
(五)離れ屋
(六)部屋
(七)鬼が居ても我には手を出すまじ、女に氣強く思はする爲の詞
(八)是程の中になつて
(九)顔を女に見せて此歌をよみたる也、紐とく花とは顔を現はしたるをいふ、かく顔を見する迄になりたるも元は通りがかりに君を見たよりの事であつた
(一〇)前の「光そへたる夕顔の花」の歌を思ひていへり
(一一)源の歌の自慢げなるに對してわざとすねたる返歌也、光ありと見しは黄昏の見誤りにて實は光なき事を今知れりと也
(一二)不相應すぎてこはい様に迄
(一三)何時迄も
(一四)我顔も

(一)君は經驗したる事ありや
(二)我は君の心も知らずして君に身を任せはてたり、中途でひよんな事にならねばよいが
(三)ごちや〳〵したる住居になれての趣ならん
(四)母屋の西に續ける家
(五)頭中將が夕顔に通ひし時分の事也
(六)心づかひし
(七)右近が前からも疑ひしが遂々源とわかりたる也
(八)源の居るべき所を
(九)都合の惡い事哉
(一〇)此預りの素性、下家司は家令の下役
(一一)左大臣家
(一二)口止めをし
(一三)お給仕がうまく調はず
(一四)經驗なき
(一五)「鳰鳥の息長川は絶えぬとも君に語らん事盡きめやは」

(一)ならひ給へりや」と宣ふ。女恥らひて、

夕顔「山の端の心も知らで行く月はうはの空にてかげや絶えなむ

心細く(二)」とて、物恐ろしうすごげに思ひたれば、かの(三)さし集ひたる住居の心ならひならむと、をかしうおぼす。御車入れさせて、(四)西の對に御座などよそふ程、勾欄に御車ひきかけて立ち給へり。右近、艶なる心地して、(五)來し方の事なども、人知れず思ひ出でけり。あづかりいみじく(六)經營しありく氣色に、(七)この御有樣知りはてぬ。ほのぼのと物見ゆるほどに、下り給ひぬめり。假初なれど淸げに(八)しつらひたり。源「御供に人も侍はざりけり。(九)不便なるわざかな」とて、睦じき下家司(一〇)にて、殿(一一)にも仕う奉るものなりければ、參りよりて、頭「然るべき人召すべきにや」など申さすれど、源「殊更に人來まじき隱處覓めたるなり。さらに心より外に漏すな」と口かため(一二)させ給ふ。御粥など急ぎ參らせたれど、取りつぐ(一三)御まかなひうち合はず。まだ知らぬ(一四)事なる御旅寢に、息長川(一五)と契り給ふより外のことなし。



(一)優婆塞が來世を思ふに傚ひて我々も二世を約せん、優婆塞は俗體の佛弟子男
(二)長生殿に比翼連理を契りたる玄宗楊貴妃の例は末遂げぬ凶例なれば其とは振をかへて
(三)釋迦の死後五十六億七千萬歳の後出現すべき佛
(四)氣の長い御約束甚だ出來過ぎて居る
(五)拙き我身の運命を思ひ知れば行末に希望をかくる事も出來ぬ
(六)歌をよむにつけても心細い感を與へる女なり
(七)不圖さまよひ出ることを躊躇し
(八)間の惡い時分
(九)夕顔を
(一〇)古註に、河原院と定む
(一一)留守番
(一二)車の
(一三)氣が痛む

源　優婆塞(一)がおこなふみちをしるべにて來む世もふかき契たがふな

長生殿(二)のふるき例はゆゝしくて、翼をかはさむとは引きかへて、彌勒(三)の世をぞかね給ふ、行先(四)の御たのめ、いとこちたし。

夕顔　さきの世のちぎり知らるゝ身の憂に行末かねて頼みがたさよ(五)

かやうの筋(六)なども、さるは心もとなかゝめり。いさよふ月に、ゆくりなく(七)あくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかく宣ふほどに、俄に雲がくれて、明け行く空いとをかし。(八)はしたなき程にならぬさきにと、例の急ぎ出で給ひて、輕らかにうち載(九)せ給へれば、右近ぞ乘りける。そのわたり近きなにがしの院(一〇)におはし著きて、あづかり(一一)召し出づる程、荒れたる門のしのぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾(一二)をさへ上げ給へれば、御袖もいたう濡れにけり。

源「まだかやうなる事をならはざりつるを、心づくし(一三)なる事にもありけるかな。

いにしへも斯くやは人の惑ひけむわがまだ知らぬしのゝめの道

として、物うち言ひたるけはひ、あな心苦し(一)と、たゞいとらうたく見ゆ。心ばみ(二)たる方を少し添へたらばと見給ひながら、なほ打解けて見まほしく思さるれば、源「いざ、たゞこのわたり近き所に、心安くて明さむ。(三)かくてのみ(四)はいと苦しかりけり」と宣へば、夕顔「いかでか俄ならむ」(五)と、いとおいらか(六)に言ひて居たり。この世(七)のみならぬ契などまでたのめ給ふに、うち解くる(八)心ばへなど、怪しく樣かは(九)りて、世馴れたる人とも覺えねば、人の思はむ所もえ憚り給はで、右近(一〇)を召し出でて、隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。このある(一一)人々も、かゝる御志の疎ならぬを見知れば、おほめかし(一二)ながら頼をかけ聞えたり。明方も近うなりにけり。雞の聲などは聞えで、御嶽精進(一三)にやあらむ、唯翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。起居のけはひ(一四)堪へがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何を貪る身の祈にかと聞き給ふに、「南無當來導師」(一五)とぞ拜むなる。源「かれ聞き給へ。この世(一六)とのみは思はざりけり」と、あはれがり給ひて、

(一)痛はしげにて
(二)了簡深き所を加へたらば尚よからんに
(三)氣樂に夜を明かさう
(四)此樣な所にばかり居るのは
(五)いかでか早急に引越すべき
(六)穩に
(七)二世の約束までするに
(八)女の
(九)風がかはつて居て擢れ枯しとは思はれぬ故可愛くて
(一〇)夕顔の侍女、元の乳母の娘
(一一)夕顔に付添ひ居る女ども
(一二)覺束ないながら頼もしく思へり
(一三)大和の金峰山に參詣する爲に千日の精進をする人
(一四)つらそうに佛前の勤をして居る
(一五)彌勒佛、當來は未來
(一六)彼も亦我々と齊し來を心にかけ居れり

（一）恥かしがるよりは却て罪がなく思はる
（二）枕元で踏む樣に思はれる
（三）聞き分けられず
（四）大變な物音
（五）色々の物が一つになりて感情を刺戟する
（六）外をながめる
（七）狹き庭に枯々の細竹
（八）たまさかに
（九）趣がかはりて面白しと思はれるのも
（一〇）すべての缺點
（一一）夕顏の衣裳
（一二）淡紫色
（一三）愛らしく弱々しき
（一四）しなやかにて

はしき隣の用意なさを、如何なる事とも聞き知りたる樣ならねば、なか／＼恥ぢかゞやかむよりは罪免されて（一）ぞ見えける。ごほ／＼と鳴る神よりも、おどろ／＼しく踏み轟かす碓の音も枕上とおぼゆる（二）、あな耳かしがましと、これにぞ思さるゝ。何の響とも聞き入れ給はず（三）、いと怪しう目ざましき（四）音なひとのみ聞き給ふ。くだくだしき事のみ多かり。白妙の衣うつ砧の音も、かすかに此方彼方聞きわたされ、空飛ぶ雁の聲（五）、取り集めて忍びがたき事多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開け給ひて、もろともに見出し給ふ（六）。程なき庭に（七）されたる呉竹、前栽の露は、なほかゝる所も同じごときらめきたり。蟲の聲々みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに間遠に（八）聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるやうに鳴き亂るゝを、なかなか樣かへて（九）思さるゝも、御志一つの淺からぬに、萬の罪（一〇）免さるゝなめりかし。しろき袷（一一）、薄色（一二）のなよゝかなるを重ねて、花やかならぬ姿、いとらうたげ（一三）にあえかなる心地して、そこと取り立てて勝れたる事もなけれど、細やかにたを／＼（一四）

(一)常夏の歌をよんだ女では無いかと思はれて
(二)中將の咄の女の氣立
(三)隱す仔細のある事ならんと
(四)思ふ所ある樣子を示して
(五)行かずに居る折でもあつたら
(六)此方の仕向によりてでなく、女の了簡から少し外の男に見かへる樣な事あらば面白からんと泣
(八)源氏夕顏を誘ひて河原院に宿す
(七)田舍廻りも企てられねば
(八)北隣よ
(九)がたびし音させて騷ぐのが間近く聞えるので
(一〇)しなをつくり樣子ぶる人ならば
(一一)ゆつくり構へて以下夕顏の說
(一二)考へ居る樣子もなく
(一三)夕顏自身の態度貴人らしく子供らしく
(一四)ごたく\したる

かの(一)頭中將のとこなつ疑はしく、(二)語りし心樣まづ思ひ出られ給へど、(三)忍ぶるやうこそはと、あながちにも問ひ出で給はず。(四)氣色ばみてふと背き隱るべき心ざまなどは無ければ、(五)かれぐ\にとだえ置かむ折こそは、さやうに思ひ變ることもあらめ、(六)心ながらも少しはうつろふ事あらむこそ、哀なるべけれとさへ思しけり。

八月十五夜隈なき月影に、隙多かる板屋のこりなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍らしきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々あやしき賤男の聲聲、目さまして、「あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも賴む所少く、(七)田舍の通ひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。(八)北殿こそ、聞き給へや」など言ひかはすも聞ゆ。いと哀なる己がじしの營に、起き出でて(九)そゝめきさわぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり。(一〇)艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居の樣なめりかし。されど(一一)のどかに、つらきも憂きも、かたはら痛きことも、(一二)思ひ入れたる樣ならで、(一三)我がもてなし有樣は、いとあてはかに兒めかしくて、またなくらうが(一四)

らなくたゆめて這ひ隠れなば、何處をはかりとか我も尋ねむ、(一)假初の隠處とはた見ゆめれば、(二)何方にも移ひ行かむ日をいつとも知らじ、と思すに、(三)追ひ惑はしてなのめに思ひなしつべくば、唯かばかりのすさびにても、過ぎぬべきことを、更にさて過してむと思されず、人目をおほして(四)隔て置き給ふ夜な〳〵などは、いと忍びがたく、苦しきまで思ほえ給へば、(五)なほ誰となくて二條院に迎へてむ、(六)若し聞えありて便なかるべき事なりとも、然るべきにこそは、我が心ながら、(七)いとかく人にしむことは無きを、いかなる契にかはありけむ、など思ほし寄る。源「いざ、いと心安き所にて、(八)のどかに聞えむ」など語らひ給へば、女「なほ怪しう。かく宣へど、(九)世づかぬ御もてなしなれば、物恐しくこそあれ」と、いと若びていへば、實にとほゝゑまれ給ひて、源「げに(一〇)いづれか狐ならむな。たゞ謀られ給へかし」と、なつかしげに宣へば、女もいみじく靡きて、(一一)さもありぬべう思ひたり。(一二)世になくかたはならむ事なりとも、ひたぶるに随ふ心は、いと哀げなる人と見給ふに、なほ

(一)今の家は
(二)何處へか越して行く日が何時来るか分らぬ
(三)取逃がして其なりに思切る了簡ならば當座の慰として濟ますのであるが、そうは思切れず
(四)間を置いて行かずに居る夜などは
(五)誰と人に知らせずに、以下源の心
(六)噂に上りて不都合な事あつても仕方がない
(七)斯く道にはまり込む事は無いに、是はどういふ因縁であらう
(八)ゆつくり話さう
(九)尋常ならぬ仕むけ
(一〇)汝と我と何方か狐であらう
(一一)行つてもよいと
(一二)非常に不都合なる事でも男のいふ事には随つて仕舞ふ心立が可愛い

め給ひて、人の咎め聞ゆべき擧動はし給はざりつるを、(一)怪しきまで、今朝のほど晝間のへだても覺束なくなど、思ひ煩はれ給へば、且は(二)いと物狂ほしく、さまで心留むべき事の樣にもあらずと、いみじく思ひさまし給ふに、(三)人のけはひ、いとあさましく柔におほどきて、(四)物深く重き方は後れて、一向に若びたるものから、(五)世をまだ知らぬにもあらず、(六)いとやむごとなきにはあるまじ、(七)何處にいと斯うしもとまる心ぞと、かへすがへす思す。いとことさらめきて、御裝束をも、やつれたる狩の御衣を奉り、樣をかへ、顏をも(八)ほの見せ給はず、夜深き程に、(九)人をしづめて出入りなどし給へば、(一〇)昔ありけむものの變化めきて、(一一)うたて思ひ歎かるれど、(一二)人の御けはひはた、手さぐりにも(一三)しるきわざなりければ、(一四)誰ばかりにかはあらむ、なほ(一五)此のすきもののし出でつるわざなゝめりと、(一六)大夫を疑ひながら、(一七)せめてつれなく知らず顏にて、(一八)かけて思ひよらぬ樣に、(一九)撓まずあざれありけば、如何なる事にかと心得がたく、女方も、怪しう(二〇)樣違ひたる物おもひをなむしける。君も、かくう(二一)

(一)夕顏にかゝつては自ら怪むまで戀しければ
(二)自らこれはちと氣違じみて居る其程の女でもないにと冷靜に考へて見ると
(三)夕顏は飽くまで柔和に大樣で
(四)思慮あり重々しいといふ點はなく
(五)男の味を知らぬでもない
(六)立派な身分ではあるまじ
(七)何處がよくつて斯う熱くなるのであらう
(八)ちらとも
(九)人の寢た時分に
(一〇)昔話の化物じみて
(一一)夕顏が
(一二)源氏の
(一三)貴人とはわかるので
(一四)夕顏の心、この男は誰ならん
(一五)此助平男(惟光)が手引をしたるならん
(一六)惟光
(一七)惟光は何處までも知らぬ振で
(一八)少しも
(一九)じやらつくので
(二〇)普通の戀とは違つた物思
(二一)女が打解けて油斷させて置いて隱れたらば

のれも隈なきすきごころにて、いみじくたばかり惑ひ歩きつゝ、(一)忍びておはしまさせそめてけり。(二)この程の事、くだ〳〵しければ例のもらしつ。女を、さしてその人と尋ね出で給はねば、(三)我も名のりをし給はで、いとわりなう(四)やつれ給ひつゝ、例ならず下り立ちありき給ふは、(五)疎には思されぬなるべしと見れ(六)ば、我が馬をば奉りて、御供に走りありく。惟光「懸想人のいと物げなき足もとを、(七)見つけられて侍らむ時、辛くもあるべきかな」などわぶれど、(八)人に知らせ給はぬまゝに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顔むけにしるまじき(九)童一人ばかりぞ率ておはしける。もし思ひよる氣色もやとて、(一〇)隣に中宿をだにし給はず。(一一)女(一二)もいと怪しう心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、曉の道を窺はせ、御在所見せむと尋ぬれど、(一三)そこはかとなく惑はしつゝ、(一四)(一五)さすがに哀に見ではえあるまじく、(一六)(一七)この人の御心にかゝりたれば、便なく輕々しき事どもおもほしかへしわびつゝ、(一八)いと屢おはします。(一九)かゝる筋は、まめ人の亂るゝ折もあるを、いとめやすくしづ

(一)手段をつくして
(二)かの主人の女に取持ちたり
㊆評慣　源氏の夕顔に對する耳に素性を包む
(三)誰といふ穿鑿もせねば
(四)思切つて身をやつして
(五)身を入れて
(六)惟光が察して
(七)私も戀をして居る身で、如此粗末な徒歩姿を女に見られてはつらかるべし
(八)迷惑がれど
(九)面見知られぬ筈の
(一〇)女が氣がつく種になるかと心配して
(一一)惟光の家
(一二)源の相手の女、夕顔
(一三)腑におちぬ
(一四)見させん
(一五)どこを當となくごまかして
(一六)源の心
(一七)逢はずには居られぬ程に女の事が氣にかゝるので
(一八)輕々しい不都合な擧動であると後悔しながらも
(一九)女にかけては謹嚴な者もしだらくになる事もあるに、源は從來人目につかぬ樣に落着いて

(一)役行者葛城一言主神其他の諸神を使ひて葛城山と金峰山との間に石橋をかけんとしたる古傳說あり
(二)あぶなく
(三)所謂中將殿
(四)覗きたる女どもの數へし也
(五)頭中將と分る樣に
(六)雨夜の品定に頭中將の語りし女
(七)私が自分の戀を彼家の女中にしかけて樣子を殘らず知つて居ながら
(八)主從の關係を隱して傍輩の樣に見せて口きく若い女のあるを空知らずしてわざと欺かれて居る
(九)惟光の相手の女が
(一〇)言ひそこなひそうなのを
(一一)自分達の外に
(一二)源の心、假住居と言つても餘り粗末なれば
(一三)品定の折に馬頭が
(一四)自分もどんな女でも遺らず逃さぬ助平根性て

ちぬべければ、いでこの葛城(一)の神こそ、さかしう(二)し置きたれ、とむつがりて、物のぞきの心もさめぬめり。君(三)は御直衣姿にて、御隨身共もありし。なにが(四)しくれがしと數へしは、頭中將の隨身、その小舍人童をなむ、しるし(五)にいひ侍りし」など聞ゆれば、源「たしかに其の車をぞ見まし」と宣ひて、若(六)かの哀に忘れざりし人にやと思しよるも、いと知らまほしげなる御氣色を見て、惟光「私(七)の懸想もいとよくしおきて、案内も殘る所なく見給へ置きながら、たゞ(八)我どちと知らせて物などいふ若きおもとの侍るを、そらおぼれしてなむ、謀られまかりありく。いと能く隱したりと思ひて(九)、小き子どもなどの侍るが、言過(一〇)しつべきもいひ紛はして、又人(一一)なきさまを強ひてつくり侍る」など語りて笑ふ。源「尼君の訪ひにものせむ序に、かいまみせさせよ」と宣ひけり。假にても(一二)、宿れる住居のほどを思ふに、これこそ、かの(一三)人の定めあなづりし下の品ならめ、その中に、思の外にをかしき事もあらば、など思ほすなりけり。惟光、いさゝかの事も御心に違はじと思ふに、お(一四)

らぬは無かりけり。ましてさりぬべき序の御言の葉も、なつかしき御氣色を見奉る人の、少し物の心を思ひ知るは、(一)いかゞはおろかに思ひ聞えむ、旦暮うち解けてしもおはせぬを、心もとなき事に思ふべかゝめり。

まことや、かの惟光が(二)あづかりのかいまみは、いとよく(三)案内見とりて申す。惟光「(四)その人とは更にえ思ひより侍らず。人にいみじく隠れ忍ぶる氣色になむ見え侍るを、徒然なるまゝに、南の半蔀ある長屋にわたり來つゝ、車の音すれば、(五)若き者ども覗きなどすべかゝめるに、この(六)主とおぼしきも、はひ渡る時はべるめる。容貌なむ、(七)ほのかなれど、いとらうたげに侍る。一日前おひて(八)わたる車の侍りしを、のぞきて、童女の急ぎ來て、右近の君こそ(九)、まづ物見給へ、中將殿こそ、これより渡り(一〇)給ひぬれ、といへば、又(一一)よろしきおとな出で來て、(一二)あなかま、と、(一三)手かくものから、いかで然は知るぞ、いで見む、とてはひ渡る。(一四)打橋だつものを路にてなむ、通ひ侍る。急ぎ來る者は、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落

(一)源を知れる人の中物の分る人は折に觸れて源のかけらるゝ詞を有難く思ふ

㊅ 惟光の報告、源氏夕顔の許に通ふ

(二)命を受けたる西隣の一件は
(三)消息をさぐりて
(四)誰といふ事は分らず
(五)表を通る人を女どもがのぞく也
(六)主人を思はるゝ女
(七)仄かに見た丈なれど
(八)先拂させて通る車
(九)右近の君よ
(一〇)此處をお通りなさる
(一一)可成な
(一二)喧しい
(一三)手眞似で制するけれども
(一四)かけはづしする從り板



（一）中將の服裝
（二）縁先の手すり
（三）中將を
（四）中將君の態度
（五）中々隅にはおけぬ
（六）花にはうつる（色のさめる、心の移る）といふは禁物とは思へども今朝の朝顔（お前の器量）を見ては心を移して手折らぬ譯にはゆかぬ
（七）源の歌の意をそらして御息所の心になりてよめり、霧の晴るゝも待たず歸らるゝは我に情のなき故と思ふと也
（八）主君のこととして
（九）源の從者
（一〇）一通り
（一一）源に思付かぬは無し
（一二）源の姿を見る人々は
（一三）ふびんがる娘
（一四）萬更でもないと
（一五）賤しい勤めでもよいから源に奉公させたし

將の君も御供に參る。（一）紫苑色の折にあひたる、羅の裳鮮かに引きゆひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見かへり給ひて、隅の間の勾欄（二）に暫し（三）引きすゑ給へり。打ち解けたらぬもてなし（四）、髪の下端、（五）めざましくもと見給ふ。

源「咲く花に（六）うつるてふ名はつゝめども折らで過ぎうきけさの朝顔

いかゞすべき」とて、手をとらへ給へれば、いと馴れて疾く、

中將（七）朝霧のはれまも待たぬけしきにて花にこゝろをとめぬとぞ見る

と（八）おほやけごとにぞ聞えなす。をかしげなる侍童（九）の、姿好ましうことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花のなかにまじりて、朝顔折りて參る程など、繪にかかまほしげなり。（一〇）大方にうち見奉る人だに、心しめ（一一）奉らぬはなし。物の情知らぬ山賤も、花の蔭にはなほ休らはまほしきにや、（一二）この御光を見奉るあたりは、程々につけて、わがかなし（一三）と思ふ女を仕う奉らせばやと願ひ、若しは（一四）口惜しからずと思ふ妹などもたる人は、（一五）賤しきにても、なほこの御あたりに侍はせむと、思ひよ

(一)あてにして
(二)嫁入の噂など聞けど

五 源氏と六條御息所との情交

(三)心がらで
(四)葵上の許へ一向行かぬ也
(五)葵が
(六)六條御息所も容易に打解けざりしをやつと手に入れてから却て冷淡にして置くは氣毒な譯なり
(七)手に入れぬ中大騷ぎした程にはまり込む事のなきはどうしたわけぞ
(八)六條御息所
(九)過ぎる程物のよく分つて居る
(一〇)源と年がつりあはぬ也、源十六、六條廿四
(一一)源の無沙汰勝なるは外聞もわるき也
(一二)夜來ぬこと
(一三)源が六條に泊りたる朝也
(一四)起され
(一五)六條方の侍女
(一六)御息所に源を見送り給へといふ意味らしく
(一七)御息所が
(一八)通り過ぎにくそうにして

ち解けぬべく見えし樣なるを(一)頼みて、(二)とかく聞き給へど、御心も動かずぞありける。

秋にもなりぬ。(三)人やりならず、心づくしに思ほし亂るゝ事どもありて、(四)大殿には絶間置きつゝ、(五)怨めしくのみ思ひ聞え給へり。(六)六條わたりにも、解け難かりし御氣色をおもむけ聞え給ひて後、ひきかへしなのめならむはいとほしかし。されど(七)餘所なりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも、如何なる事にかと見えたり。(八)女は、いと(九)物をあまりなるまで思ししめたる御心樣にて、(一〇)齡の程も似げなく、人の漏り聞かむにいとゞかく(一一)つらき御夜がれの寢ざめ〳〵、思ししをるゝ事いと(一二)樣々なり。(一三)霧のいと深き朝、いたく(一四)そゝのかされ給ひて、ねぶたげなる氣色に、うち歎きつゝ出で給ふを、(一五)中將のおもと、御格子一間あけて、(一六)見奉り送り給へとおぼしく、御几帳引きやりたれば、(一七)御頭もたげて見出し給へり。前栽のいろ〳〵亂れたるを、(一八)過ぎがてにやすらひ給へるさま、げに類なし。廊の方へおはするに、中

ど申すに、湯桁(一)はいくつと問はまほしく思せど、あいなくまばゆくて、御心の中に思し出づる事も樣々なり。物(二)まめやかなる大人を斯く思ふも、實にをこがましううしろめたきわざなりや。實にこれぞ(三)斜ならぬかたはなめると、馬頭のいさめ思し出でていとほしきに、つれなき(四)心は妬けれど、人のためは哀と思しなさる。(五)女をばさるべき人に預けて、北(六)の方をば率て下りぬべしと聞き給ふに、一方ならず心あわたゞしくて、今一度(七)はえあるまじき事にやと、小君を語らひ給へど、人の(八)心を合せたらむ事にてだに、(九)輕らかにえしも紛れ給ふまじきを、(一〇)まして似げなき事に思ひて、今更に見苦しかるべしと思ひ(一一)離れたり。流石に絶えて(一二)おもほし忘れなむことも、いとふかひなく、憂かるべきことに思ひて、さるべき折々の御答(一三)など、なつかしく聞えつゝ、(一四)なげの筆づかひにつけたる言の葉、怪しうらうたげに、目とまるべきふし加へなどして、哀とは思しぬべき人(一五)のけはひなれば、つれなく妬きものの、忘れ(一六)難きにおぼす。今一方(一七)は、主(一八)つよくなるとも、かならずう

(一)源の感じ、名高き温泉の話も聞きたけれど、隙見の時に伊豫の湯桁を思出したることある故氣がとがめて恥かしくて
(二)律義な老成人
(三)我が斯かる思をするこそ非常な不埒といふものよと
(四)空蟬の我につれなきは憎けれど伊豫介の爲には天晴のよき妻よと思る
(五)軒端荻
(六)空蟬
(七)今一度空蟬に逢ふ事は出來ぬかと
(八)小君の心、人は相手の女
(九)一寸は忍び行く事もむつかしきに
(一〇)あく迄つれなき處へ忍ばるゝは飛でもなき事と
(一一)思ひ切つて居る
(一二)空蟬の心、丸で源に忘れられて仕舞ふのもつまらなく嫌な事に思ひ
(一三)文の返事
(一四)氣をつけぬらしき書方の中に愛らしき處目につく處を旅へおきて
(一五)空蟬の樣子
(一六)忘れかねる物に
(一七)軒端荻
(一八)夫がやかましくて

（一）調べあげなければ物足らぬ
㈣ 伊豫介上京、源氏の煩悶
（二）普通の人
（三）女の仕打が穏ならば只氣毒な過をした位で跡は忘れても仕舞ふべきに餘り強情に振付けられたので其儘引込むのも殘念で常に心を煩はす
（四）一體空蝉などの如き二流三流の女は眼中になかりしに
（五）ある階級の女に對しては疑問を生じたる處へかゝる經驗をかさねていよ〳〵通人になりたりと見ゆ
（六）眞正直に
（七）軒端荻
（八）何くはぬ顔して聞き居る空蝉の手前恥かしき故
（九）空蝉の方のかたをつけてから軒端荻の方にかからんと
（一〇）源の處へ
（一一）武骨で好かぬ風
（一二）素性
（一三）品よく

若人どもなむ侍るめる」と聞ゆれば、源「なほ言ひ寄れ。（一）尋ね知らではさう〴〵しかりなむ」と宣ふ。かの下が下と、人の思ひおとしゝ住居なれど、その中にも、思の外に口惜しからぬを見つけたらばと、珍らしう思ほすなりけり。

さてかの空蝉のあさましうつれなきを、（二）この世の人には違ひて思すに、（三）おいらかならましかば、心苦しきあやまちにても止みぬべきを、いと妬く負けてやみなむを、心にかゝらぬ折なし。（四）かやうの並々までは思ほしかゝらざりつるを、ありし雨夜の品定の後、（五）いぶかしくおもほしなる品々のあるに、いとゞ隈なくなりぬる御心なゝめりかし。（六）うらもなく待ち聞えがほなる（七）片つ方の人を、哀と思さぬにしもあらねど、（八）つれなくて聞き居たらむことの恥かしければ、まづ（九）此方の心見はててと思す程に、伊豫介上りぬ。まづ急ぎ（一〇）まゐれり。船路のしわざとて、少し黒みやつれたる旅姿、（一一）いとふつゝかに心づきなし。されど人も賤しからぬ筋に、（一二）容貌などねびたれど淸げにて、たゞならず氣色（一三）よしづきてなどぞありける。國の物語な

の事知りて侍る者呼びて、問はせ侍りしかど、はか〴〵しくも申し侍らず。いと忍びて五月の頃ほひより物し(一)給ふ人なむあるべけれど、その人とは(二)、更に家の内の人にだに知らせずとなむ申す。時々中垣のかいまみし侍るに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつもの(三)、かごとばかり引きかけて、かしづく人侍るなゝめり。昨日夕日の残なくさし入りて侍りしに、文書くとて居て侍りし人の、顔こそいとよく侍りしか。物思へるけはひして、在る人々も忍びてうち泣く様などなむ、著く見え侍る」と聞ゆ。君うち笑み給ひて、(四)知らばやと思ほしたり。(五)覺えこそ重かるべき御身のほどなれど、御齢のほど、人の靡きめで聞えたる様など思ふには、すき給はざらむも、情なくさう〴〵しかるべしかし、(六)人のうけひかぬほどにてだに、なほ然りぬべきあたりの事は好ましうおぼゆるものを、と思ひ居り。

惟光「若し見給へ(七)得る事もや侍ると、(八)はかなきついでつくり出でて、消息など遣したりき。(九)書き馴れたる手して、口疾く返事などし侍りき。いと口惜しう(一〇)はあらぬ

(一)彼の家に來て居る女
(二)誰とは
(三)裳の上にはく袴、女どもが裙樣の物を申譯にはいて居るは敬ひ仕ふる人のあるならん
(四)一切の事情を
(五)惟光の心、源の御身分は重々しく思はるれど年は若し女には好るゝを思へは、斯る人の堅いのも却て物足らぬ感じあるべし
(六)あの人なれば浮氣するも道理と人の認めてくれぬ人でさへ
(七)垣見し侍る事もあるかと
(八)つまらぬ機會を作りて
(九)其返事には
(一〇)そうつまらなくもなき

したなきに、(一)かくわざとめかしければ、あまえて、(二)いかに聞えむなどいひしろふべかゝめれど、(三)めざましと思ひて隨身は參りぬ。御前の松明ほのかにて、いと忍びて出で給ふ。(四)半蔀はおろしてけり。隙々より見ゆる火の光、(五)螢よりけにほのかにあはれなり。(六)御志の所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとのどかに心憎く住みなし給へり。(七)うちとけぬ御有樣などの、(八)氣色異なるに、(九)ありつる垣根おもほし出でらるべくもあらずかし。翌朝少し寢過し給ひて、日さし出づる程に出でたまふ。(一〇)朝開の御姿は、げに人のめで聞えむも理なる御樣なりけり。今日も(一一)この蔀の前わたりし給ふ。(一二)來し方も過ぎ給ひけむわたりなれど、(一三)たゞはかなき一ふしに御心とゞまりて、いかなる人の住處ならむとは、往來に御目とまり給ひけり。

惟光、日ごろありて參れり。惟光「煩ひ侍る人、なほ弱げに侍れば、(一四)とかく見給へあつかひてなむ」など聞えて、近く參り寄りて聞ゆ。惟光「仰せられし後なむ、隣

(一)わざ〳〵しく持來れるに圖に乘つて
(二)何と御返事すべきなど相談する
(三)心外なりと
(四)西隣の家の
(五)螢より一層增りてまた
(六)志して來れる六條御息所の邸
(七)六條御息所の
(八)格別なるに
(九)西隣の家の女などは忘れて仕舞ひし也
(一〇)朝は源の容が一層美しき也
(一一)西隣の家の前を通る
(一二)從來も
(一三)つまらぬ扇の一件以來氣にかゝりて
㊂惟光夕顔の家の樣子を語る、源氏の好奇心動く
(一四)彼是看病の爲御無沙汰になれり

(一)無愛想に
(二)尋ぬるを
(三)此邊の事情
(四)西隣の家の留守番
(五)或國の介の官名のみを有して實務に當らぬ人
(六)夫なる揚名介
(七)女の同胞
(八)源の心、扇を贈りたるは其宮仕の女ならん
(九)我に歌などしては穏ならぬ位な身分ひくき相手ではなきかと思へど
(一〇)我に志してよみかけたる
(一一)棄置き難き
(一二)女にかけては自重せぬ
(一三)全ていつもの書風とはかへて
(一四)黄昏に仄かに見た位ではよく分るまじ、近よりて親しく見給へ
(一五)此家の女はまだ源を見し事はなけれど
(一六)推量でもよく分る事を見て此儘にも置かれず、だしぬけに歌を贈りたるに
(一七)妙に間が惡く思居る處へ

など、はした(一)なげに聞ゆれば、（源）「憎し(二)とこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ねまほしき故ありて見ゆるを、なほこの(三)あたりの心知れらむ者を召して問へ」と、宣へば、入りて、この宿守(四)なる男を呼びて問ひ聞く。（惟光）「揚名介(五)なりける人の家になむ侍りける。(六)男は田舍にまかりて、女なむ若く事好みて、兄弟(七)など宮仕人にて來通ふ、と申す。くはしき事は、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と聞ゆ。さら(八)ばその宮仕人なゝなり、したり顔に物なれて言ひつるかなと、めざ(九)ましかるべき際にやあらむと思せど、さして(一〇)聞えかゝれる心の、憎からず過し(一一)がたきぞ、例の(一二)このかたには重からぬ御心なゝめりかし。御疊紙に、いたう(一三)あらぬさまに書きかへ給ひて、

（源）寄り(一四)てこそそれかとも見めたそがれにほのぐ見つるはなの夕顔

ありつる御隨身して遣す。まだ(一五)見ぬ御さまなりけれど、いと(一六)著く思ひあてられ給へる御側目を見すぐさで、さし驚かしけるを、御答もなく程經ければ、なまは(一七)



朝夕にしも見奉らず、心のまゝに訪ひ參うづる事はなけれど、なほ久しう對面せぬ時は、心細くおぼゆるを、(一)さらぬ別はなくもがなとなむ」など、細やかに語らひ給ひて、押し拭ひ給へる御袖の匂も、いと所狹きまで薫り滿ちたるに、(二)げに思へば、(三)おしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君を(四)もどかしと見つる子どもも、皆うちしほたれけり。(五)修法など、また〳〵始むべき事など(六)おきて宣はせて、出で給ふとて、惟光に(七)紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば、(八)もて馴したる移香、いと染み深うなつかしうて、をかしうすさび書きたり。

　女(九)心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕顔の花

(一〇)そこはかとなく書き紛らはしたるも、(一一)あてはかに故づきたれば、いと思のほかにをかしうおぼえ給ふ。惟光に、源「この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば、例のうるさき御心とは思へども、(一二)さはえ申さで、惟光「この五六日此處に侍れど、病者の事を思ひ給へあつかひ侍る程に、隣の事はえ聞き侍らず」

(一)「世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため」さらぬ別は死別
(二)子どもの心
(三)源の如き人に斯く泣に惜まるゝは母も中々運のよき人なりと
(四)じれつたく思ひし
(五)祈禱
(六)指圖し
(七)後世の手燭、松又は紙を材とす
(八)持古したる
(九)君を源氏なりとは推量して知りたるぞと也
(一〇)わざとらしからず
(一一)上品に由ありげなれば
(一二)さうも言へず

(一)直りにくゝ
(二)尼になりたれば
(三)我が出世をも見給へ
(四)極樂に九階級ありといふ
(五)後生の爲よろしからず
(六)出來損ひの子でさへ
(七)愛する筈の人は
(八)他人からは冷かしたくなる程良く思ひ居るが常なるに
(九)これは源なれば仕ふる人も肩身廣く、斯る人に昵近せりと思へば自ら我身を尊重する氣にもなる譯なれば
(一〇)尼が
(一一)鬱ぎ込んだ處を御覽に入れる
(一二)つッ突きあひ目くばせす
(一三)我年少の折母や祖母が死にたる跡
(一四)大貳乳母の外にはなく

のしるしに蘇りてなむ、かく渡りおはしますを見給へ侍りぬれば、今なむ阿彌陀佛の御光も、心清く待たれ侍るべき」など聞えて、弱げに泣く。源「日頃おこた(一)り難く物せらるゝを、安からず歎き渡りつるに、かく世を離るゝ(二)さまに物し給へば、いと哀にくち惜しうなむ。命長くて、なほ位高く(三)なども見なし給へ。さてこそ九品(四)の上にも、障なく生れ給はめ。この世に少し憾のこるは、わろきわざと(五)なむ聞く」など、涙ぐみて宣ふ。(六)かたほなるをだに、乳母などやうの思ふべき人は、(七)あさましう(八)まほに見なすものを、ましていと面だたしう(九)、なづさひ仕う奉りけむ身もいたはしく、辱くおもほゆべかゝめれば、すゞろに涙がち(一〇)なり。子どもはいと見苦しと思ひて、背きぬる世の去り難きやうに、自らひそみ(一一)御覽ぜられ給ふと、つきじろひ(一二)目くはす。君はいと哀とおぼして、源「いはけなかりける(一三)程に、思ふべき人々のうち捨ててものし給ひにける名殘、はぐくむ人數多ある樣なりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、また無く(一四)なむ思ほえし。人となりて後は、限あれば、

(一)あちこち倒れかゝりて
(二)見だてなき軒の端々に
(三)花の運命
(四)氣取つた
(五)香のにほひの染みたる
(六)趣のなさそうな
(七)扇を隨身に
(八)恰も來合せたる惟光に取次がせたる也
(九)門の
(一〇)物の分る人なき所なればよき樣なものゝ
㊂　源氏乳母の病床を訪ふ、歸途扇の歌の返歌を贈る
(一一)車を
(一二)惟光の義弟妹
(一三)源の御目にかゝる事のなくなるを殘念に思ひて思切り得ざりしが
(一四)尼になりし驗に元氣づき、斯く御出あるを見上げ申せば

家がちに、むづかしげなるわたりの、此面彼面(一)あやしう打ちよろぼひてむねく(二)しからぬ軒のつまごとに、蔓ひ纒はれたるを、源「くちをしの花の(三)契や。一房折りて參れ」と宣へば、この押し開けたる門に入りて折る。流石に(四)ざれたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴、長く著なしたる童のをかしげなる、出で來てうち招く。白き扇の、いたうこがしたる(五)を、童「これに置きて參らせよ。枝もなさけなげな(六)める花を」とて、取らせたれば(七)、門(八)あけて惟光の朝臣の出で來たるして奉らす。惟光「鍵を(九)置き惑はし侍りて、いと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬ邊なれど、亂がはしき大路に立ちおはしまして」(一〇)と、畏り申す。引き入れて(一一)下り給ふ。惟光が兄の阿闍梨、(一二)婿の參河守、女など渡り集ひたる程にて、斯くおはしましたるよろこびを、またなき事に畏まる。尼君も起き上りて、尼「惜しげなき身なれど、捨て難く思ひ給へつることは、たゞかく御前に(一三)侍ひ御覽ぜらるゝ事の變り侍りなむことを、口惜しう思ひ給へたゆたひしかど、忌む事(一四)



御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光(一)召させて、待たせ給ひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見渡し給へるに、この家の傍に、檜垣(三)といふもの(二)新しうして、上は、半蔀(四)四五間ばかりあげ渡して、簾などもいと白う涼しげなるに、(五)をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つかた思ひやるに、(六)あながちに長高き心地ぞする。如何なる者の集へるならむと、樣かはりて思さる。(七)御車もいたうやつし給へり、前もおはせ給はず、誰とか知らむとうち解け給ひて、少しさしのぞき給へれば、門は蔀のやうなるを押しあげたる、見(八)いれの程なく物はかなき住居を、あはれに、いづこかさして(九)と思ほしなせば、(一〇)玉の臺も同じことなり。(一一)きりかけだつ物に、いと青やかなる葛の(一二)、心地よげに蔓ひかゝれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑(一三)の眉開けたる。源「遠方人に物申す」(一四)と、ひとりごち給ふを、(一五)御随身つい居て、隨身「かの白く咲けるをなむ夕顏と申し侍る。花の名は人めきて(一六)、斯うあやしき垣根になむ咲き侍りける」と申す。實にいと小

(一)民部大輔惟光、大貳乳母の子、源の家來
(二)ごた〳〵したる
(三)檜板の垣
(四)丈短き蔀、蔀は板の表に格子をつけたる戸、こゝの蔀は釣上ぐる樣にしたる物
(五)美人らしき女どもが源を覗く也
(六)檜垣の上より見ゆれば也
(七)車を粗末にしたり先拂もせねば誰と知れる氣遣なしと氣をゆるして
(八)外から見込みたる處狹く
(九)世中はいづこかさして我がならん行留るをぞ宿と定むる」
(一〇)源氏の感想
(一一)板塀らしき物
(一二)蔓草
(一三)此家の心細げなるに反して得意の色あり
(一四)古今集「打渡す遠方人に物申す我其そこに白くさけるは何の花ぞも」
(一五)御供の武官跪きて
(一六)名ばかりは艶で

夕顔

梗概

㊀ 源氏乳母の病を訪ひに行きて、其隣家の垣に咲ける夕顔の花を折り、其家より歌かきたる扇を貰ふ。㊁ 乳母の病床を訪ふ。病人の感謝。歸途扇の歌の返歌を贈る。㊂ 乳母子惟光隣家の樣子を探りて源氏に報告す。源氏の好奇心動く。㊃ 伊豫介上京。空蟬を携へて歸任すべしと聞きて、源氏煩悶す。㊄ 源氏と六條御息所との情交。㊅ 惟光の再度の報告により隣家の女(夕顔)の頭中將の語れる内氣女なるべきを察す。源氏夕顔の許に通ふ。㊆ 源氏の夕顔に對する熱情と批判。互に素性を包む。㊇ 源氏、夕顔の假住居に宿す。源氏の眼に珍らしき五條邊の細民の生活。夕顔を誘ひ出して河原院に宿す。㊈ 夕顔、女の靈に襲はれて頓死す。河原院の氣味惡き一夜。㊉ 惟光、夕顔の屍骸を東山の寺に移す。源氏無限の愁を懷いて二條邸に歸る。⑪ 惟光の報告。源氏夕顔の屍を見にゆく。夕顔の侍女右近を連れ歸る。⑫ 源氏の病氣。⑬ 右近に問ひて夕顔の素性を知る。頭中將と夕顔との關係。⑭ 空蟬及軒端荻との文の贈答。⑮ 竊に夕顔の七七日の法事を修す。⑯ 夕顔の留守宅の疑惑。空蟬夫に隨ひて伊豫に下る。

㊀ 源氏路傍の家に夕顔の花を折りて歌かきたる扇を貰ふ

(一) 六條わたりの御忍ありきの頃、内裏よりまかで給ふ中宿に、(二) 大貳の乳母のいたく煩ひて尼になりにける、とぶらはむとて、(三) 五條わたりなる家尋ねておはしたり。

(一) 六條御息所の許へ源氏が通ひたる時分、六條御息所は故皇太子(桐壺帝の弟、帝にならずして薨去)の妃、それが寡婦となりしに源の通ひし也
(二) 源の乳母
(三) 乳母の家

(一)取りかへすものならねど、忍びがたければ、この御疊紙の片つかたに、

空蟬　うつせみの羽におく露の(二)木がくれてしのび〳〵にぬるゝ袖かな

(一)「取りかへすものにもがなや世の中をありしながらの我身と思はむ」

(二)我は隠れて逢はねども君の情を思ひては人知れず袖を濡らして居るぞ

(一)軒端荻の思はくも氣労なれど　(二)色々思ひ直して　(三)側にひきつけて　(四)きびしく責める　(五)案外の仕末にごまかしたれども　(六)他人の疑は免れられぬので當惑するのに　(七)小君は幼稚な心では源氏もどう思召すかしら　(八)どちらに對し　(九)源のかきちらし　(一〇)かの衣が如何に着古して穢くなつたかしら　(一一)後撰集「鈴鹿川伊勢をの海士のすて衣しほなれたりと人や見るらん」　(一二)氣がもめて　(一三)思ひ亂れたり　(一四)軒端荻　(一五)我が部屋へ　(一六)人知れぬ秘事故に　(一七)源の御殿と我家との間を往復する　(一八)軒端荻が　(一九)斯うは無い筈と思つて考へてもわからず　(二〇)お悶ひ作ら流石に　(二一)空蟬もいくら氣をしめて居ても　(二二)情に深そうな御樣子を思ふと　(二三)御返事はつかぬが夫れない言ならばといふ氣が出てたまらなくなつて

と書き給へるを、懐に引き入れて持たり。かの人も如何に思ふらむと、いとほしけれど、かた〴〵おもほしかへして、御言傳も(一)なし。かの薄衣は、小袿のいとなつかしき人香(二)に染めるを、身近く(三)ならしつゝ見居給へり。小君彼處に往きたれば、姉君待ちつけて、いみじう(四)宣ふ。空蟬「(五)あさましかりしに、とかく紛らはしても、人の思ひけむ事さり所なきに、いとなむわりなき。いとかう(七)心幼き心ばへを、且(六)はいかに思ほすらむ」とて恥しめ給ふ。左右に(八)苦しく思へど、かの御手習(九)とり出でたり。さすがに取りて見給ふ。かの(一〇)もぬけを、いかに(一一)いせをの海士のしほなれてやなど、思ふもたゞ(一二)ならず、いとよろづに亂れ(一三)たり。西の(一四)君も、もの恥かしき心地して渡り(一五)給ひにけり。又知る(一六)人もなき事なれば、人知れずうち眺めて居たり。小君の渡りありく(一七)につけても、胸の(一八)みふたがれど、御消息もなし。あさましと、思ひ得る方もなくて、(二〇)ざれたる心地に物あはれなるべし。(一九)つれなき人も、(二一)さこそしづむれど、(二二)いとあさはかにもあらぬ御氣色を、(二三)ありしながらの我身ならばと、

(一)腹が痛い〳〵
(二)又申上げて
(三)出歩き
㊄空蟬へ文をやる、空蟬小君を叱る
(四)陪乘
(五)幼稚でいけぬと小君を叱りて
(六)空蟬
(七)小君は氣毒で
(八)空蟬が源を
(九)逢はずとも色よい返事位はしてもよい筈
(一〇)身こそつらけれ
(一一)察しがないと空蟬を思ひて
(一二)取りかへりたる衣を思ひて
(一三)可愛いけれどつれない人の弟故末長く可愛がれぬ
(一四)眞面目に
(一五)わざとの
(一六)蟬のぬけがらの樣に衣を脱ぎ置いて逃げにも拘らず、矢張その人の戀しきはどうしたことぞ、人柄—人殼を兼ぬ

御達「あな腹々。(一)今聞えむ(二)」とて過ぎぬるに、辛うじて出で給ふ。なほかゝるあり(三)きは輕々しく危かりけりと、いよ〳〵思し懲りぬべし。小君、御車の後(四)にて、二條院におはしましぬ。有樣宣ひて、(五)幼かりけりとあばめ給ひて、(六)かの人の心を、爪はじきをしつゝ恨み給ふ。(七)いとほしうて、物もえ聞えず。源「いと深う惡み給ふべか(八)めれば、身も憂く思ひはてぬ。などか他所にて(九)も、なつかしき答ばかりはし給ふまじき。伊豫介に劣りける身こそ」(一〇)など(一一)心づきなしと思ひて宣ふ。(一二)ありつる小袿を、さすがに御衣の下に引き入れて、大殿籠れり。小君を御前に臥せて、よろづに怨みかつは語らひ給ふ。源「あこはらうたけれ(一三)ど、つらきゆかりにこそ、え思ひはつまじけれ」と、(一四)まめやかに宣ふを、いとわびしと思ひたり。暫しうち休み給へど、寢られ給はず。御硯急ぎ召して、(一五)さしはへたる御文にはあらで、疊紙に、手習のやうに書きすさび給ふ。

源　空蟬(一六)の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

小君近く臥したるを起し給へば、うしろめたう思ひつゝ寢ければ、(一)ふと驚きぬ。(二)戸をやをら押し明くるに、老いたる御達の聲にて、「あれは誰ぞ」と(三)おどろ〳〵しく問ふ。(四)わづらはしくて、小君「まろぞ」と答ふ。御達「夜中に、こは何ぞ歩かせ給ふ」と、(五)さかしがりて外ざまへ來。いとにくゝて、小君「(六)あらず。こゝもとへ出づるぞ」とて、君を押出し奉るに、曉近き月限なくさし出でて、ふと人の影見えければ、御達「(七)またおはするは誰ぞ」と問ふ。御達「(八)民部の御許なゝめり。(九)けしうはあらぬ御許の長だちかな」といふ。(一〇)長高き人の常に笑はるゝをいふなりけり。(一一)老人これを連ねて歩きけると思ひて、御達「(一二)今たゞ今、立ち竝び給ひなむ」といふ〳〵、(一三)我もこの戸より出でて來。わびしけれど、(一四)えはたおしかへさで、渡殿の口にかい添ひて、(一五)隱れ立ち給へれば、(一六)このおもとさし寄りて、御達「おもとは(一七)今宵上にや侍ひ給ひつる。(一八)一昨日より腹を病みて、いとわりなければ、(一九)下に侍りつるを、人少なりとて召しゝかば、昨夜參う上りしかど、(二〇)なほえ堪ふまじくなむ」と(二一)憂ふ。答も聞かで、

㊃ 源氏物に紛れて邸に歸る
(一)直に目覺めたり
(二)小君が
(三)仰山に
(四)うるさくて
(五)氣をきかせて外の方へついて來る
(六)いや一寸そこへ出るのぢや
(七)もう一人居られるは
(八)侍女の名
(九)立派なせいぢやな
(一〇)源氏を民部と間違へて
(一一)小君が民部と一緒に歩いて居たと思ひて
(一二)ぢきに貴君も同じ位のせいにおなりです
(一三)老女
(一四)突戻す事も出來ず
(一五)源が
(一六)老女
(一七)奥様の御側
(一八)我は
(一九)わが部屋
(二〇)堪へられそうもなし
(二一)こぼす

(一)才はじけた様なれど分らぬ
(二)源の感じ
(三)惚れ所のない様な心持
(四)じれつたい様な空蟬の心を
(五)すばらしい物だと
(六)空蟬が
(七)我を野暮な奴だと
(八)珍らしい
(九)空蟬が戀しくな
(一〇)軒端荻
(一一)世間晴れての關係よりも忍ぶ戀路は情が深いと
(一二)憚る事
(一三)自分で自分の思ふ様にならぬ
(一四)父兄なども承知すまじ
(一五)極り文句で
(一六)文の便も出來まじ
(一七)率直に
(一八)むやみな人に知らせて恐いが小君に文使をさせん人に悟られぬ様にし給へ
(一九)空蟬が逃げる時に脱ぎおきたりと

れど、まだいと若き心地に、さこそさしすぎたる(一)やうなれど、えしも思ひわかず。憎し(二)とはなけれど、(三)御心とまるべき故もなき心地して、なほかのうれたき(四)人の心を(五)いみじくおぼす。(六)何處に這ひ紛れて、(七)かたくなしと思ひ居たらむ、かく執念き人は(八)ありがたきものをと、思ほすにしも、あやにくに紛れ難う(九)思ひ出でられ給ふ。この人(一〇)の何心なく若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情々しく契りおかせ給ふ。源「人知りたる(一一)事よりも、かやうなるは哀添ふ事となむ、昔の人もいひける。あひ思ひ給へよ。(一二)つゝむ事なきにしもあらねば、(一三)身ながら心にもえ任すまじくなむありける。(一四)又然るべき人々も免されじかしと、かねて胸痛くなむ。忘れで待ち給へよ」など、(一五)なほ〳〵しく語らひ給ふ。軒端荻「人の思ひ侍らむ事の恥かしきになむ、え聞えさす(一六)まじき」と、(一七)うらもなくいふ。源「(一八)なべての人に知らせばこそあらめ、この小き上人などに傳へて聞えむ。氣色なくもてなし給へ」など言ひ置きて、(一九)かの脱ぎすべしたりと見ゆる薄衣を取りて出で給ひぬ。

人臥したるを心安くおぼす。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣（一）をおしやりて寄り給へるに、ありしけはひよりは、（二）もの〳〵しく覺ゆれど、思ほしも寄らずかし。（三）いぎたなきさまなどぞ、（四）あやしく樣かはりて、やう〳〵見顯はし給ひて、あさましく心やましけれど、人違とたどりて見えむも、（五）をこがましく怪しと思ふべし、（六）本意の人を尋ねよらむも、斯ばかり遁るゝ心あめれば、かひなく、をこにこそ思はめとおぼす。（七）（八）かのをかしかりつる火影ならば、いかゞはせむと思しなるも、わろき御心淺さなめりかし。（九）やう〳〵目さめて、いと覺えずあさましきに、あきれたる氣色にて、（一〇）何の心ふかくいとほしき用意もなし。（一一）世の中をまだ思ひしらぬ程よりは、ざればみたるかたにて、あえかにも思ひ惑はず。（一二）我とも知らせじと思ほせど、如何にしてかゝる事ぞと、後に思ひ廻らさむも、我が爲には事にもあらねど、あのつらき人の、あながちに世をつゝむも、さすがにいとほしければ、（一三）度々の御方違にことつけ給ひしさまを、いとよう言ひなし給ふ。（一四）たどらむ人は心得つべけ

（一）軒端荻の著て寢て居る衣
（二）前よりは大柄に
（三）人違とは氣がつかず
（四）寢坊な所などが變つて居るのでやう〳〵人違とわかりて
（五）合點のゆかぬ風をして人違とけ取られても
（六）目ざしたる空蟬
（七）空蟬が
（八）隙見した美人なら恐くもなし、仕方がない人違なら人違でもかまはぬといふ了簡になるはけしからぬ濫惘ではあるぞ
（九）軒端荻が
（一〇）人を引きつける程の
（一一）おぼこ娘にしては輕浮な方で子どもらしくあわてず
（一二）我を我と知らせたくは無けれど、又軒端荻が今夜の始末の原因を後に色々考へるも自分は平氣なれども空蟬が非常に世間を憚るのが氣毒さに
（一三）度々方違に託して來たるも汝に逢はん爲ぞとうまくごまかす
（一四）考深き人は斯うと分る筈なれど



(一)妻戸を叩きし時あけたる童
(二)小君が暫時空寢し
(三)源の心、どんな具合か間の惡い事はないか
(四)空蟬の枕元の几帳の垂布をあげて
(五)和らかなのが顯る人の注意を惹いた
(六)源が忘れたるを嬉しき方に強ひて考へては居れど、あの時の逢瀬が忘れられぬので快く寢る事も出來ず
(七)河海抄「夜はさめ晝はながめにくらされて春はこのめもいとなかりけり」木芽、此目
(八)暇なく
(九)軒端荻に今夜は泊り給へと
(一〇)若々しく
(一一)軒端荻
(一二)空蟬は目覺めて居たれば直に氣が付きたる也
(一三)垂布
(一四)何と分別も出ず
(一五)ぬけ出したり
(一六)軒端荻を空蟬と思ひて

るべし。戸(一)放ちつる童も、其方に入りて臥しぬれば、とばかり空寢して、火明き方に屛風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れ奉る。(二)いかにぞ、(三)をこがましき事もこそと思すに、いとつゝましけれど、導くまゝに、母屋の几帳の(四)帷引き上げて、やをら入り給ふとすれど、皆しづまれる夜の、御衣のけはひ(五)やはらかなるしもいとしるかりけり。女は、さこそ(六)忘れ給ふを嬉しきに思ひなせど、怪しく夢のやうなる事の心に離るゝ折なき頃にて、心解けたるいだに寢られずなむ、晝はながめ、夜はねざめがちなれば、(七)春ならぬこのめも、(八)いとなく歎かしきに、(九)碁打ちつる君、今宵はこなたにと、(一〇)いまめかしくうち語らひて寢にけり。(一一)若き人は何心なく、いとよくまどろみたるべし。かゝるけはひの、(一二)いとかうばしくうち匂ふに、顏をもたげたるに、(一三)ひとへうちかけたる几帳の透間に、暗けれどうち身じろぎ寄るけはひ、いとしるし。あさましく覺えて、(一四)ともかくも思ひわかれず、やをら起き出でて、生絹なる單衣一つを著て、(一五)すべり出でにけり。君は入り給ひて、唯一(一六)

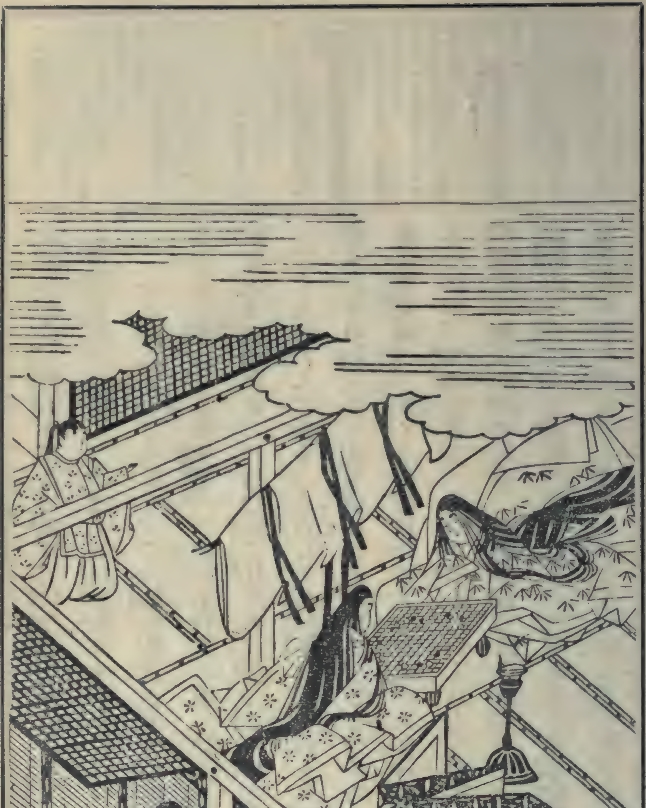
あゝべけれ」と宣へば、小君「などてか(一)。彼方に(二)歸り侍りなば、たばかり侍りなむ」と聞ゆ。さも靡かしつべき(三)氣色にこそはあらめ、童なれど、物の心ばへ、(四)人の氣色見つべくしづまれるをと、おぼすなりけり。碁打ちはてつるにやあらむ、うちそよめきて、人々(五)あがるけはひなどすなり。女房「若君(六)は何處におはしますならむ。この御格子は鎖してむ」と鳴らすなり。源「(七)しづまりぬなり。入りて、さらばたばかれ」と宣ふ。この子も、(八)いもうとの御心はた、(九)撓む所なくまめだちたれば、(一〇)言ひ合せむかたなくて、人ずくなならむ折に入れ奉らむ、と思ふなりけり。源「紀伊守(一一)の妹もこなたに在るか。我にかいまみせさせよ」と宣へば、小君「いかでか然は侍らむ。(一二)格子には几帳添へて侍る」ときこゆ。然かし然れども(一三)と、をかしくおぼせど、見つとは知らせじ、(一四)いとほし、と思して、夜更くる事の心もとなさを宣ふ。この度は妻戸を叩きて(一五)入る。皆人々しづまり寝にけり。小君「この障子口にまろは寝たらむ。風吹きとほせ」とて、疊ひろげて臥す。御達、東の廂にいと數多寝た

(一)どう致しまして
(二)軒端荻が
(三)空蝉を今夜は靡かせ得べき様子の見えたるならん
(四)人の様子を悟るべき落著きたる子なればと
(五)退散する
(六)小君
(七)寝たのぢゃ
(八)姉空蝉
(九)折合ふ餘地なく堅氣なれば
(一〇)談合のし様なくて
(一一)軒を隙見させよと源が空とぼけたる也
(一二)格子の内側に几帳あれば隙見は出來ぬ
(一三)然れども疾に見て仕舞へるにと
(一四)可愛そうに
(一五)小君が

け給へれば、自らそばめに見ゆ(一)。目少し腫れたる(二)心地して、鼻などもあざやか(三)なる所なうねびれて、にほはしき所も見えず、言ひたつれば、わろきに(四)よれる容貌を、いといたうもてつけて(五)、この(六)勝れる人よりは心あらむと、目とゞめつ(七)べき様したり(八)。賑はゝしく愛敬づきをかしげなるを、いよ〳〵誇りかにうち解けて、笑ひなどそほるれば(九)、にほひ多く見えて、然る方にいとをかしき人ざまなり(一〇)。あは(一一)つけしとは思しながら、まめならぬ(一二)御心は、これもえ思し放つまじかりけり(一三)。見(一四)給ふかぎりの人は、うち解けたるよなく(一五)、ひき(一六)つくろひそばめたる、うはべをのみこそ見給へ、かくうち解けたる人の有様かいまみなどは、まだし給はざりつる事なれば、何心もなう(一七)、さやかなるはいとほしながら、久しう見給はまほしきに、小君出で來る心地すれば、やをら(一八)出で給ひぬ。

渡殿の戸口に寄り居給へり。いとかたじけなし(一九)と思ひて、小君「例ならぬ人(二〇)侍りて、え近うも寄り侍らず」(二一)源「さて今宵もや歸してむ(二二)とする。いとあさましう辛うこそ

(一)横顔が見える
(二)瞼まぶちと見えて
(三)つやなく年寄めきて
(四)寧ろ醜い方の
(五)取繕ひて
(六)軒端荻
(七)人の注意を惹く
(八)以下軒端荻の様子
(九)ふざける故
(一〇)人柄
(一一)薄っぺらなりとは源の軒に對する感じ
(一二)堅くない
(一三)見逃すのは惜しい心持
(一四)源の付合ふ人は皆
(一五)折
(一六)すまして顔もまともに見せぬ故
(一七)二人共何の氣もつかず丸で見通しなるは氣毒なれど
(一八)そろりと
㊂ 源氏人違して軒端荻と契る
(一九)勿體なし
(二〇)いつも居ぬ人、軒端荻
(二一)空蟬の傍へ
(二二)我を此儘歸すのか



は東向にて、殘る所なく見ゆ。白き羅の單襲、(一)二藍の小袿だつもの、(二)ないがしろに著なして、(三)紅の腰ひき結へるきはまで、(四)胸あらはに、(五)ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶ〳〵と肥えて、(六)そゞろかなる人の、頭つき額つきも(七)のあざやかに、(八)まみ口つきいと愛敬づき、花やかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、(九)下端肩のほどいと清げに、すべてねぢけたる所なく、をかしげなる人と見えたり。(一〇)宜こそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見給ふ。(一一)心地ぞ、なほ靜なるけをそへばやと、ふと見ゆる。(一二)かどなきにはあるまじ、碁打ちはてて、(一三)缺さすわたり心とげに見えて、(一四)きは〳〵とさうどけば、(一五)奥の人はいと靜にのどめて、空蟬「待ち給へや。そこは持にこそあらめ。このわたりの劫をこそ」などいへど、軒端荻「いで、この度は負けにけり。(一六)隅の所々いで〳〵」と、指を屈めて、「十二十三十四十」など數ふるさま、(一七)伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見ゆ。(一八)少し品おくれたり。(一九)たとしへなく口おほひて、(二〇)さやかにも見せねど、(二一)目をしつとつ(二二)

(一)紅と藍との雜色
(二)無造作に
(三)紅の袴の腰の處迄
(四)上の小袿の前があけず、下著の單衣の胸見ゆる也
(五)しだらくなる容態
(六)ひよろ高き
(七)際立ちて
(八)目つき
(九)下りぶり
(一〇)又となき娘に父親の思ふも尤也と
(一一)了簡にもつと落付を持たせたいと
(一二)才はありそうなり
(一三)駄目をさす所が機巧らしく
(一四)てきぱきしてはしやげば
(一五)空蟬はゆつくり構へて
(一六)さあ數へやう
(一七)道後の湯のまはりに桁を渡したるが數多きを以て、繁多なるものを譬へいふ此頃の諺
(一八)隙なく數へそうに
(一九)品格が劣る
(二〇)以下空蟬の樣子、ひどく衣にて口を掩ひて
(二一)顔を
(二二)瞳がじつと注目する故

りけなき姿にて、門など鎖さぬ前にと急ぎおはす。人見ぬ方より引き入れて(一)おろし奉る。童なれば、宿直人なども殊に(二)見入れ追從せず、心やすし。東の妻戸(三)に立て奉りて、我は南の隅の間より、(四)格子叩きのゝしりて入りぬ。(五)御達「あらはなり」といふなり。小君「何ぞ、かう暑きに、此格子は下されたる」と問へば、御達「晝より西(六)の御方の渡らせ給ひて、碁打たせ給ふ(七)」といふ。さて(八)對ひ居たらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて、簾(九)の間に入り給ひぬ。この入りつる格子は、まだ鎖さねば、間見ゆるによりて、西ざまに見通し給へば、この際に立てたる屏風も、端の方おし疊まれたるに、まぎるべき(一〇)几帳なども、暑ければにや、うち懸けて(一一)いとよく見入れらる。燈(一二)近うともしたり。母屋の中柱(一三)にそばめる人や我が心かくると、まづ目とゞめ給へば、濃き(一四)綾の單襲なゝめり、何にかあらむ表に著て、頭つき細やかに、小き人の(一五)ものげなき姿ぞしたる。顔などは、さし對ひたる人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦々にて、(一六)いたうひき隱したゝめり。今一人

(一)車から
(二)小君が來れりと思ふ故別に世話もやかず
(三)開き戸の處に源を立たせ置きて
(四)源を伴へるを悟られじとする也
(五)女中たちがそうあけ放しては外から見通しになると小言いふ也
(六)軒端の荻といふ娘、伊豫介の女、空蟬には繼娘
(七)空蟬と
(八)立聽きせる源の心
(九)簾と格子の間
(一〇)目を遮るべき
(一一)垂布を引揚げて横木に懸けたる也
(一二)對座し居る二人に近く
(一三)柱に添ひて居るのが自分の戀人かと
(一四)濃紫の
(一五)ちんまりしたる
(一六)手を、空蟬の用意周到なるを見よ

(一)今夜の始末を非常に苦々しく
(二)空蟬の心
(三)此儘源が平氣な顏で思切らるゝもいやなり、强切るを付廻さるゝ如き事の續くも困り物也、よい加減に始末をつけん
(四)思案がち
㊂源氏三度中川の家に宿る、空蟬と軒端荻とを隙見す
(五)氣にくはぬ仕方
(六)一分の立たぬ樣に思ひ煩ひて
(七)癪にもさはつて
(八)心の儘にもならず
(九)空蟬に逢へる樣心配せよ
(一〇)嫌な相談でも兄に角親しくされるは嬉し
(一一)小君が機會を
(一二)紀伊に赴任し
(一三)留守宅の樣
(一四)小君の車にて源を中川の家へ伴ふ
(一五)子供故甘くやれるかしらんと源が危ぶめど
(一六)さう〳〵は我慢も出來ぬ故

といとほしくさう〴〵しと思ふ。女も(一)なみ〳〵ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絕えてなし。(二)思し懲りにけると思ふにも、(三)やがてつれなくて止み給ひなましかば憂からまし、强ひていとほしき御ふるまひの、絕えざらむもうたてあるべし、よきほどにてかくて閉ぢめてむ、と思ふものから、たゞならず(四)ながめがちなり。

君は、(五)心づきなしとは思しながら、かくてはえ止むまじう御心にかゝり、(六)人わろく思ほしわびて、小君に、「(七)いとつらうもうれたくも覺ゆるに、强ひて思ひかへせど、(八)心にしも隨はず苦しきを、然りぬべき折を見て、(九)對面すべくたばかれ」と宣ひわたれば、(一〇)煩はしけれど、かゝる方にても、宣ひまつはすは嬉しうおほえけり。幼き心地に、(一一)如何ならむ折にかと待ち渡るに、(一二)紀伊守國に下りなどして、(一三)女どちのどやかなる夕闇の、道たど〳〵しげなるまぎれに、(一四)我が車にて率て奉る。(一五)この子も幼きを、いかならむと思せど、(一六)然のみもえ思しのどむまじかりければ、然

空蟬

梗概

㊀ 源氏失望して中川より歸る。空蟬の煩悶。㊁ 源氏三度中川の家に宿る。空蟬が其繼娘軒端荻と碁を圍めるを隙見す。源氏の眼に映じたる二人の對照。㊂ 小君謀りて源氏を空蟬の室に導く。源氏人違へして軒端荻と契る。竊に空蟬の脫捨の衣を取る。㊃ 物に紛れて源氏邸に歸る。老婆の人違、㊄ 小君を介して空蟬へ文を遣る。空蟬小君を叱る。軒端荻の疑惑。空蟬の煩悶。

㊀

寢られ給はぬまゝに、源「我はかく人に憎まれても(一)ならはぬを、今宵なむ、始めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥かしうて、ながらふ(二)まじくこそ思ひなりぬれ」など宣へば、(三)涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの細く小きほど、髮のいと長からざりしけはひの(四)似かよひたるも、(五)思ひなしにや、あはれなり。(六)強にかゝづらひたどり寄らむも、人わろかるべく、まめやかにめざましと思し明しつゝ、例のやうにも(七)宣ひ纏はさず、夜ふかう出で給へば、この子は、い(八)

㊀ 源氏失望して中川より歸る
(一) 嫌はれた事も無いのに
(二) 生きて居られぬ心地す
(三) 小君が
(四) 空蟬と小君と
(五) 氣のせいかしらん
(六) 無理にたどり付いて行くも人前惡く思ふ故
(七) 小君をもせがまず
(八) 氣毒に物足らず

(一)人には異なり強情を張り續けるが忌々しく
(二)是だから却つて熟くなるのであると
(三)勝手にしろ
(四)思切る事もならず
(五)其樣な處へ伴はんは畏多し
(六)小君が源を
(七)せめて汝でも我を見捨つるな
(八)小君が
(九)源が小君を

つゞけらるれど、(一)人に似ぬ心ざまの、なほ消えず立ちのぼりけるもねたく、(二)かゝるにつけてこそ心もとまれと、且は思しながら、めざましくつらければ、(三)さばれとおぼせど、(四)さもえ思しはつまじく、源「隠れたらむ所にだに、なほ率て往け」と宣へど、小君「いとむつかしげに閉し籠められて、人あまた侍るめれば、(五)かしこげに」と聞ゆ。(六)いとほしと思へり。源「(七)よし、あこだにな捨てそ」と宣ひて、御傍に臥せ給へり。若くなつかしき御有様を、嬉しくめでたし(八)と思ひたれば、つれなき人よりは、(九)なか〱あはれにおぼさるとぞ。

まれる故鄕ながら、たまさかにも待ちつけ奉らば、をかしうもやあらまし。強ひ
て思ひ(一)知らぬ顏に見消つも、いかに程(二)知らぬ樣に思すらむと、心(三)ながらも、胸痛
くさすがに思ひみだる。とてもかくても、今は(四)いふかひなき宿世なりければ、無
心に心づきなくて止みなむと思ひはてたり。君は、(五)いかにたばかりなさむと、(六)まだ
幼きを後めたく待ち臥し給へるに、(七)不用なるよしを聞ゆれば、あさましく珍らか
なりける(八)心の程を、源「身もいと恥かしくこそなりぬれ」と、(九)いといとほしき御氣
色なり。(一〇)とばかり物も宣はず、いたううめきて、憂しとおぼしたり。

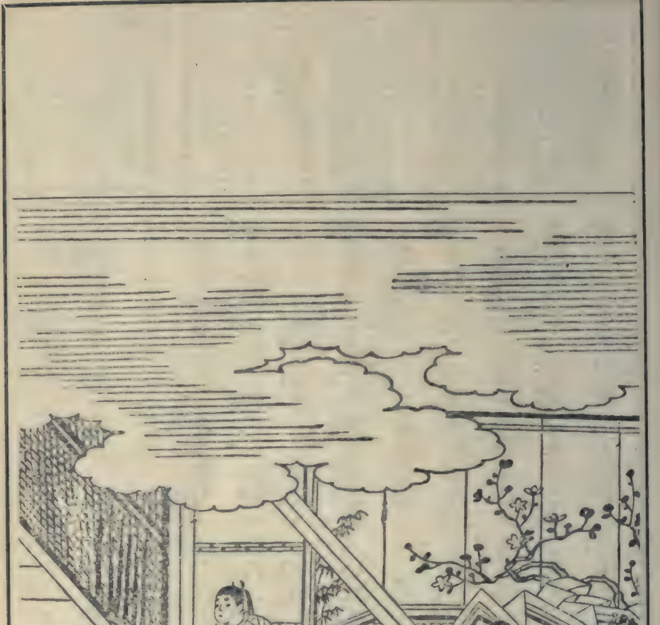
源「帚木(一一)のこゝろを知らでそのはらの(一二)道にあやなくまどひぬるかな

(一三)聞えむかたこそなけれ」と宣へり。(一四)女もさすがに、まどろまれざりければ、

空蟬「数(一五)ならぬふせ屋におふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

と聞えたり。小君いといとほしさに、(一六)ねぶたくもあらで惑ひ歩くを、(一七)人あやしと
見るらむとわび給ふ。(一八)例の人々はいぎたなきに、一所(一九)すゞろにすさまじくおぼし

(一)情を知らぬ樣にして御志を無にするも
(二)身の程知らぬ
(三)我がきめた事ながら
(四)詰らぬ運命に生れ付きし我故心無くわかりの惡い奴になつて仕舞はむ
(五)小君が甘くやるかしらんと
(六)幼少なるを氣遣ひて
(七)埒があかぬ由
(八)空蟬の心底を恨みて
(九)小君の眼中より寫し出せる也
(一〇)暫時
(一一)帚木は空蟬のことを指す
(一二)信濃の國園原伏屋といふ所に立木あり遠く望めば箒に似たり近づきて見ればそれらしき木もなしと古傳說也、あやなく惑ふ、あるにもあらず消ゆるなど皆此傳說に基く
(一三)怨むにも詞なし
(一四)空蟬に言遣れる也
(一五)卑しき身分といふ名に省みて隱れたり
(一六)源を氣毒に思ひて
(一七)文使をして
(一八)源がつらがる
(一九)源が面白からずして樣々思案すれど



(一)背尾して來る御志は
(二)人らしくもなき此身を御目にかけても
(三)此前の樣な歎を又つまらなく重ぬるかも知れず
(四)待つて居るも氣恥しければ
(五)源の御座所に
(六)療治の爲に
(七)間を隔てて我は居べし
(八)隱れ間に小君の知らぬ間に隱れる也
(九)源は初から其積で早く人を寢かして
(一〇)空蟬に
(一一)空蟬の所へ
(一二)空蟬の隱れたるを小君が恨みて
(一三)其樣な不都合な料簡を持つてよいものか
(一四)世間で凶事としてあるに
(一五)人を傍に置きてますらせて居ると申せ
(一六)夫なき身で亡き親の餘光失せぬ實家に居て稀にでも源を待受る事ならばさぞ趣あるべし

思したばかりつらむ程は、(一)淺くしも思ひなされねど、さりとてうちとけ、人げなき有樣を見え奉りても、(二)味氣なく、夢のやうにて過ぎにしなげきをまたや加へむ、(三)と思ひ亂れて、なほさて待ちつけ聞えさせむことのまばゆければ、(四)小君が出でて往ぬる程に、空蟬「いと氣近ければ(五)かたはらいたし。なやましければ、忍びてうち(六)叩かせなどもせむに、ほど離れてを」(七)とて、渡殿に、中將といひしが局したるかくれに、(八)移ろひぬ。さる心して、人疾くしづめて、御消息あれど、小君はえ尋ね(九)あはず。萬の所もとめありきて、渡殿に分け入りて、からうじてたどり來たり。(一〇)いとあさましくつらしと思ひて、小君「いかにかひなしと思さむ」(一一)と泣きぬばかり言へ(一二)ば、空蟬「斯くけしからぬ心ばへはつかふものか。(一三)幼き人のかゝる事言ひ傳ふるは、いみじく忌むなるものを」(一四)と言ひおどして、空蟬「心地惱ましければ、人々避けず、おさへさせてなむと聞えさせよ。(一五)あやしと誰も〳〵思ふらむ」と言ひ放ちて、心のうちには、いとかく品定まり(一六)ぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひと

(一)空蟬の心
(二)小君が過ちて文を人に見らるゝ事もあらば浮名を流さねばならず、源と浮名を立てらるゝには餘りに卑き身分と思へば
(三)源の如き人と文通するも身柄によつた物と
(四)源の御樣子は暗紛れ乍らも泣々ならず思はれて思出さぬでもなけれど
(五)色よい返事をしてもつまらぬ
(六)困り入つて居た樣子の氣毒さも
(七)思のはらし樣なく
(八)人目を忍びて
(九)紀伊守邸の如き人目多き所では都合の惡い處を見つかるかも知れず
(一〇)空蟬の爲にも氣毒なり
㊂源氏再び中川の家に宿る、空蟬の煩悶
(一一)然るべき愼の日を待ちて
(一二)方違の爲に宮中を出づる積りで
(一三)紀伊守の家へ
(一四)拙宅の泉水の光榮
(一五)斯く〳〵する積と
(一六)小君を
(一七)空蟬へは手紙にて內々知らせ置きし也

り。(一)されどこの子もいとをさなし、(二)心より外に散りもせば、輕々しき名さへとりそへむ身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、(三)めでたき事も我身からこそと思ひて、うちとけたる御答も聞えず。(四)ほのかなりし御けはひありさまは、實になべてにやはと、思ひいで聞えぬにはあらねど、(五)をかしきさまを見え奉りても、何にかはなるべき、など思ひかへすなりけり。君は思し怠る時の間もなく、心苦しくも戀しくも思し出づ。(六)思へりし氣色などのいとほしさも、(七)はるけむ方なく思しわたる。かろ〴〵しく(八)這ひまぎれ立ち寄り給はむも、(九)人目しげからむ所には、便なきふるまひや顯れむ、(一〇)人のためもいとほしく、と思しわづらふ。例の、內裏に日數經給ふころ、(一一)さるべき方の忌待ち出で給ひて、俄に(一二)まかで給ふまねして、道のほどより(一三)おはしましたり。紀伊守驚きて、(一四)遣水の面目とかしこまり喜ぶ。小君には、晝つかたより、(一五)斯くなむ思ひよれると宣ひ契れり。旦暮まつはし馴らし給ひければ、今宵もまづ(一六)召し出でたり。(一七)女もさる御消息ありけるに、

やましく、残なく宣ひ知らせてけりと思ふに、つらき事かぎりなし。空蟬「いで、お(一)よすけたる事は言はぬぞよき。(二)然はな參り給ひそ」とむつかられて、小君「召すにはいかでか」(三)とて參りぬ。紀伊守すき心に、(四)この繼母の有樣を、惜しきものに思ひて、追從し寄る心なれば、この子をも、(五)もてかしづきて率てありく。君召しよせて、源「昨日待ち暮しゝを、なほ相思ふまじきなゝめり」(六)と怨じ給へば、顏うち赤めて居たり。源「いづら」(七)と宣ふに、しかじかと申すに、源「いふかひなのことや。(八)あさまし」(九)とてまたも賜へり。(一〇)源「あこは知らじな。その伊豫の翁よりは先に見し人ぞ。されど、(一一)たのもしげなく頸細しとて、ふつゝかなる後見まうけて、かくあな(一二)づり給ふなゝめり。さりとも、あこは我子にてをあれよ。(一三)かのたのもし人は、(一四)行先短かりなむ」と宣へば、(一五)然もやありけむ、いみじかりけることかなと思へるを、(一六)をかしとおぼす。この子をまつはし給ひて、(一七)内裏にも率て參りなどし給ふ。わが御(一八)匣殿に宣ひて、(一九)裝束などもせさせ、誠に親めきてあつかひ給ふ。(二〇)御文はつねにあ

(一)ませた事は
(二)其ならもう行くな
(三)何でか參らざらん
(四)助平根性で
(五)大事にして連れ歩く
(六)歸り來らざりしは我が思ふ程に我を思はぬのぢやな
(七)返事は何處にあるぞ
(八)飛でもない
(九)再び文を渡したり
(一〇)お前は知るまいが我は今の夫伊豫介より前に空蟬とよい中なりし者ぞ
(一一)弱々しくて頼みにならぬと空蟬が我を見限りて伊豫介といふ頑丈な夫を拵へて
(一二)我を
(一三)我子になりて居よ
(一四)伊豫介は老年なれば
(一五)欺かれて子供心にさうかも知れぬと思ふ也
(一六)頭が
(一七)手離さず
(一八)衣服を裁る女官
(一九)小君の
(二〇)空蟬への

(一)貴族めきたり
(二)空蟬
(三)答へてよき事は
(四)空蟬へ文使の事を言出しにくし
(五)甘く得心させたり
(六)斯々の事ならんと大方悟りて飛でもない事とは思へども
(七)深い了簡もなく源の文を空蟬の許へ持來れば
(八)弟の手前も極り惡くて
(九)文で顏を隱す樣にして
(一〇)文の詞が
(一一)實際に逢ふ事は愚か物思に寢られずして目さへあはずして程經たり
(一二)「戀しさを何につけてか慰まん夢にも見えず寢る夜なければ」
(一三)ぼんやりして
(一四)不思議なる運命を持てる我身を
(一五)聢に君へとの仰なれば其樣には申上げられず
(一六)氣がもめて

なまめきたる様して、あて人(一)と見えたり。召し入れて、いとなつかしく語らひ給ふ。童心地に、いとめでたく嬉しと思ふ。(二)妹の君の事もくはしく問ひ聞き給ふ。然(三)るべきことは答へ聞えなどして、恥かしげに靜まりたれば、うち出でにくし。(四)されどいとよく言ひ知らせ給ふ。(五)斯る事(六)こそはと、ほの心うるも思の外なれど、幼き心地に深く(七)しもたどらず、御文をもてきたれば、女あさましきに涙も出で來ぬ。(八)この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに御文を面がくし(九)にひろげたり。いとおほくて、

　源「見し(一〇)夢をあふ夜ありやと歎くまに目さへあはで(一一)ぞ頃も經にける
(一二)寢る夜なければ」など、目も及ばぬ御書きざまに、目もきりふたがりて、(一三)心えぬ(一四)宿世うち添へりける身を思ひ續けて臥し給へり。またの日小君を召したれば、參るとて御かへり乞ふ。空蟬「かゝる御文見るべき人もなしと、聞えよ」と宣へば、うち笑みて、小君「違ふ(一五)べくも宣はざりしものを、いかゞは然は申さむ」といふに、心(一六)

て、(一)かの人の思ふらむ心のうちを、いかならむと心苦しく思しやる。(二)勝れたることはなけれど、(三)めやすくもてつけてもありつる中の品かな、(四)隈なく見集めたる人の言ひしことは實に、と思し合せられけり。この程は大殿にのみおはします。なほい(五)とかき絶えて、(六)思ふらむことのいとほしく御心にかゝりて、苦しく思し侘びて、紀伊守を召したり。源「かのありし(七)中納言の子は得させてむや。(八)らうたげに見えしを、身近く仕ふ人にせむ。(九)うへにも我奉らむ」と宣へば、紀「いと(一〇)かしこき仰事に侍るなり。姉なる人に(一一)宣ひ見む」と申すも、胸つぶれて思せど、源「(一二)その姉君は、朝臣の弟やもたる」紀「さも侍らず。この二年ばかりぞ(一三)かくて物し侍れど、(一四)親の掟に違へりと思ひ歎きて、心ゆかぬやうになむ聞き給ふる」源「あはれのことや。(一五)よろしく聞えし人ぞかし。まことに美しや」と宣へば、紀「(一六)けしうは侍らざるべし。(一七)もてはなれて疎々しう侍れば、世のたとひにてむつれ侍らず」と申す。さて五六日ありて、この子率て參れり。(一八)こまやかにをかしとはなけれど、

(一)空蟬
(二)空蟬に對する源の心中の批評
(三)見苦しからず取りよそへる
(四)經驗を積みたる
(五)空蟬との中絶えて
(六)空蟬が
(七)小君を我にくれぬか
(八)可愛く見えたから
(九)宮仕へも我世話してさすべし
(一〇)有難き
(一一)空蟬に相談して見ん、「宣へ見む」の誤ならん
(一二)空蟬に子があるか
(一三)父の壻になりて居れど
(一四)父は宮仕に出す積なりしに其に違ひたれば空蟬自身は今の身上を面白からず思ひ居る樣也
(一五)可成評判よかりし
(一六)醜くはあらじ
(一七)繼母には近づかぬものになり居る故疎遠にして睦しくせず
(一八)事實に美しくはなけれど

何とも覺えず、常はいと(一)すぐ〳〵しく心づきなしと思ひあなづる、(二)伊豫の方のみ思ひやられて、(三)夢にや見ゆらむと、そら恐しくつゝまし。

空蟬　身の憂さを歎くにあかであくる夜はとり重ねてぞ音もなかれける

ことゝ明くなれば、障子口まで送り給ふ。内も外も人さわがしければ、引きたて(四)て別れ入り給ふほど心細く、(五)隔つる關と見えたり。御直衣など著給ひて、南の(六)勾欄にしばしうちながめ給ふ。西面の格子(七)そゝきあげて、人々覗くべかゝめり。簀子の中の程にたてたる(八)小障子のかみより、ほのかに見え給へる御有樣を、身にしむばかり思へる、(九)すき心どもあゝめり。月は有明にて、光をさまれるものから、(一〇)影さやかに見えて、(一一)なか〳〵をかしき曙なり。何心なき空の氣色も、たゞ(一二)見る人から、艶にも凄くも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、言傳やらむよすがだに無きをと、顧みがちにて出で給ひぬ。

(一三)殿にかへり給ひても、頓にもまどろまれ給はず。又あひ見るべき方なきを、まし

(一)朴直にて氣がきかぬ
(二)伊豫に居る夫
(三)夫の夢に此事が見えはせぬか
(四)十分に
(五)源が空蟬を
(六)緣先の手すり
(七)さゞめき
(八)襖張りの衝立なるべし
(九)浮氣女ども
(一〇)月の形はつきりとの詞なり
(一一)源氏の心になりて
(一二)見る人の心次第にて
㊀源氏小君を介して空蟬に文通す
(一三)左大臣邸

假(一)なる浮寢の程を思ひ侍るに、類なく思う給へ惑はるゝなり。よし今は見きとな(二)かけそ」とて、思へる樣、實にいと理なり。疎かならず契り慰め給ふ事多かるべし。鷄も鳴きぬ。人々起き出でて、「いといぎたなかりける(三)夜かな。御車ひき出でよ」などいふなり。守も出で來て、「女などの御方違こそ。(四)夜深く急がせ給ふべきかは」などいふ。君は、又かやうの序あらむ事もいと難し、さしはへてはい(五)かでか、御文なども(六)通はむことのいとわりなきを思すに、いと胸いたし。奥の中(七)將も出でて、いと苦し(八)がれば、ゆるし給ひても、又引きとゞめ給ひつゝ、源「いか(九)でか聞ゆべき。(一〇)世に知らぬ御心のつらさもあはれも淺からぬ世の思出は、さまざま珍らかなるべき例かな」とて、うち泣き給ふ御氣色いとなまめきたり。鷄もしばしば鳴くに、心あわたゞしくて、

源 つれなさを恨みもはてぬしのゝめにとり(一一)あへぬまでおどろかすらむ

女、身の有樣を思ふに、いと(一二)つきなくまばゆき心地して、めでたき(一三)御もてなしも

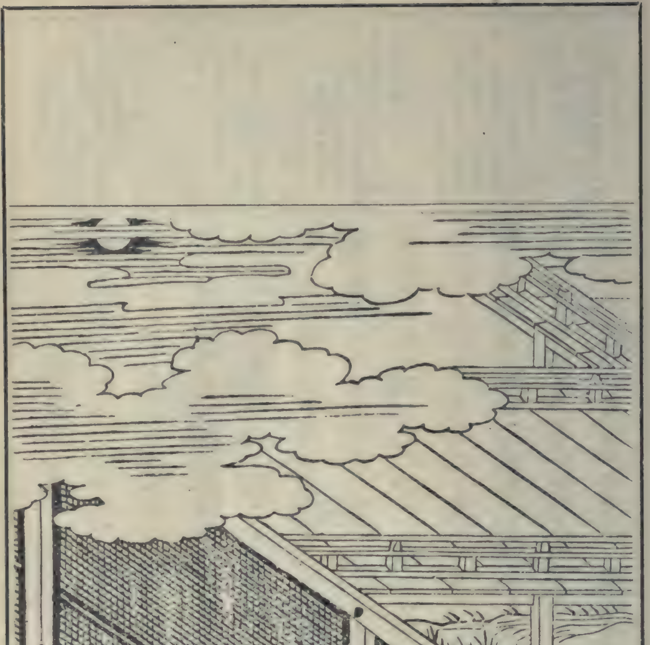
(一)形ばかりの假臥
(二)古今集「それをだに思ふ事とて我宿を見きとないひそ人の聞かくに」
(三)ぐつすり寢込みたる夜哉
(四)女の許からならば急ぐも當然なれども
(五)わざ〳〵は何でか來らるべき
(六)文通も甚だむづかしきを思へば
(七)召使
(八)空蟬の室に在るを迷惑がる故空蟬を放ち還しても
(九)何として便りをすべき
(一〇)類稀なる君のつらさと情とは將來珍らしき思出となる事多かるべし
(一一)取る物も取りあへぬ程に、取りと鷄とをかけたり
(一二)不似合に氣恥かしき
(一三)源の優美なる風采も目に入らず

にならはぬを、さるべきにや、實にかくあばめられ奉るも理なる心惑ひを、自らも怪しきまでなむ」など、まめだちて萬に宣へど、(一)いと類なき御有樣の、いよいようち解け聞えむ事侘しければ、(二)すくよかに心づきなしとは見え奉るとも、さる方の(三)いふかひなきにて過してむ、と思ひて、つれなくのみもてなしたり。人がらの(四)たをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。誠に(五)心やましくて、あながちなる(六)御心ばへを、(七)言ふ方なしと思ひて、泣く樣などいと哀なり。(八)心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからまし、とおほす。(九)慰め難く憂しと思へれば、源「など斯く、(一〇)疎ましきものにしも思すべき。(一一)覺えなき樣なるしもこそ、契ありとは思ひ給はめ。(一二)無下に世を思ひ知らぬやうに、おほほれ給ふなむいとつらき」と怨みられて、空蟬「(一三)いとかくうき身の程の定まらぬ、ありしながらの身にて、かゝる御心ばへを見ましかば、(一四)あるまじきわれだのみにて、(一五)見直し給ふのちせもやとも、思ひ給へ慰めましを、いと斯う

(一)空蟬の心
(二)ぶつきら樣ないやな奴とは思はれても
(三)情知らずの張合のなき者になりて
(四)よわ〳〵しきに
(五)氣が氣でなく
(六)源の
(七)言樣なくつらしと
(八)源の心
(九)空蟬が源を
(一〇)我を
(一一)不意に逢ふこそ宿緣といふもの
(一二)丸て戀知らぬ者の樣に途方にくれるとは聞えぬ仕方
(一三)夫を定めぬ昔の身分にて
(一四)けしからぬ己惚ではあれど
(一五)今は眞に愛せられずとも御心の直りて情をかけらるゝ折もあらんと自ら慰めて御心に從ふべきを

（一）言ひ樣なし
（二）相手が源氏故手の出し樣なし
（三）並の相手でも餘り荒立てるは考物なり
（四）中將が跡につきて來れど
（五）動もなくて、源氏は平氣で
（六）曉に空蟬の迎にこゝへ來れ、中將にいふ也
（七）空蟬は中將が何と思ふならんと思ふのみにても死ぬほど術なき故
（八）源が氣の毒に思へど
（九）女が感動する位に
（一〇）如何に卑しき私なりとて斯う見くびり給へる御心を深き御情とは受取れませぬ
（一一）私の如く主ある女は主ある女として取扱つて戴かねばなりませぬ
（一二）無理やりなる仕方を
（一三）主あると主なきとの區別
（一四）何の區別も知らぬ我を普通の浮氣男と一視せらるゝは殘念なり

ましう、こは如何なる事ぞと思ひ惑はるれど、（一）聞えむかたなし。（二）並々の人ならばこそ、あらゝかにも引きかなぐらめ。（三）それだに人の數多知らむはいかゞあらむ。心もさわぎて（四）慕ひ來たれど、（五）どうもなくて、奥なる御座に入り給ひぬ。障子をひきたてて、（六）源「曉に御迎にものせよ」と宣へば、（七）女はこの人の思ふらむ事さへ、死ぬばかりわりなきに、流るゝまで汗になりて、いと惱ましげなる、（八）いとほしけれど、例の何處より取う出給ふ言の葉にかあらむ、（九）あはれ知らるばかり、情々しく宣ひ盡すべかめれど、猶いとあさましきに、空蟬「現とも覺えずこそ。（一〇）數ならぬ身ながらも、思しくだしける御心の程も、いかゞ淺くは思う給へざらむ。（一一）いとかやうなる際は、きはとこそ侍るなれ」とて、（一二）斯く押したち給へるを、深く情なく憂しと思ひ入りたる樣も、實にいとほしく心恥かしきけはひなれば、源「（一三）そのきはきはをまだ思ひ知らぬ初事ぞや。（一四）なかなかおしなべたる列に、思ひなし給へるなむうたてありける。おのづから聞き給ふやうもあらむ、あながちなるすき心は更



ある心地して」と宣ふを、(一)ともかくも思ひわかれず、物におそはるゝ心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず。源「(二)うちつけに深からぬ心の程と見給ふらむ、理なれど、年頃思ひわたる心のうちも、聞え知らせむとてなむ、かゝる折を待ち出でたるも、さらに淺くはあらじと思ひなしたまへ」と、いとやはらかに宣ひて、鬼神も荒立つまじき御けはひなれば、(三)はしたなく、「此處に人」ともえのゝしらず。心地はたわびしく、(四)あるまじき事と思へばあさましく、空蟬「人違にこそ侍るめれ」といふも(五)息のしたなり。(六)消え惑へるけしき、いと心苦しく(七)らうたげなれば、をかしと見給ひて、源「(八)違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめい給ふかな。(九)すきがましき樣にはよに見え奉らじ。思ふ事少し聞ゆべきぞ」とて、(一〇)いとちひさやかなれば、かき抱きて、障子のもとに出で給ふにぞ、(一一)もとめつる中將だつ人來あひたる。「やゝ」と(一二)宣ふに、怪しくて(一三)探り寄りたるにぞ、いみじくにほひ滿ちて、顔にも熏りかゝる心地するに、(一四)思ひよりぬ。あさ

(一)空蟬は途方にくれて
(二)突然にて出來心と思はるべけれど實は年來の願にて斯る機會を待ち居たるなれば淺き心に非ずと推し給へ
(三)輕卒にわめかず
(四)けしからぬ事
(五)幽に物いふ形容
(六)途方に暮れたる樣子
(七)可憐
(八)心得えあり違ふ筈はなきに空とぼけらるとは案外なり
(九)手を出す事は決してせじ
(一〇)空蟬は小柄なれば
(一一)空蟬の探したる中將の君らしき人
(一二)源氏が
(一三)中將が
(一四)事情を中將が推量したる也

(一)源氏を譽むる也
(二)衣の中に
(三)憎らし、もつと熱心に我事を尋ぬればよいに
(四)我は
(五)源は同じ寢殿の東面空蟬は北面に臥し、間の出入口は障子卽唐紙にて隔てたる也
(六)召使の女
(七)寢殿とその外側の廂の間との界なる敷居、之を界にて寢殿は高く廂の間は低し
(八)唐紙をあけても直には見えぬ樣にしたる也
(九)空蟬の
(一〇)小さいなりで
(一一)小うるさいと思へど、空蟬の心
(一二)源氏が空蟬のかけたる衣を
(一三)我が呼んだ中將の君
(一四)源氏の現官中將也
(一五)竊に君を思へる其驗ある心地して參りたり

もうとゝ聞き給ひつ。小君「廂にぞ大殿籠りぬる。音に聞きつる御有樣を見奉りつる。(一)實にこそめでたかりけれ」と密にいふ。空蟬「晝ならましかば、覗きて見奉りてまし」と、ねぶたげにいひて、(二)顏ひき入れつる聲す。(三)ねたう、心とゞめても問ひ聞けかしと、味氣なくおぼす。小君「(四)まろは端に寢侍らむ。あなくらし」とて、火かゝげなどすべし。女君は、唯この(五)障子口すぢかひたる程にぞ臥したるべき。空蟬「(六)中將の君はいづくにぞ。人氣遠き心地して、物恐ろし」といふなれば、(七)長押の下に人々臥して答すなり。女房「下屋に湯におりて、たゞ今參らむと侍る」といふ。皆靜まりぬるけはひなれば、かけがねを試に引きあけ給へれば、彼方よりは鎖さゞりけり。(八)几帳を障子口に立てて火はほの暗きに、見給へば、唐櫃だつ物どもを置きたれば亂れがはしき中を、分入り給ひて、(九)けはひしつる處に入り給へれば、たゞ一人(一〇)いとさゝやかにて臥したり。(一一)生煩はしけれど、(一二)上なる衣を押しやるまで、(一三)もとめつる人とおもへり。源「(一四)中將召しつればなむ、(一五)人知れぬ思ひのしるし

らむな」紀「いかゞは。私の主とこそは思ひて侍るめるを、すきぐ〜しき事と、(二)なにがしより始めてうけひき侍らず」など申す。源「さりとも、まうとたちのつき(三)づきしく今めきたらむに、おろしたてむやは。かの介は、いとよしありて、氣色(四)ばめるをや」など物語し給ひつゝ、源「何方にぞ」(五)紀「皆下屋におろし侍りぬるを、えや罷りおりあへざらむ」(六)と聞ゆ。醉ひ進みて、皆人々簀子に臥しつゝしづまり(七)ぬ。

君は解けても寢られ給はず、いたづらぶしと(八)思さるゝに、御目覺めて、この北の障子の(九)彼方に人のけはひするを、此方や、斯くいふ人の(一〇)隱れたる方ならむ、哀や、と御心とゞめて、やをら起きて立ち聞き給へば、ありつる子の(一一)聲にて、小君「ものけたまはる。(一二)何處におはしますぞ」と、かれたる聲のをかしきにていへば、空蟬「こ(一三)こにぞ臥したる。客人は寢給ひぬるか。(一四)いかに近からむとおもひつるを、(一五)されど氣遠かりけり」といふ。寢たりける聲のしどけなき、いと能く似通ひたれば、い(一六)

(一)勿論
(二)のろい事と思ひて私始め不服に候
(三)汝等は似合はしき當世男なれば伊豫介も用心して空蟬を大事にかけ汝等に親しませぬならん
(四)品ありて氣取つて居る
(五)女どもは
(六)狹ければ皆下りる譯にもゆかぬならん
(七)簀

十　源氏側を空蟬に通ず
(八)つまらぬ獨寢
(九)障紙
(一〇)空蟬
(一一)前に居た子
(一二)物承るの約、もしもし
(一三)空蟬を尋ぬる也
(一四)源氏
(一五)狹き家なれば我と源氏との間は如何に近からんと心配したるに
(一六)年には拘らず男を兄女を妹といひし也

(一)童の中には宮中に出仕し居て源氏の見知れるもあり
(二)伊豫守に同じ、介ともいふ也
(三)上品にて
(四)小君といふ
(五)空蟬の父
(六)父が愛せしを幼くして父に死なれ
(七)學問なども出來そうにて
(八)宮中の出仕は望なれども心に任せず
(九)此小君の姉が汝の繼母か
(一〇)帝も空蟬の事は御承知にて、彼は後宮に仕ふべき由噂ありしがどうなりしかと仰ありき
(一一)老成らしく
(一二)心ならず父の後妻になりしなり
(一三)女の運は殊更定まらぬがいぢらしい
(一四)妻を大事にするか定めし主人の樣に思つて居るならん

うにて大殿ごもれば、人々もしづまりぬ。主人の子どもをかしげにてあり。童な(一)る、殿上のほどに御覽じ馴れたるもあり、伊豫介(二)の子もあり。數多ある中に、いとけはひあて(三)はかにて、十二三(四)ばかりなるもあり。いづれかいづれなど問ひ給ふに、紀「これは故(五)衞門督の末の子にて、いとかなしく(六)し侍りけるを、幼き程に後れ侍りて、姉なる人のよすがにかくて侍るなり。(七)才などもつき侍りぬべく、けしうは侍らぬを、殿(八)上なども思う給へかけながら、すが〳〵しうはえ交らひ侍らざンめる」と申す。源「あはれの事や。(九)この姉君や、まうとの後の親」紀「さなむ侍る」と申すに、源「似げなき親をもまうけたりけるかな。(一〇)うへにも聞し召しおきて、宮仕に出し立てむと漏らし奏せし、如何になりにけむと、いつぞや宣はせし。世こそ定めなきものなれ」など、いとおよずけ(一一)宣ふ。紀「(一二)不意にかくて物し侍るなり。世の中といふもの、さのみこそ今も昔も定まりたる事侍らね。中についても女の(一三)宿世は浮びたるなむ哀に侍る」など聞えさす。源「伊豫介は(一四)かしづくや。君と思ふ

(一)おも屋
(二)ひどく眞面目らしくして疾くに立派な御本妻のあるは物足らぬ樣也
(三)相當な隱れ遊びは隨分なされる
(四)藤壺に對する戀
(五)聞付けたる時には如何なる心持ならん
(六)珍らしき事もなければ半にて竊聞をやめたり
(七)宮は桐壺帝の弟、姫君は朝顏の齋院、此姫君に源氏が歌を捧へて朝顏を贈りし也
(八)うろ覺えにて
(九)しだらくらしく
(一〇)空蟬を見たらば想像には劣るべし
(一一)源氏に奉れり
(一二)とばりは幕の類、催馬樂の歌によりて戯れたる也。我家はとばり帳をもかけたれば、大君來ませ聟にせん、御肴は何よけん、鮑榮螺か、かせよけんに
(一三)大君來ませ聟にせんといふ位の用意なかにては主人の不調法ならん
(一四)うたゝ寢する樣にて寢給へば

ろしつれば、火燃したる透影、障子の紙より漏りたるに、やをら寄り給ひて、見ゆやとおぼせど、隙しなければ暫し聞き給ふに、この近き母屋(一)に集ひ居たるなるべし、うち囁き言ふ事どもを聞き給へば、我が御うへなるべし。女房「(二)いといたうまめだちて、まだきに、やむごとなきよすが定まり給へるこそさう〴〵しかゝめれ。されど(三)さるべき隈には、よくこそ隱れありき給ふなれ」などいふにも、(四)おぼす事のみ心にかゝり給へれば、まづ胸潰れて、かやうの序にも、人の言ひ漏さむを、(五)聞きつけたらむ時など覺え給ふ。(六)異なる事なければ、きゝさし給ひつ。式部(七)卿の宮の姫君に、朝顏奉り給ひし歌などを、少し(八)ほゝゆがめて語るも聞ゆ。(九)くつろぎがましく、歌誦じがちにもあるかな。なほ見劣り(一〇)はしなむかしと思す。守出できて、燈籠かけそへ、火あかくかゝげなどして、御菓子ばかりまゐれり(一一)。源「(一二)とばり帳もいかにぞは。(一三)さる方の心もとなくては、めざましき主人ならむ」と宣へば、紀「何よけむとも得承らず」と畏まりて侍ふ。端つ方の御座に、(一四)假なるや



すべきを、唯(一)その几帳の後に」と宣へば、人々「實によろしき御座所にも」とて、人走(二)らせやる。いと忍びて、殊更にこと〴〵しからぬ所をと、急ぎ出で給へば、大臣にも聞え給はず(三)御供にも睦まじき限りしておはしましぬ。守、「俄に」と侘ぶれど(四)、人も聞き入れず(五)寢殿の東面拂ひあけさせて、假初の御しつらひ(六)したり。水の(七)心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とどめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき蟲の聲々聞え、螢繁く飛びまがひてをかしき程なり。人々、(八)渡殿より出でたる泉にのぞき居て酒飲む。(九)主人も肴もとむと、こゆるぎの急ぎありく程、君はのどやかに眺め給ひて(一〇)かの中の品に取り出でていひし、この列ならむかしと思し出づ。(一一)思ひあがれる氣色に聞きおき給へる女なれば、ゆかしくて、耳留め給へるに、この西面にぞ人のけはひする。(一二)衣の音なひはら〳〵として、若き聲どもにくからず。さすがに忍びて物言ひ笑ひなどするけはひ、(一三)殊更びたり。格子はあげたりけれど、守、心なしとむづかりて、お

(一)汝が母の几帳の後に褥を敷かせ
(二)紀伊の家へ使をやる
(三)断らず
(四)迷惑がれど
(五)正殿
(六)飾付
(七)泉水の趣など相應に面白く
(八)廊下の下より流れ出る泉を見おろして
(九)風俗歌の詞によりて文を綴なせり、「玉垂の小瓶を中にすゑて主はいもとや肴求めにこゆるぎの磯に若菜刈摘げに」
(一〇)馬頭等が中流といひしは此邊ならん
(一一)かねて噂は氣位高き女なりと聞き居たれば
(一二)着物の音がさらさらと聞えて
(一三)わざとする様なり

(一)迷惑がり
(二)やかましい
(三)天一神、此家は内裏より恰も天一神遊行の方角に當りたれば此家へ御出は避くべかりし也
(四)同じ方角なれば
(五)方違へに行く處なし
(六)寢給へり
(七)源氏に
(八)京極川の近處にある家
(九)太儀なれば牛をかけたる儘車を横付けにすべき心安き處へ行きたし
(一〇)忍びて通ふ所は、源の心を推測していふ
(一一)妻の家へ
(一二)天一神を理由にしてやめて他の女の處へ行くは氣毒と思ふならん
(一三)方違に行くぞと
(一四)紀伊守の父
(一五)父の妻(紀伊守には繼母)空蟬が紀伊守の家に來てる也
(一六)竊に心配する

しまして、御物語聞え給ふを、暑きにとにがみ(一)給へば、人々わらふ。源「あなかま(二)」とて、脇息に寄りおはす。いと安らかなる御振舞なりや。暗くなるほどに、女房「今宵中神(三)、内裏よりは塞がりて侍りけり」と聞ゆ。源「然かし、例も忌みたまふ方なりけり。二條院にも同じ(四)すぢにて、いづくにか違へむ(五)、いと悩しきに」とて大殿(六)籠れり。いと悪しきことなりと、これかれ聞ゆ。女房「紀伊守にて親しく(七)仕う奉る人の、中川(八)のわたりなる家なむ、この頃水せき入れて、涼しきかげに侍る」と聞ゆ。源「いとよかゝなり。(九)なやましきに、牛ながら牽き入れつべからむ所を」と宣ふ。忍び〳〵(一〇)の御方違所は、數多ありぬべけれど、久しく程經て(一一)渡り給へるに、方塞げて(一二)ひき違へ外ざまへと思さむは、いとほしきなるべし。紀伊守に仰言賜(一三)へば、承り(一四)ながら退きて、紀「伊豫守(一五)の朝臣の家に愼む事侍りて、女房なむ罷りうつれる頃にて、狹き所に侍れば、無禮げなることや侍らむ」と、下に歎く(一六)を聞き給ひて、源「その人近からむなむ嬉しかるべき。女遠き旅寢は物恐ろしき心地

(一)言はずに過す
(二)源氏
(三)藤壺
(四)藤壺
(五)珍らしく思ふにつけても
(六)何と議論の決着する所なくして
⑨源氏伊豫介の中川の家に宿す
(七)内裏にのみ居ても男に氣毒なれば
(八)源氏が左大臣の家に
(九)源氏の感じ
(一〇)葵上の樣子もすつきりと上品に
(一一)馬頭らが棄て難しと論定せし當になる世話女房ならんとは思へども
(一二)折目正しき樣子
(一三)打とけにくう
(一四)物足らず
(一五)葵上方の侍女
(一六)只の女中ならぬ
(一七)葵方の人々が
(一八)男
(一九)源氏がしだらくにして居る故遠慮して

すべて心に知れらむ事をも、知らず顏にもてなし、言はまほしからむ事をも、一つ二つのふしは、過す(一)べくなむあゝべかりける」などいふにも、君(二)は人ひとり(三)の御有樣を、心の中に思ひ續け給ふ。(四)これは、足らず又さし過ぎたる事なく物し給ひけるかなと、(五)ありがたきにもいとゞ胸塞がる。(六)何方によりはつともなくて、はてはては怪しき事どもになりて、明し給ひつ。

辛うじて、今日は日の氣色も直れり。(七)かくのみ籠り侍ひ給ふも、大殿の御心いとほしければ(八)まかゝで給へり。(九)大方の氣色、(一〇)人のけはひもけざやかに氣高く、亂れたる所交らず、猶これこそは、(一一)かの人々の棄て難く取り出でし、まめ人には賴まれぬべけれと思すものから、あまり麗しき(一二)御有樣の、とけ(一三)難く恥かしげにのみ思ひしづまり給へるを、(一四)さうぐ\しくて、(一五)中納言の君、中務などやうの、(一六)おしなべたらぬ若人どもに、戲事など宣ひつゝ、暑さに亂れ給へる御有樣を、見るかひありと(一七)思ひ聞えたり。大臣(一八)も渡り給ひて、(一九)うち解け給へれば、御几帳隔てておは

じきどちの女文に、(一)半過ぎて書きすくめたる、(二)あなうたて、(三)この方のたをやかならましかばと見ゆかし。心地には(四)さしも思はざらめど、(五)自からこはぐ〵しき聲に讀みなされなどしつゝ、(六)殊更びたり。これは上臈の中にも、多かることぞかし。歌詠むと思へる人の、やがて(七)歌にまつはれ、をかしき故事をも、(八)初よりとりこみつつ、(九)すさまじき折々、讀みかけたるこそ(一〇)ものしきことなれ。(一一)返しせねば情なし、(一二)えせざらむ人ははしたなからむ。然るべき(一三)節會など、五月の節に急ぎ參るあした、(一四)何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根をひきかけ、九日の宴に、まづ(一五)難き詩の心を思ひめぐらし、暇なき折に、菊の露をかこちよせなど(一六)やうの、つきなきいとなみに合せ、然ならでも、おのづから實に後に思へば、をかしくも哀にもあゝべかりけることの、(一七)その折につきなく、目にもとまらぬなどを、推し量らず詠み出でたる、(一八)なかく〵心後れて見ゆ。萬の事に、(一九)などかはさてもと覺ゆる折から時々思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情立たざらむなむめやすかるべき。

(一)漢字勝ちにてのびのびして居らぬ也
(二)此手紙を見ての感
(三)此樣な時がやさしくあらばよかるべきに
(四)四角張りて書く積には非ざるべけれど
(五)漢語に
(六)氣取つて見える
(七)歌に拘束されて
(八)持て廻つて詠み込み
(九)飛でもなき時
(一〇)氣毒な
(一一)返歌
(一二)出來ぬ人は極り惡からむ
(一三)儀式
(一四)忙しさに歌など落着いて考へて居る暇なき處へ歌をよんで
(一五)重陽には御前にて詩を作る故其句を考ふるに忙しき處へ歌を贈り
(一六)場合不相應なる忙しき處へ持込み
(一七)場合不相應な歌一向感心せぬを氣がつかず
(一八)詠まぬより却て馬鹿げて見える
(一九)斯る場合には斯る事はせぬがよいと其場合場合を見分くる事が出來ぬ位ならなまじ趣を解するらしい顏をせぬがよい

(一) かこつけ
(二) 每夜逢ひ居る中ならば蒜の香を恥づることもあるまじきに
(三) 歌のよみ口早く
(四) 此樣なる女を女房に持つよりは鬼と差向ひでおとなしくして居る方がよい、恐ろしい事かな
(五) 疎み
● 右馬頭の結論
(六) 下司な奴は
(七) 憫然なものぢや
(八) 史記、前漢書、後漢書と詩經、書經、易經、禮記、春秋
(九) むつかしき理窟に通ずるなどは女らしからず厭ふべきなれども、女なりとて見聞につけて世事に通達する事無しとは限らず、然るにそうなると得てむつかしき手紙などを書きたがりて興を醒さする者也
(一〇) 才智ある
(一一) 漢字
(一二) むつかしき事はいはぬ女同士の文に

如何なることとつけ(一)ぞや、と言ひもはてず走り出で侍りぬるに、追ひて、

女「逢ふ(二)ことの夜をし隔てぬ中ならばひる間もなにかまばゆからまし

さすがに口疾く(三)などは侍りき」と、しづ〳〵と申せば、君だちあさましと思ひて、虚言とて笑ひ給ふ。君達「いづこの然る女かあるべき。(四)おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけき事」と、爪彈をして、言はむ方なしと、式部をあはめ(五)にくみて、君達「少しよろしからむ事を申せ」と責め給へど、式部「これより珍らしき事は候ひなむや」とて下りぬ。

馬頭「すべて男も女も、わろものは(六)、僅に知れる方の事を、殘なく見せ盡さむと、思へるこそいとほしけれ(七)。三史五經(八)の道々しき方を、(九)明に曉りあかさむこそ愛敬なからめ、などかは、女といはむからに、世にある事の公私につけて、無下に知らず至らずしもあらむ。わざと習ひまなばねども、少しもかど(一〇)あらむ人の、耳にも目にもとまる事、自然に多かるべし、さるまゝには、眞字(一一)を走り書きて、さるま(一二)



(一)得意になりたる顔
(二)常の居間
(三)屏風に几帳などを隔てゝ
(四)嫉妬する
(五)縁を切るによき機會
(六)女を嘲りていふ
(七)はしやぎて
(八)蒜
(九)身に臭氣ある故御目にかゝらぬ
(一〇)御目にはかゝらずとも
(一一)鹿爪らしく
(一二)手持無沙汰に思ひしにや
(一三)聞棄るも氣毒なりぐづ〳〵して居る場合でも無ければ
(一四)蒜の臭氣紛々たるにも弱りて
(一五)逃尻になりて
(一六)我來るを待ちはせずして蒜の香の失するまで來るなといふは其意を得ずと也、逢間に蒜をかけたり、衣通姫の歌、わが背子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも。

がら、鼻の邊をこづきて(一)語りなす。式部「さていと久しく罷らざりしに、ものの便に立ち寄りて侍れば、常の(二)うちとけ居たる方には侍らで、心やましき物越(三)にてなむ逢ひて侍りし。ふすぶる(四)にやと、をこがましくも、又よきふし(五)なりとも思ひ給ふるに、この賢人(六)はた、輕々しき物怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。聲もはやりか(七)にていふ樣、月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草藥(八)を服して、いと臭き(九)によりなむ、え對面賜はらぬ。まのあたりならず(一〇)とも、然るべからむ雜事等は承らむ、といと哀にうべ〳〵(一一)しく言ひ侍り。答に何とかは言はれ侍らむ、唯、承りぬ、とて、立ち出で侍るに、さう〴〵(一二)しくや覺えけむ、この香失せなむ時に立ちより給へ、と高やかにいふを、聞き(一三)過さむもいとほし、暫し立ち休らふべきに、はた侍らねば、實に(一四)そのにほひさへ、花やかに立ち添へるもすべなくて、逃目(一五)をつかひて、

式部(一六) さゝがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふがあやなさ

（一）結婚の盃したる也
（二）白氏文集秦中吟「主人會良媒、置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於姑」
（三）言ひ聞かせ
（四）心安く行きても居ず
（五）關係して居
（六）女が親切に世話をやき
（七）立派に字を書きて
（八）鹿爪らしく
（九）行かぬ譯にもゆかず
（一〇）女房として持つには
（一一）無學の夫が滅多な擧動をすると恥をかきそうに
（一二）其機に切つてまはす
（一三）世話役
（一四）役に立たぬ奴とは思ひながら氣に入りて縁のあるものあれば
（一五）埒のなきものは男で御座りますわい
（一六）釣出しをかけるを悟つては居れど

て、はかなき序に言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、盃もて出でて（一）、「我が二の（二）道謠ふを聞け」となむ、聞えごち（三）侍りしかど、をさ〳〵（四）うちとけてもまからず、かの親の心を憚りて、さすがにかゝづらひ（五）侍りし程に、いと哀に思ひ後見（六）、寝覺のかたらひにも、身の才つき、おほやけに仕う奉るべき、道々しき事を教へて、いと清げ（七）に、消息文にも、假字といふものを書きまぜず、うべ〳〵（八）しく言ひまはし侍るに、おのづからえ罷り（九）絶えで、その者を師としてなむ、わづかなる腰折文作る事など習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、なつかしき妻子（一〇）とうち頼まむに、無才（一一）の人、なまわろならむふるまひなど見えむに、恥かしくなむ見え侍りし。まいて君達の御爲には、さしもはか〴〵（一二）しく、したゝかなる（一三）御後見は、何にかはせさせ給はむ。はかなし（一四）口惜しと、かつ見つゝも、唯我が心につき、宿世のひくかた侍るめれば、男（一五）しもなむ、仔細なきものは侍るめる」と申せば、殘を言はせむとて、中將等「さて〳〵をかしかりける女かな」と賺（一六）い給ふを、心はえな

きたる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれと、終に思ひ定めずなりぬるこそ世の中や。（一）唯斯くぞとり〴〵に較べ苦しかるべき。（二）この樣樣のよき限をとり具し、（三）難ずべきくさはひまぜぬ人は、（四）何處にかはあらむ。吉祥（五）天女を思ひかけむとすれば、法氣づきくすしからむこそ、（六）又侘しかりぬべけれ」とて、皆笑ひ給ひぬ。

頭中將「式部が所にぞ氣色ある事はあらむ。（七）少しづつ語り申せ」と責めらる。式部「下（八）が下の中には、なでふ事か聞し召す所侍らむ」といへど、（九）頭の君、まめやかに遲しと責め給へば、何事を取り申さむと思ひめぐらすに、（一〇）式部「まだ文章の生に侍り（一一）し時、賢き女の例をなむ見給へし。かの馬頭の申し給へるやうに、公事をも言ひ合せ、私ざまの世に住まふべき心掟を、（一二）思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際なま〳〵の博士恥かしく、（一三）すべて口あかすべくなむ侍らざりし。（一四）それは、或博士の許に、學問などし侍るとて、（一五）罷り通ひし程に、主人の女ども多かりと聞き給へ

（一）撫子の女のあてにならぬも
（二）優劣を定め難かるべし
（三）全備し
（四）材料を持たぬ
（五）端嚴の相ある天女、帝釋天の姫
（六）佛くさく人間離れのして居るのがいやなるべし
㈦ 賢女に關する女の話、藤式部丞の實驗談
（七）趣ある
（八）下の下なる我々の間には
（九）頭中將
（一〇）申上げんと
（一一）大學の學生
（一二）公事の相談にも役に立ち私人としての處世の心得方につきての思慮も深く、學問も生中に學者はだしにて
（一三）夫たる私に
（一四）此女と關係したる例を語る也
（一五）私が



（一）つらき事をつらく思へりと男に見する事を恥でたりしかば
（二）無沙汰し
（三）消え隱れし也
（四）落ぶれて居るならん
（五）本妻の嫉妬に苦み心配する樣子が分かり居たらば
（六）迷ひ出さすまじ
（七）非常なる無沙汰もせず相當に待遇して長く世話する方法もあるべし
（八）子どもが可愛かりしかば
（九）顏には出さず心にのみ恨んで居るも知らず自分ばかり慣れて居たのも
（一〇）彼女もまだ思切れず時々は斯うなりしも人の爲ならず我から爲出したる事ぞと後悔に胸を焦す時もあらんと
（一一）末遂げずあてにならぬ
（一二）指喰女
（一三）心殘りする
（一四）探ろて見れば
（一五）疑くするといやになる事あるべし
（一六）本性の女の才ばしりたるも浮氣な缺點なり

ても、いと恥かしくつゝましげに紛らはし隱して、（一）つらきをも思ひ知りけりと見えむは理なき苦しき物と思ひたりしかば、心安くて、（二）又とだえ置き侍りし程に跡もなくこそかき消ちて（三）失せにしか。まだ世にあらば、（四）はかなき世にぞさすらふらむ。哀と思ひし程に、（五）煩はしげに思ひ纒はす氣色見えましかば、かくもあくがら（六）さざらまし。こよなきとだえ置かず　さるものにしなして、長く見るやうも侍りなまし。かの（七）瞿麥の（八）らうたく侍りしかば、いかで尋ねむと思ひ給ふるを、今にえこそ聞きつけ侍らね。これこそ宣ひつるはかなき例なゝめれ。（九）つれなくて、つらしと思ひけるをも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思なりけり。今やう〳〵忘れ行く際に、かれはた　えしも思ひ離れず　折々人やりならぬ胸こがるゝ夕もあらむと覺え侍り。（一〇）是なむ、（一一）え保つまじく頼もしげなき方なりける。されば彼のさがなものも、（一二）（一三）思ひいである方に忘れ難けれど、（一四）さし當りて見むには、煩はしく、（一五）ようせずばあきたき事もありなむや。（一六）琴の音のすゝめりけむ、かど〳〵しさも、す

侍りしか。さる憂き事やあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで、久しく侍りしに、無下に(一)思ひしをれて、心細かりければ、幼き(二)者などもありしに、思ひ煩ひて、瞿麥の花を折りて遣せたりし」とて涙ぐみたり。源「さてその文の詞は」と問ひ給へば、頭「いさや、異なる事もなかりきや。

女(三)山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよなでしこの露

思ひ出でしまゝに罷りたりしかば、(四)例のうらもなきものから、いと物思ひがほにて、荒れたる家の露繁きをながめて、蟲の音に(五)きほへる氣色、昔物語めきておぼえ侍りし。

頭 咲きまじる花は何れとわかねどもなほとこなつにしくものぞなき

(六)大和撫子をばさし置きて、まづ(七)塵をだになど親の心をとる。

女 うちはらふ袖も露けきとこなつに(八)あらし吹きそふあきも來にけり

と、(九)はかなげに言ひなして、(一〇)まめまめしく恨みたる樣も見えず。涙を漏しおとし

(一)女が
(二)中將との間に娘一人ありし也、玉かつらと名づく、後に物語あり
(三)我をば顧みずとも娘をば憐み給へ
(四)例の通り隔はなけれど
(五)泣く音を爭へる
(六)子どもの事はさしおきて
(七)古今集「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寢る床なつの花」
(八)本妻より威されたる事を謂へり
(九)謂もなき事の樣に
(一〇)眞底から

少し片笑みて、（一）さる事とはおぼすべかめり。源「（二）何方につけても、人わろく、はしたなかりける御物語かな」とて、うち笑ひ（三）おはさうず。

中將、「なにがしは、癡者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、（四）（五）さても見つべかりしけはひなりしかば、（六）ながらふべきものとしも、思ひ給へざりしかど、馴れ行くまゝに、（七）哀とおぼえしかば、たえ〴〵忘れぬものに思う給へしを、（八）さばかりになれば、うちたのめるけしきも見えき。（九）たのむにつけては、うらめしと思ふ事もあらむと、心ながら覺ゆる折々も侍りしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、斯うたまさかなる人とも思ひたらず、たゞ（一〇）朝夕にもてつけたらむ有樣に見えて、心苦しかりしかば、たのめ渡る事などもありきかし。親もなくいと心細げにて、さらば（一一）この人こそはと、事に觸れて思へるさまも、（一二）らうたげなりき。斯う（一三）のどけきに穩しくて、久しく罷らざりしころ、この見給ふる（一四）わたりより、情なくうたてある事をなむ、さる便ありて（一五）かすめいはせたりける。（一六）後にこそ聞き

（一）尤と
（二）何條共に醜くあさましき御咄
（三）おはします
㊧内氣なる女の話、頭中將の實驗談
（四）此女を夕顔と名づく後に物語あり
（五）續いて通ひてもよき程の器量なりしかば
（六）長く續かんとは思はざりしかど
（七）可愛くなりしかば
（八）大分偶女が續けば女は行末長くと思ふ樣子もありき
（九）夫と頼んで見れば恨めしく思ふべき事と思はるゝ行爲を我がするにも拘らず女は知らぬ顔にて我が無沙汰しても稀に來る人の樣にも待遇せず
（一〇）いつも表面をかざりて大人しくして居る樣に見えて
（一一）わが力になるは只頭中將一人よ
（一二）可憐
（一三）氣安きに油斷して
（一四）本妻、右大臣四女
（一五）其となく此女をおどしたる也
（一六）當時自分は知らざりし也



となまめきかはすに、にくゝ(一)なるをも知らで、又(二)箏の琴を(三)盤渉調に調べて、今めかしくかい弾きたる爪音、(四)かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむし侍りし。ただ(五)時々うち語らふ宮仕人などの、飽くまでざればみすきたるは、さても、見る限はをかしくもありぬべし。時々にても、さる所にて忘れぬよすがと思う給へむには、たのもしげなく(六)さし過いたりと心おかれて、その夜の事にことつけてこそ罷り絶えにしか。この二つの事を思う給へあはするに、若き時の心にだに、猶さやうに(七)もて出でたる事は、いと怪しくたのもしげなく覺え侍りき。今より後は、ましてさのみなむ思う給へらるべき。御心のまゝに、(八)折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶に(九)あえかなるすきぐしさのみこそ、をかしくおぼさるらめ。今さりとも、七年あまりの程に思し知り侍りなむ。(一〇)なにがしが賤しき諫にて、(一一)すきたわめらむ女には心おかせ給へ(一二)。あやまちして、(一三)見む人のため頑なる名をも立てつべきものなり」と誡む。中將、例のうなづく。君、

(一)馬頭が憎く思ふ
(二)十三絃の琴
(三)冬の調
(四)よき所はあれど氣恥かしき心地なり
(五)一時の浮氣で逢ふ宮女などならば此女の様に仇っぽくとも其場合面白からんが、稀に通ふにしても末長くと思ふ女としては頼もしからず
(六)仕方が餘り出來過ぎて居るといやになりて
(七)才を鼻にかける
(八)仇々しき女の喩
(九)きやしやなる
(一〇)私の意見に從ひて
(一一)浮氣でかためた女
(一二)其樣なる女は
(一三)男の爲に良くない噂の種をまく

(一)そは〳〵して
(二)渡殿の緣側
(三)變色し
(四)上人が
(五)催馬樂「飛鳥井に宿りはすべしかげもよし御もひも寒し御秣もよし」
(六)一口づつうたふ
(七)六絃の琴
(八)調子を合せおきたるを
(九)拙くはなし
(一〇)秋の調
(一一)當世風の
(一二)場合の諧和惡からず
(一三)通ふ男のありとは聞けど斯る折に尋來る親切者は外に無いでは無いか
(一四)つれなき男は訪ひ來ぬでは無いか
(一五)拙い歌ぢや
(一六)今一曲ひき給へ
(一七)戯れ
(一八)君の笛は木枯(別の女)に吹合す笛なれば我は君を引留むるを得ず君こそつれなき人よ

けむ、この男いたくすゞろぎて(一)、門近き廊(二)の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひ(三)渡りて、風にきほへる紅葉のみだれなど、あはれと實に見えたり。懐なりける(四)笛取り出でて吹きならし、かげもよし(五)、など(六)つゞしりうたふ程に、能く鳴る和琴(七)を調べとゝのへたりける(八)を、うるはしく搔き合せたりしほど、けしうはあらずかし(九)。律の調(一〇)は、女の物やはらかに搔きならして簾の內より聞えたるも、今めきたる(一一)物の聲なれば、淸く澄める月に折つきなからず(一二)。男いたく感でて、簾のもとに步み來て、庭の紅葉こそ、げに踏分けたる跡もなけれ(一三)、などねたます。菊を折りて、

殿上人　琴のねもきくもえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける(一四)

わろかめり(一五)、などいひて、今一聲聞きはやすべき人のある時に(一六)、手な殘い給ひそ、など、いたくあざれ(一七)かゝれば、女聲いたうつくろひて、

女(一八)　木がらしに吹きあはすめる笛のねをひきとゞむべき言のはぞなき

㊄浮氣女の話、右馬頭の實驗談
(一)女
(二)人品指喰女には立勝り
(三)卑しからず見え
(四)樂器を
(五)立派なものと思はれたり
(六)容貌も非難さる故
(七)指喰女を世話女房にして時々此女へ忍んで通ふ時分は
(八)可愛さうとは思ひながら死んだ者は仕方がないので此女の處へ度々行くと
(九)うるさく
(一〇)氣に入らぬ
(一一)中が絶えさうに
(一二)別の情夫
(一三)上人の車に馬頭が
(一四)馬頭の父か
(一五)今夜我を待つ筈の女あり、心がかりなれば其處へゆかんとて行くに我が女の家恰も道筋なれば其處にて下りたるに豈圖らんや此上人もこゝをさして來りし也
(一六)土塀の崩
(一七)立寄らずに行くも心なしと思ひて車より降りて立寄りたり

馬頭「さて又、同じ頃罷り通ひし所(一)は、(二)人も立ちまさり、心ばせ誠に(三)ゆゑありと見えぬべく、うち讀み走り書き、(四)搔い彈く爪音、手つき口つき、皆たどたどしからず、(五)見聞き渡り侍りき。(六)見るめも事もなく侍りしかば、このさがなものを、(七)うちとけたる方にて、時々かくろへ見侍りし程は、いとこよなく心とまり侍りき。この人亡せて後、いかゞはせむ、哀(八)ながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしば罷り馴るゝまゝに、少しまばゆく、(九)艶に好ましき事は、目につかぬ所(一〇)あるに、うち頼むべくは見えず、(一一)かれがれにのみ見せ侍る程に、(一二)忍びて心かはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内裏よりまかンで侍るに、ある上人來會ひて、(一三)この車にあひ乗りて侍れば、大納言の家(一四)に罷りとまらむとするに、この人のいふやう、(一五)今宵人まつらむ宿なむ、怪しく心苦しき、とて、この女の家はた過ぎぬ道なりければ、荒れたる崩(一六)より、池の水、かげ見えて、月だにやどれる住處を(一七)過ぎむもさすがにて、おり侍りぬかし。もとよりさる心を交せるにやあり

らず答へつゝ、唯（一）ありし心ながらは、えなむ見過すまじき、改めてのどかに思ひならばなむ、あひ見るべき、など言ひしを、さりともえ（二）思ひ離れじと、思ひ給へしかば、暫し懲らさむの心にて、しか改めむともいはず、いたく（三）つなびきて見せしあひだに、いといたく思ひ歎きて、（四）はかなくなり侍りにしかば、（五）戯れにくくなむ覺え侍りし。偏にうち（六）頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ、思ひ給へ出でらるゝ。はかなきあだ事をも、誠の大事をも、（七）言ひ合せたるにかひなからず、立田姫といはむにも（八）つきなからず、たなばたの手にも劣るまじく、（九）その方も具して（一〇）うるせくなむ侍りし」とて、いと哀と思ひ出でたり。中將、「その（一一）たなばたの裁ち縫ふ方をのどめて、長き契にぞ肖えまし。實に（一二）その立田姫の錦には、又如くものあらじ。はかなき花紅葉といふも、折節の色あひつきなく、はかぐヽしからぬは、露の榮なく消えぬるわざなり。（一三）さるによりかたき世ぞとは、定めかねたるぞや」と、（一四）いひはやし給ふ。

（一）今迄通りの御心ならば辛抱出來ぬ、穩なる心になりたらば元に戻らん
（二）思切ることは出來まじと
（三）ひきしろひて
（四）女が死にたる故
（五）興さめて
（六）世話女房としてはあの位にて十分と思はれる
（七）相談して相師甲斐あり
（八）不似合ならず
（九）染織裁縫の方なども十分出來て
（一〇）立派に
（一一）裁縫の方を少し減して、かはらぬ契の方を七夕にあやかりたかりし
（一二）其女の染色の伎倆は無類といふべし
（一三）さればこそ妻を定めかねて心に叶ふ女は得難き世ぞと誰もいふのぢや
（一四）咄に興を添へ

そゞろ寒くやと、思う給へられしかば、いかゞ思へると氣色（一）も見がてら、雪をうち拂ひつゝまかりて、（二）なま人わろく爪くはるれど、さりとも今宵日頃のうらみは解けなむ、と思う給へしに、火ほのかに壁に背け、（三）萎えたる衣どもの厚肥えたる、大なる籠（四）にうちかけて、（五）引き上ぐべき物の帷などうち上げて、（六）今宵ばかりやと待ちける樣なり。さればよと心おごりするに、正身（七）は無し。さるべき女房（八）どもばかりとまりて、親の家に、この夜さりなむ渡りぬる、と答へ侍り。（九）艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いとひたやごもりに情なかりしかば、あへなき心地して、さがなくゆるしなかりしも、我を疎みねと思ふ方の心やありけむと、（一〇）さしも見給へざりし事なれど、心やましきまゝに思ひ侍りしに、著るべき物、常よりも心留めたる色あひ爲樣、いとあらまほしくて、（一一）さすがに我が見捨ててむ後をさへなむ、思ひやり後見たりし、さりとも絶えて思ひ放つやうはあらじ、と思ひ給へて、とかく言ひ侍りしを、背きもせず、（一二）尋ね惑はさむとも隱れ忍びず、（一三）かゞやかしか

（一）指喰女の樣子も
（二）極り惡く尻込せらるれど
（三）常の著物のふくふくしたる
（四）薫物の香をたきしむる籠に中に香爐を置き籠をかぶせて之に衣をかくる也
（五）几帳の垂布
（六）今夜ごろは戸頭が來るならん
（七）本人は居らず
（八）召使の女
（九）女が歌も手紙もよこさずあくまで剛情なりしかばあつけなくて
（一〇）此句上の「心地して」の次に置きて見よ、今迄は然思はざりしかど賤のたつまくに、さては出來の根性惡き嫉妬はわざと愛想をつかされんの下心なりしかと思ひしに
（一一）我出行きたる後の世話をさへ燒きたるにて考ふれば、まさかに振棄てたるにはあらで
（一二）隱れて男に探ねさせんともせず
（一三）男に恥かゝする樣な嫉みもせず



(一)腹をすゑかねて
(二)夫の指にくひ付きたる也
(三)仰山にかこつけて
(四)官途の交際
(五)退隠する以上は再出世の機會なし
(六)指折り數へて從來のことを語れば君をつらしと思ふは忖度の事ばかりには非ず
(七)別れても言分はあるまじ
(八)今迄無數なりし君のつらさを心一つに納めて怺へ來りしに、終に之を機會に別れ果つるのか
(九)言ひあひ
(一〇)實際別れんとは思はねど
(一一)浮れ歩く
(一二)賀茂臨時祭(十一月酉日)の奏樂の下ならし內裏にてある也
(一三)樂頭等參集の人々退散する也
(一四)指喰の女の外に
(一五)無味なるべく
(一六)樣子を作り合ひ居る中の女の處は興味なかるべし

侍るに、女もえ(一)をさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せて(二)くひて侍りしを、(三)おどろおどろしくかこちて、かゝる疵さへつきぬれば、いよ〳〵(四)交らひをすべきにもあらず、(五)辱しめ給ふめる官位、いとゞしく、何につけてかは人めかむ、世に背きぬべき身なゝめり、など、いひ嚇して、さらば今日こそは限なゝめれ、と、この指を屈めてまかでぬ。

馬　(六)手を折りてあひ見しことを數ふればこれひとつやは君がうきふし

(七)え怨みじ、など言ひ侍れば、さすがにうち泣きて、

女　(八)うきふしを心ひとつにかぞへきてこやきみが手をわかるべきをり

など、(九)言ひしろひ侍りしかど、(一〇)誠には變るべき事とも思ひ給へずながら、日頃經るまで消息も遣さず、(一一)あくがれ罷りありくに、(一二)臨時の祭の調樂に、夜更けて、いみじう霙降る夜、(一三)これかれ罷り散るゝ所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方は、(一四)又なかりけり。內裏邊の旅寢も(一五)すさまじかるべく、(一六)氣色ばめるあたりは、

て、(一)この方も少しよろしくもなり、(二)さがなさもやめむと思ひて、(三)誠に憂しなども思ひて絶えぬべき氣色ならば、かばかり我に隨ふ心ならば思ひ懲りなむ、と思ひ給へて、殊更に情なくつれなき様を見せて、例の腹立ち怨ずるを、(四)かくおぞましくは、いみじき契深くとも、(五)絶えて又見じ。(六)かぎりと思はば、かく理なき物疑ひはせよ。行くさき長く見えむと思はば、つらき事ありとも、(七)念じてなのめに思ひなりて、(八)かゝる心だに失せなば、いと哀となむ思ふべき。(九)人並々にもなり、少しおとなびむに添へて、又並ぶ人なくなむあるべき、など、賢く教へたつるかなと思ひ給へて、(一〇)我たけくいひそし侍るに、少しうち笑ひて、(一一)萬にみだてなく、物げなき程を見過して、人數なる世もやと待つ方は、いとのどかに思ひなされて、心やましくもあらず、(一二)つらき心を忍びて、思ひなほらむ折を見つけむと、年月を重ねむあいなだのみは、いと苦しくなむあるべければ、(一三)互に背きぬべききざみになむある、と妬げにいふ時に、腹だたしくなりて、憎げなる事どもを(一四)言ひ勵まし

(一)嫉妬
(二)根性悪き
(三)我心から女を懲りて縁切にもなるべき様を示さば
(四)猜こわくては
(五)縁を切るべし
(六)最限の縁と思ふならば
(七)怺へてよい加減にひかへよ
(八)嫉妬さへ愼まば可愛がるべし
(九)我出世せば本妻にして威張らせん
(一〇)我強く言ひ過し
(一一)御身が微賤なる間を辛抱して出世を待つは苦にならず
(一二)君の無情を辛抱して當もなく直るを待つは
(一三)今が別るべき時機なり
(一四)端にかゝりて言ひ

とかく(一)紛れありき侍りしを、(二)物怨じをなむいたくし侍りしかば、(三)心づきなく、いと(四)斯からで、おいらかならましかばと思ひつゝ、あまりいと(五)許しなく疑ひ侍りしもうるさくて、かく數ならぬ身を(六)見も放たで、など斯くしも思ふらむと(七)心苦しき折々も侍りて、自然に(八)心をさめらるゝやうになむ侍りし。この女の(九)あるやう、もとより思ひ至らざりける事にも、いかで(一〇)この人の爲にはと、なき手をいだし、(一一)後れたるすぢの心をも、なほくち惜しくは見えじと思ひ勵みつゝ、とにかくにつけて、ものまめやかに後見、露にても、(一二)心に違ふ事は無くもがなと思へりし程に、(一三)進める方と思ひしかど、とかくに靡き來て(一四)なよびゆき、醜き容貌をも、(一五)この人に見や疎まれむと、理なく思ひつくろひ、(一六)疎き人に見えば、おもてぶせにや思はれむと、憚り恥ぢて、(一七)みさをにもてつけて、見馴るゝまゝに、(一八)心もけしうはあらず侍りしかど、唯この(一九)憎き方一つなむ、心をさめず侍りし。當時思ひ侍りしやう、斯う(二〇)あながちに隨ひ怖ぢたる人なゝめり、いかで懲るばかりのわざして、おどし

(一)外の女へ通ひ
(二)其不器量女が甚しく妬みしかば
(三)不快で
(四)此女が斯様でなく相當ならばよからんにと
(五)容赦なく
(六)愛想もつかさず
(七)氣の毒なる
(八)嫉妬をするといふ惡癖
(九)性情
(一〇)わが夫の爲と思へば出來ぬ事もし
(一一)不得手なる事につけても見下されじと勵み
(一二)夫の心に
(一三)勝氣なる女
(一四)柔和になり
(一五)夫に嫌はれじと心にかけて化粧し
(一六)他人に醜き態を示さば夫の恥になるべしと
(一七)不斷に注意して
(一八)惡くはなく
(一九)嫉妬の點だけが不體裁なりき
(二〇)此女は何處までも我を怖るゝ奴なり

書きたるにも、深き（一）事はなくて、此處彼處點長（二）にはしり書き、そこはかとなく（三）氣色ばめるは、うち見るに、かどかどしく（四）けしきだちたれど、なほ誠のすぢ（五）を細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて（六）見ゆれど、今ひとたび取り竝べて見れば、なほ實に（七）なむよりける。はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時にあたりて（八）氣色ばめらむ見る目のなさけをば、え賴むまじく思ひ給へ侍り。その初の事、すきずきしく（九）とも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中將いみじく信じて、頰杖をつきて對ひ居給へり。法の師の、世のことわり說き聞かせむ所の心地するも、且はをかしけれど、かゝるついでは、おのおの睦言（一〇）もえ忍びとゞめずなむありける。

馬頭「はやう（一一）、まだいと下臈に侍りし時（一二）、あはれとおもふ人侍りき。聞えさせつる（一三）やうに、容貌などいとまほに（一四）も侍らざりしかば、若き程のすきごこち（一五）には、この人をとまり（一六）にとも思ひとゞめ侍らず、よるべ（一七）とは思ひながら、さうざうしくて（一八）、

（一）格別修業はせず
（二）氣取りたる書方をしたる
（三）何處といはず氣取りたる
（四）立派にて樣子はよけれど
（五）眞の書法に叶ひて書きたるは
（六）一見しては見だてなけれど
（七）實力ある方に心が傾く
（八）或場合の氣取方の趣ある所などに打込みて其女を妻に持つなどは爲まじき事と思ふ
（九）浮氣らしくとも
（一〇）女に關したる內證話

四 嫉妬深き女の話、右馬頭の實驗談

（一一）曩て
（一二）慣れた女
（一三）前に申上げし如く
（一四）端麗
（一五）浮氣心
（一六）本妻
（一七）便りには
（一八）食ひ足らずして

すも、臨時の翫弄物の、その物と、(一)跡も定まらぬは、(二)そばつきざればみたるも、(三)實に斯うもしつべかりけりと、時につけつゝ、様をかへて、(四)今めかしきに目うつりて、をかしきもあり。大事にして、誠に麗しき、(五)人の調度のかざりとする、定まれるやうあるものを、難なくし出づる事なむ、なほ誠の物の上手は、(六)さまことに見えわかれ侍る。又(七)繪所に上手多かれど、(八)墨がきに選ばれて、次々に更に劣り優る差別(九)ふとしも見えわかれず。かゝれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海のいかれる魚のすがた、唐國の烈しき獸のかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、(一〇)おどろおどろしく作りたる物は、心に任せて、ひときは人の目を驚かして、(一一)實には似ざらめど、(一二)さてありぬべし。(一三)尋常の山のたゝずまひ水のながれ、目に近き人の家居有様、實にと見え、(一四)なつかしくやはらびたる形などを、静にかきまぜて、(一五)すくよかならぬ山の氣色、木深く、世離れて(一六)たゝみなし、(一七)氣近き籬の内をば、(一八)その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢殊に、わろものは及ばぬ所多かゝめる。手を

(一)形式の定まり居らぬ物は
(二)ひねつて洒落れたるも
(三)成程斯うやつてもよいわいと
(四)當世風なるに目がくれて
(五)表道具として飾る本式の定まり居る器物を
(六)手際がちがつて見える
(七)宮中の繪を司る役所
(八)彩色せずに畫くこと
(九)俄には見分けられず
(一〇)こわらしく
(一一)實物には
(一二)其にて差支なし
(一三)平凡の景を畫く時は巧拙の差別分明なり
(一四)穩かなる景色
(一五)嶮岨ならぬ
(一六)幾重も奥ある様に畫き
(一七)手近なる
(一八)結構布置の用意

（一）遣廻しに燒餅をやかば
（二）夫の愛情增るべし
（三）夫の心も妻次第で直るもの也
（四）一向構はずやくべき燒餅をもやかぬは氣安く愛すべきが如くなれども共ては男が增長する
（五）文選汎乎若不繋之舟
（六）氣に入りたる女の當にならぬ樣に思はるゝこそ
（七）女の心は如何にもあれ自分に過なくて辛抱させば
（八）女の不了簡を直し得ぬ筈なしと
（九）我心に
（一〇）氣長に我慢する
（一一）源氏の妻葵上
（一二）源氏
（一三）不快に氣ざわり也
（一四）身を動かす樣、得意の貌
（一五）擬して

も、憎（一）からずかすめなさば、それにつけて、哀も增り（二）ぬべし。多くは、我心（三）も、見る人からをさまりもすべし、あまり無下に（四）うちゆるべ見放ちたるも、心安くらうたきやうなれど、おのづから輕き方にぞ覺え侍るかし。繋（五）がぬ船の浮きたる例も、實にあやなし。然は侍らぬか」といへば、中將うなづく。頭「さしあたりて、をかしとも哀とも、心に（六）いらむ人の、たのもしげなき疑あらむこそ、大事なるべけれ。我心（七）あやまちなくて見過さば、さし（八）直してもなどか見ざらむと覺えたれど、それ然しもあらじ。ともかくも違ふ（九）べき節あらむを、のどやか（一〇）に見忍ばむより外に、ます事あるまじかりけり」といひて、我が（一一）妹の姫君は、この定にかなひ給へりと思へば、君（一二）のうちねぶりて詞まぜ給はぬを、さうぐし（一三）く心やましと思ふ。馬頭、物定の博士になりて、ひゞらぎ（一四）居たり。中將は、この理聞きはてむと、心に入れてあへしらひ居給へり。

馬頭「萬の事（一五）によそへておぼせ。木の道の工匠の、萬の物を、心に任せて作り出

ば、使ふ人、古御達など、(一)君の御心は哀なりけるものを、あたら御身を、などいふに、みづから(二)額髮をかき探りて、あへなく心ぼそければ、(三)うちひそみぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、(四)折々ごとにえ念じえず、悔しき事も多かゝめるに、佛もなか〱心ぎたなしと見給ひつべし。(五)濁にしめるほどよりも、(六)なまうかびにては、かへりて(七)悪しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。(八)絕えぬ宿世淺からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてあひ添ひて、その思ひいで恨めしき節あらざらむや。悪しくも善くもあひ添ひて、(九)とあらむ折も、かゝらむきざみをも、見過したらむ中こそ、契深くあはれならめ、(一〇)我も人も、後めたく心おかれじやは。又(一一)なのめにうつろふ方あらむ人を恨みて、氣色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。(一二)心はうつろふ方ありとも、見そめし志いとほしく思はば、(一三)さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたじろきに、絕えぬべきわざなり。すべて萬の事(一四)なだらかに、怨ずべき事をば、(一五)見知れるさまにほのめかし、恨むべからむ節を

(一)且那樣の御心持は
(二)尼後悔して
(三)しよげて居る
(四)何かにつけて後悔の念禁じ得ず
(五)俗人で居た時よりも
(六)煩惱の切れぬ僧の身
(七)地獄にも落つべく
(八)萬一緣深くして尼にならぬ中に夫が探出して引戻したりとも
(九)如何なる氣に入らぬ場合をも堪忍して連添ひ來れる夫婦こそ
(一〇)一旦尼騷ぎなどしたる中は互に氣の置ける筈なり
(一一)薄情で外に女を拵へたる夫を恨みて尼をはやすも馬鹿げて居る
(一二)夫は心を移すとも嫁初の時の情を思はば
(一三)其妻に夫として辛抱もすべきに[illegible]に付て讒訴になるもの也
(一四)穩に
(一五)知つて居るぞと匂はせ

(一)安心の出來る點さへ確ならば
(二)付け足しが出來る
(三)趣を解し風流を喜ぶ女は斯の如き事をするぞと也
(四)表面丈平氣を裝ひ
(五)斯の種の女の事を書きたる小說
(六)わざとらしき
(七)此句上の一句と顛倒して見よ
(八)夫の心
(九)夫の氣を引いて見んと
(一〇)緣切れて終身の不幸となる
(一一)其樣なる女は
(一二)氣込み居る最中は
(一三)此樣に迄思切りなされたか
(一四)未練ある夫

加へじ。(一)後やすくのどけき所だに強くば、うはべの情は、おのづから(二)もてつけつべきわざをや。(三)艶に物恥して、恨み言ふべき事をも、見知らぬ樣に忍びて、(四)上はつれなくみさをづくり、心一つに思ひ餘る時は、いはむ方なくすごき言の葉、哀なる歌を詠み置き、忍ばるべきかたみを留めて、深き山里、世ばなれたる海面などに、這ひ隱れぬかし。童に侍りし時、女房などの(五)物語讀みしを聞きて、いと哀に悲しく、心深き事かなと、涙をさへなむ落し侍りし。今思ふには、いと輕々しく(六)殊更びたる事なり。志深からむ男を置きて、(七)見る目の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隱れて人を惑はし、(九)心をも見むとする程に、(一〇)長き(八)世の物思ひになる、いとあぢきなき事なり。(一一)心深しやなど譽めたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。(一二)思ひ立つ程は、いと心澄めるやうにて、世にかへりみすべくも思へらず。いであな悲し、(一三)かくはた思しなりにけるよ、など樣に、相知れる人來訪らひ、一向に(一四)憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙おとせ

(一)無心に夫の顔を見上げて居る様にては夫たるを嘲せざるを得んや
(二)おとなし一方の女は缺點を補つてやりつゝ我慢も出來る
(三)不安心ながらも
(四)此様な女は差向ひの間は可憐といふ方で缺點も見免さるれども離れて居る時何かの折節の事や用事につけても何の分別もなき様では頼みにならぬといふ缺點が甚だ困る所である
(五)常は圭角あり氣にくはぬ女が何かの場合には甘くやつてのける事ある物也
(六)知らぬ事なき
(七)曲つて居て堪忍ならぬといふ點さへ無くば實直に閑なる氣立の女を女房には持つがよい
(八)其餘の品格情趣など美點があれば拾物として喜び、少々缺點があつて、強ちに不足は言ふまじ

うちひとりごたるゝに、何事ぞなどあはつかに(一)さしあふぎ居たらむは、いかゞは口惜しからぬ。唯一向に(二)兒めきて柔ならむ人を、とかくひきつくろひてはなどか見ざらむ。(三)心もとなくとも、直し所ある心地すべし。(四)實にさし向ひて見む程は、さてもらうたき方に罪免し見るべきを、立ち離れては、然るべき事をも言ひやり、折節にし出でむわざの、あだごとにも、まめごとにも、我が心と思ひ得る事なく、深きいたりなからむは、いとくち惜しく、たのもしげなき咎や、なほ苦しからむ。(五)常は少しそばそばしく、心づきなき人の、折節につけて、出榮するやうもありかし」など、(六)隈なき物言ひも、定めかねていたくうち歎く。馬頭「今はたゞ品にもよらじ。容貌をば更にもいはじ。(七)いとくち惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくば、たゞ偏に物まめやかに、靜なる心の趣ならむよるべをぞ、終のたのみ所には思ひ置くべかりける。(八)あまりのゆゑよし心ばせ、うち添へたらむをば、よろこびに思ひ、少し後れたる方あらむをも、あながちに求め

（一）十分なる文を今一度見たしと待遠がらせ
（二）はつきり物言はず
（三）缺點をあらはさぬ
（四）斯る女は弱々しく女らしきを取得と思へば
（五）情にのみ惹かれてつまりは仇々しきに落ちる
（六）色々の資格の中最も肝要なる夫の世話の方面からいへば
（七）折節につけて物の趣を解し風流を喜ぶ心などは無くても
（八）世話女房一點張で
（九）額に垂るゝ髪を働く時耳に挾むよりいふ
（一〇）色氣なき世話女房
（一一）日常起居の世話のみをして、此句は下の「何事ぞなどあはつかにさし仰ぎ居たらむは」へ續く
（一二）男と云者は朝夕の
（一三）他人に事々しく話す譯にはゆかぬから
（一四）側に居る譯の分る奴に話したしと思ひて
（一五）他人事ながら譯もなく腹の立つ事など有ても
（一六）わが妻の如き分らぬ奴に聞かせても詰らぬ
（一七）思はず横を向いて
（一八）やれ〳〵など獨言もする様になるを

をし、墨つきほのかに、心もとなく思はせつゝ、（一）又さやかにも見てしがなと、すべなく待たせ、わづかなる聲聞くばかり言ひよれど、（二）息の下にひき入れ、言ずくななるが、いとよくもて（三）隱すなりけり。（四）なよびかに女しと見れば、（五）あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。これを初の難とすべし。（六）事が中に、なのめなるまじき、人の後見の方は、物のあはれ知りすぐし、（七）はかなきついでの情あり、をかしきに進める方、なくてもよかるべしと見えたるに、（八）又まめ〳〵しき筋を立てて、（九）耳はさみがちに、（一〇）びさうなき家刀自の、（一一）偏にうちとけたる後見ばかりをして、（一二）朝夕の出入につけても、公私の人のたゝずまひ、善き悪しき事の、目にも耳にもとまる有様を、（一三）疎き人に、わざとうちまねばむやは、（一四）近くて見む人の、聞きわき思ひ知るべからむに、語りも合せばやと、うちも笑まれ、涙もさしぐみ、もし（一五）はあやなきおほやけはらだたしく、心ひとつに思ひあまる事などおほかるを、（一六）何にかは聞かせむと思へば、（一七）うち背かれて、人知れぬ思ひいで笑もせられ、（一八）哀とも

(一)まつりごちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、(二)事廣きにゆづらふらむ。狹き家のうちの主人とすべき人一人を思ひめぐらすに、(三)足らはで惡しかるべき大事どもなむかたぐ〳〵多かる。(四)とあればかゝり、あふさきるさにて、(五)斜に然てもありぬべき人の少きを、(六)すき〴〵しき心のすさびにて、人の有樣を數多見合せむの好ならねど、(七)偏に思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは我が力いりをし、直しひきつくろふべき所なく、心に叶ふ樣もやと、選りそめつる人の、定り難きなるべし。必ずしも我が思ふにかなはねど、(八)見そめつる契ばかりを捨て難く思ひとまる人は、物まめやかなりと見え、さてもたるゝ女の爲に、心にくゝ推し量らるゝなり。されど何か、世の有樣を見給へ集むるまゝに、(九)心に及ばず、いとゆかしき事もなしや。(一〇)君だちの上なき御選びには、(一一)まして如何ばかりの人かはたぐひ給はむ。(一二)所狹く思ひ給へぬだに、(一三)容貌きたなげなく若やかなる程の、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、(一四)おほどかにことえり

(一)治むこと
(二)經營が廣き故融通がつく
(三)缺くべからざる大事の資格
(四)こゝが濟ければ彼がわろし、痛し痒しで
(五)曲りなりにも我慢の出來る女の少き處へ
(六)強く浮氣の氣まぐれに女の比較研究をする積でもなけれど
(七)定まりたる女房とする以上は同じ事なら手間をかけてため直しなどする必要のない氣に入りたるかたちなどと好みをし出すと定まり憎きなるべし
(八)縁有て夫婦となりしものなればとばかりに繼續する男は篤實に思はれ
(九)想像にも及ばぬといふ樣の風采しき事もなし
(一〇)源氏頭中將等
(一一)如何なる人が相當するならん
(一二)選擇を嚴重にせぬ我々間に於てさへ合格する女は少く多くは下にいふ如き女にぼろを隱して選に入る位のもの也
(一三)鬼も十八といふ年頃の女が
(一四)上品に文章を飾り

まじく想像さるゝつまらぬ家庭に育ちながら氣位高く、寸したるしぐさも品格あるといふ如き娘は其よき點が僅なるにもせよ掘出し物の樣に思はるべし
(一)可なりなる評判
(二)上等と思はるゝ女の中にさへ氣に入るは得難き樣なるに、況や其下をやと
(三)柔らか
(四)締りなく
(五)物に寄り添ひて臥し
(六)女になりて
(七)一通りに見ればよき女多けれども我物として選ぶ時は
(八)役人としての男子も完全なるは同じく得難けれども政事は多人數合同の仕事なれば相濟ふの途あり、家事は女の手一つなれば適當なる女房は適任なる役人よりも得難し
(九)適任者

ひやり異なる事なき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見えたらむ、かたかどにても、いかゞ思の外にをかしからざらむ。勝れて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さるかたにて捨て難き物をば」とて、式部を見やれば、我が妹どもの(一)よろしき聞えあるをおもひて宣ふにや、とや心得らむ、物も言はず。いでや(二)上の品と思ふにだに難げなる世をと、君はおほすべし。白き御衣どもの(三)なよゝかなるに、直衣ばかりを、(四)しどけなく著なし給ひて、紐などもうち捨てて、(五)添ひ臥し給へる御火影、いとゞめでたく、(六)女にて見奉らまほし。この御爲には、上が上を選り出でても、猶飽くまじく見え給ふ。さまざまの人の上どもを語り合せつゝ、馬頭「(七)大方の世につけて見るには咎なきも、わが物とうち頼むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。(八)男の公に仕う奉り、はかぐ\しき世のかためとなるべきも、誠のうつはものとなるべきを取出さむには、難かるべしかし。されど、賢しとても、(九)一人二人世の中

足らぬ事など、はた無かゝめるまゝに、(一)省かず、まばゆきまでもてかしづける女などの、貶しめ難くおひ出づるも數多あるべし。(二)宮仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸、とり出づる例ども多かりかし」などいへば、頭「すべて、(三)賑はゝしきによるべきなゝなり」とて笑ひたまふを、頭「(四)他人の言はむやうに、心得ず仰せらるゝ」とて中將にくむ。馬頭「(五)もとの品、時世のおぼえうちあひ、やむごとなきあたりの、内々のもてなしけはひ後れたらむは、更にもいはず、何をしてかく生ひ出でけむと、いふかひなく覺ゆべし。うちおひて勝れたらむもことわり、これこそはさるべき事、とおぼえて、珍らかなる事と、心も驚くまじ。(六)なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上は打措き侍りぬ。」さて、世にありと人に知られず、淋しく(七)あばれたらむ葎の門に、思の外に、(八)らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限なく珍らしくは覺えめ。(九)いかではた斯りけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心とまるわざなゝべき」(一〇)父の年老い、物むつかしげにふとりすぎ、兄の顔にくげに、(一一)思

(一)費用をかまはず
(二)個等公に出て過分の寵幸に逢ひなどする
(三)富家の娘に限るのぢやな
(四)お言葉とも覺えませぬ
(五)素性も聲望も揃ひたる家の娘は、悪きは勿論論外なれど善きも當前に思はれて驚きもすまじ
(六)私共の
(七)荒れたる
(八)可憐なる女
(九)斯樣なる處に如何してと案外なる所に執心の種ともなるなるべし
(一〇)以下又一種の女
(一一)優れたる所もある

(一)家柄わるき人
(二)浮氣者
(三)譯のわかりたる事をいふ人なれば
㊂ 右馬頭大に美人を論ず
(四)家柄惡きは
(五)何といふても見おとされ勝なり
(六)世間の氣受わるくなれば
(七)氣位は高くても不自由なれば自ら卑しくもなる譯なれば
(八)成上り成下り共に中品と斷じたる也
(九)國守
(一〇)地方
(一一)地方官といへば品格きまりたる者なれども
(一二)可なる女を此中より掘出すことを得べし
(一三)公卿
(一四)參議にならぬ即公卿にあらざる三位又は四位の人
(一五)系統
(一六)さつぱりしたる心地す
(一七)非參議の三四位の家庭の樣

又直人の上達部などまでなりのぼりたる、我はがほにて家の内を飾り、人に劣らじと(一)思へる、その差別をばいかゞ別くべき」と問ひ給ふ程に、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らむとて參れり。世のすきもの(二)にて、物よく言ひ通れる(三)を、中將待ちとりて、この品々を辨へ定め爭ふ。いと聞き憎き事多かり。

馬頭「なりのぼれども、もとより然る(四)べき筋ならぬは、世の人の思へる事も、(五)さはいへどなほ異なり。又もとはやむごとなき筋なれど、世に經るたつき少く、時世うつろひて、(六)おぼえ衰へぬれば、(七)心は心として事足らず、わろびたる事ども出で來るわざなゝめれば、とりどりにことわりて、(八)中の品にぞ置くべき。(九)受領と言ひて、(一〇)人の國の事にかゝづらひいとなみて、(一一)品定まりたる中にも、又きざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、(一二)擇り出でつべき比ほひなり。なまなまの上達部(一三)よりも、非參議(一四)の三四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、(一五)もとの根ざし賤しからぬが、安らかに身をもてなしふるまひたる、いと(一六)かはらかなりや。家(一七)の内に

(一)一服にしてかす
(二)缺點を言ひくろめ
(三)可なりな點を輪をかけて吹聽する故
(四)何でかむやみに推量て惡く思ふべき、評判を信ずるより外なし
(五)ため息つきたる
(六)說の全部に感服するには非ざれども
(七)一部分の取得もなき女
(八)そんな女の處へは
(九)最上最下は同數なるべし
(一〇)上流に生れたる女は
(一一)樣子が勝れて見える筈
(一二)差別を生ずべき
(一三)頭人らしき
(一四)此下りと此上りとの優劣を如何に定むるぞ
(一五)位低くて人らしからぬ

(一)ゆゑづけてし出づる事もあり。見る人後れたる方をば言ひ隱し、(二)さてありぬべき方をば繕ひて、まねび出すに、(三)それ然あらじと、そらに、いかゞは推し量り思ひくたさむ。誠かと見もて行くに、(四)見劣りせぬやうはなくなむあるべき」と、(五)うめきたる氣色も恥かしげなれば、いとなべてはあらねど、(六)我も思し合する事やあらむ、うちほゝゑみて源「そのかたかどもなき人はあらむや」と宣へば、(七)頭「いとさばかりならむあたりには、誰かは賺され寄り侍らむ。(八)取る方なく口惜しき際と、(九)優なりと覺ゆばかり勝れたるとは、數等しくこそ侍らめ。人の品高く生れぬれば、(一〇)人にもてかしづかれて、隱るゝことも多く、自然にそのけはひこよなかるべし。(一一)中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたる趣も見えて、わかるべき事かた(一二)がた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、殊に耳たゝずかし」とて、いと(一三)隈なげなる氣色なるもゆかしくて、源「その品々やいかに。いづれを三の品に置(一四)きてか分くべき。もとの品高く生れながら、身は沈み、位みじかくて人げなき、(一五)

(一)手紙の主を
(二)とんでもなき事を
(三)汝こそ女の文を多く持てる筈
(四)見栄のする立派な文は無かるべし
(五)これこそと申分のなき女は無いわいと
(六)達者にかき
(七)場合々々の返事をぬからずうまくやる位の所は
(八)可なりなる女も
(九)其も其腕を主として選擇する場合に必ず當選する程のは
(一〇)女は自己の知つた事のみを得意がりて
(一一)親に大事がらるゝ箱入娘で居る間は
(一二)一部分の善き點だけを傳聞して
(一三)鷹揚にてこましやくれず
(一四)熱心に習ふ

どもこそ侍りけれ」とて、心あてに、(一)それかかれかなど問ふうちに、言ひあつるもあり。(二)もてはなれたる事をも思ひよせて疑ふもをかしと思せど、言ずくなにて、とかく紛らはしつゝとり隱し給ひつ。源(三)「其所にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなむこの厨子も心よく開くべき」と宣へば、頭(四)「御覧じ所あらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふ序に、頭「女の、(五)これはしもと難つくまじきは難くもあるかなと、やうやうなむ見給へ知る。唯うはべばかりの情に、(六)手はしりかき、(七)折節の答心得てうちしなどばかりは、(八)隨分によろしきも多かりと見給ふれど、(九)そも誠にその方を取り出でむ選びに必ず漏るまじきは、いとかたしや。(一〇)わが心得たる事ばかりを、おのがじし心をやりて、人をば貶しめ、かたはら痛き事多かり。(一一)親など立ち添ひもてあがめて、おひさき籠れる窓の内なる程は、唯(一二)かたかどを聞き傳へて、心を動す事もあンめり。容貌をかしく(一三)うちおほどき、若やかにて紛るゝ事なき程、はかなきすさびをも、人眞似に(一四)心を入るゝ事もあるに、おのづから一つ、

共にして、(一)をさ〳〵立ち後れず、何處にても(二)まつはれ聞え給ふほどに、(三)自らかしこまりもおかず、心の中に思ふことをも隱しあへずなむ、睦れ聞え給ひける。つれづれと降りくらして、しめやかなる宵の雨に、(四)殿上にもをさ〳〵人ずくなに、(五)御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、(六)御殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き(七)御廚子なる、いろ〳〵の紙なる(八)文どもをひき出でて、中將わりなくゆかしがれば、源「(九)さりぬべき、少しは見せむ。(一〇)かたはなるべきもこそ」と、許し給はねば、頭中將「そのうちとけて、(一一)かたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。(一二)おしなべたるおほかたのは、數ならねど、(一三)程々につけて、書き交しつゝも見侍りなむ。おのがじし、怨めしき折々、待顏ならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、(一四)やむごとなく、切に隱し給ふべきなどは、かやうにおほざうなる御廚子などに、うち置きちらし給ふべくもあらず、深くとりおき給ふべかゝめれば、これは、(一五)二の町の心やすきなるべし。片端づつ見るに、頭「かくさま〴〵なるもの

(一)決して源氏にひけを取らず
(二)付き添ひ
(三)自然禮儀も守らず
(四)殿上の間、參内せる人々の詰所
(五)源氏の
(六)燈火
(七)書棚
(八)女の手紙
(九)然るべき分
(一〇)見つともなきもあるべし、其は見せられぬ
(一一)冷汗の出る樣に思はれるのが見たし
(一二)通り一遍の戀文
(一三)銘々相應に
(一四)大切の文は斯かる一通りの書棚などに置かぬ筈なれば
(一五)第二流の大切ならぬ手紙なるべし、此下に手紙を見することを省けり



（一）源氏が
（二）妻の家へは稀にのみ行くを
（三）外に増花のあるかと邪推して疑ふ、伊勢物語「春日野の若紫の摺衣忍ぶの亂限り知られず」
（四）浮氣らしき
（五）露骨なる女狂
（六）非常に無理で心配な戀路を
（七）生憎好物で
㊁頭中將等の美人論（雨夜の品定）
（八）凶日には人の出入を禁ずる也
（九）源氏の宮中における部屋に世話のみやく
（一〇）頭中將、葵上の兄弟
（一一）大事がらるく妻の家には是も行きたがらず
（一二）女好の浮氣者
（一三）實家で我が部屋を立派にかざりて
（一四）源氏。

の少将には笑はれ給ひけむかし。まだ（一）中将などにものし給ひし時は、内裏にのみ侍ひようし給ひて、大殿（二）にはたえだえまかで給ふを、しのぶのみだれやと、（三）疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしもあだめき（四）目馴れたる、うちつけ（五）のすきずきしさなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、あながち（六）に引き違へ、心盡なる事を、御心に思し止むる癖なむ生憎（七）にて、然るまじき御振舞もうちまじりける。

なが雨晴間なきころ、内裏の御物忌（八）さしつゞきて、いとゞ長居侍ひ給ふを、大殿にはおぼつかなく恨めしと思したれど、よろづの御よそひ何くれと、めづらしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君だち、唯この（九）御宿直所の宮仕を勤め給ふ。（一〇）宮腹の中将は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊戯をも、人よりは心やすく、なれなれしく振舞ひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ住處は、この君もいとも（一一）のうくして、すき（一二）がましきあだ人なり。里（一三）にても、我がかたのしつらひまばゆくして、君（一四）の出入し給ふに、うちつれ聞え給ひつゝ、夜晝、學問をもおそびをも諸

帚木

梗概

㊀ 無理なる戀を喜ぶ源氏の本性。㊁ 頭中將等宮中の源氏の部屋に集まりて美人論を闘はす(雨夜の品定)頭中將の美人三等說。㊂ 右馬頭の說。妻として完全なる女は得難し。面白き女よりは眞面目な女。㊃ 嫉妬深き女の話、右馬頭の實驗談。㊄ 浮氣女の話同上。㊅ 內氣なる女の話、頭中將の實驗談。㊆ 賢女顏する女の話、藤式部丞の實驗談。㊇ 右馬頭の結論。㊈ 源氏方違の爲に伊豫介の中川の家に泊りに行く。伊豫介の子紀伊守に、伊豫介の後妻空蟬の噂を聞く。㊉ 源氏空蟬を強ひて情を通ず。⑪ 源氏歸邸の後、空蟬の弟小君を介して空蟬に文を遣る。⑫ 源氏事に託して再び中川の家に宿る。空蟬源氏に迫らるれども避けて逢はず。空蟬心中の煩悶。

㊀ 源氏の本性

(一)譏りけなさるゝ失行
(二)かてゝ加へて、下の「かくろへごとをさへ語り傳へけむ」へ續く
(三)斯る女狂をしては後世に浮名が傳はりもすべきかと源氏が隱し居たる祕事を
(四)人の語り傳へを記者が筆記したるに擬したる言方
(五)源氏が
(六)表には眞面目くさり
(七)艷つぽく
(八)交野少將の物語といふ小說の主人公

光源氏、名のみことごとしう、(一)言ひ消たれ給ふ咎おほかゝなるに、(二)いとゞ、(三)かゝるすきごとどもを、末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さむと、忍び給ひけるかくろへごとをさへ語り傳へけむ、(四)人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく(五)世を憚り、(六)まめだち給ひけるほどに、(七)なよびかにをかしき事はなくて、交野(八)

へ心にかゝりて、いと苦しきまでぞおはしける。大人になり給ひて後は、(一)ありしやうに御簾の(二)内にも入れ給はず、御遊の折々、琴笛の音に聞き通ひ、ほのかなる御聲をなぐさめにて、内裏住のみ好しう覺え給ふ。五六日侍ひ給ひて、大殿に二三日など、たえだえにまかで給へど、たゞ今は幼き御程に、(三)罪なくおぼしなして、いとなみかしづき聞え給ふ。(四)御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、えり調へすぐりて侍はせ給ふ。御心につくべき御遊をし、(五)おふなおふな思し勞く。内裏にはもとの淑景舍を(六)御曹子にて、母御息所の御方々の人々、まかで散らず侍はせ給ふ。(七)里の殿は、修理職内匠寮に宣旨下りて、になう改め造らせ給ふ。もとの木立、山のたゝずまひ、おもしろき所なるを、(八)池の心廣くしなして、めでたく造りのゝしる。かゝる所に、(九)思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、(一〇)歎かしう思しわたる。光君といふ名は、高麗人のめで(一一)聞えて、つけ奉りけるとぞ、言ひ傳へたるとなむ。

(一)以前の様に
(二)管絃の際で
(三)左大臣方にては源氏の心を知らず、童の無邪氣にすることと思ひて
(四)源氏や葵に仕ふる人人
(五)出來る限り
(六)源氏の部屋にあて
(七)桐壺の實家の邸、二條院
(八)池を掘りひろげて
(九)氣に入りたる女
(一〇)源氏が
(一一)感心して、

(一)葵上十六歳、源氏より四歳の姉
(二)夫なる源氏が
(三)葵が
(四)葵の母は帝の同胞なれば
(五)立派
(六)源氏
(七)攝政關白たるべき
(八)左大臣の
(九)葵の母、本妻
(一〇)後に頭中將といふ
(一一)左大臣との中
(一二)祕藏の第四女(弘徽殿の妹)に娶せ
(一三)左大臣が源氏を大事がるに劣らず
(一四)御側をはなされねば
(一五)源氏の心、藤壺の如き女をこそ妻には持つべけれ
(一六)葵上
(一七)氣に入らず
(一八)一微なる子供心、藤壺の事が氣にかゝりて

かしづき聞え給へり。いときびはにておはしたるを、ゆゝしう美しと思ひ聞え給へり。女君は少し過し(一)給へる程に、いと若う(二)おはすれば、似げなく恥かしと思い(三)たり。この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮(四)、内裏のひとつ御后腹になむおはしければ、何方につけても物あざやかなるに、(五)この君さへかくおはし添ひ(六)ぬれば、春宮の御祖父にて終に世の事を知り給ふべき、(七)右の大臣の御勢は、物にもあらず壓され給へり。御子ども數多、(八)腹々に物し給ふ。宮の御腹は、(九)藏人の(一〇)少將にて、いと若うをかしきを、右の大臣の、御中は(一一)いとよからねど、え見過し給はで、(一二)かしづき給ふ四の君に婚せたまへり。(一三)劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。源氏の君は、うへの常に召しまつはせば、(一四)心安く里住もえし給はず。心の中には、唯藤壺の御有樣を、類なしと思ひ聞えて、さやう(一五)ならむ人をこそ見め、似るものなくもおはしけるかな、大殿の君、(一六)いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず(一七)覺え給ひて、幼きほどの御ひと(一八)

聞え給はず。御前より、内侍宣旨承り傳へて、大臣參り給ふべき召あれば、參り給ふ。御祿のもの、うへの命婦取りて賜ふ。白き大袿(二)に御衣一領、例(三)の事なり。御盃の序(一)に、

帝　(四)いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心はむすびこめつや

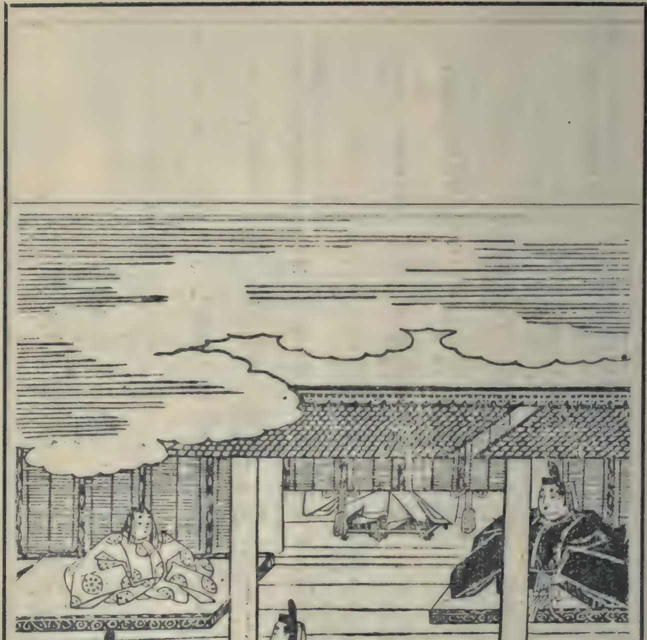
御心ばへありて驚かさせ給ふ。

左　結び(五)つるこゝろも深きもとゆひにこきむらさきの色しあせずば

と、奏して長階より下りて舞踏(七)したまふ。左馬寮(六)の御馬、藏人所の鷹すゑて賜はり給ふ。御階のもとに、親王たち上達部つらねて、祿どもしな〴〵(八)に賜はり給ふ。その日の御前の折櫃物(九)、籠物など、右大辨なむ承りて仕う奉らせける。屯食(一〇)、祿の韓櫃どもなど、所せきまで、春宮の御元服の折にも數まされり。なか〳〵限もなく嚴しうなむ。

その夜大臣の御里に、源氏の君まかゝでさせ給ふ。作法(一一)世に珍らしきまで、もて

(一)下され物
(二)衣と裝束との間に着る衣
(三)引入の役に賜はる常例
(四)娶取の意をほのめかしたる也
(五)下に意味をこめて
(六)此緣の永く圓滿なれかしと願ふ心
(七)御禮の爲の拜
(八)それ〳〵等差ありて
(九)折詰物、籠入の物
(一〇)結飯
❶源氏葵上を娶る
(一一)娶取の儀式



(一)桐壺の見たらばと思出れば悲堪へ難きを
(二)こらへ給ふ
(三)大人の服に着かへて
(四)庭に下りて御禮を申上る也
(五)跡もどりして
(六)幼弱なる
(七)元服して容顏劣りはせずや
(八)案外に
(九)母の皇女なるをいふ
(一〇)葵上、母は帝の妹
(一一)御申込
(一二)帝にも其旨を奏したれば
(一三)源氏に奉らんと決したり
(一四)侍の間、控所
(一五)聟に取るべき事をほのめかせども源氏は遠慮がちにて合點承諾せず

き、顏のにほひ、樣かへ給はむ事惜しげなり。大藏卿藏人仕う奉る。いと淸らなる御髮をそぐ程、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばと、思し出づるに(一)堪へ難きを、心强く念じかへさせ給ふ。(二)かうぶりし給ひて、御休所にまかンで給ひて、御衣奉りかへて、(三)下りて拜し奉り給ふさまに、(四)皆人淚おとし給ふ。帝はた況てえ忍びあへ給はず、思し紛るゝ折もありつるを、昔の事とりかへし、(五)悲しくおぼさる。いとかうきびはなる(六)程は、あげおとりやと(七)疑はしく思されつるを、あ(八)さましううつくしげさ添ひ給へり。引入の大臣のみこ腹に、(九)唯一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御けしきあるを、思し煩ふ事ありけるは、この君に奉らむの御(一〇)心なりけり。內裏にも御けしき賜はらせ給ひければ、(一一)帝「さらば此折の御後見な(一二)かンめるを、副臥にも」と催させ給ひければ、然思したり。(一三)さぶらひにまかンで給(一四)ひて、人々御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に、源氏著き給へり。大臣けしきばみ聞え給ふ事あれど、物のつゝましき程にて、ともかくもえあへしらひ(一五)

(一)帝が藤壺に頼み給ふ故
(二)藤壺とも中あしき故
(三)源氏の藤壺に親むを胸惡く思へり
(四)帝が無類の美人と思込みたる有名なる藤壺にも立勝りて源氏が美しきを
(五)御寵愛源氏と優劣なければ

⑩ 源氏元服

(六)源氏
(七)帝が心にかけられて
(八)紫宸殿
(九)立派なりし評判
(一〇)御祝の御馳走
(一一)當前の御用としてしたる分にては
(一二)帝の御居間淸凉殿
(一三)帝の玉座
(一四)源氏
(一五)冠を著する役、左大臣
(一六)總角

え給ふも、似げなからずなむ」など(一)聞えつけ給へれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても志を見え奉り、こよなう心よせ聞えたまへれば、弘徽殿の女御、又(二)この宮とも御中そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりのにくさも立ち出でて(三)物しと思したり。(四)世に類なしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御容貌にも、猶にほはしさは譬へむ方なく、美しげなるを、世の人光君と聞ゆ。藤壺ならび給ひて、(五)御おぼえもとりどりなれば、かゞやく日の宮と聞ゆ。

この君(六)の御童姿、いと變へま憂く思せど、十二にて御元服し給ふ。(七)居起ちおぼしいとなみて、限ある事に事を添へさせ給ふ。一年の春宮の御元服、(八)南殿にてありし儀式の、(九)よそほしかりし御ひゞきにおとさせ給はず。所々の(一〇)饗など、內藏寮穀倉院など、(一一)公事に仕う奉れる、疎なる事もこそと、とりわき仰事ありて、淸らを盡して仕う奉れり。(一二)おはします殿の東の廂、東向に(一三)御倚子立てて、(一四)冠者の御座、(一五)引入の大臣の御座御前にあり。申の時にぞ源氏參り給ふ。(一六)みづら結ひ給へる面つ

せ奉り給へり。藤壺ときこゆ。實に御容貌有樣、怪しきまでぞ覺え給へる。(一)(二)これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえ貶しめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬことなし。(三)かれは人も許し聞えざりしに、御志の生憎なりしぞかし。思し紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなく思し慰むやうなるも、哀なるわざなりけり。源氏の君は、(四)御あたり去り給はぬを、まして繁く渡らせ給ふ御方は、(五)え恥ぢあへ給はず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思いたるやはある、とり〲にいとめでたけれど、うちおとなび給へるに、いと若う美しげにて、切に隱れ給へど、(七)おのづから漏り見奉る。(六)母御息所は、(八)影だに覺え給はぬを、いとよう似給へりと、典侍の聞えけるを、若き御心地に、いと哀と思ひ聞え給ひて、常に參らまほしう、(九)なづさひ見奉らばやとおぼえ給ふ。(一〇)うへも限なき御思ひどちにて、帝「(一一)な疎み給ひそ。怪しくよそへ聞えつべき心地なむする。(一二)なめしと(一三)思さでらうたうし給へ。つらつきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、(一四)通ひて見

(一)桐壺に似たり
(二)藤壺は身分よく勝つて人の氣受もよく讒訴もなければ毫もひける所なく威張つたものなり
(三)桐壺は之に反して人の氣受惡しかりしに帝の寵愛は殊に烈しかりしと也
(四)帝の
(五)繁々帝に召さるゝ御妾等は自ら源氏に狎れ親む也
(六)他の御妾等は皆年長じたるに藤壺のみ若く美しくて
(七)源氏が藤壺を
(八)源氏が母の顏を少しも覺えぬ也
(九)付きまとひ
(一〇)帝も藤壺源氏いづれをも限りなく愛し給ひて
(一一)源氏を
(一二)其方を桐壺の代りと見るべき心地す
(一三)源氏の親むを無禮と思はず愛し給へ
(一四)桐壺が藤壺に

(一)第四皇女、藤壺女御と名づく
(二)薄々
(三)藤壺
(四)甚だよく桐壺に似て
(五)珍らしい御器量よし
(六)懇切に
(七)弘徽殿
(八)ひどい目にあひし
(九)用心して
(一〇)はき〲と娘の入内をきめもせざりし内に
(一一)藤壺の母
(一二)宮中に宮仕して

思しなりぬるに、先帝の四の宮(一)の、御容貌優れ給へる聞え高くおはします、母后世になくかしづき聞え給ふを、上に侍ふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう參り馴れたりければ、いはけなくおはしましゝ時より見奉り、今もほの(二)見奉りて、典侍「亡せ給ひにし御息所の御容貌に似給へる人を、三代の宮仕に傳はりぬるに、え見奉りつけぬに、后の宮の姫宮(三)こそ、いとよう(四)覺えて生ひ出でさせ給へりけれ。(五)ありがたき御かたち人になむ」と奏しけるに、誠にやと御心とまりて、懇に聞え(六)させ給ひけり。母后、あなおそろしや。春宮(七)の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなく(八)もてなされし例もゆゝしう、と思しつゝ(九)みて、すが〲しう(一〇)も思し立たざりける程に、后(一一)も亡せ給ひぬ。心ぼそき様にておはしますに、帝「唯わが女御子たちと同じ列に思ひ聞えむ」と、いと懇に聞えさせ給ふ。侍ふ人々御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心ぼそくておはしまさましよりは、内裏(一二)住せさせ給ひて、御心も慰むべく、など思しなりて、參ら

(一)世の噂になりて
(二)相人に見せたる帝の眞意を
(三)曾て日本の人相見に見せたる上此子天子とすべからずと決したる譯なれば
(四)帝の心、萬機の中に親王にすれば制規上無品ならざる可らず、又後見の外戚もなければなまじ親王にして身の定まりかぬる樣なる事はさせじ
(五)我命も不定なり
(六)皇族以外の人
(七)惜しきものなれども
(八)星にあてはめて人の吉凶禍福を占ふ道
(九)旅の入門、頭に[illegible]に親む
(九)故桐壺更衣
(一〇)然るべき女どもを新に宮中に[illegible]るれども

き贈物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はす。おのづから事ひろごりて、(一)漏させたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなる事にかと、おほし疑ひてなむ(二)ありける。帝畏き御心に、倭相(三)をおほせて、思しよりにけるすぢなれば、今までこの君を、親王にもなさせ給はざりけるを、相人は誠に賢かりけり、と思しあはせて、(四)無品親王の外戚のよせなきにてはたゞよはさじ、(五)我御世もいと定めなきを、(六)たゞ人にておほやけの御後見をするなむ、行先もたのもしげなる事と思しさだめて、いよ／＼道々の才をならはせ給ふ。際殊に賢くて、たゞ人にはいとあたらし(七)けれど、親王となり給ひなば、世のうたがひ負ひ給ひぬべく物し給へば、宿曜(八)のかしこき道の人に、考へさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべく思しおきてたり。

年月に添へて、(九)御息所の御事をおぼし忘るゝ折なし。慰むやと、(一〇)然るべき人々を參らせ給へど、なずらひに思さるゝだにいと難き世かなと、うとましうのみ萬に



すれば、いとをかしううち解けぬ遊種に、誰も〳〵思ひ聞え給へり。(一)わざとの御學問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ續けば、事々しううたてぞなりぬべき人の御樣(二)なりける。そのころ高麗人(三)の參れるが中に、かしこき(四)相人ありけるを聞し召して、宮の中に召さむ事は、宇多帝の御誡(五)あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館(六)に遣したり。御後見だちて仕う奉る右大辨の子のやうに思はせて率て奉る。相人驚きて、數度傾きあやしぶ。國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば(七)、亂れ憂ふる事やあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、又その相違ふべし」といふ(八)。辨もいと才(九)かしこき博士にて、いひかはしたる事どもなむ、いと興ありける。文(一〇)など作り交して、今日明日歸り去りなむとするに、かくあり難き人に對面したるよろこび、歸りては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子(一一)もいと哀なる句を作り給へるを、限なうめで奉りて、いみじ

(一)主要なる
(二)源氏
(三)朝鮮の聘使
(四)人相見
(五)寛平遺誡「外蕃之人、必可召見者、在簾中見之、不可直對耳」
(六)來朝の外賓を置く館舍
(七)帝王として見れば
(八)朝廷の大臣
(九)學問
(一〇)詩
(一一)源氏

(一)あれほど源氏を御寵愛あれど

(二)桐更衣の今生れかはりてある處

(三)帝が

(四)後に殘して死行く悲

(五)祖母北方が

(六)源氏が

(七)御學問始

(八)せめて母更衣歿後の今日に於てなりとも此子を愛し給へ

(九)帝が

(一〇)源氏を

(一一)弘徽殿嫌はずには置かれず寵愛す

(一二)弘徽殿の

(一三)源氏が今より媚かしく恥かしげなるを見て他の女御更衣等も一向の子供あしらひにはせず相手になりし也、成人の男に對しては隱れて面會せぬが此頃の貴女の風也

危く思し憚りて、色にも出させ給はずなりぬるを、(一)さばかり思したれど、限こそありけれど、世の人も聞え、女御も御心おちゐ給ひぬ。かの御祖母北の方、慰む方なく思ししづみて、おはすらむ所にだに尋ね行かむ、と願ひ給ひししるしにや、終に亡せ給ひぬれば、(二)またこれを悲み(三)思す事限なし、御子六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。年ごろ馴れむつび聞え給へるを、見奉り(四)置くかなしびをなむ、(五)かへすぐ宣ひける。(六)今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、(七)ふみはじめなどせさせ給ひて、世に知らず聰う賢くおはすれば、あまりに怖しきまで御覽ず。帝「今は誰もくえ憎み給はじ。(八)母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘徽殿などにも(九)渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に(一〇)入れ奉り給ふ。いみじき武士、讐敵なりとも、見てはうち笑まれぬべき樣のし給へれば、(一一)えさし放ち給はず。女御子たち二所、(一二)この御腹におはしませど、准ひ給ふべきだにぞなかりける。(一三)御かたぐもかくれ給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおは

まどろませ給ふ事かたし。朝に起きさせ給ふとても、(一)明くるも知らでと思し出づるにも、なほ朝政は怠らせ給ひぬべかゝめり。(二)物なども聞し召さず、(三)朝餉のけしきばかり觸れさせ給ひて、(四)大床子の御膳などは、いと遙に思しめしたれば、(五)陪膳に侍ふかぎりは、心苦しき御氣色を見奉り歎く。すべて、近く侍ふかぎりは、男女、いとわりなきわざかなと、言ひ合せつゝ歎く。(六)さるべき契こそはおはしましけめ、そこらの人の譏恨をも憚らせ給はず、(七)この御事にふれたる事をば、道理をも失はせ給ひ、今はた、かく世の中の事をも、思し捨てたるやうになり行くは、(八)いとたいぐ〵しきわざなりと、(九)他のみかどの例まで引き出でつゝ、さゝめき歎きけり。

月日經て、若宮參り給ひぬ。いとゞこの世の物ならず、淸らに(一〇)およずけ給へれば、いとゆゝしう思したり。明くる年の春、(一一)坊定まり給ふにも、(一二)いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじき事なれば、なかぐ〵

(一)「玉簾あくるも知らで寢しものを夢にも見じと思ひかけきや」伊勢が長恨歌の畫に題せし歌
(二)食物をも召上らず
(三)うち〳〵にて差上ぐる御飯
(四)表向に差上ぐる御飯
(五)御給仕
(六)以下男女の嘆きあふ詞、前世の宿緣にはあるべけれども
(七)桐壺更衣に關する事とさへ云へば
(八)不道理なる
(九)玄宗の例など

㊇ 源氏君の幼時、源氏を喚はる

(一〇)成人し
(一一)皇太子
(一二)第一皇子をさしおきて此宮を立てたく

とにほひなし。大液の芙蓉（一）、未央の柳も、けに通ひたりしかたちを、唐めいたる粧はうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、羽をならべ（二）、枝をかはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ、盡せずうらめしき。風の音、蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに、弘徽殿には、久しう上の御局（三）にも參う上り給はず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊（四）をぞし給ふなる。いとすさまじう、ものし（五）と聞し召す。この頃の御氣色を見奉る上人女房などは、かたはら痛しと聞きけり。いとおし立ち（六）かど〳〵しき所ものし給ふ御方にて、ことにもあらず（七）思し消ちて、もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

帝　雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらむ淺茅生の宿

（八）おぼしやりつゝ、燈火をかゝげつくして、起きおはします。右近（九）の司の宿直奏の聲聞ゆるは、丑（一〇）になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせ給ひても、

（一）長恨歌には貴妃の容を大液池の芙蓉未央宮の柳と形容せり、彼は唐風の粧なれば端麗なれども可憐にはあらじ、わが桐壺の可憐なるは何物も之に比すべきものなし、と帝の心なり
（二）長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」
（三）弘徽殿の上局、清涼殿内にあり
（四）音樂
（五）帝が胸惡く思召す
（六）弘徽殿女御の性格、無遠慮に圭角ある
（七）帝の悲嘆を何とも思はぬ風を示すならん
（八）淺茅生の宿即ち母君の宿を思遣りつゝ
（九）丑刻に當直の右近衛府の官人時刻を奏す
（一〇）午前二時頃

（一）荒き風ふせぎし蔭の枯れしより小萩がうへぞしづごころなき。

などやうに亂りがはしきを、（二）心をさめざりける程と、御覽じ免すべし」いと斯う（三）しも見えじと、思ししづむれど、更にえ忍びあへさせ給はず、（四）御覽じ始めし年月の事さへかき集め、よろづに思し續けられて、（五）時の間も覺束なかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましう思し召さる。帝「故大納言の遺言過たず、（六）宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、（七）かひある樣にとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや」とうち宣はせて、いと哀に思しやる。帝「かくてもおのづから、（八）若宮など生ひ出で給はば、さるべき序もありなむ。命長くとこそ思ひ念ぜめ」など宣はす。かの贈物御覽ぜさす。（九）なき人の住處尋ね出でたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思ほすもいと效なし。

帝　尋ねゆく幻（一〇）もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

繪にかける楊貴妃の容貌は、いみじき畫師といへども、筆かぎりありければ、い

（一）蔭は桐壺更衣、小萩は源氏、しづ心なきは母君が心配する也
（二）歎きに取亂したる折なれば其言の事と
（三）帝が歎きに沈む樣を人に見られじと
（四）桐壺更衣に逢ひはじめし以來の事
（五）更衣存生中は一時も逢はねば心がかりなりしに
（六）違へずよく守りて
（七）謝禮には精々更衣を取立てて遣はさんと氣込み居しに
（八）源氏成人せば又仕方もあるべし
（九）長恨歌に、楊貴妃の死後、方士勅を受けて普く貴妃の魂の在所を尋ね、蓬萊宮にて出逢ひ、鈿合金釵をしるしに持歸りし事を作れり
（一〇）幻は方士、つては人づて
◎ 帝の歎嘆



(一)母君に
(二)母君の心
(三)源氏に付添ひて參內するは外聞憚あり
(四)當時にても源氏に離れ居るは甚だ氣がかりに思ふ故
(五)思切りよく
㊅靱負命婦の復命
(六)清涼殿前の植込
(七)花を見るふりして實は使の歸るを待てる也
(八)心ゆかしき
(九)唐の玄宗寵姫楊貴妃に別れて無限の悲に沈みたる趣を白居易の作りたる長詩
(一〇)宇多天皇
(一一)別離の悲を作りたる詩歌をのみ明暮の口癖に仰せらる
(一二)帝が命婦に
(一三)有難き御文

を朝夕にならひて、いとさう〴〵しく、上の御有樣など思ひ出で聞ゆれば、疾く參り給はむことをそゝのかし聞ゆれど、(一)かくいま〳〵しき身の添ひ奉らむも、(二)いと人ぎき憂かるべし、(三)又見奉らで暫しもあらむは、いと後めたう思ひ聞え給ひて、(四)すが〳〵ともえ參らせ奉り給はぬなり。

(五)命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけるを、哀に見奉る。御前の壺前栽の、(六)いとおもしろき盛なるを、御覽ずるやうにて、(七)忍びやかに、心にくき限の女房四五人侍はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。(八)この頃、明暮御覽ずる、長恨歌の御繪、(九)亭子院の畫かせ給ひて、(一〇)伊勢貫之によませ給へる、大和言葉をも、唐土の詩をも、唯その筋をぞ、まくらごとにせさせ給ふ。(一一)いとこまやかに有樣を問はせ給ふ。(一二)あはれなりつること忍びやかに奏す。御かへり御覽ずれば、いともかしこきは置所も侍らず。(一三)かゝる仰事につけても、かきくらすみだり心地になむ。

またさる(一)まじき人の恨を負ひしはてく〵は、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人わろく(二)、かたくなになりはつるも、前の世(三)ゆかしうなむと、うち返しつゝ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて盡せず。泣く〵、

命婦「夜いたう更けぬれば、今宵過さず(四)、御かへり奏せむ」と急ぎ參る。月は入方(五)の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の蟲の聲々催し顏(六)なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

命婦 鈴蟲のこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふるなみだかな(七)

えも乘りやらず。

母君「いとゞしく蟲の音しげき(八)あさぢふに露おきそふる雲のうへびと

(九)かごとも聞えつべくなむ」と言はせ(一〇)給ふ。をかしき御贈物(一一)などあるべき折にもあらねば、唯かの御かたみにとて、かゝる用もやと殘しおき給へりける、御裝束一領、御髮上の調度めく物添へ給ふ。(一二)若き人々、悲しき事は更にもいはず(一三)、內裏邊

(一)受くべからざる恨を多く受けたる揚句には桐壺に死なれて
(二)見つともなく
(三)桐壺と我との前世が何でありしやら知りたし
(四)此御返事申上げん
(五)入り際
(六)哀を催し顏
(七)降る、振る(鈴の緣語)
(八)あさぢふは我が家、露は淚、雲の上人は命婦
(九)露おき添へたるはけしからずと不足をも言ひたし
(一〇)侍女をして
(一一)母君より命婦へ
(一二)源氏に付添ひて桐壺の里に來居る女等、以下母君の參內を辭したる次第を說く
(一三)禁中の賑はしさに馴れて此處を淋しがり

(一)以下亡き桐壺の事を語る老女の詞
(二)宮仕へさせんと親が存寄りたりし子にて
(三)最期まで
(四)碌な尻押もなき身の宮中の交際は却つてせぬがましならんとは存じながら
(五)宮仕に差上げしに
(六)非命の死ともいふべき状態にて
(七)御寵愛も却つて恨めしく存ぜらる
(八)帝も其通り
(九)以下「ゆかしうなむ」迄帝の詞
(一〇)短き契故彼の如く無暗に可愛かりしならん

ろ御消息にて見奉る、かへすぐ\つれなき命にも侍るかな。(一)生れし時より、思ふ(二)心ありし人にて、故大納言(三)いまはとなるまで、唯、この人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ、我なくなりぬとて、くち惜しう思ひくづほるな、と、かへすぐ\いさめ置かれ侍りしかば、(四)はかぐ\しう後見思ふ人なきまじらひは、なかく\なるべき事と思ひ給へながら、唯かの遺言を違へじとばかりに、(五)出したて侍りしを、身にあまるまでの御志の、萬にかたじけなきに、人げなき恥をかくしつゝ、交らひ給ふめりつるを、人のそねみ深く積り、安からぬ事多くなり添ひ侍るに、(六)よこさまなる樣にて、終にかくなり侍りぬれば、(七)かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ給へられ侍る。これも理なき心の闇になむ」と、いひもやらずむせかへり給ふ程に、夜も更けぬ。命婦(八)「上も然なむ。(九)我が御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、(一〇)長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契になむ、世にいさゝかも、人の心をまげたる事はあらじと思ふを、唯この人ゆゑにて、あ



など、こまやかに書かせ給へり。

帝「宮城野(一)のつゆ吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」

とあれど、え見給ひはてず。母君「命長さの、いとつらう思う給へ知らるゝに、松(二)の思はむ事だに、はづかしう思う給へ侍れば、百敷に行きかひ侍らむ事は、ましていとはゞかり多くなむ。畏き仰事を度々承りながら、(三)みづからはえなむ思ひ給へ立つまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参り給はむ事をのみなむ思し急ぐめれば、理に悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給へるさまを奏し給へ。(四)ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、忌々しうかたじけなく」など宣ふ。

命婦「宮は大殿籠りにけり。(五)見奉りて、委しく御有様も奏し侍らまほしきを、待ち(六)おはしますらむを、夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。母君「暮れ惑ふ心のやみも堪へ難き片端をだに、はるく(七)ばかりに聞えまほしう侍るを、わたくし(八)にも、心のどかにまかで給へ。年ごろ嬉しくおもだたしき(九)序にのみ、立寄り給ひしものを、かゝ

(一)宮城野は宮中、小萩は源氏
(二)「いかにしてありと知られじ高砂の松の思はむことも恥かし」
(三)自身参内はする気にならぬ
(四)私は忌々しき身なればこゝに源氏を置き奉るは憚多し
(五)源氏は御寝なりしよ
(六)帝が御待兼なるべきに、夜も更くべければ御暇申さん
(七)晴らす程に物語したければ
(八)御使としてでなくゆつくりと参給へ
(九)面目ある場合にのみ

（一）前に使に來たる女官
（二）私如き者の
（三）以下「疾く參り給へ」迄勅旨
（四）氣をかへる方便なく愁の堪へがたきは
（五）桐壺の母に參内を勸むる也
（六）桐壺の里
（七）人目を憚らぬでもない御樣子が御氣の毒なれば
（八）御威光に照して拜見すべし
（九）恐が
（一〇）頑是なき人、源氏
（一一）兩親揃ひて、宣長云、此句、諸本にはぐくまぬが覺束なきを」とあるべし
（一二）宮中に來よ

心肝も盡くるやうになむと、典侍（一）の奏し給ひしを、（二）物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいと忍び難う侍りけれ」とて、稍ためらひて仰事傳へ聞ゆ。命婦「（三）暫時は夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、（四）さむべき方なく堪へ難きは、如何にすべきわざにかとも、問ひ合すべき人だになきを、（五）忍びては參り給ひなむや、若宮のいとおぼつかなく、（六）露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、疾く參り給へ、など、はかばかしうも宣はせやらず、むせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心弱く見奉るらむと、（七）思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の心苦しさに、うけたまはりも果てぬやうにてなむ、まかで侍りぬる」とて御文たてまつる。母君「目も見え侍らぬに、かく畏き仰事（八）を光にてなむ」とて見給ふ。

程經ばすこしうち紛るゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難き（九）はわりなきわざになむ。（一〇）いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ、もろとも（一一）にははぐくまぬ覺束なさを、今は猶、昔のかたみになずらへてものし給へ。（一二）

召す。
(一)野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。斯樣の折は、御遊(二)などせさせ給ひしに、心(三)ことなる物の音をかき鳴し、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるゝも、(四)闇のうつゝには猶劣りけり。命婦、彼處にまかで著きて、門ひき入るゝよりけはひ哀なり。やもめずみなれど、(五)人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすき程にて過し給へるを、やみに昏れてふししづみ給へる程に、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。(六)南面におろして、母君頓にえ物も宣はず。母君「今まで(七)とまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、恥かしうなむ」とて、實にえ堪ふまじく泣い給ふ。(八)命婦「參りてはいとゞ心苦しう、

㊄ 靱負命婦桐壺母を訪ふ
(一) 秋期の暴風
(二) 音樂
(三) 桐壺が
(四) 古今集「ぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」
(五) 桐壺を大事に思へばこそ彼是手入れして醜からぬ住居もし來りしが
(六) 命婦を車よりおろして南向の表座敷に通し
(七) 生き殘り居るのが
(八) 桐壺家に來て見れば

（一）穏當にて圭角なく
（二）見つともなき程なる帝の御寵過故にこそ
（三）帝づきの女官
（四）「ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」
（五）法事
（六）帝が
（七）帝の心
（八）女御更衣などをも一向召されず
（九）安まらぬ
（一〇）死者に宛ずる耶もなく

裏より御使あり。三位の位贈り給ふよし、勅使來て、その宣命讀むなむ、悲しき事なりける。女御とだにいはせずなりぬるが、飽かずくち惜しう思さるれば、今一階の位をだにと、贈らせ給ふなりけり。これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思ひ知り給ふは、様貌などのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく（一）、憎み難かりし事など、今ぞおぼし出づる。（二）さまあしき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給ひしか、人がらのあはれに、情ありし御心を、（三）うへの女房なども戀ひ忍びあへり。「なくてぞ」（四）とは、かゝる折にやと見えたり。はかなく日頃過ぎて、後の（五）わざなどにも細に訪はせ給ふ。（六）程經るまゝに、せん方なう悲しう（七）思さるゝに、（八）御方々の御宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙にひぢて明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡き跡まで、人の胸あく（九）まじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには猶ゆるし（一〇）なう宣ひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみ思ほし出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣しつゝ、有様を聞し

て泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り參りぬ。(一)聞し召す御心まどひ、何事も思し召しわかれず、籠りおはします。(二)御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば、(三)まかで給ひなむとす。(四)何事かあらむとも思ほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、(五)上も御淚のひまなく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを、(六)よろしき事にだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。

限あれば、例の作法にをさめ奉るを、(七)母北の方、同じ烟にも上りなむと、泣きこがれ給ひて、御送の女房の車に、慕ひ乘り給ひて、(八)愛宕といふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけむ。母「空しき御骸を見る〳〵、(九)猶おはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、(一〇)さかしう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、(一一)さは思ひつかしと、人々(一二)もてわづらひ聞ゆ。内

(一)あつけなく
(二)光源氏をば
(三)母の忌中に禁中に居るは例なき事故
(四)幼き源氏の様
(五)帝
(六)一通りの場合ですら

㈣ 葬式、桐壺帝の悲嘆
(七)葬り奉る
(八)火葬なれば也
(九)見ながら
(一〇)分別ありげに
(一一)此様な事ならんと思ひしに
(一二)厄介がり

え聞え給はず。まみ(一)などもいとたゆげに(二)て、いとゞなよ〳〵と、我かの氣色にて臥したれば、いかさまにか(三)と思し召し惑はる。輦車(四)の宣旨など宣はせても、また入(五)らせ給ひては、更に許(六)させ給はず。帝「限あらむ道にも、後れ先だたじと契らせ給ひけるを、さりともうち捨てては、(七)え行きやらじ」と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

更衣「かぎりとて別るゝ道のかなしきにいかまほしき(八)は命なりけり

(九)いとかく思う給へましかば」と、息も絶えつゝ。聞えまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、斯くながら(一〇)、ともかくもならむを御覽じはてむと、思し召すに、今日始むべき祈禱(一一)ども、然るべき人々うけたまはれる、今宵よりと聞え急がせば、理なく思ほしながら、まかでさせ給ひつ。御胸(一二)のみつと塞がりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ給ふ。御使の行きかふ程もなきに、なほいぶせさ(一三)を限なく宣はせつるを、「夜中うち過ぐる程になむ、絶えはて給ひぬる」(一四)と

(一)目付
(二)だるそう
(三)どうしたものかと
(四)手にて引く車、之に乘りて宮中に出入するは特許を要する也
(五)帝が桐壺の室へ
(六)退出を
(七)我を捨てて汝獨りは死に往くまで
(八)行かまほしき、生かまほしき
(九)今日ありと兼て知りたらばせんすべも有りしならんに
(一〇)此儘にて
(一一)桐壺の實家にてする祈禱
(一二)帝が
(一三)氣がかりさ
(一四)死去し給へり

㊂ 桐壺更衣病死
(一) 桐壺更衣
(二) 馴れ居給ふ故
(三) 宮中に居て療治し試みよ
(四) 普く知れ渡りては日頃妬める人々の爲にけしからぬ恥を被る事もあるべしと注意して
(五) 帝が
(六) 考へ込みながら
(七) 帝が

ておはする御容貌心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず、物の心知り給ふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所、(一)はかなき心地に煩ひて、まかでなむとし給ふを、暇更に許させ給はず。年頃、常のあつしさに(二)なり給へれば、御目馴れて、帝「なほ暫し試み(三)よ」とのみ宣はするに、日々におもり給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣く〳〵奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折にも、(四)あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとゞめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限あれば、さのみも(五)え止めさせ給はず、御覽じだに送らぬ覺束なさを、いふ方なく思さる。いと匂ひやかに、美しげなる人の、いたう面痩せて、いと哀と物を思ひしみ(六)ながら、言に出でても聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝ、ものし給ふを御覽ずる(七)に、來し方行く末思しめされず、萬の事を、泣く〳〵契り宣はすれど、御答も



(一)帝が
(二)以下桐壺の境遇
(三)桐壺は天子の御居間なる清涼殿より遠き處なれば出仕には多くの女御更衣達の局の前を通る也
(四)かけはづし自在なる橋
(五)妬む人々がけしからんいたづらを爲置きて
(六)通らねばならぬ緣
(七)間の惡き思をさせ
(八)桐壺更衣の出仕の折の休息所として下さる
(九)智惠つきゆく

しく、(一)心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。(二)畏き御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、我身はかよわく物はかなきありさまにて、なか〳〵なる物思をぞし給ふ。御局は桐壺なり。數多の御かた〴〵を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき(三)御前わたりに、人の御心をつくし給ふも、實に理と見えたり。參う上り給ふにも、あまりうち頻る折々は、(四)うちはし、渡殿、此處彼處の道に、(五)怪しきわざをしつゝ、御送迎の人の衣の裾、堪へがたう、まさなき事どもあり。また或時は、(六)えさらぬ馬道の戸をさしこめ、此方彼方、心をあはせて、(七)はしたなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて、數知らず苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとゞ哀と御覽じて、後涼殿に、もとより侍ひ給ふ更衣の曹司を、外に移させ給ひて(八)上局に賜はす。その恨ましてやらむ方なし。この御子三つになり給ふ年、御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず、内藏寮、納殿の物を盡して、いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世の譏のみ多かれど、この御子の(九)およずけも

(一)帝が
(二)後に朱雀院
(三)弘徽殿女御
(四)外戚貴く
(五)光源氏の美しさ
(六)父帝が一通り尊重するのみにて
(七)光源氏
(八)桐壺更衣
(九)普通の女官に等しき御奉公
(一〇)貴人らしけれど
(一一)御寢
(一二)帝が
(一三)帝が桐壺を特別に待遇あれば
(一四)皇太子にも惡くすると源氏がすわるならん
(一五)弘徽殿女御
(一六)弘徽殿は他の御妾達より先に入内したる人で
(一七)苦情

つしかと心許ながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽(一)ずるに、珍らかなる兒の御貌なり。一の御子(二)は、右大臣の女御(三)の御腹にて、よせ重く(四)、疑なき儲君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂(五)には、並び給ふべくもあらざりければ、大方(六)のやむごとなき御思ひにて(七)、此の君をば、私物におもほしかしづき給ふ事かぎりなし。母(八)君初よりおし(九)なべての上宮仕したまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上ずめ(一〇)かしけれど、わりなく纏はさせ給ふあまりに、さるべき御遊の折折、何事にも故ある事のふしぐ〵には、まづ參う上らせ給ふ。ある時は大殿籠り(一一)過して、やがてさぶらはせ給ひなゝど、あながちに、御前去らずもて(一二)なさせ給ひし程に、おのづから輕きかたにも見えしを、この御子生れ給ひて後は、いと心こと(一三)におもほしおきてたれば、坊(一四)にも、ようせずば、此の御子の居給ふべきなゝめりと、(一五)一の御子の女御は思し疑へり。(一六)人より先に參り給ひて、やむごとなき御思なべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめ(一七)をのみぞ、なほ煩は

ちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふ積にやありけむ、いとあつしく(一)なりゆき、もの心細げに里がち(二)なるを、いよく飽かず哀なる(三)ものに思ほして、人の譏をもえ憚らせ給はず、世の例(四)にもなりぬべき御もてなしなり。上達部(五)上人(六)なども、あいなく(七)目をそばめつゝ、いと目眩き人の御(八)おぼえなり。唐土にも、かゝる事の起にこそ、世も亂れ惡しかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう(九)、人のもて惱みぐさになりて、楊貴妃の例(一〇)も引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなき(一一)事多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきを頼にて交らひ給ふ。父の大納言(一二)は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の由あるにて(一三)、親うち具し(一四)、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とり立てて(一五)、はかぐしき御後見しなければ、事とある時は、なほ據所なく心細げなり。

前の世にも、御契(一六)や深かりけむ、世になく淸らなる玉の男御子(一七)さへ生れ給ひぬ。い

(一)病身になりて
(二)動もすれば實家に下りがち
(三)帝が、此帝を桐壺帝と名づく
(四)異數の御寵遇
(五)公卿
(六)昇殿の資格ある官人
(七)面白からず思ひて
(八)更衣の受くる寵遇
(九)世間の心配の種
(一〇)唐玄宗貴妃に溺れて安祿山の亂を惹起したる例
(一一)桐壺更衣の身にとりてつらき事
(一二)桐壺更衣の父按察使大納言
(一三)由緒ある人にて
(一四)兩親揃ひて當時羽振よき人々にも劣らぬ樣に
(一五)是ぞといふ
㊀源氏君の誕生、父帝の溺愛
(一六)帝と桐壺更衣との宿緣
(一七)光源氏、帝の第二子

源氏物語

桐壺

梗槩

㊀ 桐壺更衣、桐壺帝の殊寵を受けて傍輩の嫉妬を招く。㊁ 桐壺更衣源氏を生む。帝此母子を愛する事甚しく、后妃等の嫉妬愈甚し。㊂ 桐壺更衣病の爲に里に下る、次いで逝去。㊃ 桐壺更衣の葬式。帝死別の悲。㊄ 靫負命婦勅を受けて桐壺更衣の母の寡居を訪ふ。㊅ 靫負命婦の復命。㊆ 帝桐壺更衣を悲む情頗切なり。㊇ 源氏の幼立。桐壺更衣の母逝去。帝人相見の説を聽きて源氏を臣列に下さんと決す。源姓を賜ふ。㊈ 藤壺女御となりて殊寵を受く。源氏藤壺に親しむ。㊉ 源氏元服。左大臣加冠の役を勤む。(十一) 源氏左大臣の聟となり、葵上を娶る。然れども葵上を嫌ひて、猶藤壺を慕ふ。左大臣源氏を厚遇す。

㊀

いづれの御時にか、女御更衣(一)あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際(二)にはあらぬが、勝れて(三)時めき給ふありけり。初より、われはと(四)思ひあがり給へる御かたがた、(五)めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。(六)同じ程、それより下臈の更衣た

㊀ 桐壺更衣殊寵を受く
(一) 女御も更衣も帝の御妾、女御は皇后に次ぎ更衣は又之に次ぐ
(二) 貴き身分
(三) 羽振よき人、桐壺の更衣と名づく
(四) 自負し
(五) けしからん奴と
(六) 同輩

賢木……三七七
花散里……四三九
須磨……四四五
明石……五〇三
澪標……五五三
蓬生……五九五
關屋……六二三
繪合……六三一

源氏物語 壹 目錄

桐壺……一
帚木……三三
空蟬……九三
夕顏……一〇九
若紫……一六九
末摘花……二三九
紅葉賀……二六九
花宴……三〇五
葵……三一九

べく、其の解釋の彼此相異なる所亦素より少からず。一々諸家の說を擧げて之を批判剖釋せんは、本書に於ては到底不可能の事たり。故に今は唯、前に擧げたる三書の外に、源氏物語新釋、源氏物語評釋、源注餘滴の三書を參照して、其の妥當と信ぜらるゝものを採り、間、校者の私見を加へて姑らく上欄の注を成せり。而も退公の餘業、固より十分なる考究の暇を得ず、紕繆も自ら多きを免れざるべきは、校者の慚愧に堪へざる所也。挿畫は黑川眞道氏の好意により、同氏珍藏の慶安板山本春正校本中のものを悉く寫眞して、之を鉛版に附したるもの也。

大正二年十二月　　　校訂者　武笠　三

各巻の首に先づ其の梗槩を叙し、更に上欄頭注の間に之を掲げたるは、一目して各巻の大要を知悉すると共に、某の事は巻中某の所にあるを知るに便ならしめんが爲也。頭注の文は、大體の文義の通ずるを旨とするを以て、鄙俚の語も故らに之を避けず、文中に於ける主客の人名の如きは、繁を厭はずして之を注すれども、有職故實に屬する考證の如きは、すべて省略に從へり。蓋し斯種の考證は、一般の讀者にとりては、さまで緊要の事にあらざると共に、狹隘なる上欄の到底之を容るゝに堪へざるを以て也。引歌の出典を缺如せるも、亦この狹隘の爲に拘せられたるに外ならず。

源氏物語に關する古來の注釋の書は、殆んど汗牛充棟を以て之を喩ふ

源氏物語は紫式部の作に非ずとする説の信憑するに足らざるが如くなるべし。

源氏物語は、他の古典と齊しく、異本多くして諸書互に得失あり。然も此の異同を校讐して、微を拆ち細に入らんは、本書の目的にあらず。されば今本書を校訂するに方りては、刊本中の善本と稱せらるゝ首書源氏物語を底本とし、參照するに湖月抄及び源氏物語玉の小櫛を以てし、校者の最も妥當なりと信ずるものを採りて之に從ひ、其の異同の如きは必ずしも之を注せず。僭妄の罪免るべからずと雖も、通俗を主とする本書にありては、其の體自ら然らざることを得ず。是校者が深く讀者の諒恕を請ふ所なり。

をはじめ貴賤幾多の男女を以てし、男子にありては、光源氏幷に之が附客の地位に立てる頭中將を寫すこと頗る精緻なりと雖も、作者の旨とする所は、蓋し樣々なる婦人の性格を寫し分くるにあり。讀者の最も感興を惹かるゝ所も亦玆にあるべし。後の十帖は光源氏の假子薫の大將を主とし、外孫匂兵部卿宮之が陪客たり、配するに宇治の優婆塞の宮の女なる三美姫を以てし、姉妹三人の中、泛々たる柏舟の如き浮舟の君、最も葛藤の中心たり。この薫匂と浮舟と三人の關係、卽ち後篇の眼目なり。要するに前篇は絢爛華麗にして文亦之に伴ひ、後篇は老蒼沈欝にして筆亦之に隨ふ。其の相異なること此の如きを以て、古來或は前後篇別人の手に成れりと唱ふるものあり。然も其說の信憑するに足らざるは、猶

緒言

源氏物語が、獨り平安朝文學の精華たるのみならず、實に上下三千載を通じて、我が國文學中に第一席を占むべき小說たることは、夙に世の普く知る所なり。されば、こゝには稱讃の辭を繰返すことを避けて、只本書の讀者に告ぐべき二三の事柄を擧ぐべし。

源氏物語五十四帖は、紫式部の作る所、平安朝詞人の所謂「物のあはれ」を寫すを以て主とし、行文の間屢、作者の理想の光のほのめくを見ると雖も、要するに當時の宮廷を舞臺の中心とし、貴人宮嬪の生活を活寫せる一箇の寫實小說也。全篇五十四帖の中、前の四十四帖は、當時の上流社會の理想的人物たる光源氏を以て主人公とし、配するに絕世の佳人紫上

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

源氏物語

一

